マーシナリー・カプリッチオ　～第二部～

本倉　悠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
マーシナリー・カプリッチオ　～第二部～

【Ｎコード】
Ｎ０２１０Ｒ

【作者名】
本倉　悠

【あらすじ】
　セーニア教国の要人を手に掛けて賞金首となった少年は、逃亡生活の最中に女傭兵ニルファナに捕らえられてしまう。彼女は少年の不幸な境遇を不憫に思い、別人として生きてみないかと提案。それを受け入れた少年は、素性を隠して傭兵になることを決意する。偽りの名前、シュイを名乗ってギルド・シルフィールに入団した少年は、個性的な傭兵たちと出会い、その生き様を目の当たりにしながら成長していく。――月日は流れ、幾多の経験を積んで名のある傭兵となっていた少年は今、更なる転機を迎えていた。

prologue

ぽうと夜陰に赤い燐光が生じると、二つの影が廊下の壁面にくっきりと浮かび上がった。まだ幼さの残る黒髪の少年は、血に染まった右肩を左手で庇うように押さえていた。身の丈にあった長袖の服を身につけていたが、右肩の肉が一部削ぎ落とされ、血に彩られた肌がてらてらと光っている。

その視線の先には、やはり右胸の辺りから血を滴らせ、跪(ひざまず)いている男がいた。小さな刷毛(はけ)を思わせる髭を鼻の下に生やした男は息を継ぐのが精一杯な様子で、血のこびりついた口元を拭う余裕もなさそうだ。オールバックの髪は所々乱れ、垂れ下がった毛先からは脂汗が絶え間なく滴っている。

強く咳き込む音が二度、三度と発され、口から黒い不定形の塊が飛び出した。喉に絡んでいた凝固血が絨毯にへばりつく。

男の身に付けている白銀色の絹服には今も尚、赤黒いにじみが広がりつつあった。薄手の布地では飲み干し切れない血が数多の雫となって垂れ落ち、床に敷きつめられている柔らかそうな絨毯を汚している。点々と残された血の跡は男の背後、廊下の奥から続いていた。

束の間、横殴りの雨に叩かれている羽目殺しの窓の外に白い光が明滅し、年端もいかぬ少年と、その足もとに視線を向けた男の横顔が二度、三度と浮かび上がった。闇が戻るや否や、身体を芯から震わす重厚な音が轟き、窓硝子がかたかたと痙攣を起こす。外窓と向かい合う壁面には等間隔に空けられた四角い窪みがあった。それぞれに三首の金属燭台が備え付けられていたが灯りの大半は落とされている。

素人目にも手の施しようがないとわかるほどの傷を負い、喉をつ

かえたようにか細く息を吐き出す男を鋭く見据えた少年は、一瞬たりとも警戒を怠ることはなかった。いつでも回避行動に移れるよう利き足の爪先に力を込め、踵を小さく上下させている。

というのも、少年と対峙しているのはただの凡人ではなかった。国内はもとより近隣諸国にまで勇名を轟かせる剣の使い手であり、その名前と顔は大人から子供まで知らぬ者がいないほど。

セーニア教国騎士団総隊長、コンラッド・ディアーダ。騎士を志す者ならば誰もが一度は夢見る称号、＞ナイト・マスター＜を名乗ることを許されている唯一の男だ。

今は帯剣していないが、外見からだけでも体術に通じていると察することができた。重厚な盾を思わせる幅広の肩に長い手足。服の上からでも窺える、余分な肉が極限まで削ぎ落とされた彫刻を思わせる肉体。何より、若々しさと威厳とが妙に調和した容貌。面識のない者が一見したところで、齢四十を過ぎていると気づく者はいないと思われた。

少年自身、この男に体術を学んでいた経験があったため、その実力は十二分に弁えていた。手負いといえども不用意に近寄れば、次の瞬間には自分が床を舐めることになるだろう。否、最悪の場合、そのまま永遠に五感を失う羽目にもなりかねなかった。コンラッドとの距離を十歩ほどに保ちながら、少年は溜息混じりに眉を上げた。

『すごいや、片肺を潰されても尚追ってくるとはね。とっくに窒息してくたばっていると思っていたのにさ。＞ナイトマスター＜の称号は、飾りじゃないってことか』

発されたのは年相応に高くて、そのくせ残響のある奇妙な声だった。両耳を介すことなく、重低音のように身体全体から肌を突き抜けてくるような印象を与えた。

コンラッドは跪いたまま、挑発的な口調の少年をゆっくりと見上げた。その姿は、しでかした悪戯がばれて親の雷が落ちないか恐怖している幼子のようだ。

「イェルド君、私は、どうなってもいい。気が済むまで、拷問する……なり、一寸刻みにするなり、好きにしてくれて構わない。だから頼む、娘は、アディだけは」

コンラッドは前腕部と膝とで何とか身体を支え、痛みを堪える素振りを見せながらも少年へ左手を伸ばした。一見すると救いを求めているようでもあったが彼の視線だけはしばしばイェルドの後方へと向けられていた。

そちらには肩当てのない吊り下げ型の鎧を着た衛兵が三人、鼻と耳から血を噴き出し、白目を剥いて横たわっていた。そして、その更に奥には、少年と同い年くらいの少女、アデライードがうつ伏せに倒れていた。

彼女の助命を歎願されるほどに、少年はおのれの心が見るに堪えないものになっていくような気がした。深緑、焦茶、群青。明るさとは程遠い色ばかりが黒いキャンバスに重ねられていき、おどろおどろしい斑を作り上げる。やがてはその色すらも黒に侵食されていき、色彩の輪郭が消え失せていく。二人を幾重にも押し包んでいる闇のように。

『娘だけは助けろ、ってか。はっ、今の今まで知らなかったよ、あんた、人を不快にさせる才能にも長けていたんだな。あんなに惨いことをしでかしておきながら、よく平然とそんな口を叩けるもんだ』

唾でも吐き捨てるかのように少年が口汚く罵った。

娘だけは。何とも手前勝手な願いだった。外道共に似合いなのは底知れぬ恐怖か、或いは堪えがたい絶望であるはずだ。現状を打破できぬおのれの無力さを、歯茎から血が出るくらいに噛み締めたまま殺される。目の前の男にはそんな死に様こそが最も相応しい。少年はそう信じて疑わなかった。確固たる決意を胸に秘めて、此処に至るまでの障害をことごとく打ち砕いてきた。

「頼む、アディは、私たちがやったことを、何も知らない。本当に、関係、ないんだ」

喉にまでせり上がった血反吐にむせながらも、コンラッドは消え入りそうな声で呟いた。声だけでなく、その目の色までも少しずつ濁り始めている。貧血による意識障害を起こしている、と少年が判断する。最早どのような処置を施そうと助かることはないだろう。

だが、そんなことを忖度できるほどイェルドに余裕はなかった。見知った瀕死の男の紡ぐ言葉が、ひたすらに自分を苛立たせている。それだけが確かな現実だった。

目蓋の奥にちらりと何かが過ぎった。モノクロの光景。見知った広場で、家族にも等しい白髪の少女が力無く横たわり、冷たい雨に背中を打たれている。

それを思い出しただけで拳の骨が軋む音を立て、視界が歪んだ。臓腑に得体の知れぬ物が蠢いている感覚があった。滾る感情を、雄叫びと同時に一切合切吐き出してしまいたかった。

けれども、感情を制御しきれなくなれば、今行使している力の制御も上手くいかなくなることを、少年は本能的に理解していた。少しでも気を抜けば両腕が強張り、膝ががくがくと笑い出すのだ。

コンラッドを跪かせたその力は、明らかにおのれの手に余るものだった。傍目から感じられる余裕とは裏腹に、必死に心の平衡を保ち続けていた。

気を強く持て。今は何も思い出すな。自らに何度となくそう言い聞かせ、下唇を強く噛み締めていた。舌に感じる鉄の味が、遠ざかりかけた理性を辛うじて引き止める手綱となっていた。

彼らに温情を求める資格などありはしない。それを胸奥で再確認し、止めを刺すべく右手をコンラッドへ向けようとした。しかし、意に反して腕が途中から動こうとしなかった。

少年の着ている長袖の服には乾いた血がこびり付き、流線形の模様が施されていた。コンラッドよりずっと小さな右肩口の三分の一ほどが無残に切り裂かれている。少年の挙動に合わせて傷口が上下

し、微かに開いたり閉じたりしている。乳白色の上腕骨がちらちらと見える様子は、気の弱い者が見れば卒倒するおぞましさがあった。

神経の何本かを断ち切られている。ようやくそれに思い至った少年は、別段痛みに呻くようなこともなかった。ただ仕方なく、といった風に逆の、左手の方をゆっくりとコンラッドに向けた。

その時、少年の背後で何かがもぞもぞと動いた。アデライードが目を覚ましかけているのだとわかった。

今宵、少年の感覚は鋭敏になり過ぎていた。今コンラッドに手の平を向けているこの瞬間も、音、匂い、気配といった情報が絶え間なく頭に流れ込んでいる。それこそ破裂するのではないかと気をもむほどの、光の洪水が。

幸い、痛覚だけは麻痺していた。もしそうでなければ膨大な情報処理によって頭痛を併発し、とっくに発狂していたはずだった。

もっとも、痛痒を遠ざけていることに対して当人が快く思っているわけではなかった。仲間たちが受けた苦痛を分かち合えぬことに、どこか後ろめたさがあったからだ。

複雑骨折と掠り傷を同時に負った場合、どちらが気になるか。つまりはそういう問題だった。少年が心に負った傷は、肉体に置き換えれば明らかな致命傷。痛みを熱さや寒さだと判断を誤るように。狂おしいまでの心の痛みが肉体のそれを凌駕し、それ故に生き長らえることができていた。

激しい雨がやたらめったらに窓を叩く音。足りなくなった血液を尚も全身に送り込もうとするコンラッドの心の鼓動。アデライードの微かに動く指が絨毯を撫でる摩擦音までもが、少年の耳には明瞭に聞こえていた。

未だ他の者たちの気配はこの近くには存在しない。城の構造上この場所は正門から最も遠い位置、別棟にあたる。夜はどっぷりと更

けており、数少ない警備兵も既に事切れている。しかも、建物の外は激しい雷雨だ。雨が地を打つ音が、鳴り響く雷が、生じた音という音を砕き割っていく。断末魔や剣戟の音までも。傍にいるのは呼吸すら覚束ないコンラッドと気を失ったアデライードのみ。それらの要素は人を呼び寄せるには足りな過ぎる。

少年は肩越しに衛兵の屍の先にある、アデライードに視線を移した。金色の長い髪が闇に覆われてくすんだ床に波打つように広がっている。上下にピンク色の厚手のガーゼパジャマを身につけている。

閉じられている長い睫毛が微かに揺れているのがわかった。もしも今、アデライードの意識が戻ったらやはり自分の妨げになるのだろうか。そう思うとやるせなかった。幼いなりに彼女のことは好いていたし、彼女の方も自分と会う機会を多く作ってくれていることは薄々と感じていた。顎を指先で上に傾けながら唇を交わしたり、腰の後ろに手を回して身体の距離を零にするといった男女間の戯れこそなかったが、躊躇いがちに手を握り合い、他愛ない事で笑い合い、お互いに会う時間を長くしたいと望むくらいの仲ではあった。

だが、最早元のような関係など望むべくもない。今の現実は、元の形が定かではない、崩れた積木の城に等しかった。今まで少年を取り巻いていた世界は、一昼夜にして脆くも崩れ去っていた。

この期に及んで誰が何を言おうと、少年に思い留まるつもりはなかった。犯した罪の重さから逃れられなくとも、どれほどの恨みを買おうとも。

そして今、積み重ねた罪の上に、また新たな罪を重ねようとしていた。

少年の顔に過ぎった憂いを、霞みゆく視界が殺意と勘違いさせたのだろうか。コンラッドは焦燥に駆られた様子で、先ほどよりもはっきりとした言葉を口にした。

「お願いだ、イェルド君。その娘だけは、見逃してやってくれ！」

死に瀕したコンラッドなりの精一杯の声が、長い廊下に虚しく木霊した。敵ながら天晴れというべきだろうか。それとも、最後の力を余すことなく振り絞り、娘の助命を願った父親の情愛に感銘を受けるべきだろうか。真に情け深い人間なら、或いはそのような妄執に囚われることもあったかも知れない。

しかし、少年が喚起された感情は、そういった類のものとは一線を画していた。そこには疑惑と憎悪しか存在しなかった。なんという厚顔さだろうか。未だ自分が助命を請える立場だと思っているのか。さもなければ、誰かがこの場に駆けつけるのを期待して声を張り上げたのだろうか。それともまさか、必死な父の姿だけを娘の記憶に焼き付けて美しく散ろうという魂胆か。

数珠繋ぎになった負の感情が蛇のようなとぐろを解き、ゆらりと鎌首を持ち上げた。獲物に向かってちろちろと、殺意の舌を出す。白爪が食い込むほどに握り締められた拳が、みるみる内に血色を失っていった。

『自分たちのやった卑劣な行為には一切触れず、そのくせ綺麗事だけはぺらぺらと、か。――ふざけろよ』

強かな舌打ちが鳴り響き、少年の目に薄らと湛えられていた涙が水蒸気と化した。底知れぬ悪意に感応するように彼を照らす燐光が消失し、その腰ほどの高さに魔法陣が出現する。内円に古代文字が隙間なく羅列され、外円に二十四の＞象形魔印（ルーン）＜が配置されたそれは、赤紫色の怪しい光を放ちながら少年の身体を軸としてゆっくりと回転を始めた。

時として、他愛ない雑音が確かな敵意を抱かせ、人の命を奪うこともある。僅かな命を燃やし尽くさんと力の限り鳴く蝉の声。埃を落とそうと布団を執拗にはたく音。静寂を濁らせる内緒話。

御しきれぬ感情と流入し続ける大量の情報量とでないまぜにされた少年の頭には、コンラッドの発した嘆願の言葉を、まさしく聴くにも堪えぬ雑音と捉えていた。

左手にありったけの力を籠めるや否や、展開されている魔法陣がより一層輝きを増していく。光が宵闇と溶け合い、周囲に点在する力の微粒子が可視化された。薄らと光る砂金のような細かな粒子がそのまま少年の手元に引き寄せられ、細かく震えながら収斂し、小さな球体を成した。

――ほら見ろ、皆も怒っている。

少年は生じた事象によって自分の感情と行為を肯定した。その力を使うこと自体が、足元につき従う影以上に暗い感情を一層濃くしているとも知らず。

『全ては手遅れだ。あんたの言うことを聞いてやる理由なんてこれっぽっちもないんだ。そう心配しなくたってこの城にいる者は一人残さず八つ裂きにしてあんたの元に送ってやる。ただの一人も逃すものか』

「イ、イェルドく――」

コンラッドの弱々しい声に一際高い声が重なる。

『あぁそうそう、言い忘れてたっけね。一足先にゼノンも待っているはずだよ。だから寂しくなんかない。存分に家族団欒を楽しんでくるがいいさ』

コンラッドの目が大きく見開かれたのを見て、少年は初めて満足げに目を細めた。

――ははっ、その大きさなら千パーズ硬貨も入りそうだな。

息子であるゼノンの死を聞かされた衝撃は相当に大きかったのだろう。コンラッドは拳と唇をわなわなと震わせ、絨毯に涙を零した。そのまま、額を二度三度と床に強く打ち付けた。

押し寄せる悲しみに打ち震えるコンラッドを見据えながら、少年が口の端をゆっくりと持ち上げていく。これこそ求めていた光景だと言わんばかりに。

――無様に過ぎるなぁ、コンラッド。きっとあんたは、絨毯に這

い蹲(つくば)って爪を立てたまま年端もいかぬ子供に殺された、至上初にして最後の＞ナイトマスター＜様だ。歴史的快挙だよ。

少年は心中でコンラッドを散々に貶めながら、淡々と別れの言葉を切り出した。

『さよなら、コンラッド。ナイト様ならナイト様らしく、潔く、黙して死んでくれ』

己が醜悪な笑みを浮かべていることに気づかぬまま、少年は床に蹲(うずくま)っていたコンラッドに向かって、五指が突っ張るほどに力を込めていた手を、ぐっと前に押し出した。

球体がたわみ、勢いよく爆ぜて少年の左手の平を貫いた。少年の頬に血飛沫(ちしぶき)が跳ねた途端、四つん這いになっていたコンラッドの両手足が床から強引に押し剥がされ、風に巻かれた衣のように宙を舞った。そうと思った時には血染めの絨毯が塵と化し、剥き出しになった床に半球状の亀裂が生じた。

大きく螺旋を描くように吹き荒れる風に誘われ、肥大化した影が廊下の壁面を凄まじい速度で横切った。燭台に残っていたわずかな炎までもが瞬時に吹き消されていく。

刹那、イェルドの対面側、曲がり角の壁にコンラッドの背中が叩き付けられた。耳を直接殴られたような衝撃音に混じって、骨の砕ける音が散発的に響いた。

束の間、軽度の地震が起きた時のように建物が左右に揺れ動いた。揺れが収まってから間もなく、壁に張り付いていたコンラッドの身体から強張りが失せた。ぱらぱらと地面に散乱する石材の破片を追うようにして、ひび割れた壁面に歪(いびつ)な模様を描きながら崩れ落ちていった。

壁に寄りかかったまま微動だにしないコンラッドを見据え、少年は目的を果たしたのだと理解した。残ったものは血と罪に塗れた左

手、そして、より一層濃さを増した闇だけだった。期待していたような充実感も、達成感もなかった。ふと、口だけが笑っていることに気づき、それが何故か無性に悲しく感じられた。

――僕は一体、何をやっているんだろう。

自分の耳にしか聴き取れぬくらいの小さな呟きが、後方から発せられた甲高い悲鳴に掻き消された。確認するまでもない、聞き慣れたアデライードの声。

――あぁ、やっぱり、起きちゃったんだ。

自分で溜息を禁じえない冷淡な思考。その奥底で少年は、今の彼女の悲鳴が自分の頭から離れることはないだろう、とそう確信したのだった。

prologue2

無意識のうちにベッドから跳ね起きていた。体の内側が火照(ほて)っていたが、外側はやたらとひんやりしていた。大量の寝汗を吸って冷えきった半袖のシャツが背中にべたりと張り付き、シュイは大きく身震いした。

ややあって、夢心地から覚めたシュイは乱れた呼気を落ち着かせるように、長々と息を吐き出した。垂れ下がってきた前髪の束を後ろへ掻き上げると、汗に濡れた漆黒の髪が手櫛に纏わりついた。

切れ長の黒い瞳は細い眉と適度に長い睫毛のせいで少女のような印象を与える。丸みのあった顔はぐっと引き締まり、幼さが大分取り払われていたが、線の細さは相変わらずだった。

妙に明るい天井に目を細め、照明石が付けたままになっていることに気付いた。俯き気味に昨晩の記憶を辿り、それから枕の横を見て自得した。開きっ放しになっていた分厚い魔道書に布の栞を挟み、ぱたんと閉じた。

シュイは木製のベッドサイドテーブルに置いてあった、黒く細長い反応棒を掴み取ると、天井の中央にある手の平サイズの球形照明石にコツンと当てた。今まで光を放っていた石が段々と明るさを弱め、艶のある灰色に変化し、のっぺりとした自分の顔が薄らと映った。

こういった魔法具に近い照明具は高級ホテルなどでよく使われている。それなりに値は張る物だが、人に内在する力を動力源にしているので壊されなければ半永久的に使える代物だ。薪や油も不必要なため、長い目で見ればコストパフォーマンスは決して悪くない。

消灯に続いて、シュイは傍らにある本をベットサイドにある小物

入れの上に置き、それから上半身を起こしたまま、先ほど見ていた夢の内容に心を傾けた。久しく見なかった夢だが、その内容ははっきりと脳裏に焼き付いていた。

故郷のエスニールが襲撃され、共に生活を営んでいた仲間たちを大勢殺されたその日。シュイは全てに絶望し、初めて滅祈歌（ルイン・チャント）を口ずさんだ。

滅祈歌とはその名の通り、滅びの到来を祈る歌だと言われている。自分の魔力を撒き餌にして周囲に点在する想念を掻き集め、自らの力として扱えるよう強化型魔法陣へ組み替える。ただし、想念が集まり過ぎると己の感情を制御しきれなくなり、逆に自我が乗っ取られてしまう。

その特性を理解するのに三度もの使用を要したのだが、行使出来る力はつとに凄まじかった。一歩踏み出せば五歩分進んでいるような身軽さと、足踏みするだけで固い地盤がひび割れるほどの筋力が備わった。初級魔法を詠唱すれば、上級魔法に匹敵する威力にまで底上げされた。自分が全く知らぬ存在に変わっていき、その変貌の度合いを肉体から一歩離れたところで眺める、そんな感覚がもたらされた。

シュイはその力を用いてエスニールを襲撃した者たちを追走し、帰還途中にあったセーニア軍の一個大隊を発見し、その場で壊滅させた。最終的にはセーニア軍の最高責任者であり、父とも慕っていたコンラッド・ディアーダをも死に至らしめた。それも彼の娘、幼馴染のアデライードの眼前で。

手放したくとも手放せぬ苦い記憶。あの時放った力の感触は、未だ左手に残っていた。

滅祈歌を最後に使ってから、既に三年近くが経過していた。それだけの時が経っても尚、その感覚を拭い去ることはできなかった。一度（ひとたび）使えば全身を巡る血液が一斉に沸騰したかのように熱を帯び、

五感が何倍にも研ぎ澄まされる。例えば視覚ひとつとっても、宵闇の中にあって昼間の視界が確保され、どこに何があるのかがわかってしまう。気分が一気に高揚し、何だか無性に体を動かしたくなる。しかも術の使用中は痛みをほとんど感じない。

もちろんデメリットも存在する。術が解けた後に待っているのは、いっそ殺して欲しいと思うくらいの苦痛。術が効いている最中に受けた痛みや酷使した五感の疲労が一挙に襲ってくるのだ。もう二度と使うまい、というのが使った直後のお決まりの言葉。そのくせ既に三回も使っているのだから救えない。もしやおぞましいはずの経験を望んでいるもう一人の自分がいるのだろうか。もしそうなら、もう少し懲りて欲しいものだ、と他人事さながらに思う。

『金輪際、滅祈歌に頼るのはやめなさい』

使いたいという衝動に駆られることは一度や二度ではない。そのときシュイは決まって、師に等しい存在であるニルファナ・ハーベルの言葉を思い返した。

艶のある赤い髪に美姫の容貌。性格は明朗快活にしてちょっぴり自己中心的。それでいて他の追随を許さぬ天才的な魔法使い。数少ない、シュイがどうにも頭の上がらない相手だ。

セーニア教国での一件以来、シュイは一年近くに亘って賞金稼ぎに追われることになった。けれども、ニルファナに遭遇したその日から全てが変わった。不幸な境遇に同情してくれた彼女が庇護してくれることになり、逃亡生活に終止符を打つことができたのだ。彼女の助けがなければとうに野たれ死んでいたか、そうでなくともまともな生活を送ることは出来ていなかった。少なくとも、用心棒付きの豪華な宿に泊まり、襲撃の心配もせずにぐっすりと眠れるような生活とは一生縁がなかっただろう。

南の大国、フォルストロームが襲撃された折、シュイはニルファナとの約束を唯一度だけ破った事があった。その報いたるや生半可

なものではなかった。物見高い通行人や兵士たちの前で雷に打たれ、雷に打たれ、雷に――

忌まわしい記憶に辟易してきたのか、シュイは呻きながらそれを振るい落そうと首を左右に振った。体の自由が効かなくなるまでお仕置きされれば、誰だって従おうという気になるというものだ。シュイは、ニルファナがやるといったことは必ずやる女ということを、身に沁みて知っていた。自分が身に受けた以上に辛い仕打ちとなれば、手足の一本くらいは?ぎ取られそうだ。

とはいえ、前回のお仕置きについてはニルファナがシュイの身を案ずるが故にやったことであり、シュイ自身、そのことを痛いくらいに理解していた。実際、シュイが西の大国エレグスに移ってから半年ほどの間、ニルファナの評判はあまり芳しくなかった。自分のせいで彼女が悪い意味での女王様のように言われるのは堪え難いことだった。自分が貶された方がよほどましだ、そう思うくらいにシュイはニルファナを信望していた。

以来、シュイは何とか彼女の名誉を回復しようと、日々の練磨を絶やすことなく、難度の高い依頼を繰り返しこなしてきた。その甲斐あってか、Bランク傭兵に昇格してからしばらくすると、悪い噂も波が引くように静まった。

ニルファナはシュイの活躍振りを小耳に挟んでは顔を綻ばせていたそうだが、元々人に好かれる性格であり、傭兵としての能力も著しく高いことから、彼女自身の力で噂が払拭された可能性も否定できなかった。

恩人に報いるという強い動機は、シュイを前向きな性質へと導きつつあった。充実した生活を送っているうちに、復讐心が顔を出すことは以前に比べて格段に少なくなってきていた。

ところが妙なことに、今度は捨てたはずの罪悪感が芽を出し始め

た。とうに吹っ切ったつもりだったが、自らがやったことに対する罪の意識は少しずつ重みを増していた。それに堪え切れずに押し潰されると、偶に鮮明な夢となって顕在化するのだ。

シュイは、悪夢を見る原因については自分なりに答えを出していた。多くの人を不幸にし、自分だけ普通に暮らしていることに対して後ろめたさを感じているのだ。集めた想念に呑み込まれてしまったとはいえ、そのリスクを重々承知していた以上、おのれの選択がもたらした結果と言えなくもない。初めて使った時は、半ばどうにでもなれという思いで用いたのだ。

頭の中で割り切っていたはずなのにこうもうなされてしまうとは、何とも女々しいものだ。シュイは自嘲気味に笑った。

ふと、幼馴染の少女アデライードの屈託のない笑顔が脳裏に過ぎった。シュイは辛そうに目を閉じ、胸を押さえた。今は仮の名を名乗っているため自分や自分の周りの者たちに害が及ぶ心配はほとんどない。だが、いずれは自分の犯した罪と向き合う日が来るかも知れない。あの日自分が追い詰めたコンラッドの立場に、自分が立たされる日が来るかも知れないのだ。

もしその時、目の前に立つのがアデライードであったとすれば、自分は罰を、彼女の怒りを全てを受け止める必要があるだろう。今際の際にコンラッドが訴えていた通り、彼女には何の落ち度もない。込み入った事情があれ、自分が彼女を天涯孤独にしてしまったという事実に変わりはなく、そんな自分に対して彼女が抱いている感情がどういった類のものなのかも容易に想像がつくからだ。

ふと鳥たちの囀る音が耳に入り、シュイは考えるのを止めてカーテンで覆われた窓の方を見つめた。透けている陽光の弱さから察するに、今少し早い時間帯のようだ。

――まぁ、たまには早起きも悪くないか。

シュイはゆっくりとベッドの下に両足を降ろし、爪先で灰色の絨毯の上にある茶色いスリッポンの靴を引き寄せた。履き終えてからすっと立ち上がり、手を組んで長々と伸びをする。そうして血液を身体全体に行き渡らせてから指をすっとほどく。虚脱した状態から左拳を軽く握りしめ、宙に突き出した。拳が伸びきって制止するや否や、鞭で堅い床を叩いたかのような音が部屋に響き渡った。

気だるさは残っていなかった。体は本調子を取り戻しつつある。それを確認してから、シュイは寝汗がたっぷり沁み込んだシャツをベッドの上に脱ぎ捨てた。

やや細身ながら引き締まった腹筋と背筋が露になる。右肩には深い刀傷の痕が、左手の平には火傷のような痕が見受けられるが、その他に目立った傷は見当たらなかった。傭兵としての道を歩み始めてから今に至るまで、死地を潜り抜けていないわけではなかった。故に、体に残っている傷の少なさは彼自身の戦闘能力の高さを如実に物語っていた。

衣紋掛けから新しい服を掴み取り、袖を通す。繊維の細かな高級コットンで作られたカーキ色の長袖シャツは肌に吸いつくように柔らかく、羽毛のように軽い。それを着込んだ上に馴染みの仕事着を纏う。

フード付きの黒衣を手早く身に付けたシュイは、壁に掛けられている縦長の鏡を見ながら襟を摘んで整え、ドアの横に立て掛けてあった大きな布包みに手を伸ばした。

登場人物（簡易）

第一部からの主要登場人物

シュイ・エルクンド……シルフィールの傭兵。本作の主人公。

ニルファナ・ハーベル……シルフィールの最上級（ランカー）傭兵。シュイの恩人。

アミナ・フォルストローム……シルフィールのランカー。大国フォルストロームの姫君。

デニス・レッドフォード……シルフィールのランカー。レムース教団の幹部。

ピエール・レオーネ……シルフィールの傭兵。シュイの悪友。

アルマンド・ゼフレル……シルフィールの傭兵。ピエールの兄貴分。

エヴラール・タレイレン……シルフィールの傭兵。エレグス領トートゥ支部長。

イヴァン・カストラ……高額賞金首。

エグセイユ・スキーラ……ミスティミストの上級傭兵。元シルフィールの傭兵。

第二部の主要登場人物

アマリス・ネイピア……シルフィールの傭兵。元フリーの傭兵。

ティート・マホニー……シルフィールの傭兵。アマリスの双子の姉。

アークス・ゼノワ……フラムハートのマスター。ニルファナの学友。

レイヴ・グラガン……ミスティミストの上級傭兵。
ビシャ・リーヴルモア……セーニア教国の将軍。
コンラッド・ディアーダ……セーニア教国の総隊長。（故人）
アデライード・ディアーダ……セーニア教国の中隊長。コンラッドの娘。
ヴィレン・カシリ……ジヴー連合の将軍。
ユウヒ・タカナシ……旅の商人。

～躍動　throb　with　death～

三日三晩降り続いていた雨が上がると、くすみのない青空がどこまでも広がっていた。久方振りの陽光に目を細める兵士たち。その隣で、神妙な顔付きで足元ばかりを見ている年配の男がいた。

ルクスプテロンの南方に位置する小国バータン。両肩に円錐形の角付きの金属鎧を身に付けたゴール将軍は、白くなりかけた立派なあご髭を右手で揉むようにしながら、先ほどまでぬかるんでいた地面を靴の裏で何度となくなぞっていた。胸に障る、乾きかけた赤土のざらついた感触がそこにあった。強い日差しが降り注いでいる地面を見つめ、状況が予断を許さぬことを確信する。

国境付近の二つの砦を三日足らずで陥落させ、あっさりとバータン領内に侵入してきたナルゼリ軍の主戦力は、完全武装に近い重装騎士団だった。ナルゼリは鉱山資源に恵まれた国であり、それをセーニアなどの主要各国に輸出するかたわらで最新鋭の装備を輸入し、国軍にもそれを導入していた。

対するバータンは農産物と民族工芸品以外に際立った特徴のない長閑な国だ。交易拠点として栄えてきた地方都市がそのまま国になったようなもので、さほど軍備に力を入れているわけではない。近隣諸国に比べても軍事費用は低く抑えてあり、浮いた金の大半は内政に使われていた。国から支給される装備は大半が使い古しの物だ。技術の粋を集めて作られた装備には及ぶべくもない。

それでも、装備差だけならば用兵と戦略次第で対抗できたかも知れない。だが、先遣隊の報告では相手の人数も自軍の四倍に近いということだった。残る優位は地の利であるが、それだけで大きな戦力差を埋めるのは不可能だ。

バータンの東部は大軍を指揮するのにはあまり向かず、少数の兵が動くのに効率が良い入り組んだ地形が多い。既に梅雨の時期に入っていることもあり、ナルゼリ軍は雨が降っていたこの三日間、奇襲を警戒して平地で行軍を停止していた。重装備に身を固めた兵たちにとって足場の悪さは致命的と成り得る。重い鎧や具足のせいで足が土に埋もれ、隊列を組むことはおろか、歩くことすらままならないからだ。

無論、ナルゼリ軍が足止めを食っている間、バータンが手をこまねいていたわけではない。首脳たちは領内に敵軍の侵入を許したことを受け、セーニアと敵対関係にあるルクスプテロンに援軍を要請する使者を取り急ぎ送っていた。交渉はほぼ纏まっており、最終段階に差し掛かっている。後は策を巡らしてなんとか時間を稼ぎ、大国ルクスプテロンの保護下に入る。それが成されれば、少なくとも当面の危機は打開できるはずだった。

問題は、それまで戦いを引き延ばすことができるかどうか。雨が降っていなくとも土壌が乾いていなければそれなりの戦い方があると踏んでいたが、どうやらそれもままならないようだ。

ゴールは、日が中天に至る頃には敵軍が現れるだろうと読んでいた。丘の上に陣取った自軍の兵には拒馬柵を設置させたり落とし穴を掘らせ、数少ない魔道兵には魔法で集めた水を撒かせるよう指示し、自陣近くの地面が乾燥するのを防いでいた。焼け石に水だと思わないではなかった。それでもやったのは、待つ時間を持て余すよりは体を動かしている方が兵たちも楽だろうと考えてのことだ。

それからしばらくして、陣から少し離れた平地で警戒に当たっていたバータン軍の斥候数騎が地平の先にもうもうと砂埃が立ち上るのを見止め、急ぎ自軍へと引き返していった。

―――――

１５６７年９月２１日。セーニア教国、ルクスプテロン連邦に宣戦布告す。その影響は周辺各国にも伝播し、レグナールの勢力図は大きく塗り替えられつつあった。

ルクスプテロン連邦の南東部に攻め入ったセーニアは破竹の勢いで進撃した。水面下で軍備を整えていたこと。はたまた、四大ギルドの一つであるミスティミストの支援を受けていたことなども影響し、開戦から半年ほどは連戦連勝だった。その間、ルクスプテロン連邦の実に四分の一に当たる所属国を支配下に治め、迅速に領主たちを派遣して乱れた治安の回復に努めていた。

このままの勢いで押し切れるかというところで、ルクスプテロンの抵抗が一気に強まった。これまで決して一枚岩ではなかった連邦の国々が危機感を強め、一丸となってセーニアに相対したのだ。

時を同じくして、セーニアにミスティミストが加担したことを受け、後継者争いを制したフラムハートの新しきマスター、アークス・ゼノワはルクスプテロンへの支援を正式に表明。

中立を維持していた残り二つの四大ギルド、シルフィール、アースレイの動向も注目されていたが、双方ともに表立って動くことはなかった。

転機が訪れたのは１５６８年６月初旬のことだった。セーニア軍二十万、ルクスプテロン軍十四万。両軍に加わったギルドの傭兵を含む軍勢同士が大陸北東部、ヌレイフ湿原にて激しく衝突。音に聞く騎士隊長、魔道隊長、上級傭兵をも交えたその戦いはつとに凄まじく、周辺の地形を変えてしまうほどのものだった。希少な動植物

が生息していた広大な湿地帯のおよそ七割が両軍の魔道兵たちによる攻撃魔法で砂漠と化し、清流と謳われたモジュ川の美しき流れは夥しい数の戦死者の血で下流まで緋色に染まった。

戦いは三カ月余りに渡って続いたが、双方に三万あまりの犠牲を出したところで痛み分けとなった。この大激戦が国内外に大きな反発を招き、両国が自国の統制を取るので手一杯となったためだ。それ以降、両国の戦いは国境付近の小競り合いなどを除き、小康状態を保っていた。

しかしながら、その影響は両国間のみに止まらなかった。近隣諸国で燻ぶっていた対立関係が再燃化したり、野心ある国主が周辺諸国へ戦争を仕掛けたりといった中小国間同士の競り合いが活発化していた。

バータンは、今まさにそんな憂き目に遭っている国の一つだった。ここのところ不穏な動きを見せていた隣国のナルゼリが、国境に跨る東の山脈を越えて領内に押し入ってきていた。

二年足らずで小国二つを併合していたナルゼリ軍は一万の兵を以って国境沿いにあった二つの山城をあっさりと制圧し、その力を存分に誇示したところでバータンの陣営に使者を送りつけた。服従の証として若き女王、スフィリアの身柄を差し出すようにとの書状を添えて。

バータンの兵力は掻き集めたところで三千がいいところだったが、代々に亘って善政を行ってきた王家に対する民心は高く、側近、世論共に徹底抗戦の構えで纏まった。

しかしながら著しく不利な状況を打開する術はなく、兵たちは先の見えぬ戦いを強いられていた。ただでさえ人数差が大きいのに加え、鉄工業が基幹産業であるナルゼリ軍では武器防具が相当に充実していた。こと兵士たちの装備に関して、バータンはナルゼリに大きく水を空けられていた。

戦略的見地からそうした状況を鑑みれば籠城策を取るのが常道であるが、バータンにはそれが出来ぬ理由があった。バータンの主城であるコリヌス城が主要街道に面した盆地に建てられていたためだ。それは主に交易の利便と首都の発展を考えてのことであり、平時においてはなんら問題がなかった。反して、戦時の軍事拠点として評価すると、決して籠城に向く作りではなかった。非戦闘員が大勢住んでいることも災いし、バータンは仕方なく籠城策を破棄して平地での戦いを余儀なくされていた。

――――――

夕刻になり、正午過ぎに始まったバータン軍とナルゼリ軍の戦いは佳境を迎えていた。倒しても一向に数の減らぬ相手に対して、それでもバータン兵たちは疲労で震える腕に力を込め、何度となく気を吐いた。

「怯むな！　ここを突破されたら後がないぞっ！」

隊長の鼓舞に応じるようにして、鎧兜に身を固めていた敵重装兵と鍔迫り合いを続けていた歩兵が力任せに敵兵を突き飛ばした。足を踏み外した敵兵が坂道を勢いよく転げ落ちていき、後続の兵たちにぶつかった。

尚も上ってこようとする敵兵たちに向かって、今度は坂の上にいた兵たちが三人がかりで大岩を押していく。地面を擦りながら緩慢に動いていた大岩が下り坂に到達する。と、丸い岩が重力に従って見る間に勢いを増していった。いかな防具が強固なナルゼリ兵たちもこれには悲鳴を上げ、一目散に退いていく

――この調子ならば何とかいけるか。

ゴールが淡い期待を抱きかけた刹那、それを打ち破る叫び声が陣内に木霊した。

「左翼側から敵の大隊が接近！」

伝令兵が叫ぶや否や、ゴール以下、陣内にいたバータン兵たちが揃って左翼の方を睨んだ。既に潰走状態に陥り、敵の大軍に追い立てられている兵たちを眼下に見止め、顔が色を失った。

「馬鹿な！　第四部隊の報告はどうした！」

「そ、それが、二度目の報告以降音沙汰がありません！」

討ち死にしたのか、それとも逃亡したのか。切羽詰まった状況に狼狽（ろうばい）するゴールたちを嘲笑うように、黒毛の馬に跨った敵指揮官と思しき男が指揮棒（タクト）をゆっくり掲げていく。矢を番えた弓が一斉に引き絞られた。張り詰められた弦の軋む音が数秒で鳴り止み、一瞬の空白が生じた。

指揮棒が振り下ろされるや否や、無数の矢が隊列の真ん中辺りから端から扇を開くように放たれていく。晴天を二つに分け隔てる突型の黒い波濤が生じた。

矢で黒く染まった空を前にして、前衛にいたバータン兵たちが慌てて長方形の金属盾を掲げた。採掘道具で固い岩盤を削るような音が連続して鳴り響く。初めのうちは大きな盾によって直撃を避けることができていたが、矢の雨の猛威に晒され、受け止めている兵たちの踵が少しずつ土に埋もれていく。

軽く千を越す人数からなる一斉射撃である。碌々時が経たぬうちに金属板の継ぎ目部分に敵の矢が刺さり、連なる衝撃によってみるみるうちに盾の形状が変わっていく。装備品の強度においても敵軍が上回っているのは明らかだった。

いよいよ歩兵たちの支えていた盾がただの鉄屑と化し、防具としての機能を失った。壊れた盾を放り捨てた者から次々に矢の雨に打たれ、まともな悲鳴を上げる間もなく針山と化した。一人が倒れた

のを皮切りに前衛の兵たちが矢継ぎ早に倒れていき、血の海がその領域を増やしていく。陣形の一角があっさりと切り崩されたのを眼下に見据え、ゴールはただただ唇を震わせた。

「将軍！　これ以上ここに留まるのは……」

近衛に促され、ゴールが悔しげに呻いた。

いかに敵軍との兵力差が大きくとも二週間足らずにしてここまで敵軍の侵略を許している状況は、一国の軍を預かる将としてとても我慢できることではなかった。

だが、そんなゴールの葛藤を打ち砕く報告が続けざまに届けられる。

「連絡が遅れて申し訳ございません！　伝令兵が消息不明ゆえ代理で参りました！　左翼を率いていた我が第四部隊が敵方の魔法に巻き込まれて壊滅。ダルコ隊長以下、部隊員の約七割が討ち死にいたしました！　敵軍に上級傭兵が加わっている模様です！」

「敵騎馬部隊の急襲により右翼側の複数部隊で死傷者が続発しております！　辛うじて決壊は防いでいますが長くは持ちません！」

「北東部から敵増援を確認！　千を超す模様です！　どうかご指示を！」

苦悶の表情を浮かべていたゴールの奥歯が噛み合わされ、ぎちりと音を立てた。

「……全軍退却する！　急いでここを離れ、本隊と合流して立て直しを図る！」

退却命令を聞き、伝令兵たちは短く敬礼してから各部隊に命令を伝えるべく慌しく散っていった。周りに控えていた兵たちが慌てて旗指物を畳もうとするのを見咎め、ゴールが怒声を上げる。

「馬鹿者がぁ、これ以上犠牲者を増やさせる気か！　命が惜しかったらそんなものは放っておけ！　――誰か手の空いている者は早馬でエミラ隊のグレイルに連絡しろ。至急、殿軍を指揮して撤退を助

けるように、と。他の者は追い付かれる前に全速力でエメイル川まで退くぞ」

継がれた言葉に兵たちがおずおずと頷き、後方へとばらばらに散っていく。

僅かな時間で人の気配が一気に引き、陣内に一人残されたゴールは迫りくる敵軍の怒号の大きさに眉をひそめる。

――兵力差があり過ぎる。このままでは我が国までも。

「将軍！　馬をお持ちいたしました！　お急ぎください！」

「……ああ、すまぬな」

ゴールは不吉な二文字を想起しかけた心を諫めるように頭を振り、馬を引いてきた近衛の方へと早足で向かった。

――――――

緩やかに流れるエメイルの大河を東に臨むリトスの村。バータン軍は村内で一番大きな老舗旅館を接収し、本陣代わりに使っていた。

敗戦から一夜明け、軍議に使っていた大部屋には沈痛な空気が漂っていた。ナルゼリ軍の侵入を許してから二週間あまりが過ぎていたが、戦況は一向に改善されなかった。圧倒的な兵力差に戦線を維持することすらままならず、断続的な時間稼ぎをするのがやっとという有様だった。

「数が多いだけならいざ知らず上級傭兵まで、か。……これではどうにも、打つ手がないぞ」

何度目かの思わしくない戦況を報告され、重臣たちからはやはり何度目かの溜息が漏れた。悪名高いギルド・クレアレイズンの上級

傭兵、ネデル・アラランタがナルゼリ軍に加わっており、中隊の一つが壊滅に追い込まれて撤退を余儀なくされたということだった。

ここはバータンとしても同じような方策を採って対抗したいところだが、上級傭兵を継続的に雇うのには相当な金が要る。相手は侵攻した国からその財を奪うことで雇う費用を賄えるが、防戦する側は得られる物が期待できない。つまり、報酬を国庫から捻出することになるのだ。

「それで、向こうの使者は何といってきているのだ」

問われた伝令兵が一瞬口を噤んだが、黙っていても仕方ないと判断したのか再び口を開く。

「……前回と同じく、降伏の証として直ぐにでもスフィリア様を差し出せ、と。それから、抵抗した代償としてセーニア、ナルゼリを始めとした特定の国に対する輸入関税の撤廃、及び治外法権と――」

全て言い終えるのを待つまでもなく、文官の一人が軍議室の机を思い切り叩いた。

「たわけが！　そんな条件を呑めるわけがなかろう！　遅かれ早かれ国が滅びるわ！」

国の最高責任者を差し出すのは言わずもがな、関税の撤廃となれば他国の商品が無税で入ってくることになる。商品が大量に流入してきても国税が増えないのは発展途上の国にとって大きな痛手だ。効率化の進んだ大規模産業による農作物、日用品の値段の安さは小国の太刀打ちできるところではなく、基幹産業に大打撃を与える愚行に他ならない。

また、治外法権とはその国の法が外国人に通用しないことを意味する。それを認められた国に属する外国人が自国で犯罪を犯しても処罰することが出来なくなってしまうのだ。つまり、ナルゼリの者たちが自国で盗みや暴行などといった狼藉を働いても指を咥えて見ていることしかできなくなる。

その三点だけでも、少なからず内政に関わっている者なら聞くに堪えない文言だった。報告した兵の口振りでは他にも色々条件を突きつけてきているようだが、それ以前の問題だ。

「……私一人で事が収まるなら」

そう呟いたのは席の中央に座していたバータンの女王、スフィリアだった。漆黒の艶やかな髪に尖った両耳。紫色の瞳は魔族の特徴的な容貌だ。左右二本の紐で長髪を纏め上げ、ツインテールにしている。色白の丸顔に大きな目はどことなく愛嬌があり、どちらかといわれれば美人というよりは可愛らしい顔立ちだ。背丈もそれなりにあるのか、頭の高さは周りに座っている側近たちとそう変わらない。戦争中ということもあって身に付けているのはドレスではなく、長袖のシルクのシャツに活動的な黒色のハーフパンツだ。

スフィリアの発言を聞き、隣に座っていた中年の文官から非難めいた声が上がった。

「スフィリア様！　それはならぬと何度も……」

「これ以上、自領に孤児が増えていくのを見るのは耐えられません！」

もうたくさんだとばかりにスフィリアが叫んだ。

既に数百人の兵が戦死していることを聞かされていた。決断を先延ばしにすればそれだけ家族を失い、悲しみに暮れる者が増えていくことになるのだ。若くして両親を病気で失い、肉親を失う痛みを味わっている彼女にとってそれは到底受け入れ難いことだった。

興奮したスフィリアの呼気が治まるのを待って、向かいに座っていた白ひげをたくわえた重臣がスフィリアを見た。

「女王様、お気持ちはお察しします。ですが、よしんばそうしたところで領民の苦しみは殊更に厳しくなるばかりでございます。領民たちの幸せのためにと思って、ここはご辛抱ください」

スフィリアは強い目で重臣を睨み返す。
「私は、戦に関しては素人ですがこのまま戦闘を継続しても勝ち目がないことくらいわかります。避けられる犠牲を避けるのは道理。条件を飲めば領民が国外に逃亡する時間くらい稼げるはずです。皆殺しになるよりは――」
「――結論を急がれてはなりませぬ。既にルクスプテロンに庇護を求めるべく使者を送っております。兵力で劣るとはいえ、時間稼ぎに徹すれば間に合うかも知れませぬ」
「判断を先送りにすればそれだけ死者の数が増えていくのですよ！　この場で時間稼ぎなどと言葉にするのは簡単ですが、その一言を決断するだけで果たしてどれだけの者が亡くなるとお思いですか？」
「……それは、……しかし」
後の句を継げずに項垂れる老人に、スフィリアははっとして指を食む。
「……ご、ごめんなさい。あなたが善意で言ってくれてるのはわかっているの。ただ……」
「いえ、私たちとてあなた様と同じ気持ちです。……三日、せめてあと三日だけお待ちいただけませぬか。それまでによい返事が貰えなければ、そういった方法を取ることも検討せねばなりますまい」
「三日ね、……わかったわ」

軍議が終わり、重臣たちがスフィリアにねぎらいの言葉をかけてから席を後にしていく。ややあって、一人部屋に残されたスフィリアは席から立つことはせず、両手で頭を挟み込むように抱えていた。
交渉が最終段階に入っているとはいえ、ついこの間まで国内の混乱を鎮めるのに手一杯だったルクスプテロンがすぐに兵を派遣できるとは思えなかった。順調にことが運んだとして一週間以上はかかるだろう。どちらにしても間に合わないなら、無理を承知で敵に温情を求めるより他に方法はないのではないか。

自然と胸元に手を当て、何かが指先に触ったのに気付いた。いつの頃からか、それを弄るのが癖になっていた。それは、仮にも女王と呼ばれる者が身に付けるには不釣り合いな、少し錆びた銀のネックレスだ。仲の良かった少年から、誕生日の贈り物として手渡されたものだった。お揃いだよ、と照れ臭そうにいっていたことを、スフィリアは昨日のことのように思い出した。

――ごめんねクイン。あなたとの約束、守れそうにない。

唐突に幼馴染の顔が、声が頭に浮かんだことで、気丈に振舞っていたスフィリアの心が傾いだ。木の机に落ちた大粒の涙が澄んだ音を鳴らした。それから数分ほど、彼女の咽び泣く声が広い室内に響いていた。

――――――

同時刻。侵攻するナルゼリ軍のやや南側に位置するエスポの森にて、新緑生い茂る木立の中を疾走する四つの影があった。

～躍動　throb　with　death2～

地面に張り出した太い木の根や突き出た岩の先端を軽快に踏み越え、四つの人影は速度を殺すことなく木々の間を駆け抜けていく。

つい先日まで雨が降っていたのだろう。日の光が届かぬ森の足場は相当にぬかるんでいた。蹴り足で跳ね上がる泥が当たらぬよう、お互いに一定の距離を保ちながら並走する。

ややあって鬱蒼とした原生林を抜け、幾分開けた場所に出た。列の中央、先頭を走る若い魔族の男が少しずつ速度を上げていくのを見て、ミニグラスをかけた人族の男が溜息を付く。

「少し飛ばし過ぎですよ、クイン。戦う前にスタミナを使い切るつもりですか」

「は、はい。レッドフォード先生」

窘められたクイン・ミーリックは申し訳なさそうに速度を落とし、再び三人と足並みを揃えた。体型は中肉中背、前髪が邪魔にならぬようワインレッドの髪を後ろで括っている。背には大き目の弓を斜め掛けにし、腰には矢筒を提げ、氷獣の青い革で作られた胸当てには利き手の動きを邪魔せぬよう片側のみ肩当てが取り付けられている。

「これ以上無理に速度上げたって到着時間に差はないよ。愛する幼馴染を助けたいって気持ちはわからないでもないけどね」

空色の髪を靡かせている森族の女にクインが頬を染めながら反論する。

「あ、愛してるだなんて一言もいった覚えはありません！」

「……ほほぅ？　すると何か、君はどうとも思っていない幼馴染を助けるためにわざわざ依頼をキャンセルして命を懸けにいくというのかね？」

大仰に肩をすくめた小柄な女に、クインは二の句を継げずに顔を逸らした。と、そちら側には沈黙を守りながら併走する黒ずくめの男がいた。

クインは森族の女傭兵アマリスとは何度か顔を合わせていたが、シュイとは今回が初対面だった。もっとも、噂だけは頻繁に耳にしていた。その活躍振りは多岐に亘り、人体収集家の高額賞金首ルーガ・アウトレスの討伐。エレグス北西部のコマ山における希少種グリフォンの保護。そして昨年末にはエレグス王国内での大規模犯罪を計画していた裏ギルド・レッドボーンの壊滅にも関わったとされている。巷では好評と悪評、真っ二つに分かれている彼だがエレグス国内での評価はすこぶる高い。

同行を引き受けたデニスが他に助っ人を頼んだことは知っていたが、合流地点にシュイが現れた時、クインはきつねに抓まれた面持ちだった。エレグスでの活動を主にしているということ以上に、こういってはなんだが厄介事を引き受けるような人物だとは思っていなかったのだ。

そんな後ろめたい気持ちが態度に現れたのか、クインは少し躊躇いがちに話しかける。

「す、すみません、エルクンドさん。あなたにまで同行していただけるなんて、その、心強いです」

シュイはクインを一瞥するも、すぐさま進行方向に向き直る。

「礼ならデニスにいえ。今回の依頼料を支払ったのは彼だ」

素っ気なく返したシュイに、クインが愛想笑いを浮かべる。

「そ、そうですね。先生も、ありがとうございます」

「いえいえ、レムザ神は困っている者を見捨てはしませんよ」

デニスは柔和な笑みを返した。が――

＞よ、四割引でいいんでしたよね？＜
聖人じみた言葉を吐いたばかりのデニスが確認の念話を送りつつシュイの方を窺った。シュイはわかっている、とばかりに小さく二度頷いた。
＞守銭奴にしては譲歩した方だと評価している＜
褒められているのか貶されているのかわからぬ返答に、デニスの笑顔が僅かにかげった。
「すみません、お金まで出していただけるなんて」
そうしたやり取りをしているなどとは露にも思わず、クインが実にあっけらかんといった。デニスがぽかんとした表情になり、続いてその目が据わった。
「ご冗談を！　出世払いに決まっているでしょう！　これだけの大仕事、本来なら私とて報酬をいただきたいくらいなのです。彼の依頼料くらいはきっちり請求させていただきますよ。即死は直しようがありませんから斬られるにしてもちゃんと手足までに留めてくださいね」
冗談とも本気ともつかぬデニスの脅し文句に、クインがぐびりと喉を鳴らした。
いかなレムザ神といえども金銭の問題はいかんともし難いようだ。シュイは師弟の通俗的なやり取りを冷やかに見つめていた。

デニス・レッドフォードはシルフィールの最高位に位置する傭兵、通称ランカーの一人だ。セーニアとルクスプテロンの戦争による余波はシルフィールにも及び、組織図にも少なからず変化が生じていた。ここ数年の間に諸々の事情でランカーに三つの空席ができたのだが、準ランカーにいた者たちの中でも各国に影響力を持つ者が優先的にそこに収まることとなった。
世界三大宗教の一つ、半獣半人のレムザを信仰するレムース教。その教主リーリの補佐役に就いているデニスもその一人で二年ほど

前にランカーに昇格した。背丈はシュイよりもやや高く、ゆったりとした黒い聖衣の下には厳しい修行に鍛え抜かれた肉体が潜んでいる。治癒魔法と防御魔法に長じており、体術も達人クラスのオールラウンダーだ。宗教の入信者がランカーになることは稀であり、一時はシルフィールでも頻繁に話題に上っていた。

もっとも、口でいうほど神を信じているわけではないようで、どちらかといえばうら若い森族（エルフ）の女教主にご執心のようだ。と、これはデニスの友人にして同じシルフィールの傭兵、アルマンド・ゼフレルの談である。

残りの一人、デニスの隣を併走しているアマリス・ネイピアは、主にエレグスを中心として活動しているBランク傭兵である。背丈は傭兵にしては低めで顔も年齢の割に童顔といって差し支えない。横に尖った耳は森族の種族的特徴だ。男勝りの性格を表すように髪型はショートボブ、半袖の水玉シャツにフレアショートパンツと黒タイツという活動的な服装をしている。見かけによらず傭兵としての実力は高く、特に攻撃魔法に秀でている。容姿が瓜二つの双子の姉がいるが性格は全くの正反対だ。

今回シュイは同伴のアマリスと乗用の飛竜（ワイバーン）を届けに近隣のギルド支部を訪れていた。つつがなく受け渡しを終え、エレグスに戻ろうかというところで偶然にも支部に加勢を求めるデニスの魔石が届いた、という顛末だった。危険を伴う任務ということもあり、当初は一人で行く気だったのだが、アマリスに事情を話したところ、噂のランカーに会ってみたい、あわよくば借りを作っておきたい、とくっついてきたのである。

木々の間隔が徐々に広まっていき、下りの勾配がきつくなってきたところでクインがやや堅い声を発した。

「そろそろ森を抜けるはずです」
「了解した。――アマリス、敵の位置はわかるか？」
「うん。ちょっと足を止めて貰ってもいいかな」
他の三人が頷き、皆が一斉に足を止めた。柔らかい土が爪先にえぐられ、腐葉土のすえた臭いが立ち込めた。急停止して掛けているミニグラスがずれたのだろう、デニスが鼻先に指を添えている。
アマリスは胸元に提げていた銀色の笛を摘み、先端を咥え、頬を膨らました。別段音が発された様子はなかったが、少し遅れて鳥のものと思われる澄みきった鳴き声がどこからか聞こえてきた。
「……約２ｋｍ北東に陣形を組んだナルゼリのものと思しき大軍。孤立しているバータンの小部隊と戦っているみたい。……それから、北西側にも先行している軍がいるって」
「よかった、何とか持ち堪えているみたいですね」
クインが胸を撫で下ろした。特別な事情でもない限り、侵攻する側が臨戦態勢を崩しておらず、足並みを揃えていないということはまだバータンが降伏していないことを意味する。とはいえ、首都からそう遠くない位置まで攻め入られているのだ。予断を許さぬ状況に変わりはない。
「ミーリック、弓をよこせ」
「……え。あ、はい！」
唐突にシュイに促されたクインが慌てて背負っている大きめの弓を外す。
シュイは差し出された金属弓に手の平をスライドさせる。自身の魔力を解放（リリース）し、弓の全体に吸着するようにイメージ。弓の材質に含まれている微細な魔力と結合（ユニット）する。
時間にして僅か数秒でその作業を終え、シュイは付与魔法＞絡（ライ）み付（トニング・リロード）くは雷の蛇＜を詠唱した。
クインの両手に支えられている弓が僅かに振動し、周りにあった大気がねじ曲がり、吸引されるかのように映った。その刹那――
弓幹に雷が迸り、クインが反射的に仰け反った。帯電した弓から

は途切れ途切れに青く光る歪な線が散らされている。

クインが視線を上げると、シュイは既に敵軍の方角へと向き直っていた。

「俺とアマリスは孤立した部隊の方に向かう。デニスたちは西廻りでエメイル川を下り、先に友軍と合流してくれ」

「え、でもたった二人では――」

「適当に足止めして、頃合いを見て全力で退く。おまえの足ではまだ追い付けそうにないからな」

シュイの言葉にクインは一瞬眉をひそめたが、他の三人を見て直ぐに気付いた。僅かながらも息が上がっていたのは、自分一人だけだということに。

ここに至るまでになだらかとはいえぬ山道を三時間近く走ってきた。にもかかわらず、全く息を乱していない他の三人にクインは驚きを隠せなかった。

「確かに、足止めに徹するならその方がいいですね。相手の数が数だけにバータン側の負傷者も少なくないはず。いち早く治療に当たって体勢を整える必要があるでしょう。では、お二人とも。お手数ですがお願いします」

シュイとアマリスは各々デニスに頷くと、二人をその場に残して北の方角へと走り去った。

「これ……、初級の付与魔法、ですよね」

二人の姿が見えなくなってからクインは視線を下ろし、帯電している自分の弓をしげしげと眺めた。シュイの唱えていた呪言は間違いなく初級のそれだったが、込められた雷の量が以前別の傭兵に付与された時の記憶と一致しなかった。

「ええ、＞ライトニング・リロード＜です。ただ、彼の付与は初級

といっても決して侮れぬ威力がありますけれどね。ナルゼリは鉄鋼業が盛んなだけあって兵の防具が充実していますから、矢の効果が薄いとみてかけてくれたのでしょう。効果が切れかけたら手持ちの魔石で継続補強なさい」

「わかりました。……あの、たった二人で足止めだなんて、大丈夫でしょうか」

シュイたちを気遣うクインにデニスはからりと笑う。

「彼の本当の怖さは強さにあらず、計算高さにあります。出来ないことは決して口にしませんよ。アマリス嬢もBランクに上がって大分経つとのことですし、そんじょそこらの兵に遅れを取ることはないでしょう。むしろこちらの方が大変かも知れません。さ、我々もいきましょう。手遅れになる前にね」

デニスの催促にクインは小さく頷き、西の方へと足を向けた。

――――――

乗用に飼育されたエミラに跨った兵たちが駆け抜けていく。黄緑色の堅い羽毛に覆われた巨鳥は多少の高低差のある岩場をものともせずに走り回ることが可能だ。

エミラは普通の鳥と違って飛ぶことは出来ないが長く強靭な二本の足を持ち、馬に近い速度で走る。加えて大の大人をも軽々と飛び越えてしまう跳躍力を持ち、方向転換も相当に早い。場所を問わぬその機動力は特に荒地や山地などといった起伏の多い地形で真価を発揮する。

だが、それも圧倒的な兵力差を覆せるほどのものではない。飼育出来るエミラにも限りがあるし乗りこなすにはそれなりの技術が必要だ。少数ではせいぜい敵の先陣に奇襲を仕掛けて侵攻を遅らせるくらいが関の山だった。

「くそっ、随分と抜けられているな……」
面部可動式の兜を付けた男が後方へと消えていくナルゼリ兵たちを見て眉に皺を寄せる。
虎の子のエミラ兵百騎を指揮するグレイルはゴール将軍の命を受けてエメイル川に至る山道に陣取り、自軍の撤退を助けていた。先行した敵兵を叩いたり奇襲を仕掛ける動きを見せることによって何とか敵軍の進軍を遅らせることはできていたものの、敵弓兵や魔道兵を警戒せねばならないためどうしても消極的に動かざるを得ない。如何にエミラの羽毛が丈夫であっても何十本も撃ち込まれれば、或いは乗っている騎手の方に当たれば一巻の終わりだ。また、最高速度で負ける騎兵の足を止めるには至らず、引き足の速いエミラ兵を無視して先行する兵たちも出始めていた。
それでも、敵重装歩兵を足止めする意義は多分に大きい。やらねばバータンの命運は尽きる。そうグレイルは確信していた。勿論部隊員を無駄死にさせる気はなく、不利を確信したら直ぐに南のエスポの森へ逃げ込むつもりだった。

何度目かの接近を試みる敵兵に対し、エミラ隊の面々は弓兵がいないことを確認しつつ横に広がる動きを見せる。ところが、一定の距離まで近づいたところで重装歩兵たちの足が止まる。
胸騒ぎを感じたグレイルが一旦距離を取ろうかと思案し始めた直後、一列目の兵を壁代わりにしていた二列目の兵たちがエミラ兵に向かって何かを投げ付けるような動きを見せた。
「――全員後退しろ！」
突然の指示に、特にグレイルから離れていたエミラ兵の反応が遅れた。それでも大半の兵たちは難を逃れたが、一頭のエミラの足に、先端に分銅を付けた鎖が巻き付いた。直後、その鎖がナルゼリ兵た

ちに思い切り引っ張られ、エミラの身体が引き倒された。不意にバランスを崩し、騎乗していたバータン兵の身体が地面に投げ出される。兜が外れて露になったのは若い女の顔だった。

「ほぅ、バータンには女兵士もいるのか。くっく、勇ましいことだな」

「ちょ、ちょっと……こっちくるんじゃないわよ！」

卑猥な笑みを浮かべるナルゼリ兵たちにエミラから落ちた女兵士が後ずさりした。

「隊長！　オリガが落ちた！」

「言われんでもわかっている！　……むっ」

孤立した部隊員を助けようとエミラ隊が引き返しかけるが、ナルゼリ兵たちがいち早く進路を塞いだ。その何人かはやはり鎖分銅を頭の上で振り回して威嚇している。次に引っかかりたいのは誰だ、といわんばかりに。

「残念だったなぁ。生憎エミラ兵と戦うのはこれが初めてじゃないんでね。こっちだって対策くらいしているぜ」

部隊員への行く手を塞がれて立ち往生したエミラ兵たちに、切羽詰まった悲鳴が聞こえてきた。

「……貴様ら、まさか！」

「あぁ、もしかしてあいつ女だったのか。最近こっちの方はご無沙汰だったからな。まぁ、これも戦場の習いだ」

下卑た笑いを見せつつおのれの股間を指し示すナルゼリ兵にバータン兵が憤慨した。

だが、策もなく突っ込めば取り残された彼女の二の舞になる。エミラがどちらかといえば男性に懐き難いということもあり、乗っている兵たちの中には他にも女性が何人かいた。いうまでもなく、部隊員の被害を最小限に食い止めるのは隊長の一番大切な役目だ。時には非情といわれてようとも諦める判断をつけなくてはならないこ

とがある。

その場に立ち尽くすエミラ兵たちを見て、ナルゼリ兵たちがさも可笑しそうに笑う。

「逃げなくていいのかぁ？　もたもたしてると逃げられなくなるぜ」

脅してはなく、ナルゼリ兵たちは少しずつ左右に広がり、包囲網を築きつつあった。後方の退路が封じられれば一巻の終わり、全滅は必至だ。

しきりに後方に視線を送るグレイルを見て、若いエミラ兵の男が食って掛かる。

「た、隊長！　まさか彼女を見殺しにするつもりですか！」

返事をしないグレイルに男が尚も迫ろうとしたが、他の二人の隊員が何とか割入り、押し止めた。

押し止めた腕が小刻みに震えているのを見て、男が悔しそうに、そして申し訳なさそうに項垂れた。助けたいという気持ちは皆同じだった。だが、一人を助けようとして全滅しては何の意味もない。ここで突貫して彼女を助けようとしても生還できる可能性は皆無なのだ。

迷うべきではなかった。悪い予感に従って即座に行動するべきだった。グレイルは判断を誤った責を取るべく一人その場に残る覚悟を決め、苦渋の判断で兵たちに撤退を告げようとした。

突如、南側に展開していたナルゼリ兵たちの付近で爆発が生じ、悲鳴と共に何人かが吹き飛ばされた。生じた砂塵が領域を広げゆく

中、二つの影が睨み合う両軍の狭間に颯爽と飛び出してくる。場にいる両軍の兵たちの視線と意識がそこに集中した。

両軍の兵の何人かが現れた男の格好を見て顔色を変える。フード付きのゆったりとした黒衣、背には鎌と思しき大きな得物。

「……まさか、……だが、あの恰好は」

狼狽える兵たちを気に留める様子もなく、片割れの森族の女はバータン兵が群れ成している方角を見て顔をしかめた。

「先輩。あっちで孤立した女の人が襲われてるみたい」

「……やれやれ、どこの戦場だろうと下衆がやることは変わらないな」

女に示された方向を見るや否や、黒ずくめの男が背負っていた得物を無造作に外した。布に包まれた先端が地に向けられ、ぴたりと制止する。

突然現れた得体の知れぬ二人に、ナルゼリ兵の何人かが挑みかかるように剣の切先を向けた。

「なんだきさまらぁ！　バータンの手の者か！」

「――＞戦端切り開く嵐（ゲイル・リロード）と成れ＜」

詠唱と共に得物を覆っていた白布が旋風に巻かれて外れ、高々と宙に舞い上がった。隠されていた黒塗りの鎌刃が陽光を受けて怪しく煌めく。

本物だ。かつての戦場で脳裏に焼き付いた凶器を目の当たりにし、ナルゼリ兵の一人が息を呑む。

「――＞レテの死神＜だ！　本隊に報告しろぉ！」

不名誉な二つ名が叫ばれるのと同時に、地を浅く削る風の柱を従

えた鎌刃が、大きく横に薙ぎ払われた。

～躍動　throb　with　death3～

――こうも手応えがないと、返ってつまらぬものだな、戦とは。

馬上のナルゼリ軍指揮官、リガス将軍は草木疎らな赤土の荒野を悠々と歩いている兵士たちから鬱陶しそうに目を逸らした。磨かれた鎧兜が並ぶ様はまるで巨大な鏡だ。朝の日差しを乱反射してまともに見ていられない。

手入れの行き届いていない伸び放題の揉み上げや髭は、将軍よりも山賊という肩書きの方が余程しっくりくる面持ちだ。身に付けている煌びやかな銀鎧だけが、辛うじて品位を人並み程度にまで押し上げていた。

好戦的な軍人には大きく分けて二種類いる。一つは、単に相手を力で叩き潰すのが好きな者。もう一つは、敵に一定以上の強さを、ひいては戦いに手応えを求める者。

後者の者たちは、一筋縄ではいかぬ相手にどう対応するかを考え、実行し、効果を検証する過程に楽しみを見出す。その反面、最終的な結果に対してはそれほど興味を示さぬことも多い。

かくいうリガスもどちらかといえば後者寄りの考えの持ち主であり、おのれに智謀が備わっているかは別として、自軍をいたずらに前進させるだけで勝ってしまうような戦は戦と呼ぶことすらおこがましい、とそのようなことを考えていた。初めのうちは新鮮さも手伝ってそれなりに楽しめていたが、単純な作業を何年も繰り返せば飽きてくるのは自明の理だ。

国力が増していけば自然と動員する兵数も多くなっていく。それによって兵種の編成や採用する戦術にも幅ができてくる。

しかしながら自軍と敵軍との戦力差が歴然としている場合、純粋に相手と用兵の優劣を競う機会がない。せいぜい今後使えそうな戦術を有効かどうか、局地戦にて試すくらいのものだ。

無論、どのような戦いであっても勝利は勝利であり、国を攻め落としたという事実に変わりはない。そして、その勲功によって得られる名声や莫大な富が、おのれの生活に彩りを添えてくれるのもまた事実だ。

二年ほど前に比べれば所有する領土も大幅に増え、新しく建てた屋敷には五十人もの使用人がいる。我が家に戻れば贅を尽くした料理と美味い酒、見目麗しい女が労をねぎらってくれる。人並み以上に自己顕示欲もあると自認しているし、やれ将軍様、やれリガス様、とちやほやされることに不満はない。

逆に、誰もが憧れる生活をしている今の自分をひがむ者も多かろう。これ以上欲をかくまいと自省はしている。安定を手にしたことで刺激が物足りなく感じている、ただそれだけのことだ、と。

そのような小さな不満はあくまで大勢の兵たちに守られたごく一部の上級士官の贅沢な悩みである。前線に立たされている兵たちにそれほどの余裕はない。敵が少数であっても侵略戦で死者の出ない戦はなく、たとえ国が大勝を収めようとも少ない死傷者の中に自分が入れば一巻の終わりだ。戦に勝って人生に負ける、これほどに馬鹿馬鹿しいこともそうはない。

日々の安息に恐怖を持ち込んだ者らに対する恨みは根が深く、侵略者を鬼や悪魔と見なすものも多くいる。敵地の山間や森の中など、見通しの悪い場所を進んでいる時、先頭を歩く者は生きた心地がしないだろう。いつどこから矢が飛んでくるかも知れないし、茂みの中から敵兵が飛び出してくるかも知れない。しかも、藪の中の毒蛇や蜂の群れに襲われるよりもずっと高い確率で。さながら、鉱山に入る際に毒ガスが噴出していないかの確認に持ち込まれる小鳥の心

境、といったところだろう。

たとえ勝敗が目に見えて明らかであっても、戦いの矢面に立たされる以上は周りの者たちに臆病者と囁かれるくらいに警戒するくらいでないと生き延びるのは難しい。そして、極度の緊張状態は時に反転し、暴力的な一面が顔を出す事がある。

倫理観の強い国ではそういった兵たちを諫めるべく、階級に拘わらず厳しい軍律が用いられるものだが、そういった観念が高い段階まで発達しているのは大体が先進国である。ナルゼリは未だ発展途上の国であり、装備こそ整っていたが軍律に関しては緩いといって差し支えなかった。

左手にエスポの大森林を望みつつ、リガス率いるナルゼリ軍は抜けるような青空の下、一路西へと進んでいた。ややあって、前方の兵たちがもたついているのを見て、リガスはさも面白くなさそうに鼻息を荒げる。

「また足が止まったな。どうせ例の鳥によるものだろうが、いくらなんでも掻き回され過ぎではないか」

エミラが厄介な存在だということは前回の国攻めの折にわかっていた。戦前に間諜を忍ばせておいたことでバータンにもエミラ兵がいることは明らかになっており、そのための有効な対策は周知しているはずだった。

フルフェイスを被った副官が恐縮しつつも同意を示した。

「ここまで敵方にまともな抵抗がありませんでしたし、前線の兵士たちもいささか気が抜けているのかも知れませんね」

「気が抜けているという点ならば、ここにいる者たちもそう負けてはいなそうだが？」

左右に視線を素早く走らせるリガスに、欠伸をしかけていた何人

かの兵が慌てて口を塞いだ。ついでに先ほどまで聞こえていた囁き声も遠ざかった。

今回の侵略戦にあたり、馬上から見える範囲にいる者たちの大半はまともに戦っていないはずだ。行軍にしても先陣の部隊や斥候が周りに敵がいないことを確認しつつ進んでいるとわかっているのだ。そのような状態では自然と緊張も緩んでしまう。

入り組んだ地形が大分開けてきたこともあって、兵たちの緊張が解けてもおかしくない頃合いではあった。どうにも締まりがない兵士たちにリガスは、一つ説教をせねばならぬか、と口を開きかけた。

ふと、前方にいる兵士たちが左右に割れていくのが見えた。さては伝令かと思い、人垣の裂け目を注視する。

果たしてその正体は見知った自軍の伝令だった。かなりの速さで馬を逆行させてきた伝令の前に近衛たちが立ちはだかった。その五歩ほど手前で伝令が手綱を強く引き絞る。前足を振り上げる馬の嘶(いなな)きにリガスが眉をひそめた。

「騒々しいぞ、何事だ」

「し、失礼しました！　先ほど中衛の伝令兵より取り次ぎました！　敵方に傭兵と思しき者が二名参戦、第二中隊と交戦中とのことです！」

報告を聞いたリガスが驚いたように、少し感心したように眉を上げた。

「ほぅ、敵方にもか。よもやあのような小国に傭兵を雇う蓄えがあるとはな」

「別にうろたえることもあるまい」

斜め後ろから発された声にリガス将軍が手綱を引いてゆっくりと振り返った。そこにはリガスと同じように馬に乗った、濃い紫色のフード付ローブを身に纏う森族の男がいた。

「おぉ、ネデル殿か。確かに、あれほどの魔法を扱うあなたならばそうそう恐れる者などいないでしょうなぁ」
眉にかからぬくらいに短く切り揃えた黒い前髪、糸のように細い目をしたネデル・アラランタは、裏ギルドクレアレイズンの上級傭兵だ。傭兵としての経歴はそれなりに長く、こと魔法の実力に高い定評がある。昨日には左翼に展開していたバータン兵たちをリガスの目前で爆炎魔法によって吹き飛ばしていた。
「大軍を相手にしていればどれほどの使い手とて疲弊する。隙を突けば倒すのは容易。私が赴けば直ぐに片が付くだろう。……それで？　そやつらの具体的な情報はあるのか」
「……は。それが、伝令兵の話では二人のうちの一人が＞レテの死神＜だそうで」

一呼吸ほどの間が空いた。
「――な、なんだと？　……シルフィールのか？」
「ネ、ネデル殿？」
流石に今の間が気になったのだろう、リガス将軍が不安げにネデルを見た。はっとしたネデルが気まずげに周りを見回し、やや慌てた様子で佇まいを正す。
「あ、ああ、……いや、うむ。む、無論！　私の手にかかればやつとて無事では済むまい」
少し声が裏返ったのを気に留めることもなく、リガスは破顔しながら深く頷いた。
「いや、何とも頼もしいお言葉！　はっはっは、世を騒がせた死神の命運も今日限りというわけですな！　あなたの勇名も更に高まりましょう。ではネデル殿、そやつらの始末はお任せしてよろしいですかな」
快活に笑うリガスに、ネデルはぎこちなく頷いた。

「う、うむ。ま、まぁ、まずは小手調べといこうか。いきなり本気を出しては、何というかその、やつも涙目であろうからな」
「ははは、これはまた余裕ですな。確かに、たかだか野盗を何人斬り捨てたところで傭兵としての実力が高いとは限りませんからなぁ」
伝令は豪快に笑うリガスとややきまりが悪そうなネデルを交互に見比べている。
「そ、そういうことだな。で、では、少し様子を見てくるとするか」
ネデルは微かに肩を震わせながらも先導する伝令兵に付いていく。
「皆の者もネデル殿を見習ってより一層の――」
遠ざかりつつあるリガスの能天気なダミ声に、ネデルの形相が険しさを増した。

＞レテの死神＜などとはせいぜいセーニア近隣の国でしかいわれていない。エレグスにおいて、シュイ・エルクンドは今では＞アール・イン＜などと呼ばれることもあるようだ。その異名はエレグス全土に伝わる神話に登場する武具の名に由来する。
本来は国に対する貢献度と実力の高い騎士に贈られる称号であり、傭兵に贈られた前例はないという。裏ギルドとして有名なレッドボーンのマスター、黒魔術にも手を染めていたといわれるエミド・マスキュラスを破った功績を称えたことによるものだといわれているが真偽のほどは定かではない。

ともあれ、同じ裏ギルドに所属していることもあり、それらしい噂は耳に入ってきていた。自分より明らかに格上の魔法使いと、おそらくは互角以上に戦った傭兵が相手だ。とても一対一では敵わぬだろう。
――なればこそ、これは好機ともとれるかも知れぬな。
相手がどれほどの強さであろうと疲弊しているならば勝ち目も出

る。どんな方法であれ首尾よく仕留めることができれば、リガスが指摘したように傭兵としての名声は更に高まることだろう。
ネデルは俯き気味だった顔を上げ、おのれの白い手の平を見て、期待とも恐怖ともつかぬ笑みを浮かべた。

――――――

圧巻、その一言に尽きた。黒い弧が描かれるたびに旋風が砂塵を巻き上げながら地を走る。扇状に広がりゆく不可視の波は刃先から５mにも及び、重い鎧を身に付けているはずのナルゼリ兵たちを五、六人まとめて押し倒していく。
付与された鎌刃の有効範囲を熟知しているシュイは、相手との距離を一定に保ちつつ、間合いを詰めてきた敵から優先的に対処する。同じ接近武器であっても間合いの差は圧倒的で、ナルゼリ兵たちは届くはずのない場所から振るわれる大鎌にどうしても体が反応し切れていない。シュイが空を切り裂いてから衝撃波が届くまでに微細な時間差があり、視覚情報と認識情報に誤差が生じているためだ。重装備をしていては直感に体が付いていかず、目に見えぬ攻撃を避け切れない。かといって、軽装備であれほどの衝撃波を受ければどうなるか容易に想像が付く。
衝撃波に飛ばされぬよう肩を組んで突進する者たちもいたが、敢え無く失敗に終わっていた。密集している兵に対してはアマリスが放つ＞集束する雷（ライトニング・ボルト）＜が猛威を振るうのだ。指先から生じる青い雷は分厚い金属の鎧を嘲笑うかのように貫き、体全体に伝わり、その周囲にいる者たちまで感電させてしまう。敵兵同士の間隔が開けば装備に劣るエミラ隊でも局地的、瞬間的に数的優位が作れるため対処するのは難しくない。

全身装甲の総重量は生半可なものではない。何しろ全てが金属の塊であるからして、標準的な鎧だけでも優に２０ｋｇを越える。それに加えて両手に手甲を、両足に具足を、頭に兜を被れば全身に重しを付けているようなものであり、標準程度の体力では馬に乗ることすら困難になる。着ているだけでも体力を消耗するため、休みなしにそれほど長い時間は戦えない。

それほどの重量を持つ鎧を着たまま仰向けに倒れれば果たしてどうなるか。普段からそれなりに身体を鍛えているか、関節部分の可動部が丁寧に作られていれば直ぐに起き上がれるだろうが、そうでなければ助けを借りないと立ち上がることすらままならない。強かに地面に叩き付けられて痛んだり、電撃で痺れてしまっている体では尚更だ。

板金加工技術を駆使したオーダーメイドの鎧であれば相当に軽量化されており、動きと防御力を両立するに足るものだったが、それはごく限られた将校や貴族たちにしか行き渡らぬ高級品である。

鎖分銅も、飛び道具も、鎌が振るわれる度に生じる風の幕に遮られる。はたまた驚異的な察知力によってぎりぎりで避けられ、力なく地に落ちる。

それでも何とか距離を詰めようと、側面や背後から接近を試みる者もいた。中には手練も何人か交じっていたようで、シュイの鎌刃から発される衝撃波の範囲をモーションから予測し、見事に避けて見せる者もいた。だが、それによって生じた隙をシュイから一歩引いた位置にいるアマリスが見逃さなかった。体勢が崩れた相手から順に狙いを定めて漏れなく＞ライトニング・ボルト＜の餌食にしていた。

行く手を遮っていたナルゼリ兵たちの陣形がみるみるうちに崩れていく。人垣を割り入っていくにつれてくぐもった声と男たちの囃し立てる声が大きくなってきた。エミラ隊の面々が待ち切れぬとばかりに、シュイの後ろから包囲網が薄くなった場所に殺到し、エミラの足でナルゼリ兵たちを蹴り倒していく。

道が空き、視界が開けたのとほぼ同時に、ナルゼリ兵に組み敷かれている女兵士がグレイルの目に映った。強い怒気が咆哮として発された。エミラ兵たちが女兵士の周りにいた四人のナルゼリ兵に猛然と襲いかかる。

間抜けなことに、女兵士を暴行しようとしていたナルゼリ兵たちはご丁寧にも下半分の防具を外していた。強固な防具をわざわざ外してくれているのだからそこを狙わぬ手はなかった。

慌てて立ち上がり、逃げようとした二人がぶつかり合い、もつれ合うようにその場に倒れ込んだ。逃げ損ねた二人に対し、槍を構えたエミラ兵たちが我先にと襲いかかる。エミラの手綱を緩めず、そのままの勢いで穂先を太腿に突き入れた。血飛沫を浴びた穂先が地面に浅い線を引いた。太腿の半分を抉られたナルゼリ兵が苦悶の声を発したが、エミラの足に顔面を強打された途端に大人しくなった。その隣ではグレイルがナルゼリ兵の鎧と兜の連結部に槍を突き入れていた。首を突かれたナルゼリ兵が背を反らしたまま硬直し、前のめりに崩れ落ちた。

瞬く間に二人が倒され、残る二人もほうほうのていで逃げていく。入れ替わるように、取り巻きの兵たちが四方からエミラ隊の方へと突進してきたが、先んじてアマリスが呪式を組む。

自らの魔力を解放（リリース）し、エミラ隊とシュイ、そして自分を囲むように巨大な風の輪を創造（クリエイト）する。

「＞風櫻の円環（フォレスティン・サークル）＜！」

力強い詠唱と共に風の輪が地の砂礫を巻き上げながら周囲に拡散

した。接近してきた歩兵が風圧に晒される。身を縮めて少しの間は持ち堪えていたが、その努力も空しく後方へと弾かれた。真横を勢いよく過っていく自軍の兵を見て後続のナルゼリ兵たちが思わず歩みを止める。側面から距離を詰めようとしてきた兵たちも、鎌を掲げるシュイの視線に威圧され、動かなくなる。

「しっかりしろ、オリガ！」

地面に倒れていた女兵士をグレイルが抱き起こした。口に詰められていた布きれを引き抜かれ、女兵士が咳き込みながら袖で涙を拭う。

「……グ、グレイル……隊長。……戻ってきて、くれたんですね」

抵抗したせいでこっ酷く叩かれたのだろう、頬は真っ赤に腫れ上がり、両目は相当に充血していた。不幸中の幸い、身に付けていた鎧こそ剥がされていたものの、砂だらけになった衣服はさほど乱されていなかった。どうやら金属鎧を脱がすのにかなり手間取ったようだ。

グレイルが赤子をあやすかのようにオリガの頭を撫でた。オリガがグレイルの胸板にゆっくりと額を預ける。

「ほれほれ、感傷に浸っている暇はないよ。早く乗った乗った」

いい雰囲気になりかけたところでアマリスに急かされたグレイルがばっと顔を起こした。隊員たちがにやにや笑いを浮かべているのを横目に頬を染めつつ、急ぎ肩に手をやり、身に付けていたマントの留め金を外す。それをオリガに羽織らせ、そのまま両腕で抱き抱えた。自分が乗ってきたエミラの上に彼女を乗せると自らもその後ろに騎乗した。

オリガを両腕で挟むようにして手綱を握り締めたグレイルがシュイたちの方に視線を下ろす。

「お二人とも、本当にかたじけない。この恩は生涯――」
「――わかったからさっさといくぞ。悪いが二度も助ける気はないからな」
擦り足で距離を詰めてくる敵に視線を固定したままのシュイに、グレイルは微かに目を細めた。
「ああ、すまぬな。……グレイル隊、経路3にて撤退するぞ！」
「了解！」
指揮官の命に隊員たちが意気の戻った声を揃えた。

～躍動　throb　with　death4～

エメイルの大河に架かるイルクオール大橋ではバータン軍とナルゼリ軍が激戦を繰り広げていた。幅がおよそ１０ｍある橋の上では剣や槍を掲げた両軍の兵が互いに克ち合い、押し引きを繰り返している。夥しい数の矢が橋の欄干に突き刺さり、飛び交う炎の魔法が敷石を幾度となく焦がしていた。

剣撃の音が立て続けに奏でられていた。アーチの最高部にあたる要石付近から始まった両軍の衝突はナルゼリ軍がバータン軍を終始押し気味に戦っていた。

勝ち戦続きで勢いがあるナルゼリ軍を止めるのは容易なことではなく、既に先鋒は橋の西側、おおよそ九割に至るところまで攻め入っている。対岸に居並ぶバータン兵の射撃や攻撃魔法による援護で辛うじてそれ以上の進攻を防いではいたが、縦列に組まれた敵の陣形は途切れることを知らない。一人を倒してもその後ろにはナルゼリ兵の頭の上に剣や槍が奥の方までひしめいているのだ。それを見ただけでも心が折れそうになる。積み重なっていくばかりの疲労にバータン側の前衛は崩壊寸前だった。

時間経過と共に、橋からエメイル川に転落する者も多くいた。落ちているのは押されているバータン兵の方が多かったが、溺死する者はナルゼリ兵の方が多かった。

橋の上での死闘を見越して、バータン軍は橋の周辺にある全ての船をナルゼリ軍に利用されぬよう西側の岸に移動させていた。その上で、予めエメイル川に救助用の屋根付き船を何隻か浮かんべていた。というのも、重い鎧を着たまま川に落ちれば死に直結するから

だ。服を着たまま泳ぐことは体力自慢の者であっても辛いものがある。鉄の塊を体の各箇所に付けていれば尚更で、放っておけばあっという間に水の底だ。

味方の兵たちが落ちてくるたびに、救助にあたっているバータン兵が鉤付きの丈夫な縄を投げ付け、鎧の連結部分に引っかけては船の上に引き上げていた。

勿論全ての兵を救助できるわけではなく、船から離れていたり手が回らなくて間に合わなかったりといったこともあり、救助の兵たちは何度となく悔しい思いを味わっていた。それでもナルゼリ兵たちに比べればずっとましだった。相手側に救助船が用意されていない以上、川に落ちればまず助からないのだ。

侵攻されているバータン側にナルゼリ兵を救助する義理はない。だがそれでも、目の前で助けを求め、もがき苦しみながら沈んでいくナルゼリ兵を見る度に、救助活動しているバータン兵は辛そうな表情を垣間見せていた。

壁がぶつかってくるような歩兵集団の圧力に押し負け、尻餅を付いたバータン兵にナルゼリ兵が猛然と襲いかかる。と、後ろから部下を庇うように現れたゴールが飛び掛かってきたナルゼリ兵の腕を掴み、捻り上げて横に引き倒した。倒れたナルゼリ兵の胸元に素早く足を乗せ、渾身の力で喉元に剣を突き立てる。顔に飛び散る鮮血を無視し、尚も押し寄せるナルゼリ兵を見据えてゴールが吠える。

「武器持つ手に力を、想いを込めよ！　この国の安寧は諸君らの手に掛かっているぞ！」

ゴールの左右に居並ぶ兵たちが気合いの籠もった斉唱で応じ、鞘走りの音を連ねた。

橋を制圧されればバータン軍は遠からぬうちにナルゼリの大軍に包囲攻撃を仕掛けられる。そうなったら一巻の終わりである。ゴールは自ら前線に立って勇敢に戦い、戦列交代を繰り返しては疲労を

最小限に抑えていた。そう遠くないうちに抜かれる。その弱気な心をひた隠して。

装備で劣るはずのバータン軍はナルゼリ軍に対し驚異的な粘りを見せていたが、それでも後退を余儀なくされていた。背には陸地が少しずつ迫ってきている。騎兵を用いられていればもっと早く押し込められていたかも知れないが、幾重にも張り巡らせた拒馬柵を見て、ナルゼリ軍側は騎兵の運用を早々に諦めていた。

陸地に立ち並ぶ木や建物を目前にして勝機と見たのか、今まで先陣を張っていたナルゼリ兵たちが橋の両端から後方に回った。と、後ろに控えていたナルゼリ兵が斜め下に向けていた槍を正面に掲げ、一斉に突撃を開始する。ゴールたちの部下が迎え撃たんと盾を掲げて防御体勢を取った。耳障りな金属音が鳴り響き、目の前に火花が散らされる。

勢いを乗せた槍をまともに受け、バータン兵たちがたたらを踏んだ。一撃にして盾の半数近くはその一撃によって突かれた箇所から広がるようにひび割れていた。使い物にならなくなった盾をそれでも手放さぬバータン兵たちを見て、ナルゼリ兵たちが薄ら笑いを浮かべた。横に並ぶ敵兵の隙間を割り入るように後列に控えていた兵が現れた。流れるような戦列交代は。陣形の崩れた箇所を攻めんと第二波が押し寄せてくる。受け切れないと察したバータン兵たちからついに悲鳴が上がった。

悲鳴に悲鳴が上書きされた。後方から飛来してきた雷の束に襲われ、殺到してきたナルゼリ兵たちがばたばたと倒れていく。雷が飛んできた後方を振り向き、ゴールは目を見開いた。そこにあるのは護衛を引き連れ、少数の魔道兵たちと共に手を前に突き出しているスフィリアの姿だった。

「女王様！　危ないところを……、いえ、何故こられたのですか！」
スフィリアは自らの手で敵兵を殺めた動揺に息を切らしながらも、胸を張って姿勢を正した。
「皆が傷付きながらも必死に戦っているのにわたくし一人家に閉じ籠って震えていろというのですか！　魔法ならば多少の心得があります！　戦える力がある以上、わたくしもあなたたちと共に戦います！」

最前線にまで赴き、高らかに宣言したスフィリアに、兵たちが奮起しかけた。だが、その間隙を縫うようにして敵兵も動いていた。
敵がやや引き気味になったところで、敵前衛にいた歩兵たちが屈む。その後ろに並んでいたのは後方の部隊、今まさにスフィリアが立っている場所に狙いを定めていた弓兵の大部隊だった。
「――いかん！　皆、姫様を守れ！」
ゴールがいち早くそれに気づき、警戒を促す声を発した。数瞬遅れて敵兵が空に向かって一斉に矢を放った。上空の風切る矢の音の大きさに、昨日の惨劇がゴールの脳裏を過ぎる。
押し寄せる死の予感に、しかし体が動くことを拒否した。数人の護衛が盾を掲げつつスフィリアの前に出るが、空の隙間を隈なく埋める矢を全て防ぎ切れるものではない。

――ごめんね、クイン。やっぱり駄目みたい。
兵たちと共に無数の矢に晒されたスフィリアが目を強く瞑った。

「――＞星の守護壁（リーヴァル・ランパード）＜！」
やや離れたところから声が生じ、突如として橋の敷石に光が走った。描かれた線から淡い光が漏れ出し、矢がスフィリアたちに到達

する直前、空へ向かって一挙に伸びていく。発された光が連なっていき、家屋の屋根にも届かんばかりの光のカーテンが形成された。無数の矢を全て遮り、地に落とすと同時に光が消失する。

死を覚悟したスフィリアが膝を折り、へなへなと地べたに座り込んだ。

「だ、大丈夫ですか姫様！　お怪我の方は……」

背後を警戒しつつも慌てて駆け寄ってきたゴールに、しかしスフィリアは反応できなかった。

「……い、今のは……一体？」

「ぎりぎり間に合ったようですね」

後ろからの落ち着いた声にゴールたちが振り返ると、そこには黒い聖衣を纏った神父がいた。そして、その隣にいる男を見て、スフィリアが擦れた声を漏らした。

「さて、これだけあれば十分ですかね」

目の前に折り重なった矢を見据えながらデニスが呟いた。

「ありがとうございます、先生」

クインが小さく頷き、座り込んだスフィリアの前、ゴールの隣に颯爽と立ち並ぶ。

矢を全て防がれたことに驚愕し、硬直していたナルゼリ兵たちが、一人弓を構えているクインを見て口元に笑みを零した。身に付けている防具によほどの自信があるようだった。

「はんっ、何者かと思えば弓兵かよ。そんなチンケなものでどうにかなると思ってるのか」

クインはナルゼリ兵たちの嘲笑に構うことなく矢を強く引き絞る。と、矢羽を挟む手に僅かな痺れを感じた。雷光を纏う弓から鏃へと雷が迅速に伝わったのがわかった。

「我が弓術がチンケなものかどうか……しかとその身で確かめろ！」
眼前にて傲然と胸を張る敵兵に向けて、クインは引き絞っていた矢を放った。弦が前後に小さく振れ、青白く輝く燕が指先から飛び立った。そう思った次には、挑発したナルゼリ兵の胸元に矢羽だけが生えていた。電気の尾が矢の軌道をじぐざぐになぞり、パチンと余韻を残して消失する。厚い胸当てごと心の臓を貫かれたナルゼリ兵は声を発する間もなく、背中から大の字になって倒れた。

一瞬にして仲間を殺されたことにナルゼリ兵たちが唖然とした。激昂した巨体のナルゼリ兵が一人、両腕に付けられた籠手で顔と胸をガードしつつ突っ込んでくる。
前に出ようとするゴールをクインが必要なし、と手で制した。既に矢筒から取り出し、手に持っていた二本目の矢を狙う時間もそこそこに放つ。驚嘆すべき早業であり、しかし放たれた矢にはしっかりと雷が伝わっていた。ガードする籠手に矢が突き刺さった途端、封じられていた魔力が解放された。全身をひた走る青白い電撃に兵が悲鳴を上げながらのたうった。時間にして数秒にも満たなかったが、効果は十分にあったようだ。兵はその場で力無く両の膝を突き、前のめりに倒れた。
「お、おのれよくも！」
周りにいた歩兵も一斉に槍を掲げ、クインに向かっていく。クインは足を止めぬままにナルゼリ兵の列に並行するように移動しつつ、手際よく矢筒から矢を取り出し、敵兵に向けて目測で標準を合わせ、弦を指で爪弾く。雷を纏わせた矢が俊敏な動作によって間断なく放たれ、橋に向かって雷光が何度となく乱れ飛んだ。

本来、弓矢は重装備の兵相手には効果が薄いとされる。飛距離を引き出すための形状故に攻撃範囲が狭く、一撃で相手を仕留めるに

は直接急所に当てることが必要なためだ。例外としてバリスタなどの巨大弓があるが、それは運用に数人を要する。

ある程度の腕前になると、射撃の破壊力は弓矢の性能に依存することになる。弓術の腕を上げるということは、一定の距離を取る、番える、狙う、放つの四行程を如何に洗練させるかにある。距離を取るのはいわずもがな、手数を増やすために一連の動きの速度向上も欠かせない。あとは矢の軌道予測と相手の動きとの偏差予測。狙う際の力の抜き方や入れ方。或いは連射や拡散撃ちなどの技術向上。

金属板を穿つ威力を引き出しているクインの腕前は達人の域に近づきつつあった。しかしながら、弓矢は近接攻撃のようにおのれの筋力や武器の重さを直接伝えられるわけではない。どれほどおのれの腕力を鍛えたところで弦を切ってしまうほどに力を込めることはできないので、射撃単体における威力は、安定はするが伸び悩む。弓が腕力のないものに向いているといわれる所以である。

とすると、威力を上げるには別の点に着目することになる。矢じりの金属を堅いものに変えるか、矢じりの形状を空気抵抗が薄いものに変えるのが一番シンプルな方法。

そしてもうひとつの方法が外部から力を加えること、すなわち付与である。弓矢に魔力や辰力を込めることによって威力を補うのだ。

鎧で急所を固めていれば、矢単体であればさほど恐れるものではない。しかしながら、矢に封じられた雷は手甲や具足など、着弾した箇所から全身に広がっていく。当たった場所がどこであれ、金属鎧は易々と電撃を各所に伝達してしまう。絶命に至らなかったとしても重い鎧を着たまま倒れてしまえば同じことだ。いうことを効かぬ身体で立ち上がれる道理はない。

矢が尽きれば当然それで済むのだが、先ほどのナルゼリ弓兵の一斉射撃で弓矢はクインの目の前に腐るほどある。合間合間で矢筒に補充されてはどうしようもない。

全く近寄れぬ状況をようやく察したのだろう。ナルゼリの兵たちの足が止まる。

付与魔法が施された弓の威力は命中と共に放たれる電撃は十分な威力を有している。前列を形成していたナルゼリ兵たちは数十本の矢によって瓦解していた。そのことに誰より驚いていたのは、普段とはかけ離れた殺傷力を有する矢を番えるクイン本人だった。

敵軍の攻勢が途切れたのを見計らい、この好機を活かさんとゴールが突撃命令を発した。バータン兵たちが雄叫びと共に勢いを取り戻し、剣と槍を掲げて再度突っ込んでいくのを見止め、クインは見知った指揮官へ視線を向ける。

「お久し振りです。ゴール大佐。いえ、将軍になられたのでしたっけ」

「やはりクインか！　随分と立派になったな。お前たちの一家が追い出されてから七年ほどになるか。……あの時は力になれなくてすまなかった」

クインは頭を下げるゴールに首を横に振った。

「古い話はやめにしましょう。今はそれどころではなさそうですし。微力ながら戦列に加えていただくことをお許しください。私は今もここが故郷だと思っていますので」

「それは願ってもないことだが――ひ、姫様？」

おもむろにゴールの脇から、おずおずとスフィリアが進み出た。

「ク、クイン……その……」

「スフィリア様も、お久し振りです」

その言葉に、スフィリアが悲しそうに目を伏せた。

「……昔のように、スフィリアと呼び捨ててはくれないのね」

声に媚びるような含みがあるのに気付いたのか、クインがややた

じろいだ。
「み、身分が違いすぎます故。幼き日の無礼、なにとぞお許し――」
クインの言葉は最後まで続かなかった。スフィリアは目尻に涙を溜め、体を投げ出すようにしてクインに抱きついていた。ありし日の記憶とは違うその柔らかさにクインの顔が真っ赤に染まる。
「馬鹿……馬鹿っ」
叱咤と共に耳元にかかる吐息に、クインが何度となく仰け反っている。

ゴールたちは口元に手をやり、咳払いしながらもう一人の神父に目を向けた。
「……ええと、あなたは」
「初めまして、デニス・レッドフォードと申します。クインとは師弟の間柄、といったところでしょうか」
丁寧に会釈したデニスにバータン兵たちがどよめいた。デニス・レッドフォードといえば傭兵として以外に著名な治癒術師としても知られている。それほどの者が自軍に馳せ参じるとは流石に想定外だったようだ。
「貴殿が！　そうか、彼がシルフィールに入ったとは風の噂に聞いていたが、あなたほどの方に師事をしていたとは驚いた」
「他にも二人いるのですけれど、今は後陣の足止めに徹してくれています。今の内に陣形を立て直していただきたい」
その言葉は更なるざわめきを誘発した。それを尻目にデニスは一旦陸地に戻り、負傷していたバータン兵たちを一瞥すると琥珀色に輝くカット済みの魔石を取り出した。誰もいないスペースに四つの魔石を投げ、素早く詠唱を開始する。
＞癒しを象り聖獣よ　傷付き倒れし者たちに今一度　立ち上がる力

を与えよ＜

ややあって、デニスに一番近いところにあった魔石が感応して光を放ち、他の魔石へと光の線を伸ばしていく。四つ目の魔石まで到達し、最後に最寄りの魔石に戻ってきて四辺が結ばれ、四角形が形成された。付近に満ちた微細な魔力が急速に魔石に吸収（アブソーブ）される。

魔力が満ちたのを確認し、デニスが上位治癒術、＞健やかなる聖域（ルド）＜を詠唱。魔石で囲われた面から淡い光が漏れ出してくる。領域内にいる者の自然治癒速度を加速し、傷の治りを早める魔法だ。一挙には回復しないがその分体にかかる負担が少なく、薬草による治療や他の治癒魔法の重複も可能である。

「傷が深い者はこの領域内に入りなさい。手当てをする方たちもこの中でお願いします。回復したものは戦列に加わり、負傷した者を呼び戻すよう指示を、お願いしますね」

静かに微笑むデニスに、バータン兵たちは途切れかけていた希望の光が再び差し込むのを感じていた。

～躍動　ｔｈｒｏｂ　ｗｉｔｈ　ｄｅａｔｈ５～

追手を振り切るべく緩やかな坂を一丸となって駆け上がるシュイたち。その行く手を遮るように、斜め前方から矩形の鉄壁が押し寄せてきた。正確には全身を防具で固めたナルゼリ兵たちが五百ほど、後方から追撃してくる本軍と挟み撃ちにすべく距離を詰めてきていた。

エミラ隊の面々の表情が険しいものに変わった。疲弊した状態であれだけの数を相手にするのは流石に厳しいようだった。あまり時間を取られるようだと後続の本隊に追い付かれ、いっちもさっちもいかなくなる。シュイたちの決断は素早かった。塞がれていた峠道の強行突破を断念し、南側のエスポの森に進路を取った。前方からナルゼリ兵が追い付く前にシュイを先頭にして側面の敵陣の薄い部分を突破し、軽快に堀を飛び越えて獣道に入っていく。闇雲にそんなことをすれば敵の包囲網に引っ掛かるだけだが、それを潜り抜ける当てはあった。

アマリスは攻撃魔法以外にもう一つ、素晴らしい特技を持っている。鳥笛を吹く時に微弱な魔力を音色に乗せることによって特定の鳥たちと念話のように意思疎通ができるのだ。彼女はピティリムという名の黒い鳥を常に従えており、驚異的な視野の広さと気配の察知力によって自分の周囲の状況をいち早く把握することができる。鳴き声から魔力の波長を上手く捉えることができれば相手が様々なことを伝えようとしていることがわかるらしい。

銀色に輝く嘴を持つピティリムは鳥の中でも飛び抜けて高い知能と夜の闇をも見通す目を持っている。殻の固い木の実を高所から落として割ったり、わざと馬車道に置いて馬車に轢かせたりする。多数生息している地域では転倒を避けるため、馬車道でも速度が制限

されていることで知られている。
アマリス本人は主従というよりも対等な仲間だと思っているようだ。彼女にブレードと名付けられたピティリムは主から付かず離れず上空を飛んでいる。見知らぬ者が傍にいると一切降りてこないが割に親しくしているシュイの前には時折顔を出してくれることもあるのだ。

ブレードとアマリスのおかげで、シュイたちは上空から見た敵軍の位置や動きを定期的に把握できていた。地理に詳しいグレイルの意見も聞きながら、敵との接触を最小限に抑えられるルートを取り、シュイたちは起伏の多い林の中を迷いなく進んでいた。途中まで追ってくるナルゼリ兵もいたが、振り切るまでにそう時間はかからなかった。エミラの機動力と体力は伊達ではなく、鎧を着たままでは到底登れそうにない崖をも楽々と上がっていくことができた。重装備の兵では追ってこれないし、かといって数少ない軽装歩兵たちでは追いついたところでシュイたちの相手にはならない。状況を考えれば断念せざるを得ないはずだった。
小高い森丘の頂上に至ると木々の隙間からエメイルの大河が望めた。シュイたちはもう一息だとばかりに坂を下っていく。上がってきた時と違い、下り坂は幾分慎重に進路を取った。ぬかるんだ地面にエミラの長い足が取られて転んでしまうからだ。
後ろから敵兵たちが追ってくる気配はなかった。どうやらこの道からの追撃は分が悪いと判断したのだろう。
ブレードからの報告によってまだ先回りされていないことは確認済みだった。林を抜け、麓まで降りてきたところでも敵軍の姿は見られなかった。
再びブレードの鳴き声を聴いたアマリスが、追撃軍が間近まで迫

ってきていることを説明した。シュイはグレイルたちに先を急ぐよう促した。昨日から碌々寝ることもなく戦っていた彼らの疲労は色濃く、呼吸からして相当に荒い。中にはうつらうつらと船を漕いでいる者もいて、心身共に限界が近づいているのは明らかだった。

隊長のグレイルだけは未だ余力を残していたこともあって少し渋ってみせたが、また部隊員を危険に晒すわけにはいかぬと考えたのだろう、その申し出を承諾した。もっとも、エメイル川では未だバータン本隊とナルゼリ軍の先行部隊が戦っていることが予想されたため、戦いが一段落するまで川の上流にある訓練所に身を潜めるということだった。

エミラ隊がその場を後にしてから間もなく、ナルゼリ軍の先鋒が東側の丘陵に姿を現した。雁の群れのような陣形を崩さずにシュイたちの方へと向かっていく。

シュイがアマリスにあとどのくらい余力があるか訊ねると、彼女は少し疲れた顔を作りながら右手のひらに左の人指し指を一本加えようとし、少し考え直したのか二本に増やした。

組んでいる回数が多いこともあり、シュイはアマリスの性格をよく掴んでいた。活発で何事にも自ら進んで挑戦する頑張り屋である反面、平気な顔をして無茶するようなところもある。七割と言えば六割。言葉を濁せばもう限界に近い、という具合だ。詰まる所、あまり時間はかけられないということを認識していた。

若干遠巻き気味に、ナルゼリ軍が足を止めた。先ほどまで一緒に行動していたエミラ兵たちがどこにも見当たらないことに兵たちが訝る。どこかに伏兵が潜んでないかと周囲を隈なく見回すが、どこにも大人数が隠れられるような場所は見当たらなかった。

「……きさまら。まさかこの数を相手に戦う気か？」

半信半疑といった面持ちで、兵たちの一人が訊ねた。
「この数、ね。そう楽観できるほどの数には思えないが？」
言葉と共に鋭い眼光がナルゼリ兵たちを横断した。千を超える軍勢を前にして悠然と得物を構えるシュイに、ナルゼリ兵たちが慄いた。まともな神経をしているとは思えないと言いたげに。

どんなに優れた使い手でも永久に戦い続けられるわけではない。息継ぐ暇も与えられずに戦っていればいずれ必ず力尽きる。こうしている間にも後続の兵たちがちらほらとやってきている。それを遠目に眺めていたはずのシュイとアマリスは、しかし終ぞ動揺を態度に表さなかった。
ナルゼリ兵たちの大半はそんな二人に近寄ることを躊躇っていた。滲み出ている余裕が、何か策があるのでは、或いは本当にここにいる皆が倒されてしまうのでは、と思わせていた。
仮に首尾よく倒すことができたとして、その前に何百という者たちが犠牲になるだろうということは明らかだった。そして相手の疲労が未だ見受けられぬ以上、今仕掛けたところでその何百のうちに自分が加わるだけなのも。彼を仕留めたという栄誉をたった一人が手にするために自分の命を犠牲にするなど愚かなことではないか。
そんな打算が頭の中で駆け巡っていた。

どうぞどうぞ、と譲り合って前に出ぬ兵の中から、割り入るように同一の部隊と思われる兵たちが進み出た。
「ちょっと有名な者が現れただけでこの有様か。存外腰抜けが多かったのだな、我が軍は。……我々が相手になる。他の臆病者は手出し無用だ」
「へぇ。おまえたちだけで戦う、か」
肩を竦めるシュイに、先頭の男が鉄仮面をスライドさせ、口元の

部分を開いた。
「一対一で、と言えぬのが心苦しいところではあるがな。そこまでは自惚れておらぬし国を背負っている以上負けるわけにはいかん。――我が名はナルゼリ第二軍中隊長トビアス。たった二人にしてやられたとあっては騎士の名折れ。悪いがここで死んでいただく」
威勢よく、どこかで聞いたような啖呵を切った隊長に続き、一歩後ろに居並ぶ兵たちが打倒の意志を表すように剣の切先をシュイに向けた。シュイは隣にいたアマリスに下がるよう指示した。いざという時のために体力を温存させるためだ。

「その心意気は買うが――手加減はしない」
鎌を逆手に構えたシュイは、時計の振り子のようにそれを振るう。魔力の込められた鎌の先端が地面に穴を穿ち、長々と線を引いた。
「元より覚悟の上！　いくぞ死神！」
トビアスは再度鉄仮面をスライドさせ、口元を覆い隠した。間を置かずして頭を一段低くすると地を強く蹴り出し、鎧を身に付けているとは思えぬ速度で間合いを詰めてきた。シュイは束の間フードの奥でその身のこなしに目を細めたが、すぐさま対応するべく＞ゲイル・リロード＜を詠唱し、鎌刃に旋風を纏わせた。

効果範囲が広いとはいえ、この付与魔法の選択は一部隊のみを相手にするならば模範解答ではない。固い鎧を身に包んでいる者が相手ならばクインに付与した＞ライトニング・リロード＜の方が効果的であるし魔力の消耗も少なくて済む。
それが分かっていながら尚＞ゲイル・リロード＜を用いたのは、周りを取り巻いているナルゼリ兵たちを牽制するためだった。広い攻撃範囲によって隙を少なくし、出来心を起こし難くするために。或いは、いつどこから飛来してくるともわからない遠距離攻撃を叩

き落とすために。

シュイは口でいうほどにはトビアスの言を信用していなかった。というより、その言葉がたとえ嘘であっても構わないと思っていた。数多の戦場から学んだことの中に、相手の言葉を鵜呑みにして敗れることほど間抜けなことはないという不文律がある。正々堂々と口にしながら平然と卑怯な手を使う者は存外多い。あらゆる可能性に対応するべく、シュイは油断と慢心を心から消し去っていた。

剣の切先を天に向け、トビアスが真正面から一気に踏み込んでくる。その後ろからは更に三人の兵たちが、左右には二人ずつ、一定の距離を取りながら回りこんでくる兵がいる。その迷いのない動きから高い練度が窺えた。

間合いに入るや否や、シュイが鎌を素早く、だが僅かに引いた。そのフェイントにトビアスは素早く反応した。一瞬にして足を止め、鎌の外側に向かって回り込むように斬りこんでくる。

体重の乗った剣がシュイの側頭部目掛けて速やかに振り下ろされた。シュイが鎌の柄を手の甲に乗せて上に弾く。反動で柄の部分がしなり、トビアスの剣の腹の部分を真下から強かに叩いた。腕にまで伝わってきた痺れにトビアスが仰け反るようにして後退。息を付く間もなく、シュイの視界の両端に時間差で飛び込んでくる三名の敵兵が見えた。

手首を返し、突きを繰り出してきた兵にシュイは体を半歩横にずらした。心臓を狙った一撃が脇に逸れると同時に飛び込んできた兵の鎧の腹部に膝を曲げた状態で足を置く。

足を思い切り伸ばして分厚い鉄板を押し出す様に蹴り飛ばした。相手に尻餅を突かせると同時にその勢いで後ろに三歩分ほど後退。距離を取ったところで残り二名の方に旋風を従えた鎌刃を薙ぎ払った。後を追うように風が逆巻き、衝撃波が空気を切り裂いてゆく。

「風障壁（ウィンド・ウォール）！」

側面に回り込んでいた兵が高らかに叫んだ。正面右よりの二人に向かう大きな三日月型の衝撃波の前に風の壁が生じた。これには流石のシュイも唸らざるを得なかった。完全に相殺しきれたわけではなかったが、回避行動に移行する時間は稼がれていた。障壁が掻き消されると同時に敵兵たちが左右に散り、二人共に直撃を避けることに成功していた。

今度は背後から殺気を感じた。遅れて風の音に＞燃え盛る炎（ファイア・ボルト）＜の詠唱が重なるのを耳にし、シュイはそちらへ目を移すことなく、一回転するように鎌を大きく振り翳した。描かれた黒い輪から衝撃波が四散し、シュイへ向けられていた炎が強風に煽られて吹き消された。前方から接近していた二人の敵兵たちも衝撃波を避け切れずにたたらを踏み、後方へ吹き飛ばされる。少し離れていた側面の兵は咄嗟に腕を交差させて前かがみになり、押し遣られるのを防ぐのがやっとだった。

唯一人、衝撃波の軌道を見極めて宙に跳躍していたトビアスが台風の目、シュイの頭上から獲物を狙う猛禽類の威容で襲いかかった。敵兵を退けたシュイも素早く踵を立て、土を抉るようにして回転を強制的に制止。トビアスに向かって斜め下から鎌を振り抜いた。

予想していた一撃だったのだろう。旋風を纏う鎌刃をトビアスは剣の角度を変え、盾変わりにして受け止めると同時にシュイの頭目掛けて蹴りを放った。刹那シュイの左腕が掲げられ、体重の乗った蹴撃を受け止めた。トビアスが目を見開いた途端に付与による衝撃波が生じ、トビアスの左半身を襲った。

錐揉むようにして横に弾き出されたトビアスが地面に転がり落ち、勢いが弱まったところでうつ伏せになった。

「トビアス隊長！」

隊員たちから悲鳴が発されたが、トビアスが地面に伏せたまま片手で制した。間近で衝撃波を受けたのだからダメージがないはずはないのだが、意外に早く地に両手を付き、すくっと立ち上がった。

鎧を付けているとは思えぬ身のこなしに加え、技量、連携共に鍛えられた兵たちだった。部隊単位での実力ならエレグスやフォルストロームの正規軍にも匹敵するかも知れぬと思わされた。

「……ぐぅ、我々の連撃がこうもあっさりといなされるとはな。噂に違わず恐ろしい男よ」

「タフなやつだ。なるほど、ナルゼリにも少しは気骨のあるやつがいるようだな」

「ふ、死神なんぞに褒められても嬉しくはないがな」

「そう嫌ってくれるな。俺が生涯最後の会話相手かも知れないぞ？」

軽口を叩き合う間も、シュイは周りに素早く視線を走らせつつ鎌に新たな付与を施そうとした。

ふと、強い殺気が向けられていることに気づいた。周りのナルゼリ兵からのものとは違う、期待と微かな迷いが入り混じっている。距離がある程度離れており、場所を特定するには至らなかったが、辺りに視線を走らせ、唯一こちらの戦闘状況を観察できそうな北東側の崖辺りかと目星を付ける。

――ルー・イ・ファラ・クラム・クラムス。

湧き出た最悪の可能性を忖度したシュイは付与魔法を取り止め、囁くように祈歌を紡ぎ始めた。

「おぉ、まだ戦っているようですな。バータンの兵は見当たらぬようですが……」

トビアス隊と戦っているシュイよりやや北東、崖上から戦況を見る部隊長の後ろで、ネデルは周囲にある微細な魔力を全身から少しずつ吸収（アブソーブ）していた。取り込んだ力の微粒子を、全身を巡っている血流に含ませるようなイメージを描き、自分の魔力と同質のものに同調（レン）させてから両手の方へと移動させる。

――今兵を呼び戻せば、やつらがこちらの思惑に気付いてしまうかも知れんな。

「……え？　ネデル殿、今何か仰いましたか？」

「いや、気のせいではないのか」

適当にあしらいつつ、ネルデは眼下にいるシュイに間断なく視線を送る。彼とて全員を倒そうと思ってここに留まっているわけではないだろう。時間稼ぎに徹され、適当なところで打ち切られてはバータンの連中の狙い通りになってしまう。

ネデルは焦りを感じていたのと同時に、大殊勲を目の前にして心が高揚していくのを止められなかった。レッドボーンを壊滅させた立役者を討ち取ったとなれば相当な箔が付くのは間違いない。死神の悪名を呑みこんだ者として、表裏双方の社会から一目置かれる存在になるだろう。

ややあって兵たちがシュイに群がり、戦闘が再開されたのを期に、ネデルが意を決して両手を大きく掲げた。周りにいた兵たちがそんな彼を見てぽかんとした。

両手から吸収していた大量の魔力を解放（リリース）、集約した魔力から紅蓮の炎を創造（クリエイト）。十指から放たれる炎の帯が渦を巻きながら小さな火球

に絡みつき、みるみる内に巨大化していく。
周りの兵たちの視線が手を掲げているネデルと眼下で戦っているシュイたちとを素早く行き来した。
「ま、まさかネデル殿！　おやめくださ――」
「――煉獄火球（コンフラグレイション・スフィア）！」
兵たちの制止を振り切って詠唱が結ばれる。ネデルの作り出した巨大な火球が振り下ろした手に誘われ、戦場に落ちていった。

――――――

唐突に、地面が紅に染まった。周囲の景観が目にきつい色合いに変化し、トビアスたちが頭上を見上げ、そのまま硬直した。
＞――後ろへ下がれ！＜
膨大な魔力の接近にいち早く気付いたシュイが頭上を注視することなくアマリスに念話で命じた。アマリスの身体が頭で理解するより先に地面を強く蹴っていた。
迫りくるもう一つの太陽に、シュイを取り囲んでいたトビアスたちがようやく我に返った。だが、逃げようとしたところでもう手遅れだ。火球から逃れるべく後ろに飛びのいたアマリスは、シュイが兵たちに囲まれて未だ逃げ切れていないのを目の当たりにし、切羽詰まった声を上げた。それに連鎖するようにナルゼリ兵たちの悲鳴が辺りに響き亘った。

巨大な火球がシュイたちを呑み込み、下半分が地に沈むや否や、大爆発が巻き起こった。爆心地からドーナツ型の衝撃波が低空を駆

け抜け、爆音が撒き散らされた。刹那、大地の表面が泡立ち、融解して溶岩が盛り上がった。燃え盛る炎の壁の中からこの世の全てを呪うような絶叫が迸った。ドーム状に広がった爆発領域内で人影がくの字に折り曲がり、次々に消失していく。

爆風で弾け飛ぶ砂や岩の破片から顔を庇いつつ、アマリスが力の限りシュイの名を叫んだ。その声も地の底から轟くような爆音にむなしく掻き消されてしまう。体全体に押し寄せてきた衝撃波に足を踏ん張り切れず、後方に吹き飛ばされた。何とか宙で体勢を整え、四つん這いになって地面にしがみ付いた。再び前を向いたアマリスの視界に飛び込んできたのは、熱を帯びた光の花が咲き、辺り一面を白で覆い尽くしていく凄まじい光景だった。

～躍動　ｔｈｒｏｂ　ｗｉｔｈ　ｄｅａｔｈ６～

ドーム状に膨れ上がった爆炎の中から炎に包まれた無数の岩が青空に高々と舞い上がった。ある程度の高さに達したところで拡散し、灰色の煙で曲線を引きながら地に落ちていく。幾重にも生じた煙の柱はまるで鳥籠のようだった。

崖上からその惨状を見ていたナルゼリ兵たちが茫然自失と立ち尽くしている。その隣では、おのれの魔法が標的に着弾したことを確信したネデルが歪んだ笑みを浮かべていた。

「……くっ、くっくく……はっはっは！　やった、やったぞ！　見たかおまえら！　この手で、あのシュイ・エルクンドを！」

狂気を帯びた勝鬨を上げるネデルを、傍にいた兵たちは怒りの籠もった目で睨み、唇を震わせた。

「ネ、ネデル……殿。な、何てことをしてくれたのです！　我が軍の兵まで巻き込むとは！」

「やるならやるで、彼らに退避命令を出すべきではなかったのですか！」

味方が傍にいるとわかっていたにも拘わらず、突如として広範囲魔法を放ったネデルに、場にいた兵たちから口々に罵声が飛んだ。

「馬鹿か、きさまらは。幾多の修羅場を潜り抜けている上級傭兵の勘を舐めるな。あの場で下がるように命じていれば確実に気付かれたはずだ」

水を差すなと言いたげな態度に、年若い兵士が詰め寄った。

「味方を巻き添えにして手にする勝利など――ひっ！」

先ほど火球を放ったネデルの手の平が苦言を呈そうとした兵に向

けられた。燃え盛る松明を顔に突き付けたかのような迫力に、周りの兵たちも言葉を失う。

「シュイ・エルクンドが健在であればルクスプテロンからバータンに援軍が送られてくるまで粘られてしまう可能性は大。少ない犠牲と引き換えに難敵を始末できたのだ。結果はこれが最良だろう。これ以上ごちゃごちゃ抜かすと、きさまらもやつと同じ運命を辿ることになるぞ？」

ネデルの脅し文句に兵たちが呻いた。それに構わずネデルは再び崖下を見、小さく舌打ちをする。

「……どうやら小娘の方には避けられたようだな。まぁいい、そいつの始末は好きにしろ。殺すなり捕らえて嬲り者にするなり、な。俺はリガス将軍に報告に行く」

颯爽と踵を返したネデルに、ナルゼリ兵たちは悔しげに拳を握りしめていたが、諦めたように力を抜き、崖の下に視線を移した。

もうもうと立ち込めていた噴煙の一部が風に払われた。小さなざわめきが驚嘆に変化し、それに気付いたネデルが足を止めた。

「……ば、馬鹿な。……人間じゃない」

続いてか細い呟きが耳に入り、ネデルが眼下に視線を送ったまま動かなくなってしまった兵を肩越しに見た。

――――まさか。

「……ど、どけっ！」

脳裏を過ぎった不吉な予感に、早足で戻ってきたネデルが兵たちを両腕で押しのけるようにして崖の下を見、戦慄した。

風に流されている噴煙の隙間から、靡く黒衣が覗いていた。シュ

イが先ほどと同じ場所に立っていた。巨大火球を受け止めたであろう掲げていた手を、蝿でも追い払うかのように、左右にぷらぷらと振るっている。その仕草からすると魔法を避けたというわけではなさそうだ。

一方で、シュイの立っている辺りに生えていた雑草は広範囲に亘る熱風によって一つも残らず燃え尽き、白煙が幾重にも立ち上っている。彼の立つ僅かな足場を除いて、地肌の表面が焼け焦げ、ドーナツ状に浅く抉れていた。

哀れにも、シュイの近くにいたナルゼリ兵たちは、着弾点を軸として輪を描いたように吹き飛ばされていた。着ている鎧兜の金属部分が融解し、橙色の液体となって地面に流れ出ている。その部分には真っ赤に焼け爛れた、或いは真っ黒に炭化した皮膚が剥き出しになっていた。形が残っているならまだましな方で、中心近くにいた者たちは跡形もなく燃え尽きていた。

「先輩！　……よ、よかったぁ」

退避していたアマリスが安堵の息を吐き出し、シュイに向かって軽快に走り出した。駆け寄ってくる彼女を尻目にシュイは掲げていた手を降ろし、死屍累々となった地面を眺めてこれ見よがしに首を振る。

「味方を巻き込んだ一撃がこの体たらく、か。死んでいった者が不憫に過ぎるな」

普通に動いているシュイを視野に収め、ネデルが思わず額に手をやった。

「あれを食らって無傷、だと。……馬鹿な……有り得ぬ！」

完全に意表を突いた、しかも上位魔法による渾身の一撃。実際、シュイが空を見上げてから炎が着弾するまで時間はないに等しかった。にもかかわらず、息絶えているのはナルゼリ兵だけであり、肝心のシュイは何事もなかったかのように平然としている。

シュイは崖の上でうろたえているネデルに流し目を送った。
「いや、もしかして兵に集られた俺を助けようとしてくれたのか。そうか、わかったぞ。――その格好といい、さてはおまえ、俺の隠れファンだな？　あろうことか裏ギルドの者まで心酔させてしまっていたとは、我ながら罪作りなことだ」
ネデルが口の中に羽虫が飛び込んできたような顔をした。その手は憤怒から小刻みに震えていたが、感情に任せるがままに仕掛けることはしなかった。渾身の魔法を片手で凌がれたショックはそう簡単に拭い切れるものではないようだった。
その一方で、字面をそのまま受け取ったアマリスは曖昧に笑いながら、それは流石にないんじゃないかなー、と否定的な見解を示している。

巻き添えを免れた兵たちもシュイに剣や槍を向けているものの、その切先は細かく震えていてきちんと定まっていない。なにより先ほどのように巻き込まれては堪らないと思っているのだろう、かなり及び腰になっている。その様子を見て、シュイは白々しく笑声を上げた。
「どうしたおまえたち。掛かってこないのか？　俺の動きを少しでも止めることができれば、また見事な大道芸を見せてもらえるかも知れないぞ？」
ネデルはその言葉にポカンとし、シュイの言わんとしていることを理解した途端に怒声を張り上げた。
「……き、きさまっ！　我が魔法を何たる言い草！　その軽口、断じて許さぬぞ！」
「謙遜することはないだろう。俺を一切傷付けることなく、周りの兵たちだけを狙い澄まして殺すなんて真似、相当な実力が備わって

いなければできるものじゃあない。胸を張っていいぞ」
　嘲りの含みがある褒め言葉に、ついにネデルが片手を掲げかけた。だが、腕が伸び切るのに先んじてシュイが火球を防いだその手をネデルに向けた。隙のないその動きにネデルの身体が硬直した。

　シュイが広げた手の平を少しずつ横に動かし、指の隙間から視線を通す。
　フードの影から覗く眼差しが自分に向けられているのを見て、ネデルが体を強張らせた。シュイの目から、炎を受け止めた手から視線を外すことができず、先ほどの光景が嫌が応にも思い出された。
　万が一、再び投じた一撃で同じことをされたらどうなるだろうか。自分の傭兵としての力量に対し、周りから信用を無くすのは避けられないだろう。ましてや、先ほどの一撃は不意打ちと言ってよいものだったが今は正面から向かい合っているのだ。防がれる可能性が高くこそなれ、低くなるとは考えられない。長年修練に修練を重ねてきた自慢の魔法が、衆目の前であっさりと防がれてしまう。それは途轍もない恐怖だった。
　アマリスはシュイが別段怪我をしていなさそうなことに安堵し、続いては戦場の空気が一変していることを悟った。最早周りの兵たちに攻撃を仕掛けてこようという気概は感じられなかった。味方の命を一瞬にして消し飛ばした強力な魔法が、目の前の男には全く通用しなかったという事実は、戦意を失わせるのに足る悪夢に違いなかった。

　間が空いて、不気味に静まり返った戦場に、先陣から戻ってきたと思われる馬蹄の音が段々と近づいてきた。傷だらけの伝令兵がシュイとアマリスに気付き、辺りの空気を読んだのか、接近し過ぎぬよう遠巻くように通り過ぎていく。

ややあって、伝令兵はネデルの隣にいた士官と思しき男に崖の下から歩み寄り、戦況報告を始めた。声が小さかったのと離れていたのとであまり聴き取れなかったが、微動だにしなくなった士官とネデルを見て話の内容はそれとなく理解できた。

――幕引きだな。

デニスたちが上手くやったことを確信したシュイは掲げていた手を再び降ろし、つまらない芝居を見せられたかのように首をゆっくりと振り、更には鼻息混じりにネデルから視線を逸らした。ネデルの唇が堪え難い屈辱に震えた。アマリスは、これ以上はないというくらいに悔しそうなネデルの顔を見て、熱くさせるのが本当に上手いなぁ、と独りごちる。

「今回は挨拶に留めるつもりだったが予想以上の歓迎振り、真に嬉しく思う。再び相見える際には――」

決して期待を裏切らぬことを約束しよう。シュイは顎を下げ、その声を意図的に低くした。研ぎ澄まされた殺気が、仄かな怒りが、声に乗せられてナルゼリ兵たちの耳を撫でていった。

シュイは蒼白な顔をしたネデルに背を向け、エメイル川の方へ、そちらへの道を塞いでいたナルゼリ兵たちの方へと一歩を踏み出す。シュイが静々と兵たちに近づいていくのに従って、ナルゼリ兵たちが磁石に反発した砂鉄の如く退いていった。

「アマリス！　ぼさっとしてないでいくぞ」

強く促されて我に返ったアマリスが、慌ててシュイの背後に付き従った。

悠々と歩を進める二人を見て、ナルゼリ兵が互いの顔を付き合わせている。

「お、おい、このまま見逃していいのか。おまえいってこいよ。前

に死神なんぞぶっ倒してやるって息巻いていたじゃないか」
「ば、馬鹿いえ。あそこまでの化け物だなんて聞いてないぜ。大体よ、あのバカでかい火の玉と何の変哲もない鉄の剣、一体どっちが強いと思ってんの？」
そんな囁き声が交わされる中、シュイとアマリスはあたかも大勝利を収めて自領に凱旋した将軍の如く、敵兵で作られた花道を進んでいく。その背を見送った者たちの心に、底知れぬ恐怖を刻みながら。

背後のナルゼリ兵の姿が豆粒ほどになったところで、アマリスはずっと呼吸を我慢していたかのように息を吐き出した。どうやら人の焼けた臭いを嗅ぐのが我慢ならなかったようだ。
「し、しんど。うぅ、しばらくお肉食べれないかも」
「そうか、なら夕食は川魚を頼むかな」
気遣うでもなく、サラリと流されたことにアマリスが不満げに口を尖らす。
「……せんぱーい、何で敵陣のど真ん中であんなに堂々としていられるんですか。神経が太いにも程があります」
「連中の心理を察せば仕掛けてくるか否か容易に想像が付く。誰だって無駄死には避けたいものだ。ごく稀に空気の読めぬ馬鹿が混じっていることは否定しないがな」
再び取り囲んだところで、先ほどの兵たちと同じようにネデルの火球に焼き尽くされては堪ったものではないだろう。火球を軽くいなした時点であの場での決着はついていたと言える。
「そんなものですかね。あっ、そうだ。忘れる前に聞いておきたか

ったんですが、さっきの鎖みたいなのは一体……？」
　アマリスのこの言葉にはシュイも驚きを隠さなかった。
「よくもあの混乱の中で、……大した観察眼だな。見られていたのなら隠す意味もない、か。あれが＞魔を打ち払いし縛鎖（ディスペル・リロード）＜だ」
　アマリスが両の手を合わせつつ顔を綻ばせた。
「やっぱりそうでしたか！　うわー、初めて見ました。一瞬のことでしたし、相手には自分の出した火球が邪魔して何も見えなかったでしょうね」
　褒められたことに喜びを隠さぬアマリスに、シュイはフード越しに頭を掻いた。
「他言は無用だぞ。使えることが知られるだけでも色々と不都合が生じるからな」

　以前、フォルストロームの王都に滞在していた折、王立図書館の閲覧制限区域で覚えた術式の一つ、＞ディスペル・リロード＜。術者の魔力を中和物質にして解放（リリース）、相手が創造（クリエイト）した魔力に強制的に結合（ユニット）させ、削除（デリート）してしまう効果を持つ上級付与魔法だ。実際には魔力を完全に消失させるわけではなく、元の無害な微粒子に分解する。シュイは詠唱破棄して作り上げた魔力の鎖を鎌に巻き付け、炎を薙ぎ払った後で鎌を下ろし、手を掲げていた。
「切り札は使わないからこそ有効、ですよね。わかってますって。でも、なんで鎌で受け止めたものをわざわざ手で受け止めたように見せたんです？　格好付けてみたかったとか？」
　悪戯っぽく笑うアマリスに、シュイは下唇を突き出して見せた。
「格好……って、そんなわけないだろう。まぁ、敢えて説明するようなことでもないんだが。あんなものはその場の流れからの閃き、敵の動揺を大きくするためにやったパフォーマンスに過ぎない。鎌を掲げていれば付与魔法で防いだと思われるのは予想が付くからな。それよりは、いとも簡単に防がれたと思わせたかった。あれだけ大

量の煙が発生していたから難しくはないだろうと考えたんだ」

シュイは、自分がナルゼリ兵に囲まれている状態にも拘わらず何者かが魔力を練っているのに気付き、或いは近くにいるナルゼリ兵に構わず放つことをも考慮していた。ナルゼリ兵たちを相手にしながら祈歌を紡ぎ、次に発動する魔法の高速詠唱化を可能にし、いつかくるであろう不意打ちに備えていた。

ネデルには魔力を練り上げる時間が十二分にあったため、完全に相殺しきれたわけではなかったのだが、長きに亘る戦いを経て習得した自律型魔法障壁、かつ黒衣の魔法軽減効果も相俟って手の一部に軽い火傷を負う程度で済んでいた。

後は全く効いていないフリをすることによってネデルの、それ以上に周りにいたナルゼリ兵たちの動揺を誘った。味方の兵を犠牲にして魔法を放ったにも拘わらず、こちらに全く傷を負わせられなかったと知れれば、ネデルに対するナルゼリ兵たちの不信感は多分に増すだろうと考えてのことだ。これが、軽くなりとも手傷を負わされたと知れれば印象も大分異なったはずだ。

シュイはネデルの魔法を間近に見て、その実力が決して侮れないものだと判断した。あれほどの破壊力を秘めた魔法の使い手が大勢の兵に守られながら戦列に加わる意味は大きい。完全な連携を取られれば後々の戦いで被害が拡大するのは避けられないと踏み、ここは多少演技をしてでもネデルに対してナルゼリ兵の心証を悪くし、あわよくば連携を取り辛くしてしまおう、と企んだ。

後ろからいつ自分に死をもたらす攻撃魔法が飛んでくるかわからない。そうと知れれば今後前線に出るナルゼリ兵が戦闘に集中できなくなるのは道理。そこまで直接的な効果が出なくとも、ネデルがシュイ・エルクンドに対して無力である、という意識は芽生えたに

違いなかった。

「時間に猶予がなかったせいで略式で使わざるを得なかったがな。おかげで余分に魔力を使わされてへとへとだ。報酬を値切られてるっていうのに真面目に働き過ぎた」

「うーん。その言葉をどこまで信じていいものやら」

鎌を携えて戦場を悠々と闊歩するシュイからは、それほどの疲れは感じ取れなかった。アマリスはシュイがあれだけの戦いを繰り広げながら未だ余力を残していることに半ば呆れていた。

「……ぼく、足手纏いじゃなかった？」

心配そうに見上げてくるアマリスに、シュイは小さく笑う。

「いや、手伝ってもらって正解だった。おまえの援護がなければ少なからず犠牲者が出ていたはずだ。お世辞抜きに感謝しているよ」

「……てへへ、面と向かっていわれると面映ゆいのですがー」

アマリスははにかみながらもどこか得意気に鼻梁を擦った。シュイはアマリスの小さな肩を、お疲れさんとばかりに優しく叩いた。

この後、ナルゼリ軍の本隊はイルクオール大橋から敗走してきた先遣隊と合流し、再びエメイル川の東岸近くまで兵を進めた。その後はバータン軍と睨み合いを続けていたが、橋を渡ろうとする動きは終ぞ見られなかった。その六日後、ルクスプテロンの援軍五千が南下してきたことを受け、ナルゼリ軍は自領への撤退を余儀なくされる。

国家存亡の危機を乗り切ったバータンは二週間後、正式にルクスプテロン連邦の加盟国となる。シュイの名がエレグス領ポリー支部の長として候補に挙げられる一月ほど前の出来事であった。

～転機　the turning point～

遠くから誰のものとも知れぬ話し声が微かに聞こえてきた。建物が大通りに面していることもあって、二階ロビーの透過窓からは労働者たちの通勤する様子がちらほらと窺えた。

小麦の焼ける芳醇な香りが漂い始めてから程なくして、上に割烹着を羽織り、頭に潰れたコック帽を被っている女性の売り子が厨房から顔を出し、三段キャスターに色取り取りのサンドイッチを並べてゆっくりとロビーを回り始めた。

エレグス領北東の町、トートゥの北地区にある蔦に覆われたホテル。内装は古めかしいが置かれているテーブルや椅子などといった調度品は新品同様だ。

滑らかな曲線描く椅子の背もたれに寄り掛かり、のんびりとくつろいでいたシュイは、広げていた新聞から目を離すと脇を通り過ぎようとした売り子を呼び止め、燻製飛豚肉のサンドと熱い紅茶のセットを注文した。差し出された紙にシュイがサインすると売り子は金を徴収することなくテーブルに湯気立つ食べ物を置き、ありがとうございました、と丁寧に頭を下げた。

これは別に無料サービスというわけではない。常連客の場合、ホテル内でのサービス料金をその場その場で支払う必要はなく、最後に纏めて割り引いた上で精算することができるのだ。

シュイは楕円形のパンを二つに切った本格的なサンドイッチを頬張りながら、再び新聞に目を移した。焼き立ての小麦の香ばしさと煙に燻されたベーコンの独特の風味を楽しみつつ、頁を捲りながら比較的大きい見出しを流し読みしていく。

少しして、注目すべきニュースを一つ見つけた。見出しは＞セーニア、軍備増強中？＜といったものだ。どうやら近隣諸国の腕の立つ騎士や傭兵などに目星を付け、スカウトを派遣しているようだった。ここのところは大規模な戦闘が起きていなかったが、懲りずに出兵を計画しているのだろう。セーニア国内には反戦派もそれなりにいるはずだが、世論は戦争再開へと傾きつつある。先の大戦で戦死した者の家族に注目を集め、上手い具合に同情を煽っているようだ。

読むべき部分を読み終えたところで新聞を畳み、鉄製の大きな網籠に戻した。フロント手前にある大きな時計花を見ると、花弁の色合いは黄色から白に移行しつつある。そろそろギルド支部が開く頃合いだった。

シュイがトートゥのギルド支部から前触れもなく呼び出しを受けたのは三日前のことだった。連絡用魔石の霊体を寄越したのが支部長だったことから、放置できる類の内容ではないと判断し、取り掛かっていた任務を早めに切り上げて支部に向かった。昨日町に着いた時には既に夜も更けていたため、馴染みのホテルに泊まることにした。

正直に言って、呼び出されそうな心当たりはいくらでもあった。ここの所始末した賞金首の情報更新を行った覚えが無かったし、ギルドの心証を悪くしたと叱責されそうな理由も腐るほどある。少し前にデニスらと共にバータンとナルゼリの戦争に介入したことに関しては、ギルド内でも賛否両論を呼んでいた。

或いは前々回の任務で古代遺産として名高いオベリスクを修復不可能なくらいに木っ端微塵にした件だろうか。地方版とはいえ新聞の一面を飾ってしまったわけだし、それについても小言くらいは言

われるかも知れなかった。それはあくまで相手が放った攻撃魔法を避けた結果であって自分が直接手を下したわけではなかった。しかしながら、証人と成りそうな当事者は今や土の中である。

――考えていてもしょうがない、か。

呼び出しに応じぬことは簡単だが、後々始末書が大量に送られてくるような事態になるのは避けたかった。重要書類に関しては、期日までに提出しなければ除名処分も有り得るからだ。

ギルド・シルフィールは数ある傭兵ギルドの中でも比較的自由な気風だが、マスターであるラミエル・エスチュードが根っからの商人なこともあってそういった報告や手続きなどの取り決めに限っては非常に厳しかった。たとえランカーであっても例外はない。

滞在先でたまたま組んだ傭兵宛に書類が文字通り山のように郵送されてきた際は、周りにいた誰もが面食らったものだった。彼は三日間、魔物の討伐任務と並行して目に隈を作りながら書類を書き上げる羽目になった。

もし仮に＞レテの死神、山の様な始末書に埋もれる＜などと見出しを飾ってしまったら今まで積み上げてきた傭兵としての信頼と実績が地に落ちるのは必然だ。死神の手前に＞だらしがない＜と付け足されただけでも、何ともきまりが悪くなってしまう。

出た結論は一つ、嫌なことはさっさと終わらせるが吉。そうと自分に言い聞かせ、重い腰を上げるとチェックアウトを済ませにフロントへと向かった。

シュイは完全に位置関係を記憶した市街地を、支部まで最短のルートを選びながら進んだ。但し、あまり人目に触れたくはなかったので得物（かま）だけはホテルに預けておいた。

時折街路樹に混ざって妙な形をした背の高い花がちらほらと見受

けられた。通称ランプ花と呼ばれるエレグスの各地に群生する多年草で、路傍の至る所に生えている。

大きくて黄色い四枚の花弁はランプのような形を作っており、夕暮れくらいからおしべとめしべが発光し始める。そのお陰でエレグスの夜道は地面に落ちている小さな石まで見通せるほどに明るく、商店などもかなり遅くまで営業している所が多い。

初めは生活時間や文化の違いに戸惑ったものの、数年も住めばそれが日常となる。以前はあまり夜更かしをすることがなかったシュイだったが、今ではそれが当たり前になっていた。

馬車道から逸れて脇道に入り、人一人通るのがやっとというくらいの路地裏を抜けると、大通りに並ぶ色取り取りの建物の右端にトートゥのギルド支部が見えた。二階部分が黄緑色、一階部分が檸檬色とかなり明るい色調の建物は、エレグス領にある唯一のシルフィールの支部である。

建物の中に入った途端、シュイは生温い風に思わず呼気を止めた。受付は朝から大勢の依頼人でごった返していた。この近辺に四大ギルドの支部はないため、公共の建物で共通クエストを頼むのでなければ大多数がここへ来ることになる。

シルフィールでは受付員に適正と見なされれば、雑務や探し物、灌漑工事、果ては家庭教師までクエストとして取り扱われる。規模は兎も角として依頼の間口が広いという点においては随一と言えるだろう。

依頼書は報酬や期限、難易度などによって受付員にランク分けされ、達成すると依頼報酬とは別にそれに応じたポイントが加算される仕組みだ。クエストは1週間毎、月曜日に更新され、申請があれば最長で3ヶ月間貼り出される。

また、ギルド員にもD～Sまでランクがあり、Aランクは準ランカー、Sランクはランカーと呼ばれている。Bランクまでの傭兵は

専ら達成ポイント。準ランカー以上となると評価委員会によって知識、人格、任務遂行能力なども加味されるため、戦闘能力のみの評価なら若干序列の入れ替わりも有り得る。つまりは、Bランクだからといって準ランカー、ランカーに実力が劣るとは限らない、ということだ。

シュイは久しく見なかった活気に少々面食らっていた。喧騒が大きいせいで受付員もかなり大きな声で応対している。

「ご子息様の護衛ですねー。どちらまでになりますか？　セーニア領のルードまでですね。えー、予算の方をお伺いしても宜しいですかー？　なるほど、このお値段ですとCランクの傭兵でしたら2名まで付けられますよ。Bランク？　うーん、一人でもちょっと厳しいですね。ええ、Cランクでも腕は保障します」

「なるほど、娘さんの頭痛が酷いんですね。ふむ、医者にも治せないと。かしこまりました、あちらの個室で詳細をお聞かせ願えますか？　それと、持参しているのであれば診断書の提出もお願いいたします」

「ははぁ、先の洪水で家が土砂に埋まってしまったと。それはお気の毒に。ええ、ええ、お任せください。土砂を除去するだけなら本日中でも可能ですよ」

受付は4つあったがどこも長蛇の列だった。受付員たちは淀みなく手続きをしているが、後から列の後尾に付く依頼人は引っ切り無しだ。

依頼が受諾された物から順に紙に纏められ、ある程度纏まったところで奥のフロアにある掲示板に貼り付けられていく。既に掲示板の四つ中三つが依頼の紙で埋まっていた。

入り口側の受付がそれを横目で確認すると少々お待ちください、

と入口の扉に＞受付終了＜と書かれた木の看板を下げに行った。

「おっ、これは楽そうだな。もらいっと」

「うーん、報酬は魅力的だけど期限が厳しくない？」

「誰か、おれたちと一緒にバクーシャ砂漠で砂竜退治するやつはいないか？　報酬は均等分配、あと2名だ」

依頼書の掲示板前には早くも傭兵たちの姿が見受けられた。エレグスにある支部がここだけで競争率が高いという理由から、割のよい依頼を受けられる機会はそんなに多くはない。月曜日は意に沿った依頼を受けられる可能性が高い、数少ない日なのだ。

また、エレグスではフリーの傭兵が大勢活動していることもあり、チームを組むことにあまり抵抗がない者が多い。

奥の小部屋では、早速依頼を受諾した傭兵と依頼人がやり取りを行っているようだった。シュイがそれを横目に中央付近まで進むと、掲示板の依頼書を手際よく貼っていた色黒の男が歩み寄ってきた。

「誰かと思えばやっぱりシュイじゃないか。ここに顔出すなんて久し振りじゃないか？」

「盛況なようで何よりだ、ピエール。支部の業務には慣れたか？」

燃えるような色の赤髪は初めてあった頃と違い、少し長めに切り揃えられている。今は事務仕事をしていることもあって白いシャツとベージュ色のスラックスを身に付けているが、服の上からでも鍛えられた筋肉の形が薄らと窺えた。

シュイという名を聞き咎めたのか、いつの間にか掲示板の前にい

た何人かが振り返っていた。
「……あれがそうなの？」
「あぁ、あの格好。間違いなさそうだな」
「……驚いたな、本物かよ」
「何だ、あんなやつ。今に見ていろ。俺の時代は直ぐそこまで来ているんだ」

好奇と畏敬、微かな侮蔑が混在した視線を受け止めながら、二人別段は気にしたふうでもなく話を進める。
「まぁぼちぼちやってる。それよか相変わらず人気モンだな」
「好むと好まざるに拘わらず、だがな。お陰様で悪く言われるのはへっちゃらになった」
肩を竦めるシュイにピエールが苦笑した。
「それで、今日は何用だ？」
「そちらの支部長殿に呼び出しを食らったんだ。大方周りから寄せられた苦情の類だろう」
「へぇ、タレイレンさんに？　そりゃ御愁傷様だ」
「念のために耳栓は持ってきてるがな」
「ははは、バレたら滅茶苦茶怒られるぜ？　……あぁ、そうだった。悪いがこれに名前書いてくれ」
ピエールが懐から取り出したのは一枚の羊皮紙だった。

「あれ、ここって入館者の名前を書く必要あったっけか？」
「いーや。実はおまえのファンってやつが知り合いにいてよ。友人（ダチ）だって口滑らせちまったらサインをせがまれたんだ。あー、もうちょい下の方に、出来ればフルネームで書いてくれるか？　ついでに他の傭兵にも頼む予定だからスペースを空けておきたいんだ」
サインを頼むならもっと安っぽい色紙でいいのではないか。そん

なことを思いつつ、シュイは満更でもなさそうに筆を走らせた。
「さんきゅー。あぁそうそう、タレイレンさんなら支部長室にいるぜ。通路の突き当たりを右に曲がって真っ直ぐいったところだ」
シュイは小さく頷くと名前を書いた羊皮紙と筆をピエールに返却し、廊下の奥へと消えていった。

～転機　the turning point2～

支部長室のドアノブには＞在室中＜と書かれている紐付きの白いカードが掛けてあった。シュイがドアを二回ノックすると名乗りを求める低い声が返ってきた。

「シュイ・エルクンドだ。先日の呼び出しの件で来たんだが」

「ああ、もう来たのか。鍵は外してある、入ってくれ」

シュイはスライド式のドアを横に引いた。目に入ってきたのは出窓から差し込む朝日に照らされた広い部屋だった。壁際にはきっちり整理された本棚と小さな食器棚が、部屋の真ん中には矩形のテーブルに沿うように客用の椅子が二つ並んでいる。その向かい側では森族の男、エヴラール・タレイレンが書き物をしていた。長い銀髪が垂れ落ちて邪魔にならぬよう、片側に寄せて紐で束ねている。

「割に早かったな。良い心がけだ」

思慮深げな切れ長の目はシュイの方に向けられているものの、手の方は机の上で淀みなく踊っている。その速記にシュイは束の間目を奪われたが、ふと顔を上げて話を切り出した。

「面倒事はとっとと済ませるに限るからな。それで、どんな要件だ？」

「その前に一つだけ確認しておきたい。おまえは準ランカーに上がってどれくらいになる？」

エヴラールは筆を置くと先ほどまで書いていた書類を直ぐ隣にある分厚い紙束の上に重ねた。ゆっくりと立ち上がり、食器棚に歩み寄るとティーセットを二つ銀のトレイの上に乗せた。

「さて、どうだったかな。……一年くらい、いやもう少し経っているか」

「報告通りか。なら何ら問題はないな」

「……何の話だ？」
エヴラールは何も言わずにただ向かいの椅子に座るよう奨めた。
シュイは首を捻りながらも促されるままに腰掛けた。

エヴラールは両手でポットを掴み、火の魔法で温め直してから二つのカップにミルクティを注ぎ込んだ。シュイが軽く頭を下げるのを横目にゆっくりと席に着く。
「さて、話というのは他でもない。近々エレグス領のポリーに支部が新設される件は知っているか？」
「小耳には挟んでいる。エレグスの上院から直々に要請があった、っていう程度の認識だが」

現在、シルフィールの支部はエレグスに一箇所のみ、ここトートゥが唯一のギルド支部である。別に仕事が少ないというわけではない。エレグス領内では他の地域に比べて魔物が蔓延っていることもあって共通クエストの量が多く、ギルドに所属していないフリーの傭兵が活躍できる土壌がある。反して、力のあるギルドの誘致には二の足を踏んでいるのが現状だ。
エレグス領においてはアースレイが四大ギルドで最多となる三つの支部を持っており、それなりに幅を利かせている。今回許可が下りたポリーはエレグス第四の大きな都市であり、そこに二つ目の支部が出来るとなればこちらとしてもシェアが見込めるようになるというわけだ。
「なら話は早い。先日に正式な許可が下りたということで建物の建設には既に取り掛かっている状態だ。だが、一つ決まっていないことがある」
「決まっていないこと？　……ははぁ、支部長か」

通常、ギルド支部の長は準ランカー以上の者が就任する。但し、候補に挙がった傭兵を支部長にするには最低でもランカー三名、準ランカー五名分の推薦が必須になる。経験豊富な者が自ら立候補すれば何ら後腐れがないのだが、年間の内半年以上は支部にいなければならないという面倒な規定があるので立候補者は殆ど期待できないという事情があった。

「察しが早くて助かる。立候補者を募ってはみたものの例によって反応なし。つまりは他薦ってことになったんだが」

「準ランカーの署名が必要だってことだな。いいぜ、名前くらいなら貸してやる。誰を推薦するんだ？」

「……あぁ、いや、まぁ。これは少々言い難いことなんだが」

どちらかと言えばはっきり物を口にするエヴラールだったが、それにしては歯切れが悪い。シュイは不思議そうな顔をしながら紅茶を一口飲んだ。

「何だ、珍しく口が重いじゃないか。……あ、念のため先に断っておくがニルファナさんを推薦とかってのは勘弁してくれよ。彼女に恨まれたくはないし殺されたくもないからな」

その冗談に、シュイにとってはあながち冗談でもなかったのだが、エヴラールは小さく笑った。

「あぁ、そういうことではない。――予め断っておくが、これは俺の意向ではない。そこのところを勘違いしてくれるなよ」

尚も渋っているエヴラールに、シュイは眉を潜めた。勿体ぶらずにとっとと喋ってくれ、と言いたげだった。

エヴラールは意を決したように、どこか仕方なくといったふうにシュイの顔を見据えた。

「――結論から言うとシュイ・エルクンドという名前が新支部長候補に挙がってしまっている、という根も葉もない噂のような、しかし気の毒な事実がある。既に何人かの上級傭兵からも推薦書が提出されているらしい」

シュイは何かを言おうとしたが、空気が漏れただけだった。その無駄に遠回しな言い方が癪に障ったのは言うまでもない。

「ランカーの署名は五つあるからなんら問題ない。ニルファナ・ハーベル、ディジー・マクレガー、デニス・レッドフォード、アミナ・フォルストローム、ビリー・スタンレー」

「ちょ、ちょーっと待ってくれ。話が唐突で――」

エヴラールがシュイの制止を振り切って声を大にする。

「――続いて準ランカーの署名。アルマンド・ゼフレル、ランベルト・タルッフィ、シャン・マクシミリアン、それから、ピエールのやつも今月中に昇格がほぼ決まっているからその名前も――」

「――おぉ、ピエールもついに準ラン……じゃなくって！」

「……ん、なんだ。どうかしたのか」

エヴラールは、まるで今初めてその存在に気付いたというような目でシュイを見た。

「どうした、じゃないだろ！　俺を選ぶくらいなら他にいくらだって適任者がいるはずだ！　今言ったアルマンドとか！　彼なら年齢、実績、実力、人望、全て兼ね備えているじゃないか」

「あぁ、あいつは……」

タレイレンは何か言いかけたが思い留まるような仕草を見せた。

「ゼフレルには少々事情があってな。業務に長期間拘束されないよう特例が認められている。おまえも知っての通り、支部長は最低でも半年間業務に拘束されるんだが、やつにはそれができないんだ」

「特例だって？　そんなのがあるなら俺にもそれを適用してくれ」

「余程のことがなければ不可能だと言っておく。当たり前のことだが、面倒臭いとか、自信がないとかいう消極的思考を忖度してやれるほど甘くはない」

しっかり見透かされていたか、とシュイは呻いた。
その上で黙考する。裏を返せば、アルマンドの事情は上も認めざるを得ないほどの事情ということだ。ピエールやデニスなら知っているかも知れないが、今まで彼らがそのような話を口にしたことは一度もなかった。ということは、あまり大っぴらには出来ぬような内容ということだろう。
本音を隠さずに言えば少し気になったシュイだったが、無理やり聞き出そうとまでは思わなかった。自分とて公に出来ぬ事情はあるし、過去を掘り返されるのが鬱陶しいことくらいはわかる。

だからといって、それが自分が支部長をやる理由には結び付かない。支部長の業務がどれだけ大変かくらいは仕事振りを見ているだけでも察しが付く。荒くれ傭兵共を取り纏め、任務を円滑にできる環境を整え、地域社会との関係を良好に保ちつつ、何か問題があれば謝罪に回る。
――考えただけでぞっとする。
そんなシュイの心中を察しているのかいないのか、エヴラールは一人淡々と話を進める。
「後はおまえが署名してくれれば万事解決だ。実は偶然にもここにその書類一式があるんだが」
そう言って懐から羊皮紙を何枚か取り出したエヴラールにシュイは大きく頭を振った。
「全てお膳立てしていただいて恐縮だが、謹んで力一杯お断りさせていただく。俺みたいな若輩には身に余る大仕事だし、大勢のギルド員を円滑に動かすなんて真似どうしたって出来やしない。それくらい弁えている」
早口で捲し立てるシュイに、エヴラールはあくまで淡々と、落ち着いた声で応じた。
「そう言わないで引き受けてくれないか。何なら業務が軌道に乗る

までの間だけでも構わん。エレグスで活動している準ランカーは数少ないし、レッドボーンの件で上の方に顔が利くおまえが適任なんだ。給料面は言わずもがな、待遇はかなりいいんだぞ」

「金の問題じゃない。――要件はそれだけだな。では失礼する」

シュイはすくっと立ち上がり、早足で扉に向かった。

「お、おいっ、待て！　人の話は最後まで――」

語尾がドアの閉まる音に遮られ、エヴラールは溜息交じりに頭を掻いた。

「……あいつは。準ランカーになってもああいう所は変わっていないな」

エヴラールは苦笑しながらも再び椅子に腰掛け、もう冷めかけたカップを持ち上げる。

ややあってノックの音が響き、エヴラールが入室を許可した。部屋に姿を現したのはピエールだった。

「あれ、シュイのやつもう帰ったのか？　その顔からすると、やっぱいい返事は貰えなかったみたいだな」

「残念ながらな。全く強情なやつだ。――ところで、首尾の方は？」

「まぁ一応。……でもさ、こんなやり方して本当にいいのかなぁ」

ピエールは懐から丸めた羊皮紙を取り出し、エヴラールに手渡した。

「心配はいらん。これはあくまで通過儀礼、支部長になったやつの大半が通っている道だ。かくいう俺もマクレガー女史に嵌められた口だからな。俺にだって借りを返す権利があるはずだ」

「……悪しき慣習ってやつだな。半ば八つ当たり的な」

ピエールの突っ込みを華麗に無視し、エヴラールは紅茶を飲み干した。

「うむ、やはり紅茶はフォルストローム産に限る。そろそろ買い足しておかねば。――シュイとて一度決まったことを覆すことがどれ

だけ難しいか、フォルストロームの一件で身を持って知っているはず。後は俺とおまえが良心の呵責に苦しむだけで全て丸く治まる」

エヴラールはティーセットをテーブルの端に寄せ、筆立てから太筆を取って墨汁入れに浸すと、シュイ・エルクンドの名が書かれている以外まっさらな羊皮紙の一番上に大きく＞承諾書＜と書き足し、続いては細筆で適当な文章を綴っていく。

――説得力ねぇっすよ支部長。良心の呵責って言うならせめてそれなりの面してくれ。

どう贔屓目に見てもしてやったりとしか取れぬエヴラールの表情に、ピエールは次にシュイと顔を合わせた時の言い訳を考えながら憂鬱を吐き出すのだった。

～転機　the turning point3～

本部からシュイの滞在しているホテル宛てに指令書が届けられたのはトートゥ支部に赴いてから二週間後のことだった。ご丁寧にも本部所属のギルド員が直接飛竜に乗って届けに来た。準ランカー以上の傭兵に対してはこういった形で重要書類が届けられることがままあるのだ。

シュイは異動通知の文面に目を通し、何かの間違いではないかと思った。面と向かってきっぱり断ったはずなのに、肩書き部分には支部長の文字がしっかり書き加えられていた。

白髪混じりの年配の女性ギルド員の話を聞いている内に、いつの間にか承諾書にサインしたことにされていると知ったシュイは、トートゥ支部に呼び出された日の事を鮮明に思い出した。ピエールに渡された羊皮紙のこと、エヴラールの引き止めがやけにあっさりとしていたこと。その他諸々の状況を鑑みて、全てが仕組まれていたのだと気付いた。

こんな理不尽がまかり通るはずないとシュイは慌ててギルド員に事情を説明したのだが、期待していたような返事は貰えなかった。

ギルド員が語ったのは既に書類上の手続きが済んでしまい、エレグス側にもその旨を通達しているという現状。三週間後にはポリー支部の建物が完成するので、それに合わせて拠点を移すように、という指示。業務に慣れるまで特例で助言士（アドバイザー）を寄越すという備考だった。

最後に、新支部で働きたいという志望者のリストを手渡すと、ギルド員は颯爽と飛竜に跨り、シュイに反論する間も与えずに曇り空

へと飛び立った。
　シュイはみるみる内に遠ざかっていく黄緑色の飛竜を茫然と見送り、見失ったところで渡されたばかりの書類一式に目を向けた。やって良い冗談と悪い冗談がある、と思わないではなかったが、どうしたって現状が変えられるわけでもなく、辛うじてその怒りを押し殺した。
　けれども部屋に戻って書類を開いた際、指令書の推薦者欄に準ランカーの五人目として小さくエヴラール・タレイレンの名が書かれているのを見止め、持っていた書類が一人でに真ん中から裂けた。

　湧いて出た憂鬱に押し潰されそうだった。ニルファナが喜んでくれるだろうという前向きな考えもこの時ばかりは発揮されなかった。どこぞの建物内で傭兵たちの諍いを必死に仲裁している黒衣の男の姿が脳内で鮮明に映像化された。
　ややあって、両手で頭を抱えながら呻いているシュイの元にアマリスが顔を出した。
「やっほー、せんぱーい！　あれー、あんまり元気ないね。風邪でも引いた？」
「……アマリスか。あぁ、今日はティートも一緒なんだな」
　アマリスの背後からひょっこりと顔を出したのは双子の姉、ティートだった。背丈に顔形の特徴は妹のアマリスと瓜二つだが、周りに気を遣っているのか茶髪を長めに伸ばして区別出来るようにしてくれている。服装に関しても、アマリスはピンク色、ティートは水色の半袖ワンピースだ。もっとも、アマリスは微妙に釣り目、ティートは微妙に垂れ目なので、付き合いが長ければそれで判断することも可能だった。性格は二人共に明るいほうだが、活発なアマリスに対してティートは少しおっとりとしている。

この双子の姉妹は元々エレグスで活動するフリーの傭兵だったのだが、ある任務を一緒に行ったのをきっかけにして度々シュイと行動を共にするようになった。

一年と少し前にシュイが準ランカーに昇格し、傭兵の推薦権を得たのを期に、二人揃ってシルフィールに入りたいと言ってきた。シュイはその申し出を受け入れ、キャノエからトートゥに赴任したばかりのエヴラールと顔を合わせる機会を設けた。二人の傭兵としての経験（キャリア）はシュイよりも大分長く、魔道士としての実力も確かだということで比較的簡単な手続きを経てシルフィールへの入団が認められた。二人揃って登録時のランクはB。アマリスがシュイを先輩と呼ぶのはあくまでシルフィールの傭兵としてということであり、年齢は二人の方がかなり上だった。童顔なので一見すると十代のようにも思えるが、森族や魔族は二十歳前後から老化の進み具合が一気に遅くなるためそういったギャップはさして珍しいことでもない。

ティートはアマリスの隣に並び立つと軽く会釈した。

「よろしければ一緒にお食事でも、と思ったのですが。あ、そうでした。実は私たち、この度新支部のギルド員に選ばれましたの」

シュイが目を見開いた。

「新支部ってポリーか。そりゃまた奇遇だな。そういえば、まだリストに目を通していなかったっけ」

そう言って頭を掻くシュイに、アマリスとティートは同じ顔を見合わせた。

「奇遇って、もしかして先輩も支部で働くってこと？」

どこか期待に満ちた目を送ってくるアマリスに、シュイはきまり悪そうに破れた紙を摘んで見せた。二人は一瞬きょとんとしたが、すぐさま口元に手を当て、目を丸くした。

「新しい支部長って先輩なの！　すごーい、おめでとうございますー！」

「お祝い申し上げますわ。日頃の研鑽の賜物ですわね」
二人が自分のことのように喜んでいるのを見て、シュイはどんな顔をすれば良いのかわからなかった。
シュイの反応がいまいち鈍いのに気付いたティートが恐る恐るといったふうにシュイの顔を窺った。
「もしや、エルクンドさんが落ち込んでいるのってそれが原因だったりしますの？」
「……まぁな。何せ半年以上支部の業務に拘束されるんだ。罰ゲーム以外の何物でもない」
「せんぱーい。それはちょっと聞き捨てならないですよー。僕やティートと一緒に働きたくないってことですかー。あんまりですー」
不機嫌を隠さぬアマリスの口調に、シュイは曖昧な笑いを返した。
「……そう言われてもなぁ。大体、俺に支部長なんて務まると思うのか？」
「それは――どうだろね、ティート？」
即回答を丸投げしたアマリスにシュイは眉をひそめた。
「まぁ、いきなりは無理でしょうね。よちよち歩きの赤ん坊に走ることを要求するようなものですから」
歯に衣着せぬティートの物言いだった。率直な意見を聞けて嬉しいよ、とシュイは再び俯いた。
励ましのつもりで口にした言葉が全く伝わっていないのに気づき、ティートは慌てて言葉を付け足した。
「ちょっとちょっと、拗ねないでください。本部の方々だって馬鹿じゃありません。そういったことを熟慮した上で指名してきたのですから、いきなり成果を求められているわけではない、ということを申し上げたかったんです。実際、誰かがやらなければならないとしたらあなた以上の候補者を探すのは難しいと思いますよ。セーニア、若しくはルクスプテロンと関係を持つ傭兵ではエレグス側がいい顔をするとも思えませんし、それだけで候補者が大分絞られてしまうじゃありませんか」

理路整然とした説明に、シュイがようやく顔を起こした。

ティートの言い分には一理あった。実際、エレグスはセーニアとルクスプテロンの戦争に関しては中立を貫いている。戦争中の両国の出身者は数多く、要人と密接な関わりのある者も決して少なくない。そういった者が支部長になれば何かと周りに詮索されることも多くなるだろうし、或いは支部長本人からアプローチがあるかも知れない。騒動の火種を持ち込みたくないと考えていても何ら不思議ではなかった。

これまではエレグス領に支部が一つしかないということもあり、シルフィールの傭兵たちでこの近辺を活動拠点としている者はそれほど多くなかった。依頼を依り好みできるほどに仕事の数が多くないため、ランクアップするためのギルドポイントを獲得するのが難しかったためだ。現に、シュイもBランクに上がったのは早かったが、そこからAランクに上がるまでには一年半を要した。半年毎のポイント査定において、二回連続で昇格ポイントがぎりぎり足りなかったのだ。

勿論、共通クエストでもポイントは溜まるのだが、他のギルドに所属する傭兵と連携する機会が多くなる。顔も実力も知らぬ者と組めば当たり外れがある。シュイも魔物の捕獲依頼などでは連携が上手くいかずに対象を殺してしまったりといったことが何度かあった。そういったことが面倒に感じる者は無理にエレグスで活動することはせず、気の合った者同士だけで、他の国々で任務を行うというわけだ。

シュイもシルフィールに所属しているというだけでいちいち騒が

れたり疎んじられたりすることはままあった。だが、フォルストロームでの失態を考えれば、そんなことを気にしていられるほど心に余裕はなかった。ただがむしゃらに依頼の数をこなし、傭兵たちと交流を深め、少しずつ人脈を構築していった。結果として、アマリスたちを初めとして何人かの優秀な傭兵たちと知り合うことが出来ていた。エレグス国内に限定すれば、確かに顔が利くと言えなくもない。

渋々ながら納得した様子のシュイにティートが胸を張った。

「初めての経験で不安なのはわかりますが、私たちも出来得る限りフォローしますから。期限付きで助言者（アドバイザー）も寄越してくださるのでしょう？」

「何だ、知っているのか。だけど、アドバイザーってどういった人なんだろうな」

ティートが少し不安そうに首を傾げた。

「それは……支部長の業務をフォローするのですから当然傭兵でしょう。そういった組織運営の専門家に近い方ではないでしょうか」

「あ、そういえばその話、この前トートゥ支部の人から聞いた。何でも幼少の頃からそういったことに携わってた人みたいだよ」

アマリスの言葉にシュイは眉を上げた。

「それなら心強いな。それならいっそのこと、その人に丸投げしてしまえばいいと思うんだが」

「エルクンド支部長。あくまでポリー支部の最高責任者はあなたです。最低限の威厳は保たねばなりませんよ」

早速呼び名が変わっていることにシュイが口を窄めた。

「やるからには品行方正にして格調高い、地域一番の傭兵ギルドを目指したいところですわね」

「そーそー、僕たちのフォローがあれば支部運営なんてちょちょいのちょいだよ！　先輩は大船に乗ったつもりでどんと構えてて！」

意外にも乗り気な双子たちの力強さと頼もしさに、シュイはただただ苦笑いを浮かべていた。

～転機　the turning point4～

完成間近の建物内では威勢の良い声と金槌が釘を打ち鳴らす音が飛び交っていた。床にはロール状に巻かれた幅広の壁紙、鈍い光を放つ太い金属紐（ワイヤー）、はたまた黒い綿のような壁の緩衝材などが隅っこの方に纏めて置かれている。

「親方ぁ！　こっちの資材はもう片していいんですかい？」

「おぅ、運び出してくんな！　但し耐魔補強材だけは残しておいてくれよ！　後で仕上げに使うからな！」

迷彩色のつなぎに上半身裸、腹筋が綺麗に六つに割れた親方が木材に釘を打ち込みながら声を張り上げた。あちらこちらで鳴り響いている音が邪魔をして近くにいても声が聴き取り難いのだ。親方に負けじと小気味良く応じた坊主頭の建設作業員二人は鉄骨を何本か束ねた物を前後に肩に抱え、息を合わせて階段を下りていった。

一階のエントランス部分になる場所では数人の作業員が分担して床に汚れ防止の茶色い厚紙を敷いていた。更にはその上にロール状に巻かれた壁紙を引っ張って広げ、丁寧に糊付けしてから壁材の部分に手際良く貼り付けている作業員もいた。見る見るうちに積み重なっていたロール状の壁紙が減っていき、反して壁材の剥き出しだった部分が埋まっていった。

外へ通じる勝手口では、作業員が足りなくなった材料を補充するべく引っ切り無しに行き来していた。持ってくるのは紐や木の板などの補強材、或いは錐やカンナなどの大工工具だ。外観は窓も含めてほぼ完成しているように見えるが、内装の方は一階の一部を除いて手付かずのままだった。シュイたちのいる二階部分にも未だ壁紙が貼られていなかった。

内装に付いて意見を訊きたいとのことで、シュイはティートとア

マリスを伴って建設作業場を訪れていた。所々で壁紙、天井紙の色、或いは照明に使う魔法具を設置する位置などを訊ねられ、その都度要望を伝えていた。

本部から仕事を任されている大工たちの腕は超一流と言って差し支えなかった。１００?を軽く超えそうな鉄材を難なく片手で運ぶ者もいれば、風魔法で木材を等間隔に切断する者もいた。はたまた、強度を増すために金属同士を炎魔法で溶接している者も。

手の空いた者には親方やベテランと思しき大工が的確に指示を飛ばし、直ぐに新たな仕事が割り振られていた。流れるような分担作業には隙がない。作業の合間合間で話を聞いたところによると、彼らはエレグスやケセルティガーノなど、数多くの橋梁や城等の建設にも携わっているとのことだった。

城の作りは国家機密に等しいもので、三百年前に起きたジュアナ戦役の折には敵城の設計士が拉致されるようなこともあった。城を攻略する際は、建物の構造は勿論のこと、敵の脱出口、作りの脆いポイントなどを詳しく知っているのといないのとでは全然違うからだ。そういった背景もあり、セーニアやルクスプテロンなど、今現在戦時中である国からの築城依頼は全て断っているとのことだった。

大手のギルド支部は万が一の戦闘状況を想定し、城にも負けぬくらい頑丈に作られている。また、敵の攻撃魔法にある程度持ち堪えられるよう耐魔処理が施されていることも珍しくはない。長い年月を経て魔力を含んだ古木や、合金と魔法を掛け合わせた高価な金属、はたまた緩衝材にも抗魔石と呼ばれる魔石の一種を砕いた物を使用するため、通常の建物に比べるとおよそ三倍から四倍程度のコストがかかるのだ。

新しい支部の建物は機能性を高めるために通路を広くし、その分部屋数を少なくしてあった。玄関は解放感が感じられるように一階部分を吹き抜けにし、受付の両側面に階段を取り付けてある。勿論、

支柱部分に関してはしっかりと作られているし、梁の部分も太い物を用意して貰ったので強度に問題はない。

また、ティートの意見を聞き入れ、依頼受付日の混雑を解消するために一階と二階双方に受付を設置し、月曜日のみ一階部分では依頼人、二階部分では傭兵、というふうに分けることにした。

シュイたちが各所を回りながらその仕事振りに見惚れていると、頭に鉢巻を巻いた親方が階段を上ってきた。大工だけあって外仕事が多いのだろう、身体は満遍なく小麦色だ。上背も肩幅も相当な物で、体付きだけならランベルトやアルマンドにも劣らないように見える。

「おぅ、エルクンドさんよ！　一階の壁紙の貼り付けはあらかた終わったぜ！　他に何か注文はあるかい？」

シュイは親方が両手で広げた紙を横から覗き込んだ。細い線と太い線が混在した、支部全体の見取り図だ。一緒に確認してもらった場所には赤いチェックが入っている。他に見るべき箇所がないか探してみたものの、大方埋まっている感じだった。

「そうだな。あらかた注文は聞いてもらったみたいだし――と、何だ？」

黒いローブの裾をくいくいと引っ張られていたことに気付き、シュイは肩越しに後ろを見た。

「せんぱ……じゃなかった、しぶちょー。ギルド支部の建物ってどうも味気ないから、やっぱり二階だけでも壁紙をピンクにしたいな。あとあと、おっきぃ編みぐるみがあると雰囲気も和やかに――」

「――遊戯場じゃないんだぞ、アマリス。百歩譲ってやるとしてもギルド員の宿泊室くらいに――」

窘めるようなシュイの口調だったが、何故かアマリスは我が意を得たとばかりに頷いた。

「宿泊室なら良いんだね、わかった！　――あ、そこにいるお兄さ

んいい身体してるね！　手空いてる？　空いてるよね？」
　目の前で作業していた若い大工の手を半ば無理やり引っ張っていくアマリスに、シュイは腰に手を当てて溜息を付く。
「……ティート、すまないがアマリスが変な指示を出さないように監視を――」
「――カーテンは水色の基調に白い花柄で統一していただきましょうか。清涼感と可愛らしさを保てますし。そうですわ、飛竜や鳥獣（ワイバーン　グリフォン）も何頭か必要ですよね。私個人と致しましては鳥獣、それもルクスプテロンのものが毛並み豊かで一押しですわ。暖かい日差しをたっぷりと浴びたふかふかの羽毛にダイブすると幸福感もひとしおで――」
　滔々と力説しているティートにシュイは、やっぱりこいつら姉妹だな、と思わずにはいられなかった。彼女らの要望を全て呑んでいたらファンシーなテーマパークになりかねなかった。そして、その施設の代表者は他ならぬ自分自身だ。
　結局、シュイは大工たちに付いて回りながら二人が妙な要望を提案しないように見張らねばならなかった。あんたも色々と大変みたいだな、と背中を叩いてきた親方に、シュイは強い親近感と微かな疲労感とを抱いた。

――――――

　数日後、曇り空の下、シュイは街路の側から新築されたばかりの建物を見上げていた。外側はレンガのような赤褐色で統一してあった。塗りたてのペンキの匂いが少しばかり鼻に付いたが、自分があれこれと要望を出した建物の完成を目にするのは中々に感慨深いものがあった。
　支部の中に入ると、一目見て高級バーのような印象を受けた。天

窓が付いている高い天井には半球形の照明石が四本吊り下げられ、側面に設けられた二階への階段は外側に膨らむように緩やかな曲線を描いている。エントランスにある二本の太い円柱は、玄関側から受付のカウンターが見える程度に脇にずらしてあった。

一階の床には赤い絨毯が敷き詰められていたが二階はフローリングになっていた。完成した建物内を歩きながら何度となく感嘆の息を漏らしているシュイを横目に、親方は顎を撫でながら満足そうに頷いた。

「ここまで凝った建物はそうそう作らんからな。久々にやり甲斐のある仕事をさせてもらった。一応業務に必要と思われるカウンターや椅子なんかは最低限のものだけ設置しておいたぜ。後は新支部長の趣味次第だ」

「いや、素晴らしいものだな。一流の職人の仕事振りっていうのは」

階段の一段一段の幅や手すりの絶妙な高さ。紙の継ぎ目が全く見えない壁と天井。素人目にも細かい部分まで手を抜いていないことが分かる。下手に調度品を入れると反って美しさを損なってしまいそうだった。

「嬉しいこと言ってくれるねえ。そこまで明け透けに褒められると照れちまうじゃねえか。まぁ、働く場は違えどもこの腕一本で飯食っていることに変わりはねえ。最低でも向こう五十年は使えると思うぜ」

会話している二人の後ろではアマリスとティートがしきりに辺りを見回していた。二人が要望した部分がちゃんと反映されているか確認しているようだった。テーマパークにならない程度にはシュイも二人の意見を聞き入れていたため、それなりに満足そうな表情だった。

「やっぱり内装が入ると雰囲気変わるねー。しぶちょー、僕ここに住んでもいい？」

「あのねぇ、アマリス。ギルド支部に長期滞在することは基本的に認められていないのよ。大体あなた、もう支部近くの仮住まいの敷金、前払いしちゃったじゃない」

呆れ顔で指を振るティートにアマリスがぷくっと頬を膨らました。

「だってさー、ティートはこれを機に旦那と一緒に住むんでしょ。僕だって一人じゃ寂しいもん」

そう言って下を向くアマリスに、シュイは申し訳なさそうに口を開いた。

「悪いがそればっかりは無理だ。ここで働くギルド員は他にも何人かいるし、一人だけ特別扱いするわけにはいかない。それに、俺だってここに住むわけじゃないからな」

「あれ、何だ、そうなの」

拍子抜けした様子のアマリスに、シュイとティートは顔を見合わせて苦笑した。だが、直ぐにシュイは笑みを吹き消した。

五日後の月曜日にはいよいよ支部が開館する。いい加減、気を引き締めなければならない時期だった。新支部のギルド員は建物が小さいことも考慮し、アマリスたちを含めて十一人。果たしてそれで立ち回れるのかは未知数だ。

――依頼人、ちゃんと来てくれるのかなぁ。俺みたいな支部長がいるってわかったら逃げちゃうんじゃないだろうか。もしそうなったら黒衣を外すべきなのかな。うぅ、当日ちゃんと晴れてくれると助かるんだけど。おや、何だか胃の調子が……。

シュイは押し寄せてくる不安と仄かな期待に胸がざわつくのを感じながらも、来たるオープンの日を待つのだった。

～転機　the turning point5～

オープン当日、早朝から降り続いている霧雨が赤褐色の屋根を濡らしていた。エントランスでは新支部のギルド員たちが依頼人や傭兵を受け入れる準備に右往左往している。まっさらな依頼書を一定の厚さに纏め、書類記載用のテーブルに置いていく者もあれば、カウンターで顧客簿や筆記用具がちゃんと用意されているか確認している者もいる。

カウンターの内側では依頼書の選り分けをするために難易度のシールをそれぞれ棚に貼り付けてあった。高齢者や足腰の悪い者が来訪する可能性も考慮し、待機用の肘掛け椅子、移動用の車椅子をエントランスの窓際にいくつか並べてある。

仮にも傭兵ギルドなので、雑貨の大型店舗のオープンに使われそうなくす玉や門の飾り付けなどはしていない。いささか殺風景ではあるが、そんなことを気にする依頼人がいるとも思えなかった。彼らの大半は、自らが抱えている困りごとでそれどころではないはずだった。

湿気と混雑による蒸し暑さを和らげるため、窓は出窓も含めて開け放ってある。シュイは二階の窓からそっと外の街路を見下ろし、色取り取りの傘が長い列を作っているのに眉を上げた。天気が悪いからそれほどは来ないだろう、という予想は見事に裏切られていた。

支部の入口前ではトートゥ支部から応援にきたギルド員が整理券を持ち、通行人の邪魔にならぬよう外壁に沿って二列になるように誘導していた。列の末尾がどこにあるのだろうと視線を走らせるものの、街角のところで曲がっていたのでその先は見えなかった。

これだけの人たちが新支部の完成を心待ちにしていたのだという唐突な理解と、それだけに初日からの失態は許されないという気負

いが、シュイの脳裏を埋め尽くしていった。立ちながらにして、何枚もの布団を身体に掛けられているような重さを感じた。

シュイの後ろには、支部員用の紺の制服に身を包んだティートが手を添えるように組んで控えている。茶色い髪には念入りに櫛を入れてあるのか、普段よりも幾分滑らかだった。ちらりと背後の植木鉢に植わっている時計花を見計らい、花弁が白くなりかけていることを確認する。

「エルクンド支部長。そろそろ時間ですわ」

シュイは小さく頷くと窓から視線を外し、微かに震えている胸を抑えながら、ティートを伴って階段を下りていった。

一階受付カウンターの前では、ギルド員が整列してシュイたちを待っていた。二階から下りてきたシュイは列の中ほどまで進み出ると、ゆっくりと十人のギルド員に向き直った。後ろに付き従っていたティートも列の一番端に並んだ。

落ち着いている者もいたが、そわそわしている者の方が多かった。新支部ということもあって今回配属されたのは若い傭兵が多く、支部の業務に初めて携わる者も少なくない。

――緊張を解きほぐすのも支部長の役目、か。

自らの緊張を唾と共に飲み干し、シュイはギルド員の顔を端から端まで流し見た。皆の背丈が微かに伸びた……のは気のせいで、背筋を伸ばしただけだった。

「業務に関する説明は昨日やっているので端折らせてもらう。言うまでもないことだが、依頼を行うのは支部にやってくるシルフィール（ちう）の傭兵たちだ。我々はあくまでサポート側。依頼人と傭兵のやり

取りを円滑に進めることが第一目的となる。必要以上に気負う必要は全くない。今回は初日ということもあって専ら受付業務が主となるが、何かわからないことがあれば俺か、もしくは手の空いている受付経験者に訊ねてくれ。分かり易くするために経験者には胸元に金色のネクタイピンをしてもらっている。俺は基本的には二階の支部長室にいるが、席を外す時はティートに言伝をしておく。いない時には彼女に相談するように。ないとは思うが、探しても二人が見つからなかった場合は魔石での連絡も許可する。後は各々割り振られたローテーション通りに動いてくれれば何ら問題ない。ま、今日ばかりは休憩を取る暇もないかも知れないが。以上だ、何か質問はあるか？」

――よし、よーし、噛まずに言えたぞ。

シュイは人知れずフードの奥で満足げな笑みを漏らした。一方で、訊ねられたギルド員たちは、その殆どが目配せを交わし合い、誰かが手を挙げないか窺っているようだった。仮にもギルド員は皆Ｂランク以上の傭兵であるはずなのだが、その様子は他所様から借りてきた猫と言って差し支えない。或いは、初めての制服の着心地がそうさせているのかも知れなかった。

「しぶちょー、良いですか？」

元気よく挙手したアマリスの軽い物言いに、何故か何人かのギルド員たちがぎょっとした。

「ん、何だアマリス」

シュイは少しだけ目線を下げた。

「その……ちょっとくらい失敗しても怒らない、よね？」

頬を掻きつつ上目遣いをするアマリスにシュイは腕を組んだ。ギルド員たちはその様子を、固唾を飲んで見守っている。

妙な緊張感を肌に感じながらも、シュイはアマリスに口を開いた。

「誰にでも初めてはある。手を抜かずにやった上でのミスなら文句

は言わん。むしろ今回はミス前提だな。それくらいの気構えで臨んでくれていい。但し、ミスした原因はちゃんと考察し、繰り返さないよう努力するのは言うまでもないが」

「そっか！　うん、わかったよ！」

納得顔のアマリスに、シュイは腕を解いた。と、心なしかギルド員たちの表情が先ほどよりも明るくなっていた。質問してくれたアマリスに感謝しなければならないだろうか。そのような気持ちが芽生え、不思議と自分が感じていた緊張も先ほどより軽くなっていることに気付いた。

「では、そろそろ開館の時間だ。諸君、つつがなく任務に当たって欲しい」

「はい！」

小気味良い返事と共に、ギルド員たちが各所に慌しく散っていった。再びシュイが二階への階段を上がっていく最中、半球型の照明石が一斉に光を放ち始め、エントランスの大扉が軋んだ音を立ててゆっくりと開かれた。

依頼人の入館は拍子抜けするほどスムーズに行われた。依頼人たちは応援のギルド員の指示に従い、依頼書のあるテーブルへと移動し、記述し終えた者から受付に向かう。勝手知ったる者が多いようで、その流れからはみ出る者は殆どいない。ギルドには厳つい傭兵が居並ぶイメージもあるし、実際そういったギルドも数多い。どちらかと言えば一見様よりもリピーターが多く、冷やかしやクレーマーの類が現れることはまずないと言って良かった。下手に因縁を付けたところで叩き出されるのが目に見えているからだ。

開店から三十分後、四つの受付には早くも長蛇の列が出来ていた。遅れて入館を許可されたシルフィールの傭兵たちが続々と二階に上がり、早くも依頼書が貼り付けられた掲示板を確認している。

初めは舌足らずだった受付員も、段々とそんなことは言っていられなくなってきた。忙しさに引っ張られるようにして自然と口が回るようになっていた。

「畏まりました、メノア鉱石の採掘ですね。量が多いので期限の方に幾分余裕を取っていただきますが」

「難易度でいいますと相場はこれくらいですので、こちらの金額では少々厳しいかも知れません」

「ええと、ちょっと待ってくださいね。――すみません、ティートさん。現在のルクスプテロンへの輸送可能地域を教えて下さいませんか？」

「あぁ、それは区域の取り決めが細かくてちょっとややこしいので、こちらが終わったら私が対応しますわ」

一般には知られていないことだが、支部の業務に携わる者は全員Bランク以上である。ギルドが戦争や抗争などで恨みを買った場合、真っ先に襲撃されるのが支部であること。また、赤い魔石で救援要請された場合、事態を収拾するに足る強者が赴かなければ二次災害に発展することなどが主な理由だ。加えて、依頼書の受付の際、様々な依頼を数多くこなし、経験を積んだ者でなければ難易度や報酬などの正確な判断が難しいことも大きい。たとえばCランクと受理された依頼がAランクに類する内容だった場合、死傷者が出る事態に発展する可能性は大いにある。そういった人災を少なくするための措置である。

ティートは意外とそつなく対応している支部員の様子に目を細め

た。
――流石に皆さん優秀ですね。希望配属の方々が大半ですし緊張が解ければこんなものかしら。
「あのー、署名の訂正終わりましたけれど。これで宜しいでしょうか」
応対していた顧客に声を掛けられ、物思いに囚われていたティートが慌てて佇まいを正した。
「あ、はい。ええと、ええ、これで大丈夫ですよ。では受理しましたので、魔石での連絡がありましたらまたお越しくださいませ」
ティートは少し恥ずかしげに、しかしちゃんと微笑んで会釈した。

若い木の香りが漂う支部長室では、シュイが速記を駆使して纏められた書類をチェックしていた。
支部長室と言っても私物と呼べるような物はまだ持ち込んでいない。入って正面の日当たりの良い窓際には二人も十分使えそうなくらい大きな書斎机がある。窓を左右から挟むようにティートが指定した水色のカーテンが取り付けられており、それが殺風景な部屋を幾分明るく見せていた。右手には天井まで届きそうな木製本棚がある。絨毯は紺とベージュの四角い縁取りに赤紫のメダリオン模様。高級感のある色合いだが、近くの雑貨屋でアマリスが見つけてきた処分品だ。こと支部長室に関しては、彼女らの提案で悪くない感じに仕上がっていた。

支部長の仕事は色々あるが、取り分け重要な仕事が三つあった。一つ目は資金の管理。支部員に支払う給与や土地代、建物代などは本部から直接指定の銀行に振り込まれるので問題ない。しかしながら、傭兵が使う連絡用魔石の補充、建物の修繕費、清掃業者の手配など、支部の運営に必要な金額はかなり多い。逆に収入としては、

窓口で依頼受諾時に依頼人から手数料を仮払金という形で徴収している。その金額を差し引いたものが、掲示板に張られている依頼書の報酬ということだ。そうして集められた金は一定期間特殊な呪鍵の付いた金庫に厳重に保管され、本部から特定のギルド員がやってきた時に纏めて渡される。

二つ目は支部員の統率。彼らは仮にもBランク以上の傭兵である。つまり、統率する者にはそれ以上の強さ、威厳が求められるのだ。特に威厳という点においては年長者であることが望ましいが、シュイはニルファナの助力を経て年齢を偽った上でシルフィールに入ったため、現在は23歳の扱いだ。勿論、それでも相当に若い方なのだが、幸か不幸かエレグスでの知名度は高い。現段階では、支部員たちを統制しきれないなどということはなかった。

そして三つ目は――

部屋に籠もってから一時間ほどが過ぎた頃だった。ペンが小刻みに机を叩く音に交じってドアのノック音が鳴り響いた。

「しぶちょー、仕事中申し訳ないけどちょっと良いかな？」

「ああ、どうした？」

聞き慣れた声と呼び方に、シュイは書き終えた書類をチェックしながら応じた。

「二階の受付前で傭兵同士が揉めてるんだ。いい加減うるさいから僕がシメちゃってもいい？」

「なんだって？　このくそ忙しい日に一体何考えてるん――と、……しまった」

持っていた重要書類を無意識に握り潰してしまったシュイは慌ててそれを机の上に押し広げ、生じた無数のしわを丹念に伸ばす。

――やっぱり完全に元には戻らないか。くそぅ、これも全部そいつらのせいだ。

シュイはアマリスに了承の返事をしようとした。だが、考えよう

によっては、決然とした態度を示す好機と言えなくもないことに思い至る。シュイは肘掛けに両手を付いて立ち上がり、ドアに歩み寄ってノブを回した。

二階の受付前ではアマリスの報告通り、大の男同士の何とも不毛な言い争いが繰り広げられていた。

「さっき説明しただろうが！　それは俺が先に取った依頼書だぞ！　いきなり横からかっさらうような真似しやがって、一体どういうつもりだ」

「依頼書を取るのが早い者勝ちなのは暗黙の了解だ。次回から気を付けるんだな、ぼうや」

「てめえの目は節穴か！　俺が今磁石を外しかけていただろうが！」

「そうだとしても、ちゃんと紙を掴んでいないおまえが悪い。それと、下手に因縁付けると怪我するぜ」

二人は周りを取り巻く傭兵たちの鬱陶しそうな目線に気付く様子もなく、今にも掴み合いに発展しそうな雰囲気だった。

――み、見苦しすぎる。何なんだこいつら。

騒ぎの渦へと進みながら、シュイはフードの奥で頬をひくつかせていた。握られた拳が微かに震えているのを後ろから見て、アマリスは、床に血が付いたらやっぱり拭かなきゃダメかなぁ、とせんなきことを考えた。

～転機　the turning point6～

獣族の青年が手の平で胸を突いたのをきっかけにして、魔族の青年は依頼書を手放し、腰に下げている得物の柄に手を掛ける。
「こっちが大人しくしていれば図に乗りやがって。……いいだろう、ちょうど新しい業物の切れ味を試したかったところだ」
「はん、居合い使いか。この俺と迅さで勝負しようってか？　てめえが抜く前にケリを付けてやるぜ」
獣族の青年が両の手に嵌めた皮手袋を克ち合わせると澄み切った音が鳴った。手の甲の部位に保護用の金属板を縫い付けた実戦用グローブだ。体術に秀でている者が扱えば剣に負けず劣らず危険極まりない凶器となる。

熱くなっていく二人に対して周囲の傭兵たちの反応はどんどん冷めたものに変わっていく。一階の方では何の騒ぎだろうと頭上を見上げる依頼人が出始めていた。
事態を収拾すべく、シュイは一触即発の雰囲気に構わず、対峙している二人へと歩み寄っていく。周りに佇んでいた傭兵たちの何人かがシュイの姿を見止め、ひそひそと囁き合った。

「――そのくらいにしておけ」
脇から発された声に、睨み合っていた傭兵たちが鋭い眼光そのままにシュイの方を向いた。魔族の男はあまり変化を見せなかったが、獣族の男はいささかばつが悪そうな顔をした。彼はシュイのことをそれなりに知っているようだった。
ある程度の間を取り、シュイは二人の視線を受けたまま足を止める。

「元気があるのは結構なことだが、場も弁えずにこのような騒ぎを起こすとは自制心が欠如しているようだな。それでも栄えあるシルフィールの傭兵か。俺とて若い時分はもう少し分別を弁えていたぞ」
穏やかながらも凄味のある言葉だった。書類を書き直さねばならぬ苛々も相俟っているようだった。
「何だぁ、部外者がしゃしゃり出てくるんじゃ――な」

魔族の男が暴言を吐きかけるや否やシュイの姿が前に揺らぎ、その場に足音のみを置き去りにした。一瞬にして姿を消したシュイに男は目をまん丸にし、次いで何かが後ろ首を触ったのに気付く。
シュイが魔族の男の首を指の腹で左から右へ、つつと撫でた。取り巻いていた傭兵たちの大半は間近にいながら動きを捉えられなかったことが信じられぬようで、ただ瞬きを繰り返している。
シュイは魔族の青年の首に指を当てたまま、身構えている獣族の青年の方を向いた。冷然とした視線に中てられた獣族の青年がゆっくりと二歩後ずさりした。

「一階にはまだ依頼人が大勢いる。開館早々にギルドの悪評を広めるつもりか？　それは他の傭兵に対する迷惑行為、ひいては敵対行動に等しい。……わかるか、きさまらは今この瞬間、シルフィールの敵だ。そして、俺は敵を屠るのを躊躇わん」
先ほどとは違い、明らかな怒気をこめた低い声が場に響いた。発されたのは言葉ではなく畏怖そのものだった。二人共に、喉元に鋭利な刃が添えられたかのように呼気を止めた。逆らえばわけもわからぬうちに殺される。直近の動きを見てそれだけは理解しているようだった。

ふと、魔族の男の首から触れられていた感覚が遠ざかった。そうかと思うと視界に再びシュイの姿があった。刹那、圧迫感から解放され、二人が止めていた息を荒々しく吐き出した。

魔族の青年はシュイに何かされたと思ったのだろう。蒼白な顔をしながら後ろ首の辺りを手で確かめている。シュイは、内心では少々脅しがすぎたと思わなくもなかったが、観衆（ギャラリー）が静まり返っていることから判断するにそれなりの効果はあったと判断した。

「今回は門出の日ということで大目に見る。だがな、今一度此処でくだらん騒ぎを起こしてみろ。二度と傭兵としてやっていけぬ身体にしてやる。努々、忘れるな」

シュイはカッと踵を鳴らして二人に背を向けると落ちていた依頼書を拾い上げ、ついていた埃を手で払った。そうして人垣の中に混じっていたアマリスに依頼書を手渡し、廊下の奥へと消えていった。

――ま、あれだけ釘を刺しておけば、少なくとも支部で問題を起こすやつはいなくなるだろう。

後頭部で後ろ手を組み、機嫌良く口笛を吹きながら角を曲がる。と、支部長室の扉の前には予想外の来訪者がいた。シュイの姿を確認すると支部の制服を着た色黒の男はにこやかに拍手した。

「いやぁ、実に面白い見せ物だった。案外板に付いてるじゃねえか、支部長さんよ」

「……ピ、ピエール？　……おまえ」

唖然とするシュイに、ピエールは支部長室の扉に背を寄り掛からせ、きざったらしく指を振った。

「しっかしあの台詞だけは聴き逃せないよなぁ。言うに事欠いて『俺とて若い時分は』だって。……ぷっ……くっ……あっはっはっはっは！」

実に愉快そうな高笑いが人気のない廊下に響き渡った。ピエールが身体をくの字に曲げて苦しそうに腹を抱える傍ら、シュイの両拳が小刻みに震え出す。

「あは、あっはぁ、は、腹いてぇ。……ぷっくく……ち、ちっくしょー。直にタレイレンさんに聞かせてやりたかったなぁ。以前キャノエで一悶着起こしたこと忘れたの――ぐぇっ」

シュイは最後まで聴き終えることなくつかつかとピエールに歩み寄ると両手で襟首を鷲掴んだ。

「お、お、おんまえどの面提げて！　よくもこの前は騙してくれやがったな！　ええっ！？　お陰で俺がどんだけ――」

「――ちょ、ちょっ、待て！　落ち付けってシュイ！　キャラ違うから！　あれはうちの支部長たっての頼みで仕方なく――うわっ」

壁に押し付けてくるシュイの剣幕にピエールが小さく万歳しながら背を逸らす。

「あぁ、そういえば準ランカーになったんだって？　いやぁ、めでたい！　……昇進祝いにお一つ拳をくれてやる。大、重、強、選り取り見取りだ。さぁ、どれでも好きなのを選べ」

「うわぁ、どれにしようか迷っちゃう……って、選択の余地ねぇっ！　それ全部痛そうじゃねえか！　大体、手本となるべき支部長がのっけから暴力沙汰を起こしていいのかよ！」

「やかましい！　誰のせいでそうなったと思ってる！　あまつさえ仕事に忙殺されてる俺をここぞとばかりに笑いにきやがって、底意地悪いにもほどがあるわ！」

「……何だ、折角の晴れ舞台だというのに騒々しい」

脇から発せられた呆れ返ったような口調に逆撫でされ、シュイが振り向きもせずに怒鳴った。

「うるさい！　外野は黙っていろ！　少なくとも二、三発は殴らせてもらわにゃあこっちの気が済まん！」

銀髪から覗いた三角耳がぴくりと動いた。

「……久し振りの再会というのにそのぞんざいな口の利き様、少々いただけぬな。まぁ、ある意味新鮮ではあるのだが」
「の、呑気なこと言ってないで止めてくださいよ、獣姫様！」
「おいこら、てめえは助けを求められる立場じゃねえ――って」
聞き覚えのある固有名詞に、シュイがピエールを扉に押し付けたまま肩越しに振り向こうとした。が、その前に強く肩を引かれ、強制的に振り向かされた。一瞬にして切り替わった視界に収まっていたのは、見覚えのある少女の顔だった。

「……あ、え。あ……アミナ様？」
ピエールを手放していたことにも気付かずに、シュイが何とも間の抜けた声を出した。アミナは暴言を吐いたシュイを咎めるでもなく、つり目を縁取る睫毛をゆっくりと重ね、大きく溜息を付いた。
「存外気が利かぬな、そなたらは。外の国でまで姫扱いは勘弁してくれ。久し振りに羽を伸ばせる機会なのに気が滅入るではないか」
「あ……いや、その……」
シュイはアミナから目を離せなかった。だが、それは彼女が突然姿を現した驚きとはまた違う理由だった。魅入っていたという表現が正しかった。

濃い目の紺のトレンチコートの下には大きな胸ポケットが二つ付いた白いシャツ。ゆったりとしたベージュ色のチノパンを幅の広い革ベルトでややきつめに締めていた。どちらかといえばボーイッシュな服装と言って差し支えないが、くすみのない褐色肌をより際立たせる見事な着こなしだった。
シュイはアミナの容姿の美しさについては十二分に知っていたつもりだった。実際、背丈は殆ど変わっていないし、艶めく銀色の髪

も前に会った時と同じ、セミロングくらいの長さだ。敢えて違う点を挙げるなら褐色の肌に少しばかりのおしろいをしていることくらいだろう。

ただ、以前にも何度となくあったように、爛々と輝く赤い瞳が自分へと向けられているだけだ。にもかかわらず、胸の鼓動が音量を増していき、間隔が狭まっていく。かつて感じたことのない落ち着きのなさが強制的に引きずり出されていった。

「……ん、どうしたのだ？」

全く動かなくなってしまったシュイに、アミナが不思議そうに首を傾げた。我に返ったシュイは慌てて一歩下がり、姿勢を正した後で深々と頭を下げる。

「こ、これはお恥ずかしいところをお見せ致しまして！　私如きの就任祝いのために遠路遥々お越しくださるとは、いやはや恐縮でございます。手紙などをしたためていただければそれで十分でしたの――わっ」

アミナが下からぐいと、一歩踏み込んできた。離した距離が先ほど以上に、お互いの吐息が顔に掛かりそうなくらいに詰まった。シュイは顔が熱を帯びてくるのを感じた。

「むず痒うなるから敬語もやめよ！　なんぞ、そなたが口にすると尚のこと据わりが悪いわ。……というか、聞いておらぬのか？　タレイレンは説明済みだと言っておったぞ」

「せ、説明？　……何のことでございましょう？」

未だ敬語の抜けきらぬシュイが腹立たしかったのか、アミナは身体を起こして憤然と腕を組み、細い指先で肘の辺りを落ち着きなく叩き始めた。

「たわけ、支部の運営補佐をするという話であろう。基本的な手続きの順序を踏まえておかないと後々トラブルになるからな。国の内政に携わっている私に白羽の矢が立ったというわけだ」

「……え、それだけのためにわざわざ此処まで？」

何気なく出たシュイの言葉だったが、アミナの指の動きがはたと止まる。刹那、その指がシュイの眉間すれすれに突き付けられた。

「こ、断っておくがな！　本部に要請されたから仕方なしに赴いたのであって、別に久し振りにそなたの顔を見たくなったとかそういう浮付いた理由ではないのだ！　そこの所を勘違いしてくれるなよ！」

声を少しだけ裏返してしまったことを恥じたのか、アミナの頬が微かに紅潮した。それを尻目に、シュイはアドバイザーを派遣するという話を今更ながら思い出した。少し考えてみれば、幼少の頃よりそういった業務に携わっていそうな人物なんてシルフィールには数えられるほどしかいなかった。むしろ、アミナの名前が頭に浮かばなかったことが不思議でならなかった。

そして、はたと考える。今は支部長として威厳を示さなきゃいけない大切な時期だ。アミナと久し振りに会えたのは嬉しかったものの、このタイミングでの来訪を手放しで喜んでいいのだろうか。

シュイは、カリスマ性が限界値を超えていそうな凛々しき姫君を前にして、もし彼女と比較されたらどうしよう、と大きく肩を震わせるのだった。

～試練　ａ　ｔｒｉａｌ　ｇｒｏｕｎｄ～

いつものように支部長室の椅子に座り、黒い万年筆を手に必要書類と向き合う。本日分は冊子で纏めねばならないくらいの量があったので気持ち速めに筆を走らせる。

紙を捲る音に反応し、ちらりと隣に視線を送る。目の先には支部員の制服を着たアミナがいた。隣の応接室から持ち込んだ椅子に、気持ち浅めに座っている。大人の握り拳くらいの厚さはありそうな本を広げ、時たま目元に移動してくる銀色の前髪を手で横に払いのけている。

アミナが真剣な表情で読み耽っているのはエレグスの法律書だ。表紙に書いてあるサブタイトルには刑法という文字が確認できる。ブックカバーも豪奢でそこいらの本屋で購入すれば軽く数万パーズはしそうな代物である。

フォルストロームの国政に携わっている彼女としては、外国の法律でも適用できそうな物ならば取り入れたい、ということらしい。頁を捲ってはしきりに目を走らせ、納得したように何度となく頷く。先ほどからその一連の動作を延々と繰り返していた。無為な時間を作らずに一時でも学ぶ。それが彼女の指針であるようで、アドバイザーの仕事中に空いた時間を持て余している様子はついぞ見受けられなかった。

ややあって、アミナが本にしおりを挟んだのを見計らい、シュイが机から既に書き終えていた紙を束ね、トントンと纏め上げた。

「アミナ様、これで宜しいかどうかチェックを――」

「――宜しくない。様付けはやめよと何度言わせる気だ」

アミナがぷくっと頬を膨らませた。何気ない仕草、しかし以前には殆ど見られなかったものだ。それを意識するだけで、胸が内側から叩かれている気分だった。

束の間その怒り顔に見惚れてから、シュイは恐縮した様子で書類を差し出した。

「も、申し訳ありません。それで、この書類なのですが」

「敬語も却下だと言っておろう！　そなたは私の部下ではないのだぞ」

一層語気を強めたアミナに、シュイは苦笑を返した。

「せ、せめてこれくらいは許してください。その、あなたは私が尊敬しているランカーの一人ですし……」

シュイがそう言うとアミナはふむ、と相槌を入れる。だが、その後の言葉が続かなかった。ややあって――

「――ん、何だ。それだけなのか？」

そうアミナが言った。

「と、申しますと？」

シュイが全く意図の見えぬ問いに不思議そうな顔をすると、緩みかけたアミナの口が再び真一文字になった。

「――もういい。早く寄越せ」

言うが早いか、アミナはシュイの持っていた書類を片手でひったくるように奪った。

――手の動き速っ。辛うじて見えたけれど、避けるのは一筋縄ではいかなそうだな。

以前にも増して洗練されたアミナの動きに付いていくには、目で追ってからでは間に合わなそうだった。シュイは、自分が弛まぬ修練の末に身に付けた力には自信を持っていたにせよ、アミナと本気で遣り合った場合、おそらくは負けるだろうと読んでいた。手心を加えてしまうとかそういった理由ではなく。こちらがエレグスで力

を付けている間、彼女もまた遊んでいたわけではなかったということだ。純粋な力量差は縮まっているという確信があったが、それでも肉薄しているとまでは言えない。日頃の何気ないやり取りからも、彼女が決して名声だけでランカーになったわけではない、と思い知らされることがしばしばだった。

「良く出来ている。物覚えは悪くないのだな」

褒め言葉を口にしたアミナだったが、その表情はお世辞にも機嫌が良さそうには見えなかった。シュイはそれに気付いた様子もなく、微笑みを浮かべながら差し出された書類の束を受け取った。

「ありがとうございます、アミナ様！」

「――前言撤回」

アミナの低い呟きに、シュイは心底申し訳なさそうに頭を下げた。

――――――

新支部開館から一月あまりが過ぎていた。シュイはアミナの助言を受けながら日々支部長の業務に追われていた。

彼女は、支部にやってきてから数日ほどはホテルに泊まっていたそうだが、今現在はアマリスの借家に居候している。物怖じしない性格であるアマリスはただ同居人ができるということで喜んでいたし、アミナも自分を特別扱いしないアマリスに好感を抱いているようだった。最近ではちょくちょく二人で行動している姿を目にするようになっている。

仕事の方はと言えば、ようやく軌道に乗り始めているといった所

だ。ポリー支部はトートゥ支部以外とのやり取りは殆どない。支部が密集している場所では連携を取ったり相互で助けあったり出来るメリットもあるが、その分手続きに提出する書類の数も倍増する。

また、支部員を選定する際に古参の傭兵ばかりである場合、新参の支部長は得てして軽視されがちなので、新支部のメンバーは準ランカーのシュイを除いて皆Bランクで統一されていた。それらの点は新しい支部長となったシュイに対する本部の配慮であり、そうした方がトラブルは起きにくいという含蓄でもあった。

その甲斐あってか、シュイと支部員たちとの関係は概ね良好だった。これについてはティートとアマリスの存在も大きく、意見のある者には彼女たちが仲立ち、或いは同伴して申し出てくれることが少なくなかった。落ち着きのあるティートと人当たりの良いアマリスはシュイの足りない部分を補ってくれていた。シュイはそうした機会を作ってくれる二人に感謝しつつ、あまり顔を合わせていない支部員を昼食に誘うなどして会話の機会を増やすことで信頼関係を築いていった。

シュイが危惧していたアミナの参入についても、今のところは良い方向に働いているようだった。一国の姫君にしてランカーたる彼女が補佐に来るほどに、シルフィール内ではシュイ・エルクンドの評価が高い。そう周りの者たちが勝手に判断してくれたためだ。実際、アミナも一時的にとはいえ支部に務めるのは初めてだったようで、制服を手渡す時には何とも興味深そうな、はにかむような表情で三角耳をぴくぴくと動かしていた。

残る懸念としては支部員同士の人間関係が上手くいくかという点だった。人が一箇所に寄り集まれば総じて相性というものが出てくるものだからだ。だが、幸いなことにポリーの支部員になった傭兵は温厚な者が多かったようで、彼らの関係が表立ってこじれる様子は見受けられなかった。

その一方で、仕事の方は全てが順調にいっていたわけではなかった。見聞きしてある程度は知っているつもりだったシュイだが、実際やってみるとなると想像との落差に戸惑うばかりだった。

シュイ自身はニルファナがCランクから推薦してくれたこともあり、緊急クエストは別として今まで依頼を達成できなかったことはなかった。難易度の低い任務から徐々に格上げしていったことで、任務への対応能力が知らぬ間に上がっており、自分の能力も正確に評価することが出来ていたからだ。

けれども、支部では一日に何十件、多い時は百を超える依頼が傭兵たちに回される。依頼を引き受ける傭兵たちとて常に十全の状態で任務に臨むわけではないし、こなせる任務ばかりを選択するというわけでもない。数は少ないものの達成できないで終わる依頼も出てくる。

背伸びして難しい任務を受けた者が失敗するのは当然として、指定された期限に間に合わなかったり、討伐対象とは違う魔物に遭遇してしまったり、天候の悪化によりやむなく断念せざるを得なかったり、とその理由は様々だ。

そうした場合には改めて他の傭兵に回すか、そうでなければ手数料を返却することになる。依頼人たちとて藁をも縋る思いでやってくる者が多いので、達成できなかった場合でもあからさまに怒鳴り散らしたり落胆して見せたりすることはあまりない。が、裏を返せばほんの少しはある。責任者を呼べっ、と怒鳴り散らす依頼人に対しては支部長が出向く必要があるわけだ。

謝罪するのも重要な仕事のうちだが、ここにきて責任者の威厳は

重要なポイントとなる。誰もが道を譲りそうな強面、多くの修羅場を潜り抜けて醸し出される風格などは、相手の怒りを鎮めるのに役立つのだ。

普段、道で擦れ違いそうな時に目を合わせないよう気を遣う相手が自分に向かって頭を下げていると思うと、恐縮すると同時に虚栄心が満たされて自然と溜飲が下りる、というわけである。

シュイは、自分では容姿、佇まい共に迫力に欠けていると思っていたので、黒衣を着用したまま対応した。魔法使いの服装としてはポピュラーなのでこの点を咎める者は殆どいない。フード付きという点に関してはあまり快く思われないかも知れないが、シュイの名声、悪名を考えた場合、強気に出られる可能性は著しく低い。後は如何にそれらしく振舞うか、ということになるが、傭兵になってから三年近くが経つだけに、そういった立ち振る舞いは自然と身に付いていた。

だがそれでも、王族であるアミナの身振り手振りは非常に参考になった。相手を立てつつ威厳を崩さぬ方法を、彼女は飾ることなく体現していた。シュイはそれを時に模倣し、時に見習ってアレンジし、自分の物にしていった。

そうして土台が均(なら)されていき、次第に歯車が噛み合い始めたある日のこと。ティートが、彼女にしては険しい顔をして支部長室を訪れた。その手には、二枚の手紙が握られていた。

～試練　a　trial　ground2～

「――イヤデス」

口を尖らしていたことまではわからなかっただろうが、口調で気持ちは十二分に通じたのだろう。ティートの目つきが鋭さを増した。室内の空気がきな臭くなり始めたのを勘付いたのか、支部員の男が失礼します、と言い残してそそくさと退散する。

現状、ティートはアマリスと共に総務を一手に引き受けている。生真面目な性格をしているが背が低く、童顔なこともあっていささか迫力に欠けるので、怒った表情にも微笑ましさが付き纏う。仕事中は茶色の髪を纏め上げているが、これまたアンバランスなので反って子供っぽく映る。『そこが良いのだよ！』と声高らかに語る傭兵も多いのだが、既に人妻だということはポリー支部の、それもごく一部の者にしか知られていない。

ティートは我先にと逃亡した支部員の閉めたドアを睨みつけてから再びシュイに向き直った。

「そんなことを仰らないでください。本部からは再三要請が来ているのでしょう？　文体も丁寧だったのが段々と荒くなってきていますし。こちらを見て下さいよ」

諸手に掲げられた二枚の手紙には、上部に〈試験官の依頼状〉と記載してあった。ティートが支部長室を整理している時に見つけ出されてしまったものだ。片方の手紙の書き出しは「春爛漫が云々」と書かれているが、直近であるもう片方の手紙には「こちら側から乗り込むまで動かない気？」とある。

「確かに、荒くなっている」

鷹揚に頷くシュイに、ティートはその程度の反応か、と不満顔だ。
「確かに、じゃありません。いつまでも急用や仮病で誤魔化し切れるものではありませんよ。そもそもBランクになったら誰でも通る道です。エルクンドさんに推薦をいただいた私やアマリスだってやってるんですよ。ましてやあなたは既にAランク。これ以上放置しておいたら支部全体の評価にも影響しかねません」
机に置いた書状を指差して説教するティートから、シュイは少しだけ視線を逸らした。

シルフィールの傭兵になるには大まかに分けて二通りの方法がある。一つは準ランカー以上の傭兵から推薦されること。シュイもランカーであるニルファナ・ハーベルに推薦状を出してもらうことでシルフィールに入団している。
そして、もう一つは選抜試験を受け、それに合格すること。抜擢された試験官が取り決めた試験に合格し、傭兵に要求される最低限の能力基準を満たした者だけが晴れてギルドに入団を許される、というわけだ。取り分け、四大ギルドと言われているフラムハート、ミスティミスト、シルフィール、アースレイの試験は相当に厳しく、合格者がゼロであることも珍しくない。
シルフィールでは年に二回試験が行われているが、その際には支部員の規定と同じくBランク以上の傭兵が試験官、或いは試験監督として駆り出される。依頼の難度の基準をある程度知っていないことには適正な試験が出来ないからだ。大半の者はBランクになって間もなく本部から通知が来る。シュイもその通知を何度か受け取ってはいたのだが、何かと理由を付けては参加を拒み続けていた。

「誰もが通る道を無理に通る必要はない、そうは思わないか。道なき道を切り開く、それもまた傭兵也、だ。他の不特定多数に任せて

おけばいい」

ティートは一瞬ほぅと感嘆しかけたが、続いては湧いて出た考えを振り落とすかのように首を左右に動かす。

「か、格好良いこと言っている振りしたってもう騙されませんからね。そんなのただの屁理屈じゃないですか。それに何ですか、不特定多数って。責任の押し付けは感心できませんよ」

机の上にまで身を乗り出してくるティートに、シュイはキャスター付の椅子を少し後ろに引いた。赴任した当初は言い包められてくれていたティートだったが、最近はどうも切り返しが厳しくなってきている。慣れというのは恐ろしいものだ。

「そう言われても。いいか、人には得手不得手というものがある。試験官なんざ間違いなく俺には向いてない。鋸（のこぎり）で薄紙を切るようなものだ。前提からして間違っているんだよ」

傭兵になってから三年が経ったが、年数から言えばせいぜい中堅どころだ。人生経験に至ってはひよっこ同然だろう。そんな未熟な傭兵に判断される受験者たちの不遇を、シュイは切々と訴える。

加えて、見出した傭兵が後々問題を起こせば責任の所在を追及される可能性もある。自分が一時ニルファナ・ハーベルの名を貶めてしまったようなことが起こり得るのだ。或いは、実力不足を見抜けなくて任務中に死なれたりしたら後味が悪いことこの上ない。

順序立てて説明するシュイに対し、ティートは何ら動じることなく言葉を返す。

「受験者だって傭兵になることを目指すのですから生き死にの覚悟くらいしているはずです。向いていようがいまいが関係ありません。大体、向いていないなら尚更やらなきゃ克服できませんでしょ。エルクンドさん、もうBランクに上がってからは二年以上ですよね。普通は一年以内にやるんですよ、一年以内」

やたらと時間を強調するティートに、シュイはもうとっくに過ぎ

ているから時効でいいじゃないか、と鼻梁を擦る。
「もっともらしいことを――」
「――らしいじゃなくてもっともなことです！」
語気荒く机を叩いたティートにシュイは腕を組み、考える素振りを見せた。やっとわかってもらえたか、と口元を緩めたティートにシュイは重々しく頷く。
「――よしわかった。あと一年経ったらやるよ」
「何がよしか！　考えた結論がそれかい！　……じゃなくて、駄目ですって！　これ以上引き延ばすのは無理です。後生ですから受けて下さい」
一瞬地が出かけたティートにシュイが苦笑いした。それにしても後生とは少々大袈裟だと思う。
「まことに気の毒な話だ。俺も胸がキリキリと痛む。一先ずは、今日の依頼を見てから決め――」
「――キリキリ痛むのは胃ですし穴が空きそうなのもこっちです！　……おまけにその他人事（ひとごと）のような仰りよう！　……わかりました、やむを得ませんね」
やっと諦めたか、と胸を撫で下ろしたシュイに、しかしティートが想定外の二の句を継ぐ。
「私としては穏便に済ませたかったのですが――この件に関してはハーベルさんに報告させていただきますわ」

立ち上がりかけていたシュイがそのまま硬直した。見目麗しい赤髪の女の顔が脳裏を過り、しかし自然と瞬きの回数が増した。
「な、なんだって脈絡もなく彼女の名前が出てくるんだ」
僅かに動揺したシュイを見止め、ティートは勝利を確信したかのように胸を張る。
「言っておきますけれどしらばっくれても無駄ですよ。つい先日アミナさんから教えていただいたんです。ハーベルさん、エルクンド

さんが傭兵になった時の推薦人なんですってね。偉大な先輩からサボリ魔の後輩に一つ苦言を呈して貰おうかと思いまして。どうです、素晴らしいアイディアだと思いませんか」

シュイはティートの言葉に愕然とした。

――あ、アミナ様。何と余計なことを吹き込んでくれたのですか。

顔の筋肉に力をこめ、シュイは平静を装うべく何とか笑みを作った。されども、表情がフードで隠れているということを失念していたが。

「別に、彼女が耳にしたところでおろ、俺には関係ないね」

言いかけた途中で噛んでしまい、これじゃあ本当に動揺しているみたいじゃないかと歯噛みする。やたらと汗を掻いているのは黒衣を着ていて、尚且つ室内が蒸し暑く感じるからであって決してびびっているわけではない。涙ぐましくそう自らを納得させようとしているシュイに、ティートが容赦なくとどめを刺す。

「あなたが誰かを恐れているとは申しません。ただ、皆が渋々ながらもやってくれている任務を一人だけやらないのでは、推薦人としての彼女の面目が潰れてしまうのでは？」

シュイがぐぬぬ、と苦しげに呻いた。あっさりと言葉少なになったシュイを見て、むしろティートの方が抜群の効果に戸惑っているようだった。

「……えっと、ああそうそう、たった一カ月です。休暇（バカンス）として行くのも一興ではありませんか」

ティートは軽くそう言ったものの、支部長になったばかりだというのに山のような仕事に手を付けられないのはかなり痛い。というのは建て前で、試験官などという面倒臭そうな任務に拘束されるのがひたすら、とことん嫌だった。

だがしかし、支部長としての威厳を醸し出さねばならないこの大事な時期に、アミナだけでなくニルファナまでもが来てしまったら。

逆らえぬ人が二人もいたらなけなしの威厳など風前の灯だ。
今はまだ支部にアミナがいるしティートやアマリス他、支部の傭兵たちが事務方面にも優れた力を発揮してくれるので留守を任せるのは問題ない。そういった事情を考慮するに至り、突っ撥ねるのはどうにも得策でない気がしてきた。苦渋の判断だが、背に腹は代えられない。

「……本当に、一カ月きっかりで終わるんだろうな？」
シュイは渋々ながら敗北宣言に等しい言葉を口にした。
「終わらなかったら代理の者を回しますよ。では、受諾ということで処理しておきますね」
シュイが次の言葉を発する前に、ティートは笑いを噛み殺しながら返信状にポンと支部長印を弾ませた。禁句（ハーベル）を用いた彼女に、シュイは口を噤んだまま、ただ犬のような唸り声を上げるのだった。

～試練　ａ　ｔｒｉａｌ　ｇｒｏｕｎｄ３～

シルフィールの傭兵試験は毎年二回行われている。事前に選ばれたＢランク以上の試験官の中から試験監督を決め、受験者が傭兵となるに相応しい者かどうかを見定める。その内容に関しては、何段階かに分けて行う者もいれば一度で済ませてしまう者もいる。どちらにしても共通して言えるのは、優しい試験だった試しがないということだ。

最近の世界情勢がきな臭くなってきたこともあり、傭兵の選別にはかなり気を遣う必要があった。ギルドの名を背負った者に他勢力との諍いを起こされた場合、その影響は計り知れないからだ。最悪、敵対するのは大国の精鋭部隊や他ギルドの上級傭兵たちであり、勝敗はともあれ被害の拡大は避けられない。

勿論、生半可な者を傭兵にするのは問題外。直ぐに殺されてしまうような傭兵を仲間にしても意味がない。最低限、緊急時において自衛くらいはできる者を選ばなければならなかった。

フォルストロームから遥か西の海に浮かぶファムラヴ島。エレグス王国から見ると南南東に位置し、二カ国間の海路を結ぶ補給地点として使われている。今年度シルフィールの傭兵試験を行うことになったエレグスの直轄地だ。

深い群青の映える海と鮮やかな緑に覆われた雄大な山々。こと風景に関して言えば非常に素晴らしい所なのだが、それ以上に近海で座礁する船が多いことで知られている。栗のような形をしている大きな島は広域の暗礁に囲まれており、近年に発見された北側からの進入経路を除いては近づくことができないという船乗り泣かせの場

所だ。そのような事情から人の手が入るのが遅かったため、未開の地と言って差し支えない。

また、島の中央にある山へ近づくほどに強力な魔物と遭遇する確率が高くなる。飛竜や鳥獣などで空から向かおうとしても山に近づくことは出来ない。本能が大きな危険を感知しているのだろう、乗り手の命令を振り切ってでも引き返そうとする。飛竜や鳥獣も魔物としては強い部類に入ることから、あの山には途轍もない力を持った魔物がいるのでは、という専らの噂だった。名高い冒険者や魔物討伐を生業とする者が一目見よう、あわよくば退治してしまおうと勇んで島の奥へ進んでいったが、再起不能に陥った者、戻ってこなかった者も数知れない。

このような危険地域が試験の場として指定されるのはさして珍しいことではない。それどころか、有力ギルドの試験場は大概が危険地域に指定されている。そういった場所を選ぶだけで、腕に自信のない者、躊躇してしまう者の参加を避けられるためだ。結果として、危険地域で取り行われる試験を切り抜けられる自信のある者。或いは、内的葛藤を呑み込んででも傭兵になろうとする気概のある者のみが集う。まずは候補地に来れるか。そこから試験が始まっているというわけだ。

シュイはシルフィール本部から送られてきた地形図と片手に収まるくらいの方位磁針を頼りに、ポリー支部で飼育している鳥獣に跨り、現地へと向かっていた。

鳥獣には元々帰巣本能が備わっているが、広大な海を越えるにあたっては万が一ということもある。地図と天候を定期的に確認しながら進まねばならない。陸地なら適当なところで降りて休むことが可能だが、海では島を探さねばならないためなるべく諸島の近くに

針路を取りながら飛ぶ必要がある。特に台風の時節柄はより気を配る必要があった。

顔に強い潮風を受けながら、シュイは手に持っている地図と今いる景色とを照合する。当然フードなどは風で外れているがお構いなしだ。眼下にはゆっくりと島が足元へと近づいては背の方へと抜けていく。それなりの高さに上がらないと鳥獣が乗れるような気流が吹いていないため、眼下にある海面までは目の眩むような距離が開いている。時たま進路がずれる度にシュイが手綱を軽く引くと、鳥獣は白い大きな翼を数度はためかせ、シュイの命令通りに進路を元に戻す。

「シュイ、試験の内容はもう決めたのか？」

ふいに耳元で呼ばれたシュイは視線を動かさずに応じた。

「それが、あまり良いアイディアが浮かばなくて。それよりアミナ様が――」

「アミナが」

「ええそう、アミナが付いてくる必要はあったんでしょうか？」

そう言い、シュイは肩越しに後ろを向こうとした。が、それより早く背中を頭で小突かれた。

「仮にも一国の王族である私が支部長をやっては色々と摩擦が生じるだろう。それとも何か？　そなたは遠方まで羽を伸ばしにきた私を支部長の仕事で忙殺させたい、と鬼畜なことを申すのか？」

自分の腰にしっかりと掴まっているアミナに、シュイは視線を前に固定したまま身体を揺らさぬように首を振った。

「め、滅相もありません。ただ、支部長不在はまずくないかな、と」

ポリー支部が開館してからまだ二カ月足らず。シュイはアミナがいるから大丈夫だと考えて試験官の任務を受けることにしたのだが、彼女が自分に同行するとは予想外だった。自分がいない間に不測の事態が生じなければいいが、とシュイは気を揉んでいた。

アミナは眼下の水面の煌きに目を細める。
「支部長が業務に拘束されるのは半年間であろう。当面支部として機能していれば何ら問題ない。それに、そなたも承知の通りエレグスにはフリーの傭兵が多いからな。トートゥの支部と仕事を折半することをも鑑みれば厄介な依頼が入ってくることはそうないだろう。あくまで他の国と比較すれば、の話だが。仮に厄介な依頼が入ってきたとしてもトートゥ支部に流してしまえば良い。向こうとて支部の新設で大分負担が軽くなっているだろうし、それくらいしても何ら問題はあるまい」
説得力のある説明に、シュイは頷くばかりだった。そもそもピエールやエヴラールのせいで自分が支部長をやる羽目になったのだ。多少の仕事を押し付けたところでばちは当たるまい。
「それで、具体的にはどのような試験を考えているのだ？」
「実は、シルフィールで取り扱われている依頼を実際にやらせてみようかと考えているんですが……」
アミナはほぅと感嘆し、紅の目を爛々と輝かせた。
「なかなか面白い試みではないか。それでこれほどの荷物が必要になったというわけだな」
アミナが肩越しに後ろを見た。視線の先には大きめの黒い箱が置いてあった。落下しないように四方から鳥獣の胴体毎太い二重紐で括りつけられている。
「他の試験官は万が一の事態に備えたサポート役というところか」
「ご明察です。でも、どんな依頼を選ぶかが問題で……。シルフィールの名を背負う以上ある程度の能力は必要ですし、どれくらいの基準を満たしていればいいのか。ここ数年の試験の難易度を見て設定しようと思っているんですが」
アミナはふむ、と顎を下げた。
「少々高望みではないか？」

「え、そうでしょうか」
アミナは首を傾げるシュイの脇からひょいと顔を覗かせた。
「ならば訊ねるが、そなたは入った当初からシルフィールの名を背負うに足る傭兵だったか？　そうだったと胸を張って言えるか？」
「……う」
強い視線に、シュイはばつが悪そうに佇まいを正した。散々ニルファナに迷惑を掛けた手前、そんなことは口が裂けても言えなかった。
「純粋な戦闘能力であれば、出会ったばかりの頃のそなたでもそれなりのものだったと思う。だが、今のそなたとは比べるべくもない。何より、周囲を間断なく支えられる視野の広さ、周りの者が寄り掛かれる心根は、以前のそなたには備わっていなかったものだ」
「そ、そうですか。恐れ入ります」
シュイは恥じ入りながらも小さく頷いた。
「そうだな、こう考えてみてはどうか。そなたが独立して新たにギルドを立ち上げるならば、どんな仲間が欲しいか」
「ギルドを立ち上げるって、……私がですか？」
「阿呆、たとえばの話だ。何も今までの傾向に縛られることはなかろう。端的に言えば、純粋にそなたが一緒に任務を行いたい、そうと思える者たちを選べば良いのではないか」
アミナの指摘は簡潔にして的確だった。試験が行われる度に試験監督を変更しているということからは個性を尊重する意図が見えてくる。前任者の選別観に縛られてはその意味も薄い。自分がどの能力に主眼を置くかで、選び抜かれる傭兵候補は相当変わってくる。
「そうか、それなら大分絞れるかも知れない。ありがとうございます、何となくイメージが掴めそうな気がしてきました」
シュイは再び前に向き直り、水平線の先へと視線を走らせた。シュイが何かしら考えに耽っているのを察したアミナは、小さく息を付くと右手の方を眺めた。水平線のほど近くには筋状の雲が横に四本、空に白い引っかき傷を作っていた。後方には既に陸地は望めな

い。ファムラブ島に大分近づいているようだが鳥獣の疲れも出てくる頃だった。そろそろ一旦休憩を挟まねばならないか、とアミナは近くに小島がないか周囲を見回し始めた。

「そういえば、こんなに長く国を空けてしまって大丈夫なのですか？」

「キーア王は未だ壮健であらせられるし重臣たちも優秀だ。特に問題はない。見合い話を断るのも面倒だしな」

シュイが瞬時に振り向いた。顔から驚きが滲み出ているのを見て、アミナは満足そうに胸を張った。

「何だ、意外か？　私はこれでも結構もてるのだぞ。ここ半年ほどで１０を超す見合い話がきている。いい加減断るのもうんざりなのだがな。昨今はセーニアからの誘いがしつこいのだが、まぁ色々な思惑もあるのだろう」

「セーニアから……」

シュイの語気が弱まったことに気付いたのか、アミナが僅かに頬を緩めた。

「何、心配せずとも適当にあしらっておいた。政略に利用されるなど、ましてや非戦闘員を惨殺するような連中と契るなど真っ平御免だからな」

その言葉を聞いて、シュイは裡に感謝の心が芽生えるのを感じた。以前打ち明けた身の上話をアミナが未だ覚えていてくれたことに。

「ああ、いえ。本当に気に入った方がいるのでしたら私は……」

言い終えるより早く、アミナが眉をひそめた。

「何だ、そなたは私が他の男とくっついても何とも思わぬと申すのか？」

「い、いえ。少し嫌ですけど」

「な、……む」

おおよそ望む回答を得たはずのアミナは、しかし押し黙ったまま

気まずげに横を向いた。シュイも今の言葉は流石に照れ臭かったのか、慌てて前に向き直る。

「ま、まぁ、残念ながら目に留まる奴が今のところいないのも事実でな。何だかんだ言ってもキーア王も大分お年を召しておられるし、そろそろ真剣に考えねばならぬと理解してはいるのだが。全く、誰か身近に気の許せる者がおらぬものか」

アミナはちらりとシュイの後頭部に視線を走らせた。

「はは、どちらにしてもお付き合いする方は徹底的に尻に敷かれちゃいそうですね」

「なっ、誰がそんなことをするか！　そなたは私を一体何だと思っておる！」

単なる照れ隠しのつもりだったが、想定外の反感を買った。シュイは慌てて弁解に転じる。

「ひ、比喩ですよ比喩！　エレグスでは頭が上がらないって意味で使われ――いっ」

突然脇腹に痛みが走り、びくんと仰け反った。いきなりバランスを乱された鳥獣が素っ頓狂な鳴き声を上げた。ぐらりと左側に傾き、背中から危うく落ちかけたところを間一髪、鳥獣のたてがみを掴むと共に胴体を強く両足で挟みこみ、何とか元の体勢へと立て直した。突然背で暴れられたことに腹を立てたのだろう、鳥獣は喉をぐるぐると鳴らしながら鋭い目で二人を睨んだ。

「す、すまないチック！　いきなり何するんですかアミナ！　危ないじゃないですか！」

「うるさい！　なら初めからそうと言え、馬鹿者！」

いきなり脇腹を抓ってきたアミナに、シュイは丸太のような鳥獣の首をあやすように撫でながら、何故彼女が不機嫌になってしまったのかを考えようとした。けれども耳に入ってくる風音が邪魔をしてどうにもうまくいかなかった。

～試練　a　trial　ground4～

肌色よりも白に近い砂浜には色とりどりの貝殻が埋もれていた。照り返す日差しの強さはかなりのもので、砂地を歩けば熱が靴底を貫いて伝わってくる。路傍には巨大な葉を持つ木が並び立ち、海岸に沿っているあぜ道を彩っている。港から続くその道の先には巨大な石造りの建物があった。

ちょっとした学校くらいの広さがありそうなその建物は一カ月の間シルフィールの貸し切りとなっている。島内の建物の大半は民宿などを除いてエレグスが管理しているが、短期間であれば賃料を支払うことによって借り受けることが可能だ。もっとも、危険地域として有名なこの島の施設を借りるような物好きはあまりいない。

今回の試験を開催するに当たり、シルフィールでは特に案内船などは出していなかったが、およそ三日に一度くらいはエレグスとフォルストロームを結ぶ巡航船が補給のためにここに立ち寄る。移動手段に関しては問題ない。

三つの入口を除いて窓が一つもない殺風景な大部屋。温暖な気候も手伝って蒸す様に熱くなっている室内では世界各地から集まってきた受験者が待機していた。その数は百を悠に超えそうだった。小柄な大人の背丈くらいはありそうな長剣を背負っている魔族の女。はたまた剣でも貫けそうにない筋肉の鎧を纏った森族の男。

待っている者たちの反応も多種多様だ。緊張感に背筋を固め、しきりに周りを窺う少年がいれば、後ろ手を組んで呑気に大あくびなどしている中年男もいる。はたまた顔を伏せ、寝ているのではないかと疑いたくなるほど身動ぎしない青年も。

シュイは最奥の扉の隙間から、ホールにいるたくさんの傭兵の卵たちの様子をそっと窺っていた。一見したところではそこそこ腕が立つ者もいるようだった。つまりは、ファムラブ島がどういう場所かを分かっている者が。

心地よい緊張感を肌に感じながら、しかし次の瞬間にはそれを台無しにされた。

「……おいおい、とっとと始めろ。いつまで待たせるつもりなんだ」

「試験監督とやらもとっくにきているんだろ？　勿体付けてるんじゃねーよ」

注目するに値しなかった、もっと言えば背景に溶け込んでいた者たちの、これから試験を受けるとは思えぬ態度に、シュイは何となしに既視感（デジャヴ）を覚えた。おそらくは待たされていること以上に、髪がぐっしょり濡れるほどの室内の熱さに堪えかねたのだろう。不思議と怒りは湧かなかったが反して感情が冷めていった。

別の支部から招集されていた試験官の青年が受験者たちを何とか取り成そうとした。

「いえ、ですから先に注意事項を説明させて――」

「――そんなの必要ないだろ。ただ生き残ればいいだけだろうが。周りをみてもへなちょこしかいねえし、試験なんざやるまでもねぇぜ」

「……あんだと？」

「おい、もう一遍言ってみろ」

挑発の言葉に何人かが反応し、筋骨逞しい男を睨み付けた。

「おっと、本当のこと言っちまったか、すまなかったなぁ」

睨まれた大男が白々しくおどけて見せた。その態度が尚癇に障ったのだろう、何人かの男が詰め寄ろうとしている。

「ちょ、揉めないで、話を――」
『――うるせえんだよっ』

試験官の制止に対する息の合った怒声に思わずシュイの口から苦笑が漏れた。
――口は悪いわ挑発はするわ、これでよくもまぁ傭兵になろうなんて考えたな。
そもそも傭兵は信用商売であり、客商売である。他人を小馬鹿にしたような態度を取っている傭兵を入団させては顧客から批判を受けかねない。最低限の礼儀作法くらいは身に付けている者でないと合格にする気も失せるというものだ。遠方から遥々やってきているのにも拘わらず自分で門の幅を狭くしようと頑張っているのだから救う余地がない。
担当官にしてもBランク傭兵らしいからあの程度の連中黙らせることくらいできるだろうに、と思わないではなかった。もっとも、それは試験監督である自分に遠慮してのことかも知れないが。
――ま、それならそれでやりようがあるか。
シュイは隙間を空けていたドアを一旦閉めた後、両手に軽く力を込めた。

壁を蹴り破らんばかりの凄まじい音に、受験者と試験官双方が肩を震わせた。
「……いっ」
「な、あの格好、まさか」
開いたドアに受験者たちが注視するや否や、喚き声が一瞬にして止んだ。およそ試験官とは思えぬ服装、殺気にも似た威圧感に戸惑いを隠せぬ様子だった。或いは、黒衣の傭兵のことを多少なりとも風聞している者がいたのだろう。まるで飲み物を一気飲みするかの

ように呼気を呑む音が連続して室内に繰り返された。
シュイは沈黙が下りた部屋の真ん中、先ほどまで受験者たちに説明していた試験官の隣まで突き進み、受験者たちに向き直った。

「まずは初めましてと言っておこうか。エレグスのポリー支部を任されているシュイ・エルクンドだ。……備考を付け足すと、他にやりたいことがいくらでもあるのに試験監督なんぞを半ば無理矢理やらされる羽目になってちょっぴりご機嫌斜めだ。不幸な事故で手足を失うことになりたくなければ、口の利き方には重々注意して貰いたい。ああ、ちなみにこれは命令じゃないぞ。つまり、逆らってくれても別段俺は困らない。俺は、だが」
茶目っ気たっぷりに自己紹介を終え、シュイは受験者たちを一瞥した。罵声が返ってくるかと半ば期待したが、そのようなことはなかった。隣に控えている試験官は押し黙った受験者を見て満足そうにほくそ笑んでいる。
場が鎮まったのを確認し、シュイは再び口を開く。
「大陸語がちゃんと諸君らにも浸透していること、まことに喜ばしく思う。――さて、此度（こたび）のシルフィールの傭兵選抜試験の予定を説明しておく。日程が一カ月弱かかることは諸君らも承知しているだろうが、今のところ試験は第三次まで行う予定でいる。面倒臭いと思う者もいるだろうが安心して欲しい。――なんせ、大半の者が今日の一次で脱落することになるからな」
不敵に笑うシュイに受験者たちの顔色が強張った。どのような無理難題を吹っかけてくるか気にしているようだった。

「説明される時間も惜しいみたいだからな。試験をやりながら説明しよう」
「……やりながら？」

「ど、どういうこと？」

チラホラと疑問の声が上がるのを無視し、シュイはゆっくりと目を瞑った。

全身より周囲の魔力の粒子を吸収（アブソーブ）し、自身の魔力の色に変化させる。短時間で同調（チューン）を終えた後、自身の魔力と共にアブソーブした魔力を放出（リリース）。室内に拡散させ、創造（クリエイト）する物のイメージを浮かべる。

細い鎖の網。部屋全体を覆い尽くす蜘蛛の巣。放出した魔力が隈なく行き渡ったのを感じ取り、シュイは眼を開いた。

「一回目は――コレだ」

シュイが無造作に左手を上下させた。手の周りの空間がぐにゃりと歪むのを見て、思わず受験者たちが身構えた。

室内に行き渡っていた魔力がシュイの発した圧力と反応するように明滅した。それを皮切りに次々と受験者たちが床に引き寄せられていった。

「か、身体……がっ」

「う、動けぬ……何だ、これは」

ワニやトカゲの如く床に這いつくばり、呻く受験者たちを差し置いて、何とか立ったままの状態を維持しているのは試験官を含めて数人ほどだった。

「……これは、＞更（プレッシャー）なる威に屈せよ＜！　で、でも、この大人数にかけるなんて――」

気弱そうな顔をしていたが、流石にBランクの傭兵というだけはあった。試験官の青年は短時間の内に魔力の鎖を気迫で打ち破り、体勢を持ち直した。受験者たちがそれを見て目を丸くすると、試験官が少し誇らしげに胸を張った。

「その通り、魔法に通じる者ならば耳にしたことくらいはあるだろう、上位干渉魔法の一つだ。これだけの人数にかけるとなるとこっちもそれなりに疲れるんだが」

＞魔を打ち払う縛鎖（ディスペル・リロード）＜と同じく、シュイがフォルストロームの図書館で習得した魔法だった。敵の動きを魔力の鎖で制する干渉魔法だが、大勢にかけようとすると魔力の密度効果が薄まってしまう。そのため、ある程度の力と意志力を持つ者であれば容易に打ち破ることができる。

「ふ、ふざけんな！　こんな……ので……何を」

喚き立てる受験者たちにシュイは微笑みを返す。

「やりながら説明すると言ったはずだ。今から何を確かめるのか教えてやる。これは催眠魔法の一種だ」

「……眠らせたり、魅了したりする類の？」

黒い短髪の長身の女が、たどたどしく言葉を紡いだ。驚くべきことに、両の膝に手を付きながらも何とか立っている。

「そうだ。試験官の彼がやって見せた通り、強い意志があれば筋力に関係なく打ち破れる魔法だ。その意味で＞母の温もり（スリープ）に抱かれよ＜よりはずっと優しい。つまりは――」

それを使わなかった俺が優しいのだ。そう言おうと思ったが止めておくことにする。その間にも何とか立ち上がろうと力んでいる者がいるが、お世辞にも上手くいっているようには見えない。

「……つまりは、精神力を推し量るということですか」

伏せっている青年がどうにか顔を上げ、シュイを見上げた。

「あーそう、それそれ。至ってシンプルだろう。困難な任務に当たったからといって途中で投げ出すような奴がいるとギルドの名を汚すことになるからな。一時間以内、時計花の花弁がピンクに変わるまでに自力でこの部屋から退出できた者は一次通過とする。外には試験官が二人待機しているはずだから彼らの指示に従ってくれ」

「……こ、こんな……ものっ」

先ほど偉そうなことをのたまっていた大男が床に手を付いて強引に立ち上がろうとした。が、上半身を起こすのがやっとという有様だった。それ以上は接着剤で付けられたようにどうにも身体が地面から離れなかった。真っ赤になっていた男の顔から次第に血の気が引いていく。

「二度も同じことを繰り返させるな、力づくでやろうとしても無意味だと言った。その証拠に、今立っている者たちを良く見てみろ」

立ち上がれない者たちが周りを見回し、唖然とした。特に肉体的に優れていなければいけないというわけではなさそうだった。何しろ立っている者の中には顔に幼さの残る少女すらいるのだ。

「……あ、あんなほそっこいガキが……何で」

「さて、な。強いて言えば覚悟や思い入れの違いか。残念ながら、今地べたに這い蹲っている者たちは気持ちや覚悟の上では彼女にすら劣っていたということだ。――説明は以上、と思ったが一つだけ附言(ふげん)を呈(てい)そう」

どこか軽かったシュイの声が唐突に重みを増す。

「程度の差はあれ、これくらいの真似ができる上級傭兵は俺の他にも数多くいる。無論敵となる者にもな。突破できない者が傭兵になったところで数年以内に死ぬ確率が大。早々に諦めた方が、賢明だ」

言うが早いかシュイは受験者たちから視線を外し、隣にいた試験官に退室するように指示した。試験官が出ていったのを見止め、シュイは壁際にあった木椅子に座って懐からごそごそと、本を取り出した。

～試練　ａ　ｔｒｉａｌ　ｇｒｏｕｎｄ５～

重い岩を無理矢理持ち上げようとしているかのような声が、延々と室内に響き渡っていた。うつ伏せになっている受験者たちは必死の形相で床に手を付き、どうにか身を起こそうともがいていた。

試験は中盤に差し掛かっていた。今のところ部屋を出られた者は担当官を除いて四人いた。途中で立ち上がった者が一人。後の三人は＞プレッシャー＜を受けて尚立ち姿勢を維持していた者たちだ。

シュイは試験にこの方法を選んだことを少し後悔していた。暑苦しいを通り越して痛々しい呻き声の輪唱が、読み物に集中することを妨げていた。

力だけでは駄目だと忠告したのにも拘わらず、湯気沸き立つ室内では未だ筋力のみを頼りに頑張っている者たちが見受けられる。その中にはクリアできるポテンシャルを持つ者も混ざっているかも知れないが、どのみち先輩の忠告に耳を傾けない者は早死にするので落としても問題ないと思われた。単に他の資質が欠けていたというだけのことだ。

シュイは入口の手前の植木鉢に生えていた時計花に目を移した。白色の花弁が薄いピンクになるのを見計らい、折り返しの時間になったことを告げる。

「ぬ……ぬおおおぉぉ！」

「ち、ちっくしょー！」

――進歩のない。できているのは唸ることと室温を上昇させることだけか。

シュイは汗だくになって髪を振り乱している者たちを見て、こち

らまで蒸し暑くなってしまうではないか、と嘆息した。
ただでさえ夏の日差しをたくさん浴びた石造りの建物内である。受験者たちの熱気と相俟って室温が上昇の一途を辿り、部屋の奥はゆらゆらと歪んでいた。汗の臭いもかなり立ち込めているがこの暑さに比べればまだましだった。この劣悪な環境下でプレッシャーを振り解く精神力を維持するのは相当に困難だ。身体の感覚が遠ざかるほどの集中力を、自分を縛り付けている鎖にのみ傾ける必要がある。

と、奥の方で一人、身を起こしかけている者がいた。おそらくは十四、五歳の、森族と魔族のハーフと思われる少年だ。特徴的なプラチナ髪の少年は着ている服が透けるくらいに汗をかきながらも、何とか四つん這いの状態に持ち込んでいた。額や髪の毛から滴る大量の汗が灰色の床に小さな水溜まりを作っている。
「……く、……うぅ」
まるで乳飲み子が立とうとするような危なっかしさがあったが、ついに片足が地面を踏みしめた。シュイはその様子を見、僅かに相好を崩した。
「どうやらもう一人、合格者が出そうだな」

口に出してから、少しばかり余計な一言だったかと反省した。発したその言葉は少年に僅かながら力を与えてしまったようだった。束の間その表情が険しさを増したものの、口元は微かに笑みを作っていた。一呼吸と共に立ち上がった瞬間、全身に絡みついていた魔力の鎖が断ち切られた。
どの道、放っておいても時間内には合格しただろう。シュイはそう判断すると再び本の方に目を走らせた。少年は息を整えるのもそこそこに、ドアに向かってゆっくりと歩きだした。疲労は隠せぬ様

子だったが、それ以上に今にも歓喜の声を上げんばかりの達成感が滲み出ていた。シュイはちらりと少年の顔を確認したが、今度は何も言わずにそれを見送った。おめでとう。その一言までは未だ遠いことを知っていたからだ。

「……おいっ。これ……本当に均等にかかっているのかよっ」

少年が退室してから間もなくして、未だ地面に這い蹲っている大男から文句が出た。余程自分の実力に自信を持っていたのか、それともまだ幼い少年に先を越されたことに苛立ったのか。どちらにしても自分が立ち上がれないのに合格者が出ていることに焦りを隠せぬ様子だった。見れば、何人かの者たちが男に同調するように顔を上げ、シュイの方を睨んでいた。

シュイは手に持っていた本を降ろしつつ俯き気味だった顔を上げた。

「何だ、お前だけ特別に強くかけて欲しいのか。そうならそうと――」

「――いっ。……いや、何でも……ない」

シュイが黒衣の袖を腕捲りしたのを目の当たりにし、男が慌てて言葉を改めた。シュイはやれやれと首を振り、開いていた本を片手で挟むように閉じた。

「勘違いしているやつもいるようだから誤解のないように言っておく。仮に合格する者がいれば、そいつはいずれ俺たちと共同任務に従事することになる。贔屓（ひいき）なんざして足手纏いを入れたら自分や仲間の命が危険に晒されるんだ。そんなのはこちらだってお断りだ」

こういった試験で試されているのが受験者だけとは限らない。選別する側も指導者として適正があるか、人を見抜く才があるかを試されている可能性があるのだ。故に手心を加える余裕など一切なか

ったしそのつもりもなかった。見込みのない者をいれれば自分がシルフィールの傭兵たちに非難されてしまうのもわかり切っている。
くだらぬ疑いを切って捨て、シュイがすくっと立ち上がった。
「数多あるギルドの中からわざわざここを選んだくらいだ。大方の者は判っているだろうがシルフィールは少数精鋭で名を馳せるギルド。お前たちはその中に名を連ねるつもりで遠路遥々やって来たんだろう。仮に均等にかかってなかったとして、それくらい跳ねのけてやるってくらいの気概を見せられないのか」
その叱咤に伏せていた者たちの顔付きが変わった。
「っと、もうそんなに時間はなさそうだな。ドアの前にある時計花が鮮やかなピンクに変わったら終了とする」

シュイの言葉に奮起したのか、終了も間近に二人の男がふらふらになりながらも立ち上がり、一人がプレッシャーを跳ね除けたところでシュイが片手を上げた。それが終了の合図だった。
「ハァ、ハァ。クソ、……間に合わなかった」
合格寸前で道を断たれたことが余程ショックだったのか、立ち上がった二人は力なく俯いた。シュイは腕を組みながら、小さく鼻息を出した。
「まぁ、良いだろう。今立っている二人は次の試験に進んでくれ」
「……ほ、ほんとかっ」
「ああ、受けない方が良かったと後悔するかも知れないけどな」
一瞬、ヒヤリとした表情を浮かべた二人だったが、それ以上に嬉しさを隠せぬようだった。お互いに顔を見合わせ、はにかんで見せた。

二人が部屋を出ていってから、シュイは受験者たちに掛けていた＞プレッシャー＜を解いた。身体こそ動くようになったものの、受

験者たちは疲労と落ちたショックとで憔悴しきっているようだった。ふらふらと立ち上がった受験者たちを前にして、シュイは熱気渦巻く大部屋を一瞥した。

「どうしてもシルフィールに入りたいという者がいれば、また次回挑戦し直すといい。俺には止める権利も理由もない。ただ一つだけ、今回の試験を突破出来ないようでは、たとえ合格したとしてもまともな傭兵ライフは到底望めないことを確約しておこう。それから、シルフィール以外のギルドに入ったとしてこの試験を通過した者と相見える可能性があることも忘れるなよ。少なくとも現時点のお前らでは実力不足。それを肝に銘じておくことだ。帰りの船と民宿の案内は入口の壁に貼ってある。では、な」

二階の控室のドアが開けられると同時に、並んでいる机とセットになっている簡素な木椅子に座した七人が揃ってそちらを振り向いた。シュイは通過者たち一人一人と目を合わせ、小さく頷いた。

「待たせたな。早々にクリアしてしまった者は少し拍子抜けだったかな」

「……い、いえ。そんなことは」

通過した七名からは緊張、警戒といった感情が見え隠れしていた。初めから立っていた人族の女が、遠慮がちに次の試験について訊ねてきた。

「次の試験は筆記だ」

「……へ？　……筆記？　あの、書くやつか？」

揃って予想を裏切られたのだろう。全員の目がぱちぱちと瞬いている。

「……他にどんなヒッキがあるんだ」

「えええっ！　な、なんでよっ！」

試験開始から立っていた、如何にも聡明そうな森族の少女から文句が上がった。それがあまりに意外だったのか、シュイも含めた周りの者が唖然とした様子で少女を見る。少女は文句でもあるのかと言わんばかりに眉を釣り上げた。

シュイは軽く咳払いし、説明を続ける。

「ちゃんと理由がある。一つにはシルフィールでは書類を書く機会が他のギルドに比べてかなり多いみたいでな。依頼書関連にしろ、事後報告書にしろ」

「え。一般常識とか、そういうことじゃなくて？」

喜びを隠しきれていない少女にシュイが肩を竦めて見せた。

「それがいいならそうするが」

「あ、ううん。つ、続けてください」

見かけによらず、机の上での勉強が苦手なタイプなのだろう。か弱いお嬢様のような服装と容姿だが、どうやら偏見だったようだ。まぁニルファナの例もあるしな、とシュイは割に早く受け入れた。

「数ある職業の中からわざわざ傭兵になることを選ぶくらいだ。それなりの実力は持っているだろうし、任務をこなしていればある程度の実力は嫌でも身に付く。なら、それ以外の能力を見せてもらおうと思ってね」

「……結論から言うと、何をするのだ？」

精悍な顔付きの、獣族の青年が眉をひそめた。

「魔物関連の書類を用意してある。それを一週間、ひたすら書き写してもらう」

シュイの言葉を聞くや否や、森族の少女の顔が白から毒ガエル色に変化した。

「言っておくがただの書類じゃないぞ。お前らの先輩傭兵たちが――あぁ、まだ入れると決まったわけでもないが、任務をこなすことによって得た情報が満載の、門外不出の報告書だ」

これこそ、シュイがポリーとトートゥ支部から持ち出した物、グリフォンに載せていた箱の中身だった。魔物の生態や生息域。はたまた攻撃のパターンまで、市場の図鑑など比べ物にならないくらい事細かに書かれている。字が汚ないなどの理由で読み難い物は外したが、それでも相当数の魔物のデータがあった。中にはシュイが書いた報告書も何点か混ざっている。

「お前たちが首尾よく合格出来ればの話だが、いずれ同様の物を書くことになる。その練習もできるし、退治か、若しくは捕獲する魔物の特徴を覚えることで任務の助けにもなる。一石二鳥だろう」

口には出さなかったが、完成した写本を提出すれば幾許かの金になるので一石三鳥だ。かなり面倒な任務をやらされていることだし、せめてそれくらいの見返りがないと割に合わなかった。

「任務って……。二次試験は全員通過なのか？」

「本当は、もう少し人数が残ると思っていたから採点方式にする予定だったんだがな。これしか残らなかったからそれは止めにした。もしかしたら、最終試験で全員不合格になるかも知れないが」

「ど、どういうことですか？」

「最終試験ではシルフィールの傭兵が受けている依頼を全員でやってもらう。ここファムラヴ島に生息する魔物の討伐、或いは捕獲任務だ」

七人の表情が一気に引き締まった。ファムラヴ島に生息している魔物の手強さは外地より数段上だと言われている。試験場はかなり前から公表されていたので受験者たちがここに生息している魔物の強さを理解していたとしても不思議ではなかった。

「但し――二次試験の期間、すなわち一週間後までどの任務をやるかは教えない。お前たちが満遍なく詰め込んだ魔物の知識の中にそれが入っていれば、合格への道は著しく近い物となる。だが逆に、それをきちんと理解していない状態で臨めば、合格はおろか命の危

機を迎えるだろう。わかるな、単に書き写しているだけでは後者になる可能性が高いということだ」

報告書から必要な情報を読み取り、フィールドをイメージし、敵の行動を予測した上で臨む。それも傭兵に不可欠な能力の一つだ。その能力を確かめるに当たり、容易く突破できそうな依頼を設定する気はさらさらない。

ただ、現実にはデータなどに頼らずやる依頼の方が多いし、標準的な規模の討伐依頼をやる場合にこれだけの人数を揃えることもない。そこは受験者に対するハンデであり、温情のつもりだった。

「説明は以上とする。他に聞きたいことがあれば試験官から聞け。では、一週間後に」

シュイは傭兵の卵たちにそう告げると、手をひらひらと振りながら部屋を後にした。

～試練　a　trial　ground6～

試験場の建物から仮宿に向かっていた途中、道端に藁葺き屋根の無人露店があった。筵（むしろ）の上には様々な野菜や果実が所狭しと並べられていた。

シュイはちらりと商品を一瞥し、他の地方では滅多にお目にかかれない果物、マルダがあることに気付いた。白くて堅い皮に覆われているが、中身は粒上の甘い果肉がびっしりと詰まった柑橘類だ。

手書きの値札を確認した後、財布から茶褐色の千パーズ硬化を取り出して厚紙で出来た箱に投じる。次いで、重ねて置いてあった紙袋を一枚手に取り、手の平からはみ出しそうな大きめのマルダを二つ、袋に入れた。

島の西側には十を超える民宿がひしめいている。沿岸部に魔物が寄ってくることは滅多にないので自然とその近辺に人工物が集中するのだ。

シュイはふと、島の中央にある雄大な山に視線を移した。麓の辺りまで続く森の上方、青みがかった大山の天辺は分厚い雲に覆われていた。

地元の者の話によれば、山頂付近を覆っている雲は天候に関係なく、四六時中存在するらしい。風が強くとも山から剥がれぬ雲とあれば、おそらくは自然由来の物ではないだろう。或いは何者かが山頂に何かを隠しているのだろうか、と考えると自然と興味も湧いてくる。その好奇心を妨げてきたのが、山に近づけば近づくほどに力を増す魔物たちというわけだ。

道沿いに立ち並んでいる瓦屋根の民宿の一つに入る。部屋数が六

つしかないその建物は、宿というよりも開業医が家を病院に改築したといった印象に近い。窓口には男性従業員が一人椅子に座り、狭いスペースに本を広げていた。余程その内容が面白いのか、肩を震わせて笑っている。

シュイが前を横切る寸前、従業員がはっと顔を上げ、おかえりなさいと声をかけた。

「ただいま。何かの小説か」

「え？　あぁ、これですか」

シュイが手元に視線を走らせたのを見て、男は本の表紙を掲げて見せた。表題の部分には＞男の子マネジメント＜と書かれている。

シュイが首を傾げたのを見て、男はおや、と目を丸くした。

「ご存じないですか、巷で評判の小説家、ナハル・ベルファーニさんの最新作ですよ。宜しければお客さんもどうです？　もう少しで読み終わりますから後でお貸ししますけれど」

シュイは本の表紙に＞４＜の数字が書かれているのを見て、続き物は最初から読む性質だ、と首を振った。

「はは、それもそうですか。いや、惜しいですね。実家にいけば全巻揃っているんですが仕事中だし。そうでした、お連れ様はもうお戻りになられていますよ」

「わかった、ありがとう」

玄関から廊下を一つ跨いだ突き当たりの部屋を開けると、大きい窓を隔ててエメラルドグリーンの海が視界に飛び込んで来た。白い波頭が現れては消えてゆくのを垣間見、続いて部屋の隅で包帯の端を咥えているアミナと目が合った。

「ん、ほわったやうだな」

「アミナ。ど、どうしたんですか、その傷……」

剥き出しになった褐色の左腕には爪で引っ掻かれたような痕があった。かなり深い傷なのか、包帯を巻いたところから赤い滲みが少

しずつ広がっていく。
　アミナは咥えていた包帯を手で持ち直し、シュイに顔を向けた。
「いや何、ここを訪れたのは初めてだったものでな。件の島がどれくらいのものかと山の麓辺りまで足を運んでみたのだが。やはり単独での踏破は一筋縄ではいかなそうだ」
　それほどの痛みはないのか明るい口調だったが、出血からすると浅い傷ではなさそうだった。自分より格上である彼女が手傷を負わされたことにも驚きを禁じ得なかったが、今は他に気にするべきことがあった。
「……勘弁してくださいよ。あなたに万が一のことがあったら同行していた私の立場がありません」
「無茶と言えるほどの無茶はしておらぬ。三年前の件で懲りているからな。利き目の良い薬も塗ったから心配は無用だ」
　三年前と聞いてシュイの意識に当時の記憶が過った。が、直ぐにそれを追いやり、マルダの入っている袋を丸いテーブルの上に置いた。
「いいからそこに横になってください。治癒術（ヒール）をかけます」
　専門家ほど上手くは出来ませんけれど、と前置き、シュイがベッドを指し示した。
「な、そこまでやるのか。この程度の傷で少々大袈裟では」
「早くしてください。傷が残ったらどうするんですか」
「わ、わかったわかった、そう急くでない」
　シュイにしては珍しい押しの強さに、アミナはたじたじとなりながらも巻いたばかりの包帯を解き始めた。

　袖を捲り、腕を肩まで露出させるとアミナは枕に顎を乗せ、ベッドの上でうつ伏せになった。肉が抉れて少し黒ずんでいることからかなり深い傷のようだった。
　シュイは練っていた魔力を慎重に解放（リリース）した。ゆらゆらと揺れる、

白い煙のような魔力が掌から発され、アミナの肩にある三本の裂傷をゆっくりと覆っていく。黒ずんでいた傷口の表面が滅菌され、徐々に垢のようになってぽろぽろと剥がれ落ちていく。その間アミナは声一つ上げなかったものの、やはり痛みはあったのだろう、何度か顔をしかめていた。

治療が一段落し、傷口がピンク色の新しい皮膚に覆われ始めた頃合いだった。おもむろにアミナが伏せていた顔を上げた。

「あぁ、そういえば道中で珍しいやつに出くわしたぞ。誰だと思う？」

「道中、ってファムラヴ島の奥地に？」

シュイの言葉からは驚きが滲み出ていた。何せアミナですら負傷するような魔物が生息する場所だ。少なくともそこに行ける実力者なのは間違いないから大分候補者が絞られる。

「アルマンド・ゼフレルだ。私はそれほどあやつと親交はないが、そなたやタルッフィとは旧知の仲らしいな。シュイに宜しくな、と言っておったぞ」

「……アルマンドがこんなところに？　何か話したんですか？」

シュイは怪訝そうに首を捻った。こんなところまでくる余裕があるのに支部長を人に押し付けるのはどうなのか、と言いたげでもあった。

「少しばかりな。薬草を探しているとのことだった。実際、様々な植物を革袋に詰めていたぞ。どちらかと言えばのべつ幕なしに集めているようだったが」

「薬草探し、ですか」

腑に落ちなかった。仮にも経験豊富な上級傭兵が強力な魔物が跋扈する危険地帯で、それでも一つの薬草に目星を付けているのなら

まだわかるが、新種の薬草を探すような真似をするだろうか。
――いや、もしかしたらデニスの手伝いかも。
単なる思い付きだったが、有り得る話ではあった。若しくは、生えている薬草の分布図を作成するなどの依頼を受けているのだとすれば合点がいく。そういった任務も数は少ないながら存在する。後で会ったら一応問い質してみるか。そう思いつつ、シュイは処置が終わったアミナの腕を軽く引き上げた。

先ほどよりも随分と小さくなった傷口に清潔な包帯を巻いていく。既に血は止まっているので滲むようなことはなかった。心なしか、アミナの表情も先ほどより明るかった。
「話は変わりますがこの傷、どんな魔物にやられたんです？」
「ヴァルグタートルだ。まぁ、それに関しては私に非があるのだが、と、すまぬな」
包帯が解けぬよう小さな留め具を引っ掛けたところで、アミナが手当ての礼を述べ、身を起こした。

ヴァルグタートルの特徴を簡潔に表すならば敏捷且つ獰猛な陸亀だ。主に奥深い森を住処とし、熊や大猿などの大型動物を捕食して暮らしている。鋼の槍をも通さぬ堅牢な甲羅と発達した四肢を持ち、こと跳躍力に関しては魔物の中でもトップクラスと言って良い。また、皮膚や甲羅の色を変化させて岩に擬態することも出来る。
その甲羅は非常に軽く、その堅さ故に加工できる者は限られるが、最上級の防具素材として珍重されている。
「どうやら根城としている場所に足を踏み入れてしまったらしい。取って食おうというよりは守ろうという強い意志が伝わってきた。確かあれは今頃が産卵期であるし、事実その場から退いても追っては来なかったからな」

おのれの魔力を同調させることに長けている高位の辰力使いの中には、魔物の感情を色として認知できる者がごく少数いる。アミナも昨今になってようやく体得した技術らしいが、複雑な感情を有する人間を始めとして、高い知能を持つ者に使うのは難しいそうだ。

「見逃したんですか。優しいんですね」

「いや、それは正確ではないな。興味本位で立ち入ったことへの後ろめたさ故に、だ。住処を荒らされれば憤りを覚えるのは当然であろう」

「……そうですね」

シュイはそう口にしたものの、やはり敵わないな、と思った。戦っている最中でも、傷を負わされても尚怒りを鎮め、相手を思いやる余裕がアミナにはあるのだ。今の自分にまだそこまでの余裕はないように思われた。感情に振り回されず、相手の立場を慮って力を加減する。言うは容易くともそれがどれだけ困難なことか、最近になってようやくわかってきたことだ。

「それより、先ほどからあれの中身が気になるのだが」

アミナは包帯に指を入れて締め具合を調整しつつ、顎でテーブルの上に置いてある紙袋を示した。

「ああ、忘れてました。露店で熟れたマルダを見かけたので買ってきたんです」

「ほう、それは良い。本土ではそうそう味わえぬからな」

「ええ、今剥いて食べさせてあげますからちょっと待っていてくださいね」

アミナはポカンとし、どのような図を想像したのか、顔をほんのりと紅潮させた。

「あ、阿呆か。重病人でもないのにそのような恥ずかしい真似をせ

ずとも良い。普通に寄越せ、普通に」
じっと睨んでくるアミナに、シュイは遠慮しなくて良いのにと苦笑しながらも、袋から取り出した瑞々しいマルダを一つ、アミナの胸元に向かって放り投げた。

～障壁 be in the way～

小雨が降りしきる空の下、トートゥの支部長室では二人の男が向かい合っていた。否、睨み合っていると表現した方が正確だった。お互いの険しい表情が、漂う沈黙をより一層重いものにしている。

書類や本がきちんと整頓された書斎机の上には二枚綴りの紙が置かれていた。氏名欄にピエール・レオーネと記載されたそれは、ギルドの一時脱退を届け出る暇願(いとまねが)いだった。

きっかけはセーニア教国のとある町の支部より持ち上がった一つの情報だった。セーニアが秘密裏に遠征の準備を進めているという話題は以前から新聞各紙でも取り上げられていたため、シルフィール内でもどういった対応を採るか苦慮していた。

大半の者は、その侵攻対象がルクスプテロン連邦に対してのものだと考えていた。セーニアとルクスプテロンの戦争はシルフィールにとって相当に厄介な懸案である。中立を保つと言うは易いが、双方の誘いを断り続ければ小さな不満や敵意が自然と積み重なっていくからだ。

どちらかと言えば戦争を仕掛けられたルクスプテロンの肩を持つ意見が多かったが、何しろセーニアの人口は世界一である。出身者がギルド内において占める割合は三割に近い。身内に潜在的な敵を大勢作るとわかってセーニアを声高らかに批判する者など殆どいない。

実例として、シュイ・エルクンドやデニス・レッドフォードはバータンとナルゼリの戦争に参加したことが尾を引き、一部のセーニア出身者には相当に嫌われていた。陰口は言わずもがな、擦れ違い

ざまに舌打ちを交えるといった露骨な態度を取る者もいた。これとは逆にセーニアの同盟国に肩入れし、ルクスプテロンの出身者から顰蹙を買う者もいた。一触即発とまでは言えないが、野放しにしておける状況でもなかった。

さておき、両国間の緊張は二年前に起きたヌレイフ湿原の戦いの後も解けることがなかったが、いずれ動き出すだろうと思われていた。エヴラール自身、再度の侵攻が年内に始まるだろうとは予測していた。

ところが、それが全く想定外の形で成された。おそらくは他支部にいる長の多くが冷や水を浴びせられた心地だろう。セーニアが侵攻対象に選んだのはルクスプテロン連邦でも、他の大国でもなかった。広大な砂漠があることで知られるジヴーの小国群だった。

「考え直せ、ピエール。我々だけではなくアースレイも、否、セーニア以外の三国とて同じだ。この状況で静観を貫くとは思えん。お前の家族にしても、今のお前の稼ぎなら他国に逃がすことくらい朝飯前だろう」

ピエールは腕を横に振り払う。

「悪いけど、何度考えても結論は同じだ。他支部のジヴー出身者が動いている以上、俺だけ安全な場所にはいられない」

だが、とエヴラールは説得を続ける。

「せめて、子供が生まれてからでも遅くはあるまい。奥方とて出産を間近に控えている今、頼るべきお前に離れられたら不安に思うだろうに」

その言にはピエールも一瞬辛そうな顔を見せたが、そこから無理矢理に笑顔を繕う。

「ミルカは、わかってくれていますよ。あいつもつい最近まで傭兵だったんで。それから、死ぬつもりもないっす。伊達に準ランカーになったわけじゃありませんって」

ピエールの口調からは決して強がりだけではなく、仄かな自信も垣間見えた。

まだ昇格したてということもあり、ピエールの地力は準ランカーの中では下位から数えた方が早い。だが、成長速度という一点に置いて優秀であり、今後も更なる活躍が期待出来ると見込まれていた。エヴラールもピエールの成長を間近で見てきた一人であり、なればこそ思い留まらせたかった。

「俺とてそう思いたい。お前がシュイに負けず劣らずの修羅場を潜り抜けていることも理解している。だがな、今回の件はギルドで受け付けている依頼とはわけが違う。小国同士の諍いなどとは比較にならぬ、正真正銘の侵略戦争だぞ」

セーニア正規軍の騎士大隊、魔道大隊。どちらか片方であってもその実力と統率力は中小国家の軍などとは比べ物にならない。音に聞こえしルクスプテロンの召喚部隊を結集してやっと互角の戦いだ。ジヴーの小国同士が手を組んだくらいでは勝ち目はゼロに等しかった。

「断言こそ出来ぬが、今回の遠征では前回の時と同じようにミスティミストの傭兵が加わっている可能性だってある。連中の強さ、狡猾さはお前とて耳に挟んでいるだろう。本部が奴らに関わるなと口酸っぱく言っているのは、決して誇張なんかじゃない」

強い口調で諭すエヴラールに、ピエールは顔色を変えずに応じた。

「だからこそ、だ。このまま仲間たちが蹂躙されるとわかって、黙って見過ごすわけにはいかないだろ。既にジヴーに向かった他支部の連中だって同じ気持ちのはずだ。ミスティミストの傭兵が加わっているなら尚更、誰かがそいつらを何とかしなきゃなんねぇ」

「ピエール……しかしだな」

「確かに、ジヴーは他国の奴らから見れば砂ばかりの何にもない土地かも知れない。俺自身、そう思ってるくらいだ。でも、そんな場所でも大切な生まれ故郷なんだよ。先祖代々、厳しい自然と向き合って地に足付けて、何とか工夫しながら維持してきた土地だ。そこを放り出して逃げだせるもんか。後ろ指差されるような真似――」

「――少し落ち付け、お前の決意はわかった。一週間で構わん。その間にマスター・ラミエルにお伺いを立ててみる」

「マスターに……ってそれでどうなるってんですか！」

「落ち着けと言っている！」

ピエールが両手の平を机に叩きつけるや否や、挑みかかるように立ち上がったエヴラールの怒鳴り声が廊下にまで突き抜けた。エヴラールの顔を間近にしてもピエールが怯むことはなかった。が、非は自分にあると感じたのだろう、視線を合わせたまま微かに俯き、小さな声で謝罪した。

エヴラールは肘掛けに両手を付き、ゆっくりと座った。けれども、目付きの鋭さは先ほどと少しも変わらなかった。

「準ランカーだという自覚を持っているなら尚更だ。仮にも傭兵たちを引っ張る立場にある者がそのような醜態を晒して何とする。冷静に戦力差を分析できぬ者が戦地に赴いたところで一体何が出来る！　具体的に温めている策があると言うならば今この場で答えてみろ、どうなんだ」

痛い所をぐさぐさと突かれ、ピエールが奥歯を噛み締めた。エヴラールは反論できずにいるピエールから溜息混じりに視線を外し、机の上にある紙に手を翳す。一瞬にして、暇願いの書類が消し炭と化した。

「いずれにしても、だ。ギルドの方針が定まってもいないのに個人が勝手に動くことなど支部長として容認できん。まだ両国への敵対行為禁止令は解かれていないんだ。セーニアの矛先がルクスプテロ

ンじゃない以上、シルフィールも方針転換を迫られるのは必然。援助の検討は十二分に考えられる話だし、俺からも要望書を提出してみる。近日中に出兵が行われたとしてもジヴーまではかなりの距離があるし、まだ時間的な猶予は残っている。さぁ、それがわかったらとっとと今日の業務に取り掛かれ」

ピエールの尻を引っ叩いて退室させた後で、エヴラールは足元にある引き出しに手をかけた。取り出した緊急連絡用の紅い魔石を一瞥し、ぎゅっと握り締める。束の間、ピエールのそれにも負けぬほどの怒気が、長い銀髪をふわりと靡かせた。

――――

カーテンが締め切られた薄暗い室内に長い足が踏み入った途端、お疲れ様、と明るい声が響いた。アルマンドがはたと顔を上げた。

「……ハーベル、来ていたのか」

「ついさっきね、そろそろ術の効力が弱まる頃だと思って。それより、せめて髭くらいは切り揃えた方が良いよ」

椅子に坐したニルファナに指差され、アルマンドは鼻の下を摘むように確かめるときまり悪そうに笑った。

「気が付かなかった、後で剃らなくちゃな。面目ねえ、ここんところ野宿続きだったもんでさ」

「はぁ、あまり根詰めるのは感心しないな。君に万が一のことがあれば彼女も――」

「――わぁってるわぁってる。それより、先に済ませてもらっても良いか。風呂に入っても無駄になっちまうからな」

背負っていた荷物、薬草が満載の革袋を床に下ろし、アルマンド

は白い手が覗いているベッドの前に立ち、銀の胸当ての留め具を外し始めた。

シャツ一枚になったアルマンドから視線を外し、ニルファナは座ったまま胸の前で手を組み、ゆっくりと瞑目した。程なくして、こめかみの辺りから一筋の汗が、つぅと彼女の頬を伝った。彼女ほどの使い手をして、それほどの集中力を強いる魔法だった。

ニルファナの全身から透明な蒸気のようなものが立ち昇り始めると、唐突に立っていたアルマンドが唇を噛み、拳を握り締めた。激しい痛みに堪えるかのようだった。

分厚い胸板の左側から、淡く光る太い糸のようなものが少しずつ伸びてきた。ニルファナの呪力によってアルマンドから取り出されたその糸が、ベッドに横たわっている金髪の、青白い顔をした女の左胸へと連結される。瞬間、アルマンドの顔が明らかに歪んだが、声は終ぞ発されなかった。シュウシュウと、溜まっていた空気が抜けるような息が歯の隙間から漏れただけだった。

糸を通して小さな光球がアルマンドから間断なく生み出されては女の体に吸い込まれてゆく。ややあって、女の顔色に血色が戻ってきたが、対するアルマンドの顔色は土気色に近くなってきた。その全身が、通り雨に打たれたようにぐっしょりと濡れている。ニルファナは薄らと片目を開け、アルマンドの表情を確かめた上で組んでいた手を解いた。支えを失った人形のように、アルマンドの長身がぐらりと泳いだが、倒れることはなかった。いち早く立ち上がったニルファナの両手がアルマンドの背中を支えていた。

ベッドの隣にある三足の椅子に座り、荒く息を継いでいるアルマンドに、ニルファナがハンカチを差し出した。アルマンドはすまねえな、と掴み取り、汗に濡れた額を二度、三度と拭う。

「いや、こればかりは、いつまで経っても、はぁ、慣れねえな。こりゃあ三日は、まともに動けそうに、ないな」
軽口を叩くアルマンドの顔を、ニルファナはじっと観察した。その表情から僅かな情報も読み落とすまいとしているようだった。
「どうも、一週間は安静にした方が良さそうだね。無茶をすればそれだけ使える回数が減る、わかってるね」
アルマンドが大袈裟に口を窄めて見せると、ニルファナは小さく頷いた。
「じゃあ、また来るよ。二人共、お大事に」
ニルファナは壁を逆手で押し出す様にして体を起こした。その足が数歩ほど進んだところでアルマンドが口を開く。
「あんたは、何にも言わないんだな。ジヴーのこと、ある程度は聞いて、いるんだろう？」
「耳が早いね。でもさ、私の言葉なんかで楽になれるのかな」
足を止めたニルファナが背中越しに訊ね返すと、大分息が戻ってきたアルマンドは苦笑いを浮かべた。
「そう、だな。俺としたことが失言だった、忘れてくれ」
「そうさせてもらうよ、無意味なことは避けたい。自己判断できる者の意志を捩じ曲げるようなことは特に、ね。でも、君がわからないことにはいつでも答えよう」
じゃあ、とアルマンドは横たわっている女を見た。その目は固く閉じられていたが、高い鼻と喉元は微かに動いていた。
「あと、どれくらいもつ？」
「……半年か、それより短いのは確かだね。君から取り出せる糸も大分細くなっているし。口惜しいけれど、命脈供与の術式は万能じゃないから」
「……そっか。はは、まいったな。十年近く足掻いてきたのにこのザマじゃ申し訳ねえよなぁ」
「年長者の弱音に耳を傾けるには、私じゃちょっと役不足かな。次の客に譲ることにするよ」

次の客、とアルマンドが呟くのとほぼ同時に、ニルファナの目前にあるドアが動いた。立っていたのは白くて可愛らしい花束を両手に抱えたデニス・レッドフォードだった。

「これはハーベル嬢。お越しになられていたのですね」

軽く会釈したデニスにニルファナは微笑みを返した。

「御無沙汰だね、レッドフォード。ほら、打って付けの人がやって来たよ、ゼフレル。じゃあ二人とも、またね」

立ち止まったままのデニスに手を掲げつつ、ニルファナは外へと出ていった。扉が音を立てて閉まり、床に差し込んでいた柔らかい外光が消え失せると同時に、デニスがアルマンドに向き直った。

「大分、悪いようですね」

「なに、とっくに覚悟は出来ているさ。……そう、出来ているはずなんだ。昔からずっとな」

デニスが横たわっている女に両手を掲げた。治癒魔法によって固まり掛けた血を分解し、体液の流れを正常に戻していく。暫くすると、床ずれで黒ずんでいた大腿や二の腕の皮膚が少しずつ白くなっていった。

「ヴァニラ、さ。あと半年もたないんだってよ」

ぼそっと呟いたアルマンドに、デニスは咄嗟には応じられなかった。そして、応じられなかった自分を恥じ入るかのように目を瞑った。

「そう、ですか。……すみません、私にもっと力があれば」

「いんや、謝るのは俺の方だ。ランカーを以ってしても助からないんだから、多少は割り切れるってもんだな。その、済まなかったな、十年近くも付き合わせちまって」

「おや、今日は随分としおらしいですね。腐れ縁は今に始まったこ

とではないでしょうに」

デニスはふっと笑みを零したが、頭の中ではその弱気な言葉を嫌忌すべきものだと理解していた。それはアルマンドと、ヴァニラと呼ばれた女に施されている術式の正体がどういった類のものであるか、薄々と勘付いているからこそだった。

シップのような呪効継続の魔布をヴァニラの細い手足に慎重に貼り付け、ようやくデニスが一息付き、眼鏡を外した。集中力による熱気でいつの間にかレンズが曇っていた。

「これで大丈夫です。あぁ、その布は二週間くらい経ったら剥がしてください。また一月後に来ますので」

「一月、か。随分と早いな」

「……申し上げにくいことですが、胸筋が衰えて心臓から血を全身に送り出す力が弱過ぎるんです。このまま放っておいたら手足などの末梢部位で壊疽（えそ）を起こすのは避けられませんから」

そう告げられたアルマンドは何かを言おうとしたが、空気がだだ漏れただけだった。認めたくない現実に傾ぐ頭を両手で覆うように支えた。

デニスは何も言わずに眼鏡を掛け直し、白いカーテンを開いて窓を開けた。アルマンドの足元が照らされ、木の床に寝具と自分の影が映った。アルマンドは自分の影が他の影に比べて幾分薄いことに気が付いたが、だからどうしたと笑い飛ばし、鼻息混じりに屈んでいた身を起こした。

風が室内に吹き込んでくるのを感じながら、デニスはベットサイドのテーブルに置いてあった瓢箪型（ひょうたんがた）の青い花瓶に手を伸ばした。萎れかけて花弁の端が茶色くなりかけている何本かの花を纏めて掴み取り、窓の外へ腕を出す。次の瞬間、手の平にあった花が灰と化し、

風に晒されて手からさらさらと零れ落ちた。続いては花瓶の水を外の土壌に捨て、水差しの口から新たな水を注ぎ込み、持参した、花弁も茎もしゃんとした新しい花を花瓶に挿した。

花を包んでいた不織布をくるくると器用に丸めながら、デニスがちらりとアルマンドを見た。

「伝えておくべきか迷いましたが、どのみち耳に入るでしょうから私の口から。セーニアがジヴーへの出兵を正式に決めたようです。おそらくは月内に」

アルマンドは目を伏せ、ふと先ほどのニルファナの言葉を思い起こし、くっくと笑った。

「どうかしました？　私、何か変なこと言いましたか？」

「いや、ホントおっかねぇと思ってさ」

何がおっかないのか、と首を傾げるデニスにアルマンドが視線を戻した。

「そんなの俺の知ったこっちゃねえな。ジヴーなんざ捨てた故郷。年がら年中熱いし、歩いてるだけで口の中は砂だらけになるし、目を開けていられる時間の方が少ないくらいだ。ありゃあホント、ひでえ土地だぜ」

「……ですが、そんな土地にセーニアは侵攻を決めた」

「それだよなぁ。あんな辺鄙な場所に何があるってんだ？」

「希少な鉱山資源か、或いはもっと別の何かを狙っているのか。レームス教の言い伝えによれば、ジュアナ戦役よりも遥か昔、ジヴーの近辺は高度な文明によって統治されていたそうです。実際そういった記述がされている文献も少ないながら見つかっているようですしね。これは憶測の域を出ませんが、もしかしたらセーニアはルクスプテロンとの戦に勝ち得る切り札を、ジヴーの地に見出したのではないでしょうか」

アルマンドは憤然とした様子で足を組んだ。

仮にもし、そんな物が真に存在するのだとしたら、周りの国々も日和見ではいられないはずだった。ルクスプテロン連邦が滅ぼされればその嵐を遮れるものは存在しない。いつしかその猛威が自分たちに向けられるかも知れないのだ。他の四大国であるエレグスやフォルストロームにしても、ルクスプテロン連邦を確実に上回ると言える戦力は持っていない。むしろ、一段劣るというのが世間一般の見方だ。

「だが、たとえそうだとしても、だ。一体どこのどいつがそれを入れ知恵したんだ。戦争状態で古文書を漁っている余裕があるとも思えねえぜ」

「同意見です。って、何だかんだ言って色々考えているんですねぇ」

「う、うっせえよタコ」

照れ臭そうにそっぽを向くアルマンドに、デニスが口元を手で覆いながら笑った。

おもむろに、水を汲んできます、とデニスが部屋を後にした。アルマンドは遠ざかっていく足音を聴きながら尻を持ち上げ、ベッドに横たわる女の耳元に口を近づけた。

「……ジヴー、か。他の連中はきっと必死こいてるんだろうな。きっと、ピエールの奴だって……。ったく、身動き取れねえってのも辛いもんだよな。まぁ、お前ほどじゃないけど。なぁヴァニラ、俺ぁどうすれば良いんだろうなぁ」

半ば習慣となりつつあった、何度となく繰り返した儀式だった。諦めと、それでも捨て切れぬ、ささやかな願いの入り混じった囁きが、尖った耳に掛かる長い金髪を微かに揺り動かした。

けれども、聞こえてくるのはいつもと同じ、たどたどしく継がれる吐息だけだった。その音の儚さが、閉じられた瞳が、心に絶望を

招き入れようとした。
アルマンドはそれに抗うべく首を横に振り、椅子に座り直すと、そのまま自分の膝に頬杖を突き、しばしの間、無音の世界に身を投じた。

～障壁 be in the way2～

シュイは鋼獣（ベヒモス）の鉛筆絵に入っている解説に目を通しつつ、口元に浮かんでくる笑みをしきりに噛み砕いていた。

――まさか図解付きとは恐れ入ったな。さては魔物図鑑を見たことのある者がいたか。ちょっと凝り過ぎている感もあるけれど、他の報告書よりも出来が良いくらいだ。９０点ってところだな。

強いて言えば考察が少なかったが、依頼を直接やっているわけでないことを考えれば仕方のないことだ。それを抜きにすれば、上々の出来だった。

受験者たちが固唾を呑んで見守る中、教壇を前にしてシュイは提出された冊子をぺらぺらと捲る。ややあって手を止めると投げるように冊子を置いた。

「まぁまぁ、及第点には達しているな。良いだろう、二次試験も合格とする」

教室内に喜びの声が咲き、席に付いている受験者たちが思い思いにガッツポーツしているのを見て、シュイは、果たして次の試験でもそんな顔がしていられるかな、とフードの奥で意地悪い笑みを零した。

レポートを、次いで資料代わりに貸していた報告書を黒い箱に仕舞っているシュイに、受験者からおずおずと声が掛けられる。

「あの、これで次に進めるんですよね。もうどんな任務をやるかは決まっているんですか？」

シュイは箱に蓋を被せながら「そうだな」と呟いた。

「今のうちに説明しておこうか。前提として、シルフィールの依頼にはＦからＳＳ級までの８段階ある。今回チャレンジしてもらうのはＢ級クエストだ」

可もなく不可もなく。Dランクの傭兵であっても受けようと思えば受けられるし標準的な傭兵なら問題なくこなせる依頼だ。
「……B級クエスト」
顔を見合わせる受験者たちを尻目に、シュイは話を続ける。
「最終試験はブラッディオ・ルーガの捕獲任務。明日の朝から開始して四日後の夕方に終了とする」
隣で聞き耳を立てていた幼顔の試験官、ペテルがばっとシュイに向いたのを見て、受験者たちが不思議そうな顔をした。
「四日後……。ちょっと短くない？」
金髪の森族の少女、セーヌが口元に指を当てながら不安そうにシュイを見上げた。
「心配はいらない。やつらの住処はここからそんなに遠くないからな」
「ということは、予め居場所がわかっているのか？」
ぞんざいな口を利いたのは唯一人、プレッシャーを受けても体勢すら崩さなかった青髪の獣族の青年ラガンだった。
「おおよそな。歩いても日没までには辿りつける距離さ。この広い島の中を探し回らないで済むと思えば、四日でも多いくらいだろう。じゃあ――」
シュイの目配せに応じ、幼顔の試験官ペテルが一番近くに座っていたプラチナブロンドの少年マウリに持っていた羊皮紙を差し出した。
「あれ、この赤いバツ印って――それにこの地図は」
マウリは手渡された地図を見るなり、早速違和感に気付いたようだった。他の受験者たちもどれどれ、と席を立って近寄っていく。
「予め下見はしておいたし遭遇した箇所に印も付けてある。一つ補足すると、それはあくまでブラッディオ・ルーガを発見した場所だ」
受験者の何人かが不思議そうな顔をしたが、その一言で直ぐに気付いた者もいるようだった。そこにいるのは目標となる魔物だけではないのだ。他の魔物に捕獲の妨害をされることも考えねばならな

い。
「島の中央が空欄になっているのは空から地形を把握出来ないため。その理由は諸君らも知っての通りだ。山には絶対に近づくなよ、ランカーでも無傷では済まない場所だからな。では明日の朝、今日と同じ時刻にこの建物の入り口に集合しろ。ここは夕方まで自由に使って良い」
受験者たちはシュイから視線を外し、中心がぽっかり空いた地図を不安げに眺める。
「ブラッディオ・ルーガの担当者、誰だったかしら」
セーヌの問いかけにマウリが片手を挙げた。
「僕だよ。大丈夫、ちゃんと特徴は頭に入れてあるから後で紙に書き写すよ」
シュイが退室した後、受験者たちは地図を置いた机を真ん中にして、円陣を組むように顔を見合わせていた。マウリのみが椅子に座り、まっさらな紙に特徴を羅列していく。
「皆ちゃんと覚えてちょうだいよ。あの男が生優しい試験を出すわけがないからね」
「わかっているわよ。ええと、グレイス、だったかしら。あなた、あの試験監督のことを知っているの？」
短髪の黒髪の女グレイスは問いかけたセーヌに眉をひそめてみせた。
「……無知って罪ねぇ。ちょっとした酒場でシュイ・エルクンドを知らないなんて言ってごらんなさいな。大笑いされるわよ？」
「残念でしたー、生憎と私未成年ですから。ふーん、へんちくりんな格好しているけど結構有名人なのね。それにしてもあの人、こんなリスキーな試験して平気なのかな。もし合格者ゼロってことになったら上司に文句言われるんじゃないかしら」
受験者たちから少し離れて書き仕事をしていたペテルは面を上げ

た。
「ご心配なく。合格者ゼロの年、意外と多いですよ」
「なに、そうなのか」
一際大柄な魔族の男ミッコが表情に不安を滲ませた。
「調べれば直ぐわかるような嘘は付きません。――そして、新人が多い年度は死亡者も多い傾向にある。それも紛れもない事実です」
さらりとそう言ったペテルに、ミッコが呻いた。
「私もエルクンドさんとは初見でしたからどんな方か興味はあったんですが、何気に色々と気が回る方ですね。まぁ、決して甘くはありませんけれど」
「気が回るって、どの辺がよ。大体あの人、＞レテの死神＜って呼ばれているんでしょう？」
呆れ顔のグレイスに、ペテルは微笑を浮かべた。
「あぁ、あなたはセーニアの出身ですね。じゃあこれも覚えておくといいですよ。字（あざな）なんて風評みたいなものですから当てになりません。味方に対しても死神のような方ならとっくに淘汰されています。あれで結構な数のファンがいるんですよ。傭兵は恐れられてなんぼですから、彼にとっては不本意でしょうけれどね」
「……へー、シルフィールって際物好きが多いのね。それとも、意外とあのフードの下には美形が隠れているのかしら」
セーヌが腕を組みながら感心したように唸って見せた。
「はは、色々と謎が多いことは確かですけれど。少なくとも、僕が今まで担当してきた試験のなかでは一番好感が持てます。傭兵に覚悟を問い、実際に任務に堪えられるかの適正を見る。この試験にしたって、あなたたちの命を無駄に散らさないことを念頭に置いています。わざわざ現場を下調べまでしているんですから。伊達に支部長を任されているわけじゃなさそうです」
「……言われてみれば、そうかもね」
グレイスが頬に手を当ててそう言った。
「差し支えなければ、もう一つ余計な事を言わせてもらってもいい

ですか？」
「何かしら？」
「では問題です。正式な傭兵ではないあなたたちに敢えて任務をやらせる。その思いの裏返しとは何でしょうか？」
「……ええと」
「そりゃあ、ちゃんとシルフィールでやっていけるかってことだろ」
分かりきったことをと言いたげな表情で、筆を止めたマウリの後ろに立っていた坊主頭の人族、コルトが口を挟んだ。
「うーん、６０点、ですかね。つまり、最低限それくらいこなしてくれないとＢ、Ａに上がる見込みが薄いということですよ」
ペテルの言に受験者たちの顔色が変わった。
「……ふん、なるほどな。Ｄ、Ｃランクで終わる様な傭兵を雇うつもりはない。そういうことか」
獣族の青年、ラガンが微かに口元を引き締めた。
「そんなところでしょうね、断言までは出来ませんけれど。多分エルクンドさんがやりたいのは、Ｂランク以上の傭兵に最低限必要な資質を問うテストです。ですからあなたたちの目標がそれ以下なら辞退した方が――」
「――面白い」
ラガンがペテルの言葉を短く遮るや否や、受験者たちの目に決意の炎が灯った。
幼顔の試験官は一人黙考する。傭兵になる気概は一次試験で問うている。二次と三次、二つの試験は、言わば期待に応えようとする能力を試す物だ。
――今の能力ではなくのびしろを計るつもりか。なるほど、我々の意図を理解しているし考え方もそれなりに柔軟なようだ。後は、彼ら次第かな。
ペテルは受験者たちの熱から遠ざかるように、再び書きかけの書類に目を走らせ始めた。

海に夕日の下半分が沈んだ頃、受験者たちが出て行くのを門の前で見届けてからペテルは建物の脇に備え付けられた外階段を上がっていく。屋上ではシュイが手すりに身体を預け、一早く現れた星を前に佇んでいた。

「エルクンドさん」

「あぁ、終わったのか？」

特に振り返ることなく、シュイが訊ねた。

「ええ、準備万端で臨むつもりのようですよ」

「……それは結構な事だ。力み過ぎて空回りしなければいいが」

「一つ気になったので確認させてください。エルクンドさんは一体どういうつもりであのような嘘を？　ブラッディオ・ルーガは討伐こそBランク任務ですが捕獲となると――」

「――勿論知っているさ、確認するまでもない」

薄ら笑いを浮かべるシュイを見て、ペテルが真顔になった。

「まさか彼らを……」

嵌めるおつもりですか。そう呟いたペテルに、シュイはゆっくりと向き直った。

～障壁 be in the way3～

殺意を剥き出しにしている敵を殺すことなく制するのは非常に難しい。それは相手が魔物であっても例外ではない。討伐に関しては全力で挑めば良いだけであるが、捕獲となれば全く勝手が違う。相手の状態、疲弊の度合いを綿密な観察と推察によって把握しつつ、程よく弱体化させることが不可欠となる。この程良く、というのが曲者で、匙加減を間違えて止めを刺してしまうこと、逆に慎重になりすぎて長日を費やしてしまうことはままある。

ともあれ、まずは捕獲対象のことを良く知り、試行錯誤した上で上手く弱体化させる方法を構築することが肝要。そうすることによって麻酔薬や痺れ薬の効果が高まり、手強い魔物であっても長時間拘束する事が可能になる。

――って、それくらいわかっているし、それなりに覚悟もしていたんだけどねぇ。

グレイスはわしゃわしゃと黒い短髪を掻き乱し、頭の中にあった書物の記憶を霧散させた。視線の先にいるのは度重なる攻撃にも全く堪えた様子のない、角だけでも２ｍはあろうかという深紅の獣。尻を火で焼かれたことに憤っているのか、大きな鼻の穴から地面にある草花が傾ぐ勢いで息が漏れ出している。グレイスの構えた長剣には血煙が残っているが、妙なことに獣の身体には傷らしきものがどこにも見当たらなかった。

肉厚な四肢にずんぐりとした身体、牛のような尻尾に円錐形の美しい角。＞血塗巨獣（ブラッディオ・ルーガ）＜という名に相応しく、その毛むくじゃらな巨体には多少の傷を負っても枯渇することのない驚異的なスタミナが

内包されている。また、とろそうな見た目とは裏腹に易々と狙いを定めさせぬ敏捷さをも併せ持つ。全身を隈なく覆う赤い体毛は水に強く弾力性に富み、上質な緩衝材として使われている代物だ。軽く剣を振るった程度ではあっさりと跳ね返されてしまう。

そんなわけで打撃は殆ど効果がなく、斬撃でダメージを与えるにしても手加減なしに切り付けるしかないのだが、生半な傷では碌々血も出ぬうちに塞がってしまう。それほどの高速再生能を有している。連携の巧みな熟練傭兵のパーティならいざ知らず、まだ駆け出しにもなっていない即席パーティが手を焼くのは無理からぬことだ。

――角の付け根が弱点、だったわよね。

――うん、そのはず、だけど。

＞ブラッディオ・ルーガ＜の背面に陣取っていたセーヌとマウリがちらりと視線を交わした。二人のやり取りが自信なさげなのは、記憶が曖昧だからというわけではない。敏捷な相手の弱点を的確に狙うことの難しさと、仮にそれが出来たとして、捕獲する前に殺してしまう可能性が高いことを理解していたからだ。

もしそうなってしまった場合には、新たな＞ブラッディオ・ルーガ＜を探して更に奥地へと、すなわち島の中央へ向かって歩を進めねばならなくなる。渡された地図にはこの地点以外にもバツ印が幾つか記されていたが、出来ることなら沿岸部に一番近い、それほど強い魔物が生息していない場所で片を付けたかった。それが受験者共通の意見だった。

＞ブラッディオ・ルーガ＜を発見した一行は実戦経験の豊富なラガンとグレイスを敵の正面に配して注意を引き、ユーダ、コルト、ミッコの三人が側面から攻撃、年少者のセーヌとマウリが後方支援に回るという形を採用した。

報告書のデータを参考にし、作戦を吟味した結果、弱点である角以外の部位を攻撃して少しずつ弱らせていくのが有効と思われた。ある程度の傷を負わせて身体から血を抜き、＞ブラッディオ・ルーガ＜の意識を混濁させる。血液は体力の源であり、それを奪えば麻酔薬の導入もすんなりいくはずだった。

けれども、蓋を開けてみれば敵の体毛が予想以上に頑強だったせいでまともに傷を負わせられるのはグレイスとラガンのみ。ミッコの武器は金槌、コルトに至っては体術なので傷を負わせるには適さない。もっと言うと相性が悪すぎるのだ。

埒の明かぬその様子に、業を煮やしたセーヌが無防備な尻に＞燃え盛る炎（フアイア・ボルト）＜を放ち、体毛の一部を焼いて肌を露出させた。

アイディアとしては悪くなかったが、付いた火は短時間で消え、どちらかと言えば消極的に動いていたブラッディオ・ルーガが怒り狂った。長い角を振り回しながら突進を繰り返し、木を所構わず薙ぎ倒していき、力の入った攻撃を当てるのが一層困難になった。擦れ違いざまに攻撃を当てたとして、巨体の勢いをまともに受ければ腕が骨ごともっていかれるのは想像に難くなかった。

実際に獲物と闘ってみて、ある程度の実力を持つ傭兵が数人揃えば討伐が難しくないだろうことは理解出来た。但し、これほどの再生能力を持つ魔物を殺さずに捕獲するとなると数段難易度が跳ね上がるのは確実だ。同時に、この任務を標準で行うというシルフィールの傭兵たちの実力も推して知るべしだった。

「……まずいな、他の魔物が近づいて来ている。おい皆、一旦退却するぞ」

戦況を安定させるべく、周囲の気配を読み取ることに集中していた森族の男ユーダが、すっと頭上を指差した。コルトとミッコが空

を見上げると、山の方から野生の飛竜が二匹、近づいてくるのが見えた。

目暗ましにラガンが煙玉を使い、一旦敵の縄張りから出て茂みに身を伏せたところで周囲の様子を窺う。魔物の追尾がないことを確認し、一行はようやく身体の緊張を解く。

「さっきの煙で気付かれたみたいだな。まーそうなると思ってたけど」

じと目を送ってくるコルトにセーヌは何ですって、とムキになった。

「しょうがないじゃないの！　体毛が障害になっている以上魔法なしで深手を負わせるなんて不可能でしょ！」

セーヌは一発目こそ不意を付いて当てられたものの、それ以降の攻撃は俊敏な動きで回避されていた。避けられた炎弾の一つが後方にあった樹木の枝を焼き、ボヤを起こしてしまったのだ。

「だとしても、炎魔法はないだろ。確実に当てられなきゃ狼煙（のろし）代わりになっちまう。『魔物さん、こっちへ来て～』ってアピールするようなもんだ。もう少し使う魔法を選んだ方がいいんじゃないか」

「気色悪いから妙な声色を使わないでくれるかしら？　発情した暴走海豹（オオルトン）の鳴き真似かと思ったわ」

声を殺しつつも口論を過熱させている二人にシッとラガンが指を立てて窘めた。

「騒ぐな、まだ上空を旋回しているんだぞ。……というか、完全に見張られているな。煙玉を使ったのはまずかったか。一旦戻って対策を練り直した方が良さそうだ」

「くっそ、初日でクリアしたかったんだけどな。そんでもってあの高飛車な試験監督を見返してやるつもりだったのに」

悔しげにそういうコルトに対し、一同は溜息を重ねた。

「夕焼けが出ているし明日も晴天だろうから、その方が良いかも知

れないね」
「へぇ、そういうものなんですか。ミッコさんは博識ですね」
マウリが感心したようにそう言うと、ミッコは頭を掻きながら照れ笑いを浮かべた。

――――二日目。
「それで、よりによってこの天気、かぁ」
セーヌが後ろに視線を走らせると、ミッコが広い肩を申し訳なさそうに縮めていた。
「ま、まぁ外れることもあるさね」とグレイスがフォローを入れる。

南方特有の雨、スコール。バケツを引っくり返したような、と表現されるらしいが、セーヌにはむしろ水のカーテンという表現の方が相応しいように思えた。地面を叩く雨が水溜まりを跳ね上げ続け、音が長々と連なっている。
「でもさ、これなら煙には気付かれないんじゃ」
口を挟んできたコルトに、セーヌが鼻で笑った。
「アンタ馬鹿でしょ。じゃなきゃ頭おかしいでしょ。この雨で炎魔法なんて使ったって効果薄いに決まっているじゃない」
「てっ、てめえは、いちいち人を小馬鹿にしなきゃ気が済まないのか。性格悪いぞ」
「胡乱(うろん)なことね、私敬意を向けるべき相手は選んでいるの」
「何だとぉ」
「何よ、やる気？」
顔を突き合わせて火花を散らしている二人に対し、最年少のマウリがまぁまぁ、とおっかなびっくりといった様子で割って入る。
ラガンは付き合い切れないと言わんばかりに一人、人の輪から外れて葉巻を吸い、代わりにぷかぷかと煙の輪を作っていた。

「あんたたち＞電魔法（ライトニング・ボルト）＜は使えないのかい？」
腕を組んでいたグレイスがユーダとセーヌを交互に見た。
「勿論使えるけれど、これだけの雨だとちゃんとした効果が出るかどうか心配だな」
「そうね、普通は雨天だと威力が上がるものだけれど、水流で威力が拡散する可能性も否定できないわ」
ユーダの語尾をセーヌが引き取る。
「これだけ視界が悪いと狙いを定めるのも難しいですし、攻撃を避けるのも大変かも知れませんね」
マウリの追い打ちにコルトが考え込む。
「そんじゃあ、どうするよ」
「……今日は、諦めた方が良さそうだ。口惜しいが天候ばかりはどうしようもない」
「それしかなさそうだねぇ。となると残り二日、か。明日も降り続くようなら、本格的にやばいね」
ミッコとグレイスが物憂げに空を見た。

「祈るしかあるまい。短時間でケリを付けられるよう綿密に作戦を立てておくぞ」
『おまえが言うな』
一人作戦会議から外れていたラガンに、ミッコとマウリを除いた四人が突っ込みを入れた。

～障壁 be in the way4～

――ラガン。瞬発力、反射神経はBランクでも通用すると思われるが少々協調性に欠ける。また、辰力の制御は不慣れな様子。即戦力候補。

――ミッコ。重い武器を物ともせぬ腕力と恵まれた体格。反面、所々で気の弱さが目立つ。絵が達者で細かい作業の方が向いている節も有。扱える武器を増やせばチームの要に。

――セーヌ。年齢を考えれば攻撃魔法の威力、決断力共に申し分なし。一方でその判断を仲間に伝えず突っ走ることが多く、行動にも粗が目立つ。自己完結する癖をなくせば大化ける可能性も。

――さて、お次は、と。

「何をしているのだ」

唐突に耳元で囁かれ、シュイが椅子から跳び上がりかけた。その両肩を抑えるようにしながら、アミナがヌッとシュイの横に顔を出す。肘を机の角に打ち付けて筆が転がり落ち、カツンと音を立てた。

その慌て振りを見て、アミナはさも可笑しそうに口元を隠す。

「いかんなシュイ。支部長ともあろう者がそのように隙だらけでは。如何に集中しているとはいえ、背後の気配くらいは察知せねばな。ん、報告書を書いていたか」

頬が触れ合いそうなくらいに近いアミナの顔から、シュイが椅子を横に引いて距離を置く。

「び、びっくりさせないでください。何を書こうとしていたか、忘れてしまったじゃないですか」

長々と息を吐き出しながら、シュイが床に落ちた筆に手を伸ばす。

耳にかかった吐息の感触がまだありありと残っていて、無意識に耳に手を当てる。

そんなシュイにはお構いなしに、アミナは机上にある書類を覗き込んでいる。

「綺麗に纏められているではないか。書類仕事も板についてきたようだな」

アミナは感心したように頷きながら頁を捲った。自他共に厳しい彼女からの高評価を貰えたことに、シュイは頬が緩んでしまうのを止められなかった。

「ふむ、最終試験まで残った者が七名。これから更に振るい落とすことを考えると、やや少ないようにも思えるが」

例年、シルフィールの入団試験は多い時で十を超す合格者が出る。平均でも八名といったところだから、最終試験を控えた時点で既にその平均は下回っていたことになる。

「これ以上落とすことはなさそうですけれどね」

「と、言うと」

「端からCランクでやれそうな者が混じっていますから。人数に余裕もありますし、二次試験でかなり事細かに報告書を確認したようです。不測の事態がない限りは、と」

「不測の事態、か。だが、報告書でわかっていることが全てではないからな。それに」

不意にアミナは顔を上げ、カタカタと、雨風に何度となくノックされる窓に目を移す。

「例年、この時期は一週間に一度はこういった雨が降るそうですよ」

アミナはシュイを横目で見た。

「何だ、それも織り込み済みか」

「ええ、着いてから宿の人に聞いたんです」

現地の下見なども含めてここに来てから三週間近く。その間に雨が降ったのは四回。確率的に一度は降るだろうと予見していた。

本来であれば、彼らの力なら三日もあれば十分にクリア出来るで

あろう試験だ。敢えて四日という期限を設けたのは、そういった事情を考慮した上でのことだった。

「期限は三日、但し雨の場合は順延する。こうしなかった理由は？」
「アミナ様は、なんでそうしなかったと思います？」
「質問を質問で返すのは感心せんな」
「先に意見を聞くくらい構わないでしょう」
軽口を叩くシュイに、アミナは不快さを滲ませることはなかった。むしろ、それを望んでいるような節すらあることを、シュイも薄々と気付いていた。おそらくは、彼女も対等に言い合える相手が欲しいのだと。その相手として自分を選んでくれていることは畏れ多くもあるのだが、嬉しくもあった。
思案顔をしていたアミナは傍らにあった、整えられたベッドにぽすんと腰掛けた。微かにバネの軋んだ音がした。
「そうさな。さほどの自信はないが、焦らしたかった、と言うところではないのか」
大正解、とシュイは降参したように諸手を挙げた。さほどの自信がないと言いつつ、こうまで正確に当てられるとちょっと怖い。
期限が迫れば目的に意識が傾く半面、細かな部分を見落としがちになる。試験に落ちるとしたら、その辺が原因になるだろうと読んでいた。
――それをわかっててやる俺も俺だけどね。
自分の意地の悪さはさておき、設定した試験は一人か複数かの違いこそあれ、傭兵になる前にニルファナから課された特訓と同じくらいの難易度だった。その時は十四になる前だったし、マウリを除けば受験者たちの方が年齢も上。年長者に対してあまり簡単な試験をするのも失礼だろう。
「まぁ、いずれにしてもそなたの＞更なる威（プレッシャー）に屈せよ＜を自力で脱した者達だからな。せいぜいその企みに嵌まらぬよう祈るとするか」

そう言い、アミナは人差し指を立てた。
「ついでにもう一つ、訊いてよいか？」
「はい」
「そなたの目から見て、一番伸びそうな受験者は誰だ？」
アミナはどこか楽しそうな表情でシュイを見た。単純な問いかけのようにも思えるが、シュイは即答を避けた。そうですね、と宙に目を遣り、初日の彼らの戦いぶりを思い起こす。

ややあって、今はわかりません、とそう言った。
返答を避けたにも拘わらず、アミナは別段驚くでもなく、顔をしかめることもなかった。或いは想定内の答だったのだろう。
シュイは窓硝子を流れる雨水に、次いでその奥に目を映した。荒々しく蠢く波が、海のいたるところで白い頭を覗かせている。
「まだ誰も、真の意味では追い詰められていないですから」
そう呟いたシュイにアミナは、違いない、と微笑むのだった。

――三日目。

初日に戦った地点よりも数ｋｍほど離れた滝で、受験者達は水浴びをしていたブラッディオ・ルーガを捕捉した。大きさは初日に遭遇したものと殆ど変わらないように見えたが、セーヌに尻を焦がされた痕跡はどこにも見当たらなかった。焼かれた毛までも再生した同じ個体なのか、前のとは違う個体なのかは判別が付かなかったが、個体を指定されていない以上そんなことは大した問題ではない。ブラッディオ・ルーガを捕えることこそが重要だった。

ダメージを与えるには体毛を除去するのが手っ取り早い。その際、

火の魔法が有効なことは確認済みだが、前回思い知ったように怒り狂ったブラッディオ・ルーガの動きは非常に荒々しく、そのままの状態で捕捉するのは簡単ではない。元々の敏捷性と巨体を思えば、まずは機動力を封じねばならなかった。

様々なことを忖度した結果、踏み込む力を余すことなく伝えている後ろ足を狙うのが早道と考えた。とすると、毛に覆われておらず、しかも打撃武器でも有効な部位が一つある。

それに気付くことが出来たのは大きかった。手足には他の部分より多くの神経が通っており、特に爪を痛めるとどんな動物でも歩行が困難になる。跳躍する際には爪先を伸ばすことによって蹴りの勢いを増すのだが、柔らかい指だけではその負荷を支え切ることが出来ない。

受験者達はそつのない動きを見せていた。グレイスやラガンが正面に立って牽制しているのは前回と同じ。その間に、ミッコが後ろから回り込むようにして接近。渾身の力で金槌を振り下ろし、ブラッディオ・ルーガの左後ろ脚の爪を砕くことに成功する。

それ以降、ブラッディオ・ルーガは目に見えて動きが鈍り、興奮時であっても初日の突進力は失われていた。バランス感覚に狂いが生じたのか、正面に突進しているようで少しずつ曲がってしまったり、旋回する時の速度がたどたどしかったりした。砕かれた爪も少しずつ再生してはいる。しかし、他の個所に受けた傷に比べれば明らかに回復が遅い。治りかけた頃には他の爪に一撃を加えられている。完全に動きを制御されていた。

ここで満を持して、攻撃参加を控えていたセーヌが戦列に加わった。立て続けに放たれる＞燃え盛る火焔（ファイア・ボルト）＜がブラッディオ・ルーガの身体の各所に面白いように命中していく。毛で覆われている部位がみるみるうちに少なくなっていき、最後にはひっくり返ったパズルのように、統一性なく毛が残っているような状態になった。

皮膚を剥き出しにした後であれば物理攻撃も普通に通用した。浅い傷ならいざ知らず、深い傷を負わせれば瞬時に回復されることはない。ただ、あまりに深すぎて内臓まで届いてしまうと弱らせる前に死んでしまう可能性もある。そのため、あくまで弱らせることに主眼を置き、血を抜くことに意識を傾けた。

「よし、良いぞ！　段々弱って来てる」

ユーダとマウリは戦っている五人からやや離れた位置を保持していた。前回のように気配を感知し、戦況を安定させる役割は勿論だが、今回は他にも重要な役割があった。初日にセーヌが放った火が付近の物を焦がし、生じた煙が飛竜に気づかれるきっかけを作ってしまったことを考慮し、煙が濃くなる寸前にユーダの＞吹き荒ぶ風（ウィンド・ショット）＜やマウリのスリングショットによる風魔石の射出で拡散させ、薄めていた。

彼らの頭の中には、少なからず今日で決めねばという焦りがあったはずだった。仮に今日失敗したとして、万が一最終日の明日、昨日のような大雨が降るようなことがあれば、合格は一気に遠のくことになる。

だが、彼らは湧き出てくる焦燥に駆られることなく、前日の経験を活かし、細心の注意を以って任務に臨んでいた。このままいけば、シュイの危惧は取り越し苦労に終わりそうだった。

執拗なる攻撃に晒されてかなりの血を失ったのか、ブラッディオ・ルーガの動きも大分弱々しくなってきていた。このままでは殺されると判断したのだろう、ついに逃亡を図るべく、茂みの中に飛び込んだ。

けれども爪を割られ、びっこを引いたまま逃げ切れるほど甘くはない。いち早く森に飛び込み、後ろからコルトが後を追う。程なく

して逃げるブラッディオ・ルーガの横に並び、即効性の鎮静薬を澱粉で固めたボールを半開きの大きな口に放り込んだ。
十秒も経たぬうちにブラッディオ・ルーガの動きが緩慢になっていき、どっと地面に腹を押し付けた。コルトの「よっし」という歓声が、地鳴りにも似た大きないびきが、遅れて追いついてきた受験者たちの耳に聞こえてきた。

これで少なくとも数時間は寝たまま。ぞろぞろと、寝息を立てているブラッディオ・ルーガを囲むように七人が集まってくる。各々、試験の突破を確信したようで、呼気は整っていないが表情は明るい。
「後は拘束用の紐だな。皆、手伝ってく――」
「待て！　また何かが空から来る！」
コルトの言葉を遮り、ユーダが梢の天井を指差した。セーヌやグレイスらもブラッディオ・ルーガから後退し、体制を整える。
グランが何匹だ、とユーダに訊ねた。
「一匹だ。この速度、おそらくは鳥獣だな。かなりの速度で降下してる」
「それならどうとでもなるさね。視界が良くないから油断は禁物だけど」
グレイスが枝葉生い茂る緑の天井を見る。鳥獣の視力は数ｋｍ先の人の顔が認識できるほどのものだ。ユーダが気配を捉えることが出来る距離はそれほどではない。梢の隙間からであっても、既に七人の姿は捉えられていると考えて良かった。
「誰に目標を定めているかわからん。円陣を組んで狙いを固定しつつ初撃を回避、空に戻ろうと上昇する瞬間を集中打で叩く」
ラガンの提案に一同が頷き、七人が開けたスペースで一か所に固まり、迎撃態勢を取る。
それから間もなく、質量が風を切り裂く音が接近してくる。ガサガサと、木々の枝が手折られる音が耳に入った。上を見上げていた

グレイスやミッコらが、山吹色の鳥獣の姿を目に捉えた。

予期せぬことが起こった。回避しようと身構えていた七人をあざ笑うかのように、視界にあった鳥獣の姿が斜め横にずれ、消えていく。両足にある鋭い鉤爪は、七人の誰にも向けられていなかった。

『ああっ』

一同の声が重なり、凍りついたかのように体が硬直した。やや遅れて、鳥獣に折られた梢がポロポロと、七人の頭上に落ちてくる。

「……おい、おーい！　まじかよ！」

「正に漁夫の利」

コルトが頭を抱え、セーヌが低い声で呟いた。

「魔物と魔物が仲睦まじいとは限らない、か。だからと言ってこのタイミングは、ないな」

鳥獣の急降下攻撃に角を折られ、あっさりと息絶えてしまったブラッディオ・ルーガを見て、ラガンはらしくなく、肩を落とすのだった。

～障壁 be in the way5～

後一歩の所で合格をふいにされた受験者たちは、乱入してきた鳥獣を鬼の如き威容で袋叩きにし、それを腰掛け代わりにして今後の方針を話し合った。結論が出るのにさほどの時間はかからなかった。既に夕暮れだったこと、宿まで引き返した場合の移動時間のことも考え、野宿することが決まった。

奥深い森から海岸に出、白い砂浜からさほど離れていない芝生の上に平らなスペースを見つけた。その中でも幾分拓けた場所に寝る場所を確保した上で、ユーダが左手の五指に付けている乳白色の指輪を外し、祈りを捧げるように手を組み、何事かをぶつぶつと呟き始めた。

ほどなくして、両手に挟み込まれていた指輪が光を発し、砂となって指の隙間から零れ落ちていった。それとほぼ同時に、六人の周りを囲むように三角形の白い方陣が二重に出現し、外側の三角形が領域を拡大していく。一定の距離を進んだところで広がり続けていた三辺が停止、中央の方へと折り返した。六人のほぼ真上にて頂点が結ばれ、大きな三角錐が形成されたところでユーダが手を解き、皆に座るよう促した。

構築されたのは感知結界の一種だった。領域内に侵入する者が現れると結界内の空気が乱れて知らせるタイプのものだ。胡坐を掻いていたグレイスは張られた結界を物珍しそうに見ながら口を開いた。

「良いのかいユーダ。この結界魔石、結構値が張るやつじゃないか」

「問題ない。これで試験が突破出来ると思えば安い物だ」

「僕ら、本当に突破出来る、でしょうか」

マウリがそんな疑問を不安げに投げ掛けると、セーヌが眉間にしわを寄せながら手を払うかのように宙を薙いだ。

「当たり前でしょ。今日はたまたま運が悪かっただけよ。思わぬ邪魔が入らなければ捕獲出来ていたわ」
「つってもよ、マウリの気持ちもわからなくはないぜ。滝のような豪雨が降ったと思ったらお次は絶妙のタイミングでの鳥獣。するってーと、今度は隕石でも落ちてくるんじゃないか」
「アンタ、縁起でもないこと言わないでくれる？　私は絶対に受かる、受からなきゃ駄目なの！」
　コルトの他愛ない冗談に、セーヌが外見からは想像もつかぬ迫力で応じた。面食らったコルトが万歳しながらススと腰を引いた。
「並々ならぬ決意があるようだな」
　どこからか、薪を集めてきたラガンが、いかにも気のなさそうな表情で呟いた。七人が＞更なる威（プレッシャー）に屈せよ＜を跳ね除けてここにいる以上、皆が皆、心に期するものがあるのは確かだった。彼女だけが特別な決意で試験に臨んでいるわけではないのだ。
「私は、半年後を待つなんて悠長な事は言っていられないの。家督を継げるか否か、この試験にかかってるんだから」
「家督って、その若さでかい？」
　ユーダはそう言いながらも、ラガンが置いた枯れ枝に火を放った。輪になっている受験者たちの中央から炎が一瞬激しく揺らめいた。セーヌは金髪を手櫛でほぐしながら肯定した。
「エレグスのトゥルニエ家ってご存じかしら」
「かなりの名家だな。ゼノワ家に並ぶ魔道の名門。君はそこのご令嬢というわけか」
「今は分家扱いだけどね」
　言葉に語弊を感じたのか、ミッコがはてと宙に目をやった。セーヌはミッコに流し目を向け、溜息交じりに瞑目する。
「困ったことに、本家がどこだったか定かじゃないのよ。系譜に近い家が三つ集まって名字を共有し、それぞれが本家だと訴えている、要は色々と面倒くさい一族なわけ。加えて、今のご当主はかなり老齢でね。三家で跡目争いに発展しそうなのよ」

「でも、何だって君が矢面に立ったんだい？　両親や兄弟は？」
　ミッコの言葉に、セーヌは目を薄らと開いた。その瞳は少しだけ潤んでいた。
「お父様は、私が小さい頃街に襲ってきた飢竜（ハンガー・ドラゴン）と戦って酷い怪我を負ってしまったの。一命こそ取り留めたのだけど、その時のショックで魔法を一切使えなくなってしまって」
「＞ＡＦ＜（アイール・フェイルアー）、か」
「アイ……何だって？」
「体内に構築されている魔力、辰力の通り道を魔術用語で＞祈道（アイール）＜といってな。それが不具合を起こす状態のことだ」
「次期当主の有力候補とまで目されていた人なのよ。なのにその一件以来、私たちの家は軽く扱われるようになった。今や一族会議での発言権も殆どないような状態なの」
「そりゃあ親父さんもさぞかし辛いだろうな。だけど、それとおまえが傭兵試験受けるのとどういった関連があるんだ？」
　コルトに訊ねられたセーヌは指を咥える様な素振りを見せたが、諦めたように、どこか投げやりに溜息を吐いた。
「うちの家を、どちらかに統合しないかって話が出てるの」
「統合って、つまりはどちらかの家に組み込まれちまうってことか？」
「あろうことか、二家には年頃の男子が何人かいるから誰かの嫁になれ、なんて言うのよ。信じられる？」
　理不尽極まりないと言わんばかりに、セーヌが自分の膝を叩いた。
「アンタの年齢でそんなこと言われりゃあ、必死にならざるを得ないねぇ」
　グレイスが同情したようにそう言った。
「とどのつまり、セーヌさんは結婚したくないってことなんですね」
　マウリが口を挟むと、セーヌは重々しく頷いた。
「少なくとも今はね。家を継げば跡目が必要になるからそうも言っていられなくなるかもだれど、他家の連中とは顔も合わせたくない」

その口振りからは、相当に嫌悪している様子がありありと窺えた。
セーヌは、万人が害虫や毒虫を目にした時に見せるような表情をしていた。
「そうよ、魔法が使えなくなったからってお父様をお荷物扱いした連中なんてどーやって好きになれって言うのよ。戦えなくなったって私たち家族に取ってお父様はお父様なのに」
「わかるよ。結論としては、他家の連中に君の力を示さなきゃいけない、というわけだね」
ミッコが火に枝を継ぎ足しながら頷いた。

「ただの向こう見ずな迷惑千万我儘娘ってわけでもなかったんだな。他人の人生も意外に深――あばばば」
コルトが喋っている最中、セーヌが殆ど無造作に手首を掴み、そのまま＞集束する雷（ライトニング・ボルト）＜を唱えた。坊主に近い髪の毛がチリチリになったのを見て、マウリがプッと噴き出した。その有様は使い古した金属タワシのようだった。
「て、てんめえ何しやがる！」
「なによ！　先に悪口言ったのあんたじゃないの！」
「ちょっと、二人とも夫婦喧嘩はお止し――」
『誰がこんなやつと――』
グレイスに向かって斉唱し、そのことに肩を震わし、再びお互いを睨み合う二人を見て、マウリは二人の息の合った様子に一人感心していた。

――四日目。

早朝。一人ずつ交代で見張りをし、最終日に向けてたっぷりと睡眠を摂った一行は、地図を頼りにしながら一番近いブラッディオ・

ルーガとの遭遇ポイントへと移動していた。沿岸部よりは少し奥まったところだったが、それほど奥地と言うわけでもない。中央の山よりは海岸にずっと近い場所だった。

期限は今日の夕方までとなっている。自分たちの今いる場所から試験場に戻るまでにはそれなりの時間を要することから、空が茜色に染まった頃を目途に、帰路に付かねばならなかった。

受験者たちの中には移動時、焦りを口にする者はいなかったが、挙動には微細な変化が現れていた。先行するラガンやコルトらが今までよりも早歩きになっていたため、歩幅の小さなマウリやセーヌは小走りで付いていくような感じになっていた。また、初日は藪の中に蛇がいないか等、満遍なく気を配っていたのだが、そういった警戒行動にも粗が出始めていた。締め切り最終日と言うプレッシャーからか、誰もが今までにない焦りを感じているようだった。

肌にチクチクと突き刺さるような緊張感。それぞれに一抹の不安を抱えながら、試験の期限時刻を頭に浮かべていた。だが、そんな懸念を一気に払拭する出来事が起きた。ユーダがブラッディオ・ルーガの存在を感知したのだ。

その報告を聞くや否や、受験者達が慌しく動き始めた。セーヌやマウリたちが追いつけぬほどの走行速度ではなかったが、それでも小走り程度ではとても間に合わぬ速度で接近を試みていた。セーヌとマウリは前衛が進む速度に舌を巻きつつも、見失うことはできないと、跳び跳ねるように後を追う。

「いたぞ！」

興奮気味な声が囁かれた。普段は大人しめなはずのミッコだった。彼が指で示した場所は岩の隙間から湧水がちょろちょろと流れている、苔生す湿地帯だった。一同がそこに赤い姿があるのを確認し、これで全てを終わらせる。その覚悟を決めた。

焦る心を諫めようと、ラガンたちは大きく息を付き、昨日と同じような陣形で攻撃を仕掛けた。戦闘開始から早々、ミッコがやや距離を詰め過ぎていたせいで腕に浅い切り傷を負ったが、角による再三の攻撃を潜り抜け、持っていた金槌でお返しとばかりに大きな爪を叩き潰した。

そこからの連携は素早かった。機動力を奪われたブラッディオ・ルーガにセーヌが＞燃え盛る炎（ファイア・ボルト）＜を放ち続けた。何もかもが昨日と似たように進んでいた。体毛が焼き払われたところからグレイスやラガンらが手に持つ得物で切り傷、刺し傷を付けていく。怒り狂うブラッディオ・ルーガだったが、足を引き摺りながらの有効打は望むべくもなかった。

違う点と言えば、前日のブラッディオ・ルーガよりもかなり小柄だったために、セーヌの魔法が命中し難くなっていたこと。それを補正するべく、かなり厳しめな目標指示がラガンやコルトから何度となく出されていた。

それでも、彼女が外したのは僅か数発のみで他は命中させていた。驚異的と言って良い適応能力の早さだった。ユーダとマウリによる火消し作戦、禁煙作戦も功を奏し、特に妨害が入ることもなく、不利を悟ったブラッディオ・ルーガがあさっての方向へと走り始めた。

今度こそ。ただその思いで、七人はブラッディオ・ルーガの追尾を始めた。

昨日に比べて魔法を放つ回数を増やすことを余儀なくされ、セーヌは少し苦しそうに息を吐き出していた。しかしながら、中々弱音を吐くことはしなかった。誇り高い彼女の性格からして、誰かに気遣われるという行為に慣れていないのも一因のようだった。

一方で、先頭を走るラガンは薄暗い道すがら見かけた、その妙に色鮮やかな物に何か引っ掛かりを覚えていた。見覚えがあると言う

わけではない。おそらくは記憶の残渣に紛れ込んでいるものがあった。

だが、現状ではブラッディオ・ルーガを追うのに手一杯でそれを気にしている余裕はなかった。今は最も優先すべき目標があった。

「ちょ、ちょっとちょっと。もう少しペース、落としなさいよ！」

ずんずん先に進んでしまう仲間たちに堪えかねたのか、セーヌが大声で呼び止めた。先行していたグレイスが後方を一瞥すると、大分後ろの方に、セーヌが苦しそうな表情で膝に手を付いていた。

「そうはいっても、あんまりもたもたしてると逃しちまうよ」

「わかってるけど、私はさっき走りながら、ずっと魔法を詠唱しまくって、るのよ。少しくらい、休ませてくれたって」

グレイスに対するその反論には確かに一理があった。少なくとも、一番疲弊しているのが彼女であることは疑う余地がなかった。

「まぁ、そうだな。何なら背負ってやろうか」

かんらかんらと笑いつつ歩み寄るコルトに、セーヌがきょとんとし、次いで顔を真っ赤にしながら胸を腕で庇う。

「だ、誰が背負わせるか！　このスケベ！」

また始まったか。ラガンが眉をしかめながら後ろを振り向き、目の色を変えた。

セーヌの脇にある樹の幹に妙な色合いの、傘のような物が横向きに付いていた。それが唐突に膨らんだように見えた。先ほどの違和感の正体が何なのかが浮き彫りになり、それが全てを台無しにしてしまうかも知れない、そんな確信にも似た予感が脳裏を過ぎった。

「いかん！　セーヌ、それから離れろ！」

呼び掛けられたセーヌがラガンの方を向き、それとは一体何なのかを訊ねようとした。その瞬間、セーヌの横顔に粉塵とも霧吹きの水ともつかぬものが過ぎった。

「なっ、えっ……」

セーヌが反射的に息を呑んだ。小さく開けられた口に向かう空気の流れが生じ、顔に纏わりつくように浮いていた粉末の一部が吸い込まれた。

それによる異変は直ぐに表れ始めた。細い膝ががくがくと笑い、次いで酷い風邪でも引いたかのように全身を振るわせ始めた。薄桃色の唇が真っ青になり、段々と白目を剥き始める。そうと思った時には、身体が斜めになっていた。

どさっというよりも、どすんという音に近かった。側頭部から地面に向かって扇を描き、卒倒した。滑らかで美しい金色の髪が、ぬかるんだ土の上に広がった。

「セ、セーヌさん！」

「どうしたんだこいつ、いきなり倒れたぞ！」

「駄目だ、そこに立ち止まるな二人共！　なるだけ息を吸わないように、彼女をこっちに運んできてくれ」

険しい表情のラガンに、マウリとコルトは束の間顔を見合わせ、その判断がおそらくは正しいと悟ったのだろう。口を真一文字に結びながらも直ぐに行動に取りかかった。小刻みに痙攣しているセーヌの膝と脇に手を入れ、急ぎラガンたちの方へと駆け出した。

「何だ、何が起きた。感知魔法は展開していたが、魔物の気配なんてどこにも感じなかったぞ」

「俺としたことがぬかった。こんな物が生えていたとは。報告書だけに、魔物ばかりに気を取られ過ぎていた」

額を抑えるラガンに、ユーダがミッコらに抱えられたセーヌとブラッディオ・ルーガの逃げていた方角を交互に見た。既に赤い獣の姿はどこにもなかった。

「魔物、ではない？」

マウリとコルトがセーヌを慎重に横たえる傍ら、ラガンは彼女を昏睡に陥れた元凶となるものを指し示した。

「ん、何だいあれ。妙な形をしているけど」

グレイスはラガンが指差しているものに目を細めた。太い樹の幹に、太めの芯に傘の骨組みを継ぎ合わせたような形のものが付着していた。芯の色合いは濃い紫の素地に赤くて大きな斑点といったもの。毒々しいという表現にうってつけの組み合わせだった。

「ユーダが気配を察知できないのも当然だ。破裂するようにして神経毒を含む胞子を遠くまで噴出する質の悪い、しかし分類学上はただの茸だ。かつての傭兵仲間から、そういう厄介な物があるという話を聞いたことがあったが、気付くのが遅かった」

「って、おい。じゃあこいつ、どうなっちまうんだ？　まさかこのままってことは……」

顔を蒼白にしたコルトに、ラガンは厳しい視線を向けた。

「今ならまだ間に合うはずだ。が、一刻も早く適正な処置をしなければ、手の施しようがなくなる」

～障壁 be in the way6～

胞子は藻類や菌類の散布体であり、飛散する性質を持つものも多い。傘状の茸の胞子は傘の裏のひだ部分に最も多く作られる。また、細菌などと違って固い殻に覆われており、熱や薬剤くらいではそうそう死滅することがない。

一部の菌類では、胞子が形成される際に、成熟した胞子が打ち出されるような仕組みを持っている。そのような仕組みは射出される胞子そのものが持つ場合、胞子の入った袋に備わる場合、そして、茸本体が持つ場合がある。

セーヌに胞子を噴出したのは、傘を膨張させて破裂させる習性を持つ稀有な茸だった。破裂によって傘に付いた無数の胞子がより遠方へ、より広範囲へ撒き散らされる。

名前は発見者の銘を取ってチャイカ。その胞子には含まれる神経毒もさることながら、それ以上に恐るべき特性があった。生物の体内に寄生し、細い根を張り巡らせた後、宿主の養分を吸い取りながら成長、分裂を繰り返すのだ。それが毒性を帯びたまま進行するとしたらどうなるか、その結末は火を見るよりも明らかだ。

神経組織がさほど複雑ではない、昆虫などの生物に寄生した場合は、宿主が毒にやられる前に乗っ取りが行われる。その生き物は胞子が茸に成長するまでにじわじわと身体を侵食され、ついには生きた屍となる。後は皮膚や頭を突き破って茸が出てくるのを待つばかりだ。

個体数が少ないながら、古くから要人を病死に見せかけて殺すのに使われていたという曰くつきの毒茸。一定量増えると長い根が皮膚の奥深くまで潜り込み、神経と同化して完全に取り除くことが不可能になる。付いた忌名が＞緩慢なる終局（エンド・オブ・グラジュアル）＜と大仰なのも頷ける話

だろう。

ユーダは横たわるセーヌに治癒魔法を掛けながらその様子を観察し、効果が出ているかどうかを確かめていた。

セーヌは両手の指を突っ張った状態で痙攣を繰り返していた。白目を剥いている眼が、閉じ掛けた目蓋から薄らと覗いている。しゃっくりでもするかのように息を継ぎ、周りから掛けられる声にも一向に反応しなかった。額からは汗の滴が何度となく頬を伝っていた。

「……まいった、一向に良くなる兆しがない。通常の治癒魔法じゃ効果が薄いのか、それとも相当な猛毒なのか。少なくとも俺には治せそうにない」

「後一歩のところで、くそっ」

ラガンが悔しげに樹の幹を叩いた。目の粗い灰色の樹皮が弾け飛び、梢から剥がれた枯葉がひらひらと落ちてきた。

「引き返そうぜ。こいつ、どう見たってこのままじゃ長く持たない」

段々と、胸の上下する頻度が早まってきたセーヌに視線を落とし、コルトが絞り出す様にそう言った。

「自分で言っていることがわかってるのか？　これを失敗したら俺たちは――」

「――あの厳しい試験監督のことだ、確実に不合格になるだろうな。そうかと言って、人命と秤にかけられないだろ。半年後だってあるんだ」

だが、とラガンが口を挟む。

「彼女自身がそれを望まないはずだ。昨日の話を忘れたわけじゃあるまい」

「それはそうかも知れないけれど、死んじまったらお家騒動どころの話じゃない」

「僕も、コルトさんに賛成です。生きてさえいれば、他に道が開ける可能性があるかも知れない」

賛同してくれたアマリに視線を走らせ、コルトは僅かに頬を緩めた。
「でもねぇ、ブラッディオ・ルーガだって相当に消耗しているはずだよ。そんなに時間はかからないんじゃ」
グレイスは煮え切らぬ表情だった。先ほどまで交戦していたブラッディオ・ルーガの体力はかなり削ることが出来ている。もう少しで捕らえられるという確信は全員一致するところだろう。ブラッディオ・ルーガを捕獲してからでもセーヌが助かる可能性にはさほどの変化がないようにも感じていた。
合格したいという気持ちを完全に打ち消すことも出来なかった。一回で受かれるか否かではその後の周囲の印象や評価といった物が大きく異なるのは必然。
しかしながら、その判断を誤って一人でも犠牲者を出せば、不合格になる確率もないとは言えない。セーヌに万が一のことがあって欲しくないという気持ちも多分にあった。気持ちが拮抗しているからこそ、判断に迷っていた。
「引き際を見極めるのも、傭兵としての大事な能力じゃないですか？」
マウリが上目遣いでそう言うと、グレイスは首の辺りを掻いた。
「んー、坊やにそう言われると弱いねぇ。たださ、彼女の意識が戻った時に納得してくれるかは別問題だよ」
「そん時はそん時だ。俺の判断でそうしたって言ってくれていい。恨みを買うのは一人で十分だし、元々あんまり好かれてないからな」
コルトがぶっきらぼうな口調で言った。
「――うん、退くべきだね。戻ろう」
「ミッコ。皆も、それでいいのか？　自分の死ぬ可能性にすら眼を瞑ってここまで来たのだろう？」
「ちっぽけな僕のプライドと人の命、比べるまでもないさ。ましてや、傭兵になればこんな依頼を何十、何百とこなすんだ。十回こんなことがあって十度見過ごす。そんなこと、僕には出来そうにない

から」
　ラガンはミッコと束の間、視線を交錯させた。ややあって、苦しそうな吐息の音が三角耳に入り、セーヌを一瞥してから諦めたように眼を瞑った。
「温いやつらだ。……仕方あるまいな」
「……ラガン」
「彼女の魔法無くしてはブラッディオ・ルーガの捕獲は不可能だった。ならば自分の未熟さを呪うべきなのだろうな」
　そう言うなりそっぽを向いたラガンに、コルトは微かに笑みを浮かべつつもぺこりと頭を下げ、セーヌの身体を担ぎ上げた。

――――

　廊下側から近づいてくる音に反応し、着席していたコルトが顔を上げた。シュイが大部屋に何かを手にして戻ってくると、待たされていた受験者達が一斉に腰を上げ、シュイの方に詰め寄ろうとした。
「手当は終わった。命に別条はない」
　先んじてシュイがそう言うと、受験者達の安堵の息が、大部屋内に響いた。それで緊張感が切れたのだろう。興奮に上書きされていた疲労が再び顔に現れていた。

「良かった、一安心だよ」
　グレイスはそう言って腰を下ろした。眠気に襲われているのか、長い瞬きを繰り返していた。
「後学のために聞いておきたい。どうやって治したんだ？」
　一番前の席にいたユーダが、立ちかけたままの姿勢で訊ねた。
「菌類は乾燥に弱い。取り分け、チャイカはその性質が特に顕著だ。

風すらも届かない、深い森の中でしか生育できないほどに」
シュイが六人の顔を見渡すようにして説明を始めた。皆それぞれに疲れた様子だったが、顔だけはシュイに向けられていた。
消化器系についているものは薬湯を無理矢理飲ませることによって胃で分泌される消化液で分解される。気管支に入ってしまったものについては極力弱めた風魔法を口から一定時間送り込み、乾燥させて殺す。チャイカの神経毒は真っ先に呼吸器系を冒すが、その理由は呼吸をさせないようにして最適な生育環境を整えるためだ。早くにその条件を壊せば増殖する前に死滅する。

簡潔にして要点を捉えた説明が終わると、ラガンは背もたれに寄り掛かるようにして天を仰いだ。
「ブラッディオ・ルーガを追うことで注意が散漫になっていた。焦った結果がこの有様か」
「討伐や捕獲だとどうしても目標物に目が行きがちになる。だが、初めて足を踏み入れる場所では場の特性（フィールド）を把握しておかないと痛い目を見ることもある。警戒心を維持し続けることが出来るかを試す意図はあった。そこは今後の課題だな」
シュイの言葉を聞き、マウリは目頭を抑えた。今頃になって、悔しさが込み上げてきたようだった。
「……身に沁みて、勉強になりました」
「はいお疲れ」
マウリの涙声に対するシュイの素っ気ない言葉に、受験者たちがぐっと唇を噛んだ。温厚なミッコですらきつく目を瞑っていた。重々分かっていた上で選択したことだったが、シュイが発言したこの瞬間、自分たちの挑戦は終わってしまった。胸に込み上げてくるものをどう処理して良いのかがわからないというように、六人は各々異なる姿勢で、しかし面持ちは似通っていた。落胆の様子を隠し切れている者はいなかった。

「では、認定書はここに置いておく。セーヌ・トゥルニエの分は覚めた後で誰か、医務室に届けてやれ。――俺は今しがた、火急の件で呼び出しを受けてしまったんでね。今後の説明はペテルに任せる。じゃ、またな」

――え。

引き戸が閉まった音に遅れること五秒、六人の目が点になった。

「……またな、って、どういうことだ」

さっぱり要領が呑み込めていないそうなラガンを横目に、入口の前に立っていたペテルが教壇の前まで進み、息を限界まで止めていたかのように大きく溜息を吐き出した。

「説明する時間くらいはあったでしょうに、肝心な説明を端折るなんて本当に意地悪なんだから。――改めまして受験者の皆さん、合格おめでとうございます。ようこそシルフィールへ、と言ったところでしょうか」

合格と言う言葉に、全員が一斉に眼を見開いた。ペテルは口元に微笑みを湛えていた。

「な、何でだ。俺たち任務放棄したんだぜ?」

戸惑っているコルトにペテルは、そうですね、と軽く返した。

「仲間が命の危機に陥っている状態で任務を諦めるのはチームとして当然の判断。負傷した仲間を抱えて任務放棄を選択した時点で合格が確定したのです」

驚きの表情を浮かべている受験者達を前にして、ペテルは全てを明かしていたわけではなかった。シュイは三日目の試験が終わった時点で試験官全員を集めて話し合いの場を持ち、彼らの合否につい

て意見を募っていた。
　大半の者は、鳥獣の乱入に関しては滅多にない事故であると判断を下した。仮に最終日の捕獲が失敗したとしても、総合的に考えて傭兵になれる能力は十分に示しているとの見方から、彼らを合格させるべきだと訴えていた。そして、シュイもその申し出を認める言を口にした。
　その代わりに、最終日については予定通りに試験を行うこととした。受験者達が自力で合格出来るならばそれに越したことはない。下手に温情を掛けたと受け取られかねない合格よりは達成感があって良いだろう、と。
　結果としては合格を目前にしてセーヌが倒れて続行不可能になったわけだが、他の受験者達が逡巡を経て来た道を引き返して行ったのを見送り、シュイは試験終了を告げると彼らの帰途の護衛を試験官たちに任せ、先んじて試験場の建物に舞い戻った。

「何だかんだ言ってもエルクンドさん、あなた方の決断が早かったことには満足そうでしたよ」
「……その口振りからすると、あの時試験官達も傍にいたのか」
「別にあの時だけではありませんよ。あなたの感知魔法に引っかからぬよう気を配りつつ、初日から遠巻きに監視していました。いや、三日目のまさかの結末には笑いを堪えるのに苦労しました」
　なんてこった、とユーダが頭を抱えた。四日間監視されていることに気付かなかったのが、余程ショックだったようだ。続いてはブラッディオ・ルーガの捕獲依頼がA級クエストであることを伝えられ、六人全員が唖然とする。
「僕達、そんなのをやらされていたんですか」
　マウリが何とも情けない声を出した。
「そうは言いましても、七人がかりでやるような依頼ではありませんし予習だってしたはず。しかも遭遇場所を記した地図まで付いて

いる。至れり尽くせりです。難度としてはB級のやや優しめの依頼に該当したのでは、と私はそう認識しています」

「うぅ、それはまぁ、そうでしょうけれど」

マウリは嬉しさ半分悔しさ半分といった様子で、目をしきりに擦っている。

「万が一、受験者達が死んだところで罪に問われるわけではありませんし、その心配も殆どなかったと断言しておきましょう。こんなこと勝手に教えちゃったら後で彼に怒られてしまうかも知れませんが、実を言えば今のあなた達には手に負えそうもない魔物がそちらへ向かったことも何度かありました。その際はエルクンドさんが魔物の注意を引き付けて上手いこと遠くに誘導していたんですよ。我々試験官に対しても、窮地に陥ったと判断した時には必ず助けに入るよう命じていました。こちらもそれなりに大変だったんです。特に三日目はあなた達が野宿したおかげで徹夜する羽目になりましたからね」

グレイスがどれどれとペテルを見ると、なるほど、確かに目の下に色濃い隈があった。ペテルはその視線に気付くとわざとらしく口に手を当て、小さく欠伸をしてみせた。

「じゃあなにかい。仮にあのままブラッディオ・ルーガの追跡を続けようとしていたら――」

「――ご本人ではないので確定的なことは言えませんが、おそらくは即刻試験を中断、全員不合格にしていたと思いますよ。そうならなくて良かったですね」

受験者たちが各々、何とも言えぬ表情を見合わせた。

達成できるかできないかのギリギリな状況では、得てして判断を誤りがちになる。冷静に自分達の状況を省みて、時には誘惑を振り捨て、諦める勇気も必要になる。予想外（イレギュラー）の事態に陥れば尚の事だ。

そう諭した上で、ペテルが人差し指を真上に向けた。

「Bランク以上の傭兵になるには、成功を積み重ねる以上に必要なことが一つあります。もうお分かりですよね」

「生き延びることだね」
ミッコの即答にペテルは真顔になり、教壇に置かれている七人分の認定書を見た。
「命は一つ、やり直しは効きません。今回の試験で学べたことは多いはず。A級以上の依頼の大半は、個人の力では達成が困難なものばかり。ですが、同業者の信頼を少しずつでも良い。積み重ねていくことが出来れば、いずれあなたたちも私達が背中を任せるに足る傭兵になるでしょう」
コルトが両腕をぶらつかせ、がっくりと頭を傾いだ。
「勘弁してくれ。絶対落ちたと思ってたのに、人が悪過ぎる」
「別に意地悪のためだけにそういうことをしたのではありません。ぎりぎりの判断を迫られて、尚正解を出せる人でなければ早死にしてしまいます。それを確認出来たことは意義があったでしょうし――」
一呼吸置いて、ペテルが受験者達に笑顔で告げる。
「――エルクンドさんは、捕獲に失敗したら不合格だ、などとは一言も口にしていない。そうでしょう？」
早合点したあなた方が悪い。そうと言わんばかりに、ペテルは得意気に胸を張った。

――――

それから二日後。意識を取り戻したセーヌはベッドから半身を起こし、傍らに座っているコルトから自分が気絶した後の経緯を聴いていた。
「じゃあ、皆合格できたのね」
「納得いかねえことが多過ぎて素直には喜べないけどな。ほい、これがおまえの認定書」

おおよその説明を終えると、コルトはセーヌ・トゥルニエの名前が綴ってある小さな茶封筒を差し出した。セーヌはそれに目を落とし、掛け布団からおずおずと、手を出して受け取った。

「皆に合わす顔がないわ。あれだけ偉そうなこと言っていた私が最後に思いっ切り足引っ張っちゃうなんて」

「その悔しさを次に活かせばいいさ。本物の依頼を失敗したわけじゃないんだから」

セーヌが小さく溜息を付いた。コルトに慰められたことが逆に堪えたようだった。どんよりとした雰囲気に晒されたコルトは、何とかそれを払拭しようと声を高めた。

「あー、そう言えばさ。この依頼、実はA級に相当する任務だったらしいぜ？」

えっ、とセーヌが驚きの声を漏らした。ひでえ話だよな、とコルトが踏ん反り返ると、やっとセーヌの表情から陰が取り払われた。

「ラガンとグレイス以外はDランクからのスタート。D、Cランク傭兵はB級依頼までしか受けられない。つまり、再びこの任務が出来るようになるまでには早くて一年以上、あの二人でも半年はかかるってことだ」

「そっか。昇格するまでにこなせる力を付けろ、ってことなのかな」

「かもな。おまえも、これでしばらくはお家騒動から解放されるんだろ？　だからさ、一緒にBランクの昇格目指して、今度こそ自分達の力で達成しようぜ」

一緒に。その言葉を意識したセーヌは少し頬を膨らませながらも小さく頷いた。その反応を目の当たりにして、コルトも気まずそうに、少し照れ臭そうに視線を逸らした。

「敵わないわね」

沈黙を破ったのはセーヌの呟きだった。コルトはその一言に込められた意味を考えていたようだったが五秒ほどして口を窄めた。

「全てが手の平の上、だもんな。くそっ、散々俺達を振り回しやがって。あんな場面を雁首並べて鑑賞されていたかと思うと腸が煮えくり返りそうだ」
「あんな場面、って？」
ミシッと握り拳を鳴らしたコルトにセーヌが首を傾げた。
「な、なんでもねえよ」
コルトがぷいと顔を背けた。照れ隠しのつもりなのか歯を食い縛っている彼に、セーヌは後で誰かに訊いてみようか、と天井を見上げた。

「あぁ、そういえばもう一つ。試験官から言伝を預かったんだった」
不思議そうに頭を傾いだセーヌに、コルトはシュイ・エルクンドからの言葉だと前置き、表情を引き締めてから口にする。
『誰一人として欠かさず、俺のところまで駆け上がって来い』、その台詞を。

～障壁 be in the way6～（後書き）

前半部：支部長のお仕事、これにて完結です。次話より後半部：ランカーの条件に入ります。

～勃発　ｏｕｔｂｒｅａｋ　ｏｆ　ｔｈｅ　ｗａｒ～

色濃い青空の下には見渡す限り、なだらかな砂丘が連なっていた。永より世界を巡り続ける風は、度々砂礫を巻き上げては空気の色を変えていく。

指先で粒の大きさを感じ取れぬほどに細かい石英。それに覆われた地表には波打つ美しい模様、風紋が残っている。その淡い陰影は地平の果てまでも続いていた。

東西南北、どの方角を見ても同じ景色。違う点と言えばダルマサボテンの生えている数と、蜃気楼のオアシスが揺らめいているか否か。

そんな、土埃の匂いが鼻を突く広大な砂の大海のただなかにおいて、やかんの蒸気が吹き出るような駆動音が、彼方からゆっくりと近づいてきた。

百人くらいは乗れそうな船が、砂の海を滑るように移動していた。尖った船首が砂を掻き分けているため、船尾の方は舞い上がった大量の土煙に隠れてろくに見えない。

船体の色合いは白。一般的に白は光を反射させやすい色だと認識されているため、ジヴーにある船は全てと言って良いほどこの色が使われている。可視光は熱の伝達度にそのまま置き換えられるため、それを反射させれば熱も溜まりにくい。横腹に青字の斜体で大きく描かれている＞エメロア＜の文字はジヴー古来の言葉で＞砂の鯨＜を表している。

船の上、コーティングされたチーク材の甲板はにわかに騒がしくなっていた。足音が近づいては遠ざかり、また近づき、時に混じり

合っている。
「おい、いたぞ！　こっちだこっち！」
男の呼び声にすぐさま反応し、船乗りのような格好をした色黒の男達が振り返った。と思った時には、声が聞こえた方へと駆け出していた。マストの柱近くで大きく手を振っている仲間を発見し、十数段ある階段を二段飛ばしで駆け上がる。
仰向けに倒れていたのはスラッとした身体付きの男だった。青、橙、黄。色鮮やかな大小の三角形をごてごてっと付けたボタン付きの半袖シャツにゆったりとした白いズボン。後ろで束ねられた髪は乾燥してちぢれ、眼はすっかり窪んでしまっている。倒れた拍子で外れたと思われる眼鏡が顔の横にあった。
皮と骨だけになりかけている手で、敵意がないことを表すような中途半端な万歳をした男に、人の頭と思しき影が重なった。更には両手らしきものが加わり、影が目の形になった。
「ちょおい、やばいってこれ！　もう死んでんじゃねえか！」
死相を飛び越えて成仏相すら漂う男の顔を、干からびた人参のような手足を目の当たりにし、若い男が頭を抱えた。
「何もたもたしてんだ！　喋っとる暇あんだったらとっとと日陰に引き込まんかい！」
唯一人、ワイシャツを着た恰幅の良い船長が縁起でもない台詞を吐いた男を怒鳴り付けた。遅れて、倒れている男の身体に幾つもの影が重なり、せーの、と掛け声がかかると同時に干からびた身体が宙に浮いた。
「うわ、かっりぃ」
誰かしらから、そんな言葉が口を突いて出た。体中の水分が失われている証拠だった。
頭と足の両側から男を担いで走り始めた二人の隣で船長が指示を飛ばす。
「手の空いている奴ぁ水……、じゃなかった。コスリン呼んで来い！」

「へいオヤビン！」
「だせえ！　キャプテンだと何度言わせる気だ！」
「サー・イエッサー！」
並走していた男が引き返していくのを肩越しに見つつ、船乗りたちは慌しく甲板の真ん中にある階段を下りて行った。

操舵室の脇に寄り添う日陰に運び込み、魔法の心得のある船員が＞アクア・ボルト＜を掛けてから数分後。先ほどまでからからに干上がっていた男の身体は見事なまでの瑞々しさを取り戻していた。
「いや、命拾いしたわぁ。ほんまおおきに」
頭を掻きながら華やぐ笑みを浮かべる男に、船乗りたちは応じる元気もないようだった。精根尽き果てたようにぐったりと壁に寄り掛かっている。乾燥ワカメかよ、と誰かが力無く呟いた。
「全く洒落になっとらんぜ、先生よぉ。見当たらんと思ったらいつの間にか甲板に出てるんだもんな。渡し船業をして三十年、初めて死者出しちまったかと」
船長が火の付いた葉巻を咥えながらそう言うと、男はきまり悪そうに頭を掻いた。
「いやあ、申し訳おまへん。何分ええ感じの陽気だったもんでうとうとしてしまいましてな。ついつい油断してうたた寝を」
いい陽気、と三角座りをしていた船員たちが空を見上げ、露骨に顔をしかめた。
見るだけでもうんざりするような白い太陽。照り付ける日差しの強さは肌の奥まで灼くほどに暑い。むしろ熱いという言葉が相応しい。船に備え付けられている外気温計に目をやると、目盛りは４９の数字を示している。
「せんせ、それうとうとじゃなくてくらくらの間違いっす。もろ熱射病の初期症状っす」
「この炎天下に日避け対策もせずに三時間余り。よくもまぁ、生き

ていたのが不思議なくらいだ。とりあえず船室に入って休んだ方がいい」

船員の男達が溜息混じりにそう言った。

「そうやね、郷に入っては郷に従えっちゅう言葉もあるし」

「極度の暑さ寒さを避けるのは世間の一般常識だと思ったが」

口を窄めてそう言う船長に、男は悪びれた様子もなく頷いた。

「ところで皆はん、やたらと汗だくでんな。わいの持ってきた名山名水、どないでっか」

誰のせいだと思っているんだ、と何人かが呆れた顔をした。とはいっても喉が渇いていることに違いはない。

「おぅ、じゃあお言葉に甘えるか」

「まいどおおきに！　７００パーズ」

手の平を上に向けた男に船長と船乗り達がキョトンとし、次いで互いに顔を見合せながら自分を指差した。

「大サービスでお一人様１００パーズにまけときまっせ」

『金取るんかい！』

数秒間の沈黙の後にがなり立てた船乗り達に、生還を果たしたユウヒ・タカナシは苦笑しながら、洒落やがな、と手をひらひらさせるのだった。

広大な砂漠をひた走る船。サンドシップと呼ばれるそれは風魔石の元となる鉱石を動力源にし、地面から僅かに浮いて走っている。魔力を含んだ鉱石が取れるジヴーならではのものだ。

「しっかし今回はツキが無かったなぁ。砂嵐で一週間も足止めくっちまうとは。タカナシさんも待たせちまって済まなかったな」

「気にせんでもええ。お天道様の機嫌ばかりはしゃあないからな。他の船も出航を見合わせとるようやったし、乗っけてもらえるだけ

で感謝しとる」
　ユウヒは水の入ったグラスを傾けた。中に入っている氷と氷がカツンと音を鳴らした。
「でも、こんな物騒な時分に何の用があってこんな所まで足を運んだんだい」
　もう一人の乗組員と思しき筋骨逞しい若い男が言った。
「こんな所って、あんさんが言いよるほどここが悪い場所とは思われへんけど」
　ユウヒは氷をがりがりと噛み砕きつつ嵌め殺しの丸い窓から外を見た。が、視界に映ったのは推進する船に巻き上げられた砂煙だけだった。
「そう言ってくれるとこちらも悪い気はしないが、国同士で小競り合いまで始まっちまうとはなぁ。以前から砂賊とかもいたからそれほど治安が良かったとは言えんけど。これから先、どうなるか不安が尽きん。これ以上住みにくくなったら敵わねえよ」

　セーニアが攻めてくるという噂が立ってからというもの、それなりに平穏だったジヴー地域の諸国は、セーニアに臣従すべきだと言う国々と、断固抵抗するべきだと言う国々で対立していた。大国が動くとなれば、それによって生じる情報の波だけで転覆する国もある。
　セーニアに近い側の国としては、真っ先に矢面に立たされることもあって弱腰になるのも無理からぬことだった。いまや小国群は北東と南西で斜めに切ったように分裂していた。どちらが保守派でどちらが過激派という類のものではなかったが、両者の対立は短日の内に深刻化し、つい先日には内乱が勃発した。
「はよ収まればいいんやけどな。一部の者のくだらん思惑で人が死ぬちゅうほどあほらしいもんはない。わいもぼちぼち、のんびりとはしていられなくなったわ」

僅かな間見せたユウヒの凄味のある表情に、きらりと光った眼鏡に、船員たちが声を失った。

「なんちって。どや、わい格好良かったか」

かと思えば得意気に胸を張ったユウヒに、深々と溜息を吐き出した。

「まぁ、タカナシさん。どうみても強そうじゃないもんなぁ」

「それ、よぅ言われるんやわぁ。あまりに言われるもんでわいの硝子の心臓はヒビだらけやがな。けんど、まさかこないな異国の地に来てまでなぁ」

さめざめと泣き崩れるユウヒに、船長が気まずげな顔で髭を摘む。

「ま、まぁ客人にあんまり失礼な事言うもんじゃねぇな」

「ス、スンマセン」

若い男はぺこりと頭を下げた。

「ははは、ええよ。ホンマのことやろからね」

落ち込んでいたかと思えばケロリと立ち直っている。表情豊かなユウヒに船員たちも苦笑いを隠せぬ様子だった。

「一応、武器らしき物は持っているんだな。けったいな形をしているが」

船員の一人がそう言ってユウヒの腰に提げている二本の得物を上から覗き見た。鞘が真っ直ぐでないから剣（ソード）ではないようだが、円月刀（ターバー）にしては緩やかな弧を描いている。一本は長物のようだが、もう一本はやや短めで、その両方に文字の描かれた包帯がぐるぐる巻きにされていた。

「ああ、これか。わいの母国、ケセルティガーノで古来から作られとる刀（かたな）っちゅうもんや。ろくすっぽ抜いた事もないんやけど、ガンつけて抜く振りするだけでも威嚇にはなる。安全に旅するための、お守りっちゅうやつや」

「なるほどな。俺たちも客人を見習って武器の一つや二つ用意しておいた方が良さそうだな。いつ襲われるかわからねえし」

沈黙が降りた。それぞれに思うことがあるのか、考え込んでいる

様子だった。少し前までは考えもしなかった現実。今やその足音がはっきりと聞こえている。

「いつになったらこの近辺、静かになるんですかねぇ」

若い男が少しだけ声のトーンを下げた。周りの者達も俯き気味に唇を噛んだ。

「セーニアに付くか否かを判断したのは上の者だろうが、そいつらにしたってつい先日までそれなりの付き合いしていた連中だ。それがまさか、剣を突き付けられて追い返されるとはなぁ」

やるせないといった表情で、船長が煙と溜息を同時に吐き出した。

「新しい商売相手を見つけなければ駄目っすね。先行き暗いっす」

「船を降りたやつも何人かいるしな。みんな気さくなやつらだったんだが、家族が向こうの国に住んでいるとあっちゃ致し方ない」

「向こうの国、か。そんな言い方を意識せずにしちまう時点で、異常な事態っすね」

「仲違いして一番喜ぶのはこれから攻めてくるセーニアだ。今は手を組んで団結しなきゃいけない時期だと思うけどな」

「キャプテン、セーニアに勝つことなんて出来るんでしょうか？」

身を乗り出してきた年輩の男に、船長が「そこだよなぁ」と組んだ足に頬杖を突いた。

「こっちに分があるはずの地の利も、セーニアに擦り寄った国が前に立てば何ら意味を成さねえ。数も軍備も圧倒的に不利。相当にきつそう――」

「――あの、オヤ……キャプテン。タカナシさん、寝てます」

年若い男がおずおずと手を挙げた。

締まりのない顔で、口の端からだらしなく涎を垂らしつつ寝息を立てているユウヒに、船長は何とも言えぬ顔をしてみせた。

翌朝、ユウヒを乗せた砂船はクリーム色の日干しレンガで作られた要塞の門を通過していた。ほどなく速度が緩められ、轟音を立てながら船底がゆっくりと砂に沈んでいく。船体が半分ほど沈んだところで、傍の建物の屋上から木と金具だけで出来た簡素な橋が架けられた。

オアシスの町ビスレノームに到着したユウヒは乗せてくれた船員達に礼を述べた後、白い長袖のマントを羽織り、迷彩色のリュックを背負った。外気の温度を考えれば半袖どころか裸になりたいところだったが、砂漠の日差しの強さは海のそれとは一線を画す。直接浴びれば皮膚を容易に突き抜け、体中の水分を蒸発させてしまう。またもやミイラになるわけにはいかない。

強い風が吹く度に、地にある細かな砂埃が煙となって町を覆い尽くす。町の外壁の少し上には木々が見受けられる。雨が碌々降らぬこの土地では川沿いか、もしくは湖の傍にしか町が作れない。生活水の確保なくして人が住まうことなど不可能だ。

乳白色の四角い建物が緊密に並んでいた。石造りの建物にしては高さもそれなりにあった。大理石で作られた建物は日干しレンガの建物よりも高価だが、木造建築ほどではない。木々が碌々育たぬせいで建築資材となる木材が手に入らないからだ。

ユウヒは時折吹く砂塵から顔を庇いつつ街を歩く。大通りにはラクダを何頭か連ねた商隊と思しき者達が行き来していた。この気候ともなると馬や牛ではすぐへたばってしまうため、代わりにラクダが荷運び手となる。こぶのある背に乗っている荷はテントと綿花。勿論食料や水樽もぶら下げている。

こぶには水が溜められていると思っている者が多いが、実の所は脂肪の塊だ。脂肪に含まれている成分を水に変えるため、数日くらいは外からの水分を必要としない。身体の栄養分や水分が失われるにつれてこぶは段々と小さくなっていく。また、鼻息の荒い馬と違

って呼気が浅く、回数も少ない。体温が上昇するのを抑えるのに特化した結果だ。

半刻ほども進んでいくうちと民家の姿が疎らになり、正面には赤土色の岩壁が姿を現した。山頂の方には建物の屋根らしき白い物がちらりと覗いている。

中央の辺りに長い階段が延々と、じぐざぐに続いているのを見て、ユウヒは「これを上るのかいな」とぼやきつつ頬を掻いた。既に額は汗に濡れ、マントの中に籠もった熱も相当なものだった。

岩山の中腹辺りの踊り場で、ユウヒは来た道を振り返った。眼下にあるのは強い陽光に白く煌めく町の全景。それをすっぽりと囲う正方形に近い要塞の西側には木々が群生し、寄り添うように大きな大河があった。顔を上げれば彼方に地平線が望める。

「やはりこの景色はわるぅない。ジヴーの者らの心根が大らかなのもわかるわぁ」

浅く息を継いでいたユウヒは名残惜しそうに景色から目を放し、再び階段（げんじつ）と向き合った。

ようやく階段が途切れ、汗塗れの顔を上げると寺院と思しき巨大な建物が視界を席巻した。かなり古い時代のものなのか、塗料は殆ど剥がれ落ちている。柱の所々に亀裂が入り、何本かは崩れたまま放置されている。古代文字がびっしりと羅列された真四角の石床も所々ずれて隙間が目立っていた。

しばしの間、ユウヒは顎に手を当て、物珍しそうにそれらを眺めていたが、何かに気付いたのか目を細めた。リュックを背中で突き上げる様にして背負い直し、ゆっくりと足を踏み出した。

建物の入口の暗がりから日差しへと誰かが進んできた。ユウヒも立ち止まらずに歩を進めた。ややあって、ユウヒは背負っていた荷

物を床に降ろし、近づいてきた男を見上げた。男も足を止め、ユウヒを見降ろした。

珈琲色のショートスタイルの髪。憂いと静けさを内包する漆黒の瞳。左目の外側にある刀傷。以前の面影をしかと見届け、ユウヒは表情を崩した。さも愉快そうに。

「遠方までのご足労痛み入る。――待ち侘びたぞ、友よ」

「虫の知らせっちゅうのもそうそう馬鹿にしたもんやない。元気そうやないか、イヴァン」

～勃発　ｏｕｔｂｒｅａｋ　ｏｆ　ｔｈｅ　ｗａｒ２～

薄暗い回廊をイヴァンが先導し、ユウヒがその後に続く。石床はきちんと掃除されているのか、塵一つ落ちていない。右手からは一定間隔で日差しが差し込み、楕円形に壁を照らしている。左手の壁には壁画らしき物が刻まれていた。三つ首の竜と巨狼、それに菱形の形をしたなにかが幾つも宙に浮いている絵だ。

「例の物はどこに？」

前方から投げかけられた低い声に、ユウヒが視点を変えぬまま応じる。

「こっから北にいった都市、ルトラバーグにある。砂船には乗ってこれんかったが」

「ああ、ちゃんとあるなら構わない」

ややあって壁画が途切れ、ユウヒが視線をイヴァンに戻した。その背中の隙のなさに自然と笑みが浮かんだ。半ば呆れたような笑い方だった。

「エスニールの者らには何度となく言われているだろうが、俺からも礼を言わせてもらう。同胞を助けてくれたこと、感謝する」

イヴァンが礼を述べるとおもむろにユウヒが歩みを止めた。足音が途絶えたことに気づいたイヴァンが肩越しに後ろを見た。

ユウヒの顔からは先ほどまで浮かべていた笑みは消えていた。鬼神の形相。込み上げる怒りを圧し込めるかのようにきつく目を瞑っていた。歴戦の戦士であるイヴァンにすら言葉を継ぐことを躊躇わせるほどの気迫がそこにあった。

ややあって、溜息と一緒にその表情が吹き消された。

「わいには、礼を言われる資格なんてない。もうちょい早くあの場に駆けつけていれば、連中の動向に気い張ってさえいれば。あん時

の後悔は今も胸に刺さっとる」
後悔。その言葉はイヴァンの心にもさざなみを立たせたようだった。束の間、胸を着ている服ごと鷲掴みするかのように抑え、やがて手放した。
「非戦闘員が大勢助かったのはおまえ達のおかげだ。皆も口々にそう言っていた」
「そか。会いにいったんやな」
イヴァンは小さく頷いた。

セーニアの軍による奇襲からなんとか逃れたエスニールの者達は亡命を余儀なくされた。住処を破壊し尽くされたこともそうだが、口封じのために再度命を狙われる可能性があったためだった。
ユウヒとその協力者達は彼らを伴って秘密裏に国外への脱出を計った。ユウヒはセーニア側が早くに追手を放ってくる可能性も考えていたが、結果としてそれは杞憂に終わった。コンラッド・ディアーダの死という想定を超えた事態が発生し、セーニア側が追手を放つ余裕を失ったからだ。
当然ながらその機会を逃す手はなかった。ユウヒは予め手配していた他国の商船の荷にエスニールの者達を紛れ込ませ、海路を使って何か所もの国を巡り、最終的にケセルティガーノへと運んだ。足跡を追えぬように慎重を期したが故のことだった。
「すまんな、従妹殿を守れなくて」
そう言うユウヒにイヴァンは目を伏せ、小さく首を振った。
「言うな。ミレイは立派に戦ったのだろう」
「……あかんわ」
「……ユウヒ」
ユウヒはゆっくりと天を仰いだ。
「ミレイは、わいとイェルドが看取った。実の親が流行り病で亡くなりよった時だって、あれほど心は乱されへんかった。能天気を自

負するわいがあれほどどす黒い気持ちになれるなんて、夢にも思わんかったわ」

言いながら、ユウヒは眼鏡が掛けられたままの両目を片手で覆った。滲んだ涙を見せまいとするかのようだった。

「わいはまだええ、それよりずっと辛かったんはイェルドの方や。多感な時期にたった一人の家族を間近で、考え得る限りの最悪な状況で失ったんやからな」

イヴァンはユウヒから目を逸らした。ずっと見ていればその感情が伝染してしまうことがわかっているようだった。また、ユウヒが口にする言葉を選んでいることにも気づいていた。その光景を明確にイメージさせるのを避けているのかも知れなかった。イヴァンも、敢えてそれを指摘することはなかった。詳細に告げられた所で、今ある暗い感情が更に増すだけのこと。それも、今後の目的に支障をきたしかねないほどの物だということを、薄々と察していた。

「一番近くにいたあいつに看取られたなら、彼女も安らかにいけただろう」

「そう信じたいけどな。今頃二人して、わいらを見とんのやろか」

イヴァンは頷きかけ、そのまま首を傾げた。

「二人、とは」

「ミレイとイェルドに決まっとる」

「イェルドは生きているはずだが」

ユウヒが口を半開きにし、眼をまん丸くした。その反応に、イヴァンは僅かに相好を崩した。

「な、なんやて。それほんまか」

「そうか、本当に知らなかったか」

「ほんま、なんやな。えがった、それ聞けただけでもここに来た甲斐があったわ。きょうびめっきり手配書を見かけなくなりよったから、捕まったか殺されたかと」

ユウヒは微かに笑みを浮かべると眼鏡をはずし、腕で涙を拭おうとした。が、直ぐに思い留まった。砂の吹き荒れる街を歩いてきたためか、砂礫に含まれる鉱物がきらきらと輝いていた。仕方なしにといった表情で、ポケットからタオルを取り出し、顔をごしごしと擦った。

イェルドの手配書に付いていた似顔絵は、手配書が新しく張り直される度に成長を考慮した修正が加えられていった。だが、印象を悪くさせるために手を加えたのが徒となったのだろう。時を経るにつれて、幼少時の彼の顔をよく知る者ならば、こうはならないだろう、と口を揃えるような似顔絵になっていった。二年前のヌレイフ湿原での戦い後、敵方の賞金首が増え過ぎたことも影響したのか、「イェルド？」と首を傾げたくなる似顔絵は終ぞ見かけなくなっていた。

「足跡もまともに掴めていなかったようだし、もういい加減諦めたのだろう。俺の方からも一つ訊きたい。おまえたちはあの日、一緒に行動していたのではないのか」

「残念ながら途中までや。そんで、あの坊主は今どこにおるんや」

「シルフィールで傭兵をやっている。無論素性を隠した上でな。直近の報告ではポリーの支部長になったと耳にしているが」

「ポリーやて。まさか、シュイ・エルクンドかいな！　そりゃ思いつかんかったわ。あいつ頑張りよったなぁ、あの若さでよう支部長なんかに」

「心に期する物があったのだろう。もしかすると今回の件でやつも動くかも知れん。なにしろ相手がセーニアだからな」

「ん、待てよ、シルフィール？　そぉか、それでか！」

ユウヒが思い出したように手のひらをポンと叩いた。

「どうした」

「いや、そんな大したことでもないんやが、三年ほど前やったかな。

前触れもなく家にシルフィールの大物がやって来た事があったんや。茶ぁ飲みに来ましたー言うてな。ほんならこっちも、と真に受けて一番高い煎茶出したらまぁたらふく飲んで、満足して帰っていきよったわ。あの姉さんほんに器が大きいわぁ」

ふむ、とイヴァンが相槌を打つと、ユウヒはそんなわけや、と結んで再び歩き出そうとした。

「――おい、それで話は終わりなのか」

「うん？　ああ、いかんいかん」

「……」

「って、ひどっ！　そんな可哀想なもんを見るような目ぇせんといてぇな。それが久々に会った親友に向ける目かいな」

イヴァンらしからぬ侮蔑の視線にユウヒが声高らかに抗議した。

「なら話せ、簡潔且つ要点を捉えてな」

「あんさん、相も変わらず我が道を行くお人やな」

溜息交じりにそう言うユウヒに、イヴァンは眉間の辺りを撫でた。

「おまえは相変わらず人を食ったやつだ」

「まぁわいの愛らしい性格は横に置いといて」

「自分で言うな。それから、飄々（ひょうひょう）とした、という言葉も辞書に書き足しておけ」

「まぁそんなわけで」

「無視か」

流されたことにムッとするイヴァンを差し置いて、ユウヒが身振り手振りを交えて説明する。

「あの有名なハーベルはんが顔出したんや。いや、姉さんまたえっらい美人やわ、って見惚れとったら台所の方から嫁はんの殺気がびんびん飛んできてな。めっさ怖かったわぁ。まぁ嫁はんも同じくらい可愛いけどな。ぷんぷんと膨らませた頬を見るとこっちもつんつんってしたくなるわぁ。わかるやろ」

「また脱線させる気か。それともただ単にのろけたいだけか」

「両方や」

しまりのない顔で即答したユウヒに、イヴァンの表情は変わらなかった。が、額には薄らと青筋が浮かんでいた。
「もういい。おまえにまともな話を求めた俺が愚かだったのだろうな」
そう言って振り返り、再び歩き出した。ユウヒが「あんさん堅いわぁ」と言いながら慌てて後に続く。
「重い話をしよる時はお茶濁すことも大切やって。話の続きやけどな、世間話しておるうちにエスニールのことについて教えて欲しいってきたんや」
「それで、話したのか」
「あんさん、立ち直りも早いわぁ」
「話したのか」
「ちょおっ、顔近いがな！　そんな怒らんといて。そん表情で凄まれたら女も逃げるで」
顔で余計なお世話だと言ったイヴァンを避けるようにして、今度はユウヒが前に出た。

「わいかて全てを知っとるわけやない。あんさんやミレイから聞いた内容をそのまんま伝えるんが関の山や。力のある族長が魔力の吹き溜まりを散らす役割を負うとかなんとか、やったな？」
不安げに振り返ったユウヒに、イヴァンは、大体そんなところだ、と肩をすくめた。
「どうやら元からなんかしらの仮説を立てとったみたいでな。やっぱりね、とか思わせ振りなことしか言わんかった。あの姉さんも水面下でこそこそ動き回っとるようやな。それがイェルドと関連しとるとは思わんかったけど。ほんで、イヴァンはイェルドと顔合わせたんか」
「ああ、三年ほど前に偶然な。その時は無名に等しかったが、たかだか数年で随分と名を上げたものだ。ディアーダ卿を屠ったのもあ

ながちまぐれではなかったようだな」
「やっぱり、＞ナイト・マスター＜もイヴァンが殺したわけやなかったんやな」
世間ではイヴァンがコンラッド・ディアーダを殺したことになっているが、当事者であるユウヒにしてみれば半信半疑だったのだろう。納得したように頷いた。
「まだ生きていればそうしようとしたさ。出来たかどうかは別としてだがな。それはそれとして、先ほどの話に戻るが、あいつに一体なにが起きた」
「なにって、なんでイヴァンがその話を知っているんや」
イヴァンは口を開きかけたが、視線を逸らし、小さく首を振った。敵対したことから何から、上手く纏めて説明する自信がないようだった。
「その辺の事情を話すと長くなるしややこしくもある。ただ、なにか無くしてあのディアーダ卿が殺されるわけがないからな」
ぼかされたことにユウヒは少し不満げな顔を作る。
「まぁええわ。詳しいところはわいにもようわかっとらんが、ミレイのことが引き金になったんは確かや。耳新しい言霊を口ずさんだかと思ったら洒落にならん力場が生じた。そないしたら、周りにあった亡骸から雪のような光がぎょうさん現れて、空に落ちて行ったんや」
「空に、落ちて、行った」
自分の言動を確認してみろ。そうと言わんばかりにイヴァンが棒読みで繰り返した。
「なんやねん、そのけったいそうな目つき！　ほんまに、なんちゅうか加速の具合がそんな感じやったんやて！　ほんである程度の高さで留まって星みたいに一斉に瞬き始めた。と思っとったらそれを起点にして文字が次々と描かれてな。最後には空を覆い尽くすほどの魔法陣が出現したちゅうわけや。あないなもんは今まで見たこともない」

魔法陣、と小さく呟いたイヴァンは、三年前のおぼろげな記憶を引っ張り出しながら口を開いた。
「それは赤い光だったか。それとも紫」
「ちゃうわ、青白い光やった。それが空からゆっくりと迫ってきたんや。イェルドを軸にして回転するようにな。なんや、引っ掛かることでもあるんかいな」
「いや、いい。続けてくれ」
考え込んでいる様子のイヴァンにユウヒは首を傾げたが、気を取り直して続けた。
「それがやばいもんだってことくらいは一目でわかったからな。どうにかしてイェルドとの接触を阻もうとしたんやけど、あかんかった。イェルドは空から降ってきた積層型の魔法陣に取り込まれたんや」
「取り込まれただと。ただの強化魔法ではなかったのか」
「術が発動した途端に意識が定かではなくなったから、どちらかと言えば呪いの類に近いと推察しとる。辰術の秘技にもそういったもんがある。おのれに一つの命令を挿入（インプット）して自然と一体化し、一時的に膨大な力を引き出すもんや。ただ、あれはちょいと規模が違う」

イヴァンは腑に落ちない様子だった。実際、イェルドが振るった力は一個大隊を短時間で壊滅せしめた。エスニールの乱では＞ナイト・マスター＜が殺されたことばかりが取り沙汰されていたが、どちらかと言えばそちらの方が問題視されるべきことのように思えた。一国の軍を屠るほどの、古竜（エンシェント・ドラゴン）に近い、人の領分を逸脱した力。それが何者かの手によってなされたという事実に。
だが、そんな力の存在を明るみにしたところで混乱を招くだけに終わる可能性もある。開戦を前にそんな敵対者がいると知れれば、

セーニアの国の者たちはこぞって戦争に反対したことだろう。
——隠蔽したかったのはイェルドの存在。もしや、殺すつもりではなく……。
「イェルドと別れる間際」
その一言でイヴァンの思考が現実に立ち返った。
「すまなそうな、なんぞ堪えておるかのような表情で頼まれたんや。『皆のこと、お願い』ってな」
「皆というのは、避難させていた同胞達のことだな。その後は」
ユウヒが鼻当てを上に押すようにして眼鏡の位置を直した。
「その後もなんもない、話はそんでおしまいや。イェルドがわいの前から光と共に姿を消して、それっきり。エスニールを襲ったセーニア軍が壊滅させられ、ディアーダ卿までも殺されていたことを知ったんは、それから三日も経ってからのことや」

ユウヒの手は腰に下げていた刀に添えられていた。柄が浮き上がり、刃が微かに覗いていた。
「イェルドは、エスニールの者らは全てを奪われた上に大きな罪までも背負わされた。わいはあないなことをしでかした連中を、絶対に許されへん」
そう告げたユウヒが、鍔鳴りを強く打ち響かせた。回廊の空気が軋み、その余韻が二人の鼓膜を震わせた。
ユウヒの脳裏には雨が降っていた。冷たくなった白髪の少女が、それを抱いたイェルドの濡れた背中が、鮮明に映っていた。

～勃発　ｏｕｔｂｒｅａｋ　ｏｆ　ｔｈｅ　ｗａｒ３～

トートゥ本部では普段通りの業務が行われていた。ポリー支部の開設によるものか、天井に浮かぶ魔石の霊体の数は心なしか以前より減っているようだが、それでも忙しそうな事に変わりはない。多くの傭兵達が掲示板を物色し、気に入った依頼書を見つけては受付に赴いている。

そんな代わり映えしない光景に黒衣の男と銀髪の少女が加わると、俄かにホール内の空気が変化した。エレグスにいる傭兵ならば見慣れた者も多いであろう黒衣と鎌。息が詰まりそうなほどピリピリしたポリー支部長、シュイ・エルクンド。人目を引きつける銀髪と赤い眼。圧倒されるほどの威厳を纏うランカー、アミナ・フォルストローム。そんな二人が並び立って歩けば傭兵達も関心を寄せる。囁きが囁きを呼び、段々と騒々しくなってくる。

騒いでいる傭兵達を尻目にシュイは足早に支部長室へ向かった。トートゥが長きに亘ってエレグスにおけるシュイの活動拠点だったこともあり、その足取りに迷いは一切感じられなかった。歩幅の小さなアミナは小走り気味でシュイの後に続く。

不意に歩みを止めたシュイが側面にあったドアを横に引いた。アミナがドアの上に付いている＞支部長室＜と書かれたプレートを一瞥する。

「シュイ、ノックくらい――」

「どういうことだ」

後ろから咎めるアミナに構わず、シュイが部屋に入るなり立っていたエヴラールの横顔を睨んだ。エヴラールは不敬な来客を振り返ることなしに書類を淡々とチェックしている。

「魔石が届いたか。セーニアがジヴーへの侵攻を――」

「そんなことを聞いているんじゃない。なんで出兵から十日も経ってから連絡を寄越すんだ。情報の伝達は迅速且つ正確に。本部がいつも口酸っぱく周知していることだろう」

シュイの語気には怒りがこもっていた。本部からの定時連絡に付いては緊急時の連絡以外、エヴラールを経由して行うことになっていた。それは新支部長であるシュイへの負担を減らすためだという名目であるはずだった。だが今回は一緒にいるアミナにも連絡が来なかった。意図して情報を制限していたのは間違いない。

二週間前の9月6日。セーニア四将の一人ビシャ・リーヴルモアは、セーニア教皇アダマンティス・セーニアの命により騎士と魔法使いの混成軍四万余を率いてジヴーへの侵攻を開始した。

ジヴーの小国群は連合のような形をとって国の統治に当たっている。十一の国々からなるが、その領土の全てを合わせてもフォルストロームの半分程度。セーニアと比べれば三分の一にも満たない。付け加えるとその領土の大半が砂漠地帯だ。

現状、十一カ国のうちセーニアに近い四カ国がこぞって連合から離脱しているということだった。防衛する側のジヴーでは降伏論と抗戦論を戦わせた結果、分裂、内乱という状態に陥っている。

今は領土、人数ともに勝っている抗戦側が戦いを優位に進めているようだが、もしセーニアの本隊が現地入りすることになれば。ジヴーの命運などセーニアにすり寄ろうとした国共々彼方へ吹き飛ぶことになるだろう。なにせ同盟を結んでいたエスニールにすら凶刃を振るった前科があるのだ。

エヴラールは持っていた書類を戸棚に戻し、アミナに軽く会釈してからシュイに向き直った。シュイは、なんで俺には会釈がないんだとばかりに舌打ちを返した。それくらいに気が立っていた。

「生憎と、本部からは『連絡はこちらでする』といった報告を受けていたものでな」
「じゃあ、なんでこちらだけ遅らせたんだ」
首を傾げたシュイにエヴラールは、知れたことを、といった表情を作った。かたわらではアミナが、シュイとエヴラールと視線を行来させていた。
「入団試験に集中してもらうためだろう」
「こんな緊急時に悠長なことを。戦争が始まっていると知っていたら」
「試験を受けている受験者達に非はない」
「今回だけ中止なり延期なりするという手立てだってあったはずだ」
エヴラールは首を振りつつもつらつらと反論を展開する。
受験者とてそれぞれに都合や事情といったものがある。ファムラブ島のような僻地で開催した手前、試験を中断するわけにはいかない。傭兵になりたいと願う者達はそれぞれに覚悟を以って臨んでいる。無論、移動時間、交通費用共に馬鹿にならないことは言うまでもない。
仮に戦争のことを試験に携わる者に伝えていたとして、本部が決断を下すまでそちらへの対応はどのみち不可能。なれば、そのことを教えたところで傭兵たちの不安を煽るだけ。シュイを含めた試験官達が心配毎を抱えながら選定に当たったとすれば、悪影響こそあれ良い影響はない。結果、試験が最終段階を迎えるまで伏せて置くのが良いと判断した。至極真っ当な判断だ。
そんな淀みのない説明を聞いていると尚更腹が立ってくる。とは言っても、エヴラールの一存で連絡を制限していたわけではないならば、これ以上ここで口論する意味はなかった。
「もういい、ピエールはどこだ」
「それを聞いてどうするつもりだ」

「それなりに長い付き合いだ。あいつの考えそうなことくらい俺にだってわかる」
エヴラールは即答を避けた。シュイがエヴラールに詰め寄ろうと大きく歩を踏み出そうとした。

「無断で支部を離れた」
その言葉にはシュイだけでなく、アミナも絶句した。支部長の許可なしに支部員が離脱するのは重大な服務規定違反だ。抵触すればどこぞの唾棄に値する青髪男のようにギルドを追われる可能性も否定できない。
「三日前の早朝に一旦ここに来たようだ。脱退届と一緒に書き置きが残されていた。急いで、というよりも念のために支部員を自宅の方に向かわせたんだが、奥方しかいなかった。全て事情は知っていたようだが」
溜息混じりに放ったその言は、暗に一つの事実を示していた。シュイは以前にピエールから故郷がジヴーであることを聞いていた。このタイミングから考えればほぼ確実にジヴーに向かったはずだった。血の滲むような努力で得た準ランカーの称号をかなぐり捨てるほどの、それ以上に、出産を控えているミルカを置いていくほどの決意を以って。

考えを巡らせ始めたシュイをさて置いて、アミナが一歩前に出た。
「何故、みすみす行かすような真似を――」
「するはずがないでしょう」
腕を組んで否定しながらもエヴラールの口調は丁寧そのものだった。シュイがその扱いの違いに唸り声を発した。
「直談判しにきた時にきちんと説得しました。その上での勝手な振る舞いです」

「きちんと支部員の動向を把握しておくのも支部長の役目であろう」
「お言葉ですが、彼は成り立てとはいえ準ランカーですよ。いちいちオシメのチェックなど――おいシュイ、どこへ行く。話の途中だぞ」
エヴラールが顔をやや上げてシュイの背中を見た。
「決まっている。あの馬鹿を連れ戻しに行くんだよ」
軽く肩を竦めたシュイに、エヴラールが眉根を寄せた。
「なにを言っている、支部の業務はどうするんだ。今まで一カ月間丸々空けていたのだろう」
「半年間いれば問題ないはずだろ。期限が切れるまでには戻ってくるさ」

ルクスプテロンと張り合ったセーニア軍、それも四万もの数が相手ではジヴー単体で勝ち目などあるはずがない。質、量共に、以前戦ったナルゼリ軍などとは比較にならない。
セーニア教の騎士達はたとえどんな非道であれ、自分がすることを心の底から正義だと信じることが出来るおめでたさが、もとい信仰の深さがある。罪悪感を抱かずに戦える者達は、強い。
実際、シュイはエスニールの乱の際にその統率力と強さを、女子供にも躊躇なく手を下す容赦のなさを間近で見ていた。武名の高いエスニールの者達が囲まれて次々に串刺しにされ、血溜まりの中に沈んでいく光景を思い出す。今でも吐き気が込み上げる。憎悪、或いは憤怒の黒い炎が噴出する。
自然と拳が軋む音を立て、頬が突っ張った。過ちを今一度繰り返すのならば、もはや自分を抑えられる自信はなかった。
――いざとなれば滅祈歌(あれ)を使ってでも。
決意を目に宿したシュイがドアに歩みかけた。が、つんのめった。

空を泳ぐように手足をバタつかせ、地面すれすれで体勢を立て直した。訝しげに振り返ると、アミナが黒衣の端を片手で握り締めているのが見えた。

「な、何してるんですか」

「一瞬不穏な波動を感じた」

アミナの即答にシュイがたじろいだ。その感知能力は最早入神の域に達するもののようだった。

「別に連中と戦うつもりはありませんけれど」

「それ以前の問題であろう。支部長の脱退など前例がない」

咎めるような口調だったがシュイは怯まずに返した。

「前例がないなら作るまでです。その手を放してください」

「阿呆、万が一そんなことをしたら」

「永久追放処分、でしょうかね」

軽く応じたつもりだったが、アミナの表情が険しくなった。一瞬にして自らの失態を悟った。口にしてからその重みが圧し掛かってきた。

少なくとも追放という言葉は彼女の前で言うべきではなかった。彼女は未だ、フォルストロームでの一件を気にしていたのだ。

三年前、シュイがフォルストロームから追放されたことを知ったアミナは、シュイがエレグスへの船に乗ってから二日後、誰に告げることもなく王城から姿を消した。

音沙汰のなかった期間は実に数カ月にも及び、フォルストローム中がてんやわんやの大騒ぎになったのは言うまでもない。イヴァンらの王都襲撃からそれほど間がなかったこともあって事件や誘拐、陰謀説が跋扈し、各国に捜索隊が派遣される事態にまで発展した。

あれほどフォルストロームが殺気立った時期を俺は知らない。そう語ったのは元キャノエの支部長エヴラールだ。嘘か真か知らないが国のお抱え歴史学者も同じ見解らしい。

アミナはシュイが追放されたことを受けて、内心がどうだったかまではわからないが、誰かを責めるようなことはしなかった。ただ、最初に思い浮かんだことをそのまま実践した。シュイの足跡を辿り、遥々エレグスまで追ってきたのだ。

再会はトートゥの町で果たされることになったが、その時のことはシュイにとって一生忘れられぬものになった。顔を合わせるや否や、アミナはこちらが言葉を発するよりも先に「すまぬ」と呟いた。そのまま整った褐色の顔をくしゃくしゃにして抱きついてきた。気丈なはずの彼女が、人目もはばからずに泣き崩れてしまった。

耳元で何度となく紡がれる謝意の言葉が胸を衝いた。ニルファナを疑った時にも負けぬほどの罪悪感に苛まれた。アミナに一言の断りもなくフォルストロームを発った自分の浅はかさを呪うばかりだった。

シュイはアミナの情の深さと温もりを感じながら、激しく後悔した。実直にして誠実なアミナの性格を考えれば、それくらいはやりかねないという考えに到ってもおかしくはなかった。

結局はニルファナとのやり取りも打ち明け、自分をフォルストロームに連れ帰る気満々だったアミナを何とか納得させた。もし直ぐに戻っていたら、おそらくは軍の誰かしらの手によって秘密裏に処分されたんじゃないかと思わないでもない。勿論、アミナをかどわかした誘拐犯として。

現実に立ち戻ったところで、自分の吐いた言葉が目の前に居座っていた。永久追放。今まで積み上げてきた物を一気に崩す破壊の言霊。

冷静に考えれてみれば、マスターの一存ならともかくとして、自分の勝手な判断でシルフィール全体がセーニアやミスティミストの敵に回る。結果として多くの仲間達が死ぬことになるのは想像に難くない。ギルドにとっては反逆に匹敵する行為だ。既に一人立ちしたと言えるからニルファナの名誉が損なわれる心配こそないが、アミナの言うとおりそれ以前の問題だった。

――だからって、見て見ぬ振りは出来ない。せめて逃がせる者は逃がさないと。

シュイはとりあえず、アミナの手から黒衣を引っ張り戻そうとした。追いすがる情婦から手を払いのける、半ばそのようなイメージを浮かべていた。

しかし、数秒でそんな温い考えはあっさりと覆された。ぐいぐいと袖を引き上げてみたが一向に外れる気配がなかった。

シュイは仕方なしにといった様子で、両手でしっかりと握り締め、かなり力を入れて腋を畳むようにして引っ張った。

――あれ、抜けない。――あっれー、やっぱり抜けない。

微動だにしないことに不安が過ぎった。鎌を扱うくらいであるからして、筋力は人並み以上に鍛えている。裾を持っているアミナにしても、引っ張られた拍子に体勢くらいは崩してもいいはずだ。

ふと、アミナの表情を窺おうと目線を少しだけ上げた。相変わらず愛らしい顔立ちなのは当然として、三角耳がピンと立っていて目付きも普段より鋭かった。小さな口は真一文字に結ばれ、赤い目がやたらとぎらついていてちょっと怖い。華奢そうな外見とは裏腹に腕力、胆力共に一級品だ。

背後に魔皇虎（グラン・ヴァイル）の幻影が見えるような気がした。記憶に新しいファムラブ島で最終試験を危うく台無しにしてくれそうになった危険度１０の化け物だ。やつを誘導する作業は割と、それなりに、かなり命がけだった。

――さ、流石は現役ランカー。でも、俺だって成長してるんだ。支部長のプライドに賭けて負けられるか！

歯を食い縛り、足を踏ん張って、綱引きの要領で思い切り引っ張った。いっそ裂けてしまえとばかりに。だが、どうにも動かなかった。馬車の車輪にでも巻き込まれてしまったかのように。

アミナは、あくまで両手を使おうとせず、片手で袖を持っていた。ワイングラスを持っているかのように握り拳を縦にしていた。別に丸太や大根のように太い腕というわけではない。鍛えられていることは一目でわかるが、年頃の女の子の域を出てはいない。少なくとも自分の腕よりは明らかに細い。

渾身の力を以ってしてもアミナの片手すら振り解けないのか。心に絶望がちらつき、背中に汗が滲んでくるのを感じた。

と、アミナの後ろでエヴラールが口と腹を押さえて生まれたての小鹿のように震えているのが見えた。食中毒かと心配してやるほどお人よしではないし空気が読めなくもない。混じりけのない殺意が湧いた。

――諦めるな！　何度も死を覚悟したレッドボーンのマスターにすら、最後には打ち勝ったじゃないか！

丈夫な繊維で作られているはずの黒衣がついにミシミシと悲鳴を上げ始めた。シュイが上下左右に動きつつアミナの手を振り解こうと唸り声を上げた。

その必死な様子を見ていて情が湧いたのか、アミナの手が僅かに緩んだ。次の瞬間――

館内に轟音が轟き、ホールにいた傭兵や受付達が肩を大きく戦慄かせた。続いては何事かと辺りを見回し始めた。

あっ、とアミナが声を漏らし、恐る恐る顎を引いた。廊下の壁に

強かに頭を打ち付け、痛みに呻いているシュイの姿が、そこにあった。

「大丈夫か。かなり良い音がしたがヒビ割れていないだろうな」
確認するまでもない、エヴラールが心配しているのは支部の壁の方だ。むくりと起き上がったシュイは頭に出来た立派なこぶをアミナになでなでされながら彼を恨めしげに見上げた。
「そういえば、シュイの頭も大丈夫か」
エヴラールはその視線に気づいたのか、取ってつけたようにそう言った。
わかっている。この言葉は、買ったら漏れなく付いてくるおまけみたいなものだ。加えて、頭の中の方を心配されているわけでもないから無駄にイラつく必要もないはずだ。でも何故だろう、ムカついてしまうのは。

いつまでも撫でられていては格好付かなかったのだろう。シュイが颯爽と立ち上がった。アミナは立ち上がったシュイの頭と撫でていた自分の手を何やら物足りなそうに見比べている。
「いつになったら動ける」
「まずは本部の連絡を待て。あと一週間も経たぬうちに結論が出るはずだ」
「一週間って軽く言うが内乱だって起きているんだろう」
その間、果たしてどれだけの犠牲者が出るか。ピエールが無事でいられるのか。考えたくもないことだが、考えずにはいられない。
「下手に先走って一週間が一カ月、一年と延びに延びてしまったらそれだけ多くの者が苦しむことになる。一個人の判断と大勢を乗せた船の舵取りを一緒にするな。今のお前なら多少なりともわかるはずだ」
エヴラールの言い分が正しいことはわかっていた。支部長に就い

てみて、たかだか一つの支部でさえ運営が一筋縄ではいかないのを散々思い知らされたが故のことだ。

シルフィールと一口に言ったって色々な人間がいる。ニルファナのように掴みどころがない者。アミナのように正義感が強い者。ピエールのようなお調子者もいればエヴラールのように規律を重視する者も。そして、彼らの一人一人が様々な思惑や立場で動いている。ギルドに対する執着にしても現状に対する評価にしても十人十色なのだ。はっきり言ってしまえば、ジヴーがどうなろうが知ったこっちゃない、そういった考えの者も相当数いるのだろう。むしろそちらの方が多数派かも知れない。そういった者達にとっては、大きなトラブルの火種を持ち込もうとする者達は煙たいだけの存在だ。シルフィールがセーニアのように強大な敵を作れば割を食う者が大勢いるのだ。

目の前の人間を助ける代わりに、目の行き届いていない、助けられるはずの者を犠牲にするか。或いはその逆か。どちらも人を一人救い、一人を救えなかった事実に変わりはない。違いは達成感と罪悪感の度合いだけだ。だから身近な者には優しくなれるし遠くにいる者には冷たくなれる。遠くの親戚より近くの犬猫とはよく言ったものだと思う。

シュイは正論を貫き通すエヴラールに目を細める。

「一つ聞いて良いかな。あんたはどうして、そう冷静でいられるんだ」

「そうか、おまえには今の俺が冷静に見えるのだな」

一瞬言っている意味がわからなかった。目の前にあるのは普段と何ら変わらぬエヴラールの顔。

だが、直ぐに気づいた。感情を言動に表さぬからといって、何かを感じていないとは限らないのだ。泣いていないからといって悲しんでいないとは限らない。笑っているからといって愉快だとも限ら

ない。この男が平静を保って見えるのは、己を強く律する意志がある。それだけのことなのだ。

感情のぶつけどころを見失ったシュイは、自分を落ち着かせるかのように大きく息を吸い、音が聞こえぬくらいにゆっくりと吐き出した。

「本部がどう動くのか、わかるか」

「無論と言いたいが、およその見当は付くと言ったところだ。今回のセーニアの出兵には大義名分がないからな」

エヴラールはようやく微かに頬を緩め、自分の見解を淡々と語り始めた。

今回の侵攻の名目。それはセーニア教国がジヴーの鉱山資源をルクスプテロン連邦へ輸出しないよう要請したことを受け、ジヴー側がそれを拒否したことが発端となっている。セーニアはこのことを、敵対国の戦争支援と結び付けて因縁を付けたわけである。

一見筋は通っているように見えなくもないが、元々ジヴーの諸国は資源、鉱石や石油などの輸出が基幹産業だ。実際問題として、ルクスプテロンを始めとした諸外国とは戦争が始まる以前から貿易関係を持っていた。加えて、戦争後になっても全体の輸出量はさほど大きく変動していない。つまり、これが明らかな根拠だ、と言えるものなど何ら存在しないのだ。

よくよく考えれば鉱石類や石油などに関しては軍需のみに留まらず、生活雑貨、日用品にも大量に使われる。輸出先がどんな目的で使うかまでは関与しようがないのだから、ただ単に輸出をストップしろと言われたところで、はいそうですか、と簡単に応じられないのは当然のことだ。

中でも、1、2を争う取引を差し止めるとなれば経済に悪影響が出るのは避けられない。それをわかった上で、セーニアは敵方を支援するジヴーを成敗すべし、と無理矢理にこじつけた。関係のない

諸外国から見れば失笑物も良いところだ。

そこで一旦言葉を切り、エヴラールは腕を組んだ。

「妙なのは、セーニアの上層部がそれを理解できぬほど愚かなやつらばかりではないということだ」

セーニアはナルゼリを始めとした同盟国に鉱石類の輸入先が多いからジヴーからの供給が絶たれてもそう苦労しないだろうが、他の国々には痛手になりかねない。ジヴーが攻められるのを黙って見過ごす可能性が低いことは承知しているはずだ。表向きは傍観を決め込んでいるように見えても、裏で阻止しようとする者達が現れる可能性は低くない。

「ふむ、攻めても周りが制止してこないという確信があるのか。はたまた、不興を買ってまでもジヴーを攻めなければならぬ理由があるのか。いずれにしても鉱山資源の掌握だけでは説明がつかぬか」

アミナが壁に寄り掛かりながら考え込んだ。そういう所作も彼女がするといちいち様になっている。

エヴラールはもしかしたら、と前置いて示唆する。

「それ以外に埋まっているものがあるかも知れません。これは未だ憶測の域を出ませんが、失われた技術とか」

シュイは、その意見に対しては否定的な見解を示した。仮に自分がセーニア側にいたとして、そんな物が本当に存在するということを知ったならば、わざわざ戦争など起こさずに少数精鋭で構成した捜索隊を送って秘密裏に盗み出す。有用な物であれば殊更、他国に勘付かれるような真似をすれば競争者を増やすだけだ。戦争という大がかりなパフォーマンスを以って利と理があるようには思えない、と。

だが、その意見は更に否定された。エヴラールにではなく、アミナによって。

「シュイ、大国と言うものは得てして敵が多いものだ。直截的にしろ、潜在的にしろ、な。いつ攻められるともわからぬから必要最低限の兵力は確保せねばならぬ。そして、セーニアの軍事費用は四大国随一だ」

「え、ええ」

それが何か、とシュイは首を傾げた。アミナは顎に人差し指を当て、どう説明すればよいものか、といった感じに目を瞑った。

「そうだな、まず――彼の国は兵数が他国よりずっと多い。当然ながら国はその兵達に給料を払っているわけだ。すると、平常時にも対価となることを兵達がやっているか、という問題が出てくる」

「つまり、警備とか魔物退治とかですね」

「それも一つだろうが。よいか、強国と言われている国の兵が屈強たる理由。それは軍事に特化した訓練をこなした戦闘集団を抱えているからだ。さすれば一般の兵に対して純粋な技量に大きな差を保てるわけだな」

他国では一部を除いて農業、漁業、林業、或いは商業等に従事している者が戦争に駆り出される。つまりは一般人が事があった時に徴兵され、短期間で兵に仕立て上げられる。だが、戦時中の方が異常な状態なのだから全体としての生産性を考えればそちらの方が余程効率的だ。

「裏を返せば、そういった戦争の専門家は非生産的、言ってしまえば無用の長物なのだ。戦争がない限りな」

アミナの言葉が反転して返ってきた。戦争がないと困る。うすら寒さすら感じる言葉だった。

「まさか。ただそれだけのために、戦争を起こしたと？」

「あくまで可能性の話だ。だが事実としてルクスプテロンと戦争していた出だしの一年余り、セーニアは好景気に湧いていた。あの国は豊かだ。人口がうなぎ登りに増え、それでも尚物資が飽和しているくらいにな」

とどのつまり、それは経済活動が停滞していた状況を暗示している。需要に対して供給があまりにも過多になっていた。それが戦争で一気に消費されたのだから好転したとしてもおかしくはない。抑えられていた生産拠点が一気に回り始め、経済が加速したということだ。また、兵役という雇用の場も増えたに違いない。

「セーニア教の者達は良くも悪くも、悪い部分の方が圧倒的に多いが、自分が正しいのだということを疑わない。つまりは多くの者が現状に疑問を持たない傾向にある。それは国全体として豊かである証拠だが、何かを企む連中には都合の良い土壌だとも言える」

エヴラールが口を挟み、アミナも同意するように頷いた。

「ヌレイフ湿原の戦いが躓きだったな。あれほどの犠牲者が出たのはセーニア側にとっても想定の外だったのだろう」

両軍の総力戦が双方にもたらした三万の犠牲。わかりやすいことが、どうやったとて隠し通せぬことが起きてしまった。家族を失った国民達は反戦論に転じ、セーニアは身動きが取れぬ状況に陥った。

――そうだ、エスニールの乱の前。あの時もセーニアでは開戦論が高まっていたはず。

シュイはとある依頼人との会話内容をおぼろげながら思い出していた。カイル・モーガンの母、ケイ・モーガン。彼の夫は開戦論が高まる中で和平を訴えていた、そう言っていた。

開戦が頓挫した理由は考えるまでもなかった。自分によってもたらされたナイトマスターの死。軍事の最高責任者の一人が、国民的英雄が何者かに殺された。何よりもわかりやすい。

「少なくともルクスプテロンを相手に戦争はしづらくなってしまった。強国と戦争すればまた大きな犠牲が出るかも知れない。世論がそう傾いていったからな」

「じゃあ、ジヴーは代わり、だと？」

自然と語気に力が、憤りが込められていた。ジヴーが相手ならそれほどの損害を出さずに勝てそうだから戦争を仕掛ける。本当にそれだけが理由で戦争相手として名指しされたとしたら、とばっちり

という言葉でも足りない。生贄の子羊に等しい。
「無論それだけでもないだろう。セーニアはナルゼリを始めとした同盟を結んでいる途上国から鉱石資源を買い叩いていたようだ。これでジヴーがセーニアに制圧されるようなことがあれば市場価格は跳ね上がる。相対的に影響力が増す」
「要するに、全ては金のためだ、と」
どこか、喉から絞り出すような声だった。アミナもその変化に気づいたのだろう。僅かにシュイの顔から視線を落とした。
「条件が整いさえすれば戦争を使った経済活動も考え得る。言及したかったのはその可能性についてだけだ。ただ、あくまでそれによってもたらされる潤いは一過性のもの。このタイミングになった理由は、今のところは想像する他ない。材料が少なすぎるからな」

アミナは唇に手を当て、そのまま動かなくなった。続く言葉を言っても良いのかどうかを迷っているようだった。吐息の音だけが室内に響いていたが、意を決意したようにシュイを窺い見た。
「そなたは、これ以上セーニアに関わらぬ方が良いのでは……ないのか」
沈痛な面持ちでそう言った。語尾の方はまともに聴き取れぬほどに、弱々しかった。

真鍮の丸いドアノブが一人でに回り、音を立てずにゆっくりと動き出した。ややあって、握り拳を一つ差し入れられるくらいの隙間ができた。そこから三角耳がひょこり、その下にひょこりと二対。

アマリスとティートは穴倉から外の世界の様子を窺う小動物よろしく、室内で書き物をしているシュイに視線を送る。

「どうしたんだろう、しぶちょー。なんだか難しい顔してる……気がする」

「確かに、いつもとは明らかに違う……ようですね。帰ってきてからどうも様子が」

「アミナさんもあんな感じなんだよね。普段はしぶちょーの事とかしょっちゅう話題に上るのに、喧嘩でもしたのかな」

「あの二人の息が合わないと、こちらも調子が狂ってしまいますね」

普段のシュイならばとうに気づかれていてもおかしくなかったが、待てども待てどもその視線が二人の方に向けられることはなかった。ひたすらにノートに筆を走らせ、指で机をトントンと叩き、物憂げに腕を組む。その三行程を繰り返しているだけだった。

「ねね、何か言って慰めてあげた方がいいんじゃないかなー。というか、構って欲しいな」

「原因がわからないのになにをどう慰めるのですか。というか、あなたそっちが本命でしょう」

うずうずと、顔を落ち着きなく左右に揺らしているアマリスを、ティートが呆れ顔で見上げた。

「そんなことないよー。しぶちょーがいない間に僕がどんだけ頑張ったかを聞かせたい、あわよくば褒められたいだけだよー」

「それを構って欲しいと言わずしてなんと言うのですか。大体私の

方が頑張っていましたから褒められるならこちらが先です」

ポリー支部に戻ってから四日目。トートゥ支部での一件以降、シュイはアミナとの接し方に悩んでいた。支部内で何度か鉢合わせることはあるが無言で会釈を交わすだけという有様だった。それでも仕事の話ならば、と思っていたのだが、皮肉なことにアミナの助言がしっかり身になっているおかげで大抵の仕事は問題なくこなせていた。もちろん、わからない振りをして話しかけることはできるだろうが、見え透いた嘘を使ってまで顔を合わそうという気にもなれなかった。

また元のように話せれば。そうと願っているはずなのに、改善しようと積極的に動いているわけでもなかった。

これ以上セーニアに関わるな。はっきりそう言われたわけではなかったが、アミナの言葉にそういった意味が含まれていたのは確かだ。シュイは、事情を知らぬエヴラールがいるあの場でアミナが自分とセーニアとの関係を仄めかすとは想像だにしていなかった。

暗に賢く生きろと言われた気がした。強者に立ち向かう労力は生半可な物ではない。押し流されて、それで終わりになることだってある。セーニアに関わったところで何らお前の益になることはないのだ、と。

そのようにして、善意の言葉を別のことと結びつけてしまうのは何故か。図星だからだ。賢くない生き方だとどこかで自覚していたからこそ反発してしまった。そうでなければ流せたはずだったが、反射的に口が動いていた。

あなたにそのようなことを言われる筋合いはない。初めてにして最悪の口応えだった。言った傍から後悔が押し寄せてきた。

何かを言い返してくるだろうと思っていた。半ば彼女の叱咤を期

待していたくらいだ。それなのに、アミナはただ俯き気味に唇を震わせ、それきり口を噤んでしまった。顔が強張っていて、耳が寝てしまっていた。今にも泣き出しそうな、派手に転んで膝を擦りむいた幼児のような表情。あの時、咄嗟にでも良い。一言『ごめん』と謝っていれば。そう思うと溜息しか出なかった。

セーニア教国のジヴー出兵を知ってからというもの、その他のことが身に入らなくなっているという自覚はあった。記憶を満遍なく覆っていたはずのメッキはいとも簡単に剥がれ落ち、再び物思いに囚われることが多くなっていた。そばにいたアミナがそれに気づいたとしてもなんら不思議はない。こちらの身を案じていたからこそ釘を刺したのだろう。

シュイは、それが男女間のものかはわからないが、アミナが少なからず好意を寄せてくれていると感じていた。そうでなければ、忙しい彼女が遠くからわざわざ足を運び、アドバイザーなどという面倒な役目を引き受けてくれるとも思えなかった。未だそんなこともわからぬほど鈍感ではないし幼くもない。

トートゥ支部でアミナが躊躇いがちに言った言葉。それはひとえに彼女の心根の強さであり、優しさだ。うわべだけのものとはわけが違う。その想いをあっさりと裏切ってしまったことに対しては罪悪感が募るばかりだった。

――今度会ったら謝らなきゃ。許してくれるかはわからないけど。

少なくとも、軽率な言葉を返したことについては謝らねばならなかった。彼女の提案に従う気が全くなかったとしても。

仮にアミナの言うとおりにしたとして、怨念にも似たこの想いをこの先ずっと引きずっていくことになる。セーニアが何かをするたびに忌まわしい記憶が掘り返される。それに耐えられる自信はなか

った。

エスニールの件を抜きにしても、シュイには窮地に立たされたジヴーを見過ごせない理由があった。故郷を守りたいというピエールの決意が、行動が、痛いくらいわかっていたからだ。エスニールが襲撃に晒された時、滅祈歌に頼らずとも今くらいの力があったならば。その思いは力をつけていくほどに強くなっていった。準ランカーにまでなったピエールがそう感じていても不思議ではないだろう。

ピエールとは傭兵になって以来の付き合いだ。共に生死を潜り抜けた仲間が死地に向かったのを見過ごす気にはなれなかった。むざむざ殺させるくらいなら、お腹を空かせた竜の赤ちゃんにでも食べさしてやった方がまだましだ。鍛えているから肉質は少し堅めかも知れないが。

などと一瞬考えてしまうくらいの恨みつらみはあるけれども、ミルカが悲しむだろうし生まれてくる子も不憫だからやはり助けてやらないと駄目だろう。いや、本当にあんなやつどうなっても構わないのだけど。

結局のところは感情論なのだが、損得勘定だけで動けるならば苦労はしない。せめてジヴーには救われて欲しい。それがシュイの偽りなき本心だった。

一方で、その想いがどこからきたのかはわからなかった。ジヴーを助けるついでにセーニアに復讐を成せれるならそれに越したことはないと考えているのか。セーニアに復讐する口実を、ジヴーを助けるという行為に見出したのか。もしくは、かつて救うことができなかった故郷をジヴーに重ねていたのか。

――と、いけないいけない。

骨が鳴るほどに握り締めていた拳を解き、シュイは腕を組み、空を仰ぐ。状況と目標を整理する必要があった。本部がセーニアに敵対すると決断したのであれば何も迷う必要はない。出された指示に

従ってセーニアの目論見を打ち砕くのに奔走するだけだ。
だが、もしそうならなかった場合には、今後の身の振り方を考えねばならないだろう。

ミスティミストを敵に回す。そのことについては、シュイもそれほど心配していなかった。シルフィールが敵を増やしたくないように、ミスティミストも敵を増やしたくないはずだ。ただでさえフラムハートという厄介な宿敵がいるのに、別の敵にかまけている暇などないのでは、という考え方は間違っていないだろう。
シルフィールの傭兵達が一枚岩ではないようにミスティミストも一枚岩ではない。なにしろ仲間殺しすら噂されるギルドだ。少数で組むことがあっても大きな徒党を組むことはないと考えられる。そんな連中が同じギルドの者がやられたからといって一丸となって仕返しをするようなことになるとは思えない。笑い飛ばすか、やられた仲間を恥さらしだと粛清するくらいの勢いがあってしかるべきだ。

残された問題は、シルフィールの傭兵達の助力を得ずにジヴーを勝たすことができるか。勝てないまでも撤退させることができるか。
セーニアに抗戦を表明している国は七カ国。規模から考えて動員可能な兵力は多くて二万弱。対するセーニアはジヴーの四カ国と合わせて四万八千。そのうち本軍は一万に届くとの見方が強い。
地の利に関しても、連合を組んでいた四カ国がセーニアに服従した以上なくなったと考えてよかった。おそらくは前衛がジヴーの兵。それに追従する形でセーニア本軍。犠牲を極力少なくするためにもそうする可能性が極めて高い。
正面からまともに相手をするのは問題外。同士討ちをしたところでセーニア軍は痛くも痒くもない。横っ腹か、または後方から敵本陣を叩く。そうなると奇襲を用いる以外にないだろうが、果たして

見通しのよさそうな砂漠地帯でそのようなことが可能かどうか。
唯一の救いと言えば、戦地の大半がその砂漠になるから軽装兵が主になるだろうということだ。寒暖差の激しい気候で金属鎧を着ていれば全身に火傷、凍傷を負うのは目に見えている。装備の差はさほど影響しないはずだった。それにしたって圧倒的大差が僅かに縮まる程度のものだろうが。

果たしてセーニアに付け入る隙があるのか。シュイはひたすらに知恵を絞っていた。気がつけばまっさらだったノートはほぼ埋まっていた。
大軍を烏合の衆にする方法。または総大将を始めとする本陣の無力化。高位の魔法による遠距離攻撃が成功するならば道はある。だが、敵方にも相当な腕の結界術師がいることは間違いない。デニスに匹敵するとまでは言わずとも、それに近い魔法使いが数人いれば複合結界で防がれてしまう。
仮に奇襲が成功して懐深くに飛び込めたとて時間はかけられない。もたもたすれば敵の増援が四方からひっきりなしに襲ってくることになる。
――まいったな、考えれば考えるほどに絶望的だ。
自嘲に近い笑いが込み上げてきた。勇んで参戦したところで自分にどれほどのことがやれるのか。
一矢報いただけで満足できるような殊勝な心は持ち合わせていない。万に一つでは博打にもならない。やるからにはせめて十に一つの勝ち目を作る。

不意に、ノートに書かれていた文字の色が薄まった。シュイは考えるのを止め、ゆっくりと立ち上がり、灰色の天井を見上げた。アマリスとティートも釣られてシュイの頭上に視線を送った。平べっ

たい円状の照明石が暖色の光を放っていた。
そうと思った時には変化が生じていた。鳥を象った黄色い霊体が照明のカバーをすり抜けてきたのだ。照明石の光はいつの間にか消えていた。
本部からの指令。シュイは緊張した面持ちで、黙然とそれが降りてくるのを待った。眩い霊体はシュイの目の高さまで降りてくると球状に変化し、相当量の文字を一気に綴り始めた。

～勃発　ｏｕｔｂｒｅａｋ　ｏｆ　ｔｈｅ　ｗａｒ６～

深夜、ポリーの町にほど近い山の中に一つの人影があった。宵闇に溶け込んでいるため、輪郭がぼんやりとわかるくらいだ。その周りの茂みからは秋虫の鈴鳴りが幾重にも奏でられている。

濃い灰色の雲の谷間から満月が横顔を覗かせ、淡い光が領域を広げていく。伸び放題の芝生や果実の生った樹木、土に半身を埋めた岩などに色彩が戻ってくる。

それらと同じように、ゆっくりと照らし出されたのは黒衣を脱いだシュイの姿だった。時折吹く風に黒髪が靡き、束の間閉じられた目が露になる。虚心で呼気を繋ぎ、両腕もだらりと下げられていることから、全身の力を抜いているようだ。

月明かりが再び弱まり、立ち消えるや否や、シュイが闇の中で決然と目を開き、勢いよく左手を前へとかざした。

――ヴァー・テ・リオル・デ・シャヴラ・ニド・オルブス

詠唱が進むにつれ、シュイの全身から肩へと魔力の波が迸り、肩から手指へ向かって光の帯が腕を軸に螺旋を描きながら巻きついていった。

コォコォと、窓の僅かな隙間から風が漏れるような音が段々と音量を上げるとともに高音域へ向かってピッチを上げていく。――１オクターブ、――２オクターブ、――３オクターブ。

それこそ、周囲の空気を全て取り込んでいるのかと疑いたくなるような大音量が途中から耳鳴りに変化し、蜘蛛糸のようにほそまって消失した。

時を同じくして、シュイの五指の先に魔力の球が現れた。なにかを掴もうとするかのように指先が向くのはシュイの視線と同じ方角。

「――創世（はじまり）を告げる諷霊（ふうれい）に命ず　我に撫でられし魔譜に其の訃音（ふいん）を

連ねよ」

指先が宝石の煌めきにも似た光を湛え始めた。空を抉じ開けるように、シュイが逆手で宙を掻く。その軌跡を追うように、光の絃で五線譜が描かれた。

大気中の魔力が一気に五線譜に引き寄せられ、次々に＞結合（ユニット）＜を起こして階段状に和音を奏でる。五指の先に生じた魔力の、蜜柑くらいの球体が楕円状に姿を変え、五線譜に並んでいった。

五つ並んだところで、球体の外側の魔力が＞硬化（コーティング）＜され、短時間での弾丸が＞創造（クリエイト）＜される。今にも前方に飛び出さんと小刻みに震える弾丸を、シュイは筋力と魔力の糸で強引に抑え込んでいた。

五指が攣ったような痛みを感じつつも肘をゆっくりと後ろに引く。五線譜が消失し、魔力で象られた弾丸だけがシュイの指先に残った。

シュイはゆっくりと顔を上げ、その視線の先、離れた場所にある二階建ての建屋ほどの岩山を見据えた。そうかと思った時には地を強かに蹴り出し、横方向に疾走しながら目標に向かって左手を突き出す。腕が伸びきる直前、弾丸を絡め取っていた魔力の糸を切断。刹那、五指に集約した魔力が＞解放（リリース）＜され、弾丸が突きの速度と相俟って二段階加速した。縦に生じた衝撃の輪が余韻を残して消えゆく。

射出された五つの弾丸が音を飛び越す速度で光の射線を描く。大気を切り裂きつつも硬化された魔力の弾丸は威力を減衰、拡散されることなしに岩山へと吸い込まれていく。

一際大きな、雷鳴を短く切断したような音が静寂を突き破った。虫達の鳴き声が一瞬にして収まり、代わりに砕かれた岩がカラカラと、斜面を下る音が耳に入ってきた。

吹き返しの風が頬を撫で、黒髪を乱すのを感じながら、シュイは着弾の一部始終を認め、五本の細い白煙が立ち昇る手に視線を落とした。

―――――

翌朝、夜が明けて間もない内に、シュイはポリー支部に程近い三角屋根の民家を訪れていた。シルフィールのマスターの家系、エスチュード家の関連で安く借りることができるものだった。こういった借家は支部の近くにいくつか設けられている。

呼び鈴の紐を引っ張り、二十秒ほどが経過した。もう一度鳴らそうかと引っ込めた手を再度伸ばそうとした途端、錠の外される音がドアの向こうから聞こえた。

人ひとり通れるくらいの隙間が開いたが中には誰もいなかった。

「あれ、しぶちょー。こんな早くにどしたの？」

ごく間近から、確かな声が発せられた。シュイがかくりと視線を下げると、パジャマ姿のアマリスが寝惚け眼を擦りながらシュイを見上げていた。彼女の着ているそれはピンクの素地に白い水玉模様の、いかにもしっくりくるものだった。

「朝早くにすまない。アミナ、いるかな」

「どうしたアマリス。このような時間に誰か――」

廊下の奥の方から声が聞こえた。バスタオルを身体に巻きつけたアミナが髪の毛の水滴をタオルでわしゃわしゃと拭き取りつつひょこっと顔を出した。ちらりと覗く褐色の肩からは仄かに湯気が立ち昇っていた。シュイもアミナも、顔を見合わせ、お互いに固まった。

「……なんて格好してるんですか」

シュイがなんとかそう言った時には、アミナの顔が奥に引っ込んでいた。

玄関で待つこと十分、再びドアが開き、アマリスに入るよう促さ

れた。曲がり角のある廊下の先、リビングに進む。シュイが部屋の入口近くの椅子に、奥の窓際、向かいの椅子にアミナが座る。二人の目線が絡んだが、どちらの口も貝のように動かない。ただ静かに呼吸しているだけだ。仄かな石鹸の香りがシュイの鼻腔をくすぐった。

アミナの顔色を窺ってみたものの、風呂上がりで乾き切っていない髪がいやに艶めかしく、直ぐに視線を逸らす羽目になった。先ほどの光景が頭に蘇り、なんとも気まずい思いに囚われた。玄関に人が入るのは当然であり、そこにタオル一枚で顔を出したアミナが非常識且つ無防備なのだということはわかっている。しかしながら早朝に訪ねてきたという点に関しては自分にも非がある。

消化できぬ感情を抱いたまま、シュイは何のためにここにきたのかを必死に思い出そうとしていた。

ややあって、レースで縁取られた白いエプロンを付けたアマリスが三人分の湯気立つミルクセーキを運んできた。それがテーブルに並べられるとシュイはありがとうと礼を述べ、アマリスが座ったのを見計らってやっと口を開く。

「トートゥ支部でのこと、謝っておきます。生意気なことを申しました、お許しください」

一瞬、アミナは虚をつかれたようだったが、直ぐに表れた感情を消し、カップを持ち上げてふーふーと湯気に息を吹きかける。

「どういう風の吹き回しだ」

「あなたにも本部の連絡はいきましたよね」

「……ああ、確認した」

シルフィール本部は、セーニアへの敵対行為の一時的な解除に踏み切った。今回のジヴー侵攻に関しては不可解な点が多く、支部内

のセーニア出身の多くの傭兵からも不評を買っている模様で、ルクスプテロンとの戦争とは状況が違うこともその決定を後押ししていた。

表立ってジヴーに傭兵を派遣するわけではなく、あくまで自主的な援護に留める、といった注釈つきだったが、落とし所としては悪くなかった。内輪もめの心配がなくなっただけでもシュイにとっては恩の字だった。

「俺は本日、支部を発ちます」

そう言うなり、アミナの無表情が出かける約束を反故にされた子供のように不貞腐れたものとなった。シュイは少しの間返事を待ってみたが、一向に返ってこなかった。このままでは話が進まぬと仕方なしに二の句を継ぐ。

「エヴラールには最後まで渋られましたけれど、シャンに期間限定で支部長を継いでもらう旨を伝えたら納得してくれました」

エヴラールの説得にはかなり難航したが、シュイはあらかじめ準ランカーの一人、シャン・マクシミリアンと連絡を取り合っていた。黒い髪をドレッドヘアにした、一見すると気難しそうだが内面は女好き、平たく言うとむっつり魔族だ。ポリー支部には可愛い女の子がたくさんいると注釈を付けると二つ返事で引き受けてくれた。但し、二ヶ月間という約定はしっかりと取りつけられている。

「し、しぶちょー、本当にいっちゃうの？」

アマリスは人差し指を咥えながらじっとシュイを見た。振り切るのには罪悪感を伴う瞳だった。シュイは申し訳なさそうに、しかし声色は努めて明るくした。

「心配はいらない。アマリスだって俺の実力は知っているだろ」

シュイはアミナに向き直ると佇まいを正し、膝の上に手を置いて深々と頭を下げた。

「今まで本当に色々、お世話になりました。あなたのことは一生忘

れ――おぶっ」

言い終える直前、目の前にあったテーブルが浮き上がった。シュイは成す術もなくひっくり返されたテーブルの餌食になり、後ろの壁とサンドイッチにされた。置かれていた三つのミルクセーキのカップが宙に舞い上がり、床に叩きつけられて割れ散っていく。間があって、ほっとするような甘い香りが室内に漂った。

「あのー、アミナさん。一応、ここ僕の家なんだけどなー」

テーブルを蹴り飛ばしたアミナに、アマリスが指と指とをつんつんと小突き合わせた。シュイは遠ざかりかけた意識の内で、アマリスまで建物の心配が先なのか、とやるせない気持ちになった。

「すまぬな、咄嗟に足が動いていた。修理代は払う」

そう言いつつもアミナはつかつかと前進し、邪魔なテーブルを横にひょいと押しのけ、未だ意識がはっきりしていないシュイの胸倉を掴んだ。

「なんのつもりだ、シュイ。先ほどの惰弱な台詞は」

「――ア、アミナ。いきなり酷いじゃないですか」

打ち付けて赤くなった鼻をさすりながら、涙目のシュイが傲然と立つアミナを睨んだ。フードは取れていたがアミナ、アマリスともに気にする様子は見せなかった。

「なにが一生忘れません、どうかお幸せに、だ」

シュイは、そこまで言ってない、と思ったが口には出さなかった。記憶している限りでは、口喧嘩で勝てたことなど今まで一度たりとてなかった。

「それは、念のためと申しますか、万が一と申しますか」

「万が一もくそもない。そなたの腰の下のものは飾りか」

途端にシュイは困ったような表情になった。

「あの、アミナ、見目麗しい姫君がそのような台詞を使っては角が立つかと」
アミナはつまらぬことを、と言わんばかりに肩をすくめた。
「ふん、まるで小姑のようなことを。そなたも歯の浮く世辞を口にする世俗臭に冒されたか。嘆かわしいことだ」
「いえ、至って本心ですから」
真顔の崩れぬシュイに、アミナがやや顔を赤らめた。が、直ぐに生じた感情を振るい落とさんと首をぶんぶん振った。
「と、ともかくだ。今生の別れみたいな台詞を口にして戦地に赴くなどと縁起でもないことはするな」
熱を伴う瞳がシュイを睨み返した。シュイは気後れした様子もなしに掴まれていた胸倉を引き解こうとして、止めた。どうやっても逃れられなかったトートゥでの出来事が脳裏を過ぎっていた。
「そりゃ、できれば必ず勝つと断言したいところですが、万が一の可能性は否定できませんからね」
アミナはシュイの言葉を吟味しているかのように、視線を余所へとずらした。ややあって、ぐいと押し退けるようにしながら掴んでいたシュイの胸倉を手放し
「自惚れるな」そう言った。
「自惚れ、ですか」
シュイは胸元を整えつつ首を傾げた。
「そなたはセーニアをどこか甘く見ている。おそらくは以前の印象が強いからであろう」
シュイは言い返そうとしたが、言葉が形にならなかった。当たっている部分もあると感じたからこそだった。
「だがな、それはあくまで滅祈歌とやらの恩恵が大きかったからこそ成し得た話。今のそなたは、以前とは見違えるほどに強くなった。それは私も認めている。けれども、フォルストロームであれを使用した時と比べればさほどの差があるとも思えぬ」
「……確かに、そうかも知れませんけれど」

「重要なのはここからだ。三年前、そなたは滅祈歌を用いてイヴァン・カストラに挑んだものの完膚なきまでに叩きのめされた。そうだったな」

苦い記憶を思い起こされたシュイは僅かに口を窄める。

「……完膚なき、と言うほどかはわかりませんけれど、敗北を喫したのは事実です。それがなにか」

「セーニアの要人がやつらによって立て続けに殺された件は話したな」

「ええ、ある程度は自分でも調べました」

「それに関連して、警護隊を率いてイヴァンの一味を退けた男がいる。名をビシャ・リーヴルモア。ナイト・マスターの後釜と目されているセーニアの将だ」

シュイの目が驚きで見開かれた。

「イヴァンを、退けたですって」

俄かには信じがたいことだった。拳を交えたからこそわかるイヴァンの底知れぬ実力。それはランカーにも匹敵するほどのものだ。復讐に燃える彼を退けることが可能な者などそうそういるとは思えなかった。

アミナは物憂げに窓の外を見る。

「一対一で戦ったわけではあるまいが、イヴァンとて一人で乗り込んだわけではない。少なくとも単身でどうにかなる相手ではない。そのことは肝に銘じておけ。統率のとれた精鋭部隊とはそれほどに厄介な存在なのだ」

「……ということは、行ってもよろしいのですか」

「力無き者を守るための戦い。本心を吐露すれば私もついて行ってやりたいが、王族の体面、立場がそれを許さぬ。国民の運命を背負っている以上は個人的感情に身を委ねるのにも限度がある。口惜しいが此度（こたび）は裏方に徹することにする。王族にしかできぬこともあるからな」

確かに、フォルストロームの王族であり、後継と見なされている

アミナがセーニアに敵対したことが明るみになればただで済むはずがない。後々まで国家間の関係に禍根を残すことになるだろう。最悪、敵対したことでフォルストロームとセーニアとの戦争になるかも知れない。シュイとしてもそのような展開は望むことではなかった。

ややあって、アミナは挑むような目付きでシュイを真っ直ぐに見据えた。

「そなたの意志は尊重する。その上で一つ、肝に銘じておけ。この戦争はあらゆる視点から鑑みてジヴーが圧倒的不利。負けたところで誰も咎める者はおらぬ。勝敗に拘(こだ)わらず、必ずここに戻ってこい。今のそなたであればそれができるはずだ」

あぁ、この懐の深さなのだ。シュイは、三年前のアミナの言葉を思い出していた。

『私だけはそなたの道を肯定し続けよう』

その言がどれほど自分を勇気づけ、支えになってくれたことだろう。そして今も変わらずに、アミナは自分にすら確信が持てぬことをできると訴えてくれているのだ。この信頼に報いずして、一体なにに報いればいいのか。

シュイはアミナの計らいに感謝しつつも生還への決意を新たにするのだった。

～思惑　ｅａｃｈ　ｓｐｅｃｕｌａｔｉｏｎ～

シュイが戦地に旅立つ数日前、ジヴーで勃発していた内乱は予期せぬ幕切れを迎えていた。

各々の思惑によりセーニアについた四つの国。テレンダール、エリメド、ガザッタ、モスア。そのうちの二国、エリメドとモスアの最高責任者にあたる人物が突如として消息を絶った。

この事件を受け、残った二国のみではジヴーに対抗できないと判断したのか、もしくは自分達が二の舞になることを恐れたのかも知れない。テレンダールとガザッタの指導者達は私兵と親類のみを引き連れ、国民の大部分を置き去りにして他国へと亡命を計った。

思わぬ好機を逃すまいと、ジヴー連合の統括にあたる賢律院（ルーツ）はセーニアに先んじて各国で要職を担う者を暫定の指導者として軍と共に各国に送り込んだ。これについては少なからず抵抗運動が生じたものの、大規模な武力行使を必要とする事態には到らず、短日の内に収束した。

エリメドとモスアの指導者達の失踪についてはジヴー、セーニア双方の陰謀説、特に暗殺の線が色濃いと巷の話題になったが、それについては両国共に否定。時期的に見て動機となり得る材料はどちらにもあったものの、失踪の足がかりとなりそうな物証がなかったために噂の域を出る事はなかった。

結果として、ジヴーはセーニアとの戦いを前に再び領土を回復するに到った。しかしながら、不安を抱えたまま戦に臨まねばならないことに変わりはなかった。内側では吸収された四国への蔑視が顕在化し、軍議では四国の兵達を率先して前に出すべきだ、というような過激な意見が相次いでいた。

実際、セーニアに対して本陣はガザッタよりも西方に位置してお

り、ガザッタの守備を任された兵達の大半は裏切った国々の兵士で占められていた。彼らを犠牲にして敵兵の力を計ってみよう。と、そこまで不遜なことは考えていなかっただろうが、様子見の思惑があるだろうことは読み取れた。

形の上では内乱が収まっていたものの、お互いに剣で斬りつけ合い、友や親類を失っているのは変えようのない事実。協力して戦おうなどという気持ちになれないのも無理からぬことだ。悪いのは指導者だけ、そう単純に割り切れるはずもなかった。

各々が心にしこりを残したまま、それでも、わだかまりを払拭する猶予は残されていなかった。１５７０年、１０月４日。西進を続けていたセーニア軍の先遣軍五千がジヴーの領土、ガザッタへ侵攻。砂塵吹き荒れる大地にてジヴー連合の防衛軍三千と相見えていた。

円に近い湖を囲うようにして、地中深くに根を張り巡らした木々が立ち並んでいる。それを更に囲い込むかのように建てられている住宅街の白塗りの屋根が燦爛と輝いていた。

砂漠の真珠と名高い町、ユシエルを背にして、ガザッタの守備隊はなだらかな砂丘に陣取り、肌色の砂塵で霞む平地のセーニア軍とにらみ合っていた。

視界はすこぶる悪かったが、自軍の状況を悟られずに済むのはガザッタ側にとってありがたいことだった。防衛線に充てられていたジヴーの兵達はセーニアの先遣軍を間近にして動揺を隠し切れていなかった。砂煙の向こうで敵軍が行っているのは単なる隊列交替の確認作業だ。しかし、その迅速さ、一糸乱れぬ様は一つの生き物、あるいは人形といった印象だ。これから存分に味わうことになるだろう、敵軍の錬度の高さが窺えた。

ジヴーの方はと言えば、どこか精彩に欠けた動きだった。一つの陣形を組むのにももたつく。あるいは、肩がぶつかり合っただけで揉め始める兵達の姿も見受けられた。

ガザッタを守るべく展開されたジヴーの軍には、セーニアに付こうとしていた四国の兵達も多く組み込まれていた。それ故に先だっての内乱が尾を引き、諍(いさか)いが頻発していた。

いっそその者らを抜かして戦うという手立てもあったかも知れないが、現状侵攻に晒されているのはそのうちの一国ガザッタだ。兵達が母国を守るために戦わない、もっというと、裏切った国々のために他の七カ国の兵達が命を懸けるというのも妙な話だった。だからといって放置してしまえば四国の兵達がセーニアの駒となるか、虐殺されるのを見過ごして周辺諸国の印象を悪化させることになる。どちらにせよジヴーに選択の余地はあまり残されていなかった。

敗北、蹂躙、愚かしい。開戦を前にして、ジヴーの兵達の脳裏には否定的な言葉ばかりが思い浮かび、消えて行った。敵の布陣から見て取れる迷いのなさが、否が応にも負の予感を感じさせるのだ。

この状況に立たされてみて、ピエールはエヴラールの言葉を思い返していた。たった一人で赴いたところで何ができるか、彼はそう言った。

少なからず、ピエールにはそれに対する反骨心、自分が何とかしてやろうという気概があった。セーニア軍と、ジヴー軍の現状を目の当たりにするまでは。

戦場になりそうな地形図を頭に入れ、あらゆる視点から勝算が望めないかを考え、それを実行するつもりでここにやって来た。そんな努力を、本気でこの戦に勝つつもりでいたことを、今では恥じてすらいた。

丘の上に陣取っているため、坂の下にあるセーニア軍の陣形は薄

らとだが一望できた。広大な砂漠に住まう者達は概して視力に優れている。

かくいうピエールも視力には自信があった。５００m先にいる鳥の種類の判別が付くくらいには。戦地が砂漠であることを見越していたのかセーニア側に騎兵は全く見受けられず、軽装の歩兵が多いようだった。馬はただでさえ水を良く飲むため、砂漠で運用するのは困難極まるのだ。対するジヴーの軍にはラクダの騎兵がいた。足は馬ほど速くないがその体力は折り紙つきだ。

とはいうものの、それが果たしてどれほどのハンデになるか。セーニアはルクスプテロンとの実戦を経験してからさほどの時が経っていなかった。対するジヴーは昨今、侵略に晒されるような事態に陥ったことがない。もちろんそれは本来歓迎されるべきことであるし、兵達が鍛錬をしていないということにはならないだろうが、経験面や戦闘勘で大きく後れを取っているのは否めなかった。

ピエールは、一兵卒として戦いに参加したのは正解だった、と独りごちた。もし仮に、名のある傭兵としてジヴー軍に参画していたとしたら。シルフィールの準ランカーという肩書きは各国でも通用するし、少なからず兵を預けられる立場になっていた可能性もある。

けれども、それは死兵と言うべきものに限りなく近い存在だ。感情論ではあるが、ピエールには部下と認識した者達の命が失われるのを間近にして割り切れる自信はなかった。かつて、任務で後輩を見殺しにせざるを得なかった苦い記憶は、今も尚燻ぶっていた。同時に、国の一大事に対してジヴーが一致団結できていない現状には、歯痒さとも憤りともつかぬ想いを抱えていた。

つい先日、ピエールはユシエルの町酒場で兵士達と意気投合し、共に夜明けまで飲み明かしたばかりだった。彼らは皆が皆セーニア

につくことを由としているわけではないようだった。
実際に話してみてわかったことだが、セーニアへの従軍はごく一部の指導者によって計られた思惑であり、決して国民の総意ではなかったとのことだった。ある日、そういったお触れ書きが町の各所にある掲示板に貼り出され、続いては徴兵の命令が下り、よくよく現状が呑み込めぬままセーニアに付くことが決まっていたとのことだった。
ただ、指導者達のその選択については強く否定する感情も起きないようだ。ことに、セーニアの侵攻に真っ先に晒されるであろう四国は勝とうと負けようと甚大な被害を被ることに変わりはなく、国を守るという点に拘るならば有り得る判断だと評価する者もいた。
町の者達の中には同胞を敵に回すのは心苦しいからと町を去った者もいる。けれども、それは伝手のある者に限られたようで、大多数の者はここに残り、今までと同じ生活を続けていた。引っ越しをする余裕がなかったり、先祖の墓を守らねばならなかったり。それ以上に、自分達の家や家族の命のために、やむを得ず残った者達だ。
家族のために。それは、自分自身が傭兵になった強い動機をピエールに思い起こさせた。何年も会っていない父母や兄弟達の顔が鮮明に思い浮かんだ。続いては、長らく付き合った末に告白し、妻となったミルカを、まだ見ぬ我が子の顔を想像する。子供が出来たと知らされ、わずかな戸惑いと、得がたい喜びが頭の中を駆け巡ったことが、昨日のことのように思い出される。
同様にして、ここにいる者達には無事に帰ってくることを願ってやまない家族や友人達がいるはずだった。それが全て喪われようとしているのを見過ごすことは、矜持が許さなかった。
どよめきが起こり、ピエールが下がり気味だった視線を素早く持ち上げた。眼下の砂塵に映る影が少しずつ大きくなっていく。その後ろに立ち昇るのは火山が噴火したかのような砂煙だ。

敵軍が前進を始めたのを視認し、ジヴー軍の陣中内で慌しく指示が行き交い始めた。前列にいた弓兵達が矢を番え、狙いを定めて引き絞る。

弦がキリキリと軋むのを耳にしながら、ピエールは一年以上愛用している剣の柄を握り締めた。しっくりと手に馴染んだ、束の間外界の熱さを忘れさせてくれるひんやりとした感触に頼もしさを感じた。鞘の中にある純白の刀身には薄らとであるが、木目のような線が密に走っている。装飾が施されているというわけではなく、列記とした木でできた剣。だが、その切れ味は金属製の剣にも劣らず、何より軽い。世界一堅いと言われ、炎でも焼けぬ樹木を切り出して作った逸品だ。

――必ず帰るって約束しちまったからな。

自分の帰りを心待ちにしている女性がいる。無事戻れば小言を口にしながらも喜んでくれるだろうが、戻らねばおおいに泣かせてしまうだろう。まだ新婚の肩書もろくろく取れ切れぬうちに彼女を未亡人にさせるのは忍びない。

たとえ勝てずとも必ず生きて帰る。その一念で柄を握る手に力を込める。大勢の兵達の重々しい鞘走りの音に一際軽快な、竹箒で地を掃くかのような鞘走りの音が加わった。純白の切先に眩いばかりの陽光が灯る。赤髪を砂漠の風に靡せながら、ピエールは霊木で作られた長剣ダンメルシアをゆらりと右手に構えた。

盾をかざして砂丘を駆け上がって来るセーニア軍に向かって、ジヴー軍の前列にいる弓兵達から矢が一斉に放たれた。矢が敵兵に辿りつく前に戦列交代。刹那、怒号に交じってちらほらと悲鳴が交じった。

射撃に対して防御姿勢を取るべく足の止まったセーニア兵達を目

に捉え、剣を掲げたジヴーの歩兵達が恐怖を吹き消すべく雄叫びを上げる。続いてはセーニア軍に向かって次々と走り出し、坂を駆け下りる勢いのままに敵軍に迫る。その波に乗らんとピエールが目を見開き、白砂を強く蹴り上げた。

～思惑　ｅａｃｈ　ｓｐｅｃｕｌａｔｉｏｎ２～

――暑い。

歩いても、立ち止まっても、心頭滅却しても。白という色が光を反射するのに適するということを、シュイはその肌で感じていた。左右に立ち並ぶ住居の照り返しが太陽からの日差しに匹敵するほどに強い。迂闊に口を開けようものならあっという間に干潟が出来上がる。周りを見れば全て敵。右からも左からも、前からも後ろからも眩いばかりの光と熱が。さながら、かまどに入れられたパンの気持ちだろうか。黒衣がその熱を優しく包み込むせいで中は相当に蒸している。

そうとなれば、喉がしつこい売り子のように水を要求してくる。喉渇きませんか。ですよね、渇きますよね。そろそろ何か飲みませんか。ていうか、飲みましょうよ。

その訴えに折り合いをつけるべく、シュイは額の汗を拭い、ポケットから乾燥させた梅を取り出して口に含んだ。唾液でも水分は水分だ。

鳥獣に跨って海を越え、西進するセーニア軍の真逆、西側からジヴー入りしたシュイは、そこからの移動手段を徒歩に切り替えざるを得なくなっていた。

外に丸く膨らんだ海岸線を過ぎて、この町へ至るまでの間、空からは見渡す限り、背の高い枯れ草が茫々と生えていた。草の生えていない狭いスペースには、背の低い木がぽつぽつと点在していた。風が止んだ草原には動物の姿はついぞ見受けられない。この暑さでは昼寝でもしていた方が賢明だ、と動物達も思っているのだろう。

慣れない気候のせいだろう。陸地に辿り着いてから鳥獣がまともに飛べなくなるまでそんなに時間はかからなかった。日頃、喧しい

くらいの羽ばたきは見る影もなかった。左へ右へと、酔っ払ったように蛇行しながらもやっと飛んでいるという有様だった。

もっとも、毛足の長いふかふかの羽毛に覆われているのであるからして、ある程度の予想はついていた。じりじりと照りつける日差しは服の布地を容易に貫く。殺人的ですらある。北国育ちのグリフォンが音を上げたのも無理からぬことだ。

仕方なしに、シュイは眼下にあった町から少し離れた場所に着陸し、水魔法を鳥獣にたらふく与えてから支部に帰還するよう命じた。申し訳なさそうに首を傾ぎながらも頬を擦り寄せてくるグリフォンに、首の裏を撫でてやりながら礼を述べた。毛の先が汗で濡れ、普段のしっとりとした手触りとはほど遠かった。

シュイは、鳥獣が飛び立つのを見送ってから乾ききった土道を歩き始めた。

クリーム色の、粘土でできた白壁に囲まれた町の入り口では、ジヴーの門番達が数人でたむろしていた。あらかじめ用意しておいた通行証を彼らに見せると口頭で質問を受けた。訊ねられたのはこの国にきた目的と予定している滞在期間だ。傭兵としてセーニアと戦いにきた、と言うと、彼らはおぉーと感心したように頷き合い、肩を慣れ慣れしく叩き、ろくな身体検査もせぬままに通してくれた。検査される側としても、厳戒態勢なのにこんな簡略でいいのかと不安になるくらいにあっさりとしたものだ。

ポリー支部を出てからおよそ一週間。まずは現状の把握に努めねばと、シュイは町酒場や交易所といった建物を探していた。

各国を渡り歩く者達が集う酒場や交易所、あるいは市場や宿場などは情報交換の格好の場となっている。交易所で商人同士が出会おうものなら儲け話のひとつでも交わし合うだろうし、安住の地を持

たぬ流浪人や旅人が宿場を訪れれば土地の者に風土や気候、道標（みちしるべ）のことなどを訊ねる。港町であれば旅行者の行き交う波止場へいくのも一つの手だ。乗船を待つ客達から耳寄りな話が聞ける。

もっと日常的で瑣末な、おすすめの宿やレストラン、土産物屋、観光スポットの情報収集もできないことはない。下世話な内容にも話が及ぶとなれば、もしあればの話だが、色町などのことも囁かれるだろう。

その他、周辺でなにかしらの異変が起きていれば、その情報も頭に入れておく必要がある。たとえば洪水や落雷などで橋が流されてしまった。付近にある火山の活動が活発化している。もしくは、大嵐で定期船の到着が遅れている。はたまた、山賊や海賊が頻発している地域や凶悪な魔物の出没箇所なども。避けられる危険には極力近寄らないのが、勝手の知らぬ土地を訪れた時の常套手段だ。

一方で、旅慣れた者であれば情報の見返りとして様々な国々の話をして楽しませてやることも忘れない。小さな気遣いではあるが、そういったことが後々その地に繋がりを築いていくことになる。

シュイ自身、幼い時分に旅をしていたことがあった。悪人顔の商長率いる十人編成の行商隊（キャラバン）と様々な町を行き来し、見聞を広めたのだ。

商長も若い頃はその顔で色々と苦労したようで、一時は対人恐怖症に近い状況まで追い込まれたこともあると聞いていた。自分でそういうだけのことはあり、真面目な顔付きを作ってもなにかあくどいことを、もしくはあこぎなことを企んでいるように見えてしまうのだ。どちらかといえば類人猿に近い顔立ちだったが、その内面は気難しく、懐深い男だった。事情があって母国を離れなければならなくなったシュイを、商長は快く受け入れてくれた。初めは奴隷として売られやしないかと気が気でなかったシュイだったが、一月も経たぬうちにそんなことはすっかり忘れていた。行商隊の面々とそ

うそうに馴染めたのは、商長の働きかけによるところが大きかった。

町を散策していると強い西風に乗って潮気を含む土埃が舞い上がり、その都度顔を腕で庇わねばならなかった。内陸に比べれば海に近いこの近辺は植物などもそれなりに見受けられる。地面も砂ではなく土の地面だ。その程度でも、この辺りは砂漠に分類されるらしい。ここ以南は、本に出てきそうな不毛の地も見受けられるようだ。

戦時中ということもあり、革の胸当てを着込んでいる巡回兵達と何度かすれ違った。肩越しにその背を見るだけでわかる気合の入りよう、怪しい者がいないかと周囲に目を光らせている。

その人数は他の町と比べても少なめだ。警備に必要な人数を残してセーニアへの戦に駆り出されているのだろう。人数が少ない分埋め合わせようと頑張っているのか、それとも残された者に新兵が多いせいなのか。その首振りの頻度は赤ん坊がいやいやをしている姿と重なるほどに執拗なものだ。

市場の手前で、シュイは大衆酒場と思しき建物を見つけた。この辺りでは珍しい木造の家屋だ。向かい側の厩舎には客のものと思われるラクダが何頭か繋がれている。木桶には水が入っており、彼らはそれに上手そうに口を付け、喉を潤していた。

手で黒衣に纏わりついた砂を軽くぽんぽんと払ってから、シュイは店に足を踏み入れた。久方振りの日陰の涼しさに少しほっとする。ちょうど昼時ということもあり、テーブル席は飲み食いしている者達で埋まっている。シュイは入口から向かって左側のカウンター席に座った。焦げ茶色の木の棚にはたくさんの酒瓶が置かれていた。

「今座ったおっさん、悪いがフードを取ってくれるか」

傍らでそんな声が発された。口の悪い店員だと思いつつも、シュイは両隣の客が頼んでいるものをちらちらと見た。顔の向きさえ変

えなければ、フードのおかげで目線に気づかれることもない。一際美味そうだったのは野菜と動物の内臓がたっぷり入った煮込み料理だ。色々な香草を入れているのか、特有の匂いが感じられない。

——凝った造りの器が多いな。ガラスの工芸品か。

「おい、無視かよおっさん。耳ついてんのかよ」

シュイがしきりに感心していると、先ほどより近くから声が聞こえてきた。シュイが顔を横に向けると、店の従業員らしき女と目が合った。年の頃はおそらく二十にはいってないだろう。少しそばかすがあるが中々利発そうで、それでいて小生意気な顔をしている。頭には白い三角巾を付け、長い赤髪はみつ編みにして一つに纏めていた。

もしかして俺のことか。そうと言いたげにシュイが自分を指差した。

「あぁそうだ、飯を食う時は外套くらい外すのがマナーだ」

なにを藪から棒に、と首を傾げるシュイに、女は有無を言わさず指を一本立てた。

「その一、今は戦時中だから周りのお客さんを不安にさせるような行為は商売人として謹んでもらいたい。その二、その暑苦しい格好は折角涼みにきてくれたお客さんに対して目の毒だ。その三、頭の天辺に細かい砂がびっしりついてる。料理に入ったら不衛生だろ」

案の定、言い終えた時には三本立っていた。

頭、と手をやろうとするシュイに、女が待った、と素早く手の平を差し出した。次いで、店の出口をつんつんと指差す。それを見て、シュイが露骨に顔をしかめた。

「お帰りはあちらってことか」

「んなわけないだろう。先に注文聞くから、外でしっかり払ってきな。その間に飲み物出しとく」

言うが早いか、女は手早くヒップポケットからペンを挟んでいた注文票を取り出した。せっかちだな、と思いつつもシュイは素直に従った。

「いや、悪かったな。その、おっさんなんて呼んでさ」
きまり悪そうに頬を掻く女に、フードを取ったシュイは詮無きことだ、とサービスされたグラスを掲げて見せた。中には白く濁った酒が入っている。今ではそれなりに舌が慣れてきていることもあり、値段や自分の懐具合に関係なく、旅先で出されるただ酒は嬉しい物だと思えていた。
人前で黒衣を脱ぐのには未だに慣れないが、決して似ているとは言えない自分の似顔絵付きの手配書が貼り出されなくなってからは既にそれなりの時が経っていた。こう言っては少し失礼かも知れないが、このような辺境であれば顔を明かしたところで問題ないと思われた。
「あんた戦士か。国に所属しているってわけでもなさそうだけど」
「何故、そう思う」
女は両手の平を上に向けてから、顎でシュイの足元をしゃくった。白い布に巻かれた得物が横たわっているのを見て、シュイは鷹揚に頷いた。
「素晴らしい観察眼だな」
「あのな、馬鹿にもわかることで褒められて良い気になれるやつなんていやしないぞ。覚えとけ兄ちゃん」
それもそうだ、と出された酒を口に含む。女と同じく辛口ではあるが喉ごしは悪くなかった。それでいて、まるで生姜を口にした時のような、微かに舌がぴりぴりと痺れるような感覚があった。
透明だったはずの酒は、女が水差しで水を入れると白く濁った。口の悪い看板娘（本人談）の説明では、酒に含まれた色々な成分が水に溶けだしているとのことだった。
「贔屓目に見たって私とそう変わらないのに」
女が腰に手を当てて呟いた。年齢が、という意味だと解釈し、シュイは頼んでおいた砂羊の干し肉を皿から一つ摘まんだ。

「齢なんか関係ない、どんな年代だろうと自分の人生を背負う覚悟を持っていれば一人前だ。逆に、三十路を過ぎて一人前になれていないやつだって腐るほどいるしな」
「はは、そりゃ確かに」
「打ち明けると馬鹿が一人先走っちまったんで連れ戻しにきたんだ。最低限、それだけはなんとかしたい」
「へぇ、ただそれだけでこんなところにまで。見かけに寄らず友達（ダチ）思いなのか、自分の腕によっぽど自信があるのか、どっちかな」
大袈裟におどけてみせた女に、シュイは、両方だ、と心中で言い返した。
「ついでに戦況を小耳に挟めれば、という目論みもあってここに来たんだが、何か知っているか」
シュイがそう言うと、女は躊躇いがちに視線を逸らした。
「まぁ、な。連日知りたくない情報ばかりが入って来てるぜ」
劣勢か、と呟いたシュイに、女が全然わかってないといわんばかりに首を振った。
「一口に劣勢って言ったって度合いがあるだろう。既に三戦しているらしいけれど、全敗だ。殊に、ガザッタでの初戦は全滅に近い惨状だって聞いた。数時間で潰走に陥ったって」
ドスンと、胃の腑に何かがのしかかったような感覚があった。部隊の熟練度か、純粋な個の力量か。覚悟はしていたことだが、やはり戦力差は歴然たるものがあるようだ。
「実際、ユシエルって、ああ、そういう名前の、ここらではちょいと有名な町があるんだけどね。一昨日ここにきた旅人さんの話では、交戦したと思しき場所からそこへ向かうようにして骸の道ができていたそうだよ。虫達がご馳走だって腐肉にたかってたとか――あ、悪ぃ悪ぃ」
食事中にそういう類の話はないとばかりに眉をひそめたシュイに、女は悪びれた様子もなく笑った。
「一月も経たないうちにガザッタとモスアはセーニアに占領されち

まった。兵の数も三分の一近く減らされている。あんたも戦いを生業にしているなら、これがどんだけヤバい状況かがわかるだろ」

シュイは小さく頷いた。女の言う全滅とは決して全員が死亡している状態ではなく、軍隊としての統制を失い、機能しなくなった状態を指す。それは理解している。

しかしながら、命からがら逃れたところでそこは砂漠だ。満足な物資を持って逃げられた者がいたかは疑わしい。戻るに戻れず、砂の海で行き倒れた者も決して少なくはないはずだった。当然、追撃戦、掃討戦で巻き込まれた者も大勢いたのだろう。女の言う骸の道にしても、敗北を悟った兵士達がなんとか逃げ延びようとしたからだ。同時に、それほどの勢いを保っていたセーニアの被害が微々たるものであることも容易に察せられる。

「いなくなった兵隊さんのほとんどは消息不明。私の叔父さん、このマスターの弟も、友達の兄貴も。あんたもさ、尻尾巻いて逃げ帰るなら今のうちだと思うぜ。だれも責めやしないからさ。まぁ、そのお友達ってのには気の毒だけど、今生きているかどうかもわからないだろ」

「忠言は心に留めておくよ」

女が呆れたように溜息を吐いた。

「それって遠回しにノーってことだよね。なんで男って、こう馬鹿が多いんだろうね。あんたそれなりの顔してるし、心配してくれる人くらいいるだろうに」

「遠回しな褒め言葉をどうも――」

「――おい、ミヤーニャ。いつまでも一人の客とくっちゃべってねぇできりきりと並んだ料理かたさんかい！」

カウンターの奥から怒声が飛んだ。そちらでは男が背中を向けた

ままフライパンを振るっていた。女の口の悪さはこの父親から伝染したらしい。

「あ、いっけね。じゃあな客人、無事を祈ってるよ」

そう言いながら、女は慌てて奥のカウンターを埋め尽くしている、湯気立つ料理に近寄った。それを丁寧に、しかし迅速に、重ねられていた白いトレイに乗せていく。

「――待ってくれ、あと一つだけ。占領された町で略奪などは起きていないのか」

「ん、ああ。市街戦に発展した場所ではそうもいかなかったみたいだけれど、制圧された後ではきっちり統制されているみたいだよ。なんせセーニアのお偉い将軍様が軍を率いているみたいだし、名を汚すようなことはできないんだろうさ」

女はぱっぱと手を動かしながら応じた。語気には強い嘲りが込められていた。

「ビシャ・リーヴルモア、か」

「そうそう、そんな大層な名前だったっけね。だからといって、認める気になるはずもない。それはあくまで人としてぎりぎりの、最低ラインのことだ。連中がそれより少ぉし上のことをやってる事実に、なんら変わりはないんだよ」

片目を瞑り、指で蟻をつまむくらいの隙間を作ってみせてから、女は料理の乗せられたトレイを片手にその場を後にした。

～思惑　ｅａｃｈ　ｓｐｅｃｕｌａｔｉｏｎ３～

軍議を終え、主だった者が退席していく中で、折り畳みの椅子に座していた男がくしゃみを噛み殺すような仕草を見せた。その隣で、今まさに立ち去ろうとしていた女騎士が、ちらりと男に流し目を送った。咎めるような色は含んでおらず、ただ単に珍しいこともあるものだな、と気にした風に。

「なんだ、なにか俺の顔についているか」

威厳が内包された低い声が天幕の内側に響いた。いつの間にか残されているのは男と女、それに四人の近衛だけだった。兵を休めるべく張られたテントの中には砂漠の外気を入れぬよう入口が二重に付けられている。

厳めしい顔つきの大男に問われた女は、別に、と首を振り、そのまま目を閉じた。だが男は、女の顔に僅かながら険があるのを見逃さなかった。

「遠征の当初から変わらんな、その気乗りしなそうな顔は。あまりしかめ面をしていては折角の美貌が早く崩れるぞ」

セクハラに聞こえなくもない言葉に、しかし女はなんら反応らしい反応を示さず、腕を組んだままの姿勢で言葉を返す。

「しなそうなのではありません、全く以ってしていません。わざわざ指摘されるまでもなく、よぅく自覚しているつもりですが」

そう言って笑ってみせた。体裁だけでも笑った形を取ろうとしたような、感情の一切こもっていない笑みだった。

野営場所が敵の勢力圏からそう離れていないこともあり、夜であっても鎧を身につけている。金属部分は銀色に光る胸当てと腕当てのみ。その下には赤を基調とした女性用の軍服。身体をぎゅっと引き絞るかのように黒い腰紐がきつめに巻かれている。そのせいで、

身体のなめらかなラインが服の下からでも際立っている。スレンダーと評して差し支えない体躯。だが、年頃の娘が持つ色香は隠しきれるものではない。微かな香水の匂いとせっけんの残り香が男の鼻をくすぐった。

なによりその顔立ちは、冷たさを帯びながらもなお愛くるしい。高級なベルベットを思わせるしなやかなブロンドの髪は、背中の真ん中にまで届いている。カールした睫毛と気の強さを前面に押し出す切れ長の目。

腰に下げられた二本の装飾剣の刺々しさを柔らかくしているのは薄化粧が施されて仄かに赤く染まった頬。全てが危ういバランスで保たれていた。これ以上手を加えても省いても、女の完成された美しさを損なうような気がした。

男は音を立てぬよう留意しつつ唾を飲み干した。色欲に対してはそれなりに自制していると自負していたが、おのれの娘よりも年下の女騎士に、束の間、欲情に近い感情を抱いていた。次には、男は邪な感情を抱いた己を遠ざけるように咳払いをする。

一方で、女はそのわざとらしい咳にも気遣いを見せた。

「異国の地であれば殊更、体調管理には気を遣わねばなりませんね、リーヴルモア卿」

承知している、とビシャ・リーヴルモアは肩をすくめた。仮にも上将軍の一人である彼を、形だけとはいえ窘めることができる者などセーニアにはほとんどいない。女騎士の階級は中隊長であり、もちろん二十に届かぬ年齢でその階級は驚異的なことだが、ビシャよりも数段低いことは疑いない。

だが、様々な事情、思惑が、彼女を普通の騎士として扱うことを拒んでいた。智勇に優れた才媛であることは疑いない。だがそれ以上に、彼女の立ち位置が魅力的だ。セーニアにいる誰もが一目おかねばならぬ肩書き（ステータス）の数々を、この女は背負っている。

リーヴルモアは傍らにいる女騎士に敬意と好意、そして仄かな悪

意を寄せていた。たとえ、年齢が三十近く離れていても。
セーニアの現教皇、アダマンティス・セーニアに子がいない以上、皇家に連なる血筋のものは教皇の二人の実妹による血筋のみ。その姉の方、カティス・セーニアの娘を娶った男がいた。

「立派になられた貴女を見て、お父上もさぞ喜んでおられることだろうな」
ビシャなりに言葉を選んだ、一応は含むところのない賞賛のつもりだった。女騎士は薄らと目を開いた。
「気休めなど不要です、国益のために他者を害する剣を振るい続けてきた以上は、死の香りに囚われる騎士が出るのも致し方なきこと。あの日、たまたま父にその番が廻ってきた、ただそれだけですよ」
肉親の死に対するその達観した物言いに、ビシャは鼻白むのを隠せなかった。だが同時に、善人の仮面を被らぬことに感心もしていた。
「害するとはいささか言い過ぎではないか。俺の目から見ても彼は優れた人格者だった。アデライード、貴女は敬愛する父を殺した者を恨んでいないのか」
「恨みがない、と言ったら嘘になりますね。なにしろ、彼は私の人生をことごとく狂わせてくれたのですから」
――彼、か。
この質問をして初めて、ビシャは彼女の感情らしきものが垣間見えたように感じた。淡々と返す中にも、辛辣さが、それ以上のなにかがあるのは否めなかった。言葉の形を成さぬ感情が、強く握られた拳にまざまざと表れていた。白いグローブに皺が寄り、甲を覆っている生地がぴんと張り詰めている。

ビシャの視線に気づいたのか、アデライードは握り拳をそのまま掲げ、ゆっくりと手を開き、視線を傾けた。
「できればこの手で仇を討ちたかったのですが、あの日から五年近

くも経っているのになんの音沙汰もなし。騎士団が誇る諜報部隊の情報網を以ってしても足取りすら掴めぬならば、もはや手の届くようなところにはいないでしょう。あるいは、秘密裏に処理された可能性も否定しませんけれどね」

国に疑心を抱いていることを勘繰らせるような危うい言動に、ビシャの視線が一時鋭さを増した。アデライードはその視線を真っ向から受け止め、なにか、と首を傾げた。魔物ですらすくませるビシャの眼光を楽しんでいる節すら見受けられた。

アデライードの証言を信じるならば、彼女の実父であるコンラッドを殺害したのは、幼い一人の少年だということだった。が、しかし騎士たちの立場から考えると、その証言をそう簡単に鵜呑みにできないのもまた事実だった。

その瞬間を目撃した彼女は、まだ十四という若さだった。加えて、実父が目の前で殺害された恐怖と混乱。照明の大半が消され、現場を視認するにも難儀だった状況。なにより、セーニア屈指の強さを持つコンラッドが、少年一人に殺されたという信じがたい内容。それらのパーツは、信憑性に対して段階的に霞みをかけていった。

アデライードはセーニア皇家の血を受け継いでいるため、ある意味では教皇に次ぐ立場にある。その言に面と向かって異議を唱えるものはいない。実際に彼女の証言を元にして、手配書に乗せる似顔絵が作られ、近隣諸国にばらまかれた。完成された絵の中にいる少年の、あまりにも毒気のない顔を見るに至り、これはよろしくないだろうと少しばかり手が加えられたが。

優しげな少年に狂気を抱かせるようななにかがあったのでは。そうと勘繰られないための工夫、ビシャに言わせれば姑息で無駄で、馬鹿馬鹿しい知恵だった。優しげな仮面を被った鬼畜など敵味方問わず、戦場で何人も見てきたからだ。

つい最近まで、ビシャはアデライードの証言を心から信じていたわけではなかった。かつての上官であるコンラッドの強さを、彼はよくわかっていた。勇猛名高きセーニアの騎士団において、剣の申し子と呼ばれた自分と互角以上に切り結べた者は、片手で数えられるほどしかいなかった。その中において、コンラッドの実力は、彼が殺害された時点では間違いなく、セーニア一、二を争うものだっただろう。一人で百の兵を同時に相手にできるような彼が、たかが少年一人に殺されるなど有り得ない。そう考えていたところで、責められる者はいないはずだ。

しかし、今では考えを改めている。改めさせられたと訂正するべきだろうか。果物ナイフ以外の刃物を握ったこともないような少女が、騎士団に入隊し、みるみるうちに頭角を現し始めたといった前例は殆どなかった。ましてや、それが皇族の者なら尚更だ。

どちらかといえば年功序列の風潮が拭いきれていない騎士団において、皇家と非業の死を遂げたナイト・マスター双方の血を受け継ぐ娘が異例の速さで昇進していく。いかにも大衆好みしそうなエピソードだが、それが脚色されていないものだということは、彼女の剣を目にしたものであれば誰しもが知っている。

男騎士に対して腕力に劣るのは否めない。だが、それを補って余りある洗練された剣捌きと瞬発力、動体視力。魔力を扱うセンス。それが血の滲むような修練によって得られたものであるのは疑いない。常につけている白い手袋の下には、年頃の娘のそれとは思えぬ、マメだらけの固い手の平がある。彼女の剣に打ち込むその姿勢が、積み重なってゆく勲功の数々が、彼女の騎士として生きていこうという決意が並々ならぬものであることを意味していた。中隊長に昇格することに際して、審査委から一つも異議が出なかったのは当然だろう。そして、そんな気高い彼女が、実父を殺されたことで偽りを口にするとは到底考えられなかった。

しかしながら、公にはナイト・マスター、コンラッド・ディアー

ダを殺害した者は暗殺者イヴァン・カストラだということになっている。では、何故そうする必要があったのか。

体裁。確かにそれもあるだろう。最高位騎士の名を体現していたコンラッドが、厳重な警備をしているはずの王城で少年一人に殺されるなど、たとえ油断し切っていたとて、否、寝息を立てていたとて許されることではない。

彼が敗れるということは、彼の下につく騎士たちは彼以下に見られるということだ。つまりは、精鋭たるセーニア騎士団の中で、ナイト・マスターを破ったその少年に一対一で敵う者は誰ひとりとしていない。そんな結論が導かれてしまう。プライドの高い騎士たちがそんな風聞に甘んじていられるはずがなかった。

折りしも、イヴァンが大臣、次官クラスの者たちを狙い始め、実際に何人かを殺害してみせたことで、衆目をそちらに向けさせるのは造作もなかった。その傍ら、セーニアの軍部は少年の影を執拗に追い続けた。発見の報がある度に百人単位で騎士たちが派遣され、捜索に充てられた。だが、やはり一般人からの情報提供には誤報も多く、徒労に終わることの方がずっと多かった。

そして、ある日を境にぷっつりと少年の消息は途絶えた。そのことで、末端の騎士たちは内心でほっとしていただろう。姿なき者を追い続けることほど面倒なことはない。それ以上に、少年が本当にナイト・マスターを殺した犯人ならば、見つけ出したところでおのれが敵うと思う騎士など、百にも満たぬはずだからだ。

アデライードは掲げていた手を、視線を全く動かさずに剣に添えた。その自然さからも、彼女が常日頃から剣に触れる生活をしていることが窺えた。

「いない者を恨み続けてなにかが変わるのか、そうと訊ねられたならば答は否でしょう。仮に父母（ちちはは）が生きていたとして、私がいつまでも同じところで足踏みしているのを許してくれるような温い人たち

ではありませんから」

その告白を聞いたリーヴルモアは、血は争えないな、と独りごちる。ナイト・マスターの性格を色濃く受け継いでいる、そうと思い知らされていた。己を律し、それでいて部下に対する配慮を忘れぬ、実に素晴らしい騎士だった。

――反吐が出るくらいに潔癖だったが、な。

ビシャ・リーヴルモアは知っている。コンラッドを始めとする上級騎士たちが名声を高めた影では、汚れ仕事に手を染めた部下たちが何人もいるという現実を。もちろんそんなことは、コンラッドには知らされていない。知らせる必要もない。二十余年騎士団に所属していたのだから、彼も薄々とその存在に気づいていただろう。そして、もしそれを正そうとしていたら、彼もその家族ごと破滅していたはずだ。

彼は、セーニアという国を照らす眩い光であればそれだけで良かった。影を隠すための。その影は必死に彼を眩しい光たらんとした。対極の、お互いに切っても切れぬ間柄だった。お互いの存在を忌み嫌っていたとしても。

気高さと強さだけでは靡かぬモノもたくさんある。道理で屈服させられない者は、排除するしかないこともある。国のために、特権階級の者たちの利益のために。

そして、アデライードは選ばれし者たちに名を連ねるための重要な鍵だ。皇族にしてナイト・マスターの遺児。彼女と契を結んだ者は皇家の外戚、すなわち皇族となる。

今の教皇アダマンティスには子がいない。畏れ多い考えだということは承知しているが、仮に彼になにかが起きたとしたら。セーニアという広大な国の支配者に、自分が、自分の子らがなることも夢ではない。

ビシャはアデライードに悟られぬよう、俯き気味に、しかし彼女の身体を目で舐めまわした。美しい顔を、くびれた腰を。黒タイツに覆われたしなやかな太腿を。今この場にいるのは自分とアデライード、そして二人の近衛が二名ずつ。今行動に起こせば、おそらくは――

唇が渇き始め、今度は自分の下唇を舐めた。焦ることはない、そうおのれに言い聞かせるように。

――気高い女を無理矢理に屈服させるのも悪くない。が、それは仕事(いくさ)が片づいてからだ。

今はすまし顔をしているがいい。いずれ必ず、ものにしてやる。心の奥底から滲み出たそんな悪意を吹き消し、ビシャはアデライードに見せつけるように猛々しい笑みを浮かべた。

～思惑　ｅａｃｈ　ｓｐｅｃｕｌａｔｉｏｎ４～

二人の近衛を伴って軍議室代わりのテントから外に出てきた女騎士を見止め、入口の辺りに張っていた兵たちが颯爽と両側に整列し、一斉に敬礼をした。

お疲れ様。兵たちに一言、ねぎらいの言葉をかけると同時に、アデライードは伏せていた面を微かに上げ、たおやかに微笑んでみせた。幼いころより貴族としての立ち振る舞いを厳しく躾けられた彼女にとっては日常作法に過ぎぬことだったが、それだけで屈強そうな兵士がほぅと感嘆したり、頬を紅潮させて顔をそらしたりする。戦場に咲く一輪の花。そんな代名詞がこれほどにしっくりくる者もそうはいない。だが、そう簡単に手折れる花ではないことは、彼女に近しい者ならば誰でも知っている。

兵たちに見送られ、その場から十数歩ほど離れたところで、アデライードは歩の速度を緩めずに、ちらりと後ろの天幕を見遣った。隠しきれぬ不快さを乗せたその視線に、彼女の後ろにつき従っていた男たちは一瞬、自分たちになんらかの落ち度があったか、とお互いの強張った顔を見合わせる。続いては、彼女の視線が少しずれていることにほっとするのだった。

一体どのような人生を歩めば、あのような節操のない視線を他人様に向けられるのか。そんな度しがたさを覚えると同時に、おのれの感情の手綱も引き絞れぬような凡夫が、自分の父の後継としてもてはやされていることに苛立ちを禁じ得なかった。何を以ってして、ビシャ・リーヴルモアとコンラッド・ディアーダとを同列に語るのだ、と。

ビシャが自分に向けている仄暗い感情は、大分以前から把握していたことだった。王城や城下町の式典では豪快ながらも節度を弁え

ていると思っていた男の目が、ここにきてにび色の怪しい光を放っている。しかも、この遠征に赴いてからすでに三度目だ。

色欲に自制の利かぬあの男がナイト・マスターの後継者などと囁かれているのを耳にするたびに、アデライードは敬愛している父を侮辱されている気がしてならなかった。

その一方で、他人の前では父の話題に対して努めて素っ気ない態度を取るように心がけてもいた。たとえそれが上辺のものであったとしても、そうと割り切る自分を心の奥深くから俯瞰することで、未だ手放せぬわだかまりと折り合いをつけられる気がしたからだ。

ビシャ・リーヴルモアを嫌ってやまぬ彼女だったが、ただ一点、軍事面における突出した才能だけは認めていた。ガザッタでの初戦の結果がそれを物語っていた。

通常、開戦の初戦には十二分に力が入るものだが、慎重論が先立つ中でジヴーが様子見で向かってくると自己判断し、逃亡兵を出さぬように包囲陣形を敷いた。一見相手を舐めているとも取れる戦法だが、その疑いは自らが前線に立って指揮を執ることで払拭していた。

敵の大将が突出してくるのを見るや否や、ジヴー兵たちはビシャを討ち取らんと殺到した。数の上では彼らの方が小勢であり、経験面においてもセーニア側に一日の長があるのは否めない。指揮官をいち早く始末して打開したいという心理があるのは至極当然。それをビシャは逆手に取ったのだ。

ジヴー側の兵たちの中には、明らかに正規兵でない者も見受けられた。セーニアを快く思わない国々からの刺客、またはジヴーに雇われた傭兵と思しき者たちが。一般兵では手に余す者たちが、自分を葬らんと次々に斬り込んでくる様を一瞥して、意外な事にビシャはまともに打ち合うようなことはせず、少しずつ陣を後退させていった。竜殺しの異名を持つ彼の技量を考えれば迎え撃つことも容易にできただろう。が、万が一のことを忖度して将としての思考と戦

略を優先したのだ。より確実に勝利を得るために。

初戦で出鼻を挫く。その言葉ほど生温い戦い方ではなかったが、彼の狙いは腕と胆力に優れた者たちを一網打尽にし、ひいては今後の戦いで優位に立つことのようだった。イワシの群れを追っているうちに横から鮫に噛みつかれるようなことを極力減らすために。

包囲完了の報告が入るや否や、ビシャは受け身から一転、反撃に打って出るよう指示した。今後の戦いにおける不安の芽、すなわち敵の精鋭たちを自陣深くに引き込んだ上で、敵の命令系統が機能しないように計らった。

セーニア軍は拡声魔石を大量に使用することによって戦場を太鼓の音で埋め尽くし、他の音を全て消し去った。命令系統が断ち切られた敵軍に動揺が走る一方で、それが戦法に組み込まれていた、つまりはあらかじめそういった可能性があることを理解していたセーニア軍の統率は、ほとんど乱れることがなかった。

生じた空白を見逃さず、ビシャは受け身に徹していた精鋭を率い、自らも鬱憤を晴らすかのように剣を振るった。彼に直接斃されたジヴー側の兵は、軽く百を超えるはずだ。

西瓜を易々と掴めそうな大きな利き手で振るわれるのは幅広のブロードソード。騎兵槍（ランス）と見紛うほどのリーチとサイズ。壊れなければ構わない、と特製の合金を使用してオーダーメイドで作らせた物だという。

騎士隊の力自慢が両手でやっと持ち上げられるかどうかといった重剣。それを彼は片手で軽々と振るってみせる。辰力と恵まれた体躯による膂力を最大限に駆使した連撃はシンプルだが、なればこそ対抗策が限られる。絶え間なく繰り出される剣撃の一つ一つが、鍛え抜かれた鋼の剣を一合で断ち切るほどの破壊力を持つのだ。刃を受け止めようとした時点で死が確定するとなれば、まともに打ち合

うことなど望めない。また、後ろに退いても辰力によって生じる剣風で致命傷を負うことになるだろう。稀代の戦士にしてセーニアの不倶戴天の敵、イヴァン・カストラを退けたというのもうなずける話だった。

加えて厄介なのが教皇アダマンティスから譲渡されたセーニア家に伝わる至宝の一つ、『誓約の盾（プレッジ・シールド）』だ。魔力を寄せつけぬ金属で作られた六角形の盾は、金属の強度もさることながら初級の魔法程度であれば跳ね返してしまうほどの強力な障壁を展開することができる。発動する際には使用者の体力を代償にする必要があるが、ビシャのスタミナの有無を心配する者などセーニア軍には皆無だ。ガザッタの戦にしても、途中で思わぬ邪魔が入らなければ、真の意味で相手を全滅に追い込めただろう。

――今はまだ、とても及ばないわね。

通常10年かかると言われている中隊長への道を、アデライードは半分足らずの時間で踏破した。その彼女に明確な差を悟らせるだけの力を、ビシャ・リーヴルモアは有していた。これまでの戦いにおいて、彼はおそらく本気を見せていない。充分な余裕をもって、自分や兵たちの身の安全に配慮するのを怠らず、戦を完勝に近い状態に持っていっている。

認めざるを得ない現実。彼は、セーニアにとっては素晴らしい騎士だ。そして、それこそがコンラッド・ディアーダとの大きな違いだった。

歩きながらも思考に耽る美しい主人に、後ろからつき従う二人の近衛の片割れが、控え目に声をかけた。

「魅力が高すぎるというのも困りものですね、リーヴルモア様にももう少し場と節度をわきまえていただければよろしいのですが」

暗に色欲魔という語句を薄皮で優しく包み込んだその言葉に、しかしアデライードは思わぬ形で応じた。

「それは……わきまえれば私があの好色親父に視姦されても良いと、そういうことですか？」

挙げ足を取られた近衛がしまったという顔になった。

「い、いえ、決してそういうことではなく」

「そもそも、ホリックは私のどこに魅力の高さを感じたのです？　顔？　身分？　それとも、この身体？」

などとおのれのスカートをレギンスに覆われた大腿が露になるくらいに持ち上げて見せるのだからたまったものではない。言葉の羅列に性格という文字が加わらなかったのは、おのれの性格が破綻していることをアデライードが自覚しているが故のことだったが、ホリックにそんな些細なことを気にしている余裕はなさそうだった。

「か、からかわないでいただきたい。私はただ――」

「――しばらくあの男には近づかない方がいい、と兄貴はそう言いたいようです」

もう一人の近衛、眠そうな目のグレンが呟くようにそう請け合うと、しどろもどろだった兄の方も救われたような顔でうなずいた。

戦いが始まってからというもの、ビシャの態度は王城で見せるものからどんどん遠ざかっている。アデライード本人も別の意味では、足を運ぶ予定のなかった戦場に同行を願い出て良かったと思っていた。王城と戦場での、軍人の差（ギャップ）を肌で感じる機会に巡り合えたからだ。

明らかに変貌しているのはビシャだけではない。軍律が厳しいセーニア軍では長期の遠征において相当な禁欲生活を強いられることになる。そこにきて、若さと美しさ溢れる女騎士という存在は、劇薬以外のなにものでもないのだ。今回の遠征に限って言えば、彼女より腕の立つ者はビシャと他の大隊長数人くらいだろうが。

侵略戦においては禁欲に耐えきれず、非戦闘員たちを相手に間違いを犯す者も出てくる。領土が支配下でなければそれに目を瞑るのが現セーニア軍の風潮だ。過度の抑制を強いれば兵たちに不満を抱

かせることに繋がる。それを息抜きさせようと、あえて抜け道を残しているということだ。

アデライードはそれがどうにも気に食わなかった。上層部の指針で言えば、ジヴーを侵略するのはあくまでついでであると聞かされていた。必要のない戦闘。けれどもそれによって住処を奪われ、死に至らしめられる民たちがいる。それを易々と見過ごせるほどに、彼女は達観も諦観もしていなかった。

「確かに、相対したところで一人で勝てる相手ではないですね。立ち合いの強さならばお父様をも上回るでしょうから」

「ナイト・マスターを、ですか」

グレンの言葉には、躊躇いに近い感情が読み取れた。その事実に驚いたこともあるが、その他にも大きな理由があった。二人はアデライードに遠慮し、彼女の亡き父コンラッドの話題を極力避けるようにしていた。どうしても触れねばならないときでも、なるべくその印象が薄れるように留意して言葉を選んでいた。

「ならば尚更ですよ、先ほど将軍が襲ってきたらどうするつもりだったんですか」

「あら、あなたたちが守ってくれるのではないの？」

それはもちろん、と生真面目な兄、ホリックが曖昧にうなずく。

「危機と判断した時には助太刀いたしますがね、相手が相手ですから過度の働きを見込まれても困りますよ」

グレンの言葉はいかにもドライだった。が、できないことをできないと言える騎士は意外に少ない。かくいうアデライードもその点を高く評価していた。

「前提が抜け落ちているわ。あんなのに襲われたら誰だって逃げるに決まっています」

がくり、とホリックの身体が傾いた。

「入口が一つしかないのにそんな簡単にいかないでしょう」
「布で覆われているだけの建物に入口もなにもないでしょう」
なにを当たり前のことを、と肩をすくめるアデライードに、ホリックは目を見開き、次いで手拍子で口走ったことを恥入るように俯いた。いざとなれば退路を剣や魔法で切り開けば良いだけのことなのだ。
「相変わらずアタマが固いな」
後ろからグレンに鼻で笑われ、今度は拗ねたように口をもごもご動かす。アデライードは同情を溜息に含めて吐き出す。
「あなたがたも大変ね。いくらブローム卿のご命令とはいえ、私のお守りなんて厄介な任務を兄弟揃って押しつけられてしまうなんて」
自分を貶めるような物言いに、ホリックの眉がぴくりと跳ね上がった。
「父は関係ありません！　アデライード様の側仕えに関しては自分なりに納得して受け入れたことです」
ホリックにしては珍しい、語気の荒い口応え。だが、それゆえに譲れぬ思いがあることを察することができた。
「ま、そこは俺も兄貴と同意見ですね。連中の悪臭漂う呼気を吸うよりは、あなたの犬（ペット）をしていた方がよほどましですから」
両の手を犬のように顔の前に掲げ、にやっと笑うグレンに、アデライードは微笑みを返す。
「ふふ、言ってくれますね。お二人の気持ちは有りがたく受け取っておきましょうか。叔父さ……いえ、教皇様もあのような状態ですしね」
それを聞き、兄弟の表情が一段と険しくなる。
「その仰り様からすると、病に伏せっているというのはまことの話なのですね」
周りを意識したせいか、ホリックの声のトーンが少し落とされた。
「ええ、少なくとも偽者ではなかったわ。おかげで政略ばかりを気

にする輩が後を絶たないけれど」
「ならば尚更、御身を大事にしていただかないと。一体いつまでこのようなことを続けるのですか」
騎士団に所属することは危険に身をおくことでもある。戦争の視察などもっての他だ。セーニアの皇位後継と目されているアデライードがそんなことをする必要は全くない。
ただでさえ、彼女は様々な危険や陰謀を身に纏う立場にある。もちろんそんな道理がわからぬほど愚かでもない。ホリックはどうして彼女が今回の戦争に参列したのか不思議でならなかった。
「どうしてお父様が殺されたのか、それを突き止められるまでです。どこぞの暗殺者のせいで当時のことを知る者が大分減ってしまいましたから。今回の戦いに加わったのは王城を離れるための口実に過ぎません」
「それは、エスニールの乱を寸止めされた報復なのでは」
アデライードは足を止め、乾いた大地に目を落とす。
「ホリック、お父様は油断などする人ではありませんでした。少なくとも気の緩みを敗北の決定的要因にするような甘さは、絶対に持っていなかった」
アデライードの意図したいことが見えず、二人が首を捻る。続いてはある可能性に思い至ったのか、グレンの眠そうな目が見開かれた。
「それは、失礼ですが本心から言っておられるんですか」
もちろんです、とアデライードが即答する。
「たとえ相手が知己の者であったとして、それが年幼い子供であったとして、ですよ。王城の奥深くに忍び込んでいるのを目にした時点で、相手がそれほどの手練か、相手を助ける手引きがあったと考えるのが自然でしょう。父ならば真っ先に利用されている可能性を、もしくは操られている可能性を考えて対応策を練ったはずです。そ

れほどに慎重な性格だったからこそ、諸外国や蛮族（バンディット）との戦いを制することができたのですから」

内部の者がナイト・マスターの死に関与している可能性への言及。半ば無意識に、グレンが周りに視線を走らせた。万が一にも、誰にも聴かれてはならぬ話題だった。

「流石にその疑いは、俺などでは判断致しかねますがね。犯人亡き後では確かめようもありませんが」

「あのお父様を殺した者が、そうそう誰かに殺されるわけがありません。当人に確かめられれば一番なのですけれど」

穏やかにして確信を秘めた彼女の言葉に、ホリックとグレンは束の間視線を交わし合った。

「生きている、と？」

その疑問に対する返答はなされなかった。けれども、彼女の表情が肯定の意を表していた。

――イェルド。あなたはきっと、今もどこかで生きているのでしょうね。誰より駆けっこが速くて、隠れるのが上手だったもの。

幼い日に遊びに興じた思い出が、心をじんわりと満たしていくのを感じた。熱さと冷たさを内包して。

彼は自分になかったものを与えてくれた。笑い合い、喧嘩する友人達を。わくわくひやひやするような外遊びを。それまで感じていた憂鬱を一掃するほどの、強い慕情を。

そして、自分にあったものを奪い去ってしまった。貴族の子女としての優雅で退屈な生活を。敬愛していた父と軽蔑していた兄を。何よりも、自分が慕っていた、優しかった少年の存在を。

――あぁ、イェルド。今すぐにでもあなたに会いたい、とっても。もしその願いが叶えられたなら。

アデライードの口元に色気をはらんだ笑みが浮かぶ。白い手袋に覆われた両の手は、神への誓いを捧げるように、胸の真ん中にあてられていた。二十に届かぬ娘とは思えぬ妖艶な笑みに、二人の近衛は生唾を飲み込む。その瞬間、砂漠の熱を上書きするほどの興奮と仄かな嫉妬、正体のわからぬ恐れとを抱きながら。

けれども、何故に恐ろしさを覚えたのか、彼らには理解しきれていなかった。なぜならば。

――その四肢を根元から寸断してあげるのに。そうしたら、私がずっとあなたのお世話をしてあげられるわね。あなたには、私のお喋り相手になって欲しいの。訊きたいことが、聞いてもらいたいことが、山のようにあるのよ。

高貴な女騎士が誰かを恋い慕うような微笑みの陰で、そのような背徳的な想いに囚われているなどとは、誰しも考えが及ばないからだ。

～思惑　ｅａｃｈ　ｓｐｅｃｕｌａｔｉｏｎ５～

対セーニアの前線基地となっているオルソアの町、ルトラバーグに辿りついたシュイは、町全体を覆い尽くすぴりぴりとした雰囲気にあてられていた。

ここに到るまでに、セーニア軍の疾風のごとき侵攻は当初ジヴーを裏切ろうとした四カ国を丸呑みにしていた。ガザッタとモスアを制圧したセーニア軍は三日間の休息を挟み、軍を二手に分けてガザッタの北西の国テレンダール、ガザッタの南西に位置するエリメドを同時攻撃。兵がろくにいなかったエリメドは一両日中に、ジヴー側が一万の兵を動員していたテレンダールですらも一週間を待たずに陥落。ジヴー軍は隣国オルソアへの撤退を余儀なくされていた。止まらぬ猛威を前にして兵たちの士気が高揚する材料は乏しく、ジヴーの命運は敵味方を問わず、冬を前にして風前の灯と見なされていた。

ジヴー連合の十一国のうち実に四国が失われ、各町村ではこれ以上濃くならないだろうというくらいの、敗戦の香りが漂っていた。それに耐えきれなくなったのか、蓄えのあった住人たちはぽつぽつと町を去り、残された者たちもこのままここにはおれぬとばかりに荷物纏めに奔走していた。危険（セーニア）の接近が最大の要因であることは言うまでもないが、ジヴー連合の近隣の国々で難民受け入れの態勢が整った、ひいては一時避難を行える土台が整ったことが、住民らの避難に拍車をかけたのだ。

その中でもいち早く動いたのが四大国の一つ、フォルストローム。その迅速な対応にアミナの尽力が大きかったのは言うまでもない。セーニアに対しては及び腰だった周辺諸国も、フォルストロームの支援表明を皮切りにして追従の動きを見せた。シュイに告げた通りに、彼女は王族にしか不可能ことをやってのけたのだ。

とはいえ、旅慣れていない者が広大な砂漠の単独踏破をするには命の危険を伴うため、商隊や軍隊の者たちが付き添って町を離れるということだった。南にあるオアシスの町ビスレノームを経由し、その更に南を流れるモビ川の上流から川を下って各国に向かうルートだ。

支援を表明した国々に対して、もしやセーニアから批判や軍事的威圧がないかとやきもきしていたシュイだったが、そういった趣旨の声明がセーニアから発表されることはなかった。内心では面白くなかっただろうが、ジヴーの制圧が終わっていない今、フォルストロームとルクスプテロンが共闘の約を結ぶような口実を与えたくないのでは、との見方が強かった。

シュイは軍が駐留している砦に向かうべく、荷物を背負った住人たちが引っ切り無しに行き交う広い道の端っこを歩いていた。商店の扉の多くは堅く閉ざされ、露天市場を通り抜ける際にもテントの骨組みだけが残っている。完全に取り去られていない天幕が旗のように強風に煽られ、それがいかにも寂しく見えた。

数の上で言えば三分の一以上の国が失われているのだから、流通、すなわち輸送隊や商隊が滞っていてもなんら不思議ではない。それによって売り物を確保できない店が出てくるのは確実だ。連合のトップ、賢老院（ルーツ）による配給が成されなければ住民たちも日干しになっていたかも知れない。

小高い山の上にある頑強そうな砦の門付近には五、六人の見張兵たちが立っていた。お世辞にも任務に従事しているとは言い難い。警戒しなければならぬはずの彼らは揃いもそろって下を向いている。実際、シュイの足音が聞こえるくらいの距離でやっと顔を上げる有様だ。シュイが事情を簡略に説明して中に入れてくれるよう頼むと、兵たちは言葉少なにうなずき合い、木を継ぎ合わせてできた扉の鎖

を引き始めた。

概して、敗戦を重ねた軍の雰囲気は険悪だ。ご多分に漏れず、砦の中では溜息や舌打ちがひっきりなしだった。それでも怒る元気が残っているだけまだましかも知れない。頭や腕に包帯を巻いた負傷兵たちはすっかり意気消沈した様子で、そこかしこで壁にもたれかかっていた。虚空を見つめる虚ろな目が、開かれっ放しの口が悲哀を物語っている。セーニアの猛威をその肌で感じてきたのだから無理もないのだが。

一時間ほど訊ね歩いた末に、シュイはようやく見知った赤髪の男を発見した。日差しから逃れるでもなく、顔を覆い隠すように三角座りをしたままぴくりとも動かない。遠目からでもわかるその変貌振りに、踏み出しかけたシュイの足がぴたりと止まった。だが、直ぐに思い直したのか前を向き、しっかりとした足取りで近づいていく。

以前にも増して色濃くなった褐色の肌。項垂れる首元は日で真っ赤に焼けている。長期に亘って熱を帯びた砂風に晒されたせいだろう。ミルカと結婚してから手入れを怠っていなかったはずの赤髪は艶を失い、見る影もなくぼさぼさになっていた。刀傷だらけの革鎧を着込んだその身体には深手こそ負っていないようだったが、膝や腕には大雑把に包帯が巻かれ、滲んだと思われる血液が茶に変色している。身体に纏わりついている砂を払うこともしておらず、衛生的とは言いがたい。反面、この暑さは蚊も蠅も忌避するようでたかられてはいなかった。

これ以上足を踏み出せば当たる距離。黒衣の裾がピエールの視界にも居座ったはずだったが、ピエールはやはり動こうとはしなかった。

「……はっ、わざわざこんなところくんだりまで、俺を笑いにでも

きたのか。あぁ良いぜ、笑えよ、存分に」
力無く、そしてどこか自嘲を含んだ掠れ声だった。負け戦では大勢の死傷者が出るのが当たり前だ。相当なショックを受けているだろうことはエスニールを経験しているシュイにもよく理解できた。
大人の対応を。そうと心がけていたおかげで、いつものノリで本当に笑ってみせるようなことはしなくて済んだ。けれども、顔を合わせようともしないピエールには僅かながら怒りを覚えた。
「わざわざ迎えにきてやった戦友への第一声がそれ、か。おまえだってエヴラールの制止を無視してここにきたんだろ、それなりのメに遭う覚悟はしていたはずだ」
「うるせぇよ、んなもん頼んだ覚えはねぇ。こちとら気が立ってるんだ、嫌味を言いにきただけならとっとと帰れ」
――このままじゃ話にならないな。
シュイは音が聞こえぬよう留意して息を継いだ。下手な慰めは逆効果のようだった。ならば控えめにガス抜きしておくか、と口を開く。
「いつまでガキみたいに拗ねてるつもりだ。おまえがここへきたのはなんのためだ、そうやって打ちひしがれるためなのか」
ピエールの身体がびくんと揺らいだ。次いで一挙動で立ち上がり、シュイの胸倉を手で捻るように掴み上げる。
「今頃のこのこやってきたおまえになにがわかるってんだ！」
唾を散らすピエールの咆哮に、周りにいた兵士たちがぼんやりとそちらを見た。その目が真っ赤に充血しているを目の当たりにし、シュイはフードの奥で目を細めた。
「仲間が力尽きていくのを目前にしてなにもできずに逃亡しなきゃなんねえ気持ちが、おまえにわかんのか、あぁ！？」
二度と見たくもない、けれどもしかと網膜に刻まれた光景を過ぎらせながら、ピエールはシュイの黒衣を掴んだままわなわなと握り拳を震わせていた。

場に響き渡る味方の悲鳴。浴びせかけられる敵の罵声と嘲笑。そして敵側から発される太鼓の音に埋め尽くされ、どちらから包囲を突破すれば良いのかもわからぬまま、隣にいた者が一人、また一人と敵兵に呑み込まれていった。砂に突き刺さった、横たわった剣は瞬く間に増え、それが連なる墓のようでもあった。

残された家族を案ずる声が掠れ、次々に途切れていく。何かを必死に掴もうとするその手が力を失い、砂に横たわる。彼らになにも応えてやることができぬまま、ピエールは所属していた部隊の兵たちとしゃにむに死線を切り開いた。事切れた彼らを容赦なく足蹴にするセーニア兵たちから逃げるために。砂を蹴り上げ、時には逃走する味方の兵士たちに肘打ちを食らいながら。

口の中が砂と血の味で埋め尽くされ、足に纏わりつく砂が鉄鎖のように鬱陶しくなったころ、ピエールはようやく後ろを見た。千人近くで突撃したはずだったが、なんとか敵の追撃を振り切った時には、周りにいるのは自分を含めて十人足らずという有様。筆舌に尽くしがたい無力感に襲われ、逃げ切ったその場で砂地に膝をつき、人目も憚らずに悔し泣きをした、つもりだった。涙を出すはずの両目は戦いと砂漠の熱でからからに乾ききっていた。

強くなったはずだった。身につけた実力と依頼をこなした実績に自信も持ち始めていた。剣を片手に研鑽を重ね、手強い魔獣をも単独で制することができるようになった。以前辛酸を舐めさせられた大毒蜂など最早物の数ではない。微力ながらと口にしつつも、微力で終わらせるつもりは毛頭なかった。だからこそ、故郷のためにと勇んで駆けつけたのだ。

悔やむべきは現状の認識不足。微力にすらなれなかったという残酷な現実。一向に好転しない状況の中、ピエールは開戦日から今日まで、ずっと自分を責め続けていた。何がシルフィールの傭兵だ、何が準ランカーだ、と。

長々と思いの丈をぶちまけ、ようやく息を切らしたピエールに、沈黙を守っていたシュイは小さく溜息を落とす。そしてゆっくりと目を合わせ――

「わかってるよ、嫌というほど」と、胸倉を掴まれたまま淡々と呟いた。ピエールの目にあった怒りに、それとは違う感情が混じり合った。言葉の内容への驚きと、語感に含まれる氷の冷たさへの戸惑いが。

「それで？　いつになったらこの不躾な手を放してくれるんだ」

穏やかながらも恫喝するような声に、ピエールは唇を噛み、毒づきながらも突き放した。シュイは乱れた襟元を整えるようにしながら、言葉を続ける。

「負けが込んで苛立っているのはまぁ許せるってか仕方ないとして、絶望に浸ってる暇があるんならミルカと生まれてくる子供のことを心配してやるのが先だろ。今の自分を省みて、おまえの気持ちを汲んで恨みごと一つ言わずに送り出してくれた彼女に申し訳が立つのか」

ピエールの命が彼だけの物ではないことを再確認させる言葉。シュイは、少々あざとかったかな、と不安げに彼の顔を窺う。幸いにして、一定の効果が表れているようだった。眉間にしわばかりが刻まれていたピエールの顔から、憑き物が落ちるかのように毒気が消えていった。

多少なりとも頭が冷えた様子のピエールに、シュイは場所を変えようと提案した。ぎすぎすとした雰囲気にではなく、じりじりと背中から照りつける日差しに、いい加減耐え切れなくなっていたのだ。

大きなアカシアの木陰に身を寄せた二人は、オアシスの緑を見て目を休めていた。砂漠から吹いてくる砂風が背に当たるよう淡水湖

の方を向く。考え事をするには程良い涼しさ。これまでのあらましを聞き終えたシュイは、どっと芝生の絨毯に身を横たえる。

「ナイト・マスターの後継者、か」

ふと懐かしい顔が目に浮かんだ。半ば父のように慕っていた騎士、コンラッド・ディアーダ。心温まる思い出。裏切られたことによる絶望感。手を下したことによる喪失感が刹那的に去来する。

「自分を餌代わりにするような作戦、よっぽどの自信がなきゃ採用できない策だとわかっちゃいたけど……。人武器問わず近づいたものを片っ端から破壊しちまう、竜巻みたいなやつだった。はっきりいって接近戦じゃあ手の出しようがない。かといって、味方の攻撃魔法もあの妙な盾で無効化されちまうし。おまえやアミナ様が戦ったとしても正直――」

その先は遠慮したのか続けなかったが、続けようとした言葉は予想がついた。良くて危ない、悪くて勝てない。どちらにしても大差はない。

ピエールにしても、出会ったばかりの頃とは比べ物にならぬほどに力をつけている。それはシュイもよくよく知っていることであるし、強兵揃いのセーニア軍の包囲網を突破してきたこと自体、尋常ではないのだということも理解している。その彼をしてはっきり敵わないと言わしめる男。どれほど驚異的な力量を持っているか、容易に想像がつく。

――イヴァンを退けたというのも、まぐれじゃなかったか。

おのれの認識を改めざるを得なかった。ここに赴く前、ビシャが暗殺せんと襲来したイヴァンを退けたという話をアミナから聞いていたシュイは、ピエールの話を聞くまで自分に都合の良い希望を捨て切れていなかった。兵の指揮能力は優れていても、戦士としての実力はイヴァンに及ばないのでは、という期待が。もっと言うと見込みの甘さがあった。

裏を返せば、それは今の自力が三年前に戦ったイヴァン・カスト

ラを上回ると断言できぬ不安からきたものだ。それほどにイヴァンの強さは群を抜いていた。彼に対して一歩も引かなかったとなれば、ビシャの強さを想定より数段上に格上げして対応策を練らねばならなかった。

――やれやれ、これじゃあピエールのことも悪く言えないな。

口元に浮かんだ苦笑。だが、そこに落胆の色はほとんどなかった。骨を断たせて骨を断つ。そんな薄氷を踏む戦いは、これまでにも経験してきていることだ。

ビシャの実力を嫌というほど認識したところで、シュイはもう一つの懸念に話を移す。

「これまでの戦いで、ミスティミストの傭兵は戦列に加わっていたのか」

ピエールは腕を組み、宙に視線を遣る。

「……いや、少なくとも今までの戦いでは見かけなかったと思う。こっちも必死だったからあんまり自信はないけれど、傭兵っぽいやつはあまりいなかったな。あぁ、エリメドの方には行ってないからわからないけど」

そうか、とシュイが何気なく視線を下に向ける。それに気づいたピエールが足元にあった白い石を拾い上げ、座ったまま、横に滑らすように投げた。卵大の石が水面でステップを刻みつつ二人から遠ざかっていき、一際大きな波紋を残して消えた。沈んできた石に驚いたのか、小魚が何匹か連続して跳ねた。

「やつら、本当にここに来ているのか」

半信半疑と言った面持ちで、ピエールはシュイに視線を走らせた。寝そべっていたシュイはよっと身体を起こす。

「ああ、それについては裏も取ってある。セーニア軍がジヴー入りする前には傭兵らしき者たちが騎士団の中にいたことが確認されている」

「となると、先陣で加わっていなかっただけか、あるいは――」
別行動をとっているか。だとすれば様々なパターンが考えられる。諜報活動に従事しているのかも知れないし、別の方面から攻め入っている可能性もある。また、エヴラールの説、遺跡に埋もれた古代技術を探しているのでは、という話も現実味を帯びてきているように思えた。
「こういっちゃなんだけど、ジヴーを相手に過剰な戦力を投入するとも考えにくいしな。諜報か探索に絞って良いと思うんだが」
「けどよ、そんな大事な物を傭兵たちに取ってこさせるなんて考えられるか？　ましてや、全面的に信用できるような温い連中じゃないぜ」
その意見には同感だった。やるにしても合同で探索するだろうことは。どちらかといえば悪名高い四大ギルド、ミスティミスト。彼らに全て任せきりにしたとなれば、折角見つけたお宝を持ち逃げされることも十二分に考えられる。お互いに、一癖も二癖もある連中同士が強い信頼関係で結ばれているとは考えにくい。
「ただ……、単に武器とか魔法書とかなら傭兵に頼んだりせず、騎士だけで十分はかどるはずだ。捜索対象が身内には頼みづらい、罠だらけの危険な場所ってことも考えられる」
「持ち逃げされない大がかりなものかも」
「その可能性も捨てられないな。もう一つ考えられる可能性としては、発見したとしてもそのままでは使い道がない物なのかも知れない」
ピエールの表情が疑問に曇った。
シュイは具体例となりそうな魔法道具に置き換えて説明する。柄と刃が切り離された呪剣。または、特殊な透過布をかぶせることによって、無数にある文字の羅列から術式が読めるようになる魔法書などが存在する。対となるもの同士が合わさって初めて効果を発揮する道具。どちらかが欠ければ意味を成さない。つまりは鍵と扉、

もしくは額縁と合わせ絵（パズル）の関係。その仮説が正しいとするならば、セーニアは既に鍵となるものを持っている可能性が高い。だからこそミスティミストの傭兵に探すのを依頼できた。そう考えられるからだ。

「発見できませんでした、となれば話は別だけどな」

そう言うピエールにシュイが、いや、と首を左右に動かす。

「甘い期待をするのはもうやめにするよ。これ以上後手に回ったら取り返しがつかなくなりそうだ」

「じゃあその線を当たってみるか、身体を動かしていないとまた色々考えちまいそうだし。俺も遺跡に関しては門外漢だから、地元の連中に心当たりがないか聞いてみよう」

とはいっても、とシュイが肩をすくめる。

「そちらを詮索する時間はほとんどないだろう。セーニア軍はもう直ぐそこまできてるんだ」

セーニア支配下にあるテレンダールの最寄りの町はルトラバーグからさほど遠く離れていない。これまでの連戦でジヴー側の戦力はしかと把握されているはずだ。準備が整い次第、直ぐにでも攻めてくるだろう。

しかし、返ってきたのは意外な言葉だった。

「当面その心配はないはずだ。そうだな、これから二週間くらいは」

具体的な猶予を口にしたピエールに、シュイが訝しげな視線を向けた。するとピエールは言葉ではなく指先で応じた。淡水湖の逆の方角、もう見慣れた、見飽きたという領域に入りかけている広大な大地。遥か彼方にあるのは白砂煌く地平線。そして、その上空には刮目すべきものが広がっていた。

――あれは、黒煙？　――いや、違う。

地平線にのしかかる黒いもやが微かに光を発したのを見て、シュイがその正体に思い至る。

――雷雲、か。

シュイの囁きに、ピエールがうなずいた。

「例年よりちょっと早いみたいだけど、あの雲の広がり方からするとかなりでかいのが来るぜ。付近一帯を闇で覆っちまう砂嵐、＞黒（バリ）褐渦（ークラウド）＜だ」

～思惑　ｅａｃｈ　ｓｐｅｃｕｌａｔｉｏｎ６～

＞黒禍渦（バリークラウド）＜。昼に夜の闇をもたらすジヴーの風物詩。この時期にかけて強まる南からの季節風が無数の塵を巻き上げ、帯電して一気に広がっていく現象。単に視界を遮るだけに留まらず、運が悪ければ感電死する恐れもあり、粉塵によって吸い込んだ者の呼吸器系をも冒す禍（わざわい）の雲。これが襲ってきている時に外出するのは自殺行為だ。

淀みなく、どこか得意げなピエールの説明に、シュイは頭が痛くなってくるのを感じた。それはつまり、俺たちもじきに身動き取れなくなるんじゃないか。そう切り返したらこいつは一体どんな反応を示すのだろうか。

＞黒禍渦（バリークラウド）＜がやってくるまでに、と古い遺跡について聞き込みを開始した二人だったが、闇雲に町を練り歩いたところで遺跡に詳しい者と巡り会えるとは思えなかった。地元の者が周辺の名所や観光スポットに必ずしも詳しいとは限らない。ましてや、今は多くの住民たちが他国へ避難しようとしている真っ只中である。訊ねる相手を間違えれば怒りを買うだけに終わる可能性も高かった。

そういった諸々の事情もあって、シュイとピエールは二手に分かれ、ルトラバーグに点在する教会や寺院に絞って聞き込みをしていた。歴史ある建築物の管理者であれば避難も他の者より遅いだろうし、一般人よりもそういった情報に精通しているだろうと見込んだのだ。

回っている内にわかってきたことだが、ルトラバーグの宗教施設の中でも取り分け多いのがルクセンの寺院だった。シュイも宗教にそれほど詳しいわけではなかったが、セーニア教の『神に祈りをささげれば誰もが救われる』などの首を捻りたくなる教えや、レムー

ス教の『良いことをすれば良いことが、悪いことをすれば悪いことが返ってくる』などの善性を尊ぶ教義が、一般的なモラルに対して少なからず影響を与えていることは知っている。

反して、三大宗教と言われるもののうち、一際印象に残るだろう『平等とは悪である』という教義。それを広めているのが他ならぬルクセン教だ。

その宗教観を表すのに必要不可欠な言葉がある。大いなる遺志の流れ、＞エスペラン＜。大地、大気を問わず、ありとあらゆる物質を通り抜ける不可視の力が流れる大河。それには無数の支流が存在し、地中に張り巡らされた木の根のごとく世界の隅々へ行き渡っている。流れているのは世間一般に魔力と呼ばれているものと同義で、痩せた土地には豊饒を、豊かな土地には腐敗をもたらすのだという。

＞エスペラン＜の本流は時の流れと共に世界をゆっくりと巡っているが、世界の全てに同量の恵みをもたらすわけではない。その流れは一定ではなく不確定であり、様々な事象に影響されて流れが変わっていく。故に、それは平等とはほど遠い存在だ。徹底した現実主義を受け止める心を裡に宿す。それこそがルクセンの本道である。

ところで、そういった魔力の流れは人為的に堰き止めることはできないとされている。流れ込む魔力はさながら降り注ぐ雨のように、あらゆる場に溜まっていく。流入する量が少なければ作物の育たない不毛の地となるし、多ければ豊かな土壌となる。ただし、それも限界を超えると溜まりにたまった魔力が容器（いれもの）そのものを破壊してしまう。そして、そこから滲み出た力がその周りの土地を潤していく。

その考え方が多分に真実を含んでいることを、優れた魔法使いたちは知っている。シュイの故郷、エスニールの族長の中にも、こういった魔力の吹き溜まりを周りへと逃がす道を作る祈歌（チャンター）使いが何人か存在した。そうすることによって容器（いれもの）が決壊するのを先延ばしにできるのだ。

裏を返せば、それは他の土地へ豊かさを分け与える行為に他なら

ない。しかしながら、溜まり過ぎた魔力が溢れ出た時にはとんでもない災厄がもたらされる。豪雨、干ばつ、竜巻、火山の噴火、地震、そして霊質の顕現による英霊、悪霊の降臨。そんな天変地異クラスの災厄よりは、土地が痩せてしまった方がずっとましだろう。二十年先、三十年先を見据えれば結果的に長く恩恵を受けることができるのだから。

――――

地平の彼方にあったはずの＞黒禍渦（バリークラウド）＜はルトラバーグからそう遠くない位置にあった。既に太陽は灰色の雲で霞み、あれほど強かった日差しもなりを潜めている。

シュイはぼやけた太陽を恨めしげに見上げつつ、茶店でピエールと少し遅い昼食をとっていた。

「……まいったな、ちょっと考えが甘かったかも」

シュイは指についた握り飯のご飯粒を唇で啄ばむ。ここ三日間で二十近くの施設をあたってみたものの、二人は未だ手掛かりの手の字も見つけられずにいた。

「仕方ないさ、ちょいと聞いただけでわかるような遺跡だったらとっくに冒険者や盗賊たちに荒らされてるだろ」

慰めの言葉を吐きつつ、ピエールは拳大の握り飯を二口で平らげる。まぁな、と返しながら、シュイは二つの白い空のコップに手をかざし、こぽこぽと水魔法（みず）を注ぎ入れた。湿度が一桁となれば水系の魔法も著しく効果が弱まってしまう。初級の魔法では水分補給するのが関の山だ。

ピエールはさんきゅ、と水が7割ほど入ったコップを持ち、ぐびぐびと音を立てて喉を潤す。

「しっかしどうすっかなぁ。あの雲、明日にはこの町を覆っちまうぜ。……他の町にでもいくかぁ？」

どしっと丸テーブルに頬杖をつくピエールに、シュイは背もたれ

に寄りかかって腕を組む。
「他の町っていってもなぁ。状況はここと似たり寄ったりじゃないか？」

ピエールと再開してから今日までの間に、ルトラバーグの住人のうち、約半数が他の町や他国へ向かうべく町を脱出していた。中心街も人通りは疎らで閑散としており、今食事をしている茶店も今日中に店を畳むのだという。＞黒禍渦（バリークラウド）＜が収まれば直ぐにでもセーニアが攻めてくるのだから当然といえば当然なのだが。

これといった良案も浮かばず、溜息混じりに身体を起こした時だった。周囲に展開していた感知魔法の領域内に、一際高い魔力の持ち主が侵入したのを感じた。しかも、徐々にこちらへと近づいてきているようだ。

シュイはその気配の挙動に意識を集中させ、椅子の下に置いてあった鎌の柄を足の甲に乗せる。念話で注意を促そうとピエールの方を再び見ると、驚いたことに彼の視線は既にそちらの方に向いていた。しかも、見ているのではなく、見惚れている模様だ。

シュイが横に視線を滑らせると、聖衣らしきゆったりとした服を着た女が、人目を気にするようにきょろきょろとしながらもこちらへと向かってきた。そして、シュイとピエールとの距離が三歩ほどになったところで

「あのぅ、この付近の遺跡がある場所を嗅ぎま……、訊ね歩いているというのはあなたたちですか」そう言った。

「あ、ああ、そうだけど」

どこか落ち着きなく、ピエールが応じた。ふと、女は前かがみになり、椅子に座っている二人と目線の高さを合わせてきた。

腰まで届きそうな長い黒髪と青い聖衣が見事に映えていた。清楚且つ神秘的な雰囲気を纏っている女、年の頃は人族の容姿で二十代

後半といったところだが、尖った耳からすると魔族だろうからかなり年上だろう。薔薇を象った護符（アミュレット）を首から下げていることから察するに修道女（シスター）のようだ。前にかがんでいるせいで胸元の布地が無防備に垂れ下がり、胸の谷間がはっきりと見えてしまう。

――す、すげえ。なんて包容力のありそうな人なんだ。

――ば、馬鹿やろ。おまえ、どこ見て物言ってるんだ。

味方がやられたってあれだけへこんでいたくせに。シュイは豊かな胸に釘付けのピエールにじと目を送る。後で戻ったらミルカに言いつけてやらねばなるまい。そう決意させるほどにしまりのない顔だ。

二人の声を殺したやり取りを知ってか知らずか、ヴィオレーヌは曲げていた腰をすっと伸ばし、幼子に向けるような微笑みを浮かべる。

「お初にお目にかかります。私はヴィオレーヌ、ルクセン教の伝道師（セージ）を担う者です」

ピエールが鼻の下を伸ばす傍らで、シュイはその自己紹介に驚きを隠せなかった。修道女（シスター）ではなく伝道師（セージ）。ルクセン教には最高責任者が存在せず、三人の大司教が同じ権限を持ち、多数決で方針が決められている。大司教の下が司教、その下が伝道士にあたる。ヴィオレーヌと名乗ったこの女はかなり上の位を賜っていることになる。

「その若さで伝道師（セージ）様とは、才媛と呼んで差し支えませんね」

シュイは警戒を解かずに相手を持ち上げた。

「さ、様づけをするほどたいしたものでもないのですけれど」

謙遜しながらも、女は照れ臭かったのか頬に手を当ててはにかんだ。それが素のものなのか、それとも計算によるものなのか。シュイは女の表情の裏に隠れたものを見逃すまいと目を細める。

『得体の知れない美人が近づいてくるような場合には、絶対に気を抜かないようにね』

と、これはニルファナのありがたい忠告のひとつである。実際ニルファナ自身が近づいてきた時はぼっこぼこにされたわけで。その恐怖、もとい教えは準ランカーになった今も活きている。

「あ、俺はピエールです。こっちはシュイ」

と紹介しつつ隣にある空き椅子をすっと引くピエール君。気が利くな、と素直に感心していいものかどうか、微妙に迷うところである。

「ピエールさんに、シュイさん」

女は忘れ物がないかを確認するように二度ゆっくりとうなずいた。

「それで、俺たちに何か用ですか。正直あまり暇な身ではないので手短にお願いしたいのですが」

「おい、その口の利き方は初対面の淑女（レディ）に失礼だろ」

なら初対面の淑女の胸を凝視するのは失礼じゃないのか。ってかおまえのその態度は何よりミルカに失礼だ。そう念話で返すと、ピエールは隠しておいた官能本を見つけられたような、なんとも気まずそうな顔をした。

ヴィオレーヌは気分を害した様子もなく、お構いなく、と微笑んだ。

「昨日、教団の者から遺跡を探し回っている方々がいると耳にしたのです。ひとつ心当たりがありましたので、そちらさえよろしければご案内させていただければと思いまして」

そこまで聞いたところで、やっとこピエールも顔を引き締めた。どうにも話がうますぎる。むしろ、こんなべたべたな方法では怪しまれるだろう、と相手が考慮してくれても良さそうなくらいだ。

「それが本当なら、こちらとしても非常に助かるのですが」

まずは相手の出方を窺うのが吉か。そう判断したシュイは前向きな言葉を口にする。

「ええ、もちろんですわ。ただ、この場所ではなんですので一旦寺院へと足をお運びいただきたいのですけれど、構いませんか？」

申し訳なさそうに上目遣いをするヴィオレーヌに、内心で警戒のレベルを上げる。人目につかないようにと気を遣いながら、見ず知らずの相手に対して案内をするなどと申し出る者はいないはずだ。となると、ヴィオレーヌか、もしくはヴィオレーヌの仲間がこちらの所在を知っている可能性がある。

――まぁいいか。他に手掛かりがあるわけじゃないし。

時間がない今、藁にもすがりたい思いには変わりない。追い詰められた時に目の前にぶら下がっている餌が往々にして危険な物だということはわかっているけれども。

少なくとも、ヴィオレーヌから敵意らしきものは匂わなかった。これほどに高級そうな法衣には滅多にお目にかかれないから、ルクセンの伝道師（セージ）であるのもおそらくは事実だろう。最悪、嵌められていたとしても準ランカー二人を以ってすれば戦うなり逃げるなりできるはずだ。

数瞬の黙考の末に、シュイは了承の言葉を口にした。

ヴィオレーヌが案内したのは町の一番端の区画に位置する墓地の隣、ピエールが初日に訪れていた地下神殿だった。灌漑用水のために作られた貯水池のようにも見えるがもちろん水は入っていない。長方形の穴に神殿がすっぽりとはまってしまっている。

案内される間、シュイは辺りを隈なく警戒していたが、別に怪しい人影などは見なかったし、鋭敏な殺気が放たれるようなこともなかった。少なくとも見張られてはいないようだった。

幅広の下り階段を、意外なほどの早足で進んでいくヴィオレーヌに、シュイたちも遅れぬようついていく。日の光も届かぬ入口には両側に六本の柱が並び立っていた。

ヴィオレーヌは柱の裏に置いてあったカンテラを手に持ち、指先から火を灯した。

「さぁどうぞ、こちらです」
入口から覗く先を見通せぬ深い闇にヴィオレーヌが歩を進める。
シュイとピエールはちらりと視線を交わしてから、ヴィオレーヌの後に続いた。

そこは、トンネルといって差し支えない場所だった。照明になるようなものはどこにも見当たらず、光源はヴィオレーヌの手にしているカンテラだけが頼りだ。もちろん、＞照明魔法（フラッシュ）＜を使えば別であるが。
真っ直ぐな一本道がずっと奥まで続いていた。先ほど入ってきた入口の方を振り返ると、外の光は今にも潰えようとしている。
カンテラから漏れる橙色の光が両側の壁面や、手を伸ばせば指先で触れそうなほど低い天井を照らしていた。天井は等間隔で継ぎ目があり、壁には絵のようなものが通路の奥まで彫ってある。

ややあって通路が途切れ、天井が一気に遠ざかった。そこはちょっとした竜でもくつろげそうなほどに広い空間だった。壁面に埋め込まれているいくつかの四角い魔石からは淡い光が放たれている。
「お二人をお連れしました」
ヴィオレーヌの落ち着きある声が高い天井へと吸い込まれ、小さく反響する。やはり仲間がいるのか、とシュイが人の隠れていそうな場所、祭壇の付近や柱などに視線を走らせる。
だが、戦闘を仕掛けてくる様子はない。ヴィオレーヌが二人から直ぐに遠ざからないところからみても、罠に嵌めようという気配は感じられない。シュイとピエールは戸惑いつつも、いつでも応戦できるよう武器の近くに手を添える。
「手間をかけたな、ヴィオレーヌ」

突如、後ろから放たれたその声に只ならぬものを感じ、シュイとピエールが振り向きざまに構えを取った。視界の中央に収まった珈

琲色の髪の男にシュイが目を瞠る。
「……な、……イヴァン？」
シュイの漏らした掠れ声に、ピエールがはてと首を傾げる。
「んん？　どっかで聞いたような名前――でえぇ、こいつが、あの！？」
ピエールが声を裏返した。セーニア最大の敵にしてナイト・マスター殺害の容疑者。ランカーに比肩する特級指定犯罪者、イヴァン・カストラ。かけられている賞金の額は現時点で１０億パーズにも及んでいる。自分とて彼の素性を知らなければピエールと同じような驚嘆を口にしていただろう。
驚き、郷愁、怒り。そして自分でも気づかないくらいの仄かな喜びがシュイの心中を駆け巡った。
「フォルストロームでの一件以来か。噂はかねがね耳にしているぞ、シュイ・エルクンド。それから、隣にいる色黒の赤髪は、ピエール・レオーネだったか」
――驚いたな、準ランカーになったばかりのピエールを知っているのか。
あるいはシルフィールにもイヴァンの仲間がいるのかといった考えを脳裏に過ぎらせつつ、シュイは開きっぱなしになっていた口を閉じ、佇まいを正す。昔の名ではなく今の名を呼んだのは隣にピエールがいるためか。シュイはその配慮に一瞬感謝し、続いてはその感謝を手放した。アミナを殺しかけた三年前のことだけはしっかり根に持っていた。
シュイは構えを解かずにイヴァンを睨む。
「どこへ雲隠れしたのかと思えばルクセンに身を寄せているとはな。帰順でもしたのか」
「お互いの利害が一致しただけだ、それ以上の意味合いはない」
イヴァンが素っ気なく言うと、後ろでヴィオレーヌがどこか悲しそうに目を伏せた。
――ふぅん？　そういう関係か。

「まさか、セーニアのジヴー侵攻にはてめえが」
前に一歩出たピエールを目にして、ぽっと頭に浮かんだ邪推を脇に置く。
「関わっているわけではない。当初は、と付け足すべきだが」
イヴァンが語尾を引き受ける。ということは、現在進行形で関わっているということか。それにしても、なぜこのタイミングで自分の前に姿を現したのか見当がつかない。

「なんで俺たちをここに連れてきた」
「この国がセーニアの勢力下でないとはいえ、俺に莫大な賞金がかかっていることには変わりない。セーニアの諜報員が潜入していないとも限らないから彼女に頼んだ」
目的を訊ねたつもりのシュイに対して、イヴァンは自分が身動きできなかった事情を説明した。
「回収する物があってこの町に赴いたんだが、黒ずくめの怪しい者たちが遺跡を探し回っていると聞いたんでな。もしやと思ったら案の定おまえだったというわけだ」
なんと失敬な、というピエールの表情。それが、俺とこいつ(シュイ)を一緒にするな、という風にも見え、シュイはイヴァンよりも先にピエールを小突きたくなった。

「イヴァン、セーニアの狙いを知っているのか」
「おまえたちとて遺跡の在り処を聞き回っていたということは薄々と勘づいているのだろう。ジヴーの遺跡に眠っている魔遺物(ヴァイーラ)を血眼になって探している」
「魔遺物(ヴァイーラ)？」
ピエールが聞き覚えのない単語に眉をひそめる。遥か昔に滅びた魔法文明が叡智の粋を尽くして作り上げた魔法具のことだ、とシュイが説明する。
「っていうか、シュイ。おまえなんで犯罪者(そんなやつ)と親しげに話してるん

だよ」
「なんだ、男の嫉妬は見苦しいぞ」
「ちっげーよ馬鹿！」
真顔でそんなことを口にするイヴァンに、シュイは相変わらず掴みどころのない人だ、と場違いな苦笑いを誘われる。
「まぁ、ちょっとした知り合いってところだ。で、結局俺に用ってことか」
イヴァンはちらりとヴィオレーヌに視線をやり、直ぐにそれをシュイに戻す。
「おまえたちとも利害が一致しているんじゃないかと思ってな。有体にいえば共闘の申し出だ。付け加えるなら、相手が相手だからな」
ぴくり、とシュイのフードが動いた。ピエールはちらりと隣のシュイの様子を窺う。シュイは努めて気にせぬよう留意しながらイヴァンに返答する。
「よくもまあ、そんなことを口にできたものだな。あんたの意志はそれなりに理解しているつもりだが、だからといってフォルストロームでの蛮行を許したつもりもないぞ」
シュイが語気に怒りを滲ませる。たとえどのような思惑があったとしても大勢の者たちを傷つけ、何人かは実際に死に至らしめているのだ。そう簡単に水に流せるはずもない。
「ま、そう言われるのは承知の上だ。だが、セーニアの大軍が迫っている今も尚、おまえたちはこの地を離れようともせずに活路を見出そうとしている。となれば、過去のしがらみに目を瞑ってでも現実を打開しようとする柔軟さくらいは持ち合せていてもおかしくない。そう考えたから接触した。期待したと置き換えてもいい」
シュイはイヴァンの表情に目を移した。が、相変わらずのポーカーフェイスでその言葉が本心からきたものかどうかわからなかった。
思惑を計りかねているシュイに構わず、イヴァンは言葉を続ける。
「こちらとしてもこれ以上ジヴーの地を荒らされては困る。おまえ

たちとてそれは望んでいないだろう」
「……あんたらの目的はなんだ。それを聞きもしないで協力なんてできないぜ」
ピエールが口を挟むと、イヴァンは束の間ヴィオレーヌと視線を交わした。ヴィオレーヌはうなずくと、シュイとピエールの間をゆっくりと通り抜け、イヴァンの隣に並んで向き直った。
「遥か昔、人は今よりもずっと高度な魔法文明を築いていました。技術の進歩は溶岩の底から空の彼方に至るまで往来を可能にし、ついには世界の最果てを突き抜け、新たなる最先（いやさき）へと、理の園（オルトバニア）へと辿り着けるほどに」
「オルト……バニア？」
「ええ、あらゆる世界へと通じる漆黒の空間。にわかには信じがたいでしょうが、海に島があるように空にも島があるのです。我々の踏みしめる大地もその島、夜空に浮かぶ星のひとつに過ぎぬという話ですよ」
「この広大な世界が……無数にある島々のひとつだって？」
ピエールが疑わしげにヴィオレーヌを見る。
「古文書によれば、ですけれど。気が遠くなるほど離れた場所にあるため砂粒のように小さく見えるに過ぎず、あちらの世界から見ればこちらの世界もあのようにちっぽけな瞬きだというわけです。このような逸話がルクセンには数多く残されています。どうですか、興味が湧いたら是非ルクセン教に入信を――」
ごほん、とイヴァンが、彼にしてはわざとらしい咳払いをした。なんですか、と不思議そうにイヴァンを見るヴィオレーヌ。やや疲れた表情に変わるイヴァン。
「一体何をどうしたらそんな話に分岐するんだ。黎明期から何から説明するつもりか。我々とて今日中にここを離れなければ身動きが取れなくなるんだぞ」
「え……、あぁ、そうでした。今月のノルマがまだ残っていたもの

で、つい」
　てへ、とばかりにヴィオレーヌは自分の頭をこつんと叩く。いいなぁあれ、と彼女の仕草に萌えているピエールに、シュイはフードの奥で呆れ顔を作る。
「えっと、どこまで話しましたっけ。あぁ、そうそう。それほどに偉大な先人が作りだした魔遺物（ヴァイーラ）がジヴーの地に眠っているのです。その大部分は私たちですら持ち出し不可能な場所にあるのですが」
「少なからず持ち出し可能な場所にもあるというわけか」
　シュイの言葉に、イヴァンはそういうことだ、と腰に手を当てる。
「未知の世界への行き来が可能なほどに発達した文明の利器。そんなものが世に持ち出されれば確実にまずいことになる。遺跡には侵入者を妨げる仕掛けが幾重にも施されているが、相手方にはミスティミストの上級傭兵を始めとしてかなりの猛者が混じっている。今いる戦力で侵入者を食い止めるのは心許ない。やつらを首尾よく撃退できれば俺たちも協力するのはやぶさかではない」

　厳然として、セーニアとの戦いを控えているジヴーにとっては、ビシャと拮抗する実力を持つイヴァンは喉から手が出るほどに欲しい逸材。何よりも悪名とはいえ名声は名声。ナイト・マスターを殺めたことになっている彼が加われば士気の上昇も大いに見込める。彼を懐に抱えてセーニアの敵意が更に高まる恐れはあるが、国が滅びるか否かという時に相手のご機嫌を窺う理由はない。詰まる所、強制するつもりはないと言いつつこちらの腹の内は全て読まれている。

　だが、とシュイは顔を上げる。
「人に貸し出す戦力があるのに手助けして欲しいっていうのは矛盾していないか」
「各地に散っている仲間が多くて手練に拮抗し得る頭数が足りないんだ。おまえたちとてミスティミストの上級傭兵たちを今のうちに

始末できれば、戦場での大きな懸念がひとつ消えるだろう」
「本当にそれが事実ならここに戻るよう指示すれば事足りるはずだろ。何故そうしないんだ」
相手がどれほどの規模なのかをそれとなく確認する質問。けれどもイヴァンは肩をすくめ、予想外の返事をしてきた。どうやって連絡する、と。

――どうやって、って。
答のわかりきった質問をしてくるイヴァンに自然と眉根が寄った。そんなの決まっているじゃないか。そう思いつつ、腰に下げていた連絡用魔石の入っている袋の中に手を突っ込む。そして、指先が石に触れた瞬間――いつもと違う感触にぞくりと肩が震えた。

袋に手を入れたまま固まってしまったシュイに、ピエールが困惑気味にどうしたんだ、と訊ねた。続いてイヴァンも、どこか勝ち誇った風にどうしたんだ、と訊ねた。
シュイはイヴァンを苦々しげに一瞥してからピエールに手を差し出した。握りを解いた手の平には魔石だったはずの物が、含有されているはずの魔力がすっかり失われてしまっている黒ずんだ石ころがあった。

～決意　the　will　to　win～

「こ、こんなに仕事が多いなんて、話が違うよ」

うちの支部には素敵な女性(ひと)がたくさんいる。そんなシュイの甘言にほいほい釣られてポリー支部にやってきた安い魔族ことシャン・マクシミリアンは、アミナや双子を始めとした支部の女性陣にそれが正しいと認めさせられつつも巧妙に伏せられていた現実(しごと)に辟易していた。

野性味溢れるドレッドヘアが特徴的なシャンは腕の立つナイフ使いだが、戦闘関連の依頼を受けることは滅多にない。どちらかといえば傭兵よりも鍛冶師が本業であり、気が向いた時に壊れた武器を直したり、少しばかり凝った家具を作る仕事を受けていた。

傭兵になったのも未知の素材の在り処を探るのに都合がよいからであり、当人も自覚していることであるが、さほど真面目に活動しているわけではない。にも拘わらず準ランカーになれたのは、そういった類の依頼を受けられるような技術を持つ者がごく僅かであること。そのために達成時に加算されるポイントが高難易度の依頼と比べても遜色がないこと。加えて、彼の鍛冶の腕そのものが非常に優れているためにリピーターが多いことが理由だろう。

そんな彼であるがマメに仕事をするタイプではないので、当然のように書類仕事は不慣れだった。シャンは黒いインクでてかてかになった袖を見ながらしきりに唸り声を上げていた。

「ぼやいている暇があったら手を動かせ。この書類で終わりだ、ちゃっちゃとやれ」

開け放たれたドアからアミナが両手に書類を抱えて部屋に入ってきた。それをシャンの書いている書類のすぐ横に置く。パサリ、ではなく、ドスッ、という鈍い音。

「ちゃっちゃって……」

その重みで机が微かに振動したことから束というよりも山に近い。シャンは頬をひくつかせつつ、背の高さを比べるように、頭頂部から書類に向かってつつつと手を平行移動させた。小指がぽすんと紙にぶつかり、天辺にあった紙が一枚ひらひらと落ちた。シャンの身長はアミナと同じかやや低いくらいだが、座っていることを差し引いても充分に過ぎる量だ。手が痛くなるのはもちろんのこと、定時にはとても帰れそうにない量だ。

この借りは高くつくよ、シュイ。シャンは机に力なく顎を乗せ、恨めしげに白い塔を見上げた。

カリカリと、筆が紙をなぞる音だけが支部長室に響く。手つかずの書類の高さが徐々に減ってゆき、ようやく半分ほどになったころ、ノックもなしに部屋のドアが開いた。壁際の椅子に座って読書にふけっていたアミナが顔を上げると、制服姿のアマリスと目があった。

「どうだった」

「全然駄目。ピエールさんにもやってみたし、緊急連絡用のも試してみたんだけど、やっぱり無反応だった」

後ろ手でドアを閉めつつ、アマリスはがっかりした様子で首を振った。

「そう、か。あの二人のことだ、何事かあったとは思いたくないが」

クッションつきの背もたれに寄りかかり、アミナは組んでいた片膝を不安げに抱える。

母国フォルストロームにジヴー難民受け入れの体勢を整えさせたアミナは、一旦二人の無事を確認しようと魔石で連絡を取ろうとしていた。ところが、いくら念を込めようとしても手に持つ魔石が全く反応しない。明くる日も、そのまた明くる日も試したが徒労に終わった。流石にこれはおかしいと思い、昨日にはアマリスにも頼んでみたのだが結果は変わらなかった。その一方で、支部で依頼人と

のやり取りに使われている魔石には問題がなかったため、ジヴーにいる二人に何か由々しきことが起きたとしか考えられなかった。

魔石が全く反応しないということは、相手の魔力を感知できない状態。すなわち死に至っている可能性も否定できない。シルフィールの本部とてこの状況に気づいていないとも思えないが、ジヴーから大雑把な情報しか入ってこない今、積極的に動いてくれるとも思えなかった。

元気の抜け落ちた二人に対し、一人黙々と書き仕事をしていたシャンがおもむろに顔を上げた。仕上がった書類を脇に置き、持っていた筆を行儀悪く鼻と上唇に挟みつつ宙を見る。

「――もしかしたら、妨魔の柱（アンチ・マジック・ピラー）を使っているのかも知れない」

ぽつりと呟いたシャンに、アミナとアマリスが揃ってシャンを見る。

「それって魔力を阻害する魔法具だよね。でもあれは――」

シャンの指摘通り、妨魔の柱は打ち建てた場所の周りに存在する魔力を霧散させる効果があるが、それほど広範囲に効果が及ぶわけではない。連絡用魔石に含まれている魔力の量はたかが知れているから妨害されてもおかしくないが、シュイたちとて一所にとどまっているわけではないだろうから日を改めて試せば一度くらいは通じるはずだった。

「俺も魔法具が専門ではないけれど、護符（アミュレット）や呪符（タリスマン）なんかを作っている仕事仲間から色々聞いてるんだ。効果の薄い魔法具であっても複数使ってきっちり法陣の形を組めば効力が飛躍的に強まるし、特定の領域内と外界との魔力を遮断する結界も張れるそうだよ。おそらくは内から外へ救援を呼べないようにセーニア側が仕組んだものだろう。安いもんじゃないし人手があって初めてなせることだけど、それにしてもやることが大きい」

感心している場合か、とアミナがしかめ面をする。連絡用魔石は

標的の魔力の位置を特定して初めて効果を発揮するものだ。シャンの仮説が正しいとするならばジヴーに対しての連絡は今後も期待できないということに他ならない。

「気休めにもならぬ、状況が悪化していることに変わりないではないか」

中で起きていることを外部へ漏らさぬための処置がそこまで徹底されているということは、非道が行われぬとも限らない。アミナの不安は先ほどよりも増したようだった。

「心配？」

「当然であろう。シュイは共に生死を潜り抜けてきた仲間だぞ」

シャンは困ったように笑った。

「……シュイだけじゃなくてピエールとか、Bランク以下なら他の傭兵たちもジヴーに行っているんだけどね？」

「も、もちろんわかっている！」

念を押してきたシャンに、アミナは微かに狼狽しつつも語気を強める。

「まったく羨ましいな、仮にも一国の姫君にそこまで身を案じてもらえるなんて」

「うぐ……」

「アミナさんはしぶちょーが好きだもんねー」

咄嗟にアミナがアマリスに口を開きかけたが言葉の体をなしていなかった。漏れ出た掠れ声に恥ずかしげに口を噤んだが、整理がついたのか再び口を開く。

「私はそんなことを言った覚えはない！」

「口にしなくても周りにそう思われちゃってる現状を推して知るべし、だよ」

ふふっと笑うアマリスに、アミナの顔が耳まで真っ赤に染まった。そういえばアマリスの方が年上だったな、とシャンはせんなきことを思う。

「凛々しき姫君に恋のウワサ、か。ここがフォルストロームだった

らこの見出しだけで一カ月くらいは話題に事欠かないねぇ」
にまにまと笑うシャンを、アミナがきっと睨みつける。
「そんなに怖い顔しちゃ駄目ダメ、シュイが怖がっちゃうよ」
「しっ、しつこいぞ！」
照れに怒りを添加されたアミナが両腕を下に突っ張って反論した。
「いいじゃない、普通にお似合いだと思うよ」
シャンに歩み出そうとしていたアミナの足が、途中で止まった。
「――そなた、シュイの素性を知っているのか？」
この流れからして、仮にも一国の姫を掴まえて黒ずくめの男とお似合いだとは言わないはずだ。アミナの頭には、シャンもシュイの顔を見たことがあるのではないか、という考えが過ぎっていた。
「素性というか顔は知ってる。多分二十歳はいってないでしょ。あの年齢で傭兵やってるんだからワケありだろうけれど詮索するのも野暮だし。それに何より羽振りの良い客に逃げられると俺が困るんだ、真面目に働かなきゃいけなくなるからね」
からりと笑うシャンに、アミナもようやく表情を緩める。
「そういえば、シャンはシュイの武器のメンテナンスをしているのだったな」
「ああ、合縁奇縁って言葉があるけれど彼とも不思議な縁だね」
不思議そうな顔をするアミナに、シャンは少し胸を張る。
「何を隠そう、彼の使っている鎌は俺の師匠、ジョシュア・ボーディングの遺作なんだ。本人から聞いていないかい？」
「――いや、初耳だ」

名工ボーディング。ありとあらゆる戦士たちが切望する武器の作り手として知られている。かなりの気分屋で、機嫌が良い時に彼の目に敵うだけの使い手が直接依頼しにこないと仕事をしなかったという。頑固一徹ながらその腕前は確かで、手がけた武器の中には数千万を超える高値がついているものも珍しくない。
「鍛冶ってボロい商売だよねー。型に溶かした金属流してちょちょ

いのちょいで数千万も貰えるんだから」
　アマリスがあっけらかんとそう言うとシャンはちっちと指を振った。
「わかってない、わかってないよアマリス。鋳造なんてどこの鉄工所でだってできるじゃない。鍛冶師ってのは鍛造をしてこそなんだ」
「鋳造？　鍛造？」
　ほへっと首を傾ぐアマリスに、シャンはごほんと咳払いする。
「いいかい、金属ってのは見た目が同じでも仕上げ方によって強度にえらい差ができてしまうんだ。例えば、これ」
　シャンは書類に乗せていた、大きめのスプーンくらいの長さの文鎮を持ち上げる。
「こういった、型で作るような物、つまりは鋳造で作る金属具には目に見えないくらいの小さな隙間がたっくさんあるんだ。その隙間を無くすために行うのが鍛造さ」
　アマリスはわかったような、わかっていないような顔をしながら指を咥えた。つまりはわかっていないのだと判断し、シャンは自分の頭をわしゃわしゃと掻く。
「なんか適当なたとえ話があればいいんだけど。……そういえば、以前シュイにも説明した時、彼が上手いこと言ってたな。なんだっけ――あぁそうそう、餅だ」
「モチ？」
「お餅だよお餅。米をついて粘りけを出した丸い食べ物、知らない？」
「そ、それくらい知ってるよ！」
　馬鹿にしないで、とばかりにアマリスが頬を膨らました。丁寧に説明してなんで怒られなきゃいけないんだ、とシャンが項垂れる。だが、慣れているのか立ち直りも早かった。
「まあ、それはいいんだけど。要は、この文鎮はただ炊いたお米を茶碗一杯に満たしただけのもの。それに対して、鍛冶師の作った武器はお餅なんだよ。それも何工程もの手間をかけて作るんだ。鍛造

で金属の粒を細かくすると同時に粒と粒の間の隙間を丹念に潰すわけ」

「ああー、なんとなくわかったかも」

アマリスが感心したようにうなずいた。

鍛造には職人の技術が不可欠だ。熱した金属を均一に伸ばし、金属の粒を密にし、その方向を整えてやることによって初めて良質な武器を作ることができる。

加えて、ボーディングの武器がもてはやされているのは複数の魔法を作業に取り入れた独自の鍛造法を確立しているところが大きい。良質な金属とメノアやブレイノベルといった純度の高い魔力を含む鉱石の結晶。それらを高温下で融合させることによって比類なき強度の魔法合金が出来上がる。それを魔法で冷ましたり熱したりしながら武器の形状に整えていくのだ。人手も手間もかかるがその性能は他工房の武器と一線を画す。

「私の記憶が確かであれば、ボーディング氏は大分前に亡くなったと聞いているが」

アミナの指摘に、シャンはやや声を落とす。

「ああ、師匠は無類の酒好きだったこともあってちょいと肝臓が悪くてね。弟子たちも健康を心配して何度も飲酒を止めさせようと申し出たんだけど、そのたびに拳骨が返ってくるんだ。まぁ、頑固一徹を地でいく人だったから。かくいう俺も何度殴られたことか。鍛冶師には力自慢が多いけど、取り分け師匠の拳は半端じゃなかった。手の大きさも俺の顔くらいはあったからね」

年がら年中、分厚くて固い金属板を叩いていれば勝手に腕力もつく。鍛冶師の拳はそれだけで立派な凶器である。かくいうシャンも、その身体は小柄ながらかなりがっしりした体つきだ。

「けれど、そんな師匠も質の悪い病には勝てなかった。ある時期を

境に一気に痩せ細っていって、妙だなと思った時にはもう手の施しようがなかったんだ。――でもね、医者に死の宣告されてからも師匠は工房に籠もって武器を打ち続けていた。あの人は根っからの職人だったよ。病気ごときで仕事を途中で放り出せるかって、依頼されていた二つの武器を納期までに仕上げてみせた。それでもって師匠の最後の作品になったのが、あの大鎌だったんだ」

～決意　the　will　to　win2～

――鎌の話をする前に少しだけ、俺の師匠、ジョシュア・ボーディングについて触れておきたい。師匠の生まれはフォルストロームのレグゼム、人族と獣族のハーフだ。そこは、今はもう絶滅した翼族（ガルデ イアン）が住んでいた町で、数多くの伝承や神話が伝えられているそうだ。そんな話を子守唄代わりに聞かされて育った師匠は、所謂伝説の武器ってやつに憧れを持ち、自分の手でそんな武器を作り上げたい。そう思うようになったらしい。

今でこそ稀代の名工ともてはやされている師匠だけれど、決して順風満帆な人生を歩んできたわけじゃない。初めは王都の工房に弟子入りして働いていたんだけれど、その頃フォルストロームでは鉱石類の値段が軒並高騰していた。理由（わけ）は後で触れるけれど、そんな事情もあって材料が不足することが多くて、あまり鍛造に関わる仕事はできなかったそうだよ。

もっと腕を磨きたいと常々考えていた師匠はすぱっとその工房を辞めて、裸一貫、良質な鉱石が安く手に入るルクスプテロンへと旅立ったんだ。

北の大陸へと降り立った師匠は、まずは自分を雇ってくれる人を探し始めた。現在ルクスプテロン連邦の中心的役割を果たしているキルジア共和国のとある町を訪れた時、有名な職人にやる気を見込まれてね。そこで腰を落ちつけて見習い修行を始めたんだ。後に奥さんとなる獣族の女性と出会ったのもその町なんだけど、奥さんの親父さんが共和国の要職に就いていた関係で、修行を終えた後で軍の専属鍛冶師になったって聞いている。

アミナは法律に詳しいだろうから『司教に布教』になってしまうけれど、連邦っていうのは複数の国が共通する法律を持つことによって統一国家を組み、新たに一つの政府を作り出した状態のことを

指す。その点で連合とは少し意味合いが違うね。各々の国の政府の更に上に、集合体としての政府がある。上位の政府が決めたことに対して、連邦に所属している国は逆らうことができないんだ。

その頃、ルクスプテロン連邦は今みたいに戦争の真っ只中だった。ただし、その時は今とは逆にルクスプテロンがセーニアに攻め込んでいて、そこにエレグスも加わって三つ巴だったっていう違いはあるけれど。おかげで武器や魔法具の素材がかなり高騰していたらしい。つまり、フォルストロームからも相当量の素材がセーニアやエレグスに流出していたってこと。

そういった背景もあって武器の受注はひっきりなしだった。しかも軍の専属ともなれば材料費の心配はないだろう？　師匠はそんな環境下でめきめきと腕を上げていったんだ。

ただ、お国柄というか、ルクスプテロンでは外との諍いに留まらず、内部での揉め事もかなり多かったみたいでね。キルジアを筆頭に謀略が絶えなくて、しょっちゅう上の人が暗殺や流刑なんかで入れ換わっていたらしいよ。

政局争いは収まるどころか過熱する一方だった。しまいには一般人にも犠牲者が出てしまうようになって、奥さんの親父さんも上司が暗殺された時に巻き添えになってしまった。あまりにごたごたが多過ぎて仕事にならないってんで、まぁそれは建て前で奥さんやお子さんが巻き込まれるのを嫌ったんだと思うけれど、師匠は意を決して家族と一緒にセーニアの田舎町に引っ込んだんだ。

独立してから数年は頑固な性格と強面で中々商売も上手くいかなかったらしいけれど、次第にその堅実な仕事振りが評判になってね。十五年くらい前だったかな、師匠は自分の工房、オリジナルブランドを立ち上げた。その時に人足の募集があったから、鍛冶師を志していた俺も弟子入りした。――ん、俺の年齢？　３５、まだまだ青二才さ。

いや、案の定というか、教え方は凄い厳しかったよ。工具の持ち方から姿勢から、金床と椅子との距離までね。俺と同時期に工房に入った人足は十人以上いたんだけれど、五年経っても残っていたのは俺を含めて三人だけ。恥を忍んで言うけれど、俺も一度や二度じゃなく、やめようと思ったこともある。今は辞めなくて良かったと心から思えてるけれどね。

それで、8年くらい前だったかな。俺も工房の職人としてやっと免許をもらった頃。長年の大酒飲みが祟ったのか、ついに師匠は身体を壊してしまった。医者からはあと一年生きられるかどうかって宣告されて、あの時は俺たちもどれほど落ち込んだかわからない。なんで無理矢理にでも止めなかったんだろうって。……うん、そうなんだ。そもそも力づくで止められるやつがいなかったんだよねぇ。

当の師匠は制作途中の武器を仕上げなきゃなんねぇ、って引き止める医者を振り切って病院を出てきてしまった。師匠が亡くなった今ではボーディング式なんて言われているけれど、あの鍛造法だとどうしても制作に時間がかかるから。

中途半端な仕事が最後になってしまうのがよっぽど嫌だった、というよりも怖かったんだろう。仕上げを手伝えって俺たちも連日徹夜で駆り出された。皆、師匠を思う気持ちは同じだったのか、誰も文句ひとつ言わずに働いてた。

依頼された武器もなんとか完成して、使い手に直接その武器を手渡した二日後、やはり無理が重なっていたんだろう。師匠は血を大量に吐いてぶっ倒れた。深刻そうな顔をした医者にご家族を呼んできてくださいって言われた時には覚悟せざるを得なかった。

幸い危篤状態は脱したんだけれど、誰が見てももう働けるような身体じゃなくなっていた。頬はこけ、目は窪み、皮膚は黄色くなっていた。見ているだけで辛かったよ。あとはなるべく苦しまずに死を迎えられれば。周りの誰もがそう思っていた。――ところがね

まだ夜が明けきっていない時間。朝靄が立ち込める中、仕事仲間といつものように工房に足を運ぶと、カーン、カーンって甲高い音が聞こえてきた。自分の呼吸音以上に聴き慣れている、金属板を打ち据える音だ。誰かが徹夜していたのかな、って思っていたんだけど、中に入って肝を冷やした。師匠がいたんだ。片手には普段より小振りなハンマーを持って、熱して柔らかくなった碧色に光る魔法合金の板を、何度も叩いて伸ばしていた。

「おう、ご苦労！」

入口で凍りついている俺たちに、師匠は背中越しにそう言った。いつものように頭に白い鉢巻をして。

師匠のすぐ傍には見た事もない、おそらくはどこかから借りてきただろう大きな鋳型が置いてあった。普段はオーソドックスな武器しか作らない人だったから、それを見て二重の驚きだったよ。

はっと我に返った俺は、師匠を止めなくちゃって思いに駆られた。衰えた身体で鍛造なんてハードな仕事をするのは自殺行為だってわかっていたから。意を決して、っていうか殴られる覚悟をしてってことだけど、声をかけたんだ。

「師匠、もう依頼は全て完遂したじゃないですか。これ以上は身体に毒です、頼むから安静にしていてください」

「あぁん？　何を言ってやがる、そこに客がいるだろうが」

そう言って、師匠がハンマーを持つ手で自分の後ろを指差した。でも、誓って言うけれど、そこには誰もいなかったんだ。

「えっと、一体どなたのことを、言っているんですか」

別の弟子が恐る恐るそう訊ねると、師匠はぐるりと回りを見て、弟子たちが同じ疑問を持っていることに気づいたんだろう。それきり目を瞑って黙り込んでしまった。そうかと思ったら、直ぐに作業台に向き合って、再び魔法合金を黙々と叩き始めた。

「師匠、一体どういう――」

「最後の客がいる、ぼさっとしてないでおまえらも手伝え」

病が進み過ぎていたせいなのか、それとも痛み止めに使っていた薬の幻覚作用だったのか、今も正直わからない。けれど、俺たちは顔を見合わせて、あるいはそういうことなのか、と納得するしかなかった。それ以上聞き出せる雰囲気じゃなかったから。――ん、アマリス、顔色悪いけれど大丈夫？　ホントに？

用意されている鋳型を目にして、作ろうとしているのは鎌だということがわかった。あばら骨が全部浮き出るくらいに痩せてしまった師匠は身体に鞭打って、半ばとり憑かれたように作業に没頭していた。どちらかっていうと、寝ている時よりずっと活き活きしていたように思う。ある意味ではあの鎌が、初めて自分のために手がけた武器だったのかも知れないね。

一緒に暮らしていた奥さんは半ば諦めていたみたいでさ。今更あの人の生き方を変えようとは思わないわよ、って笑ってた。師匠の意志を酌んでいたからこその笑顔だと思うよ。きっと内心では相当苦しかったんじゃないかな。奥さんも師匠が亡くなった一年後、後を追うように亡くなってしまった。おしどり夫婦っていうのは、まさにあの二人のためにある言葉だ。

子供、娘さんの方は独立していたんだけれど、ろくに見舞いにこなかった。薄情だと思わないでもなかったけれど、何しろあの二人、顔を合わせれば喧嘩ばかりしていたからな。俺がもし女で、あんな頑固親父がいたらと考えると、あんまり非難する気にはなれなかった。念のためフォローしておくけれど、お葬式の時には誰より泣いていたよ。

一日仕事をしては三日熱を出して休む。そんな感じで少しずつだけれど行程が進んでいった。もう、そのころには誰も師匠を止めようとするやつはいなかった。みんながみんな、あの人が命を賭して

作る最後の作品の完成を見守ろうという気になっていた。
――あぁ、二人ともあの銘をみたことがあるんだな。砂時計を表す＞ＨＯＵＲ　ＧＬＡＳＳ＜。あの文字は自分の病魔が大鎌の完成を前に下心を出さぬよう、師匠が願掛けで彫ったものなんだ。明日をも知れぬ病の身、せめて命の砂が落ちるまでは生き長らえさせてくれ、ってね。それほどまでに中途半端を嫌がっていたってことさ。
ただ、残念ながら病魔が空気を読んでくれることはなかった。柄を完成させたその日に師匠は工房で倒れて、それっきり目覚めることもなく、あの世へと旅立ってしまったんだ。

埋葬時には各国からそうそうたる顔ぶれが並んだよ。有名所だとキルジアの宰相パトリック・ティラ。フォルストロームの司書家マシェリィ・ヘイロン。アースレイのマスター、フーリオ・バルニエ。あぁ、セーニアの騎士団長コンラッド・ディアーダからも参加できない旨を綴ったお詫びの手紙が届いていたね。自国への体裁もあって敵国のやつらと顔を突き合わせるわけにはいかなかったんだろう。みんな師匠の作った武器に相応しい、素晴らしい戦士たちさ。二人が知っている名前も結構あったんじゃないかな。

それで鎌の話に戻るけれど、鍛冶師の大半は作品を完成させてから銘を入れる。だからあの鎌にボーディングの銘は入っていない。その代わりってわけでもないんだけれど、完成したら消そうと思っていたあの文字だけが残されたというわけさ。
――うん、わかっているよ。あの鎌は完成している。鎌刃の部分だけは俺が作って接いだんだ。ボーディングが手がけた武器を未完成のまま放置しておくわけにはいかない。師匠の心残りがなくなるように、せめてもの手向けさ。つまり、形の上では師匠と弟子（おれ）との合作ってこと。
ただし、作業を手伝うのとは別として、弟子が師の許可なく手を加えてしまった以上、師の銘を入れるのは許されることじゃない。

かといって、鎌刃の部分しか作っていない自分の銘を入れる気にもならない。そもそも、誰のために作られた鎌かもよくわからないんだけどさ。

ただでさえ無銘の武器は材料が良かったとしても安く買い叩かれることが往々にしてある。ましてや大鎌なんて一般的な武器じゃないから尚更だね。まぁでも、俺はそれでいいかなと考えていた。師匠の残した武器が名も知らぬ誰かの役に立ってくれるなら、とそこに金銭は望まなかったんだ。もちろん、他の武器を売っている手前もあるから材料費分くらいは回収したけれど。

月日が流れ、工房発足時からの弟子は一人、また一人と独立していった。もちろん俺も。自分の名前、マクシミリアンの銘を以ってボーディング工房から独立した。まだまだ師匠の腕には及ばないけれどね。

しばらくはセーニアで仕事をしていた。受注はそれなりに受けていたんだけれど、俺の作ったオリジナルの武器は、やはりというかなんというか。誰だって無名のブランドなんか見向きもしないよね。

材料は厳選しているから洒落にならないくらいの値段。なのに、その材料を使った武器が売れない。となれば、在庫と借金ばかりがかさんでいくわけだ。一日一食、酷い時はあたりめをしゃぶって飢えを凌いだこともあったなぁ。味がしなくなったら塩水に浸してそれを天日に干すんだ。――ああ、二人とも。俺のために泣いてくれてるんだね、とても嬉しいよ。

とにもかくにも食い繋ぐために、それ以上に材料費を確保するために金を稼がなきゃいけなくなった。どうにも困り果てていた時、ある人のとりなしもあってシルフィールに入ることになったんだ。依頼の中には鉱石の採掘や鉱脈の調査なんかもあったから一石二鳥。それからはギルドの仕事2割、鍛冶の仕事8割って感じで忙しい日々を送っていた。じきに俺の作った武器もそれなりに売れるようになってね。初めて売れた日のことは昨日のことのように覚えてる。

その嬉しさっていったら、もう、くぅぅぅぅぅ！　って感じ。

さて、と。ここからようやくシュイの話に繋がるんだけれど、師匠の鎌のこともすっかり忘れかけていたある日のことだった。ひょんなことから件（くだん）の鎌がうちの工房に持ち込まれたんだ。それも、大量殺人に使われた凶器として。

～決意　the　will　to　win3～

――確か三年くらい前だったと思うけれど、当時、俺はセーニアの東岸にある港町、ピクサに住んでいた。町はずれの原っぱにあった、何十年も放置されていた木工所を修繕して、そこの地主さんから無料(ただ)同然で間借りしていたんだ。その頃には羽振りの良い固定客が何人かついていたし、傭兵ランクもBに上がっていたからそれなりの生活はできていたよ。

弟子はまだ持てる身じゃないって自覚していたけれど、恥ずかしながら俺に憧れてくれるような酔狂なやつらもいてね。彼らを雇って、工房兼よろず屋って感じで商売をやっていた。

そんなある日、弟子の一人が騎士らしき男を連れて工房にやってきた。終始フルフェイスをつけている、妙と言うよりも怪しい客だったね。

そのフルフェイスの男は赤い布に包まれた物を両手に抱えていた。どうやらピクサにやってきたのはその日が初めてだったらしくてね。町で見回りをしていた衛兵に鍛冶場の位置を訊ねたところ、衛兵がたまたま工房へ向かっていた顔見知りの弟子を呼び止め、案内を引き継いだってわけだ。

「ここは、金属の熔解(ようかい)はやっているのか」

男は工房の中を物珍しそうに眺めながらそう言った。熔解については説明するまでもないね。金属製の武器や防具なんかを溶かして塊に戻す事だ。軽く言ってくれちゃったりなんかするけれど、意外と手間がかかるんだよ。柄や刀身にはまっている部品や魔石なんかはちゃんと外さなきゃいけないからね。

こんなことを言うのもなんだけれど、やり甲斐のある仕事ではな

いから気は進まなかった。熔かすだけならわざわざ鍛冶師に頼むまでもない。そこいらの鉄工場でだってできるだろうって。

とはいっても、客であることには変わりないし、手際の良い仕事に満足してくれれば口コミで別の依頼を貰えるかも知れない。そうと割り切っていつものように応対したんだ。

「物によりますけれど、できないこともないですよ」

「ふむ、そうか。ならばこれを金属の塊に戻せるだろうか」

男は赤い布に包まれていた、長物と思しきそれを作業台に放るように置いた。危うく反射的に手が出るところだったね。俺が我慢がまんと拳を震わせていることにも気づかず、男はそのまま乱暴に布を引っ張った。次の瞬間、俺は目を疑ったよ。見間違えるはずもない、師匠が死ぬ間際に手がけていたあの大鎌だったんだ。

姿を晒した大鎌を前にして、在りし日の師匠の姿が脳裏に蘇った。けれど、思い出に浸りかけた矢先に引っかかりを覚えた。そういえばこの客、さっきなんて言っていたっけ、って。俺が男に視線を戻すと、男はぞんざいな口調でこうのたまった。

「誰が作ったんだか知らないが、こんな大きな鎌どう考えたって機能的じゃないし置いといても邪魔になるだけだから熔かして欲しい。熔かした材料はそのまま買い取ってくれてもいいが、もしできるんだったら剣でも拵えてくれ。これだけの量があれば俺にぴったりの剛剣ができるはずだ。三日くらいしたら引き取りにくるから」

俺の目が据わったことに気づいたんだろうね。男を連れてきた弟子の顔が旬の茄子のように青くなった。男の突っ込みどころ満載な発言の数々に、こいつ何もわかってねぇとか、鍛冶仕事舐めてるのかとか、とにかく腹が立ってしょうがなかったんだ。

しかも、よくよく見れば鎌のいたるところに血糊がびっしりついているときた。手入れの一つもしていないのか。あんたまさか、これを何か犯罪に使ったんじゃないだろうな。あわよくば証拠隠滅の片棒を担がせる気じゃないだろうな。そんな感じで俺は男にずんず

ん詰め寄ったんだ。

あっという間に壁際まで追い込まれた男は、殺人犯のレッテルを張られてはたまらなかったんだろう。鎌を手に入れた経緯を汗だくで語り始めた。「実はレテ村で――」って冒頭から何やら嫌な予感がしたけれどね。大勢の野盗が惨殺されたって話は俺も小耳に挟んでいたから。

――嫌な予感は的中した。男はこの鎌が事件に使われた凶器だと白状したんだ。それが一旦証拠品としてセーニア騎士団に回収され、しばらくの間は詰所に保管されていた。何日かして、その犯人に対する制裁が済んだという報告が届き、めでたく処分することになったわけだ。

蛇足だけれど、男は少しばかり鉱物学をかじっていたみたいでさ。この鎌に使われている金属が市場に出回っていない物だってことに気づいたらしい。小遣い稼ぎを目論んだ男は「自分が処分します」と血塗れの鎌を持ち出した。仲間にばれたらまずいから詰所のある町ではなくて、足がつかないよう見知(ピクサ)らぬ町にやってきたってわけだ。蒸し暑い季節にフルフェイスをつけていた理由にも合点がいった。彼はおそらく常習犯だろうね。そういう話はどこにでも転がっているけどさ。

尊敬しているボーディング師匠の、文字通り命を賭して作った渾身の作が、こともあろうに大量殺戮に使われたなんて冒涜以外の何物でもない。野盗に振るったって部分で辛うじて救われたけれど、それを現場でポイ捨てするなんてとても許し難いことだ。

持ち込んだ男も色々と惜しかったね。真の価値を知っていれば安い家の一軒くらい建てられただろうし、下っ端騎士の生活ともおさらばできたのに。

もちろん、こそこそ小銭を稼ごうとする小悪党にそれを教えてやる義理はない。師匠の鎌はその場で回収し、男には駄賃代わりにな

んの変哲も面白味もない、俺が鼻くそほじりながら片手間に作った剣をくれてやった。ま、そんなんでも喜んでいたけれど。――って二人とも、なんで遠ざかるのかな。

確かに、思いがけぬ収穫と言えなくもなかった。鎌は処分される前に回収できたし、男もほくほく顔で帰っていったってことでお互い少しずつ幸せになれた。

ただ、この件をこのまま見逃したらボーディング師匠の名が廃る。ってことで、持ち主にいっちょヤキを入れ、もとい文句のひとつでも言ってやろうと考えたのさ。

犯人がシュイ・エルクンドという名前だってことは後日の新聞を見てわかった。珍しい名前だから探し出すのはそう難しくないだろうとも予想していた。シルフィールに所属していることまでは予想外だったけれど。

ホーヴィの支部で話を聞き、彼の足跡を辿っていった結果、フォルストロームを追放されてエレグスにいることがわかった。決して近くはないからいつ行こうか悩んでいたんだけれど、そうこうしている内に困った事態になった。セーニアとルクスプテロンの戦争が始まってしまったんだ。

開戦からほどなくして、セーニアの軍関係者を通じて戦争に使う武器を大量発注したいと申し出があった。ただ、俺は元々ルクスプテロン出身だったから、同郷の仲間を殺める武器を作るのは流石に忍びなくてね。きっぱりと断ったんだ。

そうしたらそれ以降、工房への受注がめっきり減ってしまって。大方、騎士団の誰かが面子を潰されたって勝手に憤った挙句に悪い噂を広めたんだろう。弟子たちの大半はそれでも普通に接してくれていたけれど、親しかったはずの町の人たちはどこかよそよそしくなってね。どうにも居心地が悪くなってしまった。

おまけに武器制作に使う鉱石類の仕入れ値が平常時の三倍近くに

高騰していたからさ。思いきってピクサの工房を畳むことにしたんだよ。

――あぁ、アミナは知っていたんだね。俺も後でわかったんだけど、マスター・ラミエルがエスチュード社に命じ、原材料の高騰を見越して市場の鉱石類を買い占めちゃっていたんだ。そりゃあ、値段が跳ね上がるわけだよ。

そういった背景に後押しされた俺は、弟子たちに新しい職場を用意し、工房を持ち主に返した後で、工具袋と師匠の形見の鎌を手にエレグスへとやってきたってわけさ。

――――

ぬっと横から差し出された手に、シャンが大きく肩を震わせた。

「喉が渇いたであろう、飲むがいい」

アミナが湯気立つ湯呑をシャンの前に置く。

「ああ、ありがとう」

アマリスが湯呑みを回し、ふーふーと可愛らしく口を窄めながら冷ましている。その隣にアミナが着席し、音を立てぬよう留意しつつ茶を啜る。

ゆったりとした時間が流れていく中、アマリスはゆっくりと首を傾げる。

「でもさでもさ、なんでわざわざ鎌を持ってきたの？　説教するだけなら必要ないじゃん」

シャンは湯呑が熱くてなかなか持てないのか、手をつけたり放したりしている。

「ごもっともな意見だ。まぁその辺りは、あっつ！　俺たち鍛冶師にしかわかってもらえない感覚かもね」

「なーに、その差別意識」

仏頂面のアマリスにシャンは、まてまて、とばかりに手の平を前

後に動かした。
「別に馬鹿にしてるわけじゃなくてさ。なんというか、作り手の意志や力が道具に宿るっていうのは起こり得ることなんだ。世に出回っている名剣や魔槍の中にも時たまにそういうものが混じってる。そんなはずがないって否定されるかも知れないけれど、あの鎌が持ち主のところに戻りたがっている気がしてさ。もしかしたら師匠の魂かなにかが宿っているのかも」
そう結んで茶を啜るシャンに、アミナがほぅほぅと、感心したようにうなずいた。その横で、アマリスは手の平で両耳を塞いでいる。しかもそこはかとなく涙目だ。

「武器は使い手を脅威から守ってこそ武器足り得る。断じて床の間に飾っておくべき物じゃない。万が一、持ち主が師匠の武器を持つに値するやつだったら返してやろうかって思ったんだ。別の場所にポイ捨てしたのは事実だったようだから、それについてはちょいと長めに説教させてもらったけどね。作り手が使い手のことを考えているように、使い手だって作り手の遺志を酌むべきだって」
アミナは空になった湯呑を机に置いてあったお盆に乗せる。
「あの武器にそんな由縁があったとはな。それで、シュイはお眼鏡に適ったというわけか」
「ああ、俺の目から見ても良くやっている。レッドボーンの件では実際にあの鎌を手にして大勢の人たちを救ってみせた。師匠も草葉の陰で喜んでくれていると思うよ」
そう笑うシャンに二人は目を細めた。

「――しぶちょー、大丈夫かな」
アマリスがぽつりと、不安を絡ませて呟いた。
「あー、あの戦いに居合わせた身としては何とも言えないね。彼の勝利に対する執念には、ちょっと危うさを感じるし」
含みのあるシャンの言い回しにアミナは引っかかりを覚えたよう

だった。
「昔は向こう見ずな面があったことも否定しないが、今はそうでもなかろう。裏ギルドのマスターを斃せるものなどなかなかおらぬぞ」
シャンは湯呑を口から放し、神妙な顔つきになる。
「そっか、アミナはあの場にいなかったんだっけ。シュイがエミドをどうやって破ったか――もがむが」
いつの間にか後ろに回り込んでいたアマリスがシャンの口をはしっと塞いだ。
――だ、駄目だってば。それは絶対漏らさないようにってしぶちょーから口止めされてるんだよ。
――え、あれ、そうなのか？
「――ほぅ、それはまた初耳だ」
押し殺したような声が、アミナの口から漏れ出た。
「あ、あれ、聞こえちゃった……かな、あはは」
「幸か不幸か、生まれつき耳はよいのでな」
ぴこぴこ、と三角耳を動かしてみせるアミナに、目を泳がしていたアマリスは救いを求めるようにシャンを見た。シャンは、なんで俺を見るの、と言いたそうに、それでも視線に押し負ける。
「いやー、あれは不可抗力っていうか、命懸かっていたから。うん、他に選択肢はなかったかも」
「話す気はない、か。私だけ仲間外れ、というわけだな」
悲しそうに視線を落とすアミナに、二人は気まずそうに顔を見合わせる。
――ど、どうすんの。
――うーん、演技ってわかっていても破壊力あるなぁ。ってか、声潜めても意味ってわかったでしょ。
シャンはアミナの方に向き直り、頬を掻きながら「絶対に、怒らないであげてね？」と念を押した。アミナは「つまりは、怒るよう

なことなのだな？」と溜息を吐きつつ腕を組んだ。

～決意　the　will　to　win4～

表社会は言うに及ばず、裏社会の住人たちにまで怖れられていたギルド、深紅の蛇骨（レッドボーン）。そして、組織に所属する数多の荒くれ者を、圧倒的な力と畏怖によって従えていたエミド・マスキュラス。犯罪者すら忌避するその男の性質は『平等』。生きとし生ける者全てを分け隔てなく、虫けらのように扱うことからつけられた仇名だ。

名もなき詩人がこんな詞を残している。息を吸うように、食べ物を食むように、歯を磨くように、今日も彼はどこかで不幸を振り撒いている、と。

一年と少し前、エレグス軍にとある犯罪計画がレッドボーンの内通者からリークされた。大勢の生きた人間を依代にし、封印されていた悪霊を一人の人間に降霊させるという非人道の極み。その術式を試す機会を虎視眈眈と窺っていたエミドは、数年をかけてエレグス国内の様々な場所に魔石柱を立て、巨大な魔法陣を描くように組み敷いていた。シュイたちはレッドボーンの企みを阻止するべく、エレグス軍が陣頭指揮を採っていたレッドボーンのギルド殲滅戦に参加した。

内通者の密告を受けたエレグスの上層部はこの事態を重く受け止め、軍に魔石柱の処理を命ずると共にエレグス北東部にある世界最大の湖、ワイラナ湖に討伐隊の派遣を要請。レッドボーンが根城にしていた島を二千の兵で強襲した。

しかしながら、数で勝っていたはずの第一次討伐隊はレッドボーンのマスター・エミドを始めとする上級傭兵の圧倒的な力の前に屈し、戦いに参加した二千人の内、およそ七割が命を失うという無残な結果に終わってしまう。名だたる魔法使いたちを大勢失い、生存者たちから戦闘の悲惨な有様を聴取したエレグス軍は国軍単体での

討伐を断念。上級傭兵に拮抗し得る生え抜きの者たちを選抜し、それと別に、腕の立つ傭兵を雇うべく多額な報奨金を約する共通クエストの掲示を行っていた。国軍と傭兵の共闘に活路を見出したのだ。

集められた傭兵の内訳はエレグスでの活動を主とするフリーの傭兵たちが大半を占めていたが、アースレイを始めとした有力ギルドの傭兵たちも何人か加入し、最終的に総勢五十名からなる精鋭のみの一個小隊が編成された。

第二次討伐隊がワイラナ湖に向かう際には苦い敗退を喫した前回と同じく船が使われたが、島の上陸地点では、第一次の時には存在しなかったレッドボーンの迎撃隊がずらりと組まれていた。無論、砂浜の上にぼさっと突っ立っていたわけではなく、茂みの中やくぼ地、木の上などに巧妙に隠れていた。それが露見したのは敵の感知魔法の影響下に入らぬ上空からの目。アマリスの従えている黒鳥、ピティリムのおかげだった。

上陸する間際になって魔法での攻撃を一方的に仕掛けられてはひとたまりもない。部隊の指示役だったエレグスのレインフォード・ミュラー大佐はアマリスの報告を忖度し、考えた末にやはり突飛な発想を以って上陸作戦に臨んだ。陸からやや離れたところで魔法使いに命じて氷結魔法で海面を凍結させ、島に至るまで広範囲の流氷を作ってしまった。

作り出された分厚い流氷に討伐隊の面々が次々と着氷し、最後に数名の部下を伴ってレインフォードが船からひらりと氷の上に飛び降りる。胸ポケットから紐を取り出し、手早く長い緑色の髪を後ろで結び、ポニーテールを作ると、レインフォードは３００ｍほど先にある島を視界に収めた。天気は快晴であるはずだったが、島の上空にはどんよりと黒い霧のようなものが漂っている。

「各々がた、準備は宜しいか！」

自分を取り巻いている兵一人ひとりの顔を見比べるようにしながら、レインフォードは青い魔力に象られた美しき指揮剣を腰から抜き放った。空気を裂く音が周りにいる者の鼓膜を揺り動かした。討伐隊の面々が表情を引き締めて、あるいは首を縦に動かして応じる。レインフォードはそれを見届けた後に微かな笑みを浮かべ、すぅっと息を吸い込んだ。

「では、これより敵勢力の殲滅戦を開始する。排除の対象は裏ギルド、レッドボーンの傭兵たち。音に聞く兵（つわもの）が相手だがそれは我らとて同じこと。我らがエレグスのために、貴公らの健闘に、そして更なる勇名の飛躍に期待する」

言うや否や、指揮剣の切先がゆらりと天に向く。どうやら相手も海の異変に気づいているようだった。すでに抜刀しているのだろう。白い砂浜にはいくつもの螺鈿のごとき煌きがあった。

レインフォードは待ち構えている敵を鋭く見据え、掲げていた指揮剣を島に向けて振り翳した。

「――研ぎ澄まされし牙を剥け！　腕（かいな）を失えども己が心の刃を以て！　戦神に恥じぬ戦いを、今ここに捧げん！」

『応っ！』

制圧の意が強く込められた前口上に、討伐隊の者たちが力強い叫びで応えた。

レインフォードを中心として五十名の討伐隊が二手に分かれ、一斉行動を開始。両の腕が大きな島を掴もうとしているかのように伸び始めた。

二手に分かれて上陸せんと向かってくる討伐隊に対し、レッドボーンの魔法使いはいち早く詠唱（インストーン）を開始していた。概して、強力な魔法を行使する際には長い詠唱が必要となる。その間は基本的に無防備な状態となるため、敵の接近を許すまでに詠唱を終えて魔法を放たねばならないからだ。

敵がはっきりと視認できる位置にまで近づいてきたころには、レ

ッドボーンの傭兵らは既に詠唱を終え、敵が射程内に入ってくるのを今か今かと待っていた。しかし、もうそろそろ撃とうかという頃合いになって、氷の海から一斉に水柱が吹き上がった。あっという間に水の壁ができ、狙いの照準を合わせていたレッドボーンの傭兵たちから戸惑いの声が上がった。打つべきか否かの判断を迫られた。

詠唱を終えていた者のうち、炎系統の魔法を詠唱していた者が何人か先走って魔法を放った。巨大な炎が帯状に放射され、砂浜を赤く照らして海の上にある水壁に迫る。

炎が水柱と衝突した瞬間、小規模な水蒸気爆発が起こった。海水が急激に熱せられて白い蒸発霧が立ち昇り、朝靄がかかったように視界が悪くなった。陸地に向かってきた流氷の一部分が爆発の衝撃で細かく砕かれ、雹のように水陸へと飛散する。

敵の攻撃魔法が逸れたのを見計らい、その靄から数名の討伐隊が飛び出してきた。ぎりぎりおのれの体重を支えられそうな流氷を足場代わりにして上陸に成功していた。まずは味方に被害を与えそうな魔法使いを始末するべく、彼らは周囲に目を走らせながら戦場を把握してゆく。突として、茂みの奥から雷が、上陸した討伐隊に向かって一直線に伸びていった。討伐隊の者らが瞬時にそれを把握、四方に散開して敵の魔法を回避する。同時に別働隊も上陸に成功したのか、やや離れたところで鋼の克ち合う音が響き渡った。

――――

開戦当初は前回の討伐戦と逆に、数で劣るエレグス側が戦いを優位に進めていた。上陸する際に戦闘不能となった者は二、三人といったところで、極力最小限に抑えられていた。

レッドボーン側にもやはり数名、準ランカーに匹敵する者たちがいた。討伐隊が上陸してからの戦いは更に熾烈を極め、八人の犠牲が出たが、レッドボーン側の死者はそれとは比較にならぬほどの数

に増えていった。

やがて、二手に分かれた討伐隊の片割れ。敵の三重の防衛網を突破した二十人からの騎士と傭兵が島の奥にある広い建屋に辿りつき、そこでエミド・マスキュラスと対峙した。顔に幾重にも刻まれたしわから察するに老齢といって差し支えぬ歳のようだったが、体格はそれくらいの老人とは思えぬほどに大柄で、足腰もしっかりしていた。彼は自分を囲む討伐隊を一瞥して、顔色一つ変えずにその場から動こうともしなかった。

討伐隊の中には一対一でやりたいという酔狂な者もいたが、先走った男はまともな抵抗すらできずに一瞬で黒焦げにされた。

とはいえ、いくら強かろうと所詮は独りである。楽勝とはいかなくとも圧し包めば勝てる。皆が少なからずそんな淡い期待を抱いていた。少なくとも、交戦前には投降を呼び掛けるだけの余裕があったのだ。

けれども、マスターのエミドは格が違った。封呪に手を染めて竜と同等の思考速度を得ていた彼は、高位の魔法をおのれの手や足を動かすだけで自在に行使することができた。上級傭兵クラスの使い手が十人以上でかかっていって、それでも劣勢に追い込まれるほどに。二度と出会いたくない強さと心の冷たさがそこにあった。

遅れてシャンたちが島の奥に駆けつけた時、生きている者はまだ相当数いたが、立っている者は殆どいなかった。あちらこちらに跪き、倒れている傷だらけのエレグス兵や傭兵の姿があった。骨折程度ならまだ軽い物で、折る骨を周りの組織ごと失っている者すらいた。建屋があった場所は戦いの影響からか跡形もなく破壊されており、屋根はとうに崩れて灰色の空が剥き出しになっていた。壁や屋根の残骸と思われる大小の瓦礫が散乱していた。

そしてまた一人、エミドの直ぐ傍で力尽きた者が現れた。紅の電撃のような魔力を身体に帯びた彼に振れられて感電したのだ。電撃

によって全身の皮膚が焼かれてぶつぶつと細かく泡立っていた。身じろぎもしないことから絶命は明らかだった。

遠目からでは一方的な展開のように見えないこともなかっただろう。魔法使いとして悪名高いエミドの魔法を警戒しつつ、腕利きの魔法騎士や傭兵たちが五、六人で一斉に中距離から魔法を放ち、幾つもの矢を浴びせていた。エミドは攻撃に転じる隙すら見つけられず、周りに障壁を維持するのがやっとといったところだった。

けれども、少し近づけば直ぐにわかる。攻撃されているエミドの顔にあるのは余裕と退屈であり、反して攻撃を咥えている側の顔には怒りと焦り、隠しきれぬ恐怖だということが。

それでもなお向かっていく者たちがいたが、勝算があっての突撃というよりは、ただ自暴自棄になっているように思われた。

エミドの身体を包み込むように鋭い斬撃が縦横無尽に走っていた。上下左右から繰り出される無数の白刃は繭の糸を紡いでいるようでもある。

剣撃の迅さ、力強さたるや、攻撃を仕掛けているのは間違いなく一流の剣士だった。おそらくは岩をも断ち切るだろうその剣は、しかして一向にエミドの身体に届いていなかった。彼の半自律型魔法障壁によってあらゆる攻撃がエミドの肌に触れる直前、透明な壁に遮られている。恐ろしく強靭な窓に囲まれたエミドは、先ほどから必死に攻撃している騎士を部屋の中から、自分の血を吸った蚊を見るように鬱陶しそうな目でみつめた。

エミドの目が糸のようにほそまった刹那、障壁の反発力が一時的に増大した。振るっていた剣を突如として弾かれ、討伐隊が体勢を崩したのを見計らうようにして、エミドが胸の前に畳んでいた腕を薙いだ。その手の平に導かれるようにして三日月型の衝撃波が展開され、五人からなる騎士と傭兵が一斉に弾き飛ばされた。鈍い光を放つ金属製の鎧にドーム状の穴が穿たれ、兵たちがその衝撃で血を吐き散らす。一瞬にして意識を奪われたのか、受け身を取ること

ら叶わずに地に叩きつけられた。一人、頭から墜落した傭兵の首がねじれた雑巾のようになり、鬱血して青黒く変色していた。誰から見ても即死だった。

仲間の無残な死に様から思わず目を背けたエレグス兵たちを、エミドが温かみの一切感じられぬ、錆びた鉄のような目で見据えた。その実、空いていたもう片方の手指が恐るべき速度で魔印（ルーン）を切っていた。

たった二秒ほどで、大気中の水蒸気が兵たちの上空で凝集し、幾つもの水塊と化した。それらが一瞬にしてパキパキと凍りつき、慈悲なき煌めきを放つ氷の矢が形成される。異音に気づいた兵たちが空を見上げ、愕然とする。視界には目に吸い込まれるように、一挙に大きさを増していく無数の氷の矢が映っていた。

～決意　ｔｈｅ　ｗｉｌｌ　ｔｏ　ｗｉｎ５～

降り注ぐ氷雨に晒されたエレグス兵たちを守るように、あさっての方角から熱風が放たれた。紅の波が落ちてきた氷塊をひと呑みにし、領域内を抜け切る前に熔かしていく。

茫々と炎の燃え盛る音に気づき、エミドの魔法に身を竦ませていた兵たちが掲げていた腕を恐る恐る下げた。固まっていた兵たちの周りの地面には氷の棘が突き刺さっていたものの、頭上には白い蒸気が漂っているだけだった。

なんとか事なきを得たのを確認し、やや遠方から炎を放った小さな術者二人がほっと一息ついた。

「す、すまない！　危ういところを助けられたな！」

遅れて登場した別働隊の者たちを目にして、助けられた者たちが口々に礼を述べた。

「いえ、ご無事でなによりですわ」

――正直、もうとっくに終わっていると思っていたのですが……。

本音を心中に落とし込み、ティートが悠然と立っている背の高い老人を目にして親指を咥えた。正直この状況が信じられなかった。二十人近くいた猛者たちを以ってして、なおあの姿を保っていられることが。始末されているどころか、負傷した様子もなければ、濃い灰色の衣が乱された様子もなかった。見た目は朴訥とした老人にしか思えないが、額に埋め込まれている黒い菱形の魔石だけが、やたらと不気味な印象を与えた。

反して、エミドの暴れっぷりは周りの瓦礫の山や、身体を丸めるようにして息絶えている者、そこかしこから聞こえる呻き声から嫌でも想像することができた。呼気でも乱していようものならまだ可愛げがあったが、口を閉じていることから察するに明確な疲労を期待すべきではなさそうだった。

その場に倒れている人数を目で追い、これだけの人数を相手にして息を切らした様子のないエミドを見定め、討伐隊の面々は恐怖を覚えると同時に呆れ果ててもいた。

――ひとまずは生存者の把握が先決。

ティートは額を抑えながら感知魔法の領域を広げ始めた。白い輪のような魔力が、彼女を中心として広がっていく。生存者の確認を行っている彼女を守るようにして、後発組の何人かが前に立ち、残りの者たちは二手に分かれた。数名が近くで倒れている者たちの救助に向かい、残りの者たちが隙間なくエミドを取り囲む。

ややあって、アマリスが顔を引きつらせ、落ち着きなく辺りを見回し始めた。

「ティ、ティートティート！　どうしよう！　シュイが、シュイがどこにもいないよ！　……ま、まさか、あいつにやられちゃったんじゃ」

今回の討伐戦において、シュイはアマリスやティートとは別の、もう一方の部隊に組み込まれていた。確かに、否が応にも目立つその黒衣の姿はどこにも見受けられない。もちろん、劣勢の戦いで味方を置いて逃げるような気性の持ち主でないことも二人はよく理解していた。

不安げに戦場を見渡しながら衣を落ち着きなく引っ張ってくるアマリスに、ティートは湧いて出た最悪の可能性を噛み潰し、ゆっくりと口を開く。

「そう連呼しなくたってわかっていますわ、少し落ち着きなさい。瓦礫に埋もれている者も複数名いるようですから、その中にいるのかも知れません」

「じゃ、じゃあ早く助けないと！　のんびりしてたら窒息しちゃう！」

半分泣きが入っているアマリスに、ティートは溜息混じりに首を振った。人が埋まっている場合瓦礫の撤去には細心の注意が必要と

される。けれどもそんな繊細な作業が許される環境ではない。
「歯痒いけれど、今は助けられる人を助けて戦力の回復を計り、目の前の脅威をなんとかするのが先決。一刻も早く救助作業に入りたいのはやまやまですが」
相手がそれを許してくれそうにないですし、とティートが少し低い位置にいるエミドを忌々しそうに見下ろした。

「これはまた、随分わらわらと湧いて出たものだな」
木々や瓦礫が押し退けられた広いスペース。その中央に立つ、胸にまで届く髭を生やした老人から細いしわがれ声が発された。さほど大きな声ではなかったが、不思議と他の雑音に遮られずに場にいる者たちの耳に行き渡った。おそらくは拡声魔法か、もしくは念話に類する術式だろうが、少なくともティートやアマリスには覚えのないものだった。その声には大勢に自らの命を狙われている緊迫感は一切感じられず、反して二晩続けて同じおかずが出された時の落胆にも似た響きがあった。差し迫ったことではないが、気になるかと言われれば気になる、程度の。

エミドの包囲に加わっていたレインフォードが指揮剣を抜き、ゆっくりと口を開いた。
「よくも好き放題にやってくれたものだな。多くの朋輩を殺された恨み、今ここで晴らさせてもらうぞ」
「ほう、今まさに他人の家を散々荒らし回っているそなたらにそのようなことを言われるとは、心外だな」
「その余裕がいつまで保てるか見物だな。楽に死ねると思うなよ」
肩をすくめるばかりのエミドに別の方向から脅し文句が飛んだ。
「うむ、以前に来た連中の多くが等しくそんな強がりを口にして息絶えていったよ。あれだけの人数の臓器を売るのは一手間だった」
悪びれずにそう言ったエミドに、エレグス兵たちの目がぎらついた。

「死者を冒涜しやがって、ならば貴様の内臓を死んでいった者たちへの供物にしてやろう」
「――やれるのかね」
一挙に、密閉した部屋に大勢が押し込められるような重圧が生じた。肌を押してくる圧力に逆らうべく、先陣を切ったのはレインフォードだった。
「――ナクロフト流、＞怨嗟の剣（グラッジ・レイピア）＜！」
青い光を放つ指揮剣に紫色の煙のような辰力が絡みついた。形なき者を制す剣にして魔法障壁を打ち破ることも可能な魔法剣だ。
振り下ろされたその切先を、しかしエミドの障壁はあっさりと防ぐことに成功した。分厚い盾を叩いたような感触が伝わり、レインフォードの顔色が変わる。
「……これは、ただの障壁魔法ではないのか！」
「残念ながら、ね」
エミドが瞬時にもう片方の手を掲げ、脇から突っ込んできたエレグス兵に向けて巨大な炎弾を放つ。
「――くっ」
巻き込まれそうになったエレグス兵二人は素早く左右に身を翻し、すんでのところで回避する。
「おやおや、いいのかね」
「何、どういう――」
エミドの言葉に訝った刹那、後方から轟音が響いた。後に続くように放たれた絶叫に視線を走らせた者が、皮膚が千切れんばかりに顔を強張らせた。そちらには負傷者の介抱に当たっていた治癒術士が、要救助者と共に炎の柱に呑み込まれ、身を屈めていく姿があった。
「ばっ、き――」
炎弾を避けてしまったエレグス兵たちが後ろを振り返り、かたかたと歯を鳴らした。
「いやはやなんとも、君たち二人が避けてしまったからこうなって

しまったわけだね。自分だけ良ければいいだなんて、あまりにも罪深い」

救えないと言った口調で手の平を上に向けたエミドに、炎弾を避けた男の片割れが激昂する。

「貴様あああぁっぁぁぁ！」

憤激が瞬く間に伝染し、囲んでいた者たちの目が血走った。果たしてエミドの洒落に気づいた者がいたかどうかは定かではなかった。

四方八方からがむしゃらに斬りかかってくる者たちを前にして、エミドは後ろや横にも目がついているかのように対応した。盾状に、あるいは球状に形状変化させた障壁を巧みに展開し、全ての攻撃を凌いでいた。

攻撃が途切れた一呼吸の間に、エミドが＞風櫻の円環（フォレスティン・サークル）＜を詠唱破棄。輪状の衝撃波が周囲に発生し、群がっていた者たちを強かに弾き飛ばした。しかしながら怒りが痛みを凌駕しているのか、攻撃を受けて体勢を崩した者たちは瞬時に起き上がり、すぐさまエミドに向かって構えを取った。

「怯むな！　範囲魔法なら威力は知れている！　高位の魔法も直撃せねばどうということはない！」

山吹色に光る籠手で魔法を受け止めたレインフォードの叱咤に、包囲を敷いている戦士たちが熱の籠もった気勢で応じた。反して、エミドの視線は冷めていくばかりだった。

「この程度の魔法で実力を見定められた気になられるのは不本意だね。まぁ確かに？　私の障壁が私のあらゆる攻撃魔法を通さないのは事実だが。――わかるかね、そもそも私が得意としているのは防御魔法なのだよ」

一瞬、何が言いたいのか、と囲んでいる者たちが訝った。

「だから、こういった戦い方もできる」

エミドがやたらゆっくりと、万歳をするように両手を掲げた。そ

の手の平が次第に緋色の光を帯び始める。
兵たちがエミドの攻撃に対応するべく回避体勢を取るが、一向に魔法を使う様子がない。
訝る者たちが出始める中、不意に空が暗くなり、数人が頭上を見上げて目を見開いた。エミドのものと思われる魔力の光弾が空を埋め尽くしていた。その数量たるや、ちょっとした広場であれば全て範囲に収まってしまうほどのものだ。あれが全て地上に降り注げば、回避することなど到底叶わない。何しろ今からでは逃げる場所がどこにもない。逃げても範囲外に逃れられないのだ。
「し、正気か！　そんなことをしたら貴様も――」
と、そこまで言って、レインフォードは先ほどエミドが言っていた言葉を思い出した。私の障壁が私のあらゆる攻撃魔法を通さない。すなわち、上空に浮かんでいるあの魔法も例外ではないということだ。全てを察したレインフォードが一時撤退を叫びかけた刹那、エミドの両手が無情に振り下ろされた。

「な、なんてことだ……」
ティートの前にいたエレグスの騎士が、目の前で繰り広げられた光景にがっくりと両膝をついた。視界に映るのは先ほどまでなかった無数のクレーター。エミドから離れていたティートやアマリスら数人を除いて、エミドの周りにいた討伐隊は天から降り注ぐ流星の如き光弾をまともに浴び、壊滅に近い状態へと追い込まれていた。
失魔法、＞星空の贖罪（メティオリック・アトーメント）＜。場に引き寄せた魔力を無数の光球に変化させ、質量をもたせて落下させる。対象が自分の周囲にしか及ばず、狙いを絞らなくてもいいのでコントロールの必要がない。ただし、その範囲の広さから使用すれば自分も確実に巻き添えを食らう諸刃の剣だ。
範囲が広すぎて味方をも巻き込む恐れがあるので使い所の難しい魔法だが、魔法防御に絶対的な自信を持つ者が単独で使えばこの通

り、自分以外に甚大な被害をもたらす凶悪無比な魔法と化す。
　未だ立っているのは防御魔法に心得があり、ぎりぎりで障壁を展開していた二人の魔法使い。残ったものは気絶しているか苦痛に喘いでいるかのどちらかだ。既に瀕死だった者は間違いなく、今のでとどめを刺されたことだろう。
　あまりにも圧倒的なその力は兵たちの戦意を挫くのに十分過ぎたようだ。彼らは自分たちの力に誇りを持っていた。だからこそ、死ぬかも知れない戦いに身を投じたはずだった。
　惜しむらくは、その相手が悪すぎたことか。勝ち目が一向に見えぬ戦いで気張り続けることなど、並大抵の精神力で成せることではなかった。

「お、おのれ……」
　レインフォードが剣を地に突き立て、それを杖代わりなんとか立ち上がった。エミドは戦意が途絶えていないその様子を見て、無造作に手の平を突き出した。放たれた球状の衝撃波が、レインフォードが支えにしていた指揮剣を砕いた。レインフォードが前のめりに崩れ落ち、無様に顔から地に突っ込んだ。その際、砕かれた刃の欠片が頬を傷つけていた。痛みとも悔しさともつかぬ呻き声を上げ、レインフォードは拳を震わせた。
「若者が杖に頼るとは嘆かわしいな。ましてや誇り高き騎士ともあろう者が愛剣を杖代わりにするなど、いささか矜持に欠落が見られるのではないかな」
「……ぐっ」
　挑発に反応し、地面に手を突いてなんとか面を上げようとしたレインフォードに、エミドはおのれの足で応じた。上がりかけた頭頂部を容赦なく踏みつけ、強引に地面と口づけさせる。
「ぐぁっ……ぶふっ……」
　口の中に土が入ったのか、レインフォードが咳き込むように喘いだ。それを嘲笑するでもなく、エミドは無表情のまま再び足を上げ、

足を振り下ろす。その作業を繰り返した。体操でもするかのように、頭を踏んだ回数を口ずさみながら。

「5――6――7――」

「ぐぁ――ぬぐっ――ぐぅ……」

頭を揺さぶられて意識が薄れてきたのか、呻き声から力が失われていく。鼻が潰れてしまったのか、顔で掘られた土から鼻血と思しき血が染み出し始めていた。

「14――15――16――」

レインフォードの反応が薄くなってきたのを気に留める様子もなく、エミドはゆっくりと、丹念に足踏みを繰り返した。まるで、何度踏んだら人が死ぬかを確認しているように。その様子を目にして、流星を凌いだ者たちはただただ息を殺して震えていた。踏まれる対象が自分にならぬよう密かな念を込めて。

少しずつ、顔が土の中にめり込んでいくその様を目の当たりにし、ティートは歯軋りしつつアマリスに目を遣った。アマリスもティートと同じように、嫌悪感を露にしてエミドを睨んでいた。

「――見殺しにするわけにはいかないわ。アマリス、ユニゾンするわよ！」

「……りょーかい！」

とてとてと急ぎ足で、アマリスがティートと5mほどの距離を取り、しっかりと横並びになるよう前へ進み出た。互いに目線を交わし合うと、ティートが右手を、アマリスが左手を、ゆっくりと対称になるように掲げていく。指先が天へと向けられるや否や、二人が交互に言霊を紡ぎ合う。

「＞我らが指し示すは＜」

「＞汝が憤怒の矛先＜」

「＞古き盟約に従いて＜」

「＞我が願いを成就させたもう＜」

詠唱が進むにつれて、ふと二人の間に向かって風が四方からそよぎ始めた。大気中に満ちる魔力を、制御を逸脱しない速度で吸収（アブソーブ）し、それをおのれの魔力に同調（チューン）。

「＞雲海の底よりいざ来たれ＜」

「＞風の頂きに立つ者よ＜」

微弱だった風が段々とその勢いを増し、地面に円をなぞり始める。程なくして召喚法陣を象る青い六芒星が浮かび上がった。同調し終えた魔力を二人同時に解放（リリース）すると、次第に留まっていた風が地上から天へと向かって渦を巻き始める。上空では円盤状の雲が急激に発達し、その濃さを増していった。

『＞風獅子　ヴァルナンシア！＜』

手が振り下ろされると同時に二人の裂帛とした言霊が重なり、空へと木霊した。その直後、霆（いかずち）の束がうねりながら地上へと落ちてきた。二人の間にある六芒星の召喚法陣（ゲート）に導かれた霆が光の柱を突き立て、地と天を結ぶ。間断なく明滅する稲光の狭間に巨大な影が揺らめいた。

エミドが、既に虫の息だったレインフォードを踏みつけるのを止め、ようやくそちらに気を取られた。

双子の間に生じた白い闇。そこからのそりと鉤爪のある足を踏み出したのは戦場を駆ける雪色の獅子。風詠の召喚獣、ヴァルナンシア。パチパチと帯電している、青みを帯びたたてがみを靡かせ、アマリスとティートの間を割り入るように進み出る。人をわけなく潰せるほど大きな足が、ズシン、と地を震わせた。

ティートとアマリスの奥の手。同質、同量の魔力を融合させて二人で負担を共有する合成召喚魔法（ユニゾンスペル）を目の当たりにし、エミドは現れた風獅子を一瞥してからその両脇にいるアマリスとティートをまじまじと見つめた。新しい玩具をプレゼントされた、無邪気な子供のような眼差しで。

～決意　the　will　to　win6～

エミドに粘りけのある視線を向けられたアマリスとティートは全身があわ立つのを感じた。束の間、一刻も早くその場から立ち去りたくなったが、その弱気をぎゅっと小さな拳に握り込んで睨み返した。大丈夫、私たちならやれる。そうやっておのれを諭し、堅い土を音が鳴るくらいに強く踏みしめ、足の震えを振るい落とした。

「ふむ、合成召喚とは珍しいことをしよる。このような貴重な素材が自ら出向いてくれるとは、これは私に対する新たな啓示か」

感心したように、胸元まである顎ひげを撫でているエミドに対し、ティートが攻撃の意志を表すように手を掲げた。

「余裕をぶっこいていられるのも今のうちです。――ヴァルナンシア！　やっておしまい！」

――ティ、ティート。地が出かけてるよ。

そんなアマリスの囁きを掻き消す、耳を裂かんばかりの咆哮が轟いた。肌を波立たせるほどの振動が周囲に行き渡った刹那、白い巨体が忽然と姿を消した。

途端、落雷のような音が続けざまに鳴り響いた。エミドの前方の空間が乱された水面のように幾重にも歪む。

「――おぉ！？」

巨体が視界に戻ってくるのと同時に、エミドが展開していた障壁ごと後ろへ弾き飛ばされた。地に背をつくすんでのところで逆手から衝撃波を発し、勢いを殺して急停止した。着地して地面を滑ったエミドの靴底が地面との摩擦熱で白い煙を放ち、樹液の焦げた匂いがつんと鼻を突いた。

風獅子の名にふさわしい、その体躯からは想像もつかぬほどの敏捷性だった。先ほどエミドのいた場所では、ヴァルナンシアの振る

った爪が空間に三本の紅い爪痕を薄らと残していた。空気中に漂う細かな塵が摩擦熱で火の粉と化し、燃え散っている。

飛ばされたエミドの方に向かって、今一度ヴァルナンシアの姿がぶれた。姿こそ捉えきれなかったが、質量が戦場を駆けていることだけはわかった。その場にあった瓦礫や木の葉が螺旋を描き、風のトンネルを大きく象っていた。

一瞬にして、おのが残像を従えた召喚獣がエミドの斜め後方へと回り込む。エミドが振り向きかけたその時には二階建ての屋根ほどの高さから、白銀色の鉤爪が勢いよく振り下ろされていた。再び障壁とぶつかり合うも今度は上空からの一撃。先ほどのように勢いを逃がすことは叶わず、障壁を突き抜けた衝撃を支えたエミドの足元が、ひび割れて半球状に陥没した。ギシギシと、身体に通常の何十倍もの重力負荷をかけられ、エミドの腰が僅かに落ちる。

「さっ、今のうちに！　戦えない生存者をこの場から遠ざけてください！」

鈴の音のようなティートの声に触発され、傍で呆然とその様子を見ていたエレグス兵たちが取り急ぎ周囲の状況を把握し始めた。

召喚魔法は大別して二種類に分けられる。開放型召喚と継続型召喚。開放型は英霊のいる世界との扉を短時間繋ぎ、英霊の行使する神言語魔法や吐息（ブレス）などの攻撃を放つもの。対して、継続型召喚は英霊の存在維持に使われる魔力を術者が提供し続ける。そのリンクを意識的に断ち切るか、魔力が途切れるかするまで、召喚された英霊は術者の名に忠実に従う。

攻勢を強め、反撃の隙を与えぬ風獅子の姿が、絶望しかけていた討伐隊の者たちに微かな希望を投げかけた。土に膝をついたまま黙り込んでいた者たちがよろよろと立ち上がり、二人を賞賛する言葉を叫ぶ。

「い、いいぞ二人とも！　その調子だ！」

「攻撃を防ぐので精一杯だ。いける、……いけるぞ！」

その巨体を軽やかに踊らせ、風の獅子がエミドの周りを猛然と疾駆する。上下左右から間断なく繰り出される攻撃が、エミドの頭頂部へ、背中へ、四肢へと迫る。エミドの周囲に重なりゆく爪撃の残像は、まるで檻のようにも見えた。鋼を打つ硬質な音を何倍にも増したような音が奏でられ、その風圧が幾度となく周囲にも及び、場にいる者たちの服や髪を靡かせた。

「――迅いな、そして重い。流石は名高き風の英霊といったところか」

攻勢に転じ切れず、驚嘆を口にするエミドだったが、それでも未だ彼の身体には傷一つついていなかった。目で追えぬ速度で迫る猛撃を半自律型魔法障壁が全て受けきってしまう。その攻撃によって生じた瓦礫の飛礫や風圧までも。

それでも、反撃する余裕も与えぬほどの攻撃に晒されていれば肉体にしろ精神にしろ疲弊しても不思議ではない。そうでなくとも爪撃を受け止める際の負荷は生半可なものではないのだからある程度のダメージを見込めても全くおかしくない。にもかかわらず、エミドは土に背中どころか膝すらもつかなかった。

深い溜息のような息継ぎが耳に入り、ティートがちらりとアマリスの顔を見る。額に滲んだ汗が一筋の川となり、頬を伝っていた。アマリスがティートを見返すと、やはりティートの前髪が汗で頭皮に張りついていた。

――くぅ、やはりこのままではもたないか。

召喚獣がこの世界に留まり続けていられるのは、常時二人から発される魔力を糧にしているからだ。それが途切れれば当然、現世に留まることができなくなる。

本来ならば動きを止めているこの隙に、周りの者たちと共闘したいところであったが、召喚獣を戦わせている間は下手な援護攻撃は逆効果だ。仮に味方の攻撃が呼び出している召喚獣に当たってしま

えば怒りに狂い、制御不可能になってしまう可能性が極めて高い。逆に、この状態で接近戦を挑めば今度は召喚獣の猛攻の巻き添えを食ってしまうだろう。討伐隊の熟練の戦士たちもそれがわかっているのか、手を出そうとはしなかった。最早、ヴァルナンシアの攻撃が相手の防御を崩すのを待つしか方策はなかった。

けれども、そんな淡い期待が裏切られるのに時間はかからなかった。次第にアマリスの肩が小刻みに震え始めた。ティートの経験上、それは魔力が底を尽きかける前兆だった。

「ティート……ハァ、僕、もうそろそろ、ハァ、きついかも」

どちらかと言えばやせ我慢をする性質(たち)なアマリスの漏らした弱音に、ティートの抱いていた予想が確信に変わった。

「……やっぱり、魔力の保有量が違い過ぎる。――残った魔力を全て注ぎ込みましょう。瞬間的に力は跳ね上がるはず」

アマリスはティートを不安げに見た。これまでにもヴァルナンシアの攻撃を耐え抜いた者はいた。金属質の甲羅に覆われた亀のような魔物であったり、幻影によって攻撃を逸らす幻術使いの賞金首などだ。しかしながら、これほどの時間を無傷でもたせた者など今日まで存在しなかった。

二人とて、体調が万全であれば倍に近い時間は維持できるはずだったが、ここに辿りつく前にもレッドボーンの傭兵たちと気の抜けぬ戦いを強いられている。魔力も体力も摩耗した状態では望むべくもない。

「でも、ティートだってそんなに余裕はないでしょ？　使っても焼け石に水なんじゃ」

「かも知れない。けれど、他にやれることもないわ。口惜しいけれど、後は他の人に全てを託すしかない。今私たちにできるのは、あの男を少しでも弱らせて後に戦う方々の負担を軽くすること」

――それすらもできるか、怪しいものだけれど。

湧いて出た危惧を飲み干し、ティートはヴァルナンシアを引かせるタイミングを計るべくエミドの方へと視線をやる。と、その視線がエミドの者と絡み合った。目が合うとエミドはいかにも好々爺とした、人懐っこそうな笑みを浮かべた。その笑みが、何故だか説明することはできなかったが、ティートは酷く不気味なものに思えた。首筋が痺れるような寒気に囚われた。それ以上に、二人の最強手に晒されながらも別のことに気を取られる余裕があることに打ちのめされそうになった。

ふと、間近からの視線に気づき、我に返ったティートはそちらを見た。アマリスが何か問いたそうに、どこかおどおどとした、縋りつくような眼差しを送ってきた。気の強い彼女がこうも不安を表すことは滅多にない。双子の姉としてしっかりと妹を支えなければならなかった。

通じようが通じまいが、他に取るべき手段はない。迷いを乗せた息を強く吐き出し、ティートはアマリスにうなずいた。ヴァルナンシアが振り下ろしの爪撃を見舞った瞬間に下手で手招きするように、エミドの傍から後退させる。

「ヴァルナンシア！　残りの魔力を――」

「――そうは問屋が卸さんよ」

ティートとアマリスが退いたヴァルナンシアに向けて残存していた全ての魔力を放とうとした瞬間、攻撃が止むのを待ちかねていたエミドが、下ろしていた腕を天に向かって振り上げた。途端、エミドの周囲に散らばっていた細かな瓦礫が浮き上がり、双子へと一挙に襲いかかった。

術者の危機を察したヴァルナンシアが身を挺して二人を庇おうとするが、その立ち位置がやや離れていたことが徒となった。飛礫の全てを受け切ることは叶わず、ヴァルナンシアの脇を通過した飛礫

がティートへ向かって直進する。
　迫りくる数多の石を回避するべく、ティートが慌てて横に足を踏み出そうとする。が、極度の集中を強いられていたせいか、思うように身体が動かなかった。それでも石の軌道の外に逃れようとなんとか足を動かし、三歩目を踏んだ瞬間、肩に強烈な痛みが走った。
「――かっ……くはっ、あぐっ」
　一撃で身体の動きを止められ、更なる飛礫に襲われたティートの口から、歯の隙間より漏れ出る呼吸音が断続的に響いた。拳大の大きさはあろうかという石飛礫が二の腕に、太腿に、脇腹に次々とめり込んでいく。着ている衣までもが抉られ、糸がほつれ、あっという間にボロきれのようになっていった。
「ティ、ティート！」
　アマリスの目の前で、ティートは十数発にも及ぶ石飛礫を浴びせられながら無残なダンスを踊った。血の入り混じった唾液を吐き散らし、背中から地に崩れ落ちる。倒れた衝撃で全身の飛礫が剥がれ落ち、鬱血した打ち身傷が露になった。
　彼女の意識が途切れたことを知らせるように、ヴァルナシアが無念そうな唸り声を残して二人の前から消失する。それに気づいた様子もなく、倒れた双子の姉のあまりに痛々しい様子に、アマリスが小刻みに唇を震わせながら顔面を手で覆った。
「こ、こんのっ……なんてことするんだよぅ！」
　ティートの変わり果てた姿に涙を浮かべ、アマリスが犬歯をむき出しにしてエミドの方に手を掲げた。自分の分身のような存在が目の前で傷つけられた。天真爛漫な彼女にとって、初めて心から人を殺したいと思った瞬間だった。たとえ敵わないとわかっていても、残った力を全てぶつけてやらねば気が済まなかった。
　けれども、手を掲げた先には既に誰の姿もなかった。
「えっ――――がっ！」
　戸惑いの声を上げたアマリスの喉元に、真横から長い腕が伸びて

きた。自分の首を掴んでいるものがエミドの手だと気づくのに、アマリスはしばしの時間を要した。エミドがゆっくりと腕を持ち上げると、アマリスの足が地面から爪先立ち、離れ、エミドの腰の高さにまで浮き上がる。

「戦闘中に余所見とはいかんな、実にいかん」

「……は……なし……て」

何とかその手から逃れようと、アマリスが必死にエミドの手首を掴んで押し剥がそうとするが、全く微動だにしない。逆に喉を掴む手に力を込められ、両腕から力が抜けてしまう。得意の魔法を唱えようにも喉に食い込む指が吐き気を伴う痛みを与え、言葉を出すことすらままならない。加えて気道の圧迫によって酸素の供給が滞り、徐々に意識が薄れてくる。

「ぐ……るじ……」

「拮抗する実力を持つ双子だからこそなせる業か。その作用を解明できれば新たな魔法の礎になるやも知れぬな。――よろしい、光栄に思いたまえ。君たち二人を私の実験体に認定してやろう」

首を絞められて血の気を失っているアマリスの顔が更に青さを増した。

「……じょ、じょうだ……ん……――ぐきゃっ!?」

喉を鷲掴みされたまま電流を流され、アマリスが苦悶の声を上げる。宙に固定されている小さな身体が水揚げされた海老のように激しく跳ねた。ショートボブの髪が上下に浮き沈みする。

「――あぐっ――あうっ――あぁっ!」

喉を絞られたアマリスのくぐもった悲鳴と、電撃で髪の毛の焦げる匂いが、ティートの聴覚と嗅覚を揺り動かした。薄らいでいた意識が戻り、腕でなんとか身体を支えて顔を上げ、愕然とする。いつもの快活な少女とかけ離れた、苦痛に歪んだ顔がそこにあった。

「……ア、アマリス!?」

「……あぎっ……あっ……ひっ」

電撃が流される度に跳ねるアマリスの動きが、悲鳴が、目に見え

て弱々しくなってくる。否が応でも死に向かいつつあることを実感させられた。

「い、嫌！　お願い、やめっ――――ぐっ！」

アマリスに手を伸ばすようにして起き上がりかけたティートの顎を、エミドの靴の爪先が捉えた。小さな身体が大人の頭ほどの高さまで飛ばされ、宙に弧を描きながら墜落した。今度こそ完全に意識を失ったのか、ティートは声を出すことすらできずにひくひくと痙攣を繰り返している。

「心配しなくとも良いぞ。二人が揃わなければ全く意味がないのでな。ちゃんとそなたも一緒に持って帰ってやる」

「ティ……ト……うぶ……」

姉へと向けられていたアマリスの手が力を失い、だらりと脇に添えられた。ぶくぶくと細かな泡を吹き始めたアマリスを見上げ、エミドが眉を上げる。

「おっといかん、少しばかり力を入れ過ぎてしまったかな」

エミドがアマリスの着ている服越しに、左胸に人差し指を押し当てた。次の瞬間――

「――ごぶっ！？」

指先から一際強烈な電撃が心の臓へと伝わり、そのショックでアマリスの身体が大きく震えた。手荒い蘇生措置を受けて気管支に絡んでいた唾液や痰が飛び出し、アマリスの半開きになっていた口元を汚す。むせて涙腺が刺激されたのか、両目からは涙がとめどなく溢れてきた。

「ごぼっ、ごほっ、……げぼっ」

「ふぅ、危うく貴重な素体が使い物にならなくなってしまうところだった。その身体は大事にせねばならんぞ」

「……う……ぁ」

その理不尽な台詞に、しかしアマリスは怒りを覚える気力すら失っていた。電撃による激痛と胃の痙攣による吐き気。何よりも、かつて感じたことのないほどの恐怖に、がくがくと身体を震わすこと

しかできなかった。
「さて、ひとまずは逃げられぬよう足でも凍らせておくか」
空いている方の手でエミドがアマリスの足首を掴もうとした。凍傷で足を失うイメージが明確に浮かび、アマリスは恐怖のどん底に突き落とされた。嗚咽を上げながらなんとか身を捩ろうとしたが、脹脛（ふくらはぎ）がぴくりと動いただけだった。度重なる電撃によって身体の操作指令が滅茶苦茶に混乱していた。
――ダ……メ。もう……動け……ない……よ。

アマリスの心を絶望が満たしかけたその時、エミドの背後から何かが飛来してきた。風を切り裂く音に気づいたエミドが首の辺りを覆うように障壁を展開する。飛来した金色の手斧があえなく弾かれ、シュルシュルと回転しながら宙へと昇っていく。
上昇をやめ、後は重力に従って落下するだけのはずだった手斧が、ブーメランのように投手の方へと戻っていった。傷だらけの身体をおして立っていたのは丸刈りの年輩の獣族。金属糸製のグローブを嵌めたアースレイの上級傭兵だった。
「婦女子にたいしてなんと惨いことをするか！　これ以上の狼藉は許さんぞい！」
「今の不規則な軌道からすると磁力使いか。まぁよい、邪魔者を始末してからゆっくりと素体の加工に取りかかるとしよう」

手斧の男に意識が逸れた途端、今度は倒れていたドレッドヘアの小柄な男が、両手で地面を叩きつけるように起き上がり、そのまま前がかり気味に走り出した。傷ついた額から流れ出る血を拭うことなく、シャン・マクシミリアンが背を向けたエミドとの間合いを瞬く間に詰めていく。
肩越しにそれを一瞥したエミドは怯えきった表情のアマリスを、かみ終えた鼻紙でも捨てるようにティートの方へぞんざいに放り投げ、シャンが突き出した両手に対して障壁を展開する。

どさりとアマリスが地に落ちた音と、二本のナイフが障壁に突き付けられた音が重なった。鍔の部分に魔石が埋め込まれているナイフからは炎が揺らめいて刀身が白熱しているが、障壁はその熱をも遮っていた。

「いきなり刺そうとするなんて、君はあれかね、辻斬りか何かかね。もし貴重な素体が使い物にならなくなったら一体どうやって責任を取るつもりだね」

「誰があんた以外を刺すか！　この人でなしめ、女の子になんて真似をしやがる！」

シャンが唾を吐き散らしながらエミドを罵倒した。どちらかといえば丁寧な物言いをする彼だけに、その怒りは察するに余りあるもののようだった。

「おやおや、君もあの斧の男と同じことを言うのだね。君らは利用したり食べたりする生き物をいちいち雌雄区別しているのかね」

口の端を持ち上げたエミドに対し、シャンがナイフを握ったまま手を翳す。布の巻かれた柄の裏に握り込まれていたのは白い光を放つ楕円形の魔石だった。

なんの魔石かを問うことも、気にする素振りすらも見せずに、エミドはシャンに手の平を向けようとした。自分の障壁がありとあらゆる攻撃を防ぐ自信があるかのように。

けれども、シャンの手の平に収まっていたのは攻撃用の魔石ではなかった。

「――なに！」

シャンの手の平が眩いばかりの光を放ち、辺り一帯を煌々と照らした。魔石から生じた照明魔法（フラッシュ）の光を至近距離でまともに浴び、エミドがうめき声を上げつつ腕で目を覆った。

その隙をついて、シャンが倒れていたアマリスとティートを掻っ攫うように両脇に抱え、エミドから遠ざかっていく。

「……ぐ、なんとも酷いことをする。老眼がこれ以上悪化したらど

うしてくれるのだ。年寄りをもっといたわりたまえよ」
　眩しさに顔をしかめていたエミドが薄らと片目を開け、白んだ視界の中に映った、じぐざぐに遠ざかっていく影に向かって指先を振るおうとした。

　唐突に、エミドからやや離れた場所で変化が生じた。積み重なっていた瓦礫が微かに揺れ動き、細かな石がパラパラと歪な斜面を転げ落ちた。
　次の瞬間、青年とも少年ともつかぬ妙齢の男が瓦礫を蹴散らし、黒い髪を靡かせながら飛び出してきた。シャンに追撃を加えようとしていたエミドの手がぴたりと止まり、視線と一緒に突っ込んでくる男の方へと向けられた。
　＞狂嵐の砲撃（レイジング・キャノン）＜。その言霊が紡がれることはなかったが、指先から生じた螺旋状の風はまさしく風の上位魔法だった。大人を丸のみにするほどの巨大な螺旋状の風が地を削り、落ちている瓦礫を巻き込みつつ男へと迫る。
　間近に迫る脅威を前にして男は前に踏み出す足を止めず、後ろ手で握っている鎌を力強く握り締めた。勢いを殺さぬまま被弾するすんでのところでステップを刻み、必要最小限の動きでそれを避ける。魔法が巻き込んでいた瓦礫が頬を撫で、一筋の赤い糸を引いた。

「――＞怒れる霆の渦流（ボルテックス・オブ・ヒューベル）＜！」
　高らかな詠唱と同時に疾駆する男の上後方から青い稲妻が、黒い鎌刃へと引き寄せられていく。雷が高速で糸を巻くように刃に絡んでゆき、その大きさを何倍にも増していった。
　稲妻が途切れてから間を置かずして、男が象の首をも一太刀で落とせそうな巨大な鎌を大きく横に薙ぎ払う。未だ視力が回復していないはずのエミドは、しかしその攻撃にも迅速に対応した。半月型に象られた雷がエミドの展開した魔法障壁と接触し、橙色の火花を間欠泉のように勢いよく吹き上げ始めた。

～決意　the　will　to　win7～

金属同士を擦りつけ合うような音が長い尾を引いていた。拮抗し合う矛と盾。その使い手たる二人を取り囲むように凄まじい力場が衝撃の輪を生じさせた。それを皮切りにして白い風が渦を巻いて上昇していく。足元が地響きとともに陥没し、エミドと男の身体が徐々に沈下していった。

形状変化された雷の刃はシャンの目から見ても必殺の威力を持つに疑いなきものだったが、やはりエミドの身体には届いていなかった。雷はエミドの障壁を少しずつ切り崩していたが、その裏から障壁が高速再生されていた。

魔石の光で失われていた視力がやっと回復したのか、エミドはしかと目蓋を開けて年若い男と目を合わせた。憂いを帯びた黒い瞳が真っ直ぐに自分を見据えていた。

「若い、な。そなたのような小僧も混じっていたか。単なる付与魔法かと思えばなかなかどうして、この障壁に傷をつけるとは見上げたものだ。あるいは先ほどの召喚獣（ヴァルナンシア）の攻撃にも匹敵するかな」

「口の減らない爺だ。――待ってろ、すぐに黙らせてやる」

そう言うなり男が両腕にぐっと力を込めた。腕に血管が浮き出で、込められた力に共鳴するように鎌刃の大きさが更に増し、障壁の再生が追いつかぬ速度で食い込み始めた。軋んだ音が更に大きく鳴り響き、エミドが僅かに顔をしかめた。

「悪いが若者と力比べをする気はないのだよ。何より、この音は少々鬱陶しいからね」

エミドは手の平を掲げたまま地面を蹴り、障壁の位置を固定しつつ後方へと優雅に滑るように移動する。それに合わせて、アースレイの男がエミドの背に手斧を投げつけた。エミドが新たな障壁を展開するとともに、雷を食い止めていた障壁が消失。黒髪の男は付与

魔法を解除すると後ろへと、双子を抱えているシャンの方へ跳躍した。

シャンたちに背を向けたまま着地した男は、精悍というよりも繊細な顔立ちだった。瓦礫の破片で傷つけられた頬からは刷毛で撫でたように血化粧が施されている。他の部位にも裂傷を負っているのか、黒い衣の腕や背中の一部分が赤黒く変色していた。

けれども、シャンが真っ先に注目したのは男の顔でも、負傷の度合いでもなかった。その手に握られている、見覚えのある黒い大鎌。自分も制作にかかわっているだけに見違えるはずもなかった。続いては身につけている黒衣もところどころ破れているが、シュイのものに相違ないことを確信した。

「……やっぱり、シュイ、だよね」

半信半疑といった面持ちで、シャンがエミドとアースレイの傭兵との戦いを見ているシュイをまじまじと見た。シャンの脇に抱えられていたアマリスの尖った耳がぴくりと動いた。地面に向いていた顔をたどたどしく起こすと、ぼやけた視界には全く見覚えのない男が映っていた。

「シュ……イ？　……どこ……どこに、いる……の？」

アマリスがぱちぱちと瞬きを繰り返した。そのたびに乾きかけた涙が馴染んでゆき、少しずつ視界がはっきりしてきた。かなり若い、おそらくは自分よりも年下の男が肩越しに自分の方を一瞥し、微かに表情を崩してからエミドの方に向き直った。

今日この日までアマリスは、シュイの年齢を二十代後半くらいだと考えていた。傭兵としての腕前、仕草や態度からして。少なくとも自分よりは年上だろうと目星をつけていた。それだけに、目の前にいる男と普段自分と接しているシュイの姿がどうしても重ならなかった。

「面目ない、少しばかり寝ていたみたいだ。三人とも、よく生きて

いてくれた」
　聞き覚えのある声にシャンとアマリスが顔を見合わせ、やはりシュイ本人であることを確信し、微かに顔を綻ばせた。一方で、語気からは押し殺した怒りも感じ取れた。気を失っている間によもやここまで酷い状況に陥っているとは思わなかったようだ。
「やっぱりかい。容姿からすると人族みたいだけれど」
「四分の一ばかり森族の血も混じっているけどね。――＞地錐壁（アース・ウォール）＜」

　エミドの障壁に弾き飛ばされたアースレイの男を視認し、シュイが片手でひゅんと大鎌を一回転させ、柄の方で地面を叩いた。宙で身体を捻るようにして着地した男の前方で地面が一気に盛り上がり、土壁ならぬ土の円錐が形成。間をおかず、エミドが追撃せんと放っていた炎流が出来たばかりの円錐に到達した。
　火が円弧を滑るように左右にいなされたがその凄まじいまでの火力で錐の表面を一気に焼き潰していく。もたないと悟った男が慌ててその場から退き、シュイたちからやや離れた場所で立ち止まった。炎が止んだ後には頂点がぽっきり折れて円柱になった黒炭が残っていた。
「かたじけぬっ、若いの！」
「礼には及ばない。けれど――」
　シュイは沈黙し、年輩の男の太い右腕に視線を映した。辛うじて斧を握れてはいるものの、筋肉が断裂しているのかやたらと腫れ上がっていた。
「――その腕でこれ以上やり合うのは無謀だ。申し訳ないが救助に当たっている者を守ってくれ。磁力が扱えるならは支援はお手のものだろう」
「いや、……だがしかし！」
「頼む」
　シュイが男に頭を下げた。もちろん、男にもそれなりの言い分はあったはずだった。正義感だったかも知れないし愛国心だったかも

知れない。あるいは仲間の仇討ちの可能性だってあるだろう。それを全てわかった上で、シュイは男に戦線を離脱するよう促した。

男は頭を下げたままのシュイに束の間目を細め、溜息を吐き出して背を向けた。

「……戻ったら一番高い酒を奢れぃ、それでちゃらにしてやる」

「あぁ、必ず」

やり取りを終え、アースレイの男がその場から横に退くと、シュイは自分たちの様子を窺っていたエミドに見せつけるように、戦意を表すように、鎌を両手で握り締めた。

＞――まだ自力で動けている者も何人かいるようだし、彼らと一緒に戦えそうにない者をこの場から遠ざけてくれるか。それまでは何とか足止めしてみる。見た感じ、逃走路を阻むものはなにもないから問題ないはずだ＜

送られてきた念話の内容にシャンが小さくうなずく。討伐隊の大半が戦闘不能となっている状況では撤退以外の選択肢はない。無論、相手が易々と見逃してくれるかは別問題だが。

「――シャン、まだ戦えるな」

念話の内容とは真逆の叱咤するような声に、シャンは思わず苦笑を漏らした。こと戦いにおいて、敵に対する揺さぶりやはったりといった駆け引きは重要な要素だが、この圧倒的不利な状況の中でもシュイの抜け目のなさは変わっていない。救助と逃走の成功率を少しでも上げるための思案を巡らせていた。仕掛けるとみせて逃げた方が相手の意表は突き易い。

「当然だ、やわな鍛え方はしちゃいないんでね」

そう返事をしたシャンを横目に、エミドは顔の向きをシュイたちの方に固定したまま、周囲に素早く視線を走らせていた。エミドのその様子を目にし、シュイの表情が厳しさを増した。

「今のは……、俺の考え過ぎか？」

「どうした、何か気づいたのか？」
シュイは返事を返さず、顎に手を当てたまま考え込む。
「――いや、憶測の域を出ないにしても、一応確かめないとまずいな」
シュイの意図することが読めず、シャンは首を傾げた。

ややあって、エミドはシュイの鋭い視線に気づいたのか、落ち着きなく動いていた視線をゆっくりと元に戻した。
「やれやれ、あれだけの力の差を見せつけられてまだ戦意を失っていない者がいようとはね。蛮勇とはつくづく救えぬものだ。少しは身の程を知りたまえよ。あぁ、それからそこのドリップヘアの君」
先ほどと変わらぬ口調で、エミドはシャンを指差した。
「……これ、ドレッドヘアっていうんだけど」
自分の頭を指差しながらシャンが言い返した。
「どちらでも構わん。人の目に光を直接当ててはいけませんと先生に教わらなかったのかね。何年か振りに不愉快な気分だ。あまつさえ、他人の所有物を掠め取ろうとするとは親の顔が知りたいよ」

あまりに身勝手な物言いに、シャンは言葉を返すことを忘れた。これだけのことをしでかした相手から、目に光を浴びせたくらいで不快感を買ってしまったことにやるせなさを感じた。それでいて居残りを命じるような教師口調。ましてや親しい仲間であるアマリスとティートを物扱いされては腹立たしさも一入だ。
「なんだねその目は。何か言いたいことがあるならはっきりと口を開けて大きな声でしゃべりたまえ。なんなら命乞いでもしたらどうだね。あなた様にはとても敵いません、靴の裏でもなんでも舐めますから先ほどの無礼をどうぞお許しください、とね」
おどけた口調のエミドに、シャンの頬がぴくぴくと上下に動いた。
「……いいだろう、ご指名とあらばしょうがない」
「おい、ちょっと――」

シュイの咎めるような口調に、シャンは軽く首を振った。
「悪いが抗議は聞かないよ、シュイ。一人でケリをつけようだなんて格好良い真似はこの俺にこそ相応しい。二人は誰か他の者に預けるとしよう」
「……あー、もう。どうなったって俺は責任持たないぞ」
悪戯っぽく笑うシャンに、シュイは憎まれ口を返した。二人のそんなやり取りにエミドは軽く肩をすくめる。

「その双子は私の所有物だと先ほども言ったのだが、君らは耳に疾患でもあるのかな」
「……なんだ？　なんでやつはあれほどまでにアマリスとティートに拘ってる」
シュイが眉をひそめた。気を失っていて今までの状況が呑み込めていないのだとわかり、シャンが補足するべく口を開く。
「どうやら合成召喚魔法（ユニゾンスペル）にご執心のようでね、二人を魔法の実験材料に使いたいんだと」
シュイは、あーあー、と納得したような、それでいて間の抜けた声を出した。
「――どうやら脳味噌から干からび始めているようだ。俺の見立てでは幼児退行も併発しているようから直ぐにでも医術士にかかることをお奨めする」
シュイのその物言いにエミドは怒るでもなく、ただ愉快そうに笑みを返した。
「口の利き方に気をつけたまえ。私の気分次第で君如きの命はどうにでもなるのだよ」
「いちいち見下さなきゃ会話もできないのか」
「はは、見下さない人間など世に存在せんだろうに」
「……うん？」
顔に疑問を生じさせたシュイに、エミドは両手の平を上に向けた。

「君たちとて自分にとって価値がない者にはどこまでも残酷に、無関心になれるはずだ。私はその範囲が他の者より少し広いだけだよ。批判を恐れずに言うならば、私は七十二年生きてきた結果、自分以外の人間にこれといった存在価値を見出せなかった。我先にと汚物にたかる蠅となんら変わらん。そもそもなんのためにいるのかも謎だ」

シャンの眉間に深いしわが刻まれ、シュイの顔からあらゆる感情が消え去った。表し方こそ違うが、どちらもエミドに嫌悪感を抱いていることには変わりないようだった。

「神様でも気取っているつもりかい、とことん性格が歪んでいるね」

「あぁ、その顔は多分、怒っているのかな？　最近どうも人間の表情が馬並みに区別がつかなくなってきていてね。どう反応をしてあげればいいのか迷ってしまうんだよ。それから、私は無神論者だ。神などという者が本当にいるならば、私のような存在が生まれることを由とするはずがないからね」

――ご自分の破綻した性格をしっかり自覚しているってことか。本当にたちが悪いね。

――高度かつ遠回しな自己賞賛に聞こえないこともないな。未来永劫、お友達にしたくないタイプだ。

シャンとシュイがエミドから視線を外さぬまま軽口を叩き合う。

「君らは走る時に地面を這いずる蟻やダンゴ虫をいちいち避けていくかね？　いやいや、そんなことはできやしないだろう。なぜなら無数にいるからね。困ったことに私もそうなんだよ。どこにいっても人間がいる。

蚊の飛翔音が聞こえてくれれば大抵の者が反射的に目で追うだろう。首尾よく見つけられれば即潰すだろうし、そうでなければ舌打ちをするはずだ。一つの花を美しく咲かせるために小さなつぼみや病気の葉を取り除くご婦人がいるだろう。それと大した違いはないさ。私は美しくない物が嫌いなだけだよ」

「あのね、一口に人間ていったって色々な――」
「――使い古された台詞はよしてくれたまえ」
シャンが挟みかけた言葉をエミドの声が上書きする。
「いつも人間はそれだ。都合が悪くなると個性を盾に取って反論する。さっき君が言った台詞、なんだったか。そう、女の子になんて真似を、だったね。他にも、悪い人間だけじゃなくて良い人間もいる。殺人犯だから殺してもいい。――そうかと思えば、これは全員の問題だ、皆で乗り越えなきゃいけない課題だ、と言って自分に都合のいいように責任を押しつけてくる。連帯保証などというくだらぬ仕組みを世に広めようとする。今後文明が発達しても、これればかりは変わらんのだろうね」
エミドは一息入れて、軽く肩をすくめた。
「はっきり言わせてもらうと、だ。私はどうしたところで人という種に愛着を持てないのだよ。あるいは本当に生まれ違えたのかも知れないね。この年になっても竜に生まれたかったという思いが未だに消えない。そうすれば何百年、何千年と君らの苦しむ顔を拝むことができたのに」
「喋り出したら止まらないってやつかな。私は自分以外を虫けら同然に思ってます、って一行で済むことを大層なご高説だこと」
シャンが噛みつくように言った。エミドの言葉は多分に事実を含んでいたが、かといって同調できるかは別問題だった。
「おや、気に入らなかったかね。君らが賢くない可能性を考慮して念入りに噛み砕いたつもりなのだが」
「永遠に相手に伝わらないだろう無意味な優しさは持ち合わせているんだな。こちとら排除すべき敵の思想に興味はない。悪意があろうとなかろうと、危害を加えてくるなら抗うまでだ」
シュイがこれ以上は聞く価値もないとばかりに、地についていた鎌刃をぐっと持ち上げる。
「うーむ、まだ私はなにもやっていないんだが。――まぁとにかくだ、あまり長居されるとこちらも迷惑なのだよ。せめてあと一週間、

実験が完了するまで待ってくれないか。満足のいく結果が出た時にきてくれればなるべく優しく殺してあげられると思うし。もちろん、その二人を置いていくことが前提だがね」

一週間という言葉にシャンが舌を鳴らした。エレグスが計画した先の第一次討伐からは既に二十日近くが経過している。よしんばここで撤退したとしても、第三次が組まれるほどの猶予はないということだ。

「貴重な情報をどうも。残念ながら魔石柱のことは把握済みだ。今頃はエレグスの別働隊が懸命に捜索している。破壊されるのも時間の問題さ」

シュイの言葉を聞いたシャンは、そういえばそうだったな、と下唇を舐める。相手のペースに乗せられてはいけない、とおのれを窘めつつ。

「そうだろうね。つまりは、まだまだ犠牲が出るということだが」

「――なんだと」

意図の読めぬ言葉にシュイが眉をひそめた。

「邪魔されることも裏切り者が出ることも織り込み済みだと、そう言っているのだよ。伊達に歳を食ってはいないのでね。地上にある魔石柱は全てが偽物（ダミー）。下手に動かしたり傷つけたりすれば大爆発を起こす術式が組まれている。召喚法陣の起動に必要な柱は全て地中に埋まっている。果たしてあと一週間で探し出せると思うかね？」

シュイとシャンが押し黙ったまま視線を交わす。エミドの態度は自信に満ち溢れていた。仮に言っていることが全て本当であれば、ここで撤退した時点で計画を食い止めることはほぼ不可能。召喚法陣に含まれている町や村の者たちが相当数、エミドのいう『実験』の餌食になることは避けられない。

大人しくなった二人を見てエミドが満足そうに顎ひげを揉みほぐす。

「さて、これが最後の忠告だ、無駄な抵抗はやめてその双子を差し出し、大人しくこの島から立ち去りたまえ。そうすれば君らを含む他の者たちの命は助けよう。私とて鬼ではないし寛大さも持ち合わせている。彼女らには実験体として最高レベルの厚遇を約束しよう。なんなら、別れの言葉を述べる時間くらいは与えてやっても構わんぞ」

――寛大さ？

どの口が言ってるんだ、と二人が苦い顔をした。今までやり取りをしていたこと自体、ばかばかしく思えてきた。

と、右手に温かな水が垂れてきたことに気づき、シャンが視線を下げた。

「……アマリス？」

「……ごめん、僕」

シャンの腕に抱えられていたアマリスが、声を震わせた。その身体は寒風に晒されている子猫のように小刻みに震えていた。止まっていたはずの涙が大きな目に溜まっている。

「……だ、駄目、なの。あいつに逆らえば、皆が死んじゃうって、わかってるのに、……ティートのためにも、僕だけ置いて逃げてって、言わなきゃいけないはずなのに……」

未だ意識の戻らぬ傷だらけのティートを横目にして、アマリスはがちがちと歯を鳴らしながら謝罪の言葉を紡ぐ。

「……どうしても、怖い。……ひっく、格好いいこと言えなくて、……ごめん、ごめんね」

「……アマリス」

心底情けなそうな、それでいて悔しげな泣き顔だった。これほどに弱々しく、儚げなアマリスを目の当たりにするのはシャンも初めてのことだった。普段の彼女ならとても真に受けるとは思えないエミドの戯言に、怯えてしまっている。先ほどエミドから受けた拷問のような仕打ちが、彼女の心にまでも深い傷を残したことを実感さ

せられた。

シャンはティートをそっと地面に下ろし、幼子のようにしゃくりあげるアマリスの頭をあやすように優しく撫でる。

「気にするな、あんな化け物相手じゃ怯えても無理はないし、こちとら過ぎた自己犠牲なんて望んじゃいないさ。な、シュイ」

「……シャン」

アマリスがシャンを見上げ、次いで鎌を下ろした歩み寄ってきたシュイの姿に気づいた。

「……シュイ」

シュイがシャンと同じように、アマリスの頭に手を伸ばしてきた。近づいてくる手に自然とアマリスの目が細まり、閉じられた。そして――

「きゃん！」

ビシッと小気味良い音が鳴り、アマリスの顎が上に向かされた。シュイは反り返った指を元に戻し、びっくりして固まってしまったアマリスから手を引き、何事もなかったのようにエミドに向き直った。呆気に取られていたシャンが我に返り、ちらりとアマリスを見ると、おでこの辺りがほんのりと赤みを帯びていた。

「……うな」

ややあってじんじんしてきたおでこに、ようやく何をされたのか理解したアマリスがわなわなと身体を震わせた。エミドに対する恐怖からくるものではなく、期待を裏切られたやるせなさと怒り。期待してしまった自分への怒りで。

「……な、な、なっ、何するんだよ！」

癇癪を爆発させたアマリスがシャンに抱えられたまま手足をばたつかせた。

「あれ、もしかして、怒っちゃった？」

「もしかしてじゃないよ！　こんなの誰だって怒るよ！　今のって

でこぴんだよね!?　誰がどー見たってそーだよね!?」
　捲し立てるアマリスに、シュイが宙を仰いだ。
「チョップの方がよかったとか」
「そんなわけないよ！　もっとこう！　なでなでしてくれるとか、ぽむぽむしてくれるとか、涙をそっと拭ってくれるとか、いくらでもあるでしょ！」
　半分べそをかきながら猛抗議してくるアマリスに、シュイが「おぉ」と自分の手の平を打った。如何にもわざとらしい所作に、絶対にわざとだろうが、アマリスの顔がやかんのように上気した。
「ばっ、馬鹿にして！　後で酷いんだから！　この仕打ち、絶対に忘れないんだよ！」
　むきー、とがなり立てるアマリスにシュイは――
「それでこそだ」と微笑んだ。
「そうだよ、大体シュイはいつもいつも――え？」
「それでこそアマリス・ネイピアだ。へこんでいるなんてらしくないぞ」
　後に続くはずだった罵倒の言葉を喪失し、アマリスは両手を振り上げたまま固まっていた。
「シュ……。――い、いや、だからって！」
「だからって？」
「……だ、だからってっ、やっぱり納得いかないよ！　元気づけるにしたって他にやりようがあるでしょ！　なんで数ある選択肢から、よりによって！」
　ぎゃあぎゃあと喚くアマリスに、シュイが再び手を伸ばす。またやられると思ったのか、身を竦ませて目を瞑ったアマリスに構わず、今度はちゃんと額に手を置いた。触れた前髪を軽く指で挟むようにして、わしゃわしゃと揺り動かす。手を揺らす度にアマリスがあぅあぅと声を漏らした。
「強いていうならくだらないことを気にした罰だ。俺やシャンがあんなやつにおまえらを渡すって？　それこそ馬鹿にするな、だ」

叱りつけながらも、終始笑顔だった。初めて向けられる顔に慣れていなかったせいか、アマリスはシュイを直視し続けることができず、目を伏せた。視線を外した分、手の暖かさが先ほどよりもはっきりと伝わってきた。どうやっても止めようがなかった身体の震えが、嘘のように止まっていた。

「……うー」

感謝の念が一気に膨れ上がったが、思い余って言葉にならなかった。ぞんざいな仕打ちでしっかり慰められてしまったことがなんとも腹立たしく思え、素直にお礼を言う気にもなれなかった。撫でられている間、唸り声を上げることでなんとかもやもやとした感情に折り合いをつけていた。

少しして、頭を撫でていた手が遠ざかると、アマリスは「もう終わりなの？」と言いたそうな、物足りなそうな顔でシュイを見上げた。すっかりいつもの調子に戻ったアマリスに、シャンはシュイを心中で賞賛しつつ、横たえていたティートを脇に抱え直そうとした。

＞もう少しだけ時間を稼ごう。あと少し持ち堪えれば援軍が、ニルファナ・ハーベルがくる＜

――ハーベル、だって？　……シュイ？

前触れもなく送られてきた念話の内容にシャンが戸惑い気味にシュイを見た。ここに赴く前、ランカーは本部に出向中と聞かされていた。ニルファナも列記としたランカーであるから例外ではない。加えて、今さらそんなことを告げるのも不自然な気がした。

結論、彼女は絶対にこない。ならばエミドに対するはったりか、と考え直そうとしたが、念話で伝えてきたのに相手を揺さぶれるはずもない。はったりとは相手に聞かせて初めて効果のあるもののはずだ。しかしそれなら、直ぐにでも嘘だとわかる、全く意味のない嘘をついたのは何故か。

顔に疑問が浮かぶばかりのシャンを尻目に、シュイはエミドの様

子をつぶさに観察し、驚くべきことに、口元に薄ら笑いを浮かべていた。やはりその念話が本当のことなのではないかとシャンも思い始めた。

「やれやれ、穏便にことが済むよう譲歩してやったつもりなのだが、結論は変わらなそうだね」

エミドが突として言葉を切り出し、僅かに表情を引き締めた。相手の攻撃の意志を否が応にも実感した。シャンがちっと舌打ちしながらティートを抱え、曲げていた膝を伸ばしてあごをしゃくるようにエミドを睨んだ。

「おまえの願いを聞き入れてやる義理などない。ましてや彼女らを渡す気など欠片もない」

「右に同じく。仲間を売るくらいなら死を選ぶさ。――シルフィールの傭兵を、侮るなよ」

「シルフィール」

エミドがぽつりと呟き、次いでゆっくりと手の甲を見せつけるように腕を掲げた。シュイもそれに応じるように、両手に鎌を持ち直した。一方で、シャンはエミドの態度に微かな違和感を抱いた。だが、その違和感の正体がなんなのかまでは掴みきれないでいた。

――シャン、一つだけ確認しておきたい。さっきの光、おそらくは照明魔石だと思うが、エミドに通じたんだよな。

今度は念話ではなく、囁き声だった。シャンは今もって調子の掴めぬシュイの言動に首を捻りつつ応える。

――通じたって言えば通じたかな。目を眩ませることはできたみたいだし。

――そうか、なら試す価値はあるな。石はあとどれくらい残っている。

シャンがポケットに手を入れ、三、とエミドに聞こえないくらいの囁き声を返した。唇の動きを悟られぬよう歯を閉じたまま。

＞シャン、エミドに＞魔を打ち払いし縛鎖（ディスペル・リロード）＜を仕掛けてみる。一分以上かかるがそれまで二人を抱えて逃げ切れるか＜

念話を送った端から、シュイはエミドから見えぬよう、後ろ手で宙に赤い魔力の文字を描き切った。目の前に並んだその文字にシャンの眉がぴくりと跳ねた。

――そういう、ことだったのか。

シュイのちぐはぐな言動に合点がいったシャンは、微かにうなずいてから表情を引き締めた。悟ったことを、悟られぬように。

～決意　the　will　to　win8～

「こそこそと悪だくみの相談かね」

剣闘の始まりを告げる試験官のように、エミドが掲げていた手を振り下ろした。真っ直ぐに束ねられた指先が描く軌跡のままに空気が裂かれ、三日月型の風の刃がシュイたちに向けて放たれる。乾いた土を抉り、壁や柱の残骸を蹴散らして走ってくるそれを、シュイとシャンが素早く左右に散って回避。二人を分かつように刃が通り過ぎ、後ろにあった原形をとどめていない白塗りの石壁を紙のように切断する。切り離されて横倒しになるこもった音を耳に捉えながら、着地と同時にシュイが右方向へ、シャンが左方向へと走り出した。

「アマリス、しっかり掴まってろ！」

「う、うん！」

魔石をいつでも取り出せるようシャンが自分の背にアマリスを乗せ、首を掴ませて右手を自由にする。エミドの視線がちらりとシャンの方に向き、次いで接近してくるシュイに向いた。

歪な地面をタンタンと軽快に蹴り出す音が響く。シュイは間合いを詰めていく毎に相手からの威圧感が一層強くなっていくのを感じた。どうしたって認めたくはなかったが、背筋を指先で撫でるように流れていく冷たい汗が、目の前の老人が魔法使いとして最高峰であることを告げていた。

みるみるうちに近づいてくるエミドの一挙一動に注目しつつ、シュイが右上方に構えていた鎌を振り抜く。袈裟斬りに対してエミドが所作なく手の平を掲げた。先ほどと同じように障壁を展開するかと思われたが、手の平の周りに空気が収束していくのをしかと目に捉え、咄嗟に腕を畳んでガードする。

「ぐあっ！」
　馬車にはねられたかのような衝撃が腕を貫いて身体をも揺さぶった。エミドの繰り出した無詠唱の＞吹き荒ぶ風（ウィンドショット）＜をまともに受け、シュイの両足が地面から離れる。
「――シュイ！　危ない、後ろ！」
　アマリスの切羽詰まったような声に反応し、シュイが瞑りかけていた目をしかと開く。視界に飛び込んできたのは折れ曲がった鉄筋が剥き出しの壁。自分が串刺しになる光景が脳裏に過ぎり、慌ててブリッジのような状態からそのまま両足を振り上げる。宙返りしてなんとか爪先から着地。地面の砂利を靴底で擦りあげる感触が足に伝わった。
　すんでのところで踵をつき、壁に突っ込むのを避けたシュイだったが、顔を起こした時には更なる追撃が間近に迫っていた。

「――なぁっ、くそっ、早過ぎるだろ！」
　連続して繰り出される＞吹き荒ぶ風（ウィンドショット）＜に、透明な壁が迫ってくるような錯覚に囚われた。毒づきながらも横に飛び出して初弾を回避するが、そこに迫っていたもう一つの壁が立ち止まることを許さない。エミドの肘が曲げ伸ばしされる度に風の塊が繰り出される。
「シュイ！　――って、こっちもかい！」
　エミドの右手がシュイに、左手がシャンに向けられる。連続して放たれる風の砲撃に、二人が舌打ちしつつも足を動かす。先ほどの風の刃ほどの殺傷力はないが、それでも威力は申し分ない。一度食らう度に体力が奪われ、動きが鈍くなるのは避けられない。二、三発も食らえば後はなし崩し的に気絶か死まで直行することにだろう。
「残念だったねぇ。馬鹿正直に防御魔法を使わずとも初級の魔法くらいなら一息で行使できるのだよ」
　蔑みの言葉を吐きながらもエミドは攻撃の手を緩めなかった。足を止める暇も与えられず、さりとて近づく余裕もない。皺だらけの

両手からは休みなく風の塊が放たれていた。
攻撃に転じようにも、シュイは先ほどの魔法を浴びたせいで未だ片腕が痺れたままであり、鎌を握っているのがやっとだった。
シャンとて片手にティートを抱え、背にはアマリスを乗せているのだ。回避から攻撃に転じる余裕は一切ない。むしろ、小柄とはいえ大人二人を担いで逃げ切っているだけでも驚嘆に値する。鍛冶仕事で鍛えられている鋼の肉体がなければ抱えている二人共々、とっくに戦線離脱していただろう。

何度となく衝撃波が地面に着弾し、その際跳ね上がる土砂や風圧に煽られながらも、シュイとシャンは皮一枚のところで直撃を避け続けた。時間が経過するにつれて、地面には抉られた黒い土砂が晩秋の落葉のように隙間なく散らばっていた。その間、風の放たれる感覚が徐々に狭まってきていたエミドがその驚異的な攻撃速度を更に上げてきていた。シュイは隙らしい隙を見せないエミドの集中力の持続に業を煮やしつつも、その焦りを押し隠して回避行動に終始する。
「ほらほら、どうしたどうした。先ほどのように付与魔法を使わないのかね。それともう魔力を使い切ってしまったのかな」
嘲笑しつつ風魔法を繰り出してくるエミドの両手から目を離さず、シュイは相手の手の向きによっていち早く攻撃の軌道を予測し、安全な空白領域（スポット）を把握してそちらに足を動かす。
エミドと一定の距離を保っているシャンに対して、シュイがエミドの距離を徐々に狭めていく。回転の速度を増しているにも拘わらず一向に攻撃が当たる様子のないことに、エミドの顔から段々と笑みが消えていった。
と、シュイの視線がに自分ではなく、しきりに違う方向に送られているのを捉え、エミドは再び歪んだ笑みを浮かべた。
「ほほう、他人の心配をするとはまだまだ余裕だね」

唐突に、エミドはシュイの方に向いていた手をゆっくりとあさっての方へずらした。シュイが先ほどまで見ていた、怪我人の救助にあたっている傭兵たちが数人固まっている方へ。

「――おいっ、やめろ！」

その叫び声が聞き届けられることはなかった。一際巨大な風の塊がエミドの手の平から放たれ、轟（ゴウ）という音を残して討伐隊の者たちに直進する。

避け切れない。シュイが声を上げかけた瞬間――

「＞導かれし磁動（マグニティ・ストライク）＜！」

低い怒号のような声が響き、救助にあたっていた討伐隊の周囲にある鉱物や砂鉄が、カタカタと揺れ動き始めた。次いで風の行き先に向かって一所に凝集。重く、強固な盾が風魔法の行く手を見事に遮り、四散させる。

「む……」

エミドが手を下ろし、小さく眉を上げた。

「儂に救助を任せておいてこちらの心配とはどういう了見だ、小僧！」

遠くから飛んできた喝に、シュイが思わず身を竦ませる。壮年の男、アースレイの傭兵がシュイに手斧を突きつけて怒鳴っていた。

「あ、あんた……」

「小童が侮るでないわ、儂らとて一角（ひとかど）の傭兵ぞ！　必要以上に気ぃ遣っとらんでどんとかかっていかんかぃ！」

びりびりと頬を撫でる罵声にたじろぐも、シュイは両の拳を握り締めて口を開く。

「う、うっさい！　別に気になんかしてないんだからな！　言われなくてもやってやる、黙って見てろ！」

怒鳴り返してからちゅるりと舌舐めずりし、シュイはエミドを睨みつける。その口元には微かな笑みが浮かんでいた。エミドが無駄なことを、と言わんばかりに溜息混じりに再び手をかざそうとする。

「うおりゃっ！」
その間隙を縫って走ってきたシャンが、エミドの背後から握り締めていた石飛礫を一気に投げつけた。エミドが咄嗟に障壁を繰り出し、飛来してきた石飛礫を全て弾き落とす。
「馬鹿が、後ろをとって声をかけるやつがどこに――なっ」
振り返りかけた途端、足元から光が漏れ、一気に爆ぜた。石飛礫に一つだけ紛れ込ませていた照明魔石が光り輝き、再びエミドの目を眩ませる。
「ざんねーん、気づいてくれなきゃ困る策もあるんだよ」
「――小賢しい」
さりとて二度目ということもあり、エミドの立ち直りは早かった。完全に視力を奪うには至らず、腕で光を遮りながら逆の手でおおよその見当をつけ、突風を放つ。

「おわっ！」
「わっきゃっ！」
慌てて屈みこんだシャンの上を吹き荒ぶ風が通過した。急にかがまれたアマリスが頭を縮めるようにしながらシャンにしがみつく。置き去りにされたアマリスの後ろ髪の一部が風に煽られ、引き千切られた。
「あああああー！　僕の髪！　もーっ、妙な挑発するからだよ！　しゃがむならしゃがむって前もって言ってよね！」
アマリスが喚きながらシャンのドレッドヘアをわしゃわしゃと掻き乱す。
「うわ、やめっ、こらっ！　変な風に結ぶなアマリス！　そんなことしてたら避けるの間に合わない、ってぇ！」
エミドが手の向きを下げたのに気づき、シャンが慌てて地面を蹴り出した。遅れて背後で衝撃音が響き、顔を引きつらせつつもエミドに向き直る。

「と、今度はそっちか。忙しいな」
エミドが段々と大きくなってきた足音の方へ障壁を展開する。だが、予想に反して障壁になんの反応もなかった。
ややあって光が収まり、完全に視界が戻ったはずのエミドが顔をしかめた。斬りかかってきたはずのシュイが意外に離れた場所にいた。
――なんだ？
あるいはフェイントか、障壁の展開を見て引き返したのか。湧いて出た微かな違和感がエミドの胸中に過ぎるが、考える間も与えずシュイが再び近づいてくる。
――やはり付与魔法は、使っていないか。……くくく、一体いつになったらあれを使うのかな？
エミドはほくそ笑みながら、再びシュイに向かって手を掲げた。

シュイとシャンがエミドを引きつけている間に、倒れていた者たちは粗方、戦場から離れたところに移送されていた。避難を手伝っていた者たち三人が最後の負傷者たちを一人ずつ背負い、急ぎ足で遠ざかっていく。
シュイの投げつけた魔石による爆発を難なく障壁で凌いだエミドが、煙の隙間に彼らが逃げていく姿を捉えた。
「やれやれ、まだ逃げ切れると思っているのかね。――いいだろう、少し早いがその希望を打ち砕いてあげるとしようか」

突如としてエミドが両の手指を突っ張るように開き、何事かを呟き始めた。続いては彼の周りに縦長のガラスのような透過壁が八つ、互い合わせになるよう形成される。そのただならぬ様子に未知の魔法の発動を感じ取り、三人が息を呑んだ。

「＞――招来せよ　我求むるは慈愛無き拘束　汝に捧げしは幾何(きか)なりし犠牲＜」

「……やつが詠唱を！？」

無詠唱魔法のみを行使していたエミドの思わぬ行動にシュイたちの反応が遅れた。詠唱が進むに従って大地が小刻みに震え始め、エミドやシュイたちからはるか遠く離れた砂浜、荒地、森林で地面が割れていく。海岸の砂がさらさらと舞い落ちる。木々が根元から掘り崩され、めきめきと音を立てて倒れていく。島の北半分を円で囲むようにできた底の見えぬほどに深い地割れ。その下から紫色の光が漏れ出した。

「＞万物を凍てつかせしその瞳を以って　魂縛(たま)りし格子を打ち立てん＜」

「な、なんだ、地震かっ！」

ぐらぐらと、身体を縦に揺さぶる振動にシャンが驚嘆の声を上げた。周りに目をやれば遠巻きにいた討伐隊の者たちもざわめいている。その中の一人が空を指差した。紫色の柱が次々に、自分たちを島ごと閉じ込めるかのように天に向かって伸びていくのが見えた。

「――＞閉ざされし邪将(プリズン・オブ・インデュアル)の牢獄＜」

ぞっとするようなしわがれ声が場に木霊し、地が蠢くような余韻を残して消えていく。空へと向かって伸びていた紫水晶(アメジスト)の如き氷の巨柱が伸長を止め、次いで柱の外側の真ん中に切れ目が入っていく。そこから上の部位が内側に向かって次々に傾き、上空で巨大な格子が組まれていく。高層の建物が倒壊するような重低音が断続的に響いた。エミド以外の者たちがその光景を呆然と眺めている。

「うわぁ……これ。どう考えても、もーれつにやばそーなんだけれど」

アマリスが建物の骨組みのような紫色の格子に、シュイが忌々しげに舌打ちする。

「……＞閉ざされし邪将の牢獄（プリズン・オブ・インデュアル）＜。強力な呪（まじな）いを込めた氷柱によって対象を閉じ込める封呪だ。古くは町を丸ごと閉じ込めたり、対竜魔法として使われたとも聞く」

「封呪って、ジュアナ戦役に使われたって噂のアレ？　……あいつ、そんなとんでもない魔法まで使えるの？」

「ほぅ、よく知っているね」

悠然と歩いていたエミドが、シュイたちと二十歩ほどの距離を取り、仁王立ちした。

「相変わらず、この魔法は範囲が広すぎるのが珠に傷だ。おおよそ島の面積の三分の一といったところかな。なるべく自分（いえ）の島を荒らしたくはなかったし、できれば使いたくなかったのだがね」

「……彼女ら以外に興味がないんじゃなかったのか」

シャンが突っかかるように言うとエミドが細い顎をしゃくった。

「気が変わったというやつだよ。目の前で希望に満ちた顔をされると実に気持ちが悪い。吐き気すらもよおしかねない」

「……根っこが腐ってるっていうレベルじゃないな。シュイ、この魔法の解除方法は――」

「術者の排除、もしくは意識の途絶」

ぽつりと言ったシュイに、シャンが引き攣った笑みを浮かべた。

「だよねー、聞いた俺が馬鹿だったよねー。結局こいつをどうにかするしかないってことか。っていうか、いくらなんでもおかしいな。あれだけの数の魔法をこなして、今またこれほどの魔法を使って、なんでやつの魔力が一向に枯渇しないんだ」

「……どこかに魔力の供給源を用意しているんだろうな」

「どこかって、それらしきものはどこにも」

アマリスがシャンの頭に顎を置き、きょろきょろと周りを見渡す。
「さっきあいつがした召喚実験の話を覚えているだろう、地中に云々って話」
「――あー、なるほど、この島の地中にも大量の魔石を埋めているってことか。そんでもって、魔力が減ってきたのを見計らってその都度そこから新たな魔力を補充している、というかそれくらいしか考えられないね。額にあるいかにもな魔石もそれに一役買っているのかな」
「まぁまぁ、いい線突いているよ」
エミドが勝ち誇ったように口の端を持ち上げた。同時に、額に埋め込まれていた黒い菱形の魔石が共鳴するように光った。
「……えー、それってつまり、この島限定での最強ってこと？　なんだか意外とみみっちくない？」
アマリスの落胆したような物言いに、エミドの釣り上がっていた唇がひくっと痙攣する。
「あ、あまり本当のことを言うもんじゃないぞアマリス。他人様には触れられたくない現実があってだな。やつの器はその程度で精一杯――」
「――少し黙りたまえ」
全くフォローになっていないシャンの言葉にいらついたのか、エミドが下げていた手を上に振るった。
「うわ！」
「きゃぁ！」
「なっ、シャン！　アマリス！」
突如として足元の土壌が盛り上がり、片足を取られたシャンがバランスを失った。辛うじてティートを手放すことだけは避けられたが、背中にしがみついていたアマリスの手が離れ、シャンとやや離れた方向に倒れ込んだ。シュイとは土壁で完全に隔てられた形となっていた。

「い、いったぁ……」
　呻きつつもなんとか四つん這いで起き上がったアマリスだったが、背中にただならぬ気配を感じ、目を見開いた。
「まずは一人回収だ」
　目の前の地面に映る巨大な影の手がやたらと緩慢に映った。ついさっき、首を絞められたまま電撃を流された時の苦しみが、痛みが浮かび上がった。その恐怖が蘇り、アマリスの思考と行動を凍らせようとした。
「アマリス！」
　唐突に放たれた、傍からのシャンの一言が、アマリスの意識を現実へと引き戻した。同時に、直ぐ近くに頼れる仲間がいたことを思い出させた。自分を渡さないと言ってくれたシャンとシュイが。湧き出でた弱い気持ちを唾ごと飲み干し、意を決して地面に手を突いたまま残存する魔力を解き放った。
　＞吹き荒ぶ風（ウィンド・ショット）＜。エミドの魔法が発動する前に地面に衝撃波が放たれた。地面を抉るとともにアマリスの身体が浮き上がる。後ろを取っていたエミドの意表をつき、向かってくる腕と擦れ違うように斜め上へと直進。アマリスの身体が背中から、エミドの胸部を強かに弾いた。
「ぬぐっ」
　満身創痍のアマリスからよもやの捨て身の反撃。無防備状態のままにぶちかましを見舞われたエミドの片膝が落ちかけた。もう片方の足を頼りになんとか転倒をこらえ、奥歯を噛み締めながら目の前を漂うアマリスの襟首を掴む。
「きゃっ！」
「こっ、の小娘がっ、舐めた真似を――」
　エミドがアマリスに攻撃を加えようとした瞬間、シャンが二人の

前方目掛けて投げつけていた照明魔石が発動。再び辺りを光で覆い尽くしていく。

「わっ、眩しっ！」

「ぐぬっ、またそれか！」

遮る手が塞がっていたエミドがまともに光を浴びた。視界を奪われてもなお、エミドはアマリスの襟を手放さなかったが、拘束されたアマリスの判断は迅速だった。目を瞑ったまま上着の前部分を手で探り、留められていた上着のボタンをパチパチと素早く外し、そのまますると脱ぎ、レースの下着一枚で地面に着地する。

しかし、エミドへの無茶なぶちかましの影響か、その足元は覚束ない。何とかエミドから遠ざかろうと踏み出した足がふらふらと酔っぱらったようにもつれた。

一方で、持っている襟が一気に軽くなったことに気づいたのだろう。エミドの手がアマリスの上着を手放し、手探るように、蛇のようにうねりながらアマリスの方へ迫った。

「ととっ、――ひゃっ」

間隙を縫うようにして、近くまで迫っていたシャンが薄目を開け、アマリスと思しき小さな影をラリアットするように腕で引っ掴む。エミドの手が届くすんでのところで抱きかかえ、エミドから離れていった。

ややあって光が弱まり、仰向けの状態で抱かれているアマリスの顔がかっと赤くなった。風で捲れ上がりそうになるスカートの後ろを必死に手で押さえつつ薄目でシャンを見上げる。

「ちょ、ちょっとシャン。こんな格好恥ずかしい……」

もじもじとシャツ一枚のアマリスに抗議され、さしものシャンも赤面する。

「自分で脱いでおきながらその台詞はないでしょ！　緊急時におふざけが過ぎる――うわっ！」

後方から迫ってきた雷に気づき、シャンが踏み出す足の向きを変

えた。背中すれすれで通り過ぎた雷に肝を冷やしつつエミドの方に向き直る。

「――またか。これで何番煎じだね」

半ば飽きたようにエミドが嘆息した。直ぐ横にシュイの気配を捉え、障壁で対抗するべく接近を待ち構える。が、相手はある程度の距離を保ち、円を描くように動いてはいるもののそれ以上踏み込んでくる様子がなかった。あちらも光の中では完全には距離感が掴めないのだとすれば説明がつくが、それにしても何も仕掛けてこないのが妙と言えば妙だった。

魔法を撃つか否かを迷っているうちに光が和らいできた。シュイは終ぞ攻撃を仕掛けてくることなく、再びシャンの側に移動していた。

アマリスの一撃が少なからず効いているのか、エミドは胸を労るように擦りながら三人を憎々しげに睨んだ。これほどまでに感情を露にするのは初めてだった。

「本当に往生際が悪いね、見苦しい、美しくない。もういい加減飽いた、それほどまでに惨たらしい死がお望みながらその小娘もこの場で廃棄処分にしてやる」

冷然と告げるエミドに、シャンは空いてる手で鼻梁を擦る。

「はは、ついに方針転換か。よっぽどさっきの一撃が堪えたようだね。でかした、アマリス」

不敵に笑ったシャンと褒められても嬉しくなさそうなアマリスに、エミドが射抜くような目を向ける。

「楽には殺さんよ。殺してくれと願うほどの苦しみを与えてやる。男から殺すか、女から殺すか迷う所だね」

「ちょっとばかり勝ち誇るのは早いんじゃないか。そう簡単にいくと思ったら――」

「ああ、そういえばそうだったね。――そろそろ＞魔（ディスペル・リ）を打ち払いし（ロード）

縛鎖＜の準備も、終わったのかな」

二の句を継がずに口を噤み、掠れた息を漏らしたシュイにエミドが唇を醜く歪めた。

「何故……それを」

「君らの浅知恵など全てお見通しということだ。先ほどから付与魔法を使っていなかったのは、大方それを使うための下準備をしていた、といったところだろう」

「……ぐ」

如何にも悔しそうな顔のシュイにエミドが歯をむき出しにして笑う。

「くくく、いい顔だな。私の裏を取っていたつもりだろうが、生憎とそこまで愚鈍ではなくてね。まあ、魔道の粋を極め尽くした私に殺されるんだ。人生の幕引きとしては有意義な終わり方だろう」

――すまない、……万策尽きた。

「――く」

「ふふ、ふはははは！」

シュイの念話を聞き、拳を震わせて項垂れているシャンを目にし、エミドが愉快そうに高笑いした。ややあってシャンは顔を上げ――

「あはははは！」

エミドと同じように、さも愉快そうに笑った。突然笑い出したシャンにエミドが呆気にとられ、笑うのをやめた。次いで憐みを込めた眼差しでシャンを見た。

「恐怖で気が触れたかね」

「あっはー、く、苦し……、はっ、腹が裂けるぅ」

「おまえの腹筋は端っから割れてるだろ」

シュイが真顔で突っ込みを入れ、その笑い声が更に高まった。企

みを看破されて尚焦りを見せない二人に、エミドが怪訝そうな顔をする。

「ふぅあー、お腹痛い。……悪ふざけが過ぎるよ、シュイ」

「逆さにするって言っただろう、意味は通じるしちゃんと真に迫った感じも出ていたはずだ」

「変に凝り過ぎだって。聞かされるこっちの身にもなってくれ」

シュイとシャンの会話を聞き、エミドの顔に戸惑いが浮かんだ。

「――何だ、一体なんの話をしている」

シャンは大きく息を吐き出し、目尻を拭いながらエミドを見た。

「――あんた、＞盗聴（タッピング）＜を使っているんだろう」

その指摘に、エミドの口が微かに開き、貝のように閉じた。一体いつ気づかれたのか。その記憶を辿るかのように視線を横に逸らした。シュイは耳の上の髪を撫でつけながら口を開く。

「俺があんたに＞怒れる霆の渦流（ボルテックス・オブ・ヒューベル）＜で斬りかかった直後、シャンに念話で逃走を促した時、シャンにかけた俺の声を無視してあんたは周囲を見回していた。時間にしてほんの数秒のことだったが」

「――確かに。だが、それだけで疑いを持ったと言うのかね？」

俄かには信じがたいという風に、エミドが眉をひそめた。

「もちろん、その時点ではとてもじゃないが確証を持つには至らなかった。偶然だという気持ちの方が強かったさ。――けれどあの後、あんたは先んじてシャンを、ひいてはアマリスとティートを逃がさぬよう挑発の言葉を放っただろう？　そこで微かな疑いが少しだけ色濃くなった。

俺とて今まで相手にしてきた敵の中に＞盗聴（タッピング）＜の使い手なんて一人もいなかったが、そういった魔法が存在している以上、いつかは相対する日が来るだろうと心構えだけはしていてね。その日が今日来たのかも知れないと考えた、ただそれだけだ。認めたくはないがあんたは黒魔術の使い手として相当に有名だからな。ひとつカマを

かけてみたのさ」

ニルファナ・ハーベル。エミドとて知っているだろう、天才の名を欲しいままにするシルフィール随一の魔法使い。賞金首の天敵にしてシュイの師。シュイは、彼女がここに援軍に来るという情報をシャンと念話でやり取りすることによって、果たしてエミドがどう出るかを確かめた。エミドが自分から手の内を晒そうとしていない以上、あの時点ではシュイたちが盗聴に疑いを持っているとは考えにくい。そう判断してのことだ。そして――エミドの態度は明らかに変化した。

「あんたも完全には信じていなかったんだろうけど、考えた末に安全策を取った。万一の可能性を考え、どちらのパターンにも対応できるよう勝負を急ごうとした。相手のプラフ（ぶた）に対して、慎重な性格が裏目に出たわけだ。不意打ちをしなかったのは余裕を崩したくないというプライドの裏返しか、もしくは＞盗聴（タッピング）＜が使えることを悟られぬようあんたなりに気を配っていた、といったところだろう」

「……わざわざシルフィールの傭兵を名乗ったのは、ハーベルとの関わりをより明確に仄めかすためだったというわけだ」

「正解。種明かしをすると、その後の念話で嘘の情報をやり取りした。もちろん、シャンにはその旨をあんたにわからぬよう伝えた上で。残念ながらニルファナさんは来れない。この場にいてくれれば優位な状態で戦えただろうけど、今頃は本部で会議の真っ最中だろう。世界にはあんた以外にも憂慮すべきことが尽きないからね。俺にしても＞魔を打ち払い（ディスペル・リロード）し縛鎖＜なんて大それた魔法は使えないってわけだ」

「……そういうことだったか。言われてみれば、司書家にのみ管理が許されている魔法を一介の傭兵ごときが知っている可能性は少ないからな」

馬鹿にするようなエミドの口振りに、シュイはただ肩をすくめてみせた。

「まぁ、それでも知識としては知っていたし、あんたに有効そうな魔法には違いなかった。せいぜい信じ込ませ、いつくるとも知れぬ攻撃を警戒させようと考えたわけだ」

「なるほど、確かに一本取られた。だが、それに何の意味があったというのだね。私をからかって得られる束の間の優越感かい。それなら、この後君たちは軽はずみに取った行動を大いに悔やむことになると思うがね」

「全てはひとつの綻びから始まっていくんだよ。傷のついた金属板が風雨に晒され、みるみるうちに錆びていくようにね」

いかにも鍛冶屋らしいシャンのたとえだった。エミドはつまらなそうに笑い、おのれの薄い前髪を掻き上げた。

「そうして必死に時間稼ぎをし、戦えぬ者たちをこの場から遠ざけようとした。時間稼ぎには成功したが、結果君らは逃げ損ねた。満足かね」

「無論、と言いたいところだが――」

鼻で笑うエミドに対して、シュイはシャンの腕の中にいる双子を見た。電撃で首に熱傷を負っているアマリスを。石飛礫を浴びて全身が無残に腫れ上がったティートを。

そして、周りにいる討伐隊の者たちを見た。共に任務をこなし、飲み食いしたこともある、気のよい仲間たちの屍を。

シュイの声のトーンが一層下がった。シャンとエミドの顔に緊張感が走る。

「――生憎と、ここまで好き勝手されて黙っていられるほどお人好しじゃないんだよ。どんな手段を以ってしても、きっちり報いを受けてもらう」

「どうやって？　君は確かに私を嵌めてみせた。けれども未だ私の障壁は破られていない。＞魔を打ち払いし縛鎖（ディスペル・リロード）＜にしても使えないのだろう？　まぁ、仮に使えたところで、いくらでも対応策はあるがね」

「だろうね。――だがもし、障壁を破らなくてもあんたを倒す方法があるとしたら」

ぴくり、とエミドの耳が動いた。だが、思い直したのかその台詞を一笑に伏す。

「もう聞き苦しいはったりはよしたらどうだね。今までの戦いでわかっているだろうが、私の障壁はあらゆる物理、魔法攻撃に対応するぞ」

「それは嘘だ」

「……ほう、その根拠は？」

確信に満ちた断言に、エミドの視線がシャンの方へと向く。

「戦っているうちにわかったことは他にもある。あんたの目は俺の照明魔石でしっかり眩ますことができたしシュイの＞怒れる霆の渦流（ボルテックス・オブ・ヒューベル）＜とあんたの障壁が奏でた音もあんたの耳に劈（つんざ）いた。アマリスの意表をついた攻撃に対しては障壁の展開も間に合わなかった。これは、距離が近過ぎたせいだろう。障壁を展開するには少なからず攻撃に対するあんたの防御意識、心構え、もしくはあらかじめ感知魔法を展開する必要がある、そう推測できる」

何よりも、＞盗聴（タッピング）＜ができているということは念話がエミドに届いている何よりの証。念話も魔法の一種だ。エミドを守る障壁は五感を直接的に守ってくれるわけではなく、全ての魔法に対応しているわけでもない。

「そこから導かれる結論は一つ。あんたのはったりは障壁の情報、すなわち欠点を隠すためのもの。ご自慢の絶対防御とやらは感知魔法に類する魔力の網によって自分に接近した存在や魔力を捕捉。あんたに明確な害をもたらす攻撃のみを認識し、発動している。照明魔法や念話は攻撃魔法や呪いではない中立の魔法だから障壁が働かなかったか、もしくは、働いたとしてもその障壁はそういった魔法を通してしまう。――間違っているか？」

シュイがシャンの言葉に付け足すと、エミドは大袈裟に首を振り、おどけてみせた。
「いやはや、お見事だ。戦い方からしてててっきり感覚派だと思っていたがこてこての分析派なんだね。――それで、それがわかったところでどうするかね？　私の耳を音で潰すかい？　それとも、肌を腐らせるほどの強力な治癒魔法が君たちに使えるの――」
「――＞汝（エンパシィ）、我に共感せよ＜」
シュイが短くエミドの演説に言葉を重ねた。
「――なんだって？　――む、これは」
シュイの詠唱と共に、シュイの身体とエミドの身体がぼんやりと光を放ち始めた。エミドは目を見開き、淡い光を放つ自分の身体とシュイとを見比べる。

「だろうね、知らないと思った。黒魔術にばかり傾倒してるあんたにとっては、一番縁遠い魔法だろうからな」
唐突に、シュイが自分の背に左手を回した。続いて、エミドが僅かに眉をひそめ、背中を気にする素振りを見せた。
「どうした、背中が気になるのか？　――自分の？」
シュイが不敵に笑い、反してエミドの顔が強張った。
「一体、私に何をした」
「よかったよ、ちゃんと効いてるみたいで。それが最大の懸念材料だったんでね。――実はひとつだけ嘘の中に真実を混ぜていたのさ。確かにニルファナさんはここには来ない。＞魔を打ち払いし縛鎖（ディスペル・リロード）＜も使えない。けれども――魔法は詠唱していた。もっというと、つい数十秒前に使い終えた」
シュイが何かを覚悟したかのような、凄絶な笑みを浮かべた。
「――どんな魔法を使った、答えろ」
「さてね、分類上は上位の干渉……否、回復魔法といったところかな」
「……有り得ぬ。大体、そんな素振りは一切なかった、使う暇もな

かった筈だ」
「あったさ、二度も」
二度という言葉にエミドが顔を険しくした。
「――――まさか」
「シャンがあんたに二回使った照明魔石、あれはなにもあんたの目を眩ませるためだけにやったわけじゃない。もちろん、無駄に怒らせるためでもない。そうした本当の理由は、あんたに仕掛ける魔法の準備をしていることを悟られぬようにするためだ」
「……ならば、あの足音は」
「この魔法にはどうしても＞同調（チューン）＜の作業が外せないんでね。＞照明魔法（ラッシュ）＜が発動している隙に、あんたにできるだけ近づいて魔力の波長を合わせさせてもらった。俺が付与魔法を使わなかったのはプラフ（フ）のためもあった。だが、それだけじゃない。本当は別の魔法を使うための下準備に追われていて、使えなかったんだよ」
＞盗聴（タッピング）＜によって裏をかいていたはずが今の今まで嵌められていたことを知り、エミドの顔が烈火の憤激に歪んだ。
「――どこまでもこけにしてくれおって！　貴様ら、この上は手足の端から一寸刻みにさせてもらうぞ！」
「二人称はキサマではなくてキミじゃなかったかな。こぉらぁエミド君、余裕をなくしちゃ駄目で――うほっ！」
女教師さながらのシャンの軽口に反応し、エミドの腕が迅速に横に薙がれた。反射的に身を屈めたシュイとシャンの頭上を熱線が走り抜ける。
その熱風を肌に感じながら、シュイはエミドに昂然と告げる。今まさに反撃の狼煙を上げたことを。
「――戦（や）る前に名乗らせてもらうか。シルフィールの傭兵が一人、シュイ・エルクンド」
「同じく、シャン・マクシミリアン。マクシミリアン工房も合わせ

てよろしく」
　ウィンクしてみせるシャンにアマリスが鼻白む。
「こんな時に商売って。あ、僕はアマリス・ネイピアだよ。……うー、フリーってちょっぴり名乗りが寂しいね」
　各々が名乗りを上げ、戦闘態勢に入ったシュイとシャン（＋アマリス）が、両手を掲げたエミドと対峙する。
「んじゃあ行くぜ、エミド・マスキュラス。――あんたをこちら側に引きずり下ろしてやる」

～決意　the　will　to　win9～

掲げられたエミドの指先一点に膨大な魔力の波動が凝集されていくのを睨み、シュイとシャンが呼気の調子を変える。エミドの側から高まりつつあった高周波の音が突如として消失し、世界までもが風(いき)を止めた。

互いの戦意が昂じて凝縮され、刃と化して音無き鍔迫り合いを繰り広げる。高まりゆく力に反比例して鎮まってきた胸の鼓動を感じ取り、やや冷静さを取り戻したエミドが立ちはだかる二人のどちらに狙いを定めるか、じっくりと品定めするように瞳を揺らす。対して、接近戦を得意とするシュイとシャンが、エミドへ辿りつく道を模索し、突破口の破壊と創造とを繰り返す。

次々に叩き潰されていく無数の道の中に残っている道を見止め、シュイがシャンに先んじて地を蹴り出した。的を絞らせぬよう軽やかに蛇行しながらエミドに向かっていく。流動するシュイの姿をエミドのほの暗い眼差しが追った。間を置かずに上位魔法＞高貴なる緋(スカーレッ ト・ノヴァ)の爆砕＜が発動。振りかざした長い爪の先から小さな太陽が射出された。

シュイの足運びとおのれの魔法の射出速度を計算した上での、驚異的な精度の偏差打ちだった。走るシュイに対してエミドの放ったエネルギー弾が彼と頂点を結ぶべく、夥しい火花を撒き散らしながら軌道をなぞる。

進行方向に直進する球体を視界に捉え、直撃を確信したシュイが爪先の角度を変えて踏み止まり、反転。真逆へと低く跳躍した直後、エネルギー弾が地面に着弾。轟音と火柱が絡み合い、土が一瞬にして煮え滾る赤いスープと化す。

攻守の間隙を縫うようにしてシャンが残り少ない魔石を指で摘ん

で弾き飛ばした。一秒に満たぬ時間で石が紅に染まって火の矢となるが、エミドにある程度接近したところで一瞬にして立ち消えた。エミドが肩越しにシャンを見た。いかにも面白みのない、山谷のない舞台に退屈している観客のような表情だった。

「どうしたね、そんな遠くからちまちまと、戦う気があるのかね」

シャンはエミドの侮蔑に応じることはなかった。指摘されるまでもなく、そんなことは自分が一番自覚していたからだ。アマリスとティートを担いでいる都合上、消極的な戦い方にならざるを得ないが、それでもシュイ一人に意識を向けさせるよりはマシ。少しでもシュイの戦いを楽にできるなら戦列に加わる意味はある。ただし、足手纏いになることだけは避けねばならない。そう判断し、おのれのプライドを捨てて献身的に支援を貫くつもりだった。

何よりもシャンが積極的に戦いに参加できぬ一番の理由は、シュイの用いた戦略に因るところが大きかった。エミドに深手を負わせることによって、逆にシュイを窮地に追い落とすことになりかねなかったのだ。

シャンがわずかな時間を稼ぐ一方で、シュイは熱風に煽られながらも四つん這いで着地し、次の行動に移っていた。頭が前がかりになるほどの前傾姿勢から膝を曲げて足に力を溜め、指先で土に魔印をなぞる。

風と雷。二種の印が同時に描き出され、自己強化系干渉魔法＞韻踏み越え(リズム)し歩を以って＜が発動。シュイの両足首を囲うように二つの小型魔法陣が形成される。血流内の物質がエネルギーに転化されて筋力、瞬発力が一時的に向上。

不穏な気配に気づき、エミドが再びシュイに目を向けたのとほぼ同時に、シュイの後ろ足に蹴り上げられた土砂が岩打つ波飛沫の如く高々と跳ね上がった。刹那、風圧が肌を切るほどにシュイの身体が急加速。地を蹴った音に引きずられるようにして、シュイが左手で鎌を水平に構えたまま、エミドの側面に向かって突き進む。

鎌の切先が残像を幾重にも連ね、蛇のようにうねりながらエミドの喉笛に食らいつかんと牙を剥く。神速に等しき一撃が目を瞠るエミドの感知魔法領域内に侵入。緊張によって極限にまで高められた集中力が驚異的な速度で障壁を展開する。

シュイとエミドが擦れ違いざまに、黒蛇の顎ができあがったばかりの障壁を噛む。巨大な落石が岩盤を貫くような音が奏でられ、連なっていた残像が束ねられていく。障壁の七割ほどを打ち崩したところで、叩きつけた衝撃がそのままシュイの腕に跳ね返った。

「ぐぅっ！」

「――ぬぐっ！？」

鎌を通して伝わった振動がシュイの手首を容赦なく締めつけ、腕の神経網に電気を走らせ、肘を痺れさせた。そして、驚くべきことに苦痛に呻く声はシュイのみに留まらずエミドからも発されていた。

腕を抑えたエミドに対し、痛みを堪えたシュイが防がれた鎌を、今度は後ろから振るおうとする。自分に覆い被さってくる、地面に映った影を捉え、エミドが再度障壁を構築。空間の揺らぎを目に捉えたシュイが既にできあがっていた障壁を足蹴にして後方へと跳躍。一回転して着地し、鎌の柄を逆手に持ちかえる。

「……なんだっ、今の痺れは――むっ」

疑問を解決する間も与えまいと、自分の手を睨んでいるエミドにシュイが再突進する。即座にエミドが顔を上げ、迎撃するべく手を掲げた。

だが、それに先んじてシュイが＞焔焼壁（ファイア・ウォール）＜を発動。自分とエミドとの間に割り入るように、小さな火の玉が地面を滑って土を焦がす。次いで描かれた黒線から炎が噴き上がり、木々の梢にも届こうかという炎壁が出現。火の切っ先からは灰ずんだ煙が立ち昇り、互いの視界を塗りつぶしていく。

束の間、対応策を巡らせるエミドに、雷の帯が二本、重なるよう

に炎の壁を突き抜けて飛来。三度エミドが障壁を展開し、雷を押し留めた。

「……今度は＞集束する雷（ライトニング・ボルト）＜の連射、か。中々の手際だがこの程度の魔法でやり合えると思って――」

その言葉は最後まで続かなかった。上空に立ち込める噴煙の中を落下してくる数多（あまた）の小質量を感知し、エミドが上空を睨む。降り注ぐ黒い物体を目の端に捉え、間髪入れず自分を押し包むよう障壁で三角錐を形成。

シュイが電撃を放つ直前、シャンが空に向かって放り投げていた魔石がエミドの回りで次々に弾み、時間差で連鎖爆発を起こす。が、咲いた六枚の炎の花弁も、それに伴う爆風に巻き上げられた土砂も、やはりエミドの身体には届かない。ぱらぱらと、破砕された石や土が空に高々と舞い上がり次々に地に戻っていくのみだった。

前方の炎壁が下火になったところで、シュイが再度間合いを詰めようとする。が、その足がぴたりと止まった。空中に靄のようなものが漂い、見る間に無数の氷の飛礫となって緩慢に浮遊する。

エミドを守るように、氷の弾丸が行く手を遮っていた。エミドが手招きするように指先を下に、おのれの爪を見せつけるように掲げる。

「まったく、小細工ばかりを弄（ろう）して恥ずかしくないのかね」

語り口は穏やかだったが、目は笑っていなかった。腹に据えかねているその様子にシュイはいつでも行動に移れるよう目を細め、付かず離れず円軌道に歩いて鎌の切先を揺らす。一方でシャンは袋に入っている魔石の残数を確かめる。指に振れたのは照明魔石と爆発魔石、ひとつずつだけだった。

「人の恥には厳しいんだな、＞盗聴（タッピング）＜のことを隠していたあんたも立派に小手先の魔術師（マジシャン）だろう」

「――この光景を目にして舐めた口を叩けるとは、過ぎた勇気が無謀と呼ばれることを知らんようだ」
「あんたが規格外に過ぎていい加減感覚がマヒしてきたんだよ、多少の怪我は覚悟してるさ。手段を選んでいられる状況じゃなさそうだし、命のやり取りに痛みは付き物だ」
「――命のやり取り？　痛みだと？　ははは、何を言うかと思えば笑わせる。地を這いずる君らと遥か高みにいる私を同列に語るとはね。魔法を極めて数十年、未だ命を脅かさせるような事態に陥ったことなどないよ」
「君、か。少しは頭が冷えたのかな。なんなら肝の方も冷やしてやるよ、これからな」
「あれほどの人数を以って私と相対し、まともな傷一つ負わせられなかった君たちに、今更一体何ができるというのだね」
シュイが歩を進めるのを止め、全神経を集中させ始める。
「焦らずとも今からそれを教えてやる。さも全知全能のように振舞っているあんたが、ひとつだけ確実に、ここにいる誰にも勝てないものがあるってことを」
「……いつまでも私の前で囀（さえず）るな。そろそろ沈黙が恋しいのでね」
まるで蠅でも追い払うかのように、エミドが手の甲を薙ぎ払った。同時に、数多の氷の飛礫が一斉にシュイに発射された。

迫りくる無数の氷への対応策は限られる。そのままでの全弾回避はまず不可能。銀杏並木の中、舞い散る枯葉吹雪を全て避け進むことに等しい。２０ｃｍ間隔で漂う氷の刃に身体を潜り抜けられるような隙間は見当たらない。
焔焼壁（ファイア・ウォール）を展開して防御するか。それともより攻撃的な手段を取るか。果たして、シュイの選択は更なる前進だった。鎌を縦に、刃を天に向けて構え、詠唱を刻む。
「――＞その身に焔（ファイア・リロード）を宿せ＜！」
紅蓮の炎がシュイの持ち手から上下に走る。柄の先から鎌刃の切

先まで炎に覆われたそれを盾のように掲げ、躊躇なく氷の弾幕に突っ込んでいく。氷の飛礫がシュイに迫るが、炎に覆われた鎌がシュイの身体を火の球と化し、身体に届く前に蒸散させる。

――猪が、敵への視界を遮ってなんとする。

エミドが歯を剥き出しにして笑った。指を振り上げるとともに氷の塊が寄り集まり、シュイに向かっていく氷の飛礫に大きな氷柱が混ぜられた。炎でほとんど前が見えぬシュイに向かってそれを投じる。鎌の炎に表面を焼かれるが、消すまでには至らなかった。ひと回り小さくなった氷柱が炎を貫き、シュイの右脇腹に吸い込まれる。魔法障壁を張る黒き衣を表皮もろとも突き破り、血管を酷く傷つけ、筋肉の奥深くまで突き刺さった。

「ぐあああっ！」

聞こえてきたシュイの呻き声にエミドが歓喜の表情を浮かべかけた。その直後――

「――ぐぅ！？」

シュイの呻き声に遅れて、エミドの動きが硬直し、右脇腹に手をやった。

「……がっ、な、なん……だ、これはっ」

苦痛に喘いだエミドが、口の端から涎を滴らせる。一方で歯を食い縛っていたシュイが前に泳ぎかけた身体を持ち上げ、体勢を立て直した。脇腹に刺さった氷を抜かぬまま、緩めかけた手の力を込めなおし、目の前のエミドに斬りつける。発動するかと思われた障壁は、その鉄壁ぶりを披露することなく沈黙した。

間一髪のところで、エミドは身を捩じって致命傷を免れていた。されど、その胸元にはありありと、裂傷が斜めに刻まれていた。空に高々と掲げられた黒い鎌刃からはエミドの灰色の衣の断片が未練がましく引っかかっていた。

「――ぬ、……ぐぅ」
「――やった！」
胸から垂れ落ちた赤い滴を目の当たりにし、シャンが思い余って叫んだ。一目見ればわかる。エミドの負った傷は決して深いものではない。せいぜいが、皮一枚半といったところだろう。
だがしかし、ひたすらに劣勢を強いられ、相手に傷ひとつ付けられない状態で戦ってきた彼らにとって、それは限りなく大きな前進と言えた。同時に、絶対防御と言っても過言ではない防壁が働かなかったエミドの心中に対するダメージも計り知れるものではなかった。
痛みに、自らに起きた異変に思考を停止させたエミドに対し、隙ありと見たシャンが魔石を投げつける。
「――小賢しいわっ！」
叫喚とともにエミドの腕が振るわれ、＞風嬰の円環（フォレスティン・サークル）＜が発動。環状の巨大な風のドーナツが一挙に広がり、魔石が発動する前に風で押し戻す。
「――いいっ！？」
シャンが慌てて横っ跳びし、地面にダイブ。魔石の爆発に巻き込まれるのは免れたが、円状に展開された突風を避けるには至らない。後方へと弾き飛ばされ、きりもむように地面を転がる。地面に顎を打ちつけたアマリスの表情が苦悶のそれに変わった。
「……い、いひゃいぃ」
「だ、大丈夫か、アマリス！」
くっきりと赤い歯型のついた舌を垂らしたアマリスに、シャンが安堵の表情を見せる。そんなシャンにアマリスは不服そうに首を傾いだ。
その反対側では、鎌の柄を地面に突き刺して衝撃を堪え凌いだシュイが顔を上げていた。しなりながらもヒビひとつ入っていないシ

ュイの得物を見て、さしものエミドも眉を上げる。
「……そんな乱暴な使い方をして折れないとは、……随分と丈夫な鎌だな」
「……稀代の名工二人の魂が籠もった代物だ。あんたごときに折れるはずもない」
シュイが黒光りする鎌の柄に映ったおのれの顔を見る。敬愛する師と自分を手放しで褒められ、シャンが面映ゆそうな顔になる。
「思いや気持ちでまっこと人が強くなれるなら苦労せんよ。それを語るのは成功した者だけ。純然たる実力が不可欠なのだ、私のようにね」
「……力をひけらかすあんたの姿が、……ひとつの成功の形かと思うと泣けてくるね。……あんたを見てるとあの時の自分を見せつけられているようで、虫唾が走るんだよ！」

言い終えるが早いか、シュイがエミドの懐に飛び込む。しかし、やはりエミドの展開する障壁に弾かれ、その衝撃で後ろへと飛ばされる。続いては、エミドがシュイへ追撃を仕掛けんと手を向けようとするが、遅れて腕に正体不明の震えが走り、連動するように脇腹に痛みが走る。
「――ぐ、またっ！」
言うことを聞かぬおのれの手首を鷲掴むエミドの視界に何かが飛来してきた。咄嗟に障壁を展開したところで、今度はシュイが投げつけていた魔石が爆発。障壁によりエミドは掠り傷ひとつ負っていないが、生じた黒煙が視界を遮った。

エミドの判断は素早かった。手を振り上げ、風の魔法によって上昇気流を起こし、一瞬にして煙を上空へ吹き飛ばす。その隙を突くべく側面に回り込んでいたシュイは、下から斜め上へ薙ぎ払うようにエミドへと鎌を振るった。再度障壁が展開され、軋んだ音を立てて鎌が跳ね返る。

体勢の崩れかけたシュイの姿をエミドの視線が追った。両手で鎌を持っていたせいで魔石を投げられる状態ではない。正体不明の脇腹の痛みを堪えながらも口元に凄みのある笑みを浮かべた。

だが、手の平を向けた瞬間、あらぬものが飛んできた。後ろに仰け反るような体勢で、シュイの踵が蹴り上げられた土砂だった。攻撃しようとしていたことに加えて痛みで集中力が乱れていたことが影響し、エミドの障壁の展開が完全には追いつかない。エミドが顔と腕に少量ながらも土砂をひっ被った。

「ぶっ、ぐぬっ――ぷっ、よほど……惨たらしい死を、迎えたいようだ」

口に含んだ泥を唾と一緒に吐き捨てたエミドが、脇腹を押えながら忌々しげにシュイを睨んだ。

「……はぁ、無詠唱とはいえ、はぁ、いや、だからこそか。……集中力の維持は必要みたいだな。その障壁も、……はぁ、万能ってわけじゃなさそうだ」

エミドが荒く息を吐くシュイの、傷を負っている箇所に目を映した。脇腹に深々と刺さっている氷柱が、流れ出ている血を凍らせ始めていた。同時に、自らの脇腹の激しい痛みが、少しずつ痺れに変わりつつあるのを感じた。認めざるを得なかった。シュイが先ほど使ったという魔法が今も尚、自分に影響を及ぼしていると。

「――解せぬ、何故貴様の呪いに障壁が働かなかったのだ」

エミドの展開する障壁、＞紡がれし闇母（スピン・オフ・エライザ）の産繭＜は上位感知魔法と連動して効果を発揮する防御魔法の極み。球状に展開した感知領域内の質量を捉えて対物理、対魔法双方の効果を併せ持つ魔力障壁を展開する。膨大な魔力と集中力を必要とするコストパフォーマンスの悪さに目を瞑れば、まさしく堅牢の名にふさわしい。

おのれに害をもたらすものであれば攻撃魔法に及ばず＞更なる威（プレッ）に屈せよ（シャー）＜などの干渉魔法をも退ける。それだけに、障壁に影響を

及ぼさずに苦痛を与えてくるシュイの魔法が腑に落ちないようだった。

「言ったはずだ、これは回復魔法の類だと」

まだわからないか、とシュイが唇を歪める。

「どこがだ。自分の受けた苦痛を相手にも味あわせる、どう考えたところでおぞましき呪いの仕業であろうが」

「……干からびた脳味噌じゃあ、その程度の発想なんだろうな。あんたは神を信じちゃいないだろうが、これは大昔にレムース教の慈悲深い教主様が編み出した魔法らしくてね。助かる見込みのない者たちの痛みを半分肩代わりするものなんだよ」

エミドの完璧に近い防御に対し、シュイが苦肉の策として使用した＞汝、我に共感せよ＜。＞同調＜した魔力を対象者の感覚器官に繋げる門を開き、感覚共有を行う魔法。本来は終末医療、死の淵にいる病人や怪我人の痛みを和らげるために使われる。寝たきりで死を迎えねばならない者の苦痛を少しでも和らげるために。一瞬でも家族と温かい時間を過ごしてもらうために。美しい景色を目に焼きつけながら、穏やかな最期を迎えられるように。

だが、慈愛を以って生み出されたはずの＞汝、我に共感せよ＜も、戦っている最中に使えば呪いと違わぬ魔法に早変わりする。無論、それを考えついたとしても実行に移す者がいたかどうかは定かではない。元々使い手の少ない魔法であるし、シュイとてデニスからその逸話を聞かねば教えを請うこともなかった。戦いに利用するに当たっては準備と集中力を要し、格上の敵に対して一対一で使えるような魔法ではない。

加えて、この魔法には重大な落とし穴がある。相手と感覚を共有しているということは、相手を傷つければ、今度はその痛みが自分に返ってくるということに他ならない。術者にも相当なリスクを強いる、エミドの障壁に比べれば穴だらけの魔法なのだ。

「――はっ、そんな無意味な魔法が存在するとはな。そんなものを

戦いに利用する貴様も大概だが」
「別に、戦いに使おうと思って教えてもらったわけじゃないさ。――俺だってできればこんな使い方したくはなかった、誰だって痛いのは嫌なもんだからな」
「ならばますます理解できん。傭兵が聖人を気取るとはお笑い草ではないかね。人の苦痛を肩代わりすることになんのメリットがある」
「何とでも言え。……別に理解してもらおうとも思っちゃいない」

苦い記憶がシュイの脳裏を埋め尽くす。大切な人が痛みに、苦しみに喘いでいる時に、見守っていることしかできない歯痒さ、無力さを。今際の際の苦痛を少しでもいい、自分が引き受けてやりたいという願い。そして、いまにも絶えそうな息を傍で聴く者の思い。喉が焼けるように熱くて、胸が息できないほどに震える感覚を。
「力をひけらかして満足しているあんたなんかに、自らの痛みを以ってしても大切な人を救いたい、そんな想いがわかるはずがない」
「確かに、弱き者の戯言だな」
シュイの万感を込めた言葉を、エミドは一言で切り捨てた。シュイは身体を蝕む激痛に堪えながらも笑顔を作る。
「――あぁ、あんたはそれでいいんだよ。最後まで卑劣で凶悪で、狂おしいほどに憎い敵であってくれ。それでこそ、こちらも躊躇いなく鬼になれる」
「貴様は鬼にはなれぬ。人間だよ、どこまでも惰弱で矮小な」
「そういうあんたも、その領域から抜け出せているってわけでもなさそうだな。苦痛に喘いでいる今の方がさっきよりずっといい顔をしているよ、生きているって感じがする」
「――戯言を！」

皮肉ではなく本心から言ったシュイの言葉。それが回り回って皮肉に感じたのか、エミドが苛烈に反応。
だが、予期せぬことが起きる。エミドが押し出した手の平に対し

て、シュイが構えを解き、目を閉じた。あろうことかエミドの攻撃に無防備に身を晒したのだ。

エミドの目が大きく見開かれた。熱線を放ったのとは逆の手を迅速に動かし、おのれの手首を掴んで形状変化。間一髪シュイの頭部を貫くぎりぎりのところで熱線が鞭のようにしなり、軌道が逸れた。顔の直ぐ横を通り過ぎ、前髪の端をじりじりと焦がしていくエミドの魔法に、シュイは微動だにせず、表情ひとつ変えなかった。

「……き、貴様、何故避けない！」

慄然と声を震わせるエミドに、シュイがゆっくりと目を開いた。

「……惜しかったな。今のが当たっていれば、その瞬間にあんたの敗北が確定したのに」

その言葉に、エミドは胃の腑に冷気が沈んでいくのを感じた。脇腹の痛みだけでもいっぱいいっぱいなのに、頭部を貫かれた痛みにまで耐えられる自信はない。おそらくは障壁を展開するどころの話ではなくなる。そして、シュイがそれによって斃れたとしても、周りにはまだ生存者がたくさんいる。如何に負傷しているとはいえど、降って湧いたチャンスを見逃すはずもない。憎んでも余りある自分に対して躊躇いなく刃を振るうだろう。

シュイが示唆した理屈はわかる。言っていることも間違っているとは言い難い。だが、どう解釈したところでまともな考え方ではなかった。おのれの死と引き換えに勝利することを、目の前にいる男は肯定してみせた。言葉などではなく、行動で。

「そっちこそ、何故当てなかった。ついさっきまで平然と力を振るっていただろうが」

「……な」

絶句するエミドに、シュイが溜息交じりに言葉を続ける。

「……なんてな、わかってるよ。ちらっと思ったんだろう？　『これを直接当ててしまったら、自分もその痛みで死んでしまうんじゃないか』って」

図星を指されたエミドの顔が憤激に満ちた。人は痛みだけで死ねる。身体になんら外傷がなくとも、ショックで死ぬことはある。人生の大半を裏社会で過ごしてきたエミドは、他人の死や痛みに対するあらゆる知識があった。もちろん自分が苦痛をもたらす側であり、相手が苦痛を受ける側。そのベクトルは数十年来なんら変化しなかった。今日、この時までは。

「少しほっとしたよ。あんたでさえも死は恐るべきものだってことがわかって」

「……貴様も、どうかしている。命が惜しくないというのか」

「惜しいさ、惜しくない人間なんているわけがない。……自ら死を選ぶ者だって、それは変わらないだろうさ。単に今のはあんたが臆病風に吹かれて攻撃を逸らすと思ったから避けなかっただけだ」

「――このっ！」

挑発に乗ったエミドの手から勢いよく炎が迸ったが、今度はシュイは普通に身を翻して避けた。

「今度はなんとなく当てられそうな予感がした。……勘っていうのも中々、捨てたもんじゃないね」

悪戯っぽく笑うシュイに、エミドの握り拳が血を流した。長い爪が深々と食い込んでいた。その痛みが手に伝わったのだろう。シュイが微かに犬歯を克ち合わせた。

ややあって、エミドが何かに気づいたようにゆっくりと顎を上げた。

「――そうか、そういうことか。さっきまでと打って変わって無茶な攻撃に転じているのは、もう間もなくこの魔法の効力が切れるからか」

「……だとしたらどうする？　＞閉じられし邪将の氷城（プリズン・オブ・インディオール）＜を解き、尻尾を巻いて逃げるか？」

嘲笑の響きが混じったシュイの挑発に、エミドは酷薄な笑みで応じる。

「――甘く見るなよ、小僧。互いの感覚が共有されていると知れればそれなりの戦い方がある。貴様の魔法の効力が切れる前に貴様を屠ってやろう」

「――いいぜ、とことんやり合おうじゃないか」

罪人は罪人同士で戯れるのが似合いだ。シュイのその呟きはエミドの放った衝撃波によって掻き消された。

～決意　the　will　to　win10～

何事も余裕を持つに越したことはないが、持ち過ぎてはいけない。ニルファナ・ハーベルはシュイに教授する際、たびたびそう諭すことがあった。

失敗から自然と学べることは多いが、成功から課題を見出すのは一筋縄ではいかないことだ。偶々成功が続いて天狗になり、その結果大きく躓くことは誰しもが経験することだろう。大きな力は時に成長の足枷になる。例えば、恵まれた財力や人的資源の環境下で長年過ごしてきた者が、何もないところから物事を想像し、自分なりに構築するのが苦手であるように。効率化を図る一方で失われるものの大きさを、ニルファナはよく理解していた。

そういったことは日常のありとあらゆることで実感できる。身体であれば、机仕事（デスク・ワーク）ばかりしていれば運動不足で筋力が衰え、腹に段差が足されてしまうだろう。長年人と接していなければ一通りの教育を受けた者であっても日常会話に齟齬（そご）をきたすかも知れない。

頭には日々身体にかかる負荷を計算し、適応できるように生育する能力がある。使わない機能を極力削減し、使う機能を増強する流れが身体の中に生きているのだ。

ニルファナは、並の人間なら歩くことすら困難であろう＞滅祈歌（ルイン・チャント）＜の制御を成功させたシュイの精神力を評価する一方で、大きな力に依存し続ける癖ができてしまうことを危惧していた。彼女が肌で感じた滅祈歌の力は、齢十三そこそこの少年が持つには明らかに過ぎたものだった。シュイの体調を慮るのはもちろん、そういった思いが滅祈歌を禁じた理由の一端ともなっていた。

こと戦いに関して言えば、大概のことはできてしまうほどの効力がある滅祈歌だが、半分意識が飛んだ状態になってしまうのは好ましくない。そんな状態で勝利した闘いが果たして血になり肉になる

か。そう訊かれれば首を捻らざるを得なかった。
便利な道具を用いることによる恩恵は確かに計り知れないが、過度の便利さは様々な成長を阻害する要因にもなる。取り分け、不便を克服するための力を失ってしまう。
ニルファナはシュイに対し、念話と基礎魔法以外にはこれといった魔法を教えなかった。時間をかければ教えることもできたのだが、経験が浅いままで使い勝手のいい魔法を覚えても本当のありがたみはわかるまい。そう判断し、全てを教えることはせずに自分で何を成すために何を取捨選択するのか考えるよう促した。

傭兵になってからというもの、シュイはニルファナの思惑通りに失敗し、挫折し、それを克服するための方法を考え続けた。おのれの心に太い芯を打ち立て、再び相見える困難を乗り越えられるだけの地力を身につけられるように。それはどんなに不利な状況からでも勝利の方程式を見つけ出そうとする靭な心を育んだ。
そして、ニルファナの思いの一端を、シュイは図らずも実感することになった。力に溺れた者の成れの果て、エミド・マスキュラスと相対することで。

――――

シュイの＞汝、我に共感せよ＜に苦しめられていたエミドは、その状況を打破すべく失血にて死に至らしめる戦法に切り替えた。相手を傷つけることによって多少の痛みは伝わるだろうが自分の血まで失われるわけではないからだ。
その際、頭や胸部を狙うのは極力避けた。痛みによる影響を最小限に抑えられそうな部位。手首や足首、頸動脈に裂傷をなすよう、攻撃方法を風の刃に絞って対応。その戦法は地味ながらも確実に効果が出始めていた。驚異的な反射神経や発想で致命傷こそ避けていたシュイだったが、四肢にはいくつも細かい傷を負っていた。凍り

ついていた脇腹の血も、激しい動きによって傷口が広がり、再び滲み出ていた。

もう何合目かを数えることも止め、互いに荒い息を吐き、更に傷を増やしたエミドとシュイ、そしてシャンが距離を取って睨み合う。お互いに致命打を避けねばならぬという思いが交錯し、戦いは泥沼化していた。堪え難い痛みからくる疲労はエミドの思考能力を少しずつ衰えさせ、障壁の展開速度を徐々に遅らせていた。だが、シュイの状態はより深刻だった。血を失い過ぎたせいで頻繁に眩暈に襲われ、唇を噛んで朦朧とした意識を失わずにいるのがやっとだった。エミドの側から見ても、とっくに倒れていてもよさそうなものなのに、と思わないではなかった。

「本当に、しぶとい連中だ。……いい加減倒されて欲しいのだがな」

「その言葉、そっくりお返しするよ」

肩で息をしているシュイの代わりに、シャンがそう言った。エミドの着ているローブは大量の汗に濡れ、背中には濃い灰色の島ができておねしょのようになっていた。

――大丈夫かい、シュイ。

シャンの呟きに、シュイは霞み始めている目を向け、小さくうなずいてからエミドを見た。

「……圧倒的だな、あんたは。魔石からの魔力供給を抜きにしても、今の俺なんか足元にも及ばない。魔法の処理速度のみに言及するならニルファナさんの遥か上をいくだろう。……加えてその強固な魔法障壁、封呪の行使をも許す恐るべき集中力」

「……全く、手のつけられない強さだよね。本音を吐露すれば、もうちょっと楽な任務だと思っていたんだけれど、ここまで割に合わないと泣けてくるよ」

シャンが合いの手を入れ、シュイが苦笑いを浮かべた。単独で挑めば何もできぬままとっくに殺されていた。それほどに明らかな実

力差があった。多くの犠牲と痛みを代償にして、皆の力を結集してやっと立ち向かえている。

エミドの人格が破綻していようと、その力が個の頂点にも迫るだろうことは、戦った者たちが一番わかっているのだ。そして、それが並々ならぬ才能と研鑽、試行錯誤によって得られたものであることも。

「……同じ魔道を志す者として、皮肉に聞こえるかも知れないが、尊敬の念すら抱いている。――だからこそ、思いは複雑だな」

シュイはそう口にして、遠い過去に思いを馳せる。自分にその力があれば、エスニールの悲劇を容易に防げたはずだった。敵軍をすっぽりと氷の檻に閉じ込めてしまうほどの圧倒的な力があれば、お互いになんの犠牲も出さずに故郷の人々を守ることができただろう。だからこそ、その力を人を傷つけることにしか、不幸にすることにしか使わぬエミドがどこまでも恨めしく、羨ましかった。

「私を難敵だと認識しているならば、何故貴様らは未だ立ち塞がっている。おのれの命を量る天秤の片割れに、何を以って釣り合いを取っているのだ」

「一言では言い表せられないな。理屈じゃなく、もっと根源的なことだ」

シュイの声にエミドが振り向く。シャンは肩をすくめながらも言葉を続ける。

「わかんないかな、苦楽を共にした仲間が傷つけられるとものすごーく嫌な気分になる。そりゃ、受け取り方によってはそれも一種の欺瞞（ぎまん）なんだろうけれど。先立つものは結局感情、ここで逃げたら一生消えぬ後悔を背負うことになる、そんな焦燥感に煽られ、突き動かされているだけだ。臆病であればこそ、俺たちは手に武器持って戦うのさ」

「――なるほど、よくわかった、貴様らとは一生分かり合えぬこと

が」
「それがわかっただけでも意味はあったかもね。――さて、お互いに余裕もなさそうだしそろそろ幕引きといこうか」
シャンが話を切り上げると、エミドが眉間に指を当てる。
「ふむ、ならば先に一言だけ述べておこうか。――貴様らはよく戦った、この人数より大勢を相手にしたことも幾度となくあるが、私がこれほどまでに疲弊させられたのはこれが初めてだ」
エミドの賞賛に、シュイとシャンが前を向いたまま視線を合わせた。だが、後に続く言葉であっという間にしかめ面になった。
「――究極の存在である私を追い詰めた末に力尽きる、世界中の誰もが羨望する最期だと言えよう。貴様らのつまらぬ人生の中で唯一といっていい充足感に満ちた時間だ。大いに誇りながら死ぬといい。そして、あの世で仲間が殺させるのを指を咥えて見届けるがいい」
「……天は二物を与えない、か。本当、世の中って残酷だねー」
性格さえ良ければ完璧だったのに、ということだろう。シャンに背負われているアマリスが訳知り顔でうなずいた。

再度、なけなしの力を振り絞ってエミドに向かっていくシュイを見止め、シャンが悔しげに拳を握り締めた。
「……シャン、いってきていいよ。シュイもあの様子じゃとっくに限界だろうし、このままだと本当に死んじゃう」
後ろから発された声にシャンが首を回す。背負われていたアマリスが微笑みながらうなずいた。今まで戦闘参加するのを控えていたシャンの気持ちは、背中から随所に感じ取れていた。
「……ごめんな、流れ弾に当たったら恨んでくれていい」
「ううん、今シュイに何かあったら唯一の望み（エンバシィ）が途切れる。それは、この場にいるみんなの命運が尽きちゃうのと同じ、僕たちは元より一蓮托生だよ」
シャンはエミドから目を離さぬままうなずき、アマリスをそっと下ろし、次いでティートを横たえた。

急所は狙わない。というよりも狙えなかった。痛みがリンクするのはエミドだけでなくシュイも同じ。ましてや、今の彼は手の痛みに堪えるだけで精一杯だ。彼が耐えられて、かつ効果的な場所を選ばなければならなかった。エミドを殺せてもシュイまで死なせては意味がない。そうと思えるだけの信頼関係があった。

シャンは頸動脈の位置を確かめるように、おのれの首を指で何度となく押し、その脈動を確かめる。傷つければ容易に致死量の出血を臨める場所。血管のみを鋭く裂き、シュイに極力痛みが出ぬように配慮するつもりだった。

ややあって指先を咽頭から遠ざけ、目一杯息を吸い込んだ。ぴたりと吸気を止め、シュイの鎌がエミドの障壁に弾かれた刹那、エミドに疾走を開始。アマリスとティートの重みから解放された足運びは先ほどよりも数段早い。脇に構えたナイフに全身全霊を込め、エミドの斜め後方から突進する。

果たしてその攻撃を察したエミドがシャンの方を向いた。目の前にナイフの煌きがあった。障壁が展開されたが、疲労のせいか以前より明らかに構築速度が遅い。一瞬速くシャンの腕がその更に上を通過。続いて、下から上へと形成されていた障壁が前腕部を叩いたことによって軌道が逸れ、横一文字を描きかけたナイフが跳ねを打った。エミドの喉から顎にかけて赤い筋が走った。

「がっ……」

――くそっ、浅いか！

それなりのてごたえはあったが不十分と判断。シャンが弾かれた腕を振り下ろした。だが、その時にはエミドの目が据わった。目が合った瞬間猛烈な悪寒に襲われたシャンが、咄嗟に後ろに飛んだ。

戦闘勘がシャンの命を繋ぎ止めた。エミドが詠唱破棄すらせずに有り余る魔力を暴発させ、重力震が発生。跳躍し、着地するまでの、

瞬きほどのわずかな時間だった。シャンが後ろに退いたよりも、広がりゆく領域の速度が勝っていた。

左足が呑み込まれ、穿いていたズボンが一瞬にして引き千切られた。続いては丈夫な靴が鋏で切り裂かれたかのようにズタズタになり、中の足の指が、ついで甲の骨がひしゃげた。木の枝を無理矢理折り取るような無残な音が鳴った。その足がぞうきんのごとく絞られたところで地に足をついたシャンは悲鳴すら上げられずに体勢を崩し、そのまま後ろに倒れ込んだ。

「シャン！　……シャンってば！」

悶絶し、身体を小刻みに震わせるシャンに、アマリスが悲鳴を上げた。倒れたシャンを見下ろしたエミドが、片手で切られた顎を押さえ、もう片方の手をとどめとばかりに掲げた。

窮状を察したシュイが身を切った。自分の脇腹に刺さっていた氷柱を掴み、歯を食い縛って捻り上げる。今までとは比較にならぬ痛みに襲われたエミドが集中力を乱し、集めた魔力を喪失した。

その姿を捉え、シュイは霞む視界にある影に向かい、足に力を込めて前進。ふらふらな足取りで踏みしめる震動が更なる痛みを併発し、エミドの身体が弾かれたように痙攣を繰り返した。

エミドが他の者と比較してただひとつ劣っているとすれば、それは苦痛に堪える力だった。人は慣れていない刺激には脆い。寒暖差によって体調を崩す者がいるように。毎日のように厨房を切り盛りしている調理人や主婦が、跳ねた油や熱気を気に止めぬように。

かたや絶対的な力によって、数十年もの長い間生傷を遠ざけてきた者。かたや敵の攻撃にその身を晒し、痛みに耐えて死線を乗り越えてきた者。どちらが我慢強いかは明白だった。

シュイは、ただ一つの優位を押し出す戦略を構築した。薄氷の踏み合いというが相応しい戦いだった。我慢比べに持ち込むため思案を巡らし、それを実行するべくあらゆる手段を尽くした。

――シャン、痛みが――治まったら、でいい。頼みたい――ことが、ある。

シュイの念話が頭に響き、閉じかけていたシャンの目蓋が再び開いた。束の間、エミドに＞盗聴（タッピング）＜されているのでは、という考えが過ぎったが、直ぐにその考えを追いやった。腹を押さえて悶絶している姿からすれば、そんな余裕はなさそうだ。

激痛は少しずつ弱まり初めていたが、脛の中ほどより先の感覚が完全に失われていた。どうなってるか怖くてとても見る気にはならなかった。

途切れ途切れの念話を聴き終わる頃には知らず知らずのうちに全身にびっしりと脂汗を掻いていた。足の怪我もさることながら、シュイの策の無茶振りに恐れを抱いて。

本当なら即座に別の案を訴えたいところだったが、自分が念話を使うことはできない。口に出せば全てが破綻する。詰まる所、シュイの念話は実行しなければならない。けれども、ここまで気鬱になる作戦は未だかつて経験したことがなかった。

身体を揺らすたびに走る足の痛みに悶絶しながら、それでもシャンは霞む視界に刃の煌きを捉え、身体二つ分離れた場所に落ちている愛用のナイフを目指して少しずつ這いずっていった。

ややあって、乾いた音が鳴った。シュイがひきつる自分の顔を手で叩いていた。気つけのために。エミドの目が、泉に浮かぶ浮草のように揺れ、それからシュイの方をぼんやりと見た。

「――エミド・マスキュラス！　そろそろケリをつけよう！」

全身に広がりつつある虚脱感とも浮遊感ともつかぬものに抗い、声の限りに叫んだ。それは結果として相手の意識をはっきりさせてしまう一面もあったが、そうでもしなければ意識を手放してしまいそうだった。

シュイが全身の力を振り絞り、エミドへ向かって駆け出した。後退する力は残っていなかった。立ち止まる力すら怪しかった。前傾姿勢で自分の体の重みにより進んでいるようなひどい状態だった。

「――これで、ようやくこの痛みともおさらばというわけか」

エミドが万感を込めてそう言い、両手を合わせた。これで終わりという強い想いが、弱りかけていた力を底上げしたのか、エミドが三日月型の風の刃を五つ形成。突進してきたシュイを迎撃するべく、身体の中心部以外に狙いを定めて放つ。

眼前に迫る風の猛威に、起死回生を目論むシュイが＞魔を打ち払いし縛鎖（ディスペル・リロード）＜を詠唱。魔力の鎖が鎌の柄に蔦のように絡まっていく。一瞬にして紫煙を纏ったその鎌がシュイの手によって振るわれ、放たれた風をことごとく乱打、粉砕する。黒い牙がエミドの水晶のような目に映り、煌いた。

エミドが目を瞠った直後、シュイの方へと銀色のナイフが飛来。鎌を持っていない方の手に突き刺さった。

「――ぬぐっ、……な、何故！」

二の腕に襲ってきた痛みで集中力が断ち切られた。ナイフの飛んできた方角を一瞥すると、四つん這いのシャンがシュイに向かって手を突き出しているのが見えた。横になった状態での正確な投擲にも驚嘆すべきであろうが、それに先行したのは戸惑いだった。

エミドは一瞬、シャンの狙いが外れたのではないかと疑った。だが、目の前のシュイの笑顔を見てそうではないのだとわかった。互いに意志疎通を交わした上での一撃。仲間に凶器を投擲したのだと、仲間に凶器を投擲させたということに戦慄を覚えた。

この時になって、エミドは見誤っていたことに気づいた。仲間におのれの身を切らせてまで自分を滅ぼそうとしているシュイの闘争本能。平凡を超え、非凡という言葉ですら温い、勝利への執着心を。

驚異が間近に迫る。信じがたいことに、負傷したはずのシュイの＞魔を打ち払いし縛鎖（ディスペル・リロード）＜は未だ保たれていた。ナイフが襲来するこ

とを予想し、腕の筋を収縮して耐えようという心構えをしていたがゆえに、途切れかけた集中力をぎりぎりで繋ぎ止めていた。

エミドの思考が停止する。一度は考え、されどシュイの告白によって投棄していた可能性の復活。更にはその瞬間に飛んできた痛みのせいで考えがまとまらない。頭にあった無数の策が一気に形を失い、それでも無我夢中で障壁を展開しようとした。頭の片隅で愚策とわかっていながら、無意識のうちにそうしてしまっていた。長年の癖が、この土壇場にきて悪い方向に顔を出していた。

混乱した頭で行使された魔法は強度と展開速度の両面において、今までの精度とは比べるべくもなかった。鎌刃が作りかけの歪な障壁に引っかかり、高速再生する間も与えずに断ち切った。床に落としたグラスのように、障壁が砕け散った。

束の間、視線が交錯する。互いの目に宿っているのは死への恐怖。それをしかと胸に抱きながらも、最後まで前進を続けてきたシュイが、鎌の柄を両手で押し出すようにしながら、エミドと擦れ違った。

「が……」

エミドの左胸へと潜り込んだ鎌刃は、主の手から解放されていた。相手の心の臓を貫いた代償。頭が白み、気を失わんばかりの激痛が返ってくる。否、実際にシュイの意識は失われていた。幽鬼のようによろめき、呆然と立ち尽くすエミドの後ろで地に崩れ落ちた。

「い、いやあぁぁ！」

「ばっ……馬鹿かあいつは！　魔法の解除もしないで！」

シャンとアマリスの悲鳴が重なった。信じられぬという面持ちだった。シャンは、とどめを刺す直前で＞汝、我（エンパシィ）に共感せよ＜を解除するのだ。そう信じて疑わなかった。

胸骨に引っかかってぶら下がっている鎌を、エミドが呆然と見る。地面に向いた柄の先からは赤い糸が引かれていた。

「――お、おのれ。やはり、使えたのか。……最後の最後に、……詐欺師めが。早く……に出してくれてさえ、いれば、いくらでも対処法が、あったものを」

気絶したシュイに対して、込み上げてくる血の嘔吐感が、幸か不幸かエミドの意識を繋ぎ止めていた。食い込んだ鎌刃を抜き放った途端、血が迸り、血に斑模様を描いた。激しく咳き込むエミドの口からどす黒い血が飛び散り、抉られた胸からは血が赤い瀑布となって地に垂れ落ちた。

それでも、エミドは虚ろな目で、たどたどしい足運びで、シュイへと向き直り、とどめをささんと手を突き出そうとした。

だが、魔法が放たれる寸前、エミドの身体に電撃が走り、振動した。

「……な」

アマリスの絶叫で目が覚めたのだろう。今の今までうつ伏せで倒れていたティートが左腕を支えにして身体を起こし、右手をエミドに向けていた。

「よう……やく、お返しが……できましたね」

「ティ、ティート！」

顔をくしゃくしゃにしたアマリスの隣で、ティートが全身の痛みに耐えながらも笑う。放たれたのは何の変哲もない＞集束する雷（ライトニング・ボルト）＜だったが、瀕死の重傷を負い、障壁を展開する余力もないエミドには十分な効果があったようだった。

「……ぐ、まだそんな力が……残って。――あ？」

いつの間にか、シュイを庇うように、討伐隊の面々が三人、横並びで立っていた。それぞれに全身が傷だらけでふらふらの状態だった。足が折れているのか、一人は片足を引き摺っている有様だ。

「何の……つもりだ。半死半生の……雑魚どもが」

今まさに力尽きようとしている自分のことを棚に上げ、エミドが

呆然とした面持ちで訊ねる。

「……彼は、やらせぬぞ。命を賭して皆を守ろうとしてくれた思いに、今応えられずして何とする。たとえ、ここで力尽きようとも構わぬ。……必ず、守りきる」

直ぐにでも溶けてしまいそうな、薄い氷のように弱々しい声だった。レインフォードの緑色の髪は頭皮からの血でべとべとに貼りつき、その鼻は左に折れ曲がり、鼻血を垂らしていた。なんら余裕など感じられない、押せば二度と起き上がってこないだろう傷を負っている者たちが、立ちふさがっていた。そして、エミドはそんな彼らに威圧感を覚えていた。

――何故だ。

その問いかけは、立ち塞がっている敵に対してのみならず、自分にも発されていた。何故この者たちは命を惜しみながらもそれを捨てるような真似ができるのか。どれほど傷めつけられようとも尚立ち上がるのか。

レインフォードが肩越しに、うつ伏せに倒れているシュイを見、わずかに相好を崩す。

「本当に若い、な。されど……幾度倒れようとも這い上がり、自らに刃を立ててまで貴様という脅威に抗った戦士の鑑。……信念に準じて戦いに赴いた者があのような姿を見せつけられれば、心奮い立たぬはずがない」

くだらぬ。そう一笑に伏したエミドの身体から衝撃波が迸り、構えていた男たちの槍と剣が、持ち手の辺りから亀裂に見舞われた。男たちが三方向に吹っ飛ばされたが、何とか地面に手をつき、折れた武器を手に立ち上がろうとする。

そして――三人が立ち上がる前にエミドが膝をついた。紫の呪氷で象られていた巨大な檻が薄らと色を失い、消失していった。異変に気づいた何人かの者が、続いては驚嘆の声を上げた。勝利の瞬間は目前に迫っていた。

血の味に堪え難い胃酸の味が加わり、エミドの表情が歪む。そして、笑う。傲然と、戦う前に相対した時となんら変わらぬ傲岸不遜な表情で。

「ぐ、くく……はは。肉を骨ごと挽肉（ミンチ）に変えてやるはずが、このざま、か。わ、笑えぬ。名だたる戦士を、ごぶっ、数多……葬ってきた私が、……よもや、……よもやこん……な」

土に膝を突いたまま、エミドは目の前に横たわっているシュイを、未だあどけなさを残す男の横顔を睨む。くいるように。おのれを屠ったその敵の顔を、目に焼き付けるように。

その目が急速に輝きを失い、濁っていく。心臓から送り出されていた、酸素を含む血が枯渇し、エミドの意識が一瞬にして白一面の世界へと誘われる。それが黒に反転するまでにさほどの時間はかからなかった。

「つ……まら……死……に……を――」

貧血によってからからに乾いた紫の唇が言葉を紡ぐのをやめ、その上半身が前に傾いた。地面に横たわる音が周りの者たちの耳に、やけに大きく響いた。

黒魔術に手を染め、蛮行の限りを尽くしたレッドボーンのマスター、エミド・マスキュラス。その最期は、本人が臨んだ静謐で迎えられた。

お椀型の透過窓が砂を弾いている前で、ピエールは静かに息を吐く男二人を肩越しに眺めた。後ろではイヴァンとシュイが同じ木の長椅子の、両端に座っていた。呉越同舟。イヴァンはごく自然に腕を組み、くつろいでいるようだが、一方のシュイは自分の膝上に頬杖をついてそっぽを向いていた。単にふてくされているようにもみえたし、宙の方に向いたフードの隙間が煩雑に散らかった頭の中を整理しているのだ、と訴えているようにも感じられた。

思わぬ出会いの熱からやや冷めてきたピエールの思考が、このまま流されていいのだろうか、と自分自身に警告を発した。世界屈指の賞金首たるイヴァン・カストラと行動を共にしたことがギルドにバレたらどうなるか。肩を並べて戦いました、などと申告でもしようものなら自分の敵が倍かそれ以上になるだろう。加えて、あまり物事を深く考える性分ではない彼にとって、後ろから放たれる無言の重圧は中々に居心地が悪い環境だった。

味方への連絡を断念し、シュイは背に腹は代えられぬとイヴァンからの共闘の申し出を受け入れた。承諾の返事を得たイヴァンとヴィオレーヌはシュイとピエールを寺院の更に奥へと案内した。ゆるやかな下り坂の地下道を十分ほど進んでいくと、船ドックらしき施設に出た。環状の船だまりには水の代わりに細かな砂が積もっており、その砂の上には大きな砂船が停泊していた。

一見して、百人は軽く乗せられそうな大きさだった。ルクセン教団が保有する三隻のうちの一隻だとイヴァンが説明した。奥にある分厚い鉄でできた運搬橋を渡り、半歩ほどの隙間をぴょんと飛び越えて甲板の上に降り立った。船の船底までの長さを考えると、溜まっている砂は四階建て分くらいの高さはありそうだった。

出航するよう頼んできます、とヴィオレーヌが操舵室の中に入っていく。少しすると足元が小刻みに振動を始め、息を吸う様な音が段階的に高くなっていった。

ややあって舳先が上に傾いていくと同時にほぼ平らだった甲板がゆっくりと傾いた。動き始めたのだと思った時には巨大なトンネルに吸い込まれるところだった。慌てて後ろを見ると、先ほど乗り込んだドックが遠ざかり、闇に畳まれて見えなくなった。トンネルがカーブしているのだとわかった。

後ろからの光が失われて真っ暗になるや否や、かまぼこ型のトンネルの天井部に左右対称になるよう埋め込まれている照明石が一斉に点灯し、赤紫色の光の道を作った。周りに一切光源がないこともあって、まるで夜空へと上っていくような錯覚に囚われた。

それなりの速度が出ているのか、体に吹きつける風が何とも心地良かった。滅多に味わえない体験に心が躍っていた。

「そろそろ下にいった方がいい、船室に案内する」

「え、なんで？　熱いからってこと？」

そうと訊ねたシュイに、イヴァンはそのままそこにいれば直にわかるだろう、と言ったきり踵を返した。

――ここにいれば、って？

シュイが船の向かう進む先を見ていると再びトンネルがカーブし、舳先に外の光が点灯した。段々と光が広がっていくのを目にし、そろそろ地上へ出るのだとわかった。それなりに眩しいが別に太陽があるわけではなかった。自分が足を動かさずとも出口が近づいてくるのは何とも面白かった。だが――

――ぶっ！？

突然顔に何かが振りかかり、次いで目に激痛を感じた。慌てて目を閉じたがそれが返ってまずかった。シュイは目を両手で抑えたま

ま呻き、次いで口の中の我慢ならぬ感触に唾を溜めた。
「うべっ、ぺっぺっ――げほっ」
「あー、やっぱりそんな予感がした。外からの風に砂が乗って地下に吹き込んできたってわけだな」
ちゃっかり後ろを向いていたピエールが納得したように手の平をポンと叩いた。シュイは目がごろごろしてそれどころではなさそうだ。
「いだぁ、くそっ、いだぁい！　思いきり目の奥に入っちゃっちまった。知っていたんなら先に教えろよ！　――って、あれイヴァンは？」
ハンカチを取り出し、涙目を拭いながらシュイが周りを見た。
「もうとっくに下にいったぜ」
「――ふざけてんのか、あの野郎は！　人をおちょくるのも大概にしとけよ！　以前のようにいくと思ったら大間違いだぞ！」
「お、俺に怒ってどうするんだよ！　本人に直接言え本人に！」
と、一気に明るくなってきたことに気づき、二人ともに目を細めた。巨大なトンネルを抜けて外へ出ると、砂漠の日差しが甲板を白く照らした。

闇に慣れていたせいでしばらくは目をまともに開けていられなかった。やっと目が慣れてきた頃合い、操舵室から戻ってきたヴィオレーヌが二人を呼び止め、涼しさが損なわれる前にと船尾に近い甲板の下り階段へ案内した。
階段を二階分ほど下りたところには、砂を払い落とす小部屋が設けられていた。ヴィオレーヌやピエールを真似るように、シュイは小さな竹箒でロープについた砂を払い落とした。
船内の作りは普通の客船とそう変わらなかった。円形の透過窓の下端が胸の高さほどで等間隔に横並びになっていた。外には海ならぬ砂海が、水平線の代わりに地平線が望めた。よくよく目を凝らすと三重窓になっていることに気づいた。砂漠の熱気を通さないため

の工夫だそうだ。
　隔壁についている背の低いドアを頭を屈めて潜り抜けると天井が高くなった。そこは酒場（バー）に改造された船室だった。
　天井から吊り下げられた暖色の照明石で照らされていたが、雰囲気も考えているのかそれほど光量が多いわけではなかった。カウンターの裏の酒棚には様々な形のボトルが並んでいる。船の形をしたもの。花瓶のような形のもの。イルカやドラゴンなどの動物を模したもの。その中に色彩鮮やかな酒が入れられていた。

　奥の方ではイヴァンがこじんまりとしたカウンター越しに、バーテンダーと思しき獣族の男と会話していた。念のいったことに、男はきっちりとワイシャツとスラックスを着こなし、蝶ネクタイまでつけていた。
　シュイたちと顔が合うと、白髪混じりの紳士は胸に手を当て、丁寧にお辞儀をした。おそらくは六十前後といったところだろう。なんとも柔和な笑みを浮かべていた。鼻梁に乗っかっているミニグラスが学者と名乗っても差し支えないような知的さを醸し出していた。

「ようこそお越しくださいました、新たな同胞よ。歓迎いたします」
　紳士はゆっくりと顔を起こしてから、鼻梁に手を添えてミニグラスを持ち上げた。
「残念ながら彼らは同胞ではない。そう、期間限定の協力者といったところだな」
　何か言いかけたシュイを遮って、イヴァンが合いの手を打った。
　年配の男は納得顔でイヴァンにうなずき、それからシュイとピエールの二人に向き直った。
「生まれはルクスプテロンの風の都ダーニィ、名はラードックでございます。期間限定でも構いません、ここを我が家と思いおくつろぎください。何かご注文があればなんなりと申しつけを」

そう言いながらもラードックは早速グラス、シェイカー、バースプーン、それにスクイーザーをカウンターの上に並べてみせた。手慣れた手つきから察するに、どうやらカクテルもお手のもののようだ。

ごくり、と喉を鳴らしたのは隣にいるピエール。戦いに次ぐ戦い、もとい敗戦に次ぐ敗戦で飲酒どころではなかったのだろう。酒好きの彼には願ってもない申し出だったに違いなかった。

イヴァンは生姜酒（ジンジャー・ビア）を人数分頼んでから適当な椅子にかけてくれ、と促した。先ほどシュイを嵌めたことなど眼中にもないのか、睨みつけているシュイに不思議そうな顔でどうした、と訊ねた。

罵りたい気持ちを辛うじて押し殺し、シュイはイヴァンと同じ椅子に踏ん反り返った。小さいことに拘って失笑を買おうものなら更に腹立たしくなるからだ。

「この船、一体どこに向かっている」

先に沈黙を破ったのはシュイだった。ピエールはようやく本題か、と腰を落ち着け、イヴァンは眠りに落ちていたのかうなずくようにしながら目蓋を開けた。

遺跡だ、と呟いたイヴァンに、シュイはフード越しに頭を掻いた。

「だーかーらー、そこの遺跡はどこにあるんだよ！」

言いたい事が伝わらないのか、シュイは大きく息を吐き出すように言った。

「遺跡は地中にある環状のトンネルの中を動き回っているので場所は定まっていません。進行方向でしたら、船は今現在南南西の方に向かっています。到着は、あと二日といったところですね」

脇からの澄んだ声に、ピエールとシュイが同時に振り返った。

「動いているって、砂船みたいにってことか？」

ヴィオレーヌはええ、と笑い、下唇に指を当てて言葉を選ぶように鼻にかかったような声を出した。

「端的に言うならば、この砂船のように魔石を動力とした居住区があると思っていただければよろしいかと」
あぁ、なるほど、と納得するには途方もない話にすぎた。町が砂船のように動くと言われても想像がつかなかった。
「あぁ、なるほどね、ってそんなことあり得るのか？」
そんなシュイの心をまんまピエールが代弁した。
「私も詳しくは知らないのですが、砂漠の日差し、昼と夜の温度差を動力に変換する仕組みがなされていると訊いています」
日差しを動力に、などと言われてもピンとこなかったが、今はそれよりも気になることがあった。シュイは顎に手を当てたまま疑問を口にする。

「どうも釈然としないんだが、そもそもなんで動いている施設に侵入されているんだよ。敵が近づいてきたところで逃げればいいだけの話じゃないのか」
耳に痛い質問だったのか、ヴィオレーヌの表情がやや曇った。
「まず、あくまでその施設は周期的に動いているのであって、誰かが自由に動かせるわけではありません。とはいえ、そこに来るとわかっていなければ乗り込むのは難しいです。身内の恥を晒すことになって恐縮ですが裏切り者がいると目されています。ルクセンを脱退した者か、あるいは現在進行形で在籍している者か」
「獅子身中の虫、か。そんな状態で戦うってリスク高くないか？」
「そちらの始末はリックとイルナヤ、仲間たちに任せてある。心配は無用だ」
口を挟んできたピエールに、イヴァンが確信を込めて言葉を返した。シュイは横目でイヴァンを見た。
「随分信頼しているんだな、あんたと同じで後ろ暗い過去を持つ連中なんじゃないのか？」
「いかにもそうだ、二人とも元々は敵対していた者たちだからな」
微かに笑みをこぼすイヴァンに、シュイは酒で舌を湿らしてから

グラスを置く。
「昨日の敵は今日の味方、か」
「おまえとて数年戦ってきたならわかるだろう。命がけの戦場では敵となる者に対しても妙な親近感が沸くことがある」
シュイは考えに耽り、小さくうなずいた。
「とはいうものの、一部例外はいたけどな」
シュイは青髪の男と顎髭の長い老人の顔を脳裏に浮かべた。

エミド・マスキュラス。イヴァンがそうと呟くと、シュイは意外そうな顔をし、ピエールが少し興味深げに聞き耳を立てる。
「やつのことも知っているのか。まぁ、あっちの方が俺よりずっと有名だもんな」
「強かったか」
シュイがひらひらと手を振った。そんな言葉じゃ表しようがない。そう言いたげだった。
「――万全の状態ではないにしても腕利き五十人からなる討伐隊が全滅しかけたんだぜ。正直、勝てたのは運がよかっただけだよ。こちとらあっちの世界にいきかけて二週間も入院するはめになっちゃったし、できればあんなやつとは二度とやりたくないね」
「……確か、おまえがやつと闘ったのは一年以上も前だったな。もし、今のおまえが一対一でやつと闘ったならどうだ」

シュイは即答せず、グラスに残っていた酒を氷毎飲み干し、ガリガリと噛み砕いて口を拭う。そして囁くように
「――三：七で分が悪い、かな」
自尊するでも自嘲するでもなく、口にした。答えに満足したのか、イヴァンは腕を組んで、頼もしいじゃないか、と笑みを浮かべた。

格子模様の壁に囲まれた殺風景な部屋で男の断末魔が響き渡った。部屋の中には深い青の外套を身に纏った青い長髪の人族。エグセイユ・スキーラが真紅に染まった剣を地に向けていた。ゆらゆらと流れるような剣肌と思しき質感は、斬り伏せた者たちの夥しい血で施されたものだ。足元に目を移せば十人にのぼる者たちが屍となって横たわっていた。

「呆気ねえ、呆気なすぎて作業感覚が否めねえ。おまえら木偶人形か？　それとも家畜かぁ？　これじゃあ肉を加工しているのとなんら変わらねえじゃねえか。きょうび、野生の鹿やイノシシだってもうちょい歯ごたえあるぜ。おら、てめえで最後だ。せめてもうちょい人様のプライドってやつを見せやがれ」

「お、おのれ！」

ただ一人生き残っていた軽鎧の男が下に向けていたクロスボウを掲げ、エグセイユの首に狙いをつけた。エグセイユが固定されている矢に、次いで引き金にかけられている人差し指に目を細めた。

鋭利な先端がきらりと光った刹那、指が動いた。装填されていた矢が連続して射出された。空気を鋭く切る音が四回。遅れて金属の摩擦音が四回鳴った。エグレイユは真っ直ぐに向かってくる矢を見て、ブンと男の方に切先を向けた。跳ね上がった血飛沫が飛んでくる矢の先端に付着し、弾かれた。

エグセイユはほとんど腕を動かさずに柔軟な手首だけで剣を振り、放たれた四本の矢を後ろに逸らしていた。エグセイユの背後にある壁に四本の鉄矢が到達し、次々と地に横たわった。団扇でも仰ぐかのようなその扱いに男が愕然とした。まともに叩き落とすよりもずっと困難なことを、目の前の男は平然とやってのけた。

「一箇所しか狙わないたぁ、舐めてるのかぁ？」
敵の言葉に促され、慌てて弩の男が新たな矢を装填するべく腰の矢筒に伸ばした時には、体にエグセイユの剣が深々と潜り込んでいた。矢筒にまで手が届くことを許さぬ、恐るべき早業だった。鎖骨の辺りから入り、肩あての留め具と胸当ての一部を切断、脇から剣が抜けた。左肩から指先までが斜めにずれ落ち、赤黒い肉と肩甲骨の切断面が現れた。弩の男は断末魔すら上げず、一度大きくひゃっくりし、そのまま硬直した。
エグセイユはつまらなそうに溜め息を吐きながら空いている左手で男の胸を押すと、男はそのままぐらりと後ろに倒れ込んだ。床がみるみる赤い領域を広げていき、他の者らの遺体にそっと触れた。

「痛みを感じる間も与えないとは、いやはや腕を上げたものです」
唐突に背後から勝算の声がかけられ、パンパンと柏手の音が鳴った。エグセイユは動揺することなしに窘めの言葉を口にした。
「レイヴの旦那、人に近づくときは足音くらい立てるのが礼儀だぜ。じゃねえと、斬っちまうぞ」
パキリ、と鉄矢を踏み折る音がした。灰色の壁に囲まれた部屋の隅には森族の男がいた。灰青（アッシュ・ブルー）の髪を真ん中で分けてボブにし、エグセイユと同じような青い外套を纏っていた。一見すると貴族の優男と言って差し支えない面構えであるが、目には底知れぬ闇を宿していた。
片手には細身の体躯にいかにもしっくりくる釣り竿のように細い剣（サーベル）が握られている。こちらの剣身もエグセイユの剣同様血に染まっていたが、男が白い布を取り出して血を拭った後も、その色は深い赤を湛えたままだった。
「すみませんね、幼少からの癖でしてもうどうにも、直しようがないんですよ」
反省の言葉を口にしたが言葉だけだった。誠意のかけらも感じられなかった。

そんなレイヴを無視し、エグセイユが溜息を吐きだした。
「んで、物はあったのかよ」
「いえ、残念ながら。もう少し奥の方にいってみますか」

ああそうだな、と言いかけたエグセイユがはてと首を傾げた。次いで部屋をぐるりと見回し――
「――バクラのやつがいねえな、どこいった」そう言った。一種に来ていたはずの巨漢の傭兵の姿が消えていた。
「あぁ、彼ならさっきお腹に人が通れそうなくらいの風穴をあけられてしまいまして。女だと侮って油断するからそういうことになる」
「ハァー!?　何やってるんだあいつ使えねえ。筋肉ばっかり鍛え過ぎて頭わいてるんじゃねえのか、ってかいっぺん死ね」
「いや、だからもう死んでいますって。一応仇は討っておきましたがね」
死んだ仲間に対するものとは思えぬ台詞にレイヴは苦笑しつつ突っ込みを入れた。そうしている間に剣を鞘に収めていた。
「――本当に、女にやられたのか？」
「おや、私を疑っているんですか？」
じと目を送ったエグセイユに、レイヴは心外だというように大仰に肩をすくめた。
疑うに足る理由は充分にあった。エグセイユが知っているだけでもレイヴは過去にも言動が気に食わないという理由で同僚二人を戦のどさくさに紛れて殺害している。しかもそのうちの一人はエグセイユの目の前でのことだ。敵と鍔迫り合いをしていたミスティミストの傭兵を敵毎背中から刺し貫いた。
見下げ果てたことに、レイヴは敵と味方二人分の賞金を手に入れ、それを賭け事（ルーレット）につぎ込んで一週間も経たぬうちにスッてしまった。
数千万パーズはくだらない金を。
「目の上のたんこぶにもなれない小物をいちいち殺す理由がありませんよ。相手があのテクラ・エモンですから致し方ないところでは

あります」
　その名はエグセイユも知っていた。元セーニアの上級貴族であり、現在は様々な犯罪をやらかして逃走中の高額賞金首。名うての風魔道士としてそれなりに名が知れている。

「なんだよ、そっちに有名どころがいたのか、羨ましいこった。こっちは歯応えないやつばかりで面白くもなんともねぇ」
　暗に強者と戦いたいというエグセイユに、レイヴは小さく笑う。
「賞金首たる彼女がいたことで、今までわからなかったルクセン教の全貌が見えてきました。蓋を開けてみればいやはや、とんだ犯罪者集団だったようですね」
「はっ、どんなやつがこようが剣の錆にしてやるさ。たとえあんたであろうとな」
「剛毅なことですね。なんなら、ひとつ試してみますか」
「もし本心で言っているってんなら、相手になってやらんこともないぜ」
　エグセイユが鋭利な眼差しを突きつけ、レイヴはにやにやしながらそれを受け止めた。
「ほんの冗談ですよ、一日に二人もやったらマスターにお仕置きされちゃいそうですし」
「……やっぱりてめえがバクラをやったんじゃねえのか」
「ああ、いえ、そういうわけではなくて。ほら、私がやっていないにしても思いきり疑われちゃいそうじゃないですか。さっきのあなたみたいに」
「……こういうところに日頃の行いの差って出るよなあ」
「うわぁ、それ傷つく台詞ですねぇ。もとい、それが原因で前のギルドを追放されたあなたにだけは言われたくない台詞ですねぇ」
　ははっと乾いた笑いを交わし合った瞬間、お互いの目が据わり、笑みがすっと退いた。刹那、二十歩分はあった距離を一瞬で詰めて

いた。刀身の長さはほぼ同じ。間合いに入るや否や、澄んだ音が大きく一度、続いて連なるように部屋に鳴り響いた。

橙色の火花が二人の間に幾度となく散乱した。ヒュッヒュッと、短い呼気の音が断続的に響き、それに倍する剣撃が交わされていた。十人分の剣を二人が一度に振るっているようだった。剣速が速過ぎて刀身の方は目で追い切れず、二人を隔てる空間に幾つもの影が交差する。驚愕すべきことに、その剣劇の全てが軸足を固定したままなされていた。

「相変わらず迅えなぁ、その居合いだけは真似できねーわ」

腕を休めることなく、エグセイユが呆れたように言った。

「そんなこと言ってると居合い以外は真似できるように聞こえてしまいますよ」

涼しい顔を保ったまま、レイヴが笑う。

「もう居合いくらいしか見習うところがねえんだ、よ！」

エグセイユの斬撃が勢いを増し、段々とテンポが速くなっていった。火花の量が更に増すとともに鋼と鋼が相打ち、擦れ合い、多種多様な音を奏でる。一方が突きをいなせば、もう一方がカウンターで繰り出された薙ぎ払いを切り払う。そうかと思うと下から股間に伸びてくるのを上から抑え付けるように剣を返して受け止める。

エグセイユの標準的な長剣に対し、レイヴの剣はまるで竹のようにしなっていた。傍から見れば三日月刀（シミター）で切り結んでいるように見えただろう。剣が細身でも折れないのはひとえに金属の質と腕の質、双方が高いレベルで維持されていてこそなせる業だ。

「おいてめえ、今のは本気で殺すつもりだっただろ」

「おかしいですねぇ、きっちり縦に真っ二つにするつもりだったんですが。剣速も大分肉薄してきましたねぇ」

「肉薄だぁ？　まるで今でも自分が上みたいな言い方だなぁ。あんまり調子こいてると三枚に下ろしちまうぞこら」

「口汚い後輩ですねえ、強がるのは構わないですが、あなたが三回剣を振る間に私は五回振れますよ」
「はん、なら俺は六回だ。しかも針に糸を通す正確さでな」
「ほほぅ、それなら私は――と、どうやらここまでのようですね。お客さんがお待ちのようですし」
「客だぁ？　――ちっ」

側面から殺気を感じ、鍔迫り合いを続けていた二人が横に振り向きざま飛んで来たものを切り上げ、上に弾き飛ばした。くるくると回転しながら高々と打ち上げられ、天井に突き刺さって動きを止めた。斬るための刃がついていない、刺突専用の投擲ナイフが小刻みに揺れていた。
「ふむ、なかなかの精度ですね。今度の敵は油断できないかな？」
「不意打ちなんてちゃちい真似してねえでとっとと出てこいや。俺はこそこそ遠くから攻撃するやつが嫌いなんだよ」
エグセイユが通路の暗がりを睨むと、二つの人影が薄らと現れた。

「だってよ、ピエール。よかったな、あんなやつに好かれなくて」
「……別に無理して嫌われたいとも思わねぇけどなぁ。っていうか、初っ端から修羅場とかなんのイジメだよ」
そんな言葉を交わしながら物影から出てきたのは、黒い大鎌を抱えた黒衣の男と白い剣を抱えた赤髪の男。シュイ・エルクンドとピエール・レオーネだった。

こつと踵を鳴らし、シュイとピエールが部屋に歩を進めた。それにつれて血の臭いが濃くなった。室内には等間隔に天井に埋め込まれた傘型の照明石が光を放ち、床を濡らした血溜まりに煌きを与えている。

ほとんど正方形の部屋の奥には通路がひとつ。向かって左側にもひとつ。通常、この部屋に至るまでの経路は奥の通路から進んでくるのだが、シュイはイヴァンたちの案内を経て裏口から施設へと進入していた。

「……灰青髪（アッシュ・ブルー）に紅蓮の細剣、おまえがレイヴ・グラガンか」

「いかにも。その黒衣はいまやあなたの代名詞ですね、シュイ・エルクンド。それから、お隣は確かピエール・レオーネでしたか、お会いできて光栄ですよ」

レイヴは剣を収めるとまるで親しい商談相手を歓迎するかのように両腕を横に広げてみせた。二重瞼と手入れの行き届いた細い眉が印象的だが、それらに縁取られた目は仄暗く、月の無い夜の泥溜まりのように濁っている。

男の名はミスティミストの中においてもかなり有名だ。レイヴ・グラガン。元々は暗殺家業に精を出していた賞金首であり、シュイと同じく付与魔法の使い手でもある。

故あってセーニアに目標を絞っているイヴァンとは違い、どこからでも無秩序に、金のためだけに仕事を請け負う殺しの職人。毎朝の走り込みの代わりに人を殺めてきたような彼だが、五年ほど前にルクスプテロンの大臣暗殺に失敗してフラムハートに目をつけられ、やむなくミスティミストへと逃亡を計ったそうだ。そんな重犯罪者をあっさりと受け入れてしまうミスティミストの懐の深さには別の意味で感心してしまう。

技量、身体能力双方ともに優れており、しなる細剣を駆使した剣術は攻撃範囲が広く、変幻自在と聞いている。付与魔法と絡めれば尚のことたちが悪いだろう。

「多方面でのご活躍振りはかねがね伺っておりますよ。ですが、支部長自らこんな辺鄙なところにおいでになるとは少々意外ですね。もしやシルフィールはセーニアに敵対する心づもりですか」

探るような目付きで、レイヴはシュイのフードの闇を窺った。

「残念ながら、自主的参加のみを許されている状態でね。ここにいるのは成り行きと私情が半々と言ったところかな」

「ふむ、まぁそんな落とし所でしょうねぇ」

相槌を打ちながらもレイヴの手は迅速に動いていた。唐突な居合いから生じた衝撃波がシュイとピエールに迫ったが、二人とも微動だにしなかった。風を切る音が二人の間を抜けて、その後ろ、格子模様の壁に細い亀裂を生じさせた。

「――なるほど、反応は上々」

レイヴが納得したように呟いた。目測で避ける必要なしと一瞬で判断した二人への、ささやかな称賛だった。

「それにしても、本当によろしいんですか？　ジヴーの軍に加わっているというならいざ知らず、ルクセン教に勝手に加わったりなんかして。散々動き回った挙句に私たちと揉めたことが明るみになればセーニアも黙ってはいないでしょうし、後でそちらのギルドからどんなお咎めがあるかわかりませんよ？　まぁ、無用な敵を作って困るのはお互い様ですけれど」

「確かに、何らかの沙汰が下されるかも知れないな。そちらがそんな決着のつけ方で満足ならば、の話だが」

シュイが淡々とそう言った。内心そこまで割り切っているわけではなく、はったりも多分に含まれていた。名のある傭兵が告げ口をするような真似をするのは気が進まぬだろう。そんな心理を見越して探りを入れたといったところか。

ルクセン教の申し出にしてもセーニア軍の目的妨害にはなっているのだから、一連の騒動と関連していないわけでもない。イヴァンたちがジヴー軍に加われば戦力の増強は言うに及ばず、検討を諦めていた作戦も立案できるかも知れない。半面、弊害も未知数なところであるのは否定しない。

「安心しな、明日も一週間後も一カ月後も、もちろん来年もおまえらには来ねえ、心配することすら無意味だ。――レイヴ、あんたはその黒いのをやれ」

目にかかった青髪を掻き上げるエグセイユに、レイヴは微かに眉をひそめた。

「黒いの……ってどっちです」

「色黒の方だ。俺はエルクンドの方に用が――」

「――ピエール、グラガンの相手は俺がするからスキーラを頼む」

予想外の言葉にエグセイユが「ああん!?」とがなり立て、ピエールが眉を上げた。シュイに近しい者であれば、以前のシュイとエグセイユとの一悶着を知らぬ者はいない。ピエールにしても因縁の相手との決着を差し置いてレイヴと戦うと言い出したことが意外に思えたようだ。

「いいのか？　あいつとおまえって昔色々あったんだろ？」

まぁな、と肩をすくめつつシュイが言葉を続ける。

「ただ、現状気にするべきことは他にいくらでもある。最優先に考えるべきは驚異の排除。くだらん過去のいさかいなど気にしちゃいられないさ。あの騒動があればこそわかったこともあるし、色々な出会いがあったと言えなくもないからな。正直、スキーラの存在なんか今日こうして出会うまで忘れていたくらいだ」

最後の言葉だけより声を大きくしたシュイに、ピエールはまだ根に持っているんじゃないか、と疑わしげな顔をした。前を見ればエグセイユが胸の前で忌々しそうに手を合わせ、指をこきこきと鳴らしていた。

シュイはそれを気にせぬよう装いながらも言葉を続けた。
「――腕力は負けるがスピードならおまえより自信がある。グラガンも剣速がご自慢のようだし俺の方が噛み合うだろ」
「そっか、おまえがそれでいいってんなら俺は異存ないけど」
ふむ、とレイヴが顎に手を当てた。一方のエグセイユは思いきり不快げな表情だった。熱烈なラヴコールを袖にされて顔をひくつかせている。
「何を勝手に決めてやがるんだ！　てめえ、そんなに俺が怖いのかぁ！」
熱気を帯びた侮蔑を放つエグセイユに、シュイは冷ややかに言葉を返す。
「それは、お隣（グラガン）の御仁より自分の方が実力が上だと思っているからこその台詞だよな？」

ぴくり、とレイヴの尖った耳が動き、エグセイユの表情があからさまに曇った。巷ではレイヴ・グラガンの腕前はミスティミストの中でもかなり上位の評価であり、シルフィールで言えばランカー級と目されている。その彼を選んだことで臆病者呼ばわりするならば、レイヴの実力を自分より少なく見積もっているのではないか。シュイは揶揄を込めてそう意趣返しする。
上級傭兵で自分自信の実力に信を置いていないものなどいない。ましてや、無駄にプライドの高いエグセイユからすれば他者より下であると認める発言など口が裂けてもできないだろう。かといって、あまりに軽率な返答をすればレイヴの面子を潰すことになる。ミスティ・ミストは仲間殺しでも有名なギルドだ。後に禍根となるようなことを、本当にそんなものが存在するかどうかは今回の戦い如何だが、残したくはないだろう。シュイはそうと相手の心理を洞察していた。半ば、からかう心づもりもあった。

レイヴは興味深そうにそのやり取りを見守っていた。その視線に

晒されつつ、エグセイユは数瞬で一つの答えを見出した。
「――そりゃあ、相手がどちらだろうと同じ結果になるだろうさ。ただ俺は残虐なことで有名だからな、なぶり殺しにされるんじゃないかと考えたんだろう」
　完璧な切り返しだ、と満足げに顎をしゃくったエグセイユに、シュイは溜息交じりに落第点をつけた。
「そんな備考（オプション）がついていたとは知らなんだ。自らの救えない性格を赤裸々に告白するとは意外だったが、生憎と俺は神父じゃないんだ」
　レイヴが口元に手をやり、笑うのを堪えるような仕草をする。その隣でエグセイユは三年前のように顔を真っ赤に染めていた。突き放した上で、シュイは背筋を伸ばして鎌を掲げ、高らかに言い放つ。
「ミスティミストの雄レイヴ・グラガン、シルフィールのシュイ・エルクンドがお相手仕る。返答や如何（いかん）？」
「てめえっ、まだ話は――」
「控えなさい、エグセイユ。私が意志を示す前に口を挟む権利などあなたにはない」
　語気を強めたレイヴにエグセイユが唸り声を発し、未練がましくシュイを睨みつけた。
「あんまりピエールを侮っていると痛い目見るぜ。準ランカーを張っている実力は飾りじゃないからな」
　腰に手を当ててそう言ってのけたシュイに、ピエールが複雑そうな顔をした。
「っておいおーい、あんまりプレッシャーかけてくれるなよ。やつは三年前の時点でBランクだったんだぞ、流石に勝てるって断言する自信はねぇ」
「毎日の地道な積み重ねに勝るものはそうないさ。自信はなくとも構わないから、おまえを準ランカーに抜擢した傭兵たちの目を信じろ。その中にあのエヴラールが入っていることも忘れずにな」
　人を見る目に厳しいと評判のエヴラール直々の推薦昇進である。その重みはピエールにとって決して軽いものではないはずだ。まし

てや、命令に反してここにきているのだからこんなところで倒れるわけにはいかないだろう。
　様々な物を言い含めたシュイに、ピエールは頬を掻いた。
「……なんだかおまえ、人を持ち上げるのが巧みになったなぁ」
「褒めて煽てて宥めて……落とす。アミナ様から賜ったありがたい教えだ」
　最後絶対間違えてねえか、というピエールのぼやきを無視し、シュイはレイヴとエグセイユを交互に見た。
「で、そちらの方針は決まったか？」
「――いいでしょう。本音を言えばどちらが相手でも構わないのですが、あなたと違って名指しで挑まれて断れるほど軽いプライドは持っていませんのでね。こんな窮屈な場所で二対二で戦うのもあれですし、我々は場所を変えましょうか」
　シュイを貶めてエグセイユの溜飲を抑えつつも了承を示唆したレイヴの見事な口上に、シュイは怒るよりも感心した。

エグセイユとピエールをその場に残し、レイヴとシュイが廊下を闊歩する。人が十人くらいは並んで歩けるだろう広い通路。床にはサッシの溝のような物が二本、平行に奥に向かって続いている。だが、それが何のために設けられたのかまではわからない。

敵の後ろを歩くというのは妙な気分だった。レイヴの頭の高さは自分と同じくらい。その後ろ姿からは敵意が感じ取れず、両脇に手を添えて静々と歩いている。いつ斬りかかってこられても応戦できるよう鎌は背から外していたが、仕掛けてくる様子はついぞ見受けられない。逆に、背後から斬りかかって相手が反応できるのかすら疑わしい。そう思えてしまうほどに無警戒感が漂う。それは不意を突かれても対処できるという自信の裏返しか、あるいは敵である自分に対する信頼なのか。

「この先にホールのように開けた場所があります。まぁいくつか死体も転がっていますが、そこなら我々の戦いの場となりうるでしょう」

互いに迅さを信条とする者同士、狭いスペースでは持ち味を活かしきることはできない。それはシュイにもわかっていたが、およそ殺し屋とは思えぬ台詞が気になった。戦いの場などと言い出すとは。巷の評価からすれば戦い、殺し合いに結果以外の何かを求めるタイプではないように感じていただけに、そのギャップには戸惑いを隠せない。

シュイが思ったことをそのまま口にすると、レイヴは苦笑を返した。

「そうですね、おっしゃる通りこれは仕事の管轄外、あなたの申し出を受けた時点でね。本当なら勝算の高いピエール・レオーネと先にやるべきだった。そして、エグセイユを倒したであろうあなたと

決着をつけるべきだったのでしょう。忠実に仕事をこなすならば、の話ですが」

全てを飲み込んだ上で、シュイとの戦いに望んだとレイヴは言う。なるほど、その時点で彼の不文律からは反していることになるのだろう。

「それをあえて曲げた理由は？」

エミド・マスキュラス。シュイの問いに対しレイヴはそう即答し、振り返った。こめかみのあたりが自然と張るのがわかった。もちろん、レイヴからは見えなかっただろうが。

「彼の者の悪名はうちのギルド（ミスティミスト）にも届いていましてね。いえば、彼に殺された傭兵たちも数多くいる。いずれも百戦錬磨の腕利きでしたが、それでも挑んだ者たちのほとんどが未帰還となった。けれども、あなたはこうして生還し、私の目の前に五体満足で立っている。――彼らとあなたの違いが何であるのか確かめてみたいと興味を抱いた、ただそれだけの話です」

――やっぱり、そうなるよなぁ。

「なにか？」

シュイの唇が微かに動いたのを認め、レイヴが小首を傾げた。

エミド・マスキュラスを倒してからというもの、周りの者たちのシュイを見る目は明らかに変わっていた。味方であれ、敵対する者であれ。敬意は言わずもがな、今までほとんど感じることができなかった嫉妬や畏怖、そして今回のような興味の視線が注がれるようになった。

同時に、ある種の期待感も。やつを倒せたのだからこれくらいはできるだろう、という憶測。史上稀な悪党を倒したシュイを倒せれば自分の武名が高まるだろう、という野心。エミド・マスキュラスという男の存在が、世界にどれほどの影響を与えていたのかを思い知るハメになった。

まぐれか否かに拘わらず、勝利という結果に対して、周りはそれと同じかそれ以上を要求する。美味しいと評判の店が、少し味が落ちただけで痛烈なバッシングを浴びせられてしまうように。周りからの称賛は大きな重圧となってのしかかってきた。

実際には五十人、途中で亡くなった者たちを除いても四十人余りでエミドに挑み、多くの犠牲を経て勝ち獲った勝利だった。それでも、エミドにとどめを刺したシュイに対する評価はより高いものとなった。

長々と戦っていたエミドの疲労は、見せなかったとはいえないはずもなかった。だが、シュイの言葉をそのまま受け取らずに謙遜と取る者も決して少なくなかった。

過大評価した彼らを落胆させぬように、とシュイは今まで以上に必死に修練に打ち込んだ。最低でもエミドと戦っていい勝負になるくらいの実力を身につけなければという強迫観念があった。エミドを倒した男がこんなものか。ならばエミドの実力も大したことはなかったのではないか。そんな方程式で貶されることが我慢ならなかった。それは回り回ってエミドと戦い、死んでいった戦友たちへの冒涜となるからだ。彼らの名誉を背負っている以上、真剣勝負で無様に負けることは許されない。

「いや、やつを引き合いに出されては負けられないな、とそう思っただけだ」

「それで構いませんよ、身を入れて戦ってくれなければ意味がない」

互いの力量がどれくらいのものか見当がついている以上、切り結べば手加減をする余裕などないだろう。決着がついた時にはどちらかが死んでいる可能性が極めて高い。

「――恨むなよ」

「――お互いに」

戦いに似つかわしくない笑みを交わした二人は、以降沈黙を守っ

たまま先へと進んだ。

――――

「ったくよぉ、何が悲しくててめえみてえな雑魚とやらなきゃいけねえんだよ、くそがっ」

エグセイユの地面を蹴りつけながらの悪罵に、ピエールはとんだとばっちりだ、と唇を曲げた。ぐちぐちねちっこいのは女だけの特権だと思っていたが、どうやら認識を改めねばならぬようだった。

「いいんじゃねぇの？　あんたが今のシュイに勝てるとも思えないし、分相応だと思うぜ」

「ああん！？　てめえ随分と大口叩いてるじゃねえか、俺の実力知ってんのか？」

人を平気で貶すやつが自分が貶されるとこうまで怒る。我儘を地でいくエグセイユを前にして、ピエールはただただ頭痛を感じた。なんというか、親戚に用事があるからと利かん坊の面倒を見るよう押しつけられたのにも似ている。

省みればシュイを支部長にするためにエヴラールに協力したことに対して、未だ根に持たれている節があった。シュイはああ言っていたものの、あるいはエグセイユを任されたのは遠まわしな嫌がらせ、もとい仕返しなのではないか。そんな思いも否めなかった。

「まぁそこはあれだ、傭兵なら傭兵らしく剣で語り合おうじゃねえか」

ピエールが頭を掻いていた手をだらりと下げ、剣に添え、鯉口を切った。一切隙のない構えにエグセイユの笑みが消えた。

「その構えは古流剣術――オーディス流ってところか？　傭兵でそれを使うやつは珍しいな」

世界には剣の流派は数多くあるが、その中でもヴィーグ流、ナクロフト流が正統派剣術として有名だ。騎士であれば免許皆伝の師につくか剣術道場に入るのが常道であるが、傭兵はそういった機会に巡り合えないことも多い。その場合は剣術指南書を読むか、達人の動きを見よう見まねで習得し、剣術を我流で組み立てることになる。エグセイユも多分に漏れず、ヴィーグ流を主軸に我流の剣術を編み出していた。

けれども、ピエールはそれで由としなかった。ホーヴィを起点としてシュイと同時期にBランク傭兵に昇格した後、船でケセルティガーノに渡り、更に剣を磨くべく古流道場の門を叩いた。

寝る間を惜しんで任務と道場通いを梯子し、その甲斐あって多種多様な剣技を習得した。二足のわらじを履いていた故に昇格は遅れたものの、免許皆伝を経てからエレグスに渡り、一年の後に準ランカーへと昇格。

これはピエールの好敵手（シュイ）に対する意地でもあった。シュイがエミド・マスキュラスを打ち倒したという話はシルフィール内でも取り沙汰され、その功績を糧に彼は準ランカーとなった。これを聞いたピエールの心には嬉しさと悔しさが去来した。どちらが上、どちらが下ということではなく、あくまで憎まれ口を叩き合える対等の関係。悪友にして戦友でありたかった。

免許皆伝の後は実戦に身を置き、多対一を旨とした剣術を磨き上げた。その結果として多くの魔物や犯罪者と相見えることになったし、決して褒められたことではないのだが、二度、三度は死にかけたこともある。そんな綱渡りの戦いを経て、得たものはあった。死線を潜り抜けるためのコツというべきものが。

シュイの指摘した通り、セーニア軍との戦いで敗走を重ね、自信を失っていたのは確かだ。だが、腐っても自分は準ランカー。シュイと同格であり、あらゆるBランク傭兵の上に席を置いている。

ピエールは自問自答する。帰りを待っているミルカのために生き残るのが最優先という思いは今も変わらない。だが、これは崩れかけた自信を取り戻すための戦い。ましてや剣を生業とする者同士。流派を背負う者としても負けは許されない。ピエールは必勝の覚悟でエグセイユとの戦いに臨んでいた。

その気迫がエグセイユにも伝わったのだろうか。

「――思ったよりは楽しめそうじゃねえか。いいだろう、敵として認めてやる」

エグセイユが血煙のついた剣を抜き放ち、アルバーの構えを取った。防御無視、切っ先を斜め下に向けた、おのれの身のこなしを信条とする超攻撃重視の型だ。それを俯瞰しながら、ピエールはシュイの言葉を思い起こす。

――三対七、か。

現時点でエミドと差しで戦ったらどうかとイヴァンに問われ、シュイが口にした自己判断。彼の慎重な性格からすればそれより高いことはあっても低いことはないだろう。何気なく発されたその言葉はピエールの心を強く揺り動かしていた。一年と少し前には五十対一で戦い、それで辛くも勝利した大敵。そんな相手に三割の勝ち目を作るのがどれほど困難なことか。

そして、それを理解していたからこそ、イヴァンはシュイに本来おのれがやるべき役割を一任した。賞金首の彼としてもここで顔を晒すのはなるべく避けたかったのだろう。

――全く、追う方の身にもなって欲しいよな。どんどん先にいっちまうからついていくのも一苦労だぜ。

そんな弱音を零すのとは裏腹に、あいつにだけは負けたくない。今に追いついてやる、といった確かな気概が心中で顔を覗かせる。ピエールの眼差しが、鍔から微かに覗く白刃にも負けぬ煌きを帯びた。

空気がピンと張り詰めていく。エグセイユが口を結び、ぐっと顎を下げる。次の瞬間、短い赤髪と長い青髪が風に踊り出していた。

遠くからの剣の交響が空気を揺り動かし、シュイたちに先んじてひとつの戦闘が始まったことを伝えた。シュイはエグセイユよりピエールの方が地力が上だと確信を持っていたわけではなかった。言動こそ腹に据えかねるが、三年前の時点でもエグセイユの力は群を抜いていた。シルフィールを脱退してからもミスティミストでの苛酷な生存競争を勝ち抜いてきたのだし、実力は更に底上げされていると考えるべきだろう。おそらくは自分が戦ったところで楽には勝たせてもらえない相手だ。

そうかといって、準ランカーにまで昇格した傭兵を過度に心配するは礼を欠く行為。シュイにとっても、ピエールは傭兵として、友人として、互いに認め合い、競い合うに足る存在だった。馴れ合いよりは叱咤激励し合うくらいがちょうどいい。死地にまで赴いたのだからこのくらいはやってみせろ。お互い、それくらいの厳しさで応じるべきだろう。

不安を吹き消したシュイはレイヴから五歩ほどの距離を置いて、つかず離れず進む。もしこの場に誰かがいれば、直ぐに違和感に気づいただろう。二人が歩いているにも拘わらず、足音は一人分しか発されていないことに。

シュイはレイヴの足元にちらりと視線を向けた。忍び足とはいうが、ネズミの足音すら聞こえてきそうな沈黙の中で、靴の擦る音すら聞こえないのは異常の一言に尽きる。床を踏みしめる直前に爪先で体重を殺しているのだ。

これは暗殺を生業としている者たちの特徴だ。イヴァン・カストラも足音を殺す歩術に長けている。標的やその護衛たちに気づかれることなく、先手を取って思惑通りに事を運ぶためだ。一度逃がした標的を再びやる機会に恵まれることはそうないし、あったとして

も護衛が増えているのは確実。より仕事が困難になる。

後に控える戦いを思うと自然と集中力が高まっていく。対人戦に関しては相手に一日の長がある。何しろ年がら年中きな臭い空気の澱に身を置いているような男だ。対イヴァン・カストラくらいに想定した方がよさそうだった。

警戒感を途切らせることなく勝つための方法を思案する。エミドにやったような方法は懲りている。偶々うまくいったからいいようなものの、後で省みればお粗末極まりない博打。命綱なしの綱渡りで相手を落とそうと取っ組み合うようなものだ。万が一にもそんな阿呆な戦い方をしたとあの二人に知られたら何を言われるかわかったものではない。最悪、滅祈歌の時のように折檻されかねない。

――しまったな、シャンに口止めしておくのを忘れていた。まぁ、アマリスやティートもいるし、仕事が忙しくて昔話どころじゃないだろうから大丈夫だろう。

無論、そこまでせねば勝算が碌々見込めぬ相手であったのだが、まずはそのような方法を取らねばならぬほどに追い詰められた準備不足を恥じるべきだろう。おのれの認識の甘さ。これだけの戦力がいればどうとでもなるだろう、と心のどこかで高を括っていたことを。この世界、常識の殻を突き破った化け物がどこにいるかわからない。エミドとの戦いはシュイの認識を改めさせた。

エミドとの戦闘時、最たる課題は捨て身に持ち込まなければならなかったことに尽きるが、そうなった一番の要因は決定力不足。誰かしら、全方位に展開する障壁のどこかを突き破れるくらいの破壊力を備えていれば、もっと被害を抑えて勝てたはずだった。

シュイ自身、持久力と瞬発力には自負があったものの、攻撃の選択肢に関しては不足を感じていた。＞怒れる霆の渦流（ボルテックス・オブ・ヒューベル）＜や＞魔を打ち払いし縛鎖（ディス・ペル・リロード）＜は強力な魔法であるが、前者は消耗が激しい上に滅

祈歌なしでの広範囲攻撃は不可。後者は使い所が限られているし純粋な戦士に効果はない。＞韻踏み越えし歩を以って＜は消耗こそ少ないが敵との接触時、体への反動、負荷が相当にかかるので短時間しかもたない。

常勝無敗。現実的にはありえぬことだが、少しでもその高みに近づく必要があった。それが使えると敵に知れたところで、対応を許さぬ攻撃を編み出さねばならなかった。

その課題を克服すべく、エミドとの戦いの傷が癒えて退院を迎えたその日から、シュイはひっそりと修行を始めていた。イメージはできていた。干渉魔法＞韻踏み越えし歩を以って＜を応用し、己の持ち味である魔力の制御能力を存分に活かし、敵に攻撃の隙を与えぬ神速の、自分への負荷を最小限に押さえた攻撃。与えられた条件と制限を検証し、試行錯誤の上に確立した攻撃特化の継続戦闘体型を。

T字路を右折し、目の前に表れた二十段ほどの階段を上ると、本格的な修練場くらいはありそうなスペースに出た。レイヴが前もって言っていたように、そこには数十人からなる遺体が転がっていた。その所在は様々なようで、ローブを身につけている者もいれば赤い鎧に身を包んでいる者もいた。セーニア騎士、ルクセン教徒、そしてミスティミストの傭兵たちが。

血の臭いはあまり感じられない。慣れていたというわけではなく、流れ出た血の表面が白い霜に覆われていた。凍結しかけていたのだ。

ホールには今までと同じように外窓はなかったが、中央部分は地上へと繋がる通風口になっていた。天蓋にはぽっかりと大きな穴が空き、数多の星屑がちらちらと瞬いていた。

空から吹き下ろす砂漠の夜風は衣服を貫き肌に突き刺さる。二人の吐く息が次第に白くなっていった。喉に痺れと清涼さを伴う空気

をひとしきり取り込むと、シュイは歩いていくレイヴを前にして立ち止まる。少しして、レイヴがシュイに振り返り、その手を腰の細剣にかけた。自然と肌が泡立つのを感じた。やはり楽には勝たせてくれそうになかった。

「さて、お手並み拝見といきましょうか」

薄く笑うレイヴの表情に嫌味は感じられない。純粋な好奇心か。はたまた強敵との力比べに喜びを見出しているのか。

「ご期待に添えるよう最善を尽くそう」

らしくない言葉を発した自分に戸惑いを覚えるのと同時に、胸が躍っていることに気づいた。苦心の末に編み出した術式が、果たしてエミド以来となる難敵に通用するのか。不安と期待の摩擦熱が血の巡りを速めてゆく。

依頼の最中にこのような感覚に陥ったことはなかった。これは歓(よろこ)びなのか。その疑問がすとんとシュイの心中に落ちた。底についた時には明解となっていた。おのれの心が『そうだ』と告げた。

「ふふ、流石に……独特の雰囲気をお持ちですね」

舞の型のように、滑らかな動きで鎌を掲げたシュイに、レイヴが小さく肩を震わせた。武者震いだ。自分が目の前の男に怖れを抱いているように、レイヴも自分に脅威を感じているのだ。

――怯むな、焦るな。実力差はほとんどない。

ひゅうひゅうと、頭上からの風がシュイの黒衣を、レイヴの青衣を揺らす。ほぼ同時に、自然体の二人がゆっくりと、お互いに向かって歩き出した。一歩、二歩。

――三歩目。レイヴの口元から白い靄が発されなかった。

突と視界から煙のように消えたレイヴに反応し、シュイの足が右方向に踏み出された。二人が武器を構えながらも左右に円軌道をな

ぞりながら疾走する。
レイヴが剣に添えていない方の手で魔印を紡ぐ。一方で、シュイが口ずさむのは付与詠唱。
恐るべき速度で、剣に添えられていたレイヴの手が天へと向けられた。鞘の中を走り、柳のようにしなった細剣の剣刃に＞水禍（アクア・リロード）で杯を満たせ＜の水流が絡みつく。
間断なく、レイヴの手が薙ぎ払われる。と同時に、水の鞭が地面すれすれに滑る。その動きをシュイの目が確かに捉える。足首を捉えられる直前に両足を一瞬浮かせて回避。
シュイの足元を通過した水の鞭に、引き戻されたレイヴの手首が新たな動きを与えた。伸び切った水の鞭が一瞬の停止を経て反転。シュイの首元目掛けて跳ね上がる。頭を一つ分下げて側面からの一撃を躱したシュイが低い体勢のまま二歩にしてレイヴとの距離を潰す。肩が上がり、がら空きになっていたレイヴの脇腹に鎌の柄を突き出した。
その時にはレイヴが次の動作に移行していた。シュイの頭の上を通過した水流を切り離し、新たに生じた水流が下方からシュイの鎌に巻き付き、鎖のように絡め取って突きの勢いを殺す。それに動じることなく、シュイは詠唱していた＞絡みつくは雷の蛇（ライトニング・リロード）＜を発動。付与魔法で生じた電撃が水流を遡り、レイヴの手元へと迫る。
状況を即断したレイヴが更なる行動に出た。雷が手に届く寸前、おのれの細剣を手放して半回転、シュイとの間合いを詰め、その胸元に右手を伸ばす。
――掌底！
威力を増幅すべく踏み出されたレイヴの左足に体重が伝わる寸前、シュイの右足がその足を内側に刈る。充分な踏み込みを許されずに威力を減衰された掌底打が、それでもシュイの身体を突き上げた。後方へと飛ばされる慣性に逆らわず、シュイがレイヴに伸ばした手を向ける。シュイの腕に力が込められるのを、握られている黒い柄

を見止め、レイヴの顔色が変わった。間一髪、首を傾けたレイヴの耳を掠めつつ後ろに回り込んでいた鎌刃が通過。切り裂かれた灰青（アッシュブルー）の髪が何本か、ひらりひらりと風に舞う。

水の鎖が解け、無数の雫となっていた水に混じっていた紅蓮の細剣にレイヴの手がすっと伸びる。柄が握り込まれると同時にシュイが両脚で地面に着地。宙にあった水が一斉に床に降り注いだ。僅かな時間に練り込まれた攻防が双方に鳥肌を立たせる。

「ふぅ、危ないですねぇ。まったく油断も隙もない」

そういう割に動揺も見せぬレイヴに、シュイは打たれた胸を擦りながら応じる。

「いっつぅ、……お互い様だ。あっさり得物を手放すとは、やっぱり体術も一流か」

歩き方からして武器に頼るだけの武芸者でないことはわかっていたが、斬り合いの真っ最中に武器を手放すことなど並大抵の胆力ではできるはずもない。綱渡りのようなやり取りに重い溜息が落ちた。

「あなたこそ、踏み込みの威力を殺した一瞬の判断は称賛に値しますよ。やはり、生半な方法ではやられてくれそうにないですね」

レイヴが細剣のしなりを確認するように、ひゅっひゅと空を切る。

「――では、もうひとつ上の世界へ、いってみましょうか」

レイヴが一度大きく息を吸い、詠唱を始める。

「＞蒼き雷を納むるは涅色（くりいろ）の胸奥（きょうおう）　世に渦巻く汚濁に其（そ）の悲憤慷慨（ひふんこうがい）を吐き出さん＜」

シュイがその詠唱に耳を疑う。レイヴが行使しようとしているのはまさしく＞怒れる霆（ボルテックス・オブ・ヒューベル）の渦流＜の詠唱。解放（リリース）された魔力により創造（クリエイト）された黒雲が一気に空に広がっていき、万雷がレイヴの手元に収束する。蒼雷を纏った紅蓮の細剣が中間色の紫電に覆われた。

レイヴはゆっくりと手首を返し、そのまま剣を引いた。紫電を纏

っている剣が一度パチンと大きく音を立て、膨大な量の雷ごと鞘口に呑み込まれた。さしものシュイもありえぬ光景に息を飲む。

「――その鞘は一体」

「魔力を寄せつけぬ金属であつらえた特注品です、あげませんよ」

レイヴが悪戯っぽく片目を瞑りながらも低く腰を落とし、肩を見せつけるように半身になる。居合いの構え。いつでも抜き放てるようにか、だらりと下げられた五指の関節は軽く曲げられている。＞怒れる霆の渦流（ボルテックス・オブ・ヒューベル）＜の雷を駆使した抜剣術。居合だけでも堅い壁に亀裂を入れたくらいだ。直撃すればさぞかし楽に死ねることだろう。

――そのはずなのに。

死を間近に突きつけられているはずなのに、口が勝手に笑みを形作る。乱れ飛ぶ刃に身を晒す、ひりつくようなスリル。全く予測のつかぬ相手の攻撃が、酷く楽しかった。

～血戦　ｂａｔｔｌｅ　ａｇａｉｎｓｔ　ａｄｖｅｒｓｉｔｙ６～

シュイと対峙するレイヴの表情がぐっと引き締められた。先ほどまで浮かべていた笑みなど欠片もない。ベルトに括りつけられた黒い鞘が細かく律動している。鞘の力を借りているとはいえ、＞怒れる霆（ボルテッ クス・オブ・ヒューベル）の渦流＜の制御は決して楽ではないのだろう。裏を返せば、先ほどまでとはレベルが違う攻撃が飛んでくるということを意味する。

首筋に痺れを感じながらも、シュイが差し迫る脅威を取り除かんと祈歌を紡ぎ始める。それを妨害するべくレイヴが肩を屈め、足に力を込めて前へと突出。空いている方の手で腰に下げていた鞘を微かに傾け、抜き易い形を取る。

みるみる内に視界を席巻する黒衣の男に向けて、死の顎が解き放たれた。蛇のようにくねった紅蓮の刀身が振り切られ、シュイに向かって真っ直ぐに伸びる。

未だ二十歩分ほどの距離はあったが、鞘に納められていた雷が切っ先に引っ張られるのがシュイの目に映った。瞬きする間に、シュイがおのれの勘を頼りに身を翻した。

まさしく閃光が目を焼いた。先ほどまで自分がいたその場所を、紫電で象られた竜の顎が光とともに牙を剥いて通り過ぎ、背後にあった分厚い壁をケーキに蝋燭を突き立てたかのように貫く。

息を吐く間も与えず、剣柄を握るレイヴの手が左右に動く。レイヴの手首の動きに着目し、未来に描かれる竜の軌道をいち早く読み切る。真上に高々と跳躍すると同時に外壁を貫いたままの竜の胴が横に軌道を変え、両足の下を横切った。後ろで壁が斬り裂かれる掘削音が響く。

「――上に逃げるとは少し軽率では？」

荒い息ごと言葉を発したレイヴが肘を畳み、斜め上に向かって柄

を振り上げた。紫電の竜の胴体が大きくくねり、逆方向のシュイへと跳ね上がる。

間近に迫る雷に震える胸を抑え、ポケットに忍ばせていた手を取り出した。後ろ手に向けた直後、握られていた風魔石が発動。後方から発せられた衝撃波に煽られ、滞空箇所が体一つ分ずれる。遅れて雷竜が上空へと突っ切った。

シュイの体が目を見開いたレイヴに向かって加速し、水面（みなも）を滑る水鳥のように低空着陸。勢いを殺すことなく軽快なステップを刻み、レイヴとの距離を縮めてゆく。

掲げられていたレイヴの腕が振り下ろされるのが見えた。空に向かって伸びていた竜が再び地上へ舞い戻る。床に映る柱のような太い影が色濃さを増した。上空からのしかかってくる竜を横っ跳びして回避。竜の頭から尾までが地面を穿ち、地に潜り込む。

更にレイヴが切り上げの動作を取る。シュイが瞬時に反転して真下からの攻撃をやり過ごす。Ｖ字に抉られた床が膝上の高さにまで浮かび上がった。

そこでシュイの詠唱が結ばれ、＞魔（ディスペル・リロード）を打ち払いし縛鎖＜が発動。鎌がレイヴの雷と同じ紫色の鎖に覆われる。

即座に、レイヴの手首が返された。シュイが迫る竜に鎌を掲げようとした瞬間、その細長い体がするりと鎌から遠ざかった。

舌打ちを禁じ得ぬシュイに、レイヴが微かに腰を起こす。

「やはり。最低限それくらいは覚えていないとエミド・マスキュラス相手に勝つことなどできませんよね」

「こちらの手の内もお見通しか、まいったな」

＞魔（ディスペル・リロード）を打ち払いし縛鎖＜は付与した武器で魔法に触れなければその効果は打ち崩せない。それが使えることを理解した上での選択、その特性を把握した戦術。瞬時に攻略法を組み替える柔軟さは経験豊富な傭兵ならではといったところか。

ややあって、レイヴの手の動きが激しくなる。無数の虚に実の一

撃を折り混ぜるべく、紫電の竜がホール内を蹂躙する。＞魔を打ち払いし縛鎖（ディスペル・リロード）＜の付与された鎌に触れず、必殺の一撃を叩きこむべく。

縦横無尽に荒れ狂う竜が壁を、床を、次々に傷つけ、瓦礫と変えていく。更には、あちらこちらにある遺体をみるみる内に雷で焦げつかせ、損壊していく。破片や肉片が飛び交うのを尻目に、シュイがレイヴに問いかける。

「それで、この雷はいつまで維持できるんだ？」

おのれの得意としている魔法だからこそわかる。＞怒れる霆の渦流（ボルテックス・オブ・ヒューレベル）＜の魔力の消耗は並大抵のものではない。形状変化して放電を最小限に抑えているとはいえ、持続時間には限界があるはずだ。

「そうですね、あと数時間くらい、といったところでしょうか」

思いもよらぬ返答にシュイが肩を震わせた。仮にそれが本当だとすれば、魔力の潜在量に関しては相手に絶対的なアドバンテージがある。長期戦に持ち込まれれば敗北確定だ。

「なんちゃって。……いやですねぇ、あなたほどの方がこんなあからさまな嘘信じないでくださいよ」

剣を振るう手を休めることなくレイヴが苦笑する。

「……ふん、動揺しているように見せるのも駆け引きのうちさ、覚えておけ」

――嘘です、ごめんなさい、めっちゃ信じ込んでました。

後ろめたさを噛み殺し、シュイがにやりと笑う。笑みが引きつってなかっただろうかと気を揉みつつ。と、おもむろにレイヴが雷を解除した。

――なんだ、限界が来たのか？

首を傾げるシュイの意図したことがわかったのだろう。レイヴがふっと鼻で笑う。

「ご心配なく。硬直状態の緊張感を愉しむのも悪くはありませんが、もっと色々試してみたいこともありますからね。これだけで消耗するのはもったいない」

相手の言動にシュイの顔が仏頂面を作る。
「試してみたいこと、ね。さながら俺はまな板の上の鯉ってところか」
どのような調味料を浴びせられ、どのような形に切り揃えられるのか、調理される自分（さかな）としては不安にもなる。
「並の相手にしか通用しない戦術に意味はありませんからね。あなたを倒せるくらいであれば末長く使えそうですが」
仕事外といいつつも、後々のことを考える辺り余裕のほどが窺える。一方こちらはといえば先ほどから当たれば必死、受けても無事では済まぬ攻撃に肝を冷やすばかりだ。相手のペースに乗せられていたらそう遠くない内に肉片にされることだろう。
――長期戦はこちらに不利。……仕方ない。
シュイが心中に呟きを落とし、＞魔を打ち払いし縛鎖（ディスペル・リロード）＜を解除する。そこで、レイヴの顔に初めて戸惑いの色が浮かんだ。
「ふむ、直ぐに解呪するとはちょっと予想外でしたね」
「これも＞怒れる霆の渦流（ボルテックス・オブ・ヒューベル）＜に負けず劣らず消耗が大きいんでね、奥の手を使わせてもらうことにするよ。もっとも、実戦で使うのは初めてだが」
「ほほぅ、エミド・マスキュラスにすら使わなかった切り札があると？　実に興味深いですね」
続いては嬉々とした眼差しを向けてくるレイヴにシュイは頭を掻いた。自分がそんなことを言われれば強がりを口にしつつ思いきり冷や汗をかいていることだろう。
「まさか、その時点では使えなかっただけさ。つい先日、完成させたばかりなんでね」
「つまりは彼を打ち果たした時にも勝る必殺技というわけですか。素晴らしい、血が沸き立ちますよ」
「本格的にやり合う前にひとつ聞いていいか。セーニアの騎士たちは一体何を求めてここにきたんだ。どこからここの情報を得た」

「これまた異なことを、連中が一介の傭兵に、ましてや信用（ミステ）の置けぬ傭兵（イミスト）集団にその胸の内を晒すとお思いですか？」
「――それもそうか」
シュイが肩をすくめた。隠蔽、秘匿。事実を捻じ曲げるのはセーニアの十八番だ。何しろ虐殺と内乱とを入れ替えて周知させてしまうくらいなのだ。もちろん、聞かれたところでそれを話す義理もあちらにはないのだが。

「ふむ、その切り札とやらにはかなり自信をお持ちのようだ。それも、私を即刻物言わぬ屍にしかねないほどの」
相手を死に追いやりかねぬ一撃を繰り出す前に話を聞いておきたいのだろう。そうとレイヴが邪推する。
「過大評価は御免被るよ。まぁ、過激な技であることに違いはないが。下手に温存して出せぬままやられても悔しいからな」
「ならば、私も最大の技で応じるとしましょうか。……先ほどの話、知っていることは限られていますが、教えてあげても構いませんよ。仮にあなたが勝ったとして、しかも私が言葉を喋れる状態であれば、の話ですが」
「……その言葉、忘れるなよ」
シュイは鎌を立て、空いている左手で魔印を切り、詠唱を紡ぎ始めた。

――ヴァー・テ・リオル・デ・シャヴラ・ニド・オルブス
シュイの全身を覆う魔力が可視化され、ゆらゆらと宙に立ち上る。肩へ向かって魔力の白波が迸り、肩から手指へ向かって光の帯が腕を軸に螺旋を描きながら巻きついていく。
不意に空気の流れが変化した。空からだけでなく、通路の奥からも風が吹いてくる。全方位からの風がシュイの指元に寄せ集まり、谷間を吹き抜けるような反響音が段々と高音域に向かっていく。

――フィー・クラン・ケラ・エブ・レトン・エステ・リーディオ

向かい合うレイヴもシュイの魔法の妨害をすることなく、おのれの詠唱を開始。紅蓮の剣が徐々に黒い靄のような魔力に覆われていく。失の魔法にして最高位の付与魔法、＞響き渡りし神代の弔鐘（ネル・ディスカルプ）＜。高振動を起こした数多の黒刃を自在に操り、敵を滅する攻防一体の秘術。エミド・マスキュラスの使っていた絶対防御こと＞紡がれし闇母の産繭（オフ・エライザ）＜と比肩する厄介極まりない魔法だ。並の魔法使いでは刃の形成が困難であり、特に＞創造（クリエイト）＜に長けている者のみが使えるとされる。今やその術式は口伝で継がれているのみ。使役できる刃の多さゆえに多面攻撃が可能であり、一度発動を許してしまえば＞魔を打ち払いし縛鎖（ディスペル・リロード）＜で防ぐことも叶わない。

それでも、シュイは敵の詠唱を落ち着いて聞くことができていた。リスクと引き換えに膨大な力がもたらされる滅祈歌とは違う、長きに亘る鍛錬の日々が生み出した自分だけの魔法（オリジナル・スペル）が、相手の魔法にも決してひけを取らぬことを知っていた。残る問題は完璧に制御をこなし、恐怖を振り払って戦うことができるか。

シュイの五指の先に煌く弾丸が形成され、一方でレイヴを囲い込むように菱形の黒刃が出現する。一斉に、二人から迸った魔力の奔流が地にあった瓦礫や屍を押し退けていく。

「――創世（はじまり）を告げる諷霊（ふうれい）に命ず　我に撫でられし魔譜に其の訃音（ふいん）を連ねよ」

「――黎明（れいめい）に焦がれし闇の部族よ　その衝動のままに理をも砕きし忌名（いみな）を与えん」

二人の詠唱が最終段階に入る。鬩（せめ）ぎ合う半球状の光と闇が体積を増し、接触。相反する魔力が領域を侵食し合い、互いの体に水禍のごとき凄まじい負荷をかける。その重圧に抗うかのように、前傾姿勢で踏み止まっていた二匹の獣が咆哮を発し、相対する敵の喉笛を食い千切らんと、その場に影を残して疾駆した。

～血戦 battle against adversity7～

目も眩む光の中で二つの影が交錯し、接触地点で灰色の焔が万華鏡のように散乱した。レイヴに殺到したシュイの魔弾が無数の黒刃に触れて反応。ぶつかり合う弾幕と弾幕が葡萄の房のような連鎖爆発を引き起こす。

擦れ違いざまに二人が反転、地に足がついた瞬間、思い思いの方向に飛ぶ。手を後ろに引いたシュイと、黒剣を掲げるレイヴが一定の距離を取って並走、高速移動しながらも視線を交わす。

刹那、光弾と黒刃が猛烈な速度で飛び交った。空間にて互いの弾幕が相打ち、感応し、炸裂音を奏でる。それによって生じる風圧が絡み合い、乱気流となる。次にはそこから離れた空間で、前をも上回るエネルギーの塊が飛び交っていた。

僅かな間、光と影の交錯が止む。宙へと跳躍していたレイヴがホール壁面に両足を付けて停止。眼下を横切る影に向けて剣を振りかざす。レイヴを守るように展開されていた黒刃が地上を平行するように走っているシュイに次々と襲いかかった。

黒い燕の群れを回避すべく、シュイは＞韻踏(リ)み越(ズム)えし歩を以って＜を発動させて急加速。地面に二つの足形が残されるのに一瞬遅れて、シュイのいた地面に数多の黒刃が次々と埋もれた。ローズグレイの石床が一瞬にして斬り刻まれ、サイコロ状に変わる。

その前方でシュイが走行速度を維持したまま大きく蛇行。壁を走っているレイヴを視界の端に捉え、右手に鎌を、左手に五本の光の弦を携えて壁を駆け上がる。

ほどなくシュイの手元にあった光の弦が消失し、手元に再び5つの魔弾が出現。レイヴが向かってくるシュイを迎撃するべく、黒剣を振り上げた。

その動作に反応し、先ほど地面を切り刻んだ黒刃が、積み上がっ

た瓦礫の中から颯爽と飛び出してくる。魔弾が光芒を残してレイヴに直進するも、戻ってきた黒刃に全弾が遮られる。レイヴが再び黒刃を構築しようとするが、シュイが連鎖爆発を避けるべく上方から迂回して接近。レイヴの上を取り、壁面を横に突っ切りながら右腕を伸ばして鎌を垂らす。レイヴが舌打ちひとつ残し、身を翻しつつ黒い細剣で突きを繰り出す。

二つの刃が真っ向から打ち合わされることはなかった。擦れ違ったシュイの鎌がレイヴの右肩を掠め、レイヴの剣がシュイの黒衣の右脇腹部分を切り裂く。

二人がそのまま垂直の壁を駆け下り、壁面を強かに蹴って一回転の後着地。地面と靴底が摩擦を起こし、火花の尾を引く。

――素晴らしい！

これぞ求めていたものだ。レイヴは剣を構え直しながらも、心の中を熱いものが満たしていくのを感じていた。何の歯ごたえもない標的ではない。おのれの全力を投じ、駆け引きを積み上げて尚自らを上回らんとする敵を打ち負かしてこそ、真の充足感というものを味わえる。

生を手繰り寄せ、死に抗う感覚に胸が震える。自然と剣を握る手に汗が滲んでいた。初めておのれの意志で人を殺めた夜のように。

レイヴ・グラガンは物心がついた時にはルクスプテロン連邦に加盟するとある小国の貧民窟（スラム）に住んでいた。屋根に日差し避けの布が交差する黴っぽい居住空間。そこには生活苦に悩んだ親に捨てられた子が。暴力を振るう親から、虐待や性的ないたずらが日常茶飯事の孤児院から抜け出した子供たちが大勢寄り集まって生きていた。そんな子供たちを見捨てることができなかったのか、その街に住む没落貴族の老人が物置代わりに使っていた別荘を子供たちに貸し与え、月に一度は生活費も渡していた。子供たちはその別荘が高台に

あることもあって『希望の丘』と呼んでいた。当時は全く不思議に思わなかったが、今にして思えばこれほどに自らを皮肉る言葉もないだろう。

レイヴはまだ乳児か幼児かという時分、貧民窟の入口で毛布に包まれて眠っていた。もちろんそんな幼い時分のことを覚えているわけではない。ただ、年長の孤児仲間にそう聞かされていた。レイヴという名前を付けたのも孤児仲間の女の子だ。実は手紙も添えてあったようだが、レイヴを運んでいる内に夕立が降ってきて字が滲んで読めなくなってしまったらしい。

その話を聞いた時、レイヴは漠然と、自分が捨てられたということと、そんな自分を大きくなるまで育ててくれた者がいることだけは理解した。彼らが自分たちも生活が苦しい中でレイヴを拾い、育ててくれたのだと。その恩返しをするため、レイヴは彼らのために何でもやる決意を抱いた。

孤児仲間の中には肉親や孤児院の里親を憎む者も多くいた。彼らは粗末な食事を頬張りながら、あるいは寝る前の僅かな時間に、自分の親がどれだけロクデナシで、どれほどに理不尽だったかを語った。気に食わないことがある度に殴られ、お祝い事があると笑いながら殴られた。誕生日。ぼそっと口にしただけで、てめえは親にたかろうってのか、と殴られた。

孤児院の里親も似たようなものだった。食事は一日二食。ある一日の献立を聞くと、朝は水に浸さねば噛めぬくらいにカチカチのパンと小指の先ほどの食用油。夕方は小麦粉の団子とひなびた豆が入ったスープ。時には一日一食だけの時もあったという。

中には男女構わず体を弄(まさぐ)られたという子供たちもいた。孤児院の院長や従業員に、臭くてねっとりとした息を吐きかけられながら、それでも彼らは抵抗できずにいた。そこでは大人たちの言うことが絶対であり、子供に人権など存在しなかった。寒空に放り出されれば三日も経たないうちに死ぬだろう。大人たちはそうやって度々脅

すことも忘れなかった。

もちろんそんな孤児院ばかりではないだろうが、この世の掃き溜めみたいな貧民窟に逃げ延びてくるくらいだ。少なくとも、彼らのいた孤児院はそういうところだったのだろう。

話を最後まで聞き、一緒に憤慨し、悲しんでやることによって彼らは安心し、いつもよりも穏やかな表情で眠りについた。口にはできなかったが、幼かったレイヴは彼らのそんな話を聞いて少し羨ましさを感じていた。親の顔も覚えていなかったので、憎もうにも上手く憎むことができなかったのだ。当時はセーニアやエレグスとの戦争も佳境に入っている頃で戦災孤児が多かったが、そんな世情など少しの慰めにもならなかった。捨てられた者にとって確率は一分の一でしかなかった。

レイヴが十を超えたくらいの夏、孤児たちを援助してくれていた老人が流行り病でなくなった。彼の別荘は取り壊されることになり、孤児仲間たちはそこを追い出されることになった。

ルクスプテロン連邦の大部分は寒冷な国であり、夏は短く冬は長い。早いところでは十月に入らぬうちから雪が降り始める。年幼い子供たちが野良で生きていけるほど甘くない。夏の間に何とか生活できる環境を整えねばならなかった。

孤児仲間の中には一人頭の切れる年長の少年がいた。年長といっても十三才くらいだったが面倒見がよく、人を率いる才に長けていた。彼に従っているうちに自然と共同体らしき物ができあがっていた。

まずは生活できる場所を確保する必要があった。みなで手分けして回った結果、ベッドに横たわったまま餓死している老人の家を見つけた。幸い冬だったのでそんなに臭いはしなかったが、近づくとやはり嗅ぐに堪えない匂いがした。その死体を近くの川に捨てて子供たちの住処とした。

次いで取り決めたのはそれぞれが担う役割だった。人一倍足が速かったレイヴは遊撃隊に選ばれた。軍隊みたいで聞こえはいいが、言うまでもなくまっとうな方法で稼ぐわけではない。年幼い子供を雇う者などいないし、いたとしたら食いつくより先に身の危険を感じて全力で逃げるべきだ。

レイヴたち遊撃隊の役目は食べ物を買う金、食い扶持を稼ぐことだった。仲間たちと共に富裕層の多い町に出掛けては裕福そうな者たちに目をつけ、かっぱらいを繰り返した。そうして集めた物を、今度は別の部隊が他の町に赴き、質に入れて金銭を得るのだ。それで農家から直接食べ物を買い、給仕を任された女の子たちがその食材を使って料理する。

盗みが悪いことだという自覚はなかった。貴族街の住人の大半は自分たちが町を歩くことすら許さない。鼻をつまみ、人に対して蠅を手で追い払う様な仕草をする。彼らには隙間風の入ってこない温かい家があるし、カバンやアクセサリなどなくたって食べていける。一方のこちらは死活問題だ。身入りがなければ二〇人近い子供たちが飢え死にするのだ。

命がかかっているだけあって、誰もかれもが必死に自分の持ち分を守った。少しずつ。本当に少しずつではあるが、暮らしは向上しつつあった。夕食のスープの具材がひとつ多くなった。ただそれだけでやる気が漲り、張り合いがでてきた。雑貨屋で安い建材を買い、壁の壊れた箇所に板を張ると、冬でも毛布に包まり、身を縮めて震える必要がなくなった。

無頼者が多い貧民街にも一応の序列関係はある。共同体を作ってから二年ほどが経ち、レイヴたちは元締めとも言うべき連中に目を付けられた。ある日の夕方、いつものように仕事から戻ってきたところを大勢で待ち伏せされ、寄ってたかってふくろにされた。その日の身入りは相当に多かったが軒並奪われた。相手のほとんどは二十代から三十代。体格差は歴然としており、人数も負けているとな

れば勝ち目などなかった。六人ほどが引き摺られるようにして、近くの廃工場に連れ込まれた。

顔が腫れて倍くらいに膨らみ、目蓋が塞がりかけていた。普段の三分の一ほどしか見えぬ視界。痛みで意識を失いかけ、思考能力が鈍っているその上で前髪を鷲掴みにされ、仲間になるか、死を選ぶかを迫られた。髪を掴んでいた男の顔は涙で滲んで見えなかった。それがどうにも悔しくて、惨めでならなかった。握る拳を振るう勇気はとうに挫かれていた。

そんな中、共同体を統率していたリーダー格の少年、頭が切れるはずの少年は、しかしそれを頑なに断った。彼はその命令を受け入れた後に待っていることを、仲間になれという言葉の裏にあるものを誰より賢い故に理解してしまっていた。

彼は薄笑いを浮かべる男たちに四肢を拘束され、その場でたっぷりと水が入った木桶に頭を無理矢理突っ込まれた。そして、そのまま二度と水面から顔を出すことはなかった。

男たちは痛みと恐怖の扱い方をどこまでも心得ていた。支えにしていたリーダーを目の前で殺され、判断の基準までも奪われた子供たちは、レイヴも含めて逆らうことができなくなっていた。

仲間になれというその言葉。もちろん、レイヴとて字面通りに受け取っていたわけではなかった。が、その扱い方は予想を遥かに超えていた。よくいえば体のよい使い走り、悪くいえば奴隷。子供たちは男女の区別なく労働力としてこき使われ、朝早くから夜遅くまで働かされた。特に顔立ちのよい女の子は売春宿にいれられた。

レイヴを初めとして、仲間たちはなんでもするからそれだけは、と涙ながらに懇願した。組織の中でも一応分別のありそうな者はいて、彼に話を通して欲しいと何度も頼み込んだ。

根負けした彼は、条件付きで了承した。レイヴにある物をある場所へ届けて欲しい、そう言った。届け物は何かごろごろとした石のような物がたくさん入った布袋だった。口は紐で堅く閉じられてい

た。中身を開けようとしたが直ぐに止められた。見たらおまえたちの申し出は飲めない。そうやって釘を刺されてはどうしようもなかった。

その仕事を受けた後で、レイヴは生まれて初めて風呂というものに入れられた。湯気立つ平らな岩の上に寝そべるように言われ、その通りにした。初めは背中が熱いだけだったが、慣れてくるとほどよい温かさとなり、体中がポカポカと温まった。

岩盤浴を終えて軽く水浴びを済ませると、今度は今まで身につけたこともない綺麗な上着と柔らかいズボンを着せられた。仕事着だ、できるだけ汚さないようにしな。垢抜けた栗色の髪の女はどこか馬鹿にしたように笑いながらそう言った。

～血戦　ｂａｔｔｌｅ　ａｇａｉｎｓｔ　ａｄｖｅｒｓｉｔｙ８～

貴族の子息に見紛う白い詰襟の服を着せられ、まだ乾き切っていない髪に鼈甲（べっこう）の櫛を入れられた。生まれてこの方手入れを怠っていたせいで枝毛だらけだった。髪をほぐすにはかなりの痛みを伴ったが、花の香りがするオイルを付けて解きほぐすと、ものの数分でさらさらになった。

身なりが整い、レイヴが外に出ると、四頭立ての馬車が用意してあった。御者と雑談を交わしていた男に早く乗るよう促された。もちろん、そんなものに乗るのは生まれて初めてのことだった。未知の経験に心が躍ったが、馬車に乗ったその場で男に目隠しをされてしまい、がっくりきた。

かなり長い時間馬車に揺られ、目隠しが外されると、既に日が傾きかけていた。そこは見知らぬ大きな街だった。状況が碌々呑み込めぬままに地図を渡され、そこにある交易店に布袋を届けてくるよう命じられた。

レイヴは渋々ながら重たい布袋を背に担ぎ、汗だくになりながら運河沿いの緩やかな坂道を上っていった。運河を流れる水の音に混じって、花の香りが漂ってきた。路傍に設けられている花壇には白や桃色の秋桜（コスモス）が花弁を広げ、通行人たちの目を楽しませていた。

交差点を通過する度に地図を広げ、横にし、行き先を確認した。道なりに擦れ違う者たちもレイヴに負けず劣らず小奇麗な格好をしていた。どうやらこの付近は高級住宅街のようだった。

ほどなく坂を登り切ると、遠くに見える橋の手前に地図に記された目当ての建物を見つけた。近づいてみると、そこはちょうど大通りの交差路の角にあり、人の行き来も盛んで繁盛しそうな立地にあった。

二階建ての店舗の隣にある空き地には藁が敷いてあり、様々な交

易品が置かれていた。束ねられた珍しい木の実や薬草。鉱石や干し肉、干し魚などが山のように積んであった。

目新しいその様子に気後れしそうになったが、家で待っている仲間たちのことを思い出し、意を決して入口へと進んだ。店内に足を踏み入れるなり快活な声がかけられ、続いては値段の掛け声が聞こえてきた。どうやら店の者と交渉しているようだった。カウンターの奥には天秤に貴金属類を乗っけて量っている商人が、直ぐ後ろには用心棒と思しき人族の大男が二人揃って椅子に座り、長い木剣を手にして睨みを利かせていた。

レイヴがその活気に呆気に取られていると、突然横から袖を引っ張られた。慌てて振り向くと、そこには垂れ目の、獣族の青年がいた。背はやや低いが獰猛そうな角ばった鼻が印象的だった。商人というよりは荒事に向いていそうな面構えをしていた。

「なんでぇ、またガキじゃねえか。……まったく、モーザの旦那も酷なことをする、ありゃあ碌な死に方できねえな」

レイヴはその言葉の意味を捉えかね、眉をひそめた。だが直ぐに気を取り直し、努めて丁寧に問いかけた。

「え、えっと、あなたが受け渡しのダガンさんですか？」

モーザはレイヴに荷を運ぶよう命じた男の名だ。男は近くにいるレイヴにしか聞こえないくらいに声を抑えた。

「あぁ、そうだ。荷物は隅っこの方に置いてとっととここから離れろ、そいつは俺が処理する」

処理という言葉に首を傾げながらも、男の言う通りにするようきつく言われていたレイヴはうなずくことしかできなかった。

人垣に揉みくちゃにされながらレイヴは何とか店の外に出た。それから三十秒もしないうちに、荷物を受け渡したはずのダガンが人目を気にするようにしながら、手ぶらで店からそそくさと出てきた。

――あれ、あの荷物はどうしたんだ？

まさか渡す人物を間違えていたのでは。もしくは嵌められたのでは。そんな考えが脳裏を過ぎり、背中を冷たい汗が伝った。そんなレイヴを嘲笑うかのように、遠目に見えていた店のカウンターの辺りがキラリと光った。

首筋に悪寒が過ぎり、レイヴが屈んだのと店内から短い絶叫が上がったのがほぼ同時だった。紅の色彩が大小の窓を一気に貫き、硝子が嵌め格子ごと飛び散った。椅子の破片と思しきものが通りを横切って運河の中に落下していく。煙突からも火が吹き出て、まるで巨大な蝋燭のようだった。

窓から、入口から煙が濛々と立ち込めてくる中で、どこからともなく覆面を付けた男たちが現れ、次々に店内に入っていく。それに釣られるようにして、レイヴが慌てて店の入口へと駆け寄った。そして直ぐに、駆け寄ってしまったことを後悔した。

窓から吹き出ているのは灰色の煙と粉塵。壁や天井には無数の棘がびっしりと生えていた。鉛筆くらいはあろうかという大きさの針が爆風で飛ばされ、店内を地獄へと変えていた。商品棚に伸ばした手が縫い止められているのは店主だろうか。少し毛の薄いつむじの辺りに針が何本か突き刺さっていた。おそらくは何が起こったのかもよくわからないまま絶命したのだろう。立ち姿勢を維持したまま固まっていた。

入口で目を光らせていた屈強そうな用心棒も無数の針に晒されてはひとたまりもなかったようだ。全身を針で貫かれ、押し潰された肉で針の周りが醜く盛り上がっていた。即死は免れていたが、そちらの方が悲惨だったかも知れなかった。両の眼球が無残に貫かれ、鼻にも穴をもう一つ増やされて仰向けに横たわり、力なく痙攣を繰り返していた。括約筋が緩まったのか、股間の辺りが濡れていた。

鼻腔に我先にと押し寄せてくるのは血と尿の臭い。途端に吐き気

をもよおし、口を押さえつけたレイヴを尻目に、店に侵入した体格のよい男たちは店内にある交易品や客の持ち込んだ交易品を、高価そうな物から革袋に詰めて手際良く運び出していく。途切れ途切れに呻き声が聞こえてくることから生き残っている者も何人かいるようだが、彼らは傷病人に見向きすらせず、ひたすらに自分たちの仕事に没頭している。

彼らは何をしているんだ。自分は何をやったんだ。レイヴはただただ混乱していた。かっぱらいの折に相手を転ばせてしまっただけで罪悪感に苛まれたレイヴにとって、到底受け入れ難い光景がそこにあった。店内にいた商人や客をイガ栗のように姿を変えてしまっていた。飛び散った針は皮膚を突き破り、肉を抉り、堅い頭蓋骨をも貫いていた。針の刺さった部位からは夥しい赤が流れ落ち、血ダルマになっていた。

その一方で、自分の持ってきたはずの布袋はどこにも見当たらず、そのくせ焦げた布切れが散らばっていた。見覚えのあるベージュ色の布切れだ。

「よくやった」

おもむろに、いつの間にか背後に回っていた魔族の男が、そんなことを言いながらレイヴの細い肩に手を乗せた。荷運びを命じたモーザだった。人の良さそうな表情は、その惨劇を前にして微塵も崩れてはいなかった。

後をつけられていたことが意外だったが、瞬時にそんな瑣末な考えは消え失せた。

「よくやったって……どういうこと――」

「――これでおまえも、ヒトゴロシだな」

思考が凍りついた。一瞬、ほんの一瞬だけ。人の良さそうなモーザの笑みが悪鬼のそれに変わった。唇は歪な弧を象り、銀色に光る上下の前歯が剥き出しになっていた。

だが、そんなことよりも気にするべきことがあった。モーザの言葉、ヒトゴロシという重過ぎる言葉がレイヴの耳に反響していた。

真っ先に、自分が本当に人殺しなのかという素朴な疑問がレイヴの頭の中に沸いた。命令されてやっただけなのに？　袋の中身を見ることも許されなかったのに？　全く、何が起こるかもわからなかったのに？　何かを言い返そうとしたが喉の周りが痙攣し、声の体をなさなかった。

モーザは再び人懐っこい笑みを顔に貼り付け、レイヴの頭の中を全て把握しているかのように、淡々と続けた。

「あぁあぁ、こいつは何とも惨い有様だ、こんな穴だらけの亡骸を見せられちゃあ家族は犯人を殺してやりたいほど憎むだろうよ。一家の大黒柱を殺されたとあっちゃ裕福な暮らしが一転、明日の食べ物を気にしなきゃいけなくなったやつも出てくるだろうなぁ。もしかしたら幼い子供を抱えている母親も、いや、このご時世だし片親だったやつもいるかもなぁ」

モーザは鋭利な刃物に等しき呪いの言葉を、レイヴの頭に、心に突き入れていく。ゆっくりと、じっくりと。

おまえは自分の、仲間の幸せのために他人を不幸のどん底に陥れたんだ。

――違う。

レイヴが認めたくない現実（じごく）を前にして涙を滲ませ、首を振りながら呟く。抗弁を許さぬというように、男が責め句を紡ぐ。

袋の中身、本当に知らなかったのか。何かやばいものだってこと、薄々気づいていたんじゃないか。

――違う。こんなことになるなんて想像もしていなかった。

おまえは大量殺人の実行犯だ。俺たちの中で一番罪が重い。決して許されない。

――なんでだ、何も知らなかった俺が、なんで一番罪が重いんだ。

衛兵にしょっ引かれれば死刑は免れない。連邦の法律は子供にも容赦しない。俺たちは火事場泥棒。せいぜい牢屋に入れられるだけ。

――死刑。嫌だ、なんで俺が。俺はただ、皆と今まで通りの生活を――

その先はモーザの言葉に消されて続かなかった。

おまえは罪のない多くの者の人生を不幸にした。彼らの命を、尊厳を奪い、彼らに関わる者たちの日常を奪った、極悪非道な大罪人だ。おまえの目の前に焼き付いたこの光景が、何よりもそれを物語っているんだよ。

最早震えは体全体に及んでいた。視界がぼやけて視界から輪郭が失われそうだった。夢を見るな。希望を抱くな。誰にも助けを求めるな。おまえにそんな資格はない。

底知れぬ悪意をそのまま言葉に変えた烙印は、レイヴの精神を容赦なく焦がしていった。

その場から貧民窟（スラム）の家までどうやって戻ったのか、全く覚えていなかった。半ば放心状態のまま家の中に入ると、売春宿に入れられたはずの少女たちが戻ってきていた。仲間たちはレイヴの姿を見るなり歓声を上げ、抱きついてきた。

おまえのおかげで皆が戻ってこれた。以前の生活が取り戻せた。彼らは口々にレイヴを褒め称えた。その言葉が、レイヴをどれだけ苦しめていたかも知らず。

食卓には見覚えがない二又の赤銅色の燭台が置かれていた。そこにセットされている蝋燭の炎が、口にしたこともないような豪勢な料理の数々を、煌々と照らしていた。

こんがり皮を焦がしたローストチキン。色鮮やかな旬の野菜のサラダ。底にある具が見えぬほどに濃厚なシチューが。それら全てが、運び屋をやらせたモーザが部下に命じて届けさせたものだった。

彼らはどこまでも用意周到で、狡猾だった。約束を守り、きちんと対価を与えることで、レイヴに罪悪感と現実感を擦り込ませた。おまえのやったことにこれだけの価値があったのだ、と。おまえはたったこれだけのために、多くの人をその手にかけたのだ、と。

皆が顔を綻ばせ、節操もなくかぶりついているそれに、レイヴは最後まで手を付けることができなかった。手や肩が、酒の中毒症状のようにぶるぶると震えていた。肉から滴る汁に混じる血の色が、昼間目の当たりにした遺体のそれに重なった。胃がむかむかして堪らなくなり、皆に小便だと嘘をついて外に出た。そして、植え込みの中に五度吐いた。胃の内容物を全てぶちまけ、腹の中が空になったのに吐き気は収まらなかった。おのれの冒した罪に、真っ暗な将来への不安に駆られ、涙が溢れて止まらなかった。

深夜、皆が寝静まった後でレイヴは石垣に腰かけ、半月を見上げていた。泣き過ぎて声は枯れていたが、先ほどよりも頭はすっきりしていた。腫れ上がった目でぼんやりと光る雲間を見ながらどうするべきかを考えた。水責めで殺された少年は、リーダーは考えるのが仕事だ、常々そう言っていた。

――考える、っていったって。

学が無くたってわかる。あの男、モーザは、今回の一件に付け込んでこれからも様々なことを要求してくるだろう。身一つで自分だけ逃げることは容易いが、後に残される仲間がどうなるかは目に見えている。彼らの喜んでいる顔を見せつけられた今となっては、仲間たちをまた明日をも知れぬ生活に連れ出すなんて残酷なこともできない。どこまでも雁字搦(がんじがら)めだ。

だが、このまま無事に済ますような生温い相手でないことは確かだ。相手は暴力を商品として扱い、それで金を得ているプロフェッショナル。今はまだ利用価値があることで生き長らえているがいつ気が変わるとも知れない。いつ、あの少年のように木桶に頭を突っ

込まれ、溺死させられるかわからないのだ。
かといって、誰かに助けを求められる状況ではなかった。モーザが指摘した通り、自分は人殺しの片棒を担がされている。汚名ではなく、れっきとした既成事実を背負わされている。仲間たちに打ち明けることなどもっての他だ。彼らにまでヒトゴロシと軽蔑されたらどうにかなってしまいそうだった。

睡魔が襲ってくるまでに結論は出た。誰も頼ることができないならば、自分で何とかするしかない。抗うためには大きな力が必要だった。いかなる悪意をも沈黙させる、有無を言わさぬ暴力が。彼らが自分たちに対してそうしたように。

～血戦 battle against adversity9～

忌まわしき日から二週間が過ぎた頃、レイヴはモーザの屋敷に出向き、次回の仕事から一定の報酬が欲しいと申し出た。できるだけ謙虚に、下手に見えるように。

その日まで鏡を見ながら媚びた笑みを一生懸命に練習した。大人がごく自然に披露しているように見えたその笑みは思いのほか難しかった。

そう遠くない時期にレイヴにもう一度仕事をやらせてみようと目論んでいたモーザは、レイヴの方から出向いてきたことによって、この細い少年に犯罪者の見込みがあることを確信した。人殺しの罪悪感よりも自己愛が、金銭欲が勝ったのだと。

自分が上にいくための優秀な手駒として使えるかも知れない。年幼さはそれだけで相手の警戒を緩める武器となる。元々どこにでもいる孤児の一人だ。何かあったとして自分が傷を負うことはない。

その申し出を快諾し、度々汚れ仕事を任せるようになったモーザは、それからも様々な荷物をレイヴに運ばせ、仕事が終わる度に幾許かの報酬を与えた。

死の配達人となったレイヴは、心を擦り減らす仕事をこなしていくうちにおのれの感情を制御する術を身につけていった。そうしているうちに血の臭いにも慣れ、吐き気も遠ざかっていった。

その一方で、誰にも悟られぬようにおのれの肉体を鍛え上げた。毎夜、寝る間を惜しんで起伏の大きい貧民窟の坂道を走り回って足腰を鍛えた。北国の家屋ならばどこにでもある火かき棒を持ち、一日に何百回、多い時には何千回と素振りを繰り返した。

ぶかぶかの長袖の服とズボンを常日頃身につけることも忘れなかった。筋肉がつき、体付きが変わっていくのをばれないようにするためだ。仕事の日が近づいてくる時には前もって数日間絶食し、体

格があまり変わっていないことをそれとなくアピールした。仕事着、裕福そうな私服や銀行の制服が用意されている時には、着替えを見られることもあったからだ。

意図したことではなかったが、水や食料への飢えは仕事をする際に重宝した。目的を果たすために雑多な感情は障害以外の何物でもなかったからだ。一時とはいえ余計なことを考えず、ただ今ある仕事を終え、たらふく飲み食いすることだけを考えていられた。

そんな日々を過ごしているうちに、平穏な日常に感覚を呼び戻すことが難しくなってきた。いつの間にか上手く喜怒哀楽を表すことができなくなっていたのだ。加えて、普段あまり寝ていなかったせいでレイヴの目にはいつも隈ができていた。どんどん人相が悪くなっていくレイヴに孤児仲間たちは良からぬことをやらされているのではと詰め寄ったが、レイヴは彼らにだけ見せる笑みを浮かべ、それを否定し続けた。

二年も経たぬうちに、モーザは貧民窟だけでなく、併設されている町をも牛耳る存在になっていた。

真の悪党は決して自らの手を汚さない。そのための努力を怠らないものだ。モーザは如何に裏で悪事の手引きをしようと、自分だけは一線を超えていないと思い込める図太さ、強かさを持っていた。彼はレイヴを初めとした身寄りのない者から使える人材を見出し、活用する才能に長けていた。自分が直接恨みを買わぬよう留意しつつ、敵対する者を、将来邪魔になりそうなものをことごとく排除していった。そしてついに、自らの手を一度も汚すことなく、ひとつの街の裏の支配者にまで上り詰めた。

頭の回転は相変わらず早かったが、その体つきはレイヴと初めて会った時に比べて相当に変わっていた。以前着ていた服は下着も靴下も含めて全てサイズが合わなくなり、全て廃棄された。

その下で仕事を重ねていたレイヴの蓄えもそれなりになっていた。

無論、正規の暗殺で受け取れる報酬に比べれば微々たるものだ。8割から9割はピンハネされてモーザの懐に入っていただろう。

そんな不条理にも不満を零すことなく、屈することなく、レイヴは顔に笑みを貼り付けてどこまでも忠実にモーザに尽くした。不満をおくびにも出さずに働き続けるレイヴに、モーザも警戒心を緩め始めていた。

その日、レイヴは溜め続けていた金を換金しに銀行に出向いていた。山のような小銭も札束に換金すると手の平にすっぽりと収まってしまった。その足で、まだ店が開いていない武器屋の扉を叩いた。不機嫌を隠すことなく寝惚け眼を擦った店の主人に、今までに稼いだ金を余すことなく渡すと、これで買える一番強力な武器を、と頼んだ。汚い金を自分や仲間のために使うのが嫌だったし、元々使い道はこれと決めていた。

火かき棒を毎日のように振るい、マメがかちこちになったその手を見て、主人は納得したようにうなずいた。店の奥に姿を消してからしばらくすると、見事な装飾箱を抱えてきた。箱を開くと高級感ある紺の内張りが、型溝には紅蓮の細剣が収まっていた。

レイヴはその形状の美しさに魅入った。刃はどんな金属を使ったのか血のような鮮やかな紅で、柄は五指にフィットするよう窪みが設けられていた。

触れるのを躊躇っている様子のレイヴに、主人が手に取ってみるよう促した。職人の粋が込められた剣をぐっと握り締める。ただそれだけで力が湧き出で、夏の日差しに晒されたような熱が全身に伝わり、心が高揚した。自らの鎖を断ち切るに、今までの生活に決別を告げるに相応しい刃だった。

その六日後、レイヴは屋敷の手前の角で足を止め、物影からその日の門番の顔を確認した。不意に浮かんだ微笑みを引き締めると、近くの茂みに隠してあった紅蓮の細剣に丈夫な革を巻き付け、両端

を紐で括り、ベルトの代わりにして腰に巻いた。そしていつものようにモーザの住む屋敷に向かった。

訪問者が屋敷に入る時に武器を持ち込むことは許されていない。門をくぐる前にはその日の門番に必ずチェックされる。モーザの抜け目のなさ、油断のなさは今に始まったことではないが、門番の方は彼ほどに抜け目がないわけではない。中にはチェックの甘い者もいるし、一生懸命やっているように見えて抜けている者もいる。

目の前にいる人族の男にチェックされたことは五度あった。ちょび髭を生やした小男はどちらかと言えばチェックが厳しく、堅実な性格だった。が、逆に言うといつも決まったことしかやらなかった。

男は以前にもやったようにレイヴに万歳をさせ、腹周り、背中、ズボンの裾、足の裏まで入念に調べた上で丸越しだと判断した。革のベルトに触れられた時には内心どきりとしたが、その中に納まっている細剣に気づいた様子はなかった。

赤い絨毯の敷かれた廊下を歩いていくと、壁と扉を突き抜けて野太い高笑いが聞こえてきた。モーザ本人の声に違いなかった。体に溜まった空気を何度となく吐き出し、逸る心を深くに沈め、レイヴは扉の前に立った。

モーザは朝から上機嫌だった。前日にあった武器の大きな取引が上手くいったことを、それに一役買っていたレイヴも当然のように知っていた。仕事の成功の後にお気に入りの葡萄酒を飲むのが最近の習慣となっていた。

モーザは大人二人くらい容易に座れそうな椅子に大きな尻をうずめ、片手に高級ワインをくゆらせ、もう片方の手を侍らせていた幼い魔族の少女の細い腰に回していた。強面のゴロツキに身辺を守らせることも忘れていなかったが、この日ばかりは酒が警戒感を鈍らせていた。

部屋に静々と入ってきた灰青（アッシュ・ブルー）の忠犬を見据え、モーザはレイヴに向けてワイングラスを掲げ、赤らんだ顔で将来を語った。

「おおレイヴ、昨夜は本当にご苦労だったな。おまえも良ければ一杯どうだ。エレグスから取り寄せた一級品のワインだ。これほどに美味い酒はそう飲めないぞ」

「いいえ、私は結構です、これから大事な仕事がありますから」

「そうか？　今夜の仕事は昨日に比べれば造作もないと思うがなぁ。――おいレイヴ、俺はこんな街で終わる気はさらさらないぞ。いずれはもっと有力な貴族たちとも手を結び、巨万の富を作り出してやる」

「そうですね、モーザ様の手腕をもってすれば不可能はないと存じ上げます」

「ふふん、おまえも口が上手くなったものだ。考えてみればおまえはここ数年で一番の掘り出し物だった。あの薄汚い餓鬼が今や俺の自慢の片腕だ」

レイヴはそうですね、と笑った。

「うむ、そうだな、俺ともあろう者が腹心をいつまでもあんなあばら家に住ませていては格好がつかん。近いうちにおまえにも専用の屋敷を用意してやろう」

レイヴはそうですね、と笑った。

「あぁ、遠慮はいらないぞ、忠誠心のある部下を労ってやるのも優秀な指導者の役目だからな。あぁ、そういえばおまえもそろそろ年頃だ、なんなら綺麗どころを二つや三つ見繕って送ってやろう。孤児や浚ってきた女の中にはまだすれてないのもそれなりにいるぞ。言え、どんなタイプが好みだ？」

レイヴはそうですね、と笑った。

「んん？　どうしたんだおまえ。さっきからそうですね、としか言っていないじゃないか」

レイヴはそうですね、と笑った。

反応の変わらぬ受け答えに不快になったのか、モーザの顔が険しくなった。肘掛けに人手のような手を付き、椅子から億劫そうに体を起こす。

つかつかとレイヴの前まで進むと、モーザはグラスに残っていたワインを浴びせかけようとした。すると、手首から指先までがグラスを持ったまま床に零れ、後を追うようにしてワインが零れた。二種類の赤が絨毯に染み出し、溶け合った。

「――あ？」

モーザが間の抜けた声を出した。レイヴはそうですね、と笑った。顔に赤い液体を浴びた少女が、その匂いがワインのそれではないことに気づく。途端、甲高い悲鳴が上がった。

「――な、レイ……ヴ？」

モーザは自分の体から切り離された手首をとろんとした眼で見つめた。酔いと驚きと、何よりその切り口の鋭さで、痛みを感じていなかった。

「いけませんねモーザ様、ここのところ少し偏食が過ぎるのではありませんか？　見てくださいこの血を、とても健常な色とは思えない、脂でぎとぎとですよ。たくさんの血を見てきた私が言うのですから間違いありません。偶には野菜も食された方がいい」

レイヴはさめざめと言った。その落ち着きぶり、忠言はいつもと全く変わらず、あるいはこれが夢ではないかというくだらない考えをモーザに抱かせた。

それを当のレイヴがゆっくりと否定した。

「実に、よい。仕事の折にはあなたに裏切られた者が浮かべる表情を私も何度となく見てきました。混乱、苦悶、恐怖、憎悪、憤怒。もっとも、あなたが意表を突かれたのを見るのは初めてですが、放心といったところですか？」

他ならぬレイヴの裏切りを示唆する言葉によって、全く動けずに

いた護衛たちが硬直から解き放たれた。すぐさま腰から太刀を抜くと、モーザを傷つけたレイヴを仕留めるべく背後から襲いかかる。

レイヴは向けられた刃に恐怖を感じることもなく、目を向けることすらなく。軸足の位置を固定し、回転するように剣を振るった。鞭のようにしなる紅蓮の細剣は、男たちの想像を超えて伸びてきた。腕に絡み付いた刃が男の腕をぶつ切りにし、下から振り上げられた剣が顎から入り、前歯と鼻骨を通り、眉間から出た。堅い骨を切った時にすら肉を切るような感触だった。

細剣を振るった数だけ、レイヴは血飛沫を浴びた。十も数えぬ間に六つの死体が出来上がっていた。周りにいた女たちは部屋の隅で頭を庇うようにして身を縮め、ただただ震えていた。

血塗れの灰青髪の少年を目にして、モーザの目が混濁とした海をたゆたう。

「な、何故……だ。俺はお前の才能を、重用して……」

「この二年間の私の心情、どう言い表せばよいか。あなたが私にもたらした報酬（といっても微々たるものでしたが）、その結晶がこの剣であり、今あなたの発した疑問に対する答です。あなたは私に、自分を死に至らしめるための金をせっせと渡していた、実に滑稽な話だとは思いませんか」

男の瞳に困惑が、恐怖が過ぎるのを目にし、レイヴはあっけらかんと笑った。年相応の少年の笑みだった。

「ま、待て……」

一歩大きく歩み寄ってきたレイヴに、モーザが無事な方の手を向けた。直ぐにその手も無事でなくなった。再び床に転がった手首を見てすっかり酔いが冷めたのか、モーザが苦痛と恐怖に顔を歪めた。太った顔がしわを余分に作り、実年齢よりも二十ほど老けてみえた。

「ま、仇討ちなど私の柄じゃあないのですけれどね」

「仇、だと。なんの、はな……しだ」

本気で心当たりのなさそうなモーザの様子に、レイヴの脳裏に殺

された少年の頼もしい笑顔が、苦痛と無念に満ちた顔が紙芝居のように過ぎった。

「やはり、覚えていないのですか。なるほどなるほど、私たちにとっては人生に激震が走った出来事であっても、モーザ様にとっては単なる日常の一ページ。視界を横切る木々や、花びらや、落ち葉に過ぎなかったと」

――瞬（シュン）。レイヴの目が釣り上がった瞬間、しなる紅蓮の細剣が斜め上から振り下ろされ、ぎりぎり急所に届かぬ深さでモーザの肉を切る。

「がっ……ぁあぁぁぁぁ！」

モーザの咆哮が窓ガラスを揺さぶった。レイヴは悲鳴のけたたましさに片目を瞑りながらも剣持つ手を迅速に動かした。

「あの日、あなたは私に悪魔のように囁きました。私は人殺しであり、大罪人だと。――認めますよ、今更一人殺したところで、私の価値観は微塵も揺るがない。心もこうして凍りついたままだ」

息を継ぐ度に、紅蓮の細剣が鞭のような軌道を描き、血飛沫が跳ねる。煌びやかな照明器具のぶら下がった天井に、モザイク模様の壁に、毛足の長い紫色の絨毯に紅の斜線が加えられていく。

「――は、早く……殺せ！」

身辺警護を任せている護衛に向けて放たれた、切羽詰まった言葉。だが、床に倒れている強面のゴロツキたちは微動だにしない。とっくに事切れている。そんな判断もつかぬほどの錯乱状態に陥っていた。身振り手振りだけで人を傷つけ、殺めてきた男の無様な姿に、レイヴの表情は変わらない。

「いやいや、そう言われましても困りましたね。あなたの贅肉が分厚くて、上手く急所に刃が、届かないんですよ」

言動こそ穏やかだったが、鬼の形相だった。二年という歳月は彼という人間を著しく変質させていた。モーザの命じた仕事の数々が、この時ばかりはモーザ自身に降りかかっていた。

「ひとつだけ、礼を言わねばなりませんね。あなたは私に大切なことを教えてくれました。人がより良き人生を歩むには、まず力を持たねばならぬ、と」

恰幅のいい体が前後左右に揺れる。人の血肉を食らって肥えた体から血が流れ落ち、頬の肉が、腹のたるみが削ぎ落とされる。白みがかった肉と深紅の筋肉が剥き出しになり、肩の下の辺りでは鎖骨が覗いていた。絨毯に散らばる肉片の山が少しずつ高さを増していった。

「……が……あ」

「大分体がすっきりとしてきましたねぇ、新しいダイエット法として提唱できるかも知れませんよ。万が一、生き残ることができればの話ですが。どうやらとても無理そうですね」

段々と反応が鈍くなり、途切れ途切れの呻き声になってくる。すっかり赤い肉塊と化した、鼻と口の区別すらつかないモーゼの顔に、レイヴはぶっと唾を吐きかけ、細剣を横薙ぎにした。

柔らかい絨毯と頭皮にまでたっぷりついた肉のせいか、頭が落ちた音はほとんど聞こえなかった。血の臭いも感じなかった。柄を濡らしていた手汗の滴とその熱だけが、レイヴを現実に繋ぎ止めていた。

目に汗が入り、瞬きをすると、黒衣の男が自分の三十歩ほど先を走っていた。間近にあったはずの壁が遠ざかり、自分も今まさに走っている最中であることが気づいた。レイヴの目が一瞬だけ見開かれたが、直ぐに相手の隙を狙う肉食獣のそれとなった。

――今のは、走馬灯というやつですか。はは、そんなもの信じていなかったんですけれどねえ。

内心で苦笑しつつも、レイヴが斜め前方を走るシュイを一定の距離を保ちながら追う。

構えている剣を傾けて角度を変えると、１６個の黒い菱形が、まるでそれぞれが意志を持っているかのように次々に向きを変え、形を失って線となった。

「――斜線陣（スラッシュ）！」

言霊と同時にレイヴが斜め後方に剣を向けるや否や、前方に展開されていた刃が迅速に斜めに配列される。紙のように薄い刃ゆえに、シュイの側からは真横に並んでいるように錯覚するだろうが、実際には右手が最前列であり、左手が最後列だ。

お互いに高速移動をしていることから、相手のいる方角に攻撃を繰り出しても刃が到達するのは遥か後方と。相手が進む先に射出した刃を置かなければ当たらない。残された魔力はもう少なく、無駄撃ちはできなかった。

――到達時間は１秒の半分、誤差は十五歩分といったところか。

レイヴが相手の速度と距離から攻撃の当たる位置を素早く、正確に割り出す。

「――翔撃（ボーリィ）！」

下から振り上げられるレイヴの剣に反応し、黒刃が一斉に動き出した。狙いはほぼ的中。シュイが減速したことで致命傷こそ外されたが、手や胸などに命中した刃が黒衣に血の装飾を施した。

だが、傷を追いながらもシュイの動きは依然動きの質を保っていた。空中に光の五線譜が描かれ、周囲の魔力が吸い寄せられ、硬化（コーティング）される。左手がぐっと引かれ、黒刃が再び接近してくる様を見止め、踏み出すと同時に射出。シュイの手元が、宝石付きの指輪を陽光に透かしたかのように輝いたその瞬間、レイヴの全身から汗がどっと噴き出した。

まずいまずいまずい。焦燥が頭の中を埋め尽くした。今しがた放たれたばかりのシュイの魔弾が、まるで瞬間移動したかのように、自分の体の直ぐ近くにあった。その間に入るべき何枚かの光景が、

すっぽりと抜けていた。ただ、白く煌く弾丸が空気に波紋を幾重にも残しているのが見えた。

先ほど目に焼き付いていた速度を遥かに上回る、目にも止まらぬ弾速。音をシュイの手元に置き去りにしてきた弾丸に、それでもレイヴの体が無意識に反応し、反転すべく足を蹴っていた。向かってくる弾丸の速度の速さに対して体の動きがやたらゆっくりと感じ、そのもたつきに歯痒さを感じたが、ぎりぎり避けられそうだった。

緩慢に映っていた世界が急加速する。寸前の予想を裏切り、肘の少し上を衝撃が襲った。鎖分銅が直撃したような重さに片足が浮き上がり、遅れて射出時の音が耳を叩いた。体勢を崩して追撃されることを嫌い、辛うじて踏み止まったが、それが悪い方向へと転がった。踏ん張った足が負荷を支えきれず、めきりと嫌な音を立て、レイヴの歯が擦り合わされた。

すぐさま顔を上げ、足を止めてこちらに向いているシュイを睨み返す。回避を無視して攻撃したせいで彼も黒刃に晒されたのだろう。身を包んでいる黒衣は赤黒く染まっていた。けれども、戦いの生命線であるその足は未だ健在なようだった。

レイヴは口を窄めて細く息を吐き出した。ちらりと自分の上腕を見やればその色は青黒い。一撃にして毛細血管を潰され、骨にひびを入れられていた。捻った左足の方も熱を帯びてきている。よくて捻挫、悪くすれば骨折。避けたはずのシュイの攻撃に意識が飛びかける。

――何故だ、体は確かに軌道から逸れていたのに。――いや、今は考えるな。

足を奪われた上に動揺につけこまれては敗北は必至。長い戦闘経験がレイヴの意識を現実に押しとどめた。シュイとて先ほどの攻撃でかなり傷ついている。怪我していることを悟られなければ勝ち目も十分にある。

レイヴはおのれを束縛から救った思い出深い剣を、強く握り締めた。

～血戦 battle against adversity10～

レイヴがすうっと足を開き、掲げた細剣の鍔（つば）に額を擦りつけるように頭を傾いだ。剣を支えている両の腕が細かく震え始め、夜空に向けられた切っ先から黒い靄がゆらゆらと立ち昇っていく。

ほどなくして、レイヴの四方に先ほどの数を上回る黒刃が一斉に出現し、それらが一所に寄り集まり始めた。身構えるシュイの目前で黒い刃が重なり、融合し、液体のように流動して一つの動物を形作ってゆく。全身から滴る汗が、次に繰り出す攻撃がフェイクやフェイントといった類のものではないと告げていた。

瘴気を纏った不定形の馬がその目に青色の炎を灯すと、前足を振り上げながら虎の威嚇にも似た嘶（いなな）きを放った。レイヴが口を真一文字に結んだまま腰をやや落とし、剣を両手で構える。左上段からの刺突の構え。掛け値なしの全力攻撃であることを空気が伝えてくる。

一撃に全てを込める選択をしたことから相手に余力は残されていないようだったが、シュイの消耗とて決して軽くはなかった。体全体から流れ出る汗が傷口に滲み、ぴりぴりとした痺れと気だるさを感じる。鎌を持つ右腕に裂傷が三箇所、術を放つ左手にも二箇所走っている。要所要所で大鎌を盾代わりにしていたため首や頭といった体の中心部にこそ傷はなかったが、黒衣はもう繕うほどもできないくらいずたずたにされている。

大鎌も＞響き渡りし神代の弔鐘（ネル・ディスカルプ）＜の刃によって切り刻まれ、大分刃毀れしていた。柄に指の腹を滑らせれば切れ目の入っている場所がはっきりとわかり、大量の金属粉が指に付着する。床に目をやれば爪先ほどの黒い金属の破片がそこら中に散らばっていた。使い手（じぶん）の命を守ってくれた相棒に感謝しつつ、シュイは下唇を軽く噛み、失血で濁りつつあった思考をはっきりさせた。

時間を稼げば勝てる可能性が高まることは理解していた。シュイの放つ魔弾は物体に接触してから数秒で消失するが、レイヴの黒刃はその性質と操作性の良さが災いし、壁などに当たっても失われない。刃を展開している時間だけそれを維持する魔力が必要であることから、既に魔力は枯れかけていると考えてよい。だからこそ残された力を振り絞り、一撃に全てを委ねる選択を取ったとも考えられる。

それを踏まえた上で、シュイはその勝負に臨む決意を固めていた。際どい戦いで気分が高揚していることも影響していたのか、くだらぬ小細工でこの勝負にケチをつけたくないという思いがあった。全く不思議なことだったが、自分の命が失われるかも知れないこの状況で、後で後悔したくないという気持ちが先行したのだ。

逆手で空を掻きながら、先ほどレイヴに魔弾を命中させた時の感覚を一心不乱になぞる。真剣勝負の緊迫感の中において、練習の時を上回る速射を成功させた瞬間を今一度再現するべく、体幹から爪先までの動き、そして体を流れる魔力の両量正確にイメージする。

今までよりも遥かに短い時間で、具現化された魔力の五線譜に光の粒子が吸着。弾丸に変化してシュイの手元に残る。脇を引き締め、左手を引いたシュイを見て、レイヴが微かに笑う。反して、瘴気で象られた馬が不機嫌そうに蹄を踏み鳴らした。

「――さて、いきますよ」

そうとレイヴが告げた瞬間、双方の手が合わせ鏡のように動いた。

射出時にその衝撃が上腕にまで達し、左肩が外れて強烈な痛みに襲われた。それだけに手応えは十分だ。捻り込むように突きを繰り出したことで、速度に回転が加わった五つの光弾が瘴気の馬と衝突。白と黒の魔力の奔流が衝撃波の環を生み、レイヴの灰青髪を後方へと流す。と、同時にシュイの黒衣のフードを留めていたクリップが弾け飛んだ。

――馬鹿な、この一撃で互角！？

全身全霊を出しつくした至高の一撃。五つの弾丸と黒い馬は互いに一歩も引かず競り合っていた。光と闇の蔦が絡み合って形成された力場が二人を閉じ込める。決着がつくまで逃げることを許さぬというように。

床の塗料がみるみるうちに溶けていき、蒸発して煙と化す。衝突地点の地面が大きく陥没し、地面が揺れる。エネルギーの押し合いは熾烈を極め、ホールの中心から離れている壁にまで亀裂を入れていった。渦に巻き込まれた瓦礫が吹き抜けから外へ、次々に飛ばされていく。

二人が固唾を呑んでその結末を見守る中、時が止まったかのように感じられていた硬直状態にも亀裂が入った。シュイは瘴気の馬が先ほどよりも姿が大きくなっていることに気づいた。背筋に悪寒が通り抜けると共に、馬と押し合っていた五つの魔弾のうち一つが爆ぜ、光の塵となって消失する。

――な、なんでだ。これでも駄目なのかよ。

全てを込めたはずの一撃が、しかしじりじりと押されていた。動揺する間にもう一つの魔弾が霧散。鍋に入っていた水が一瞬にして蒸発するような音が鳴った。

明らかな劣勢に不本意にも身が竦む。瘴気の馬がこちらへと少しずつ近づいてくる。不意に、高揚感が恐怖心に塗り替えられた。こんなぎりぎりの勝負をどうやって楽しんでいたのか、どうして楽しんでいたのかも思い出せなくなった。ぐにゃりと視界が歪み、合わせて思考が歪んだ。

――絶対に戻るって約束したのに。

シュイは、生まれて初めて心から死ぬことを怖れていた。死がもたらされる結果として、アミナやピエールら、仲間たちの信頼を裏

切ることが怖かった。死んだ後の光景が明瞭に浮かび、そのことがますます混乱に拍車をかけた。エミドと一戦交えた時にはおのれを、先を省みないで立ち向かうことができていたのに、と。

真剣勝負で全力を出し切った。ただ、相手がその上をいっただけだ。そうやって単純に割り切れればよかったが、この土壇場になって臆病さを覗かせた自分の無様さに苛立ちが募る。まさか、この一年で自分は弱くなってしまったのか。湧き出たそんな思いに必死に抗おうとする。

そんなシュイの葛藤を知ってか知らずか、レイヴが厳かに告げる。

「……素晴らしい、闘いでした。ですが、これまでですね」

その落ち着いた声音が耳に触れ、シュイが前進してくる馬を見て、目を瞑ろうとした。

その途端、シュイとあと十歩ほどの距離にまで迫っていた瘴気の馬が、三つ目の魔弾と共に呆気なく消失した。か細い断末魔のような、風穴に響くような音が場に響き渡り、シュイが釣られて顔を上げた。

――な、え？

驚きで声が出なかった。魔力が尽きたのか、それとも時間制限によるものか、レイヴの＞響き渡りし神代の弔鐘（ネル・ディスカルプ）＜によって生じた靄が急速に身を縮めていき、細剣の刀身が黒から元の紅へと戻りつつあった。

大きな馬体に押し込まれていた残り二つの光弾が俄然勢いを取り戻す。今度はレイヴの目にも、シュイの放った魔弾の軌道がはっきりと見えた。体から逸れていた弾道が直前で屈折し、修正されたのがわかった。

咄嗟に細剣を横にして魔弾を受け止めたのは流石だったが、凄まじい衝撃が武器を支える手を襲い、柄を掴み続けることを許さなかった。中指と薬指が関節と逆に折れ曲がり、その隙間から剣が零れ

る。辛うじて踏ん張っていた足が地面から押し剥がされた。弾かれた細剣が遠ざかり、武器が術者の手元から離れたことで付与魔法が完全に解除される。

勝負は決していた。レイヴの胸の中央にシュイの魔弾が着弾。更にはこめかみをも弾かれ、脳が左右に揺らされた。遠のきかけた意識の中で背に床の感触を感じ、レイヴは掠れた声で闘いの終結を宣言する。

「……鬼を屠った一撃すら、凌がれるとは。私の……いえ、あなたの勝ちです」

最後に負けを口にしなかったのはせめてもの抵抗か。レイヴは胸と指先の痛みに顔をしかめながらも言葉を続けた。

「……冥土の土産に聞いておきたい。その魔法は、なんという名ですか」

一方のシュイは、状況を整理するのがやっとのようだった。瘴気の馬が床に刻印した蹄の跡を半ば放心状態で見つめていた。

――勝ち……俺が勝った、のか？

我に返るまでにはしばしの時間を要した。必死に頭の中を整理しようとしたが中々うまくいかなかった。

「あ……え、あぁ……まだ決まっては、いない。人前で披露したのも、今回が初めてだ」

間が空いて、たどたどしく言葉が発された。息も絶え絶えの様子のシュイに、レイヴがほんの一瞬、満足そうに鼻を鳴らす。

「ふっ、ならば私が初めて、あなたの切り札の餌食となったわけですか。光栄です、というべきですかねぇ」

「……速決するならば、スカージュ。……ラピディティ・スカージュっといったところか」

「……＞刻穿ちし閃（ラピディティ・スカージュ）＜か、悪くない」

シュイは先天的に強力な攻撃魔法を扱う才に恵まれていない。＞

結合（ユニット）＜については稀有な才を有している一方で、外界の魔力を＞吸収（アブソーブ）＜、自分の体内に取り込むのを苦手としているためだ。

それでも修練に時間を費やせば中堅クラスか、上の下くらいの魔法は習得できただろうが、一流と呼ばれる魔法使いたちとは比べるべくもない。覚えるならば適正のある干渉魔法と付与魔法を伸ばすべきだ。そうニルファナに助言を受け、初級の魔法以外にはこれといった中遠距離攻撃を有していなかった。

これまでの戦い、シュイは瞬発力を頼りに敵との間合いを詰め、応用の利く付与魔法を鎌に施して切り抜けてきた。敵が少数であればそれでも問題なかった。しかしながら、大多数の敵を相手に接近戦を挑むのは相当なリスクがあり、大勢の兵に守られ、遠方から攻撃を仕掛けてくる弓手や魔法使いには反撃もままならない。傭兵のランクが上がるにつれて困難な任務に従事するようになってから、シュイはもう一段階上の強さを身につける必要性を感じていた。

自分の長所を活かすならば付与魔法と干渉魔法を応用し、攻撃魔法に代わる戦法を見出す必要がある。それを如何に実現するか、シュイは特訓を開始した。まずやってみたのは、滅祈歌の使用時にやったように付与魔法を遠くに飛ばせないかということだった。実際に試してみてできないこともなかったのだが、直ぐに魔力が尽きてしまうことがわかった。

ならば、と今度は基礎魔法と干渉魔法の組み合わせで威力の底上げができないかを試してみた。様々な攻撃魔法に思いつく限りの干渉魔法を上乗せし、毎日のように検証を行った。

その結果、＞補足せし魔弾（ルーン・ブリッド）＜という魔法の効果に注目した。これは術者の視野と相手の魔力に感応して対象を追尾する魔力弾を放つものだ。＞集束する雷（ライトニング・ボルト）＜や＞燃え盛る火炎（ファイア・ボルト）＜などと並び称される基礎の魔法でもあり、熟練の魔法使いが使用したとてそれほどの破壊力は望めない。とどめを差すよりは牽制して相手の隙を作るのに使われることが多いが、威力の割に制御が難しく、追尾した魔弾が接触するまで存在維持に術者の魔力を食う。使いようがないわけでは

ないが欠点が多く、覚えたところであまり見向きされる魔法ではない。難易度が同程度で他にいくらでも強力にして広範囲に被害をもたらす魔法があるため、みんなそちらの習得に移行する、というわけだ。使用が困難な魔法を使えるというのは魔法使いのステータスのひとつなのだが、これに関してはその範疇から外れている。

そんな残念な魔法、＞補足せし魔弾（ルーン・ブリッド）＜をどうにか実戦レベルにするべく、シュイは他の魔法を組み合わせ、新魔法の開発に乗り出した。

真っ先に解決すべきは持続時間に比例して威力の減衰が著しいことだった。折角集められた魔力が風圧で少しずつ四散してしまうのだ。シュイは拡散を防ぐために通常拳大ほどの球体を豆粒大にまで圧縮し、風の抵抗を受けにくい楕円形に形状変化させ、更には表面に硬化を施した。それをスムーズに行えるようになるまで、実に半年余りを費やした。

元々強化魔法は効果を出すまでに時間がかかるものが多く、基礎魔法に応用するにはすこぶる効率が悪い。実際、習得を開始した当初は強化魔法から魔弾を射出するまでに２０秒ほどの時間を要していた。だが、そこは祈歌による作用の高速化によってある程度改善された。後は反復を繰り返すことによって思考を省略化し、少しずつ発動時間を縮めていった。

残る問題は発射台となるための筋力と瞬発力だった。腕だけに強化魔法を施すと射出の勢いが強過ぎて抑えが利かず、足元が泳いでまともに狙いを定められなかった。その欠点を克服するため、足を強く踏み込む直前に＞韻踏み越え（リズム）し歩を以って＜を使用し、その勢いのままに突きを繰り出し、最高速に達した瞬間に＞韻踏み越え（リズム）し歩を以って＜を解除。同時に魔弾を＞解放（リリース）＜。言うは易く、行うのは洒落にならないほど難しい。厳密に過ぎる魔力のコントロールが必要とされるが、全ての歯車が噛み合った時のコストパフォーマンスには目を瞠るものがある。

＞補足せし魔弾（ルーン・ブリッド）＜を格上げした＞刻穿ちし閃（ラピディティ・スカージュ）＜。移動中にも使え

るのが最大の利点であり、かつ誘導性もわずかに保たれている。このわずかに、というのがポイントだ。目標に対して一直線に突き進むように見えるが、敵が照準から外れると速度を落とさずに軌道を変え、屈折する。追尾というには程遠いが、角度で表すと最大で３０。の軌道修正がなされる。最高速度に達した時にはその角度も半分以下にまで落ち込むものの、威力は格段に跳ね上がる。

シュイはこれまでの戦いにおいてこの特性が、敵が強者であればあるほどに有効であることを理解していた。熟練の戦士は回避行動を取る際に無駄な動きを極力少なくする。もっといえば紙一重の動きで避けようと体が勝手に反応する。その方が反撃行動に移りやすいためだ。

だが、この攻撃は超高速でありながら軌道が変化するため、ただでさえ避けることが非常に困難。至近距離であれば逃れる術はない。射程は大人の歩幅に換算しておおよそ五十歩から六十歩ほどといったところで決して短くはない。上級攻撃魔法と比べて派手さはないが使われる敵にとってはいやらしい攻撃である。

だが、その完成はレイヴ・グラガンとの闘いなくしては成し得なかった。練習時にどうやっても拭いきれなかった無駄が、この一戦を通じて削ぎ落とされるに至った。

「多分生まれて初めて、おのれの全てを余すことなくぶつけられました。もやもやとしていたものが吹っ切れた気がします。感謝しますよ、シュイ・エルクンド」

「……感謝」

「文字通りに受け取らなくても結構です。心残りはありません、さぁ、とどめを」

シュイは胸を大きく上下させているレイヴを見、それから自分が手に持っているボロボロの鎌を見て顔をしかめた。まるで白アリに食われた木の板だ。どう見ても切れ味はよくなさそうだった。修繕しなければとても実戦では使えないだろう。

シュイは諦めたように肩を落とし、そのまま寝そべっているレイヴに向き直った。
「――その前に、知っていることを話してもらう約束だったな」

セーニアのジヴー遠征に関する仔細を聞き終えると、シュイはじゃあ、と言ってその場を立ち去ろうとした。
「ま、待ってください。……それは、我々をこのまま見逃すということですか」
ふらふらになりながらも立ち上がったレイヴは、納得がいかなそうな顔をしていた。命が助かるのにどうして不服そうなのだ、と思わないではなかったが、全く理解できないわけでもない。もしもエミドとの戦いの折に情けをかけられていようものなら、こちらとて複雑な心境になっただろう。
「聞きたいことは聞けたし、もう用はない。あんたさっき俺に礼を言ったけれど、こちらにも似たような気持ちはあるしな」
エミドの時とは違う意味で、この一戦は忘れ難いものだった。満ち足りた時間を与えてくれた敵を今直ぐに始末する気にはなれなかった。直接的な恨みがあるわけでもなし、何より最後に見舞った一撃は明らかにレイヴの一撃が上回っていた。勝った気が全くしないのにとどめを刺すのは何かに負けた気がする。ただし、その正体が何なのかまではわからなかったのだが。

「……はぁ、甘いですねぇ。そこは人生経験の差ということで割り切ればいいものを。闘いが終わったばかりで少し気が高ぶっているだけではないのですか？」
露になった黒髪の男の顔に目を細め、レイヴが腰の両脇を支えながらぐっと背中を伸ばす。
「きっと後悔しますよ？　勝負は最後まで立っていた者が勝ち。そこらの子供でも知っている理屈だと思いますけれど。大体、あなた

もここで、その目で見たはずです、ルクセン教の者たちの無残な死体を。そちらの雇い主が我々を生かして返して、果たして納得してくれるのですか」

シュイはだらりと下がった左腕を持ち上げ、脱臼した肩を嵌め直した。

「――ぐっ、つうぅっ。……ふぅ、そちらこそ妙な言い草だな。こちらを心配しているように、あるいは死に急いでいるようにも聞こえる」

「……それこそ誤解です、プライドの問題ですよ。ま、今ならそう悪くない気分で死ねるという点には異論もありませんが」

レイヴはそういうもののシュイとピエールが頼まれたのは侵入者の排除であり、別に殺せと言われたわけではない。侵入者がここから出ていってくれればイヴァンからの依頼は果たされるのだ。

彼の名前を伏せた上でシュイがそう言うと、レイヴがやっとのことで体を起こし、ズボンについた埃を軽く叩き落とす。

「排除って、基本的に殺害の意ではありませんかねぇ……」

「見解の、というよりはギルド内での隠語の相違だな。戦士と戦士が合意の上で行った決闘、当事者以外に異論を挟ませる気はない。そして、いにしえの時代から決闘の敗者は勝者の言うことに従うものだ」

そういうシュイの口調から、しかし貴賤に似た感情は感じ取れなかった。

「……ふむ」

「ものはついでだ、どうせなら一度死んだと思って暗殺稼業から足を洗ったらどうだ」

「――ミスティミストを抜けろ、と？」

「そうは言っていない。けれど、あんたほどの力の持ち主が人を傷つけるためにしか剣を振るわないのは惜しい、というか勿体ないだろ」

「……は？」

「大体、俺だって本当はそっちを覚えたかったんだよ。＞響き渡り（ネル・）し神代（ディスカルブ）の弔鐘＜ってやつ。それを使えればわざわざ苦労して＞固有魔法（オリジナル）＜なんか覚えなくても済んだのに。俺がどれだけ頑張っても使えなかった魔法をあんたがいとも容易く使ってるのを見てどんだけ落ち込んだか、そこんところわかってるのか」

「い、いや、そんなことを言われましても」

ぶつくさと文句を零し始めたシュイに、レイヴは困った顔になる。

「大体あんた、家族はいないのか」

「……さてねぇ、今頃はどこで何をしているやら」

束の間、レイヴはモーザを殺した後の数日を昨日のことのように思い出した。彼の屋敷にあった金品を換金し、孤児仲間の住む家に置いて誰にも告げることなく姿を消した時のことを。音信不通になって久しい今も時折、あの時の仲間たちが元気でやっているだろうかと思わないではなかった。突と込み上げてくる懐かしさを溜息にして吐き出す。

「ってことはいるんだよな。そいつらはあんたの死を悲しんでくれないような情の薄い連中なのか」

レイヴは返事をしなかった。否と答は決まっていたが、人情に訴えるのも柄ではなかった。

「その力を他のことに役立てようって気にはならないか」

尚も畳みかけるシュイにレイヴが眉をハの字にした。

「あのですねぇ……人としての禁忌を散々冒してきた私が、今更誰かを救いたいなどと考えると思うのですか？　よしんばそうなったとして、私の今までやってきた罪が消えるわけではありません」

「罪、か。悪いことをやってるって自覚はあるんだな。エミド・マスキュラスにはそれすらなかったぜ。それに、そういった考えを持っているかどうかはそこまで重要じゃない。嫌々やるなら尚更、苦痛になるし罰にもなる。そっちの方が贖罪の理にも適っているだろ

う」
「……む」
「善悪の基準は必ずしも当人が決めるものじゃない。あんたの思惑がどうあれ、その行為によって救われた人が一人でもいるならば、その人にとってあんたの行いは善行に相違ない、違うか？」
「それは……俗にいう偽善ではないですか？」
「くだらない。そんなもの、俺に言わせれば曲りなりにも前に進もうとしている人間を小馬鹿にするための唾棄すべき言葉だ」

得てして人の心は手前勝手なものだ。前に良が付こうが邪が付こうが変わりない。虚栄心や自尊心を満たすために善行をして、結果として誰かが救われるならそれでいいのではないか。シュイはそう考えていた。倫理に添う行為で対価を得ることを偽善と呼ぶならば、この世には偽善しか存在しなくなるだろう。他人に尽くしたいという思いも裏を返せば自己愛なのだから、心の指針に対して善悪を語るのも虚しいだけだ。二つに割り切れるほど人間は単純じゃない。その意味で、やはりエミド・マスキュラスは人間ではなかったのだろう。

「あなたの価値観も相当変わっていますねぇ。ひとつ確認ですが……エグセイユの身柄はどうするんですか？」
拾い上げた刃の曲がった細剣にレイヴの表情が曇ったが、一息入れて強引に鞘に押し込んだ。
「どうするって言われても、別に、としか。確かに俺にとっては害悪以外の何物でもないけれど、レテ村でやつがあの場に駆けつけなければ野盗の代わりに大勢の村人が殺されていたんだろうし、結果に関してだけは責める気もない。むかつくけどな。ピエールが殺されていたとなれば仇を討たなきゃならないだろうが、そうなっていない以上こちらからすることは何もない。むかつくけどな」

――や、やはり根には持っているようですね。
レイヴは乾いた笑いを返す。シュイは予備のクリップでフードを留め直すと、レイヴに背を向けてスタスタと歩き始めた。
「……いいでしょう、今回だけは勝者の顔を立てましょうか。生きているエグセイユに会ったら言伝をお願いします。我々は一旦ギルド本部に撤収する、侵入地点まで自力で戻るように、と。死んでいたら、忘れてくださって結構です」
シュイは振り返らずに右手を軽くかざし、しっかりとした歩調で足早に去っていく。

――まだそんな余力があるとは、やっぱり完敗ですかね。
通路の階段を降り始めたシュイのしゃんとした後ろ姿を見て、レイヴが苦笑いを浮かべた。
一方で、後ろからの呟き声にシュイは、痩せ我慢に決まっているだろう、と唇を歪めた。せめて最後くらいは勝者らしく立ち去りたいとくだらぬ見栄を張っただけのことだ。
シュイはレイヴの視線から逃れると灰色の壁にどっと寄りかかり、懐に忍ばせていた水筒を口につけて乾いた喉を潤すのだった。

――――

「……引き分け、か」
ピエールとエグセイユの戦いの場に戻ったシュイは、痛んだ左肩を抑えながらぽつりと呟いた。と、足を投げ出すようにして倒れていた赤髪と青髪の男二人が肘で何とか体を支え、揃って顔を起こした。
「ばっかやろ、こいつ強えよ。誰だよ、あんなやつちょちょいのちょいだって言ったのは」

「……てめえ、そんなこと言いやがったのか。ぜってぇぎたぎたにしてやる」
エグセイユががくがくと震える腕を何とか伸ばし、上半身だけ起こして傍に落ちていた剣を手繰り寄せる。
「……そこまで言ってねえ。勝手に妙ちくりんな罪状を継ぎ足さないでくれるか。見りゃわかるだろうけれどこっちだってへとへとなんだ、今日はこれ以上体を動かしたくない。――それにしても、随分派手にやり合ったんだな」

シュイが周りを見渡しながら呆れたように言う。壁も天井も、もちろん床も巨大な刀傷だらけであり、辺りには抉られた壁の残骸がそこら中に散らばっている。格子模様など見る影もない。こんな狭い場所でよくもまぁこれだけ暴れられるものだ、と感心してしまうくらいだ。範囲魔法を使おうものなら自分まで巻き添えを食いそうなスペースで、二人は相当に無茶な戦闘を繰り広げたようだった。
「それ、おまえにだけは言われたくねぇ。どうせさっきの地震もおまえかレイヴのどっちかだろ、戦っている最中に滅茶苦茶足場が揺れて水差されまくったんだぞ」
地震など起きていただろうか、とシュイは不思議そうに首を傾げた。必死で戦っていたせいで周りへの影響などほとんど気にかける余裕がなかったのだ。

シュイは膝を立てて座っているピエールに手を差し出し、伸びてきた手を引っ張り上げる。
「っと、ふう、あぶね」
ピエールもシュイに負けじと疲弊しているのか、足取りは歩き始めた幼児のように覚束ない。かといって、シュイにも肩を貸してやるほどの余裕は残っていなかった。
「くそが……てめえが五体満足でここにいるってことは、レイヴの旦那は殺られちまったってことか。はっ、普段から偉そうな口叩い

ているくせに本当、使えねぇやつ」
「……おまえは人の話をちゃんと聞いているのかよ。どうやったら俺が五体満足に見えるんだ」
黒衣から肌まで引き裂かれ、肩は填めたものの全身傷だらけだ。具体的に言うと、あと数時間も放置しておけば出血多量で死ぬレベルである。
「んなことはどうだっていい。……どうなんだ、答えろコラ」
人に聞く態度じゃないなと思いつつもシュイは応じる。
「本当なら説明する義理もないんだが、侵入地点まで戻るようにって伝言を頼まれている」
「なんだぁそりゃ、てめえ俺を始末する気がないってのか！　俺の存在なんか取るに足らないってのか！」

何故そうなる、と思ったが口にはしない。人の自尊心を徒に刺激してもろくなことにならない。以前なら手拍子で受けていたが、今はそれくらいには賢くなっているのだ。
「んなもんこっちの勝手だろう、おまえだったら死にかけた俺を見て嬉々と剣を振るうんだろうがなぁ」
それを聞いてエグセイユがいきり立った。一言多い点は改善されていないんだよなぁ、とピエールが頭を掻いた。
「……ちっ、生きてるってことかようぜぇ、あんの恥さらしが」
「そう言う割になんでか、嬉しそうだよな」
「誰がだ！」
エグセイユが噛みつくように叫び、剣を構えた。が、その足はがくがく震えていてまともな勝負にならないことは明白だ。ほとほと難儀なやつ、とシュイは首を振った。
「なにもおまえが必死こいて頑張らなくたって、俺たち近いうちに勝手に死ぬかも知れないから放っておいてくれよ。本番はこっからだしな」
エグセイユの瞳が揺れ、ピエールが口を結ぶ。

「……おまえら、本気でセーニア軍と戦りあうつもりか？　傭兵が何人か加わったくらいでジヴーがあの精鋭軍団に勝てると思ってるのか？」

「うるせえな、やってみなきゃ……わかんねぇだろ」

言い返したピエールの歯切れは悪い。必ずしも本心ではないのだろう。単に現実を認めたくないだけだ。強いやつには勝てないという現実を。

「はっ、自信なさそうだな。美意識で動くことが多いやつほど早死にするんだぜ」

シュイがぐっと呻いた。ついさっき死にかけたばかりなだけに、その軽い言葉がやたらと重く聞こえた。レイヴが仕掛けてきた最後のひと勝負に付き合って良かったのか、悪かったのか、未だに明確な答えは出ていなかった。

「――いこうぜ、シュイ。とっとと手当しないとな」

「……あぁ」

覚悟を決めた様子のピエールを見て、シュイはうなずいた。

――そうだったな、ここまできたら、やるしかない。

シュイはエグセイユに一瞥だけくれると、既に歩き出していたピエールの後ろに続いた。

～後継　ｓｕｃｃｅｅｄｅｄ　ｔｏ　ｗｉｓｈｅｓ～

茶色い革鎧を着込み、剣を手にした騎士たちの隙間を、影がじぐざぐに通り抜けていく。影が薄まり、兵たちと背中合わせに珈琲色の髪の男が現れるや否や、剣を構えて立ち尽くしていた数人の騎士の首が赤く染まり、どっと身を横たえた。

後ろを振り返った若い騎士が声を震わせる。

「だ、駄目です隊長！　敵の動きが早過ぎてとてもついていけません！」

男との接触からそう時間は経っていなかったが、擦れ違う度に数人が倒されている。数十人近くいた騎士たちは既に十に満たない数にまで減らされていた。次に自分が倒される可能性は膨れ上がるばかりだ。

「騎士たるものが泣き言を申すな！　おのれっ、たった一人相手になんというざまだ！」

怒声を上げた隊長にイヴァン・カストラがゆっくりと振り返る。

「虎穴で好き勝手に暴れた自分たちの愚かさを悔やむんだな」

「くっ、ミスティミストの連中はどうした！　まだ追いついてこんのか！　どこで油を売っている！」

そんなことを聞かれても部下たちには答えようもない。ただ顔を見合わせるばかりだった。

「未だに来ないなら期待しない方がいい、何も虎は一匹だけとは限らん」

そう結ぶなり、イヴァンが肩を広げて袖に仕込んでいた短剣を両手に持ち、三枚刃を開いた。かと思うとその場から再び消え失せる。

隊長の男が視界を一瞬横切った影に反応し、剣を振った。が、刀身の横腹を叩かれて体が横に泳ぐ。その直後、ずぶりと不吉な音が

聞こえた。イヴァンの左手に握られていた短剣が革鎧を貫き、胸に潜り込んでいた。
「がっふっ……」
「た、隊長！　――このっ」
深々と胸部を抉られ、吐血した騎士隊長を見止め、両隣にいた二人が慌ててイヴァンに剣を振り下ろした。次の瞬間にはイヴァンの姿は消え、二つの剣が打ち合わされる。危うく同士討ちしかけて剣を引っ込めた騎士二人に、宙に身を躍らせていたイヴァンが回転蹴りを見舞った。
「がはっ！」
「ぐぇっ！」
斬りかかった騎士たちは時間差なく昏倒し、後頭部を床に打ち付けた。イヴァンは蹴った勢いのままに騎士たちの一団を飛び越えて右手に着地。直後、着地点を予測して後方から放たれた騎士の炎弾がイヴァンに迫る。
次の瞬間、魔法を放った騎士たちの方が後ずさりした。驚くべきことに炎の塊はイヴァンの体を焼くことなく、そよ風のように両脇を通り過ぎていった。高位の魔法や辰術の使い手には抗魔力も備わっている。辰力の制御を極めつつあるイヴァンに、今や生半可な魔法は通用しなかった。
「――ま……魔石を」
なす術なく固まっている騎士たちに、床に横たわっていた隊長が血を飲み込みながらも命じた。我に返った騎士たちは目配せを交わし合い、一斉に懐から何かを取り出した。
「無駄なことを、……むっ」
手の平に握り締められている赤色の燐光を帯びた魔石を見て、イヴァンの顔が一瞬険しくなった。
「連絡用魔石、だと。きさまらが使えなくしたはずではないのか」
「……残念だったな、これは魔力の含有量を多くした特別製だ。既

にこの環境下で試し済みさ！」

勝ち誇った中年の騎士が手を掲げた。天井へと向かって一斉に飛び立つ赤い光を前に、イヴァンがちらりと後ろを振り返る。連絡用魔石の光は天井に吸い込まれることはなかった。窓に張り付く羽虫のように行き場を失い、右往左往していた。

唖然とする男たちの目に光の反射が映った。知らぬ間に大部屋の中は半球状の透過壁に覆われていた。

「――結界っ、まだ味方がいたのか！」

それが誰の手によるものかイヴァンにはわかったのだろう。口角を微かに持ち上げる。

「――撤退、撤退だ！」

即座に自分から遠ざかっていくセーニア騎士たちを見て、イヴァンは一瞬駆け出そうとしたが、通路の奥からの気配に気づいて足を止めた。

先頭を走っていた男が部屋から出かけた瞬間だった。影から巨大な拳がぬっと現れ、勢いよく地に振り下ろされる。

寸（ズン）という重々しい音が響き、床にひび割れが広がってゆく。忽然と現れた巨体の男がゆっくりとその拳を持ち上げると、革鎧の中にひしゃげた血肉と骨の塊、それに砕けた床が収まっていた。頭や顔の形など跡形もない。

その脇を一人の騎士が通り抜けようとしたが、今度は巨体の後ろから金属棒が横に飛び出てくる。避ける間もなく首から突っ込んだ騎士はもんどり打って背中を床に叩きつけられた。

「……かっ……ゲホッゲホッ」

大男の後ろから黒髪を後ろで三つ網に束ねた魔族の少年が現れ、伸縮棒を引っ込めながら部屋に入ってくる。年の頃は十五、六といったところだった。

「逃がすわけにはいかないな、知っていることを洗いざらい喋って

もらうよ」
　獣族の大男がその後を追うようにずいと前進する。二人はそれぞれサイズ違いの青い服を纏っていた。
「悪いな、主犯格には逃げられちまった。けど、裏切り者はあらかた片付いたぜ」
「ご苦労だったな、リック、イルナヤ」
　リックハルド、そしてそれより頭三つ分は低いイルナヤが、横並びになって退路を塞ぐ。
　前門の虎、後門の狼。挟まれた騎士たちは逃げ切れないと悟ったのか、再び腰に下げていた袋に手を突っ込み、鮮やかな緑色の球体を取り出した。だが、先ほどと違ってその表情は希望に満ちてはいなかった。
　騎士たちの様子に何かを感じ取ったのか、イヴァンが素早く膝を屈伸させ、勢いよく走り出す。果たしてその予感は的中した。騎士たちが次々にそれを自分の口の中に放り込む。イヴァンが舌打ちしながらも一瞬躊躇した若い騎士を見止め、側面から前方に回り込んで肘打ちを食らわせる。
「……ぐっ、ふっ」
　倒れた男の口から緑色の飴らしきものが零れ落ち、床に叩きつけられて割れる。その割れ目から流れ出た液がしゅうしゅうと、床の塗料を熔かしていく。時を同じくして四人の騎士たちがぐらりと傾き、横倒しになった。
「こいつら毒を！　……この、吐けよこら！」
　イルナヤが一番近くにいた騎士の喉に手を突っ込んで何とか吐き出させようとする。が、イヴァンが肩に手を置いてそれを止めた。万が一、皮膚にも侵食する系統の毒であればイルナヤもただでは済まない。
「……セーニア教……国に……栄光、あれ！　……ぁ」
　イルナヤに抱えられた男が目を見開いたまま硬直し、口と鼻から血の混じった泡がこぽこぽと零れ出す。喉の奥からしゅうしゅうと

音が聞こえ、抹茶色の煙が立ち上った。嗅ぐに堪えない悪臭が漂い始め、イルナヤが顔をしかめる。唾液で汚れた手を男のズボンに念入りに擦り付け、ゆっくりと立ち上がった。

「……あれ、おっかしいな、あっれー？」

その隣ではリックハルドが、豪快な彼にしては珍しくばつ悪そうな顔をしていた。どうやら腹を殴って飴を吐き出させようとしたらしい。が、いささか強く殴り過ぎてそれが元で死んでしまったようだ。杭でも打ち込まれたように腹筋を陥没させられた騎士にイルナヤは、馬鹿力が、と顔をひくつかせる。

「喋っても生き残れる可能性がないと踏んだか。ま、連中がやっている行為を省みればそういった考えも生まれるのは致し方ないが」

さして同情した様子も見せず、イヴァンが屍と化した四人を冷やかに見下ろす。

「それにしたって病的な忠誠心だよね、生き残る可能性を自分で潰すなんて。何がこいつらをそんなに駆り立てるんだろう。宗教による一体感？　それとも愛国心？」

「見誤るな、兵たちに毒を持たせている時点でろくな国じゃない。そんな国に命を賭ける価値があるはずもない」

「……だよね」

「がっはっは、騎士だってのにだらしねえなぁ。どうせ死ぬなら正々堂々戦って死ねばいいのによ」

リックハルドが胸を張って豪快に笑うと、イヴァンとイルナヤは顔を合わせて溜息をつく。

「リック……ハルドみたいに何も悩まずに生きられれば、人生どんなに楽なことか」

イヴァンの目線に気づき、イルナヤが慌て気味に略称を修正。イヴァンは後ろで腹を抑えて呻いている騎士を指差す。

「リック、悪いがそいつを抑えつけておいてくれ。無論、ちゃんと

手加減した上でだ」
「わ、わかってるぜぇ」
冷たい目線と共に念を押されたリックは、慎重に男の両肩を抑えた。

「さて、おまえたちの目的を聞こうか、要点を簡潔に、手短にまとめろ」
「し、知らんっ、知っていたとしても言うはずがなかろう！」
挑発的な口調の割に顔色は著しく悪い。まだイヴァンの肘打ちのダメージは残っているようだ。
「……どうやら、自分の立場があまり理解できていないようだな」
イヴァンの尖鋭的な眼光に騎士が思わず顔を逸らす。
「イルナヤ、アレを出せ。時間が惜しい」
「……え、本気ですか？」
イルナヤの顔が露骨に曇った。次には早くしろと強く催促され、急ぎ懐からガラス瓶を取り出した。蓋を開けたそれをイヴァンの方に差し出すと、イヴァンがその中に指を突っ込んだ。

「本来こういったやり方は好まないんだが、こちらも仲間を大勢殺されているんでな、意地を通すのはそちらの勝手だが、心意気を汲んでやるほど優しくはないぞ」
「な……何をする気だ」
ほどなくして、イヴァンが瓶から指を出した。指先には斑色のクリームのようなものがついている。調味料だ、とイヴァンが呟く。
「な……え、調味……料？」
その言葉に男はほっとしたようだったが、イルナヤが畳みかけるように言う。
「練ったワサビとカラシを丹念に混ぜ合わせたものさ。粗塩とショウガも入っていたっけ」
「な……」

「粉山椒が抜けている。と、それはともかく、おまえも大勢の仲間を殺されて悔しさと悲しさを味わっていることだろうと思う。だから、一生分の涙をプレゼントしてやろうと思ってな」

淡々と続けるイヴァンに、騎士の瞳が恐怖で彩られた。その細い顎ががくがくと揺れる。

「俺も半信半疑だが、これを目に塗った者はあれよあれよという間に舌が滑らかになるそうだ。黒しか見えなくなるかも知れないという欠点があるが、そうそう死ぬこともないだけに下手な毒よりも優秀だ」

「……あ、あぁ」

顔を真っ青にした男にイヴァンが「しかしだ」と助け船を出す。

「男子三日会わずんば刮目してみよ、といった名言もある。人は一日にして成長するものだ、もしかしたらおまえもさっきよりは賢くなっているかも知れない。念には念を入れて今一度、問い質そうか」

一度の部分を殊更強調して、イヴァンが片目を瞑った。その顔は男の未来を暗に示している。この船の切符を手に入れねばどうなるか容易に想像がついただろう。

「おまえたちはどうやって＞魔遺物（ヴァイーラ）＜の存在を知った、手に入れて何に使うつもりだ。――イルナヤ、数えろ」

「了解ー。――じゅー、きゅー、はーち」

イルナヤの間延びしたカウントダウンと共に、黄土色とも黄緑色ともつかぬものに彩られたイヴァンの指先が容赦なく迫ってくる。何とか逃げようともがくがリックハルドに肩を押さえられてはびくともしない。周りに転がるのは仲間たちの死体。あらゆる意味で逃げ場を失ったセーニアの若き騎士は、残り3秒にしてその恐怖に屈した。

――――

気絶させた兵士をリックハルドに担がせ、イヴァンたちはシュイたちと合流すべく通路を走る。と、通路の先に二つの人影を見止め、イルナヤが伸縮棒を伸ばした。
「――待て、イルナヤ」
「……イヴァンさん？」
戸惑ったようにイルナヤはイヴァンを見た。
「約は果たしたぞ、イヴァン」
ボロボロの黒衣を纏った男と傷だらけの革鎧を着た色黒の男が通路の奥から現れた。イヴァンは二人に、次いで二人の更に奥に目線を動かし、眉根を寄せた。
「……おまえたちだけか、他の者は」
「残念だけど、俺たちが敵と接触した時には既に全滅していた。もっとも、敵の方も残っていたのはミスティミストの傭兵だけだったが」
「……そうか」
イヴァンたちはそれぞれにやりきれなそうな表情を浮かべる。
「テクラのオバハンも逝っちまったのかぁ。――あれ、おまえの格好、あれか？　シュイ・エルクンドか？」
「……そうだが、あんたは？」
シュイが目の前の大男を見上げた。抱えている騎士が子供に見えるくらいにがっしりとした体付きをしていた。
「シュイ、そいつ見覚えあるぜ。確かリックハルドって元賞金首だ」
元、とシュイがピエールに訊き返す。
「傭兵になったばかりの時だからうる覚えだけど、あまりに強くて追っても無駄ってことで賞金を外されちまったらしい。重犯罪者の中では罪も軽かったみたいだし、割に合わなかったってことだろうな。もっとも、返り討ちにされた賞金稼ぎは数知れずって聞いてるけど」
「……イヴァンさん、協力者って傭兵なの？」
イルナヤが眉をひそめて二人を見る。汚物を見るような目付きに

二人がむっとする。
「つうか、俺たちの手助けって必要あったわけ？　おまえら全然ピンピンしてるじゃねえか」
ピエールが前にいる三人を見て溜息混じりに言った。言われてみれば確かに、ここにいる三人はほとんど手傷を負っていないようだ。
「おい黒いの、見た目で判断するなよ。こっちは一週間寝る以外戦いっ放しで煮過ぎた菜っ葉のようにくたくたなんだ」
「……なんだぁ、このガキわ」
肩をいからせて前に出ようとするピエールにシュイが苦言を呈する。
「おい、ピエール。恥ずかしいからおこちゃまと張り合うな」
「あ、あぁ悪い」
「浮浪者におこちゃま呼ばわりされる筋合いはねえよ、あー臭い臭い、汗臭い説教臭いついでにおっさん臭い」
――この糞ガキが、誰のせいでこんなボロボロになったと思ってやがる。
鼻をつまんでみせたイルナヤにシュイが右腕をゆっくりと引いた。ピエールが少々白けた表情で何する気だ、と腕を掴む。
「放せ、目上に対する礼儀を教えてやるのが大人の役割ってもんだろ」
「……おまえね、数秒前に言ったこともう忘れたのか。どんだけ都合の良い頭の構造してるんだよ」
そんなやり取りを交わす二人を尻目に、リックハルドがじれったそうに呟く。
「なんでぇ、そいつがそんなざまだってことはそっちが当たりくじだったのかよ」
――当たりくじだぁ？
遠まわしな誉め言葉に聞こえないこともなかったがそれより聞き捨てならぬ言葉。ミスティミスト屈指の傭兵レイヴ・グラガンとの

戦いを当たり呼ばわりはないだろう。
「……あー、シュイ、あまり深く考えんでいい。そいつは戦うのが好きなだけだ」
「ってよりはもう根っからの戦闘狂だよね。三度の飯より拳を合わせるのが好き、みたいな」
溜息混じりのイヴァンの言葉をイルナヤが受け取る。
「それよりイヴァンさん、ついでにそいつらも始末しちゃった方がいいんじゃないの？　今なら楽に片付きそう――いだ！」

不穏な言葉を吐いたイルナヤをイヴァンが窘めようとした矢先、鈍い音が響く。すぐさまイルナヤが頭を押さえてしゃがみ込んだ。リックハルドの後ろに控えていたのは見覚えある黒髪美人。ピエールの顔が綻び、連鎖反応でシュイの顔が歪む。
「イルナヤ、恩ある者になんという言い草ですか。彼らはあなたの代わりに手強い傭兵たちと闘ってくれたのですよ」
イルナヤは呻きながら涙目で後ろを、分厚い聖書を手にしたヴィオレーヌを振り返る。
「ね、姉ちゃん酷い、角で殴らないでよ。そいつら四大ギルドに所属する傭兵だぜ？　言ってみればイヴァンさんの不倶戴天の敵だろ」
「真に敵だというならば、このような姿になってまで約定を果たそうとすると思うのですか」
「いや、それは……その」
「めっ、ですよ」
「……はい」
人差し指を立ててイルナヤをきつく叱るヴィオレーヌの姿にピエールが見惚れた。
「この感情なんだろう、ドキドキする」
「そんなおまえに俺は心底ムカムカする」
――心配しなくてもミルカに提供するネタはたっぷりとあるから、帰ったらいくらでも説教してもらうといい。てか一遍痛い目あった

方がいいな。生きて帰れたらミルカへのお土産は鞭と縄にするか。

「くだらんお喋りはそれくらいにしろ、あまり猶予は残されていないぞ」

覆面の結び目を引っ張り、顔を露にしたイヴァンに、シュイがはてと首を傾げる。

「猶予って、どういうことだ？」

「この施設が定期的に地中を移動していることは教えただろう。なるべく早くにここを離れる必要がある。――思ったより事態は混み入っているようだ。まずは砂船まで移動するぞ」

～後継　ｓｕｃｃｅｅｄｅｄ　ｔｏ　ｗｉｓｈｅｓ２～

早朝。鳥たちの囀りが聞こえ、ポリー支部へと急いでいたシャン・マクシミリアンが足を止める。路傍にある葉がほとんど残っていない楓の細枝には、喉が灰色で尾の長い、見目可愛らしい鳥がいた。小さな顔を羽毛の中にうずめてぷるぷると震えている。確かあれはセキレイだっただろうか。シャンは頼りない記憶を探るように遠くを見る。

寒風が肌に滲みる時期になると、北国ルクスプテロンから渡り鳥たちが越冬するべく南方の国へ移動する。セキレイは雌が巣作りをし、雄が巣の場所を守る鳥だ。

能動と受動。どちらが欠けても人の営みは成り立たない。その役割は必ずどちらかが担わなければならない。自分のように自由気ままにやっている傭兵がいる一方で、雑務に追われている傭兵たちもいる。今までとは対極の立ち位置。視点が変われば世界も違って見える。同じ景色を見ている者の葛藤や苦労を映し出す。それだけにシャンは彼らの有用性、必要性をありありと感じるのだった。

歩みを進めるたびに、くるぶしの高さまで降り積もった枯葉が乾いた音を鳴らす。冷たい空気が喉に心地良い。一方でそんな日常らしい日常を満喫していると、激戦区で戦っているだろうシュイたちに申し訳なくも思う。

それなりの年月をセーニアで過ごしていたこともあって、シャンも騎士団の屈強さは耳にしていた。軍学校でも選りすぐりの者しか入団できぬ狭き門。そこを潜り抜けた後も毎日のように厳しい訓練が、実地任務が待っている。そんな兵たちが四万も揃っているとなれば誰もが尻込みするだろう。勝敗はともかくとして、どうにか無事に帰ってきて欲しかった。

支部長の業務で一番やるせないのは傭兵の死亡報告、脱退報告だ。

シルフィールの傭兵が任務を失敗する頻度は他ギルドと比べるとかなり少ないが、それでも全くないわけではない。たとえ顔見知りでない傭兵であっても同じギルドを選んだ仲間意識はある。死んだと聞けば落ち込むし、それが見知った者となれば長く尾を引くことだろう。先立って魔物との戦いで亡くなった者の報告書をしたためた時には幾度となく筆が止まった。

物思いから抜け出すと、枯れ木のアーチを過ぎたところだった。支部に面している通りに差しかかったところで、傍らから小さな声で名前を呼ばれた。

「――あぁ、アマリスじゃないか、おはよう」

挨拶をしながらも、シャンはおやっと小首を傾げた。アマリスの声は空でもわかるほどに聞き慣れているはずだったが、張りのないその声はいつもと様子が違う。見れば表情の方もあまり浮かないようだ。あるいは生理かとも思ったが、それを口に出しては二枚目半。思いとは裏腹に無難な言葉を選ぶ。

「どうしたんだい、珍しく元気がないじゃないか。――と、あれ、今日はアミナは一緒じゃないのか？」

きょろきょろと回りを見るシャンにアマリスは返事をせず、合わせた手の人差し指を突き合わせているばかりだ。そのくせ、眉毛をハの字にしたままちらちらと上目遣いを向けてくる。その様は後ろ足だけで立って餌をねだる小動物さながら。

言い出しにくそうにしている彼女にシャンも何かを感じたのだろう。その顔から疑問の色がすとんと落ち、不安げな表情に変化した。

「――まさか」

「その、まさかなの。ここ数日、難しい顔をしてたからボクも気になってはいたんだけど、嫌な予感が的中しちゃったみたいで。――朝起きたらテーブルの上にこんなものが」

アマリスが白い封筒を差し出し、シャンの視線が下がる。白い長

方形の上隅には小さくも丁寧な字でアミナ・フォルストロームと記されていた。

シャンは、まいったなぁといわんばかりにドレッドヘアをぐしゃぐしゃと掻き乱した。内容を確認するまでもない。彼女は雌のセキレイにして匹夫の勇。どんなに勇ましい男よりも、能動的なのだ。

――――

遠くに聞こえていた砂船の駆動音に混じって呼びかける声が近くに聞こえ、シュイは薄らと目蓋を開く。まどろんだ闇には、いつもよりずっと近い、しみの形までもはっきりとわかる天井の陰影が映る。

「あれ、素で寝ちまってたか、悪ぃ」

下からはピエールの詫びる声。二段ベッドの上段で寝ていたシュイは一息つき、起こしかけていた頭を枕に埋めた。

「いや……なんだ」

「……そのさ、あいつの言うこと信じていいと思うか？」

あいつ、と訊き返すシュイに、ピエールが続ける。

「イヴァン・カストラだよ、治療中に言っていただろ。セーニア兵から聞き出したって話だ」

あぁ、と相槌を打ち、シュイは船に乗り込んだ後の記憶を引っ張り出した。

セーニアの騎士の話と状況を総合すると、今現在セーニアは二つに割れている可能性が高いということだった。年明けに教皇アダマンティスが突然倒れ、それ以来何人かの側近たちがよからぬことを画策しているのだという。アダマンティスの妹、コンラッド・ディ

アーダに嫁いだ長女のカティスも若くして病で亡くなっているが、どうやらアダマンティスの病状もカティスのそれに似ているらしい。

基本的に国の要人の病状には緘口令が敷かれるものだ。病の教皇に謁見できるのはごくわずかな者たちであるはずだが、長くないという噂が騎士団の中にもしっかりと蔓延している。つまりは忠誠心の薄い何者かが話を外部に漏らしているのだろう。

そして、それを好機と捉えた、今まで主流派ではなかった側近たちが、なんとか教皇派を出し抜いてやろうと考えた。そこに接触したのがルクセンの裏切り者なのでは、とイヴァンは推測した。強力な＞魔遺物（ヴァイーラ）＜の存在を仄めかし、主導権を握ろうとする急進派を炊きつけたとすれば一応辻褄は合う。

長らく古代人たちの遺産を守ってきたルクセン教徒たちだが、ヴィオレーヌの話によると今回のような騒動になるのは決して初めてではないそうだ。過去にも相当数の信者たちが＞魔遺物（ヴァイーラ）＜を守るべく他勢力と闘い、殉死していった。

いっそのこと＞魔遺物（ヴァイーラ）＜を壊してしまえばいいのでは、と思わないでもないが、ルクセン教の者たちもそれくらいのことはとうの昔に思いついていた。実際、数百年以上前に一人のルクセン教徒が一見鉄クズのような＞魔遺物（ヴァイーラ）＜を破壊しようとしたらしい。

だが、その行いは想定を遥かに超えた悲劇を招く。そこに存在した地下施設はおろか、地上にあった町までも巻き込んで灰塵と化したという。

＞魔遺物（ヴァイーラ）＜の中には下手に扱うととんでもない大災害を引き起こす物も存在する。守らなければならない財宝であると同時に、長年ルクセン教の者たちを掴んで離さない呪い、先人たちの負の遺産でもある。

実際、その運命に嫌気が差した者は後を絶たなかったようで、何年か前にも上層部の一人が仲間を連れて行方知れずになったそうだ。その時にも幾つかの＞魔遺物（ヴァイーラ）＜が持ち出されていたことから、今回

のジヴー遠征は彼らと少なからず繋がりがあるのでは、というのがイヴァンたちの見解だった。セーニアは権力争いの延長上に〉魔遺物（ヴァイラ）〈を必要とし、裏切り者たちはルクセンに対する不満があったということで確かに手を組んでいてもおかしくない。

「確かに筋は通っているんだけど、なーんか引っ掛かるんだよな。あいつが賞金首とかそういうのは抜きにして」

ピエールの意見には同意できる部分も多々あった。何が気になるかというと、筋が通り過ぎているのだ。仮説や推論にはどこかにひとつくらいは無理や矛盾、疑問といったものが混じるものだが、イヴァンの説明は整然としている。それが返って気味悪さを助長する。

そして、シュイが引っかかっている理由は他にもあった。レイヴから聞き出した情報と一点だけ、食い違う話があったのだ。

「――口にしたことについてはとりあえず信じても大丈夫だと思う。元々あまり嘘をつかない性格だったし、言いたくないことは濁すか沈黙するタイプだ」

イヴァンは秘密主義者だが偽り人ではない。言いたくないことはぼかすか口にしない。逆に言えば、口にしたことは彼が言っても差し支えないと判断した本当のことだろう。もちろん、何かを隠している可能性については否定しきれない。

「元々、か。おまえ、一体あいつとどういう関係なんだ？　細かい性格まで把握してるくらいだ、ただの知り合いってわけでもないんだろ？」

シュイは腕を組んで考え込む。改めて問われてみると一言で表すのは難しかった。細い根っこ同士が絡み合っていて解けない雑草のようなものだろうか。

「同郷の士……、いや、もう少し近しいかな。俺の面倒を見てくれていた人の従兄（いとこ）なんだ。今はおまえも知っての通り、一傭兵と一賞金首、犬猿の仲さ」

「――面倒ってのは、つまりヒモってことか」
ピエールの楽しげな声が癪にさわり、自然と鼻息が荒くなる。
「アホか、普通の意味でだ。子供の頃世話になっていたんだよ」
「……んー？　なんか計算が合わねえ気が。イヴァン・カストラとおまえってそんなに年が離れているのか？　あいつも人族だし、いいとこ二十代後半ってとこだろ」
「いや、それなりに離れているよ。おれ、まだ十八歳だし」
「あーそっか、そんなら別におかしく……はあああぁぁぁ！？」
素っ頓狂な声を上げたピエールにシュイが身を竦ませた。
「ば、馬鹿、夜中に大きな声出すなよ。隣で連中だって寝てるんだぞ」
「あ、あぁすまねぇ。ってか、十八だ！？　ってことは俺と初めて出会った時は――十四！　なんだそれ、わっけー！　まだがきんちょじゃねえかよ」
そう。こういう風に過剰反応されるのが嫌だったのだ。以前から子供扱いされることが好きではなかっただけに、年齢を偽るというニルファナの案は望むところだった。
「そうか、だからハーベルさんの、ってか後見人の推薦が必要になったんだな」
「そうだけど……傭兵に年齢なんか関係ないだろ？　あんなにしっかりしているアミナ様だって俺とひとつしか違わないし」
「いや、そりゃあそうだけどさー、なんか釈然としねえよなー。なんで今まで黙っていたんだよ」
不機嫌そうな口調にシュイが苦笑を漏らす。
「それについては心から謝る、訊ねられたら喋ろうとは思っていた。けれど、必要がない限りはどうしても喋りたくなかったんだ」
「それはつまり、以前は俺を信用していなかったってことだよな」
「おまえだけじゃなくて、周りの人間を頼っていいものか確証が持てなかった」
「――はっきり言ってくれるじゃねえか、理解はできなくもないけ

どちっとショックだわ。火傷ってのも嘘だったんだな」
「なじってくれていいよ、どんな理由があろうと偽っていたのは取り消せない。自分が一番嫌ってやまない行為を他人にやったんだから」
沈黙の後に舌打ちが鳴り響く。そりゃ怒るよな、とシュイが目を瞑る。
「拳の一発くらいは覚悟してるよ」
「馬鹿か、そんなんで足りるかよ。……けど、まぁ、応援に来てくれたってことでトントンにしてやらんでもない」
「……はは、そりゃ助かる」
「んで？　聞いたからには話してもらえるんだよな、年齢を偽っていた理由ってやつを」
わかってる、とシュイは寝そべったまま自分の左手を掲げ、手の平にある傷に視線を映す。
「――俺はセーニアに追われている重犯罪人だ。もし本人だとバレたら死刑はまず避けられないだろうな」
細かく話せば根が深い。寝れなくなりそうなので要点だけを掻いつまむ。
「セーニアに……イヴァン・カストラもそうだったよな。一緒に行動していたのか？」
「いや……、同じ目的を持った結果として、似通った立場になっただけだ。エスニールの乱って聞いたことあるか」
「あ、あぁ。大まかにしか知らないが、エスニールってセーニアに反乱を企てた国だろ。失敗したって聞いているけど」
もう聞き慣れた言葉だったが、それでも心に寒風が吹き抜けた。反乱という言葉に世間は少なからず罪を連想するだろう。一方的に殺され、犯罪人にまでされた仲間たちを思うと心が絞られるようだった。
「実際にはそれはでっち上げで、俺とイヴァンは彼の国の出身だ。

村の市場で買い物をしていた時、騎士団がなだれ込んできたことを今でもはっきり覚えているよ」

逃げる住民たちを嬉々として追ってくる帝国兵たち。追いつかれて肩を切り裂かれる赤子を抱えた母親の姿。それを皮切りに、瞳に怒りを滾らせて反撃に転じる村の大人たち。胸に寒さとも熱さともつかぬ慟哭が過ぎる。視界が歪む。

「……じゃあ、汚名を着せられた上に国まで滅ぼされたってのか」

眉間の辺りをなにかが揺れ動く。シュイは混濁とした感情を鎮めるべく、努めてゆっくりと息を吸う。ほどなくして濁りが沈殿し、頭が一時澄む。何より、怒りの込められたピエールの声が、それに一役買ってくれている。

「一緒に遊んでいた友達も、買い物でいつもおまけしてくれた果物商人も、俺の親代わりだった人も殺された。頭が真っ白になって、暗転して、その闇の中に血の色をした呪言が、くっきりと浮かび上がった。それを口ずさんだ結果がこの体たらく、今の俺ってわけさ」

シュイの脳裏に一枚絵が浮かんでは遠ざかる。魔法道具を扱っていた商隊での日常。古代文字に精通していた鑑定商人。得体の知れない魔法道具の数々。好奇心旺盛な商人の子供たちとの度胸試し。虫に食われた禁書の一頁。一瞬にして紙面から消失し、頭に刻まれた文字を。

～後継　ｓｕｃｃｅｅｄｅｄ　ｔｏ　ｗｉｓｈｅｓ３～

目覚めは唐突にやってきた。背中を押されたと思う間もなく、天井にダイブして顔面をもろに打ち付け、再びベッドの上に落下。熟睡から手荒く覚醒させられたシュイは鼻を抑えて声にならぬ声を上げる。一方で下段のベッドからは異常に気付いたピエールがのそのそと布団から這い出してくる。

「あれ……、もしかして今揺れなかったか？」

「……ぁっ！　……たぁっ！　……今のでその程度の認識かよ、よっぽど疲れてたんだな」

揺れというほどには穏やかではなかった。幾ら二段ベッドで天井が近かったとはいえ、寝ている自分と１ｍ近い距離は空いていた。船体が何かに乗り上げたのだろうか、とシュイは首を捻る。

「ちょっと気になるな、外の様子を見てく――おわっ」

喋りながらも木梯子に足をかけた途端、船が斜めに大きく傾いた。足に絡まった梯子ごとシュイの体が反対側の壁へと投げ出される。

「あっぶね！」

咄嗟に迫ってくる反対側の壁に両手をつき、体ごと突っ込むのを死守。片足で梯子に体重をかけ、もう一方の絡まった足を梯子から急いで抜き、そのまま軽やかに着地。そんなシュイを見てピエールは「律儀に梯子で下りる必要あったのか？」そう言った。

「もっと気にするべきことがあるだろう！　ただごとじゃないぞ」

シュイはそう返しつつも胸の前で素早く魔印を切り、広域感知魔法を展開する。魔力の波が壁を貫き、外部へと広がっていく。その間も砂船の上下振動は止む様子がない。船体が度々上下に揺れ、天井からはぱらぱらと埃や塵が降っている。

「確かに荒っぽい操縦だなぁ、寝ているんだからもう少し落ち着い

て」
「――もいられなそうだ。どうやら追われてるっぽい」
「――追われてる？」
訝るピエールにシュイは丸型の透過窓を指差す。
「ちょっと外見てもらっていいか、右手の方」

あいよ、とピエールが示された透過窓に近づき、顔色を変えた。
薄闇に吹き荒れる砂塵を淡い光が照らし出す。右後方にはこちらの砂船とは比較にならぬ巨影が映っていた。
「でけぇ、魔物かなにかか？　……って、何か外から声が聞こえるな、小さくてよく聴き取れないけれど」
「壁が分厚いからな、やっぱり緊急事態っぽい。外に出るぞ」

身支度もそこそこに甲板に出ると砂の混じった強風が襲ってきた。
シュイは腕で顔を庇いつつ側面を確認。やや白んできた空の下にはたくさんの砂丘が並んでいる。砂丘の狭間には途切れ途切れに光を帯びた地平線が見える。夜明けが近い。風を切る音に混じって聞こえてきたのは魔法で拡声された警告。
『繰り――、害意が――ば速度を緩めて停船――、内部を検(あらた)める。さもなくば――と乗員たちは砂の海にて――――ことになる。――繰り返す』
右舷側を高速移動する影がきらりと光った。こちらと同じ砂船のようだが、二回りくらいは大きい。止まるように促しつつも敵船の甲板の辺りからは光が散乱し、ひっきりなしに炎弾や雷弾が飛んでくる。こちらの砂船の周りを囲むように着弾したそれが砂塵を高々と吹き上げる。威嚇射撃というわけではない。こちら側の操舵手が巧みに方向転換して避けているのだ。この分では速度を緩めた瞬間に蜂の巣にされるだろう。

「流石に起きたようだな」
マストの方からかけられた声に二人が同時に振り返る。青い外套に身を包んだ長身の男は眠たそうに目を擦りながら二人から視線を逸らす。
「敵襲か、イヴァン」
「どうもそうらしい。＞黒禍渦（バリー・クラウド）＜の余波のせいか視界がかなり悪い、見張りも接近に気づくのが遅れたみたいだな。見ての通り後方から二隻、左手にも一隻いるらしいが今は確認できない。大方、迂回して先廻りするつもりだろう。セーニアめ、侵略した国から接収した砂船をしっかり活用しているようだ」
「切り抜けられるのか？」
「楽観視はできない、どうやら速度はあちらの方に分がある。風魔石の純度に差があるのかもな。操舵手の腕の差がなければとっくに追いつかれているだろう」

攻撃を仕掛けてきているのは一隻だけだが、それを避けながらも他の一隻からの追従を逃れているのだ。イヴァンの指摘通り、操舵の技術はこちらが上に違いない。
「あれ、他の連中はどうした」
「リックとイルナヤは数時間前に仲間の船に乗り換えた、セーニアとの決戦の前にやってもらいたいことがあったんだが、裏目に出たな。ヴィオレーヌは今も夢の中だ」
「いつの間に……。ってか、この状況で寝ていられるのか？」
「旅慣れているからな、ぐっすりだ。あの様子だと朝まで起きんな」
いや、それは答えになっていないだろう。
「一緒の部屋で寝ているのかよ」
ピエール、おまえも気にするポイントが少しずれてる。

「それで、どうするんだ」
「おまえたちは、攻撃魔法の心得はないのか？」

イヴァンに訊ねられたシュイはピエールに期待の眼差しを送る。
途端、ピエールはしかめっ面を作る。
「おい、こっち見んな。あんなばかでかい船相手に投げナイフでどうこうってのはないだろ」
期待通りの返事が返ってきたことに満足し、肩をすくめる。
「俺も無理、初級の攻撃魔法しか使えないし」
「なんだと？　フォルストロームの時は確か――」
「あれは例外中の例外っていうか、インチキつかっただけだ」
確かに、三年前はイヴァンの一味を相手に大暴れしたが、攻撃魔法の破壊力、射程増加に関しては滅祈歌の恩恵によるところが大きい。今現在、滅祈歌の使用はニルファナに固く禁じられている。いつぞやの仁王立ちが目に浮かび、シュイはぶるりと身を震わせる。禁を破れば、……想像することすら躊躇われる。下手に強くなった分、手心を加えてくれる可能性も低いはずだ。ギルド支部長が公衆の面前で美女に折檻されるなど前代未聞の大事件である。
現状では、レイヴとの戦いで使用した＞刻穿ちし閃（ラピディティ・スカージュ）＜ならばある程度の効果は見込める。しかし、イヴァンたちはあくまで期間限定の味方。できるなら切り札の存在は隠しておきたい。考えた末に出た結論は、丸投げだった。
「確かヴィオレーヌさんって＞伝道師（セージ）＜だったよな、結界とか張れないのか？」
「可能だが、こちらの船とて決して小さくはない。全面ガードするには対象がでか過ぎ――と！」
船が右方向に傾き、遅れて左舷すれすれを大きな炎弾が横切った。
立っていた三人が咄嗟に足を開いてバランスを取り、踏み止まる。
前方の砂丘が中腹の辺りから噴火し、数秒後には高さが半分以下になった。
「ふぅ、今のはちょっと近かったな。このままじゃ時間の問題だぜ」
ピエールが汗ばんできた前髪を拭う。

「一旦停船して降伏したフリして歩兵戦ってのは？」
ピエールの提案にイヴァンの眉根のしわが深くなる。
「そんな行き当たりばったりな作戦でこの砂船が使い物にならなくなったらどうする。船というのは大きくとも緻密な計算に基づいて作られている。船体が少し損傷しただけでも操縦は難航するんだ」
「それはないんじゃないか？　向こうにとっても砂船は希少なはずだ、できれば無傷で拿捕したいはずだぜ」
「希望的憶測に縋るのは賢くない、大体にして敵の規模がわからん以上得策とは言えん、この付近にいるのがあの三隻だけと限ったわけでもないのだからな」
確かに、あの大きさであれば詰め込めば数百人くらいは乗れそうだ。仮に騙し討ちが上手くいったとしても途中で援軍を呼びに逃げられたらねずみ算式に敵が増えていく。第三勢力と手を組んでいることが知られればジヴーにとっても良い方向には働かないだろう。
「……できれば採りたくなかった手段だが、こうなっては仕方ない。シュイ、ラードックを呼んできてくれるか。さっきまで酒場で仕込みをしていたはずだ」
「へ、ラードックってあのバーテンダーのことだよな、あの人も戦えるのか？」
ピエールの言葉に、白いシャツとシャコールグレーのベストをきっちり着こなした白眉の紳士が頭に思い浮かぶ。こうも揺れてはバーの酒棚も結構悲惨なことになっていそうだ。割れたグラスや酒瓶の掃除に追われているかも知れない。
「いや、戦闘はそれほど得意としているわけじゃない。だが、あれでいて砂船の操縦はお手のものだ。彼の腕ならこの状況でも逃げ切れると思う」
「なんだ、力づくじゃなくて済む方法があるならはなっからそうすりゃいいのに」

口を窄めたシュイに、イヴァンはどこか諦めたように溜息を吐く。
「そうしなかった理由を察して欲しいものだな。……先に言っておく、覚悟しておけ」
そう言うイヴァンの表情は、薄闇のせいではなく青褪めているように見える。そのレアな表情に、シュイとピエールは顔を見合わせるばかりだった。

～後継　ｓｕｃｃｅｅｄｅｄ　ｔｏ　ｗｉｓｈｅｓ４～

船室へと続く板接ぎの階段を軽快に降りていく。酒場への通路を進む間にも船体が左右に傾いていたため、両側の壁面に手を突っ張って転倒を阻止しながら進まねばならなかった。

シュイが酒場の直ぐ近くまできた時、微かに酒精の匂いがした。靴が液体をぴしゃりと跳ね上げるのに気づき、視線を落とす。と、薄赤紫色の液体が五歩ほど先のドアの隙間から少しずつ漏れ広がっているのが見えた。色々な果実酒がブレンドされてしまったのだろう。芳醇な香りが廊下に立ち込めている。

ドアと床との隙間には応急的に畳まれた使い古しのタオルが水漏れ防止、もとい酒漏れ防止に詰められているが、中で零れているのはかなりの量なのだろう。布の含水量はとっくに飽和して滲み出している。この状況で室内に踏み込むのは憚られた。

「あの、すみませんラードックさん。今お手隙でしょうか」

そうと訊ねた後で、いささか間抜けな問いだったかと反省した。内部が相当な散らかり具合だろうことはわかりきっている。一人では片付けもはかどるまい。

「あぁ、申し訳ないですがもう少し待っていただけますか。今下手にドアを開けると閉じ込めた酒が一気に廊下へ流れ出てしまうので」

分厚いドアのせいで声が少しくぐもって聞こえたため、本人の肉声と断言はできなかったものの、この喋り方はラードックに相違ないだろう。発言からは未だ相当量の酒が床を浸していることも読み取れる。

「念のため確認ですが、この零れた酒はもう処分ですよね」

「え、ええ、もちろん」

「わかりました、とりあえずこちらに流れてくるのを堰き止めてみます」

シュイは床を滑る液体の上に鎌の柄を立て、そのまま＞―アイス・リロード（突き立てし氷雪の牙）＜を詠唱。柄に隣接する部分から、床を濡らしていた酒に円状に霜が降りていく。

凍結領域がドアの下部にまで行き渡り、酒を吸っていたタオルが凍りつく。わずかな段差から廊下側に垂れ落ちていた酒の流れが完全に止まる。ラードックの感嘆の声が聞こえた。

「おぉ、これはありがたい。今のうちに――」

それから待つこと数分、中の酒を汲み取れたのだろう。シュイの目の前で背の低いドアがゆっくりと開いた。

足を踏み入れると今までとは比べ物にならぬほどの酒精の匂いが鼻についた。酒の弱い者であればこの酒気だけで酔っぱらえるのではと思えるほどだ。

ほとんど予想していた光景と大差なく、酒場は散々たる有様だった。カウンターの椅子の半分が横倒しになり、昨日まで棚にきっちり並べられていたはずの酒瓶が幾つか欠けていた。ボトルの背が低い物や重心の低い物はほとんど無事なようだ。反して、部屋の隅に倒れていた大樽の継ぎ目部分に太い亀裂が入っていた。廊下に流れ出ていた酒の大部分はあれのようだ。おそらくはタルが倒れて壁面に叩きつけられ、割れてしまったのだろう。

板張りの床には拭き取られた酒に混じってグラスや酒瓶の残骸が散らばっていた。砂船の舵を右に左に一杯に切り上げ、砂丘に乗り上げたりしてるわけであるからして、何事もなく済むはずがない。

煩雑な部屋の中で、ラードックは苦笑いを浮かべながらも右手に箒を、左手に塵取りを手に、細かなガラスを手際よく攫っていた。

「エルクンドさんでしたか、いやいや本当に助かりました。散らかっていて心苦しいですが、御礼に無事な酒を使って特製のカクテルを――」

ラードックが掃除道具を船室の壁に立てかけようとしているのを

目にして、シュイが焦ったように手を突き出す。
「い、いえ、この有様をスルーして注文できるほど非常識でも酒狂いでもないので。ここに来たのは別件です」
「左様でございますか、お気遣い痛み入ります。最近の若者には珍しく、道義を弁えていらっしゃる」
ラードックは目を細めて納得したようにうなずいている。お世辞ではなく本気で言っているその様子から、シュイは目の前の紳士の普段置かれている境遇にそこはかとない不憫さと共感を覚えた。常識的な自分と同じく、人間からちょっと離れかけている連中に振り回されてばかりなのだろう。

「たかがあれっぽっちのことで褒めすぎですって。ええっと、イヴァンからラードックさんに言伝を預かっています。『出番だ、と伝えればわかる』って言っていたんですが……わかります？」
言った端からわけもなく首の辺りがひやりとし、シュイははて、と襟の辺りに手をやった。
「――出番、ですか」
ラードックは噛み締めるように笑うと、直ぐに赤い蝶ネクタイを取り外す。続いては棚から茶色い紙袋を引っ張り出し、几帳面に畳まれた私服を取り出していそいそと着替え始めた。

――あれ、この人、前からこんなんだったか？
唐突に、目の前の初老の男の雰囲気が変わったような気がした。シュイは違和感にごしごしと目を擦りつつ、視界にいる目の前の男の顔を見直した。そこにいるのは紛れもなくラードック、のはずだったがどうも人相が一致しない。シュイの頭の中にはラードックがまるで違う人間の精神に乗っ取られたのではないか、という馬鹿馬鹿しい考えが浮かんでいた。
眉を潜めるシュイを差し置いて、着替え終わったラードックはカウンターの奥、ハンガーに引っかけてあったゴーグルを手に取り、

ハンカチで軽くレンズ部分の埃を拭った。その目の輝きは、昆虫採集に目を輝かせて虫とり網を手にした少年さながらだ。腕を組み、首の間接をぽきぽきと鳴らしている。

「あ、あの……？」

「まことに遺憾ながら片付けは後回しですな、いざ、戦場へまいりましょうぞ」

戦場、と呟くシュイに、ラードックはにこやかにうなずいた。

狭い廊下を縦に並んだシュイとラードックが、甲板へ通じる階段へと歩を進める。おおまかな事情を説明するシュイにラードックはしきりにうなずき返す。

「ふむふむ、やはり追われていたのですね」

あれだけ派手に動いていれば船の挙動で察しもつくのだろう。ラードックは事態をそれなりに把握しているようだった。

「どうやらセーニア側の探査網に引っかかってしまったみたいです。まさかこんなに南下しているとは及びもつかなかったのでしょう。先ほどから必死に逃げているようですが、相手の乗っている大型船が速くて振り切れないみたいで」

「ほっほぅ！　大型船のこれ以上の速度増加は技術的に難しいとされていたはずなのですが、もしや新型ですかねぇ。いやいや、弱りましたねぇ」

口振りとは対比的にラードックの表情は明るい。底抜けに、という言葉がつくとより適正かも知れない。下手をすれば砂漠の真ん中で立ち往生しかねないこの状況に、何をどうしてそこまで活き活きとしているのか。仄かな不安が胸の中ですくすくと育っていった。

再び甲板の上に戻った時には、左舷側の敵船がより一層接近していた。こちらの船が砂丘の傾斜を登っていく最中に、後尾の辺りに男たちが集結しているのが眼下に映った。接舷後の白兵戦に備えているようだ。

「かなり距離を詰められているな。――あれ、イヴァンのやつ、またどこかいったのか」
シュイの声に反応し、柵の上に身を乗り出していたピエールが視線を敵船から甲板に戻す。
「あれ、すれ違わなかったか？　あいつならヴィオレーヌさんを起こしてくるってよ。放っておいたら起床時に刺激的（スプラッタ）な対面をすることになりかねないってさ」
「……刺激的（スプラッタ）か、そういうことね」
イヴァンの言わんとしていることがそれとなく呑み込めてきた。が、むしろそうなるまでヴィオレーヌが起きないと危惧していることにまず突っ込みを入れるべきだと思うのだがどうか。いやそれとも、まさか本当に起きないのだろうか。
悩んでいるシュイの横で、ラードックが遠近両方の敵船を一瞥する。
「あまりのんびりしてもいられないようですね。先に操舵室へいっていま――うわっ」
「――せい！」
ラードックが言い終える前にピエールが距離を詰め、ラードックの腕を掴んで引き倒し、それと同時に素早く抜刀。斜め後方からラードックを狙ったように飛んできた炎弾に対応した。
切っ先から生まれた烈風が炎を真ん中から二つに割る。一方が砂の海に、もう一方が甲板を跨ぎ、船の鉄柵を弾いて逆方向の砂海へと着弾。小規模な爆発を引き起こす。
「直ぐそこですし、俺たちも一緒に行きますよ」
「いや、これは……お手数をかけます」
ラードックは恥ずかしそうにそう言い、腰を上げた。

操舵室では慌しく掛け声が交わされていた。何を読み取るのかよくわからない大小の計器類と何となくわかる操舵輪を前にして、乗

組員たちがそれぞれ持ち場につき、息を継ぐ間もなく情報をやり取りしている。切羽詰まった口調から察するにあまり状況はよろしくないようだった。

「――おい、部外者が勝手に入ってるんじゃねえ！　素人は操縦の邪魔だ！」

一番近くにいた船員と思しき若い男に怒鳴られ、シュイとピエールがむっとした。その後ろから、ラードックが二人を割り入り、怒鳴った若い船員に静々と歩み寄る。

「……あれ？　てめえはあれだよな、酒場のジジイだよな。ははぁ、さては酒でも振る舞いに――」

「――こんの、大馬鹿野郎がぁ！」

「……え？　――ぐふぇ！」

一瞬にして、若い船員の左頬に拳がめり込んでいた。そのまま突き飛ばされ、後ろにあった壁に背中を打ち付ける。男を殴ったのはシュイでもピエールでも、ラードックですらなかった。幾分年を食った船員が部屋の端から一気に走り込んできたのだ。当然、シュイとピエールにはそれを止めることも出来ただろうが、無礼な発言を浴びせられた手前、敢えてスルーしていた。

「ってぇー……、いきなりなにしやがっ……って、副船長！」

男が頬を押さえながら固まった。

「タァコ！　誰に向かって舐めた口を叩いてやがる！　――ラードックさん待ちかねましたよ。本当すんません、こいつは後できっちり躾けて起きますんで勘弁してやってください」

副船長と呼ばれた男が殴り倒されて頬を押さえている男の頭に手をやり、強引に頭を下げさせて自らも詫びた。

「い、いやいや、私はもう引退した身ですから素人と変わりは――」

「――とんでもねぇ！　未だあんたを超える砂船の操舵士には会ったことありませんて。あ、操縦交代するんですよね。リグネ、話は聞いていたな？」

「ええ、どうかお願いしますラードックさん。ちょいと俺の手には

余っちまう」
　三十くらいの褐色の男が舵から離れずにそう言った。
「ふむ、それでは仕方ありませんね――コホン」
　目を瞑って咳払いし、再び目を開くと共に、ラードックの眉が外側に上向いた。
「全く、あなたたちのおかげで何年もかけて集めた貴重な酒がかなり潰れてしまいましたよ。本来なら耳を揃えて弁償してもらうところです」
「い、いや、それは流石にきついなぁ。敵船も一隻ってわけじゃないんですよ」
「おぉっ、この手触り懐かしいなぁ」
「聞いてないし……」
　リグネと入れ替わるようにして、早くも操舵輪を愛おしげに撫でているラードック。それを見て、副船長はがっくりと肩を落とし、周りの船員たちが慰めにポンと肩を叩く。
「ちゃんと聞いています。そもそも敵船に見つからないよう慎重を期せば何事もなく収まったのですよ。たとえ＞黒禍渦（バリー・クラウド）＜だろうと言い訳にはなりません。緊急時を乗り切るのではなく、招かぬことこそ優秀な船乗りの条件なのです。教えませんでしたっけ？」
　表情は穏やかながらもその言葉は厳しい。落第のレッテルを貼られた船員たちは顔を見合わせ、がくりと項垂れる。落ち込みつつあるテンションを察したのか、ラードックが「とはいっても」と声を高める。
「起きた事を責め続けても事態は一向に収束されませんからね。こちとら酒場の片付けも残っていますので、手っ取り早く打開しますよ。――船首の方位、敵船の方角とおおよその距離を１０秒刻みで通達。上級範囲魔法の接近も怠らぬよう頼みます」
「は、はい！」
　テキパキと指示を始めたラードックに、船員たちが慌てて返事を

し、所定の持ち場につく。
「さーてと、手始めに左手の砂丘を滑って針路を１１０に取りましょうかね。カウント３０から、始めてください」
――滑って？
シュイが前方に目を向けると、なるほど、周りのものより幾分傾斜のきつい砂丘が左手に見える。だが、滑るという意味がわからない。一旦上って下るという意味だろうか。隣に目を向けると、ピエールは俺に振るなと言わんばかりに手の平を上に向けた。
「カウント入ります。３０……２９……２８……２７……」
「速度、きもち上げてください」
魔石の制御棒を握っている船員がうなずくと同時に、緑色の制御棒が光量を増す。
「見張り台から報告入りました。景色と地図を照合、我が船は現在針路１９０前後、座標はルトラバーグ南区域８－２を航行中です」
「敵船、一隻目は２２０メード北北東、もう一隻は３００メードほぼ真北に位置しています。双方共に大型船です」
一つ指示する間に二つの報告が舞い込む。ラードックは舵を小刻みに動かしながらテーブルに置いてある地図を見る。
「早速ですが追加事項を。今から近い方の敵船を1号、遠方の敵船を2号として扱え、以降発見順にナンバーを振ってください」
「了解！」
そんなやり取りをしてる間に、後ろからイヴァンがヴィオレーヌと仲良く手を繋いでやってきた。
「遅いぞイヴァ……ん？　ぷっ、なんだよその顔――」
「……何か文句でもあるのか」
起こす時に蹴られでもしたのだろうか、イヴァンの頬に赤い足型がありありと残っていた。思わず口を押さえるシュイとピエールに、イヴァンが不服げな顔を向けた。よくよく見れば手の方も繋いでい

るわけではなく、水色無地の寝巻姿で未だ目の開いていないヴィオレーヌの手首を掴み、半ば引きずってここまできたようだ。あれだけ揺れている状況でこの状態を保っているとは、見かけによらず神経が太いらしい。

口振りから察するに当人も顔がどういう状態かは気づいているようだ。あまりご機嫌がよろしくなさそうなのでそれ以上その話を続けるのはやめておく。わざわざ相手の構えた剣に突っ込んでいくような真似は避けたい。

「別にのんびりしていたわけではないぞ、時間がかかったのは事情を知らぬやつに安全索をつけるよう指示していたからだ」

「安全……なんだって？」

「安全索、丈夫な命綱と言葉を置き換えてもいい」

「……そこまでの備えが必要なのか？　今はもうラードックさんが操縦しているけれど、何も変わった様子は。既に場を仕切り始めちゃっているくらいだし」

いちいち大袈裟なんだよ、という言葉を言い含めたシュイに、イヴァンはずいと中三本の指を差し出す。シュイがそれに圧されるようにして後ろに下がる。

「――俺がこの船に乗ってから、ラードックが舵を握る状況に出くわしたことは三度。内訳は砂海に潜む魔物に襲われた時に二度、今一度が砂賊との戦いに巻き込まれた時。そして、その前例の全てにおいて嘔吐する者が続出したことを言い添えておく。また後でネチネチ言われては敵わんからな」

揺るぎなき前例を突き付けられたシュイは、それに驚くと同時にイヴァンの一言の多さにへそと唇を同時に曲げるという器用なことをやってのけた。ただ、シュイとしては乗り物酔いに苦しんだことなど今までに一度たりとてなかったため、やや誇張し過ぎているのではという思いも否めなかった。

「……今おまえが考えていることはなんとなーくわかるぞ。それは多分、昔の俺も誰かに聞かされて似たような心証を抱いたからだろ

うな。それを踏まえた上で、今の想定を最低でも数倍は悪化させておくことを奨めておく。俺の親切心をないがしろにするしないはそちらの勝手だが、万が一にも船内は汚すなよ」

「いやですねぇ、まるで人を暴れグリフォンか何かのように言うんですから。物事を拡大解釈するのはイヴァンさん唯一の悪癖ですね」

「そういった傾向があるのは否定せんが、な。俺の不吉な予感が外れることを、誰より俺自身が願っているよ」

おどけてみせるラードックに肩をすくめるイヴァン。

笑みを浮かべるラードックの表情にはどことなく凄みがあった。そしてそこには、イヴァンの言葉を頭に留めておいた方がよさそうだと思わせるくらいの何かが、確かに存在したのだった。

～後継　ｓｕｃｃｅｅｄｅｄ　ｔｏ　ｗｉｓｈｅｓ５～

砂丘が船首の突端へと少しずつずれてゆく。ラードックは、ポットにヤカンの熱湯を注ぎ込むように、慎重に修正舵を切っている。その視線は砂丘の更に奥、遠くに舞う砂塵へと向いていた。外に立てられている白旗の靡き方から今は向かい風に切り上がっている状態だ。

「減速一杯、次の指示と同時に帆を張るよう伝達しておいてください」

敵が直ぐ近くまで迫ってきているにもかかわらず、ラードックは速度を落とすよう命じた。その指示に疑問を挟むこともなく、乗組員たちは淡々と作業を行っている。船員に握られている制御棒が点滅を始め、緑光がみるみるうちに弱くなっていった。

「９……８……７……」

「第一、距離残り約１５０メード、第二、距離残り約２００メード」

３０カウントは残り１０秒を切っていた。後方からは番号付けされた二隻の巨船がまっしぐらに向かってくる。視界を席巻してくる白い敵船にピエールは焦りを禁じ得ず、船首と船尾とを忙しなく見比べた。

「おい、なんで速度落とすんだ！　このままじゃ追いつかれるぞ！」

「大丈夫、どんぴしゃです」

「……はぁ？　何言って――えっ」

零。船員がカウントダウンの終を告げると共に船体が大きく揺れた。船首が上へ、続いて右側へ傾き、後尾にあった敵船が大きく横に移動した。続いては砂丘の頂上が視界の右から飛び込んでくる。前方にあったはずの砂丘が僅かな時間で船尾へと回っていた。

――違う、回っているのはこの船だ。

「ちょ、これ、倒れるぞ！」

ピエールが足を大きく開いてバランスを取る。船全体が傾いていることにはそこにいる皆が気づいているはずだ。もし床に林檎でもあれば勢いよく転がって壁に叩きつけられてぐしゃぐしゃになるくらいの傾きっぷり。それでも船員たちは慣れたもので淡々と持ち分を守っている。

「第一、距離１００メード、第二、距離１４０メード。――第一から魔力の質量増大を感知！」

「針路１５０……１４０……１３０……」

唐突に、空が一瞬白く明滅した。

「敵船より魔法が発射されました！　属性雷！」

「――最大加速！」

ラードックと敵船を監視していた船員の声が重なった。見ている景色がほぼ半回転し、敵船の姿を船首の横に捉えたところで緑色の制御棒が再び輝き始める。

船底の後部に設けられた四つの穴から猛烈な風が吹き出し、砂を抉る。時を同じくして二本の綱を握り締めてマストの上から甲板へ飛び降りる船員が二人。反して下に置かれていた帆が二本の縄に引っ張られ、滑車の要領で上昇。帆柱に真っ白い帆が高々と掲げられてゆく。

その時には近い方の敵船から範囲魔法が放たれていたが、先にマストの上にいた船員が着地、持っていた縄を手早く帆柱に結び付けた。張られた帆の真ん中に強い追い風が飛び込み、結ばれた縄からあそびの部分が失われ、ピンと張り詰める。

次の瞬間、ほとんど止まっていた砂船が急加速した。斜めに傾いて倒れる寸前だった船体が、帆が受けた風に支えられて体勢を元に戻す。馬車並みの大きさの雷弾を右舷側にやり過ごし、敵船の左側を擦るように通過。その速度差を目の当たりにしてそのまま飛び移る余裕がないと判断したのか、大船の甲板にいた敵歩兵たちが縄つきフックを次々に投下した。鉤爪のついたフックが二つ、船尾の鉄柵に引っかかったが、乗り移る間もなく備えていた船員に剣で断ち

切られる。みるみるうちに遠ざかる敵船の船尾には、柵を掴んで怒鳴り散らしている騎士たちの姿があった。

ほとんど鋭角のターンを披露したルクセンの船に追従すべく、セーニアの船が二隻、左右に開くように大きく旋回を始めた。だが、ラードックたちの神業とは比べるべくもない。大型船であるということ以上に、地形を利用した方向転換でないことが決定的な差となった。

敵船の旋回は遅れに遅れ、やっと横腹が見えた時にはその姿は豆粒大になっていた。距離を稼いだところで右手にある砂丘の裏手に回り、敵船の姿を見失う。つまりは、相手の視界からも逃れたことを意味していた。

ピエールとシュイが圧巻の操船を褒めちぎる。

「すっげー！　なんだよ今の、もうやばいかと思ってたらあっさりと振り切っちまった」

「驚いたな、船の動きとはとても思えない」

「船体の左半分だけをわざと砂丘の斜面に乗り上げさせたのさ、速度とタイミングを間違えるとそのまま転倒しちまうから内心冷や汗ものだけどな。大型船は減速しても質量がでかいからああやって慣性で進んじまう。ある程度小回りが利く中型船と違って旋回にはそれなりの時間がかかるんだ」

副船長の得意気な説明にシュイは納得したように顎に手を添える。

「あの減速は方向転換の円を極力小さくするために行ったってわけか」

「ええ、まさしく。敵は少なくとも三隻確認されているようですし、船の動きにもどこか余裕が覗えました。大方、敵の友軍が回り込んでいる方角へと我々を追い立てていたのでしょう。一刻も早く振り切った方が得策と判断しまして」

ラードックが片手で操舵輪を動かしつつ、もう片方の手でミニグラスを外し、胸ポケットにしまう。続いて額につけていた薄茶の遮

光ゴーグルを下ろす。間もなく昇ってくる朝日への対策だろう。
「けれど、未だ速度で負けていることに変わりはない。また追いつかれてしまうこともあり得るよな」
シュイの指摘にラードックはにこやかにうなずく。
「この状況、どうやって切り抜ける？」
「簡単なことですよ、敵船が通れなくてこちらの船だけ通れる場所へと誘い込めばいい。こちらの追撃を諦めてくれればお互い幸せになれるのですが、引き返してくれるかは何とも言えませんね。まぁ、指揮官の器量次第ですか。同じ状況下であれば、私があちらの船に乗っていたならまず諦めますけれど」
「……そんなに都合のいい場所があるのか？」
そう訊ねたピエールの横で、イヴァンが船員の横からテーブルに広げてある砂海図を確認。引かれている直線に顔をしかめる。
「まさかとは思うが、ソロンへ向かうつもりか」
「またまたご名答、イヴァンさんに１０ポイント差し上げましょう」
何に使えるポイントだ、と訝るイヴァンに、ラードックは考えておきますと言葉を濁した。

――――

セーニア側の船はシュイたちの乗っているものとは違い、操舵室でも快適に過ごせるよう改築がなされていた。周りは透過壁で前半分の視界は良好。室内も貴族の使うようなクッション付きの椅子が持ち込まれている。また、いつでも喉を潤せるよう食器棚や食料庫までも備え付けられているという手抜かりのなさ。どちらかといえば一般家庭のリビングという風合いだ。
「ソロンの廃墟？　なんだそれは」
紅のマントを身につけた背の高い、厳めしい顔つきの騎士バングルは壁際の椅子に寄りかかりながら前にいる操舵士に訊ねた。中肉

中背の操舵士は座っているバングルの顔色を窺う。やっとのことで船が回頭し終えた時には不審船の姿はどこにも見当たらず、仕方なしにおよその見当をつけて後を追っていた。追い詰めたはずの獲物が手元をすり抜けたとあって、バングルの機嫌はお世辞にもよろしくなさそうだ。

「……ソロンはルトラバーグから西南西に位置する、数十年前の大干ばつで滅びた町の名です。以前から座礁の絶えない地域で船の墓場などという物騒な異名もついているようですが、連中の取った針路からするとその近辺を目指しているのだと思われます。このまま進めば三十分ほどで到着するかと」

浮かない顔の操舵士にバングルが唇を尖らす。

「何か問題でもあるのか」

「は……、その辺りの地理にはさほど詳しくないもので。向こうに地の利があるとするならば、そこに逃げ込まれると振り切られる可能性が多々……あ、いえ、捨て切れないもので」

自分に向けられる視線がきつくなったのに気づき、操舵士が慌てて言葉を訂正する。

気まずい沈黙を破ったのは傍らで控えていた老騎士だった。

「連中がそこに辿り着くまでに追いつける可能性は？　こちらの方が速度は勝っているのだろう」

「確かに速度はこちらに分があるようですが、先ほどの不審船の挙動を見る限り、相当な腕前の乗組員で構成されているはずです。中でも操舵士の腕前は別格、おいそれと認めたくはありませんが私より上でしょう。以上の理由からそこに辿り着くまでに追いつけるという保証は、致しかねます」

操舵士は要点だけを掻い摘んで説明した。もちろん、相手の船がやったことがどれほど曲芸じみたことかは多分に理解している。細かい点を列挙すればいくらでも説明できる。だがおそらく、船乗りでなければその恐ろしさはちゃんと伝わらないだろうとも思われた。

「ふむ、おのれより相手の技量が優れているのを認めるは容易くない」
腕を組んでうなずいている老騎士に操舵士が「恐れ入ります」と頭を下げた。
「……手柄を立てるチャンスをみすみす逃したくはないが、こうなっては仲間の船の索敵次第か」
再び操舵士が何かを言おうとするのを遮って、外から一人、若い騎士が入ってくる。

「バングル隊長、これ以上持ち場の座標から離れては定刻までに戻れなくなります。既にルトラバーグの攻略戦も始まっている頃ですよ。後方支援の統括に抜擢されたディアーダ中隊長は女性ながら厳しい方だと聞き及んでいますし、一旦戻られた方が無難かと」
「ハンッ、あんな小娘に何ができるというのだ。後方支援など無賞必罰の貧乏くじ、主戦場から外された者に対して抜擢という言葉は的確ではなかろう。ま、皇家だからという理由で危険から遠ざけられたのかも知れんがな」
男である以上綺麗な女は嫌いではないが、その下で働けとなれば話は別だ。騎士が女の下についたと後ろ指を差されかねない状況に、小隊長のバングルは苦々しい顔を隠さなかった。
「だからこそです、仮にもあの方は皇族ですよ。加えて、今尚騎士たちの尊敬を集めているナイト・マスターの遺児でもあります。彼女の人気と血統を考えれば敵に回さない方が得策かと」
「それくらいわかっておるわ！　――まったく、攻略戦が聞いて呆れる。まさか魔物をけしかけようなどとは、一体上は何を考えているのやら」
「……お願いですから会議でそのような言動は慎んでくださいよ、今の発言は軍法会議物です。あれほど大規模な砂嵐に突っ込むのは自殺行為、魔物を利用するという突飛な点に目を瞑れば中々の良策では」

愛想笑いする若い騎士に、バングルはフンと鼻を鳴らした。今回課せられた任務はルトラバーグの攻略戦に際し、けしかけた魔物に追い立てられて逃げ延びてきた者たちを手際良く始末することだ。そのために機動力のある砂船に乗ることを許されていた。

既に勝敗は決しているようなものなのに、徹底的に相手を潰す作戦を発案し、採用する上層部には底知れぬ悪意を感じる。そして、騎士の誉れとなりえぬ戦いを下っ端に丸投げしてくるのが何より腹立たしかった。

「失礼します」

バングルが肘の辺りを苛立たしげに指で叩いていると、白い制服を着た乗組員が入ってきた。

「バングル様、見張りから報告です。北西で軍用の照明魔石が上がりました、味方の船が不審船を発見したようです」

船室内にどよめきが上がる。

――どうやら、運はまだこちらに向いているか。

「――よし、敵船のおよその航路を予測、交錯点を割り出せ！　そこへ向かうぞ！」

「バ、バングル隊長！」

ただし、とバングルが前置いてにじり寄った若い騎士を手で制す。

「あと三十分しても追いつけぬようであれば我々は引き返す、それでいいな」

――――

「右舷側に友軍の並走を確認。どうやら、先ほどの合図に気づいてくれたようですね」

若い騎士が遠眼鏡を覗きこみながら呟く。

「だとしても手柄まではやれぬが。合戦の最中にこんな場所をうろついている商船はいまい、ジヴー側になんらかの関わりがあるはず。

拿捕すればきっと色々出てくるぞ」
　貴族然とした長髪の優男は眠そうな顔でワインを傾けていた。その両隣には護衛と思しき年輩の騎士が二名控えている。
「やれやれ、徹夜の任務などどうにも、貴族たる私向きではないな、次からは代理を用意するとしようか」
　――そもそも徹夜の任務に向いている者など。
　若い騎士は名前も顔もわからない誰かに同情しつつ自分以外の誰かであることを祈る。と、そんな自分をアジルが見つめていることに気づき、急ぎ話題を逸らす。
「そ、そういう割に、アジル様は結構楽しんでいらっしゃるようにも見えますが、私の気のせいでしょうか」
「船に乗っていると、不思議と気分が高揚してしまうのだよ。一度でもこれに乗ってしまうと何日もかけて砂漠を横断してきたことが馬鹿馬鹿しく思えてしまう」
「はは、それは確かに、いえてますね」

　開戦から大分時間も経過し、セーニア兵たちの疲労はピークに達している頃だ。そんな状態で熱気を吸い込み、喉の渇きに耐えながらの行軍は辛いものがある。そこへいくと砂船での移動は魔石のコストにさえ目を瞑れば天と地ほどの違いがあった。視野はいつもよりずっと高く広く、巨大な乗り物が船員への命令一つで思い通りに動くともなればちょっとした指揮官気分を味わえる。
　元々数が少なく、今までに軍全体で徴集した数は大小合わせて３０に満たなかったが、上官たちにはちゃんと行き渡っているようだ。小隊長の身分で砂船に乗れたのは存外の幸運と呼んで差し支えなかった。
「それで、敵船との距離は？」
　アジルが操舵士に目を向け、操舵士が爪先立ちして透過窓に目を細める。砂漠に住まう者の視力は総じて高い。アジルでは白い光にしか映らぬ敵船も船員たちは輪郭で捉えられるのだ。

「少しずつですが、確実に縮まっていますね。この辺りは平野ですし小細工もできませんので純粋な速さが物をいいます。おそらく20分ほどで射程圏内に捉えられるかと」
「よろしい、船は大破させても構わん。多少は死人も出ようが、事情を聴ける人間が何人か残っていれば問題ない。ともかく逃がさないことが肝要だ――ん？」

ドアがかなり荒っぽくノックされていることに気づき、一同そちらに注目する。外気の温度が高いため、アジルはドアを頻繁に開けることを許していなかった。
「報告か、そこで言え」
「はっ、意味がよくわからなかったのですが、見張りからの報告によると不審船が有刺鉄線を突き破り、閉鎖領域に踏み込んだとのこと。操舵士に伝えて欲しいと言われたのですが」
「なっ！　……自殺行為だ、とても正気の沙汰じゃない」
素っ頓狂な声を上げた操舵士に、アジルがワインの入ったグラスを護衛騎士に持たせ、口を開く。
「何だ、私にもわかるように説明しろ」
「……先ほども説明しましたようにここら一帯は元々大きな町があった場所です。有刺鉄線で覆われた先はジヴーの賢老院（ルーツ）が指定した危険区域に他なりません。そこに侵入するなど砂船乗りにとって常識外れの行動ですよ。堆積した砂の中には大量の建築物や砂船の部品など、諸々の瓦礫が埋まっているはず。そんなところを航行すれば船底や船の横腹に穴が空き、確実に座礁してしまいます」

砂船の座礁は海と違って沈没による命の危険は少ない。が、船体に穴があけば外圧によって砂が一挙に入り込み、その重みで直ぐに航行が困難になってしまう。近くに町があれば助かる確率も高いだろうが、そうでなければ相当に危険だ。食料や水の心配は言わずもがな。ことに、砂海に棲む魔物は食糧の豊富な本物の海と違い、雨

季以外は常に飢えている。その分凶暴な魔物が占める割合も大きい。
「だが、敵船はあんなところまで進んでいるぞ。もう一度確認だが、本当にここは禁止区域なのだろうな」
「あれ……。いえ、本当です！　そのはずです……が」
「もう少しで閉鎖領域に入ります、……このままいくんですか？」
魔石の制御棒を握る小柄な船員が不安げに訊ねた。中型船で船底が幾分高いとはいえ、あそこまで躊躇なく突っ込んでいるのを見ると本当に瓦礫が埋まっているのか、確かに疑いたくもなる。だが、座礁のリスクを冒してまで敵船を追う意味が果たしてあるのかも疑わしい。

額に手を当てる操舵士を尻目に、アジルの隣に座っていた護衛騎士が意見を述べる。
「こうは考えられないでしょうか。実は既にそういった瓦礫などは取り除かれているが、ここを根城にしているやつらが自分たちの身の安全を図るため、危険地帯だという噂を流し続けている」
「つまりは噂を利用して敵の追撃を避けるための安全地帯を設けているということか」
操舵士は後ろからのやり取りに思いを馳せる。確かにその可能性も否定できない。だが、座礁は船乗りがもっとも嫌うことである。ましてや、たかだが一隻の不審船を拿捕するために船を座礁させてしまうなど考えたくもない。
「それは……いえ、そういうことなら考えられなくもないですが」
煮え切らぬ様子の操舵士に、護衛の騎士たちがはっぱをかける。
「そうだろうそうだろう、ならば決まりだ」
「我々を引っ掛けようなどとは片腹痛いわ、奴らに目に物見せてやれ！」
操舵士は躊躇いがちに他の乗組員と顔を見合わせた。思った通り、あまり気の進まぬ顔が並んでいた。
今現在、砂船を操っている船員たちは商船に乗っていた乗組員や

捕虜にされたジヴーの兵の中から駆り出された者だ。元々の仲間でない以上、下手に逆らえば切り捨てることも辞さないだろう。砂船乗りとしては、未知の領域に足を踏み入れるならば相応の準備をして臨むのが常道。しかしながら、弱い立場であまり強く命令に抗うことも躊躇われた。

苦渋の判断。操舵士は大義名分の言葉を引き出すことに決める。

「……それは、命令でございますか」

騎士たちは艦長のアジルと視線を交わし合う。アジルは足を組み直して黙考し、十秒ほどして首を縦に振る。ジヴーとの勝敗は既に決したようなものだ。もし万が一のことがあるとするなら第三勢力の介入だろう。仮に今追っている不審船がセーニアの敵対国の所属であれば、この戦いを完勝で終えるためにも無視するわけにはいかない。不確定要素の芽は摘み取っておくに限る。

加えて、後方支援業務で手柄を立てる機会はそんなにない。ひとつでも多く手柄を立てておけば回りの者たちとの出世競争でも優位に立てる。見逃す理由はなかった。

「……わかりました。――我々も境界線を越えるぞ！　皆、気を引き締めてくれ！」

操舵士の呼び掛けに船員たちが何とか絞り出した空元気に、それでもセーニアの騎士たちは満足そうにうなずいた。

朝日が地平線からゆっくりと離れていく。夜明けの瞬間、空は青と赤のグラデーションで幻想的な色合いだった。そんな景観に目を細める余裕もなく、船員たちは暇なく右往左往していた。

セーニアとの追走劇が始まってからおよそ2時間余り。徹夜明けということもあって船員たちの顔にも疲労の色が濃い。その間にも追ってくる敵船は増え続けていた。

「本当にしつこいなぁ、ある意味感心しちまうぜ」

「意図しているかは別にして、連中は正しいことをしている。我々の助力なくしては万が一にもジヴーに勝ち目はないからな」

ピエールとイヴァンが肩越しに追ってくる船を一瞥しながら言葉を交わす。シュイは周辺の景観を見渡してから口を開く。

「ラードックさん、ソロンとかいうところはまだなんですか」

「もうとっくに入っていますよ」

「え、ここがそうなのか？　危険な廃墟っていう話だったけれど、建物らしきものはほとんどないような」

首を傾げたピエールの言う通り、所々で白い柱が地面から突き出ている場所はあるが、傍目には船の航行を妨げるほどではない。想像していた、打ち捨てられた町とは異なる風景に二人は困惑を隠せなかった。

「ソロンは雨水がより溜まるよう盆地に作られた町でしてね、今では建物のほとんどは砂に埋もれてしまっているんです。それにしても……六隻もいましたか、少し数が多いですね」

「……まずいのか？」

「あぁいえ、ただ、勿体ないなぁと思いまして」

「勿体ない？　何が」

シュイの問いかけにラードックは苦笑いを返すだけだった。その

間にも船員からの報告が引っ切り無しに飛んでくる。
「――第六、第三共に距離５００メードを切りました。南東側から第四、第二もやや離れて追走、いや、これは……諦めたかな？　転座しています」
「賢明なことですね、他の方たちもその船を見習ってくれればありがたいのですが――もう時間切れですか」
「時間切れ？」
「目指していた場所についたということです、稼いだ距離も使い果たしてしまいましたから、ここからが正念場ですよ。――さて、今から少しばかり集中します。内緒話も含めて一切の雑音を立てないよう願います」
それは船員たちもなのか、と言いかけたシュイに、ラードックは真剣な表情で口に指を立てる。これでは押し黙る以外にはない。いつの間にか、船員たちも会話をぴたりと止めていた。ラードックの言うことに対して絶対的な信を置いているのだ。

風と船の駆動音以外聞こえない領域においてラードックが目を瞑り、何やらぶつぶつと呟き始めた。
――これは、魔法の詠唱？　発音が特殊だから古語か。ていうか、目を瞑って操船って危なくないか。
頭に浮かぶ数々の疑問にシュイは首を捻る。間を置かずして、魔力の波がラードックから揺らめくのを感じた。それは操舵室を通り抜け、船全体に行き渡り、周辺へと拡大していく。ほどなく終の言霊で魔力の波が球面に固定された。おそらくは感知魔法の類だろうが、自分の知っているものとはどうも種類が違うようだ。

ラードックは目を瞑ったまま操舵輪を動かし、白髪から覗く三角耳を忙しなく動かす。障害物が見当たらない状況で、船が左に、あるいは右に小刻みに揺れる。船底が砂に滑らかな線を引く。
直行で追ってくる敵に対して、ましてや速度で負けている敵に対

して蛇行を繰り返せば、距離は当然のように縮まっていく。シュイとピエールが後ろを見ると予想通り、先ほどまで豆粒大だった敵船は林檎大にまでなっていた。

その意図を問い質したいところだが、船員すら黙々と働いている状況で言葉を発するわけにもいかない。操舵しているラードックもよほど集中しているのか、遮光レンズ越しに見える険は深く、額からはふつふつと汗が浮き出ている。こうなっては事の成り行きを見守る以外に他なかった。だが、その時は存外早く訪れた。

突如として、こちらの船に一番接近していた敵船が、縦に大きく揺れた。続いては緩慢に横に傾いていき、砂の上に横倒しになり、砂の波濤を四方に撒き散らす。よくよく見ると一隻だけではない。奥の方でも連鎖するように白い巨船が傾き、あるいは停止を余儀なくされている。

次々に航行不能になっていくセーニアの砂船を視界に収め、シュイとピエールはあんぐりと口を開けていた。

――どうなっている？　ここに罠でも仕掛けてあるのか？

ピエールのその予想はあながち外れでもなかった。ラードックにはその卓越した操船技術とは別に、誰にも真似できぬ業があった。振動波を広範囲に放ち、それに触れた時の反響音を驚異的な聴覚で捉え、砂の中に埋もれている質量がどこにあるかを探り当てることができる。あまり小さいものだとわからないが、船に影響を与えるくらいに大きいものであればおよその場所を掴めるのだ。

ソロンの町は砂の下、地下２０メートルほどのところにあった。一見するとだだっ広い砂地に見えていたこの場所は、本物の海で例えるならば暗礁地域のようなものだ。邪魔なく通れる場所はごく限られた場所でしかない。水みたいに透けてもいないのでまさしく見えない迷路である。

ややあってラードックが目を開け、古い砂海図と外の景色と、忙しなく視線を往復させる。左、右、右、左、左。不規則な船の動き

に何やら眩暈がしてくる。荒波に揉まれているのとは違う、経験したことのない切迫感が食道の辺りに感じられた。端的にいうとシュイは今、とても気持ちが悪かった。

一方で、追ってくるセーニア側も猪ばかりではなかった。二隻の船が連なるようにして、シュイたちの乗る船が引いている線をなぞりながら追ってきた。一向に座礁しない不審船が何かしらの方法で砂に埋もれている瓦礫を避けていることに気づいたのだ。万が一を避けて余分にマージンを取っているラードックの航路は、大型船でも座礁せずに追ってこられるだけのスペースがあった。

――ふぅむ、中々判断が速い。――が、果たして次の罠にも対応できますかね。

後ろから追ってくる敵船にラードックが口の端を持ち上げ、額のゴーグルを持ち上げる。仕草で速度上昇を伝えたのだろう。制御棒が力強く輝き始めた。敵船もこちらの速度上昇に気づいたのか、遅れることなく追ってくる。

緩やかな上り斜面に差しかかった。船首の突端は青い空を向いていた。ほどなくして、その傾きが水平に戻り始め、束の間船尾側から敵船が見えなくなった瞬間、ラードックがゴーグルを戻し、素早く面舵を切る。それが合図だったのだろう。急激に砂船が速度低下し、乗っている者たちの体が斜め前方に振られ、危うく倒れかけた。減速した船は小高い丘の頂上部分を過ぎたところ、目の前に横たわる下り斜面のすれすれで踏み止まり、平地と下り坂の接ぎ目に沿うように移動する。

後を追ってきたセーニア兵たちは、まさか登ってきたそこが地獄の入口だとは思いもよらなかっただろう。崖すれすれのところで針路変更していたルクセンの船を横目にして、二隻の船は速度を殺し切れなかった。

方向転換する間もなく、二隻共に船首が斜め下へと向く。上って

きた斜面より角度のきつい下りに差し掛かっていた。その船体の重さゆえに止まることは叶わない。自重で斜面を滑り降りていく。

突然、穴の底から砂が大きく盛り上がった。砂を掻き分けて現れたのは、巨大な生き物の頭部だった。衝撃的なその光景にシュイとピエールの顔色がはっきり強張った。

それは竜よりも鯨よりも巨大な、黒い艶のある皮膚に覆われた魔物だった。どこか昆虫じみた外観をしており、ガチガチと鋏のような牙をかち鳴らす音が、斜面の上まではっきりと聞こえてくる。シュイは対岸を見回し、そこがただの斜面ではなく、すり鉢状の穴だということに気づいた。穴の底を見渡せば、遠方からでも確認できるほどに大きな白骨がそこら中に散らばっている。砂漠に生息する魔物を餌にしているのだろう。

――こいつは、やばすぎる。

喉から胃の腑へと冷気が駆け下りていった。初めて見た魔物からは、エミドやレイヴから感じられたものとは違う、純然たる野性の力が感じられた。何より驚くべきは、そんな巨大な魔物が姿を現すまで一切気配を悟らせなかったことだ。

魔物は頭部にある23個の複眼をゆっくりと、不規則に回転させる。ほどなく全ての目に、滑り落ちてくる二つの白い船が映り、鋭い牙に装飾された口が開かれる。口から滴り落ちるのは強い酸の唾液。垂れた場所から砂が茶に変色する。

間もなく、止まっていた砂が少しずつ穴の底へ向かって流れ始めた。空気を吸い込む音を何倍にもした音が、大気中に響き渡っている。驚異的な肺活量で流砂を形成し、獲物をより早く引き寄せているのだ。余程腹が減っているのだろう。

小さい町がすっぽり収まってしまいそうな穴の底で、魔物は牙を剥き出しにし、自らやってきた獲物を手ぐすね引いて待ち構えていた。滑り落ちている船に乗っているセーニア兵たちの顔がどうなっているか、容易に想像がついた。

「古来種の魔物と相対して少し頭と肝を冷やすがよろしい、苦痛に満ちた叫びが死んでいった同士への鎮魂歌（レクイエム）となりましょう」

沈黙を破ったラードックの辛辣な一声。皆が操舵輪を握り締める彼を注視する。左舷側を見下ろすその目は、どこまでも冷やかだった。

迂闊にも忘れていた。ラードックの操船技術ばかりに気を取られていたが、セーニア兵たちはジヴーやルクセン教にとっては憎き仲間の仇。今までの戦いで一人や二人、友人を失っていてもおかしくはない。笑顔の下に激情を秘めていたとしても不思議ではないのだ。

『戦場へまいりましょう』

酒場を後にする時にラードックが口にした台詞が今になって思い出された。獲物を追い詰める狩人を気取っていた彼らに容赦せねばならぬ理由は、ない。彼は砂船という手慣れた武器を用いて戦場に立ち、そして勝利したのだ。

Uターンし終えた砂船が、すり鉢状の魔物の巣から少し離れた場所で停止する。魔物に驚いて縮んでいた胃が前後に揺さぶられ、肩が戦慄く。ついでに大きなげっぷがひとつ出た。

後ろから歓声とも悲鳴ともつかぬ声が発せられた。魔物より船の方が大きいからよもや丸ごと食べられることはないだろうが、乗員が助かるかは神のみぞ知るといったところか。何より、シュイたちからは敵のことを気遣う余裕が失われていた。

「う、うえっぷ……」

三半規管を苛め抜かれ、ピエール君は完全にグロッキーの模様。睡魔に襲われた赤子のように、身を丸めてこてんと床に転がった。その隣にいるイヴァンも少なからず酔いが回っているのだろう。口を半開きにしたまま、しきりに首を振っている。ただ一人、ヴィオレーヌがいそいそと吐きそうな船員に麻袋を配って回っている。な

んというか、恐ろしくタフな人である。胃が鉄でできているのだろうか。

げぇ、げぇ、げぇ。蛙ならぬ嘔吐の輪唱。その声を聞いただけでお腹一杯胸一杯。

――もう、駄目……限界。

俺の嘔吐物（もの）はおまえの嘔吐物（もの）。貰いゲロから逃れるべく、頬を膨らませたまま我先にと外へ飛び出す船員たち。その流れにシュイも加わった。

外に出る寸前、室内からの酸っぱい臭気が鼻に纏わりついた。日差しの暑さも手伝って嘔吐感に一層拍車がかかる。世界の全てが自分を吐かせようとしていた。

急ぎ鉄柵から身を乗り出し、シュイがフードを脱ぎ、船員たちと一緒に口を縦に開く。喉までせり上がっていたそれがすんなりと、どぼどぼと垂れ流された。幾重にも連なる黄金色の滝が朝の柔らかい陽光を受けて宝石の如く輝いている。

そんな阿鼻叫喚の地獄の中、静々と操舵室から出てきたラードドックが一人帆柱に寄りかかる。胸ポケットから取り出した葉巻に火をつけ、空にある太陽に目を細めている。

シュイは晴れやかな表情で葉巻の煙を燻らせ始めたラードドックに、得体の知れない化け物を見るような面持ちを向けるのだった。

～後継　ｓｕｃｃｅｅｄｅｄ　ｔｏ　ｗｉｓｈｅｓ７～

空一面を覆いつくす暗幕の裏では太陽が頼りない光を放っていた。
薄暗い砦の内部、白い石階段を駆け下りていたジヴー兵たちの前方で砂地が縦に割れる。地面に両手を突いてずりずりと這い出てきたのは、土色の人型魔物、＞砂鮫人（シャーラギ）＜たち。褐色肌の男たちは腰の剣に手を伸ばそうとするが、矢継ぎ早に現れる地割れを見て思い留まった。
「くそったれ、こっちもだめか！　後から後から湧いて出てきやがる！」
背後から近づいてくる足音に気づき、やむなく通路を右に曲がって路地に入り、広場に出た。砦の敷地内を巡回しているはずの衛兵たちはどこにも見当たらない。相手はそこまで敏捷ではないが、追ってくる数はこうしている間にも増える一方だ。足を止めて考えている暇などない。

「――おいっ、あそこに人がいるぞ！」
手に杖を持ち、焦げ茶の外套を纏った男が、敵の手が回っていなそうな路地を指差した。顔は建物の影でよく見えなかったが、革鎧を着ているのが遠目からでも確認できた。兵たちは目配せし合い、直ぐにそちらへと移動する。そして、建物の壁に寄りかかっている人影に数歩ほどの距離まで歩み寄り、絶句した。
仲間と思って近づいたそれは、下顎から上の部分を無残に噛み千切られた死体だった。顔は見えなかったわけではなく、元々なかった。

どろっとした脳漿と血に濡れた紫色の舌、奥歯までくっきりとした下顎の骨を見て兵士たちの背筋が凍りつく。中には思わず口元を抑える者も。未だ血がとめどなく流れていることから殺されてそう

間もないことがわかった。

ふと、路地の先の土肌に視線を凝らすと何箇所か色が変わっていた。明らかに土を掘り返された跡があり、耳を澄ませば呼気の音が微かに聞こえた。そちらに足を踏み出した途端飛びかかってくる腹積もりだろう。みえみえの罠とはいえ、この視界の悪さでは気づきにくい。実際、無残な姿になった兵士はそうして殺されたのだろう。一応知能だけは優位に立っていることを再認識し、少しだけ落ち着きを取り戻す。

＞砂鮫人（シャーラギ）＜は砂漠に生息している魔物の一種であり、川やオアシスの周辺に潜んでいることが多い。集団行動を好み、水を飲みにやってきた動物や人間たちを餌食にする。総じて知能が低いが食欲が非常に旺盛で攻撃的。

眼孔は垂れ下がった皮膚に覆われており、目の役割を果たしていない。骨ばった高い鼻と歯が剥き出しの大きな口。そして、側頭部には軟骨のない穴だけの耳がある。その姿形に違わず視力はなきに等しいが、その分鋭敏な聴覚と嗅覚を備えており、地中にいても獲物の居場所を正確に特定できる。

体を覆う黄土色の分厚い鱗は首から上以外を満遍なく覆っている。その装甲は打ち据えた鉄の剣が欠けてしまうほどの硬度を持ち、天然の鎧を身につけているようなものだ。手足の器用さはさほどでもなく、指がないので道具も扱うことができない。しかしながら魚のヒレのような手は非常に固く、地殻をも掘り進められるほど。もちろん武器としても充分な役割を果たすため、油断すれば直ぐにでも首と胴が切り離されることだろう。

ジヴー兵たちの不幸は早朝の巡回場所が砦の入口から一番遠い北側の区域だったことに尽きる。石を積み上げて作られた要塞の傍は昼間の熱をたっぷりと吸いこみ、夜間でも蒸すような暑さだ。＞黒渦（バリ・クラウド）＜の強風のおかげで少しは緩和されていたが、代わりに上から

砂が降ってくるので貧乏くじに変わりはない。
そして、隣の区域を担当していた部隊員が変わり果てた姿で横たわっていることに気づいたのがつい先ほどだった。両膝の裏を深々と切り裂かれ、こちらは下顎も残さず頭部を丸々喰われていた。
砂嵐のせいで味方の悲鳴も聞こえず、いつの間にか砦の最奥に取り残された形になっていた。魔物に襲撃されている中、律儀に巡回していた自分たちを愚かしく思った。

脱出口を見出すべく遁走していた兵士たちだったが、目にしたあらゆる通路を塞がれており、結局元の場所に引き返すしかなかった。包囲網を形成する＞砂鮫人（シャーラギ）＜は数十匹にも膨れ上がり、彼らは広場の四隅の一角へと追いやられていた。
「――完全に囲まれた、な」
「はは、ま、まいったな、俺嫁さんに絶対に戻るって約束しちゃってるんだよね」
乾いた笑いを漏らす中年の髭男に魔法使いが、それは死亡フラグ、と嘆きつつ杖を掲げる。
「味方、どこにもいませんでしたね。俺たち……、見捨てられちゃったんでしょうか」
視力に頼ることなく行動出来る彼らは＞黒禍渦（バリー・クラウド）＜の砂嵐も苦にしない。かといって、人里を大軍で襲うような前例は今までほとんど報告されていない。軍の指揮系統が乱れていてもなんらおかしくはなかった。
などと考えているのは、単に見捨てられたと思いたくないからだ。助かる可能性から目をそむけたくないからだ。
「拡声魔石も残ってない、……なるようにしかならんな」
「よりによって安全なはずの砦の中で魔物に生きながらにして食われるなんてな、ついに現実が想像を飛び越えちまった……」
居並ぶ＞砂鮫人（シャーラギ）＜たちが鋭い歯の隙間から尋常ではない量の唾液

を滴らせた。きっと自分たちは高級羊肉くらいにしか思われていないのだろう。自らの体がこれからその口に収まるのかと思うとぞっとする。

生理的嫌悪感に身を震わせつつも、ジヴー兵たちは剣の切っ先を相手に向け、雄叫びを放つと共に一斉に走り出した。＞砂鮫人（シャーラギ）＜たちは叫び声に身じろぐも、獲物の接近に気づいたのだろう。両腕を掲げ、逃がさぬよう左右に体を揺らしながら間合いを縮めてくる。その直後、上空で稲妻が走った。

黒い空に白い影が断続的に浮かび上がる。雷の落ちた場所が相当近かったのか、凄まじい轟音が鳴り響いた。驚異的な聴覚を持つ＞砂鮫人（シャーラギ）＜だけに、これはかなり効いたのだろう。こめかみの辺りを抑えながら悲鳴を上げ、次々に昏倒する。

「――走れ！」

誰かが息せき切って叫んだ。兵たちが包囲の崩れた箇所に雪崩打って出る。敵の数はあまりに多く、いちいちとどめを差している余裕などない。足を切り裂かれぬよう祈りながら倒れている＞砂鮫人（シャーラギ）＜たちを踏みつけにしていく。

「よし、抜けたぞ！」

「――！　グアラ隊長、あそこを！」

狭い下り階段を上ってきた複数の人影に気づき、兵士たちが収めようとしていた剣を慌てて持ち上げる。だが、そこに現れたのは見知った人物だった。

「良かった、おまえたちも無事だったか！」

「ヴィレン将軍！？」

数人の護衛を引きつれて現れた人物に兵たちが我が目を疑う。鼻の下と下顎にちょび髭を生やした魔族の男はジヴー連合の雄、ヴィレン・カシリその人だった。未だ三十台半ばだが武勇に優れ、部下の信頼も厚い。平凡な家庭の生まれであるが、数年前にビスレノームに襲ってきた砂竜の群れの討伐に加わり、多大な武功を立て上に

のし上がった。今現在のジヴー軍において最年少の将でもある。
「よ、よくぞご無事で。まさかこんなところまで救援にきてくださるとは」
ジヴー兵たちが一斉に地に片膝を突き、畏まろうとする。それをヴィレンが手を出して制する。
「話は後だ、連中との消耗戦に付き合っている暇はない。通ってきた道に敵の手は回っていなかったがいつまでもつかもわからん、急いでここを離れるぞ！」
ヴィレンは直ぐに後ろを向き、駆け昇って来た階段を二段飛ばしで駆け下りていく。ジヴー兵たちは安堵の表情を交わし合い、将軍の後に続いた。

「将軍、今現在の状況は……」
後ろからの質問にヴィレンは足を止めぬままわずかに俯き、溜息を落とす。
「あまり良くない、魔石で連絡を取り合えなかったのが痛恨だった。助けられなかった者も大勢いるはずだ」
「そう……ですか」
「＞砂鮫人（シャーラギ）＜だけならそれでもなんとかなったが、＞地縛巨霊（ルキメギア）＜までもが町に出没しているらしい。総力を結集すれば打ち勝てぬ相手ではないが多大な被害も出よう。セーニアとの決戦を控えている今、やつとまともにやり合う余裕はない、私の部下たちは残っている民間人たちの避難誘導に当たらせている」
「そ、そんな。じゃあ……」
「私の権限においてルトラバーグ中の砂船を全接収した、この町から撤退して西に向かう」
＞黒禍渦（バリー・クラウド）＜は積乱雲の塊であり、その中で放電現象が起きていることも珍しくはない。＞砂鮫人（シャーラギ）＜も落雷の音を酷く嫌っているため、

嵐が発生している最中に地上に出てくるのは稀だ。それだけに、この仕業が人為的なものだと疑わざるを得なかった。もたもたしていたら包囲戦に持ち込まれるのは避けられない。ヴィレンの判断はあらゆる角度から見て正しかった。だが――

「……最後の砦と言われたここを、撤退？　……戦わずしてこの国を明け渡すのですか？」

呆然自失とした顔がヴィレンの目を射抜く。ヴィレンは辛そうに目を細める。防備に優れているここで少なからず敵に打撃を与えるはずが、よもや自分たちに被害を出しただけで撤収することになるとは、彼自身認めたくないことだった。

「……もう、勝てないんですか？　どうすることもできないんですか！」

「うるさい、少し静かにしろ！　そんな大声を出してたら＞砂鮫人（シャーラギ）＜共がまたやってくるだろうが！」

部隊の仲間が声を押し殺しながらも諫める。だが、若い兵は口を止めようとしない。

「それなら、初めっから降伏すれば良かったじゃないですか！　そうすりゃ少なくとも仲間たちが無駄に死ぬことは――ぐぅ！？」

その言葉は続かなかった。若い兵は足を止めたグアラに胸倉を掴まれていた。

「貴様は一体今まで何を学んできた！　いかに大国からの要求とはいえ、無理難題にへいこら従ってばかりいたら国など守れん！　重税でも課せられようものならそこに住まう民たちはこれから先、生まれる者たちも含めて何十、何百年と不幸になるのだ！　貴様は子供たちがこの地に生まれたことを嘆いて暮らすような国になってもいいのか！」

「そ、それは……」

「少なくともこの戦いは私利私欲のために始めたものではない。ましてや、ここにいるヴィレン将軍は安全な場所におらず、最前線に立って指揮を採っておられるのだ。断じて、責任転嫁の対象にして

いい人ではない！」
「――グアラ、もういいから、それくらいにしてやってくれ」
肩を引かれたグアラが辛そうな笑顔を浮かべるヴィレンを見遣る。
グアラはきつく目を瞑り、掴んでいた襟から手を離して二歩下がった。ヴィレンは愚痴を零した若い兵を見据える。
「君の苛立ちは、良く理解できる。私も、同期の者を大勢失っているからな」
「あ……」
宙に遠い目を向けるヴィレンに若い兵が俯き、申し訳ありません、と謝罪の言葉を口にする。
「多くの者たちが家族のために、この国のために戦い、命を落とした。敗北にしろ、降伏にしろ、この戦いを投げ出す時がくるならば、それは私が首を括る時だ」
死ぬ覚悟を口にしたヴィレンに、兵たちが息を呑む。
「たとえ良かれと思ったことであれ、それが結果として民を不幸に導いたならば誰かが責任を取らねばならない。それが国策というものであり、上に立つ者の負うべき責だ。私が死ぬことで皆の溜飲が下りるのならば、喜んで犠牲になろう」
「……将軍」
「――ふっ、私としたことが喋り過ぎてしまったな。さぁ、手遅れにならないうちに砦を出るぞ。助かるはずの者が助からないとあっては、志半ばで死んでいった者たちに顔向けできんからな」
押し殺した声から感じられる強靭な意志。その峻烈な気概に晒され、兵たちが沈黙する。けれどもその熱は、彼らの心の奥に消えかけていたはずの炎をしかと蘇らせていた。

まだ船酔いから立ち直りきれていなかっただけに、最初は目の錯覚を疑った。

セーニアの軍船を振り切り、ラードックの運転から解放されて間もなくして。ようやく周りの景色に目を移す余裕が戻ってきたシュイは、砂船の上で肌色の砂漠の中に波のうねりのようなものを視認し、目蓋をごしごしと擦っていた。イヴァンはシュイの定まった視点にいち早く気づき、腰に下げていた筒状の遠眼鏡を取り出して覗き込む。

「……＞砂鮫人（シャーラギ）＜、だな。やつらがこれほどの群をなすとは珍しい」

――へぇ、あれが＞砂鮫人（シャーラギ）＜か。

シュイはいつしか見た依頼完了報告書を思い出しながら呟く。生々しい泥人形という要約は多分に的確のようだ。確か備考欄には攻撃的で肉食、とも記してあった記憶がある。物珍しそうに遠くを見るシュイに、ピエールが口を開く。

「おまえは初見みたいだな、こっちは駆け出しの頃に何度かやり合ってる。間近でみると結構エグい面してるんだぜ。見た目はやわそうだけど皮膚は岩みたいに堅いから並の武器で倒すのは難儀だし、あれだけの数が集まったら充分脅威だ。一対一でも素人が手を出していい相手じゃねぇけどよ」

＞砂鮫人（シャーラギ）＜の依頼書の難易度は概ねＣ級。入ったばかりの新人が少し背伸びしようと思った時にやる任務というところだ。もちろん、数匹であれば問題視する必要もない。

砂船がルトラバーグへ進むに従って、小さかったうねりが少しずつはっきりしてくる。ざっとみて二個大隊、三千に迫ろうかという規模だ。あまり喜ばしくないことであり、認めたくないことでもあるが、どうやら魔物たちの目的地は自分たちと同じらしい。

砂船と１００メードほど離れていた＞砂鮫人（シャーラギ）＜が足を止め、鉈（なた）のような手でこちらを指し示した。目は見えないはずなのにその素振りに意味があるのだろうかとせんなきことを考える。

その予想に反して、民族移動さながらの大行進をしていた連中が、一斉にこちらに振り返った。そして、何やら甲高い声でキィキィと鳴き喚き始めた。

人語ではないので正確な意味は計りかねるが、『僕と友達になろうよ』とか『あれはなんだろう』とかいった類の言葉ではなさそうだ。きっと『今日の晩御飯』に遠からぬ話だろう。

「連中、覚え間違いがなければ音に弱いって聞いているけど、他に弱点はないのか？」

準ランカーともなるとＣ級以下の任務を引き受けることは大分少なくなってくる。どちらかといえば強力な魔物に対する知識ばかりに偏り、雑魚に対する知識に疎くなる傾向がしばしば見受けられるということだ。

拡声魔石が弱点であることはわかっているものの、下手に乱用すると自分の鼓膜まで傷めかねない。場合によっては頭痛を併発することもあるしなるべくなら避けたい戦法だ。

「首から上はそれなりにやわだ。連中もそれがわかってるのか、頭部を両腕で頻繁にガートする癖がある。そんなわけだから仕掛けるなら相手が腕を振り被った時、後の先が基本になる。ま、おまえやイヴァンの実力ならなんの問題もないだろ。念のため補足しておくと、過酷な環境に適応しているせいか電撃系以外の魔法は効果が薄い」

ピエールがくせ毛をしつこく撫でつけながら説明する。日光で頭髪の水分が失われているせいでなかなか元に戻らないようだ。

「やっぱり、解せねえな、やつらは基本的に夜行性のはずだ。こんな日中から群れを作っているなんて……」

首を捻るピエールの隣でシュイが腕を組む。

「この状況、あの時と少し似てるな、覚えてるか？」
「あの時？　……ああー、キャノエの件な。あん時は確か、蜂が匂いでおびき寄せられていたんだよな」
　忘れもしない、フラムハートの傭兵たちと共闘し、アミナと出会うきっかけにもなった大毒蜂の襲撃事件。レムース教の牧師による金銭目的の犯行がイヴァンたちの暗躍に絡むというなんともすっきりしない事件だった。その時は犯人が調香によって魔物を誘導するという離れ業をやってのけていたのだ。
　シュイは柵に寄りかかっているイヴァンに視線を飛ばす。フォルストロームの魔物騒動は彼らの暗躍が最たる原因だったはずだ。昔のことをねちねち追及するつもりはさらさらないが、こういった異変に心当たりくらいあってもおかしくはない。
　けれども、当のイヴァンはシュイの視線に気づいた素振りも見せず、これから向かう先、東側にある大きな川の方に注目していた。何が気になっているのだろうと視線を追うと、直角になっている川岸がやたらときらきらと光っているのが見えた。
「――そうか、そういう手か」
　シュイはしたり顔でうなずいているイヴァンを睨む。
――念のために訊いておくけれど、あんたたちがやったわけじゃないだろうな。
　シュイがピエールに聞こえぬよう囁き声で訊ねた。
――メリットがない。
　イヴァンはシュイの疑惑を一言で斬って捨てる。
「連中がしでかしたことは概ね理解した。悪天候をも作戦に盛り込むとは、かなり頭の切れるやつがいるらしい」
　シュイに続いてピエールもイヴァンに視線を向ける。
「電気や空気も水と同じく高きから低きへ流れるものだ、そして＞黒禍渦（バリー・クラウド）＜は低気圧、風を利用するにはうってつけの状況だ」
「テイキアツ？」

聞き慣れない言葉にシュイとピエールの目が点になる。
「雨風の集約する力場を表す古い言葉だ、深くは考えなくていい。要点だけ言えば、この辺りの空気は今現在、あの黒雲へと引っ張られやすい状態にあるということだ。シュイ、さっき川の岸辺を見たはずだな」
どうやら、視線を追っていたのにはしっかり気づかれていたようだ。シュイはイヴァンの目敏さに舌を巻きつつ素直にうなずく。
「あぁ、不自然にキラキラと光っていたけど」
「あくまで推測だが、光っていたのは多分砕け散った瓶の破片だ。＞砂鮫人（シャーラギ）＜が好んでいる匂いを放つ物を粉末状にして密封性の高い瓶に詰め、上流から流したのだろう。北東の国々はセーニアの勢力下にあるからな。そして、それが川岸に叩きつけられて――」
「割れて飛散した、と」
ピエールが結論を接いだ。
「粉末が風に煽られて飛散したとするなら、やつらが＞黒禍渦（バリー・クラウド）＜に向かっている謎も解ける」

シュイは船に備え付けられている白旗を見上げ、風の吹いている方角を確認する。なるほど、吹いているのは強い西風のようだ。
「夜明け前に俺たちが遭遇した敵船は、まるでジヴー軍の退路を塞ぐかのようにルトラバーグの南側を巡回していた。魔物をけしかけて町から逃げてきたところを叩くつもりだったとするなら、この状況が人為的に起こされているのは間違いなさそうだ。やつらなら目に頼らずとも耳や鼻で生き物の存在を捉える。＞黒禍渦（バリー・クラウド）＜の視界の悪さも苦にしないはず」
対して、守備側の兵士たちは視界の悪い中、狙いどころの少ない大量の魔物とやり合わなければならない。退却せずに戦うことを選択したとして損耗は避けられず、嵐が去るころにはセーニア軍と戦う余力など残されていないだろう。そして、退却を選択したとしても包囲網が張り巡らされている。

「……悪知恵もそこまで回ると感心するな」
シュイが呆れたように頭(かぶり)を振った。退くも地獄、留まるも地獄。こんな作戦を考えるやつは、手の施しようがないほど性格がねじ曲がっているに違いない。
「本当にそうだとしたらまずいな、巡回していた砂船のことを伝えなきゃ」
「修羅場とわかっていてもいくのか」
イヴァンがピエールに視線を向ける。ピエールは目だけで当然だ、と主張している。
「止めても無駄、か。――またラードックの操縦が必要な状況に陥っても俺は知らんぞ」
「……そうならないよう、頑張るさ」
イヴァンの脅し文句が多分に効いたのか、ピエールの顔色はあまり冴えなかった。

――――

荒れ狂う嵐の中、ジヴー軍は北進してきた＞地縛巨霊(ルキメギア)＜を相手に苦戦を強いられていた。
突如としてルトラバーグの南側の要塞を破壊し、町で暴れ回る巨大な侵入者に対し、砦にいた兵士たちが応戦するべく町の中央に集結した。そこに最初のつまづきがあった。要塞の壁の下を掘り進めてきた＞砂鮫人(シャーラギ)＜に気づくのに遅れたのだ。
囮となった＞地縛巨霊(ルキメギア)＜の方へ兵士たちが集まったことにより、町の各所に展開していた巡回兵たちが孤立した状態で大量の＞砂鮫人(シャーラギ)＜たちと相対することになった。視界の悪さで火の手が見えず、魔石も使えなくなっていることで町の各地の状況把握に致命的な遅れが生じた。
のっぴきならぬ状況に対し、ヴィレン将軍は仕方なく、巨人の掃討を断念。＞砂鮫人(シャーラギ)＜によって孤立させられた仲間と民間人を助け

るべく軍を三手に分けた。

甘ったるい匂いが漂う薄闇の中。広場から無数の雷線が上空に向かって放たれた。帯状の雷が次々と、巨影の太腿辺りに命中した。攻撃が当たった場所からは大量の土砂がどっと零れ落ちる。強風下においては炎や氷の魔法を狙った場所に当てるのが非常に難しい。となれば、風にほとんど影響されず、悪天候で威力が底上げされた雷魔法が有効だ。

だが、集中攻撃を受けてなお、巨人の足は止まらない。たった今攻撃を喰らったばかりの足を一歩前に踏み出す。それだけで足場が大きく揺れ、反動で体が浮き上がる。転びそうになった兵士たちがあたふたと両手をばたつかせた。そうこうしている間に巨人の足が更に迫ってくる。

「ひ、退け！　退けー！」

砂の巨人は退却命令に反応が遅れた二人の兵士を見止め、半月型の虚ろな目を光らせた。次いで、だらりと垂らしていた腕を億劫そうに振り上げる。

太さだけでも悠に家一軒分ありそうな腕は、大灯台の倒壊にも匹敵する。兵士たちは振り上げられた腕がぴたりと止まるのを見、急ぎ路地へと逃げ込む。刹那、巨人の腕が振るわれ、地に思いきり叩きつけられた。

砂が勢いよく四方へ飛び散り、兵士たちが先ほどまでいた通路を街路樹や塀といったものも一緒に呑み込んでいく。町の地形は徐々に変わりつつあった。

＞地縛巨霊（ルキメギア）＜は大飢饉や干ばつなどで大勢の人が亡くなったのと前後して出現することが多いので、怨霊が寄り集まった霊体とされている。その霊体が持つ力に応じて砂や泥を集め、様々な姿形を象るのだ。

とはいっても、最近この近辺で大規模な天災は起きていない。す

なわち、戦争による犠牲者ではないかという憶測が成り立つ。生きてセーニアに苦しめられ、死しても無念の思いに苦しめられているとするならばこれほど残酷なことはない。ジヴー兵たちはセーニアへの怒りをより強いものにしていた。

象られる土砂の大きさにはかなり個体差がある。小さいものなら象くらいの大きさだが、今兵士や町人たちが目にしているのは三十メード超級。確認されている中でも最大級に匹敵する。その巨体から放たれる一撃は壮絶の一言に尽きるが、他にも体を象っている鉱物の密度を巧みに変化させ、硬化や軟化を自在に行える能力を持つ。

そういった不定形の化け物にダメージを与えるには魔法や清められた武器が最も効果的なのだが、これほどの巨体となると少し勝手が違ってくる。的が大きくて攻撃を当てやすいのが唯一の救いだが、倒すまでダメージを蓄積するのにどれくらいかかるかわからない。視界が悪いことに加えて＞砂鮫人（シャーラギ）＜まで町に侵入しているとなれば、こんな化け物にかかずらっている暇などない。ルトラバーグ撤退の方針を打ち出したヴィレン将軍の判断は理に適ったものだった。

「シハラ様、西の港で砂船の出港準備が整ったとのことです！」

「うむ、報告ご苦労」

七十をとうに越していそうな人族の老人が、壊滅寸前まで追い詰められた頭のてっぺんをしわだらけの手で撫でる。暑いからか、紺色のローブのボタンを前で止めずに羽織っている。

辛うじて残っている数本のちぢれ毛が、しかし彼の「ハゲではない」という言い訳に必要不可欠なものであり、プライドそのものでもあった。うっかり軍部内で髪の話題を口にしようものなら異動を覚悟せねばならなかった。

「申し上げます、南地区の全住民退避完了致しました！　残すところは東のみです！」

「あいわかった、後は将軍の帰還待ちじゃな、それまで持ち堪えね

ばのう」

ヴィレン・カシリの参謀スザク・シハラは＞地縛巨霊（ルキメギア）＜を食い止めるべく、ヴィレンに授けられた数百の兵を指揮し、迎撃にあたっていた。任された兵たちを五つに分けて五重に陣形を敷き、前二列で攻撃を終えた者は一番後ろに下がり、極力疲労を軽減する入れ替え式の戦法だ。

砂の巨人は兵士たちの度重なる攻撃にもまったく堪えた様子を見せないが、スザクたちとしては近隣の住居や避難民に害が及ばぬよう敵の注意を引くことにこそ意味がある。また、攻撃をする時に足を止めてくれればその分だけ侵攻を遅らせることができる。少しでも時間を稼ぐことが、ここにいる者たちに与えられた責務だ。

ふと、＞砂鮫人（シャーラギ）＜を警戒していたジヴー兵たちが側面から急接近してくる二つの影に気づき、慌てて槍の穂先を向けた。が、そのうちの一人が軍団証をかざすのに気づき、お互いの顔を見合わせる。

「何用か！　そこで止まり、所属と名前を名乗れ！」

「ああっといけね、――ええと、第五軍に所属していた」

「している」

赤髪の男が黒衣の男の突っ込みに大きくうなずく。

「そうそれ。一般兵のピエール・モーレだ、伝令兵に手隙のやつがいなかったんで直接報告にきた」

シュイがちらりとピエールを見る。

＞何故偽名を使っているんだ？＜

――万一俺の名前を知っているやつがいると困るから念のためだ。

シュイの念話にピエールは囁き声を返す。兵士たちは口をもごもご動かしているピエールを見て怪しんだのだろうか。

「手隙がないとは……伝令兵が仕事に追われているということか？　西側はどういう状況なのだ、避難誘導に人手が足りないのか？」

兵士が槍を下ろさずに訊ねた。

「いや、港の方に砂鮫人が大量に押し寄せてきているんだ。このままだと一時間もしないうちに砂船の出港ができなくなってしまう。というより、出港しないと船が使い物になりかねない」

シュイのその言葉に兵士たちの顔色が暗がりでもそれとわかるほど青くなる。と、その後ろから背の低い老人が歩いてくる。兵たちが槍を下ろし、さっと左右に割れる。

「シ、シハラ様」

「お若いの、申し訳ないがまだ東地区の住民確認作業が完了しておらんのじゃ。あそこにいる＞地縛巨霊（ルキメギア）＜がそなたらにも見えるであろう。この場所を譲ったら退却は困難になるのは必然、避難誘導に向かっている兵士たち共々、避難民から大勢の犠牲者が出るじゃろう。彼らを見捨てるわけには――」

「――おおーい！」

風が一時収まったのを見計らって野太い声が響いた。東からやってきたのは四列になった避難民たちを先導しているジヴーの兵士たちだった。

「おぉ、噂をすればよいタイミングじゃ」

スザクが顔を綻ばせた。兵士たちの目が東からきた者たちへ向き、そして、＞地縛巨霊（ルキメギア）＜の顔までもがそちらへと向いた。声で興味を引いてしまったのか、砂の巨人がそちらへと足を踏み出し、通りに並んでいる住居を蹴り倒す。

まずい。シュイとピエールが注意を促そうとした瞬間、一際強い風が吹いてきた。叫んだはずの声は空しく掻き消され、そうしている間にも巨人は避難民たちの列に近づいていく。

「い、いかん！　こちらに注意を引けい！」

それでも近くにいたスザクには聞こえたらしい。状況を悟った彼が周りにいる兵士たちに声を裏返す。慌てて空に手を、杖を向けた彼らの前で、巨人が拳をゆっくりと引き、避難民たちに勢いよく突

き出した。

油に火が点火されるのを百倍増しにしたような音が鼓膜を大きく揺さぶった。と、同時に、構えられた巨大な拳から砂の入り混じった衝撃波が発射される。避難民の列の中ほどに迫った砂弾が突風のせいで微かに直線軌道を外れる。

いくつもの悲鳴が上がった。砂弾は列への直撃を避け、手前にあった石垣に直撃。大理石の破片が爆発を起こしたかのように散乱し、砂の雨が無慈悲にばら撒かれた。

場が兵士と非戦闘員の苦鳴で埋め尽くされる中、一人列から大きく吹き飛ばされた１０歳前後と思われる少女がぷるぷると首を振って体に纏わりついた砂を振るい落とし、顔を上げる。茶髪の少女の両の瞳に、巨大な黄土色の左足がはっきりと映った。

「あ……」

呆然とする少女を見下ろしたまま、砂の巨人がゆっくりと足を持ち上げた。

「――おいっ！」

「わかってらっ！」

切迫した事態をいち早く把握したシュイが魔印を切り、＞韻踏み越え（リズム）し歩を以って＜を発動して突出。その後ろからピエールもやや遅れて続く。＞集束する雷（ライトニング・ボルト）＜を放って巨人の注目を引こうとしているジヴー兵たちの隙間を、二人がじぐざぐに縫うように駆け抜けていく。

だが、振り下ろされた巨大な拳は重量も手伝って想像以上に速かった。何より間合いを詰めるにはスタート地点が離れ過ぎていた。＞刻穿ちし閃（ラピディティ・スカージュ）＜を撃つ時間はない。少女は恐怖にすっかり魅了され、その場に立ち尽くすことしかできない。

――くそっ、間に合わないか！

巨人の振り下ろされる足がやたら緩慢に映った。住居を粉塵にする蹴撃。嫌でも漂ってくる死の予感。繰り広げられるだろう血と肉の惨劇が脳裏に過り、シュイがきつく片目を瞑る。瞬間、開いている片目に、屋根の上から飛び降りる人影が映った。

――ギィンッ

予想に反して、聞こえてきたのは肉を潰す音ではなかった。それはまるで金属と金属が相打つ硬質な音だ。

突として地に舞い降り、少女を庇ったその男は、身の丈以上もある長槍を手首と肩で支え、硬化された巨人の蹴り足をしかと受け止めていた。

「――ったくセーニアの糞どもが、随分と好き放題やってくれてんじゃねぇか」

白銀の鎧を身につけ、無精ひげを生やした長身の男が不敵に笑う。流石に全ての衝撃までは吸収し切れなかったのか両足が少し砂に沈み込んでいるが、二人共に怪我を負った様子はない。

唐突に、男の全身の筋肉が隆起し、巨大な足を押し上げ、宙へと突き放す。巨人は弾かれた様に仰け反り、足をもつれさせて背中から住宅街に倒れ込んだ。

馬鹿力とかいう言葉では片付かない。膨大な質量をいなしたその力は、辰力の極みに限りなく近づいた者だけが扱える類のものだ。

天井の崩落する音が風音に混じって聞こえてくる。一挙動だけで重苦しい空気をも吹き飛ばしたその男は、涙目をまん丸にしたままの少女をひょいと抱きかかえ、がっしりとした肩に乗せる。

「い、今じゃ！　急いで怪我人を運び出せぃ！」

スザクの命に肩を戦慄かせ、褐色肌の兵士たちが一斉に倒れている者たちに駆け寄っていく。

救助の邪魔にならぬよう少し離れたところで足を止めたシュイに、男が歩み寄りつつ軽く手をかざした。やや遅れて、ピエールがシュイの後ろから走ってくる。

――来て、いたのか。

知己の傭兵の、しかして予想だにせぬ登場に、口端が微かに持ち上がり、犬歯が覗く。

「少し遅いぜ、小僧ども。ちったぁ腕を上げたって聞いてるが、こんなおっさんを引っ張り出すようじゃあまだまだ甘チャンだな」

渋みのあるその声に、ピエールの顔が喜びと戸惑いに彩られた。

アルマンド・ゼフレルがシュイとピエールに悪戯小僧のような笑顔を向ける。準ランカーになって以来ずっと顔を合わせていなかったが、印象は以前とちっとも変らない。日焼けした手足は若さと活力に漲っている。稜線のはっきりした鼻に太い眉は彫刻のようだが、不規則に伸びた無精髭がどこかひょうきんさを醸し出していた。

そして、今しがた垣間見せたその力はいかな腕自慢の追随をも許さないだろう。少なからず腕を上げたからこそ、その実力がどれほど驚異的なものかがわかる。

「シュイとは結構久し振りだよな、一年半ぶりくらいか。時におまえ、また鎌をなくしちまったってわけじゃないよな」

「いや……先の戦闘で使い物にならなくなったから置いてきたんだ」

後ろを覗き込もうと首を伸ばしたアルマンドの発言に、ボロボロにされた相棒を思い出し、気持ちが沈み込む。特殊な合金を使用しているため、修理はシャンに頼むしかないが、武器に拘りを持つ彼のことだ。あの有様を見たらきっと機嫌を損ねるだろう。

「それにしても驚いたな、まさかあんたがここに――」

「――なんで来ちまったんだ！」

予想だにしない後ろからの怒声に、シュイが口に出しかけた言葉を飲み込み、振り返った。険しい顔をしたピエールがシュイを押しのけるように前に出てアルマンドの前に立つ。

「なんで、って言われても返答に困るな。強いて言うならそういう気分になったからだ」

「答えになってねえよ！　ヴァニラさんの容体芳しくないんだろ！　あんたが傍にいてやらなくてどうすんだ！」

聞き覚えのない人名にシュイが首を傾げる。名前のニュアンスか

らすると女性だろう。
「――おいこら、嫁を置き去りにしてきたてめえにそんな偉そうなことを言う資格があんのかよ」
アルマンドの手厳しい反撃にピエールが口を噤む。だが、次には引き締めた顔を綻ばせていた。
「なーんてな、そんなにまじになりなさんな。見ろ、いきなり怒鳴るからこの娘が怯えちまってるじゃねえか、なぁ？」
アルマンドが肩にちょこんと乗っている少女を指し示した。頬に擦り傷を作った少女はアルマンドの逆立った髪にしっかりしがみつきながら、ピエールに恐れを含む目線を向けていた。
「あ、す、すまねぇ」
「はぁ、もうちょい気の利いた台詞はないのかねぇ。ま、一応心配してくれてるみたいだから教えてやる。彼女の状態管理はデニスに任せてある、適当に暴れたら直ぐに帰るさ」
アルマンドの言葉に、ピエールは渋々といった風に小さくうなずいた。ミルカを引き合いに出したということは、つまりはアルマンドの大事な女性なのだろう。

そういえば、とシュイは記憶を辿る。以前エヴラールから支部長就任の打診を受けた時、アルマンドに矛先を向けようとしたことを思い出したのだ。その時はやむにやまれぬ事情があるとのことであっさりとシュイの推薦を突っぱねられた。ピエールの口振りから察するに、エヴラールの語っていた事情とは彼の恋人か、あるいは家族などの看病ではないか、そうと思い当たる。それならば、支部長推薦を跳ねのけるに足る事情であり、本部が酌量するに足る事情だ。
邪推を巡らせていると、唐突にアミナの顔が割り込んできた。紅玉のように爛々と光る目は眉と仲良く釣り上がり、三角耳は険しい山のようにピンと立ち、桃色の唇は真一文字に結ばれている。何故に怒り顔なのか意味不明理解不能。軽く汗ばんできたのを感じ、慌てて雑念を振り落とした。

地鳴りが響き、瓦礫が崩れ落ちる音と共に、倒れていた砂の巨人が地面に両手を突き、ゆっくりと体を起こした。尻餅をついている状態でもその背丈は樹木を越している。

「いかん、また動くぞい！」

スザクの声に反応し、シュイたちが倒れている兵士や町人たちに視線を走らせる。崩れてきた石垣に足を挟まれている者もおり、救出作業は難航しているようだ。今＞地縛巨霊（ルキメギア）＜に暴れられたら非常に面倒なことになるだろう。

「倒した方が手っ取り早そうだな、アルマンドさんたちは救助に専念してくれ」

ピエールがシュイの心の内をそのままに代弁する。シュイは巨人と相対しているピエールの横に並び立った。

「そりゃ構わんが……おまえらに任せて大丈夫かぁ？」

アルマンドがどこか楽しげに唇を曲げてみせた。

「いっとくけど今の俺は昔とは一味違うぜ」

「二流の台詞だな」

からからと笑うアルマンドにピエールがぐぅと呻く。どうやら未だ上下関係は健在らしい。

唐突に飛来してきた巨大な砂弾に三人の顔付きが変わる。ピエールが辰力を腕に行き渡らせ、神木剣ダンメルシアの白刃を下から上に抜き放った。

オーディス流剣技、＞水勾扇刀（ヴァーシル）＜。白い霧を伴った衝撃波が前面に展開され、空間固定。砂弾を遮る防壁と化す。着弾と共に行き場を失った砂風が左右に飛び散った。アルマンドの感嘆の声を尻目に、シュイとピエールが砂の雨の中に駆け出す。

無傷で攻撃をいなしたピエールに＞地縛巨霊（ルキメギア）＜が不服そうな声を上げた。向けた拳を下ろさずに再度砂弾を発射。三人が三手に分かれてそれを回避。通路の中央が砂で彩られる。

後ろに下がったアルマンドを放置し、巨人が掲げた両腕を全身してくる二人に向けた。その手の先から砂弾が連続して撃ち出される。

シュイが横にあった石垣を軽快に蹴り上げ、ひらりと空に舞い、傍らの家の屋根に着地。屋根から屋根へと飛び移り、巨人との距離を詰めていく。

一方のピエールは巨人にほとんど一直線に突き進む。砂弾が走るピエールの後ろに伸びる影を幾度も潰す。尊敬する先輩の面前ということもあり、いつもより張りきっているのだろう。

そんなことを考えているうちに、縦に振るわれた巨人の右腕が通路を蹂躙した。真っ直ぐに伸びてくる砂の荒波がピエールを呑み込み、石造りの住居を垣根ごと貫通する。

「ピエール！」

「――大丈夫、ここだ！」

今の一瞬でピエールは真上に跳躍していたらしい。鞘に入ったままの剣を巨人の前腕に突き立て、シュイの真横に並んでいた。身軽さも以前とは比べ物にならないようだ。シュイはほっと胸を撫で下ろす。

巨大な体から繰り出される一撃の破壊力は侮れない。当たらなければどうということもないが、長時間好き勝手されたら町の作りが変わってしまう。何より、後ろにはジヴー兵や民間人が控えている。あまり長引かせるわけにはいかない。

ピエールがシュイに先んじて巨人の右腕を走り出す。砂の道を駆け上がっていく彼を援護すべく、シュイが＞集束する雷（ライトニング・ボルト）＜を巨人の顔に向けて撃つ。直進する雷が巨人の大きな左手で遮られ、受け止めたその手が今度はシュイに向かって降り下ろされる。前の住居の屋根へと飛び移った瞬間、轟音。先ほどまで立っていた住居の倒壊音が響く。

そんな中、肘を通過し、上腕にまで達しようとしているピエール

を確認。シュイが住居の屋根から屋根へと飛び移りつつ詠唱を開始する。

――蒼き雷を納むるは涅色の胸奥（くりいろきょうおう）。

あるいは触覚がないのだろう。＞地縛巨霊（ルキメギア）＜が肩に到達しそうなピエールにようやく気づき、側面から叩き潰さんと左手を振り被る。迫る拳を見てピエールが更に加速し、急な上り坂を駆け上がる。その後ろで巨人の左拳が右上腕部を抉る。自爆した音を聞きながらピエールが肩の上に着地し、神木剣ダンメルシアに手をかざす。

――世に渦巻く汚濁に其（そ）の悲憤慷慨（ひふんこうがい）を吐き出さん。

手持ちの武器がない以上、付与による攻撃はピエールに任せるしかない。ピエールの握る剣から目を放さず、手を掲げ、詠唱を終える。

＞怒れる霆（ボルテックス・オブ・ヒューベル）の渦流＜が発動。＞黒禍渦（バリー・クラウド）＜の積乱雲からかつてない規模の雷が放たれ、ピエールの方へと引き寄せられる。

――って、やばっ！　集まり過ぎ！

シュイは黒雲の明滅の激しさから制御不可と判断。大慌てでピエールに念話を飛ばす。

＞ピエール！　おまえの剣に付与魔法がいった！　早く投げつけろ！　てか、手放さないと結構死ぬかも！＜

「結構死ぬだぁ？」

念話で促されたピエールが何となしに空を一瞥し、ぎょっとした表情を浮かべた。自分へ向かって降り注ぐ滝のような雷に、かざしていた手を瞬時に引っ込める。

狙いもそこそこに巨人の顔面目掛けて剣を振りかぶり、全力で投擲。襲いくる雷から逃れるべく足元に見えていた白い天幕に飛び込んだ。布の真ん中がその重みで窪み、支えていた四隅の柱が真ん中へと引っ張られたところで布が裂ける。

その頭上で、砂の巨人の頬に鎌刃が突き刺さった。途端、ピエールの立っていた方角から蒼雷の洪水が殺到。

――グアアオオオオオウウウウ！！！

耳に劈く咆哮が肌を叩き、服の布地を震わせる。雷が砂の巨人の頭部から首へ、肩へ、胸部へ、腰へ、四肢へと広がっていく。砂が電流の熱で焦げてゆき、黒ずんでいく。その一部が地に溶け落ちていく。

砂に含まれている大量の鉱物が、雷に晒されることによって磁石化。それが人の形を維持しようとする魔力と反発。魔力の流動不全を起こし、行き詰まった魔力が血管にできる瘤のように膨れ上がり、暴発を始めた。

全身で砂が飛び散り始め、何段もの土色の滝になる。巨人が段々と形を失っていき、兵士や町の者たちから歓声が上がった。

――ウウウ……グググ……

断末魔を放っていた口元が崩れ、目尻が形を失う。頭部が肩の高さにまで沈み、その衝撃で辛うじて形が維持されていた四肢にもひびが入る。そのひびから緑色の煙のようなものがしゅうしゅうと噴き出し、天に昇っていく。ほどなく、人の形をしていた巨人がただの砂に還っていく。

轟音に混じってさらさらと砂が流れ落ちる音が聞こえた。色とりどりの果物がたっぷり入った籠の中から、全身をカラフルな色に染めたピエールがひょこっと顔を出し、潰れた果実のむせるような甘い匂いに、鼻をひくつかせた。

「ふぅ……、危ないところだったな」

シュイが額の汗を拭い、後ろにいるジヴー兵たちに目を細める。

「おい、……オイ」

後ろからの声に気づかない振りをしつつ、シュイが顔を引き締める。

「よし、急いで戻るぞ。皆が心配――うわっ」
歩き出したシュイの鼻先に果物塗れのピエールがぬっと立ち塞がった。
「オイてめえ、何事もなかったかのようにやり過ごそうとしてんじゃねえ！　危うくこっちまで道連れになるところだったじゃねえか！　俺だってやろうとしていたことあったのに！」
多分、本音は最後の言葉だろう。自慢の剣技を披露できなかったことが腹立たしかったのか、ピエールはシュイの胸に指を突きつけた。
「ま、ま、ま、いいじゃないか、巨人はちゃんと倒せたし、結果オーライだろ。ああ、剣忘れるなよ」
「何言ってやがる、おまえも探すの手伝うんだよ！　……ったく、戦地入りして一番肝冷やされた相手がおまえってどういうことだ」
ピエールはぶつぶつと文句を吐きながら、頭にこびりついた黄色い果実をタオルで拭い取る。
「いやぁ、流石にラードックの運転には敵わないよ」
「あんなのと比べている時点で色々アウトだろうが。俺の剣、落雷でぶっ壊れてないだろうな。壊れてたら、弁償だぞ」
自然と肩が戦慄いた。砂を炭化させるほどの威力だっただけに、たとえ神木であろうと木でできた剣が無事かどうかは保証できない。神木でできた剣は多分に高価だとも聞く。
うず高い砂山に向かうピエールの後ろで、シュイは彼の剣が無事であるよう心から祈った。

幸いにも、砂の山から掘り出したダンメルシアは薄い樹皮が一枚剥がれただけで済んでいた。帯電していたためちゃんと鞘に仕舞うまでには数分を要したが、許容範囲内の被害で済んだようだ。
二人が纏わりついた砂を払っている傍ら、あさっての方向から小気味よい拍手が聞こえ、二人揃ってそちらに視線を移す。
「あれ、アルマンド」

「いやいやお見事、まっさか無傷で倒しちまうとは思わなかったぜ。フォルストロームにいたころとは比較にならねえな。ご両人、すっかりいっぱしの上級傭兵様だ」

合わせている大きな手を閉じたまま、アルマンドがにっと笑う。

「そりゃまぁ、あんたに追いつけるよう必死こいて頑張ってきたからな。そっちは、救助の方は進んでるのか？」

ピエールが砂を手で払いつつ立ち上がった。シュイにとってニルファナという遠い目標があるように、ピエールにとってもアルマンドがそうなのだろう。

「ああ、もう移動を開始してるはずだぜ。ま、これで俺も心おきなく――」

後に続く言葉は風の音が邪魔して聴き取れなかった。アルマンドは＞地縛巨霊（ルキメギア）＜の残骸、所々盛り上がった砂の山を遠い目で見据え、大きく溜息をついた。一仕事やり遂げたというように。

「……アルマンドさん？」

何かしら感じるものがあったのだろうか。ピエールが不安げに眉を潜めた。

「――さてと！」

一際大きな声を出し、アルマンドがぐっと伸びをする。

「あんまりもたもたしてられねえ、港へ急ごうぜ。＞砂鮫人（シャーラギ）＜共が押し寄せてきてるんだろ？」

「あ、あぁ。そうだよな」

先頭切って歩き出したアルマンドの後に、ピエールが慌てて追従する。シュイも釣られて歩き出そうとし、思わず足を止める。

何気なく見た、というよりはたまたま視界に入ったと言うのが正しかった。前を行くアルマンドとピエールに違和感を感じ、ややあってその正体に気づく。シュイは自分の足元を確認する。

「おい、シュイ、何やってんだよ！」

「……わかってる、今行く」

――ピエールと変わらない。なら、アルマンドのあれは……一体なんだ？

シュイは再びアルマンドの足元に目を凝らした。大股で歩く彼に付き従う影は色薄く、陽炎のように揺らいでいた。

～後継　ｓｕｃｃｅｅｄｅｄ　ｔｏ　ｗｉｓｈｅｓ１０～

ルトラバーグの町の構造は四区画に分かれている。北に自然由来の山を切り崩して作った頑強な砦。東側と南に大きな住宅街。中心部に商店が立ち並び、そして西に砂船が発着する港と墓地を構える。それらの区画を高さ４ｍほどはあろうかという要塞が菱形に囲い込んでいた。

町の西側の上空には雲と空の裂け目が見えた。西方から押し寄せてきた＞砂鮫人（シャーラギ）＜の大群は港の前にして行進を止め、視力がないことを考えればその言葉は正確ではないが、遠くを物欲しそうな目で眺めていた。

彼らの前に並んでいるのはご馳走だ。ジヴー兵とルトラバーグの住人たちが混然一体となった人の列は、人間の価値観に照らし合わせれば立食パーティにも似ていた。子供の肉は弾力に溢れ、成人女性の血は甘く、成人男性の内臓は栄養過多で、老人の骨はしゃぶればしゃぶるほど味が出る。そうやって多分に食欲を掻き立てられた彼らが今もって踏み込んでいない。それはひとえに砂の湾口に立っている一人の男に起因していた。

食糧庫の番人というにはやり過ぎた存在。珈琲色の髪に舞台男優のように整った顔。憂いを湛えた漆黒の瞳。紫色の覆面が鼻口を隠している。

厚手の黒い綿シャツを着ているが、鍛えられた体の稜線を隠せるほどのものではない。グレーの長ズボンに武器にもなりそうな金属繊維のベルトを通し、砂漠の熱、凍土の冷気をも通さない竜皮製の白いブーツを履いている。

肩に青い外套を纏うその男は言わずと知れたイヴァン・カストラ。

平らな砂地に立つ彼こそが、数千からなるはずの＞砂鮫人（シャーラギ）＜たちがお預けを食らっている元凶だった。＞砂鮫人（シャーラギ）＜たちの視力は皆無に等しいが、だからこそ並外れた感覚器官が彼を圧倒的な存在として捉えていた。人が目蓋を瞑ったままのような、光を薄らとした感知できない彼らの視界において、その一個体から放たれる力は巨大な鬼の影のように映っていた。生存本能が捕食者と勘違いさせるほどの強者に近づくのを忌避していたのだ。

セーニアの軍船が包囲網を展開している状況で、シュイたちがもっとも恐れていたのは避難するための移動手段、砂船を失うことだった。砂船の船体の大部分は金属板でできているが、＞砂鮫人（シャーラギ）＜の鱗や皮膚もまた、鉄に比肩するほどに固い。彼らにぶつかるとなれば無数の岩礁に体当たりするようなもの。＞砂鮫人（シャーラギ）＜も生きてはいまいが、それ以上に船に及ぼす影響は計り知れない。たとえ砂海から船上まで上ってくる手段がないにしても、脱出するときに＞砂鮫人（シャーラギ）＜を轢くことはなるべく避けたかった。

仮に砂船がなくなったとして、砂漠を徒歩で踏破ためには相当な荷物がいる。それらを維持した状態でセーニアの追撃を振り切ることは絶対に不可能だ。無論、砂船で逃げるにしたところで先の追いかけっこで簡単に逃がしてもらえないのは自明の理である。逆に言うと、多数の船を航行不能にしている今しか脱出するチャンスがない。

そんなわけで港の守りを半ば押し付けられた形になったイヴァンだったが、卓越した戦闘能力を持つリックハルドとイルナヤは不在。自身が頼み事をしたために船を降りている。

船の中にいる船員たちも戦えないことはないのだが、あくまで自衛のために身につけた武術であり、腕の立つ者でもシルフィールでいうCランク傭兵といったところ。操船技術のある船員に死なれるのは別の意味で人的損失が大きく、なるべくなら避けたいところだ。

ヴィオレーヌに結界を使わせる手もあったのだが、町で大勢怪我人が出ているだろうことを考えると、彼女の治癒術が必要となる可能性も否めない。魔力は温存してもらった方が得策だろう。

ともあれ、船の出入り口を塞がれてはまずいということで湾口で迎撃しようと町に入る手前で船から飛び降りてみた。のはいいのだが、ただならぬ空気を察したのか＞砂鮫人（シャーラギ）＜たちがイヴァンと５０メードほど離れたところで停止してしまった。そうなると次の一手に迷ってくる。突出して攻撃を仕掛けるのも一つの手だが、土色の人垣は視界を悠に三倍は広げないと見渡せないほどに幅広い。下手に動いて端から港への侵入を許してはまずい。時間をかければ数千もの魔物を相手にしても負けぬ自信はあった。が、全ての敵が自分に向かってこないならば、侵入を食い止められる自信はない。なんらかの匂いによってルトラバーグに＞砂鮫人（シャーラギ）＜たちが誘き寄せてきているのが正しいと仮定して、西だけでなく他方面からの侵入を許している可能性は極めて高く、中にいるジヴー兵たちが防備で手一杯としても不思議ではない。てんやわんやの状態で大群が雪崩れ込めば多数の死傷者が出てしまうだろう。

いっそ相手が突撃してくるような事態になれば腹を括って戦うのみだが、相手に動きがない以上は不動の構えを貫いた方がいいだろう。そういった判断だ。

けれども、所詮は問題の先延ばしに過ぎない。いずれにせよ避難するために砂船が通る退路は必須。この巨大な土色の波のどこかに風穴を穿たなければならない。しかもさほど時間をかけずにだ。＞砂鮫人（シャーラギ）＜と徹底交戦している中にセーニア軍が乱入してきたら目もあてられない。

――せめてあと一人腕の立つ者がいれば。

そうすれば一人が守り手、一人が攻め手ということで大した被害を出さずに突破できるだろう。が、ないものねだりをしてもしょうがない。諦めの溜息を吐き出し、ひとまずはシュイたちの戻りを待

つかという気分になった時、砂の波が前進を始めた。

イヴァンが覆面の下で舌を打つ。人に個体差があるように動物や魔物にも個体差はある。きっかけはなんてこともない、空気を読めなかった者たちが数名飛び出し、群のラインを一気に押し上げていた。一度勢いがつくともう止まらない。我慢していた食欲を櫛のように鋭い歯と一緒に剥き出しにし、鉈のような手を掲げて走ってくる。

イヴァンが素早く左右を睨む。波の両端も遅れずに動いている。的が絞れねば何割かの侵入を避けるのは不可能。

――目を覚まさせるには冷や水を浴びせるが吉、か。

果たして見せしめで止まるかは何ともいえない。が、経験則からいえば成功する確率がそれなりにあるのは事実。やってみる価値はあるだろう。イヴァンはそう判断し、辰力を体に巡らせ始めた。

それは彫像を鑢で研磨するのにも似ていた。体の細胞の一つ一つに至るまで、鍛えた体が耐えられるぎりぎりの負荷をかける。それ以上擦り減らしたら形が崩れる、そのぎりぎりまで。

はたして、イヴァンの黒目に黄金色の縦の裂け目が生じた。

――我　魔耀（まよう）秘めし獣の胤裔（いんえい）なり　その魂（たま）を爪牙（そうが）と換えて　怨敵の血肉を突き貫き　臓腑を白き祭壇に捧げよう

砂煙が立ち昇り、霧のように立ち込める。雑魚モンスターといえども数は力であり、千を超える数となれば壮観なる暴力だ。後ろの方で息を呑み込むような悲鳴が断続的に聞こえた。その暴力を迎え撃つたった一人の男の身を案じるものだ。だが、ただ一人だけ、港の船の発着場で、彼の無事を信じて疑わない目を向けている者がいた。

＞叉無奏（サムス）＜。その言葉と共に、体に硬質化した辰力が纏わりつく。

それはすなわち、長大な質量の武器を無重力下、空気抵抗無しで振るうのに等しい。

イヴァンの腕がゆっくりと横に一の文字を描く。刹那、砂鮫人（シャーラギ）たちは闇の中に尚、白き闇を見た。轟音と共に砂が天に遡ってゆき、地にある砂が払われる。もたらされたのは砂鮫人（シャーラギ）たちの波を丸呑みにする砂の津波。舞い上がった砂で一時太陽の光が弱まるほどだ。まともに食らった砂鮫人たち数十匹が上空に押し飛ばされ、横一列の陣形に大穴が穿たれた。波を運良く逃れた者たちも砂が叩かれた轟音に聴覚をやられ、耳を抑えてのたうち回っている。

間断なく放たれる蹴りの三連撃が砂のトンネルを作る。破城鎚を思わせる衝撃波が進軍してきた＞砂鮫人（シャーラギ）＜たちを串刺しにする。鉄のように固い鱗ごと。魔物たちの肩や胸を抉り、人よりもより黒に近い血飛沫が熱された砂に落ちた。魚肉の腐った臭いが辺りに立ち込めていく。

そんな中、イヴァンの回りに壁があるかのように＞砂鮫人（シャーラギ）＜たちは彼の周囲を避けて港へと向かう。闇雲に突っ込んでいくよりは後ろの餌を食い逃げするべきと考えたのだろう。

防御を考えずに攻撃できるのは嬉しい誤算だが、それにしても数が多過ぎる。音に聞こえしイヴァン・カストラとて意識は一つであり、体も一つ。一度に攻撃できる範囲に限度はあるのだ。

焦りを感じながらも顔には出さず、港に近づく敵から最優先で始末していく。

「全く……、遠距離攻撃はあまり得意ではないのだがな……！」

その台詞はあくまで対等の実力を持つ魔法使いと比べればの話であり、個の力量で考えれば十分な範囲攻撃を可能にしている。そんな戦士は世界に目を移しても数えるほどしかおらず、破格の実力者に違いない。イヴァンの回避能力、体力、耐久力の高さを鑑みれば、守勢に回るのは決して苦手でもない。

ただ、守るべき対象が大勢いるとなると勝手が違ってくる。少しずつ下がりながら迎撃を繰り返すものの敵が恐れをなして近づいてきてくれないことが仇となり、思ったほどの被害を与えられていない。

突如、後ろから高々と悲鳴が上がった。肩越しに見れば、砂に潜っていた＞砂鮫人（シャーラギ）＜たち百匹ほどがイヴァンの後ろから地表に出、既に防波堤の先に進んでいた。一瞬戻ろうかと足が出かけたが、自分が湾口で入口を狭めているからこそ、敵の侵入が少なくて済んでいる状態だ。下手に動くよりはここで行く手を阻み続けた方が被害が少ない。ジヴー兵もそれなりの数はいるようだし、岸壁を乗り越えられるまではここで留まった方がよい気もしてくる。もちろん、駆けつけた時は何人かが殺されている可能性も否めないが。

そんなことを思った途端、喉が痙攣した。気候のせいだけではない。かつて味わった苦い思いが脳裏に過った。自分が不在の時に滅ぼされてしまった故郷、エスニールを。おのれを心から案じ、いつも気にかけてくれた、おのれの家族に等しき白髪の少女を。物心がついてから唯一度、嗚咽を上げ、無念の涙を流した夜のことを。

何のためか。イヴァン・カストラはおのれの心に問いかける。鬼だ悪魔だと揶揄されながらもひたすらに強さを求めたその理由を。

復讐のため。もちろんそれもあった。私利私欲を剥き出しにしてエスニールを踏み躙ったセーニアを罰するのは、族長の一族が一人である自分でなければならない。仲間たちが味わった恐怖と屈辱、っして怒りを倍して連中に刻み付けてやらねば気が済まない、そんな思いがあった。そして、その先のことは全く考えていなかった。当時は、の話だ。

砂鮫人が岸壁に鉈のような腕を突き立て、それを支えにして少しずつ登っていく。兵士たちが弓矢を手にして応戦しているが、数が違い過ぎる。

もう限界だ。イヴァンが振り向きざまに駆け出し、しかし数秒でその足が止まった。岸壁を登っていた＞砂鮫人（シャーラギ）＜たちが軒並上を向き、硬直していた。その視線の先にあるのは一人の人間。

「砂に住まう魔物たちよ、この壁はどこまで登っても頂きなどないぞ。私は無益な殺生を好まぬが故――」

退くがよい。その力強い言葉と共に両目に緋の光が宿った。

――なっ……馬鹿な。

イヴァンがそう思ったのも無理はない。女が岸壁の突端に立ち、ひと睨みしただけで、＞砂鮫人（シャーラギ）＜たちは壁に突き立てていた手を外し、一斉に岸壁を滑り落ちたのだ。野生の獣、魔物の勘は下手な感知魔法よりよほど正確に相手の力量を察知する。少しでも遠ざかろうとしたその行動は自分に対しての反応と瓜二つ。とどのつまり、あの女は自分と同格の実力を持っていることになる。

後ろからの朝日が白い岸壁に反射して顔立ちまではわからない。が、側頭部に耳の輪郭が見えないことからおそらくは帽子の中に納められているだろうと推測できる。十中八九獣族だ。被っている帽子から垂れている髪は肩に垂れ、胸元にまで届いている。

目が段々と反射光に慣れてくると、髪の色は淡いベージュだとわかる。全くむらのない褐色の肌からするとこの地方の出身だろう。髪はサイドを紐で縛り、そこから邪魔にならぬよう編み込まれている。いかにも活発そうなスタイルだ。襟元の青い長袖のワイシャツは水兵が好んで身につけるものに近い。首には陽光煌めく金色のロケットを下げ、踝（くるぶし）までである水色のストレッチパンツを穿いている。

一見すると旅人のようにも思える女を前にして、イヴァンの顔に浮かぶのは困惑の表情。ジヴーの民を庇ったのだからセーニアの手の者ではないだろうが、窺える力から察するにどこかのギルドに所属する傭兵ということは充分考えられる。そして、自分は歴代でも

五指に入る賞金をかけられた犯罪者だ。顔を突き合わせた途端、戦闘になる可能性も否定できない。

――どうする、様子を見るか。

と、そこまで考えたところで、相手の双眸から放たれる紅い光がこちらを照らしていることに気づく。一応覆面をつけているとはいえ、目元まで隠しているわけではない。これだけ離れているから詳しい人相までは悟られていないだろうが、もう少し接近して身体的特徴と合致されれば容易に自分を割り出すだろう。何しろどこのギルドにも似顔絵付きで登録されているのだ。かといって、今顔を隠すような素振りを見せれば尚怪しまれるはずだ。

葛藤するイヴァンを物珍しそうに眺めていた女は、間近でないとわかりそうにもないほどに微かな笑みを浮かべ、興味を失ったように眼下に映る土色の魔物を見、そして肩越しに後ろを望む。

緩やかな上り坂の大通りを小走りで駆けてくるのはヴィレン将軍率いるジヴー兵。その後ろに、やはりジヴー兵と民間人の群れ。ごった返した道端の方に目的の人物が走る姿をぴたりと見止め、麦わら帽子を被った女は鼻に通るような唸り声を上げた。

～後継　ｓｕｃｃｅｅｄｅｄ　ｔｏ　ｗｉｓｈｅｓ１１～

家々からの明かりは絶え、空を覆う暗幕から漏れ出る陽光だけが薄い色彩をもたらしていた。

強い風が西から東に向かって吹き抜ける。周りにいる兵士や住民たちは風に乗って飛んでくる細かい砂礫を防ぐべく、目を細めたり顔を手で庇いながら前に進む。声を上げる者はほとんどいない。迂闊に口を開こうものなら口の中が砂だらけになるためだ。

西の港へ向かう途中でヴィレン将軍らと合流したシュイたちは、前面の防御を彼らに任し、群衆の一団を挟んで後尾を走っていた。

ヴィレン直属の兵士たちは一般兵とは明らかに異なる雰囲気を纏っていた。揃って締まった体をしており、眼光は力強く、この混乱の中でも落ち着きを保っている。余程人数に差がつかなければ＞砂鮫人（シャーラギ）＜如きに後れは取らないだろう。

時折前が止まってつっかえることがあったが、露払いをしているのだろうと自得する。その僅かな時間を利用して、シュイは随所で広域感知魔法を展開していた。地中に潜って待ち伏せしている＞砂鮫人（シャーラギ）＜がいないかを探るためだ。魔法の行使のためにはしばしば足を止める必要があったが、ジヴー兵や町人の中には怪我人もかなりいた。彼らを背負う兵たちも決して少なくなかったため、集団にそれほど遅れることもなく、たとえ離されても追いつくのに苦労することはなかった。

柱に蛇の彫刻が施された中門をくぐり、少々きつい勾配に差しかかったところで、手の空いている兵士たちが子供や年寄りの隣に並び、手や肩を貸し始めた。見るからに辛そうな者は怪我人同様、担いだり背負ったりしていた。ピエールとアルマンドはその様子を見て、路傍に横倒しになって放置されていた荷車を引き起こし、疲労

しきって歩けそうにない者たちを乗せ、二人で引き始めた。
坂を上っていくにつれて徐々に風が弱まってくる。ふと空を見上げると、＞黒禍渦（バリー・クラウド）＜の積乱雲と透き通るような青空との境界線があった。
左右に立ち並ぶ白石の建屋が途切れたところで暗闇が遠ざかり、代わりに肌を焼くような日差しが降り注いできた。いきなり明るいところに出たためか目が痛み、シュイは何度となく瞬きした。
ややあって、光に順応した目が映し出したのは、港の全景だった。正面には交易品や水食料を保管するための倉庫が。向かって左側には何隻もの砂船が港の岸壁に並んでいる。右側に隣合わせになっている二つの大きな建物は造船所と停留所だ。背の高い船上に向かって手すり付きの架橋がかけられ、先に避難してきたであろう住民たちやジヴー兵が二列に並んで乗り込んでいる。
岸辺まで５０メード余りの所まで進み、ヴィレンが先導を終える。住民たちは兵士たちの指示に従い、百人ほどの集団に分かれ始めた。兵士たちを除けば数は千に届くかどうかといったところだ。ヴィレンは部下たちと二言三言言葉を交わすと、颯爽と造船所と思しき建物の中に消えていった。

住民たちは疲弊しきっているようだった。砂で汚れた地べたに構わず腰を下ろし、荒くなった息をなんとか整えようとしている。額からは汗が絶え間なく滴り、身につけている服の背やズボンの尻はより濃い色に変わっていた。若い女性の着ている白いブラウスからは下着がはっきりと透け、目のやり場に困っている男たちもいる。
全力疾走でないとはいえ、砂嵐の中を、しかも強い向かい風を受けて長時間移動してきたのだ。魔物に襲われる恐怖も疲労に拍車をかけたのだろう。周囲の警戒に当たっていた兵士たちも疲れた表情をしている。いつどこから現れるとも知れない敵に対して緊張感を維持し続けるのは堪えるものだ。

ピエールはアルマンドと共に荷車から住人たちを降ろし、それから港の方へと目を移した。
「まだいるな、砂鮫人（シャーラギ）のやつら。近寄ってくる様子はないから、あいつが頑張ってくれてるってことか」
ピエールの言葉にシュイは一瞬首を捻ったが、すぐに「そうだな」と返す。アルマンドや他の兵士たちの手前、イヴァンの名前を伏せてくれたようだ。
「なんだぁ？　おまえらの他にも協力者がいたのか」
アルマンドが腕を組みながらピエールに横目を送る。
「あ、あぁ。後で紹介するよ」
「おぅ。いざとなったら俺たちも出るしかねぇだろうが、ま、船一隻分の道くらいならどうにか作れるだろう」
「いや、その心配はいらんぞい」

ピエールとアルマンドの話にスザク老が割り込んでくる。
「爺さんは確か――」
「＞賢律院（ルーツ）＜に属するスザク・シハラじゃ、よろしくの。そなた、シルフィールの傭兵、アルマンド・ゼフレルに相違ないな」
自分を知っていることが意外だったのか、アルマンドの色濃い眉が微かに上がった。
「ヴィレン殿がよう話しておられた。まだ子供の時分、喧嘩に一度も勝てなかった友人が傭兵をやっているとな」
「――そうかい、あいつよくもまぁ、そんな昔のことを覚えてたな。んで、心配がないっていうのは？」
「なに、普段の巡回任務でも連中にはしょっちゅう巡り合うでな、軍の砂船にはある程度の拡声魔石を搭載してあるんじゃ。今回は港に立ち寄る暇がなかったから使えなかったがの」
「そっか、ならやつらは任せていいってことだな」
「うむ。と、そうそう、先に礼を言っておかねばな。ぬしらがおらねば住民たちにも多大な被害が出たであろう。ジヴーの民を代表し

て御礼申し上げる」
　頭を下げかけたスザクをアルマンドが大きな手で制す。
「よしてくれ、俺ぁただセーニアが気に食わねえからここにきただけだ。礼を言うなら戦いが終わった後だろ」
　アルマンドの何気なく言った言葉に、スザクは目を見開いた。
「――そなたは、この戦いに……」
　後に続く言葉を躊躇ったのだろう。スザクはそのまま口を噤んだ。だが、言わんとしたことは簡単に予想がつく。
「それでいい、上が弱気な姿勢を見せりゃ下の者たちだって不安がる。傲然と胸を張ることも時と場合によっちゃ必要だ。戦力差を鑑みれば、現場にいるあんたらはよくやってるさ」
「……そうかの。そう言ってもらえるなら、少しは救われるか」
　アルマンドの言葉に、スザクは感じ入ったように目を細めた。

　二人のやり取りに聞き耳を立てつつ、ピエールとシュイが視線を交わす。
「……今後のことはあいつらとも相談しなきゃな、状況も随分変わってきたし、どこまで協力してもらえるのか確認した方がいい」
「そうだな、船に戻ったらすぐに話し合おう」
「……察するに、お二方もシルフィールの関係者か。肌の色からするとここの出自かの。そなたの方は……黒衣というとあの御仁が思い浮かぶが、いやしかし、鎌を背負っておらぬし」

　シュイはスザクの遠慮のない視線から顔を遠ざけた。現状では、シルフィール本部がジヴー軍に手を貸しているわけではない。一支部の長である自分が彼らに認知されることが必ずしもプラスに働くとは限らない。何より、下手に期待させておいて後で落胆させるのだけは避けたい。
　ジヴーの存亡がかかっている現状、＞賢律院（ルーツ）＜は国を維持するためにありとあらゆる手段を模索しているはずだ。これ以上追い詰め

られるようなことになれば他勢力を巻き込むことも厭わないだろう。
その矢面にシルフィールが立たされるとかなりまずい。支部に属しておらず、ジヴーの出自であるアルマンドやピエールなら言い訳も立つだろうが、自分はそうもいかない。友人に手を貸すため、というだけの理由で万人が納得するかは微妙なところだ。
何らかの工作を以ってしてシルフィールがセーニアの敵と見なされるようなことがあれば、大勢の仲間たちに迷惑をかけてしまう。下手をすれば戦乱の炎に濃厚な油を投入することにもなりかねない。セーニアはジヴーを攻めて尚、大国ルクスプテロンと戦える余力を残しているのだ。

シュイがどう答えるべきか考えを巡らせていると、港の方から覆面を外したイヴァンが革袋の水筒を口につけながら歩いてきた。その左隣には青い衣を纏ったヴィオレーヌが。そして、右隣には見知らぬ女が並んでいた。
イヴァンはシュイの視線に含まれているものに気づいたのか、水を飲むのを止め、片手に持っていた覆面を巻き直した。
「お疲れさん、＞砂鮫人（シャーラギ）＜たちは？」
「たっぷり脅しをかけたことが功を奏したか、今のところ近寄ってくる様子はない。流石にこの炎天下で長時間戦うのはきついんでな、小休止といったところだ。既にジヴーの兵たちも相当数集まっているようだし、対処に問題はないだろう。連中とて勝算の薄い戦いに身を晒すほど愚かではないだろうし、そろそろねぐらに帰ってくれればいいがな」
「皆さんもご無事で何よりですわ。つい先ほどから砂船への乗り込みが始まったようです。後は、ここにいる方々を乗せれば直ぐにでも出発できるはずですわ」
「それならよかった。今後の予定――の前に、そちらは？」

シュイは麦わら帽子を被った見慣れぬ褐色肌の女に向き直る。柔

らかそうなベージュの髪を垂らした女は、帽子のツバを前に傾けつつ呟いた。
「……女性に先に名乗らせるとは、一般良識として礼を失する行為かと思うのだが」
シュイは一瞬キョトンとし、ついで恥入ったようにフード越しに頭を掻いた。
「これは、抗弁の余地もないな、失礼した。俺はシュ……ラン。シュラン……ロズベルクだ。こっちはピエール・モーレ」
ども、とピエールが軽く頭を下げる。
「それでもってこっちが」
「アルマンド・ゼフレルだ」
そんなシュイたちの自己紹介に、女は微かな笑みを浮かべる。その仕草に見惚れてしまうが、女の視線が真っ直ぐ自分に向いているのに気づき、姿勢を正す。
「シュラン、だったか。よもや、自分の名を忘れていたわけではあるまいな」
「あー、いや。ほら、暑いから頭がぼーっとしてしまって」
「ふむ、その割に仲間の紹介は舌滑らかだったが」
「い、いや、その」
女はしどろもどろのシュイに小さく溜息を吐き、俯き気味にシュイを見上げる。砂漠の日焼け対策のためか、顔には白粉が満遍なく塗られており、どこか冷たい輝きを放っていた。
「――私はリーズナー・フェロン。世界各地を旅して回っている、しがないフリーの傭兵だ」
「フェロン、さん」
見覚えも聞き覚えもない。もしやルクセン教の関係者だろうか。
シュイが隣にいるイヴァンに視線を送る。意図したことを理解したのか、イヴァンが小さく首を振った。
「＞砂鮫人（シャーラギ）＜を食い止められたのは彼女の助太刀があったからだ。いなければ一般人への被害は免れなかった」

「え、そうなんですか？」
眉を上げたシュイが視線を戻した。服装は戦闘向きとは言えないし、体格もスタイルが良いことを除けばごくごく標準的か。どうみても、あまり腕が立つようには思えない。
――ん、この違和感、どこかであったような。
シュイは気のせいだろうかと首を傾げる。
「助太刀というほどのことはしていない、魔物共に直接手を下したわけでもないからな。……ところで、町の者たちはもう全員ここに揃っているのか」
フェロンの質問に、黙ってやり取りを聞いていたスザクが口を出す。
「大半の者は早々に脱出しておったし、兵たちの中にも感知魔法の心があるやつが何人かおる。在宅の有無は確認したはずじゃ」
「なら、いい」
女はぶっきらぼうに言った。シュイは、先ほどからになっていたことを口にする。
「――フェロンさん。その、俺たちどこかで会ったことありません？」
シュイの言葉にフェロンは含み笑いを漏らす。
「……きょうび、そのような流行遅れの口説き文句を持ってくるとは驚きだな」
「い、いや！　そういうことではなくて、どこか既知感が否めなくて」
「おいおい、こんなところでナンパかぁ？　あんまり節操ないと誰かさんに叱られちまうぜ」
肘で小突いてくるピエールをシュイが睨み返す。ヴィオレーヌにうつつを抜かしていたピエールにだけはそんなことを言われたくない。その気持ちを視線に乗せると、ピエールは大仰に肩をすくめた。どうやら通じていないらしい。
「なるほど、既に想い人がいるのか」

「い、いえ、別に」
「おや、おーやー、そんなこと言って良いのかなー。それとも、一丁前に照れちゃってるのかなー」
こいつうるさい。拳と奥歯が勝手に軋む。いっそ＞母（スリ）の温もりに抱（ハグ）かれよ＜で黙らせるか。
と、ピエールの視線が自分の顔からずれていることに気づく。問い質そうとした矢先――
「――なんだ、あの光」
その言葉に促され、一行が一斉に南側を向く。目を凝らせどもゆらゆらと陽炎が立ち昇っているようにしか見えない。シュイの視力とて常人に比べればかなり良い方だが、元々砂漠の住人だったピエールの視力はシュイより数段優れている。
「――砂船、だな。どうやらジヴーの船のようだが、何かの合図か？」
リーズナーには見えたのだろう。目を細めながら呟く。
「……ちょいといいかの」
思い当たることがあったのか、スザクが老人とは思えぬ動きで二人に割入るように進み出た。傍らの兵士がリュックから取り出した遠眼鏡を手早く受け取り、筒の中を覗き込む。

ややあって、唾を呑む音が聞こえた。心なしか、しわだらけの手が小刻みに震えている。
「シハラさん、どうかし――」
「おまえたち、急ぎ定員に余裕のありそうな船に住民を誘導せぃ、敵襲じゃ」
「……え、で……ですが司令の命令がないと我々は」
スザクは声を抑えながらも語気に苛立ちを含めた。
「つべこべ言わずにさっさと動かんか。何かあった場合の責任は儂が取る、それで文句はなかろう。敵の接近を許して恐慌状態になってからの乗船誘導ではあらぬ事故が起きんとも限らん。どうせこの

町は捨てていくんじゃ、片付ける必要はないから補助の架橋も余すことなく利用せぃ。儂はヴィレン殿を――」

「――シハラ様、私が」

スザクの隣に控えていた長身のジヴー兵が返事を聞くより前に造船所へと走り出す。周りにいた他の兵たちはちらちらとスザクの方を振り返りながらも住民たちの誘導を始める。

セーニアか、と呟くイヴァンにスザクが振り返った。頭にある三本の毛がゆらゆらと揺れた。

「間違いない、連続して四回、きっちり三秒後に二回。あの煌めきは敵の接近を知らせる我が軍の鏡面信号じゃ。大方南を巡回していた砂船が敵船を発見して戻ってきたんじゃろう」

さらにそのずっと奥、砂漠の地平に連なる煌めきを確認し、ピエールとリーズナーの顔色が変わる。

「……こ、こいつは」

「ざっと三十、後方にもいるだろうから下手をすると倍はいるか。セーニアめ、さては商船なども強制徴用しているな。この強襲で全てを終わらせる腹づもりのようだ」

シュイはしかめ面のピエールに話しかける。

「この近くには＞砂鮫人（シャーラギ）＜が大量にいるはずだったよな」

「……確か連中は初戦でも拡声魔石を大量に運用していた。あんまりあてにはならねえぞ」

「そうか。――シハラさん、船内に拡声魔石のストックはあるんでしたよね」

「うむ、我々が先頭に立って道を開ける手筈となっておる」

「――なら、俺たちは殿（しんがり）に回るか。もちろん、船の持ち主がうんと言ってくれりゃあの話だが」

ピエールが心配そうにイヴァンを見る。

「ここに留まるわけにもいかんし、乗りかかった船だ。……ただ、今回ばかりはラードドックに運転を任したとして十全ではないぞ。あ

の時俺たちを追ってきた船が全て座礁したわけでもない。巡回していた砂船が軒並やられたという報告は敵司令部にも必ず入っているはず。だとすれば相手は本隊か、それに準ずる連中。油断は端から捨てているだろう。高位の魔法使いが大勢乗っている可能性だってある。俺が言いたいことは、わかるな」

わかっている。これは単なる確認の言葉だ。セーニアの攻撃をどれだけ凌ぎ切れるかは未知数。ましてや、ジヴー軍は＞砂鮫人（シャーラギ）＜や＞地縛巨霊（ルキメギア）＜と戦った直後だ。炎天下の中での戦いとなれば体力勝負になり、とても勝ち目などない。場合によっては他の船を何隻か見捨てることになるかも知れない。イヴァンたちが仲間の命を最優先に行動するのは当然だ。十分に尽力してくれている彼らに「命を懸けて見知らぬ者たちを助けてくれ」などとは口が裂けても言えない。

「あの、対魔法防御であれば私もお力になれると思いますけれど」

ヴィオレーヌがおずおずと挙手する。

「何を言い出すかと思えば、駄目に決まっているだろう」

「……私では、力不足ということですか」

「勘違いするな、おまえの結界術の腕は信頼している。だが、今回はただでさえ大勢の仲間を失っているんだぞ。今後の立て直しのためにもこれ以上仲間を失うわけにはいかない」

ヴィオレーヌは一瞬嬉しそうな顔をしたが、おもむろに下を向き、指の先を突き合わせる。

「仲間、ですか」

「仲間として、女として、だ。今更確認するまでもないだろう」

そう言い捨て、イヴァンはぷいとそっぽを向く。それが照れ隠しであることくらい誰にでもわかるだろう。ヴィオレーヌはそんなイヴァンを見て、微かに目を潤ませた。

「……た、たとえそうであっても、確たる言葉があるとないとでは……全然違うのですよ？」

「今は緊急時だ、そんな話をしている場合じゃない」
「え……えへへ、そうですね。なら、後で」
「あのな、ヴィオレーヌ……」
「私だって皆さんの、あなたのお力になりたいのです。それに、あなたほどの達人なら、私一人くらい守ってくださるでしょう？」
「……」
言葉を失ったイヴァンを尻目に、シュイがピエールにひそひそと話しかける。
「（既婚の）実績のあるピエールさん、思慕の込められたこの言葉に対し、男ならどう答えるべきでしょうか」
「――そうですね、『しょうがないな、その代わり、絶対に俺から離れるなよ』辺りでよろしいかと」
「なるほど……、凄く……無難です」
「うーん、そこは王道と呼んで欲しいですね、格調高く」

茶化されたイヴァンが口を半開きにし、結び、白い犬歯を剥き出しにする。やや頬が紅潮しているのは熱気のせいだけではないだろう。
「そうか、今まで気づいてやれなくて本当に済まなかった。おまえたちは自殺志願者だったのか」
「おぉ怖、やはり照れ隠しに攻撃的になるというのは頻繁に起こる現象ですか」
「まさしく。まぁ、内心では返事をしない口実を与えてくれた我々に感謝しているかも知れません」
「素直じゃないですねぇ」
「……一度、力の差をはっきりわからせてやる必要がありそうだな」
イヴァンが二人に早足で歩み寄りかけたのをアルマンドが割り込んで仲裁する。
「悪いけど漫才はそこまでにしといてくれ。ヴィレンたちが来た」
アルマンドが顎をしゃくると同時に、建物の入り口からヴィレン

が大勢の者たちを連れ立って出てくる。こちらに駆けよってくるヴィレンを尻目に、従業員と見受けられる者たちが建物内の書類や荷物などを運び出し始めた。

ヴィレンとの距離が数歩ほどになったところでスザクが頭を下げる。

「済まぬ、そなたの兵に勝手に命令した。軍律に背いた報いは――」

「――緊急時とあれば一向に構いません、頭を上げてください。それより、乗船にはあとどれくらいかかりそうですか」

スザクが顔を起こし、架橋を渡る住民たちの様子を窺う。

「……そんなに数は多くないし、七分から八分といったところかの」

「そうですか、了解しました。……まずは、退路を抉じ開けなければなりませんね。シハラ殿、乗船の誘導は私が引き継ぎますので先に出ていただけますか」

「あいわかった。ヴィレン殿、そなたたちも、無理はなさるなよ」

「もちろんです」

「シハラさんも十分に気をつけてください」

「うむ、ではオルドレンで会おう」

スザクの小さくなっていく後ろ姿から目を放し、シュイはヴィレンに向き直る。

「オルドレンっていうのはジヴー連合の――」

「ええ、＞賢律院（ルーツ）＜の総本部がある町です。鉄工業が盛んであり、人口でも第二の都市。……ここ、ルトラバーグはそこの最終防衛線だったのですが」

ヴィレンの表情は冴えない。撤退する以上ここが落ちるのは確定的。次はオルドレンが最前線になるということ。つまりは――

――あらゆる意味で後がない、か。

ジヴー連合の首脳陣ともいえる＞賢律院（ルーツ）＜が手に落ちれば、連合

の結束力は地に落ちたも同然だ。バラバラに戦ってセーニア軍に勝てるわけもない。次の一戦に敗北すれば、その瞬間にジヴー連合の国々はセーニアの植民地だ。

「あそこには既に他の町から大勢の難民が流入しています。もしかしたら、水食糧の余裕もそれほどはないかも知れません」

「馬鹿、今は先のことを考えている余裕なんかねえだろ」

唐突に、ヴィレンを馬鹿呼ばわりしたアルマンドをジヴー兵たちが威嚇する。

「……訂正しろ、ヴィレン様に対しての不敬は見過ごせぬ」

「事実を言っただけだろうが、頭がかてえな」

「……貴様」

「よせ、彼の言う通り、今はこの状況を脱することが先決だ」

殺気立った兵士たちをヴィレンが手を差し出して制止する。

アルマンドはつまらなそうに肩をすくめてから後ろを振り返る。

「悪いけどよ、俺もおまえらの船に乗せてもらっていいか」

「えっと――」

シュイはちらりとイヴァンに視線を起こる。イヴァンは目礼で答える。

「……わかった、そうしてもらおう」

「そうこなくっちゃな」

「できれば、私も乗せていただきたいのだが？」

リーズナーがひょこりとシュイの脇から顔を出す。

「フェロンさんも、ですか？　それはちょっと……危険な目に合うのはまず間違いないですし、他の船に乗った方がいいような気が」

「運転も荒っぽいしな」

ピエールがひとつ大事な補足をする。

「――いや、乗ってもらおう」

一同の視線がイヴァンに集中する。

「あくまで俺の見立てだが、彼女なら自分の身一つくらい守れるは

ずだ。逃走を確実に成功させるためにも腕の立つ者が多いに越したことはない」

「まぁ、あんたがそういうなら――」

会話を遮るようにして甲高い警笛が鳴り響き、先頭の砂船がゆっくりと動き始めた。

「――話している時間が惜しいな、船に戻るぞ」

一同はイヴァンの言葉にうなずき、停留しているルクセンの船へ向かって走り出した。

～後継　ｓｕｃｃｅｅｄｅｄ　ｔｏ　ｗｉｓｈｅｓ１２～

人生最大のピンチというやつだろうか。ラードックは両手で舵を握り締めながらそんなことを思っていた。体に生えている毛という毛が、それぞれに意思を持ったかのようにざわついている。

数珠繋ぎに大船が並ぶ様は壮観の一言に尽きる。これほど多くの砂船が一同に会すことなど前例がない。まさか全ての兵士を詰め込んでいるわけでもないだろうが、それでも五十隻を超える大船団だ。一隻に百五十人ほどが乗っていたとして八千人前後。逃げるジヴー軍を壊滅させる兵力としては充分に過ぎる。ソロンに誘導する手も今回は使えまい。喉が焼け爛れたばかりなのに再び煮え湯を飲む馬鹿はいないだろう。

もしテクラ・エモンが生きてここにいれば、この窮地を難なく切り抜ける手立てもあった。ご婦人としてはお世辞にも誉められた性格ではなかったが、風使いとして高い素養を持つ彼女の魔法を利用すれば、操船で絶対的なアドバンテージを得られたのだ。

ふとした時に失った仲間の存在価値を知らされるのは初めてではないが、だからといって慣れるようなものでもなかった。

ルトラバーグを出航してから間もなくして、十四隻からなるジヴー軍の船団は二列に並び、砂漠を一路西へと進んでいた。脱出の邪魔になるだろうと思われていた＞砂鮫人（シャーラギ）＜の大群は、スザクの指揮する数隻の軍船から砂地に投げ込まれた数多の拡声魔石に恐れをなし、散り散りに逃げていった。

そして、シュイたちを乗せたルクセンの砂船はジヴー軍の船団から南、やや離れたところにあった。戦闘状態に巻き込まぬよう一定の距離を取りながらも並走状態を維持している格好だ。敵から一番近い位置についての撤退戦。とどのつまり、自分たちが殿（しんがり）であるということだ。

殿（しんがり）は動きを止められたその時が最後だ。追いついてきた敵に対応している間にあれよあれよと後続の敵に群がられ、包囲戦に持ち込まれて全滅する。そして、概して逃げる方よりは追う方が勢いがつき易いものだ。

本隊の後退を助けるこの行為は、古来から栄誉と忌避の両面を持つ。策略は例外として、撤退とあらば敗色濃厚な状態、もしくは確定している状況に追い込まれていることが常である。そんな味方を危機的状況から救い出すために身を挺するとなれば、それが誉れとされるのも当然だ。ただ、戦力の大半は本隊を守るために保持せねばならず、結果としてなけなしの戦力しか与えられない。命を犠牲にして時間稼ぎをする。大を活かして小を殺す。そんな側面があることもまた事実だ。

ラードックは左手の薬指に嵌っている銀の指輪に視線を移す。自分の齢もすでに六十三。戦場に立ち、桜の花弁のように儚く散っていった仲間たちに比べればよく生きた方だ。数年前に病で妻に先立たれてからというもの、そこまで生きることに執着しているわけでもない。まだまだ頼りないとはいえ、周りには後継者になれそうな者たちも育ってきている。

別に死にたいと願っているわけではない。肉体であれ精神であれ、死には苦痛が伴うものであるし、仲間や客に自慢のカクテルを振舞い、喜んでもらう今の生活も悪くないと思っている。

ただ、仮に死んでしまったとしても、エスペランの中に還れば愛する妻の魂に寄り添うことができるだろう。いつどこで、どのように朽ち果てようとも最悪の可能性は既に除かれている。それがラードックの心境だった。

いささか皮肉なことではあるが、そうと割り切れている精神の境地が、砂船の操縦にことのほか役立っていた。たとえどれほどの窮地に追い込まれようとも冷静に自分の取り巻く状況を、空から見下ろすかのように把握できるのだ。だから、常人であれば踏み込むの

を躊躇うだろう一線を、ラードックは容易く越えることができる。それこそが彼の強みであり、また危うさでもあった。

南の方ではジヴー軍が西へ逃げていくのを視界に捉えたセーニア船団が新たな動きを見せていた。真ん中よりに航行していた砂船が船首を西側へと傾け、それに遅れることなく、左右の船が連なるように船首を西側へと向けた。斜めに向けられた白塗りの船体が陽光を次々に反射し、光が大きな光の帯となった。

敵船までの距離は千メード前後といったところで、未だ魔法の射程圏内にはない。最上位の魔法使いや賢者がいれば話も変わってくるが、シュイがレイヴ・グラガンに聞いた話によればジヴー遠征に高名な魔法使いはほとんどついてきていないとのことだった。強力な召喚士団を有するルクスプテロンの反撃を警戒し、宮廷魔術師がセーニアを留守にすることに対しては反対意見が根強かったらしい。言い方は悪いが、たかがジヴーごときを制圧するのにそんなに強力な陣営で臨む必要がないと考えた可能性もある。無論、砂漠という世界で最も過酷な環境のひとつに足を運ぶのが億劫だった者も少なくはないだろう。

三十分ほども引っ張っただろうか。ついてきていた敵船の動きに再び変化が生じた。

「――敵船が二手に分かれた模様です！　二、四、六……、確認できる限りでは追ってきているのは十五隻ですね。後の船はルトラバーグの方に転座していきました。針路を変えて回り込もうという気もなさそうです」

筒状の遠眼鏡を左右に素早く動かしながら、船員が状況報告をする。

「意外と早く引き返したな」

「十五隻ってことは多く見積もっても敵の兵数は二千強。こちらを

殲滅しようとまでは考えていないということでしょうか」
　幾分表情が明るくなった船員を横目に、ラードックは敵船を映し出す両側の鏡に視線を戻しながら答える。
「確証はありませんが、物資が足りていないのかも知れません」
「あぁ、気がつきませんでした。それはおおいにありそうですね」

　当然のことながら、砂船を運用するには乗組員たる兵士たちの兵糧や水、寝具、そして大量の魔鉱石を搭載しなければならない。だが、あまりに荷物が多過ぎると、今度はその重みで船の機動力が落ちてしまう。こちらの船のように船員を含めても二十に届くかという人数であればそこまで気にする必要もないが、敵側はかなりの大所帯だ。戦いが始まってから二カ月以上が経過している現状、残っている物資が心許なくとも不思議ではない。
　加えて、オルドレンまではルトラバーグから砂船で四日ほどとかなり距離がある。万が一、ルトラバーグを放置してこちらを追ってくれれば、敵の補給線は間違いなく今よりも長細くなるだろう。短期決戦で事が片付けば取り越し苦労で済むが、この苛酷な環境で長期戦に持ち込まれ、水や食糧の不足を招けば死に直結する。裏を返せば、今こちらを追ってきているのは水や食料に余力のある船だと推察することができる。

　セーニアとしては戦力を温存したままルトラバーグから兵士たちを追い出すことに成功しているわけであるし、それだけで十分な成果と言えるだろう。よしんばここでジヴー軍に逃げられたところで勝負を急ぐ必要はない。となれば、砂船に乗れなかった歩兵たちが他の町からルトラバーグへ物資を運んで来るのを待つことも考えられる。
　――けれど、本来なら逆の運用をするのが最善だ。……ここにきてようやく一つ、綻びが見え始めたな。
　盤石と呼ぶに相応しかったセーニアの戦の進め方に、微細ながら

変化が生じている。それを感じ取ったシュイは船員から紙を一枚拝借し、思いついたことを忘れぬようつらつらと記述を始める。

机を挟んで向かい側では美女二人、リーズナーとヴィオレーヌが窓辺に寄り、箱庭のように小さくなったルトラバーグを眺めていた。

「セーニア軍は、ジヴー軍がルトラバーグに籠もって応戦する可能性をも考慮していたはず。結果としてジヴー側は町を明け渡す判断を下したわけだが、相手にしてみればどちらに転んでもいいように準備していたはずだ。町にあるだろう水や食料などの物資もあてにしていたのかも知れないし、相手もジヴー側の戦力を完全に把握していたわけでもないだろうから、伏兵の可能性も捨て切れなかっただろう」

「勝ちが決まったような戦ですし、挟み打ちで被害が大きくなるのを嫌った、という推論ですね。物資に関しては、先ほど結構な量の荷物を積み込んでいましたからほとんど残っていないとは思いますけれど」

シュイは、リーズナーの口調に妙な親近感を感じた。どうしてだろうと壁に寄りかかって宙を見遣るが、中々納得のいく解答に行き着かない。取れそうで取れない、歯間に挟まった食べカスのようなものか。

「連中もこっちと同じように不確定要素をしらみ潰しにしてるってところか。ルトラバーグが落ちたとなれば十一カ国のうちの五ヶ国を手中に収めているわけだし、妥当な判断だ。堅実に過ぎて面白味には欠けるけどな」

アルマンドがいかにもつまらなそうに首を振った。

「シュイ、現時点で考え得る最悪のパターンは？」

ピエールが腕を組みながらシュイに訊ねた。シュイは黙考し、しばしのうちに口を開く。

「俺たちが捕まるのは問題外として――逃げているジヴーの船が一

隻でも拿捕されることじゃないか。軍の機密に詳しい者が囚われれば脅迫や拷問によって抱えている事情や人間関係を漏らされる芽も出てくる。今ジヴーが最も警戒すべきは調略や裏切りで結束力を弱められることだ。ただでさえ少ない勝算をこれ以上引き下げられたら困る」

「結局、相手が諦めるまでジヴーの船団を守らねばならねぇってことだな」

「砂船の見た目はそっくりだから、この船が純粋にジヴー軍の船だと思われていたとしてもおかしくないけどね」

シュイの意見を肯定するように、後方からの砂船たちは船の後方にぴたりと貼り付き、それより北、船団の方に向かう様子はなかった。現在はやや強い西からの風。南から北西に向かう敵船と、真西に向かっているこちらの船とでは速度差がつくだろうが、反面こちらの走る距離は短くて済む。また、後ろから追ってこられた場合には飛び道具の扱いで優位に立てる。局所戦という観点で考えれば分は悪くない。

「――ラードックさん！　やたら速い船が一隻、左舷側から追ってきます。気づくのに遅れて申し訳ありません、既に２５０メードほどの距離しかありませんが、どうしましょう」

「――今確認しました。これは、ちょっと振り切れそうにありませんね。中型船、いや、こちらよりも小さいくらいか。……申し訳ないですが皆さん」

ミラー越しに舵持つラードックと入口近くに立っているイヴァンの視線が交錯する。

「一隻や二隻の船くらいはこちらで何とかする。船の操縦に集中していてくれ」

「わかりました、ご武運をお祈りしています」

甲板に出たシュイたちを待ち受けていたのは橙色に染まった砂漠と、南東方向から接近してくる砂船だった。船員の言葉通り、今まで見た船とは比べ物にならない速度だ。肉眼でも敵船の乗組員の服装がわかるくらいに距離が詰まってきている。大きさは五十から六十人乗りといったところで、船体は少し水色を含んでいた。甲板には弓を担いだ大勢の兵が並んでいる。

ふいに、リーズナーが立っていた位置から素早く一歩下がった。その爪先の少し先で、飛んできた矢が敷き詰められた板を貫いた。

「向かい風でこの距離を届かせる弓兵か、あまり歓迎できんな」

イヴァンが髪を撫でつけながら呟く。届いたのを確認して距離が十分と判断したのだろう。外壁の上に並んでいた兵士たちが一斉に矢を番え、弓を空へと傾けた。

油断するなよ。イヴァンのその言葉と同時に、防戦一方の戦いが幕を上げた。

「＞烈風壁（ウィンド・ウォール）＜！」

シュイが甲板に風の障壁を展開し、上空からの矢を弾き飛ばす。流れ矢のことを考えると＞氷結壁（アイス・ウォール）＜を行使したいところだが、この気候では薄壁しか作れそうにない。＞燃焼壁（ファイア・ウォール）＜など使おうものなら矢を燃やす前に船が燃えてしまいそうなのでこの選択はやむなしといったところだ。

その横ではアルマンドが槍の柄の中央辺りを握り締め、手首を捻る様にして回転させていた。飛来してきた無数の矢が渦巻く巨大な盾と化した槍に阻まれ、シャフト部分を折られながら地に散らばっていく。

そこから少し距離をおいて、船室に近い場所に陣取っていたイヴァンが、脇から飛来してきた矢を手刀で手早く弾き飛ばす。ヴィオレーヌがその後ろで手を組み、結界を張ろうとしたところで、イヴァンが肩越しに彼女を見た。

「矢の対処は俺たちでもできる、おまえは念のため対魔法防御と治癒魔法の準備をしていてくれ。今のところ弓による射撃のみだが、いつ織り交ぜてくるとも限らないからな」

ヴィオレーヌは無言でうなずき、詠唱を破棄して即座に別の詠唱に映る。

執拗とも言えるくらいに、セーニアの船からの射撃は止まなかった。ピエールが横薙ぎにした剣で風を起こし、連続して撃たれた矢を失速させる。続いてアルマンドが長槍を大きく振り上げ、巻き起こる上昇気流で空の彼方へと跳ね飛ばす。矢の雨が落ちてくる頃にはこの船はその場にいないだろう。

「延々と撃ってきやがるな、キリがねえ」

「かなり腕の良い弓騎士を揃えているみたいだなぁ、もうちょい近づいてくれればこっちにもやりようはあるんだが」

夕焼けに赤く染まっていく空の下で、その攻防はおよそ三十分に亘って繰り広げられた。敵船は機動力を活かして時に左舷側に、時に右舷側に回り込み、シュイたちに数多の矢を放ち続けた。

その間、ひたすらに攻撃を堪え凌ぐことを余儀なくされたシュイたちだったが、局面を打開する機会がやってきた。一向に倒れる様子のない船上の者たちに業を煮やした敵船が、接舷するべく近づいてきたのだ。

段々と前に出てくる敵船を目の当たりにして、シュイは温存という概念を捨て去り、すぐさま次の行動に移った。距離が狭まれば矢の軌道予測をしづらくなる半面、あの攻撃が届く。

狙い通り、敵船は横並びになるように接近を試みていた。盾と剣を持った歩兵たちが何人か、船室から出てくるのが見えた。弓兵たちが乗り込みを援護すべく、再度矢を番えた間隙を縫うようにして、アルマンドとピエールが投げナイフを取り出し、手が霞むほどの速度で投擲。柄のないナイフは見事、兵士たちの首元に次々に吸い込まれていった。敵軍に動揺が走ったのを尻目に、更なる追撃をせん

とシュイが魔力の五線譜を引く。初めて目の当たりにするシュイの威容に一同が注視した。

おそらく、敵船からではただの煌きにしか映らなかっただろう。レイヴとの闘いを経て洗練された＞刻穿ちし閃＜（ラビディティ・スカージュ）の魔弾が神速というに相応しい速度で敵船に殺到。船首の下部辺りに着弾した。耳障りな轟音が響いた。敵船が大きく横に揺れ、何人かの弓兵たちが砂の海に落ちていくのが見えた。

転倒させるほどの一撃ではなかったが、前面の金属板にいくつもの穴を穿たれた敵船は、目に見えて挙動不審になっていた。重量のバランスが崩れたのだろう。左右に蛇行しながら追ってくるのがやっとという有様だ。近づいていた距離がまた少しずつ遠ざかり、船は艫（とも）の方へと下がっていく。

「……見事な技だ」

「……厄介な技を」

リーズナーとイヴァンが声を重ね、互いの顔を見合わせて不敵に笑う。

「へっ、何とか……切り抜けたか」

アルマンドが槍を下ろし、大きく一息ついた。甲板や船室の壁に突き刺さり、あるいは散らばっている夥しい数の矢が、短時間のうちに発生した攻防の凄まじさを物語っている。

黄昏が砂漠の輪郭を弱めていく最中、二本の矢がマストの脇をすり抜けて飛来した。速度も矢の大きさも、別段先ほどと変わらない。なんの変哲もない射撃だった。

甲板に出ていた者たちの誰もが、その矢の存在に気づいていた。放り投げられた蜜柑を叩き落とすよりも簡単なことだ。その共通意識が、回りの者たちの反応を薄め、そして――

長身の体が、前後に揺れ動いた。

「……え」

呆けたような声は誰が放ったものか。うざったいくらいの熱を吸った船上に、極寒の嵐が吹き抜けた。

アルマンドはおのれの軽鎧の金属部分を避けるようにして、脇腹に突き刺さった一本の鉄の矢を見下ろし、微かに笑い、溜息と一緒に血を吐き出した。

「……まいっ……たな、もう、時間切れ、か」

「――アルマンド！？」

ピエールの悲痛な叫び声は果たして彼の耳に届いていたか。鉄の矢に脇腹をアルマンドは、虚ろな目で矢の飛んで来た方向を睨みながらその場に片膝をついた。

皆が皆、信じられないといった表情を浮かべている。恐るべき速射であったとか、誰かを庇っての負傷ならばまだ納得もいっただろう。だが、彼を貫いたのは百歩譲って受け止められずとも避けるには問題ない射撃。つい先ほどまで数多の敵の矢を余すことなく叩き落とし、投げナイフで見事な反撃にも転じた男が、そんな稚拙な一撃でやられてしまうなどとは誰が想像できるだろうか。

「――誰か……誰か早く治してくれ！」

ピエールがそう叫ぶなり、屈んだアルマンドの壁となるべく前に立った。その裏で、声に促されたヴィオレーヌが側面をイヴァンに守られながらアルマンドの脇に跪き、急いで呼吸と傷の程度を確認する。吐血していることから内臓の損傷はほぼ確定的だが、彼の鍛え上げられた体躯は自身の何十倍もの大きさの＞地縛巨霊（ルキメギア）＜を押し返すほどだ。ならば、助かる見込みは充分にあるはずだ。

そんな考えとは裏腹に、それほどの猛威を振るったアルマンドがたかだか一本の鉄の矢に傷つけられたという事実に、シュイは例えようのない気持ち悪さを感じていた。

とどめとばかりに、再び二本の矢が敵船の船首から放たれた。ピエールの左右の目がぎろりと動き、矢の描く軌線を完全に捉えた。弧を描いて飛来してきた矢を眼前で、左手右手とテンポ良く掴み、ダーツを持つ要領で矢の柄を掴み直す。

「こん……のっ、くそったれがあああぁぁぁ！！」

激昂に合わせて投擲。辰力で筋力強化をしていたのだろう。放たれた矢が飛来時の数倍の速さで射手へと戻っていく。咄嗟に身を翻そうとした弓兵二人の肩を見事に貫き、体ごと後ろの木板に張り付けた。

「ちぃっ、外したかっ……！」

殺意を込めての投擲だったことを窺わせるように、ピエールが忌々しそうに舌打ちした。投げ慣れてないものでそれだけやれれば上出来だと思わないでもなかったが、気持ちは痛いほど理解できた。自分とて目の前でニルファナやアミナが深手を負わされれば、決して傷つけた敵を許そうとはしないだろう。

それでも、ピエールが弓騎士にとどめを刺すべく投げナイフを取り出そうとしているのを見て、シュイが努めて穏やかに言った。

「――ピエール、先にアルマンドを船室に運ぶ、そっち持ってくれ」

そう言いつつ、シュイがアルマンドの足側に回る。一兵卒の殺害と仲間の介抱。どちらを優先するべきか誰だってわかる。

「……そう……だな。ヴィオレーヌさん、とりあえず出血だけでも止められるか？」

ピエールは一瞬だけ目をきつく閉じ、ゆっくりと開く。出しかけていた投げナイフを仕舞うと座っているアルマンドの方に向き直り、手をかざしているヴィオレーヌの横に屈み込んだ。

「……どうして？」

一瞬、彼女が何を言っているのか理解できなかった。ピエールが、否、その場にいた皆が言葉を失った。拒絶の言葉かと勘違いしたのだ。

ややあって、シュイはヴィオレーヌの問いが、ピエールの発した言葉に向けられたものではないことに気がついた。今迄みたこともないほどに見開かれた彼女の目が、驚愕の度合いを物語っていた。

「ヴィオレーヌさん、一体どうし……」

「……駄目……いつもと同じようにやっているはずなのに、傷が一向に塞がらないんです。……この人、治癒魔法を……全く受け付けて、いない」

彼女の言葉を呑み込むには数秒の時を要した。ざわりと悪寒が蠢き、毒のようにゆっくりと全身を冒していく。足早にシュイがヴィオレーヌの向かい側に回り、既に矢の抜かれている傷口に手をかざした。ピエールが藁にも縋る思いを視線に乗せてくる。その期待に応えようとシュイが治癒術の詠唱を始める。

――――そんな……なぜだ。――慈悲深き神々よ、我が祈りに耳を傾けたまえ。……神々よ、我が祈りに。

紡ぎ慣れたはずの治癒術の詠唱が、空々しい響きを伴って耳道を行き来していた。白い魔力光は確実に傷に向かって放たれている。なのに傷が治る気配は微塵もない。

血に濡れて艶を帯び始めた甲板が、脇腹から今も止まる様子を見せぬ鮮血が、どうしようもないくらいの死の臭気を漂わせていた。

～後継　ｓｕｃｃｅｅｄｅｄ　ｔｏ　ｗｉｓｈｅｓ１３～

ジヴー連合国第二の都市、アクラムの首都オルドレン。この街は工業地区、商業地区、行政地区の三つに区切られている。住居は主に平地の東側商業地区と南西側行政地区に密集しており、鉱山がある高地の北西工業地区は町に住む八割の労働者たちが通う職場となっている。

世界有数の大鉱脈が眠るダミア山脈の麓。山の東側にある断崖には幾つもの坑道が並ぶ。掘削された大きな横穴には取り外しの出来る燭台を置き、長い木の板が連なる様に置かれている。重い鉱石を運び出す手押し車の往来を可能にするためだ。

資源として価値ある金属をふんだんに含んでいる鉱石は高値で取引される。特にメノアなどの魔力を含む鉱石は一山当てれば庭付きプール付きの大きな屋敷が建てられると言われている。

ごく稀に可燃ガスなどを掘り出してしまう場合もあるが、魔法技術の発達によって昔よりはずっと安全に採掘ができるようになった。ガスが噴き出した時のために採掘員のリーダーは氷魔石や風魔石を持っている。

また、中には無臭の有毒ガスもあるため、そういったものを察知する魔物も用意されている。手の平サイズの液体金属のような体を持つマテリアル・ゴーレムがそれである。彼らは食事を必要としないが嗜好品として様々な種類の気体を好む。歯をカチカチと鳴らし始めるのはガスが吹き出る兆候であり、すなわち撤退の合図だ。

さて、前線部隊がセーニアの侵攻を食い止めているのとは別に、オルドレンの斜塔ダミア・ブイでは毎日のように激論が交わされていた。ダミア・ブイとは＞賢律院（ルーツ）＜の本会議場となっている七階建ての建物のことを差す。

＞賢律院（ルーツ）＜に加わっている十一カ国の有識者たちは一般階級の出

自の者が多い。スザク・シハラもその一人であり、主に魔法具の一般化や魔法技術の発展に貢献してきた人物だ。

彼らの決める法は加盟している各国の法と同等の強制力を持ち、その法を否決、もしくは緩和するには三分の一、四カ国の賛同を得る必要がある。ジヴー連合はルクスプテロン連邦ほど制約が厳しいわけではないが、対外的なリスクの分散を考えた場合、特に小国の政府にとって＞賢律院（ルーツ）＜への依存度は高い。また、加盟している民たちにとっても精神的支柱となっている。

ルトラバーグでヴィレンたちが時間を稼いでいる間、ジヴー連合のトップである＞賢律院（ルーツ）＜はオルドレンの周辺地域で『興国の存亡ここにあり』と義勇兵を招集、後詰の援軍を準備していた。実際、彼らが煽った台詞は大袈裟なものではなく、＞賢律院（ルーツ）＜の者たちも次の戦を最終決戦と位置付けていた。これ以上勝ち目の見えぬ戦を長引かせれば、軍が諦めずとも連合国民の不満を抑えきることができないからだ。詰まる所、ここで相手に一泡なりとも吹かすことができなければ、ジヴー連合の瓦解は時間の問題だった。

鉱石を採掘するほど人手に余裕がなかったため、地下倉庫や近隣の町で貯蔵していた鉱石を製鉄所に回し、フル稼働させた。財宝や貴重な鉱石類も余すことなく戦費に充てていたため、装備の整ったセーニア軍にも劣らぬ質の武具が揃いつつあった。

これが自分の国だけの予算であれば出し惜しみもしただろうが、十一カ国共有の税金となれば遠慮はいらない。だが、そうして四方手を尽くして準備されつつあった援軍がルトラバーグに送られることはなかった。

年の瀬も迫った十二月二十一日。魔物の襲来を受けたジヴー軍はヴィレン・カシリの指揮の下ルトラバーグから脱出を図り、住民たちを伴ってオルドレン入りした。彼らの帰還に関しては一悶着あった。第一に、空き家や軍の施設は一月ほど前から満杯になっており、これ以上セーニアの侵攻から逃がれてきた難民たちの住居を確保するのは難しくなっていた。

苦肉の策として、町の近場にある小さなオアシスをぐるりと囲い込むように、彼らを住まわせるテントを設置し始めた。木の枠組みに幅広のフェルトを張っただけの簡素なものだが、日差しと砂吹雪を防ぐには十分なものだ。

短期間で仮住まいの住居が与えられたのは全体の二割にも満たず、特に病人や怪我人など、体力の心配される者が優先して入ることになった。

唯一の救いは、支援物資がフォルストロームを始めとする各国から続々と届けられていたことだ。満足に、とまではいかなかったが、町からあぶれた難民たちであっても必要最低限、栄養を満たすための食糧は確保できていた。

けれども、それだけで不満が払拭されるわけもなかった。彼らの多くが家族や友を殺され、住居を焼かれ、財産を奪われていた。そして、戦場に向かう意志があるなしに拘わらず働き手を戦争に駆り出され、敗色濃厚な戦いに投入されていった。徴兵された者たちの中には行方知れずの者も多くいた。彼らの家族たちは等しく、死んでいるかどうかも確認できないまま、生きている限りその悲しみを引きずっていくことを余儀なくされた。

今や鬱憤の矛先は憎きセーニアだけでなく、ジヴーの軍部にも向けられていた。そして、その絶好のやり玉として挙げられたのが、セーニア軍と戦うことなく退却してきたヴィレン・カシリだった。ジヴーは最後の決戦を前にして、一人の有能な将を失おうとしていた。

ナツメヤシが群生している道沿いでは、至る所で哀愁を誘う声が響いていた。レムース教会やルクセンの寺院で歌われているのは神を称える讃美歌（ヒム）ではなく、死者とその遺族を慰める鎮魂歌（レクイエム）だ。その中に混じって聞こえてくるのは――啜る、叫ぶ、咽ぶといった違いがあるにせよ――泣き声が大半だった。

死体安置場となった大きな公会堂では、体中が傷だらけだったり肉体の一部が欠損している兵士たちが顔を布で覆われた状態で、仰向けにずらりと横たえられていた。国のために、家族のためにと剣を振るい、生きて帰ること叶わなかった者たちが。

屋内は蠅がたからぬように一風変わった乳香の匂いで満たされていたが、臓腑の腐臭は誤魔化せるものではなかった。そんな居心地の悪い空間に、しかし身内の面影を求める者たちがひっきりなしに訪れていた。

ミイラのように包帯が巻かれた遺体を見て、呆然と立ち尽くしている少年がいた。顔から布を外し、友人と思しき者らに肩を支えられながら泣き崩れる、年若い女がいた。あるいは、慎重に運び出される棺桶に縋りつく婦人も。

遺体が見つかればまだましな方だった。息子の所在がわからぬと老人が鬼の形相で杖を振り回し、混乱が起きぬよう配置されていた兵士たちに取り押さえられていた。その場にいる誰もが、施設の管理を任された兵士たちも例外ではない、悲しみの海に沈められて窒息しそうだった。

そして、公会堂から遠く離れた場所でも、今まさに、一つの命が燃え尽きようとしていた。

中心街の喧騒が届かぬ丘の上に、小じんまりとした寺院はあった。それを避けるように設けられた細道の先には離れが。玄関口の脇にノースリーブの黒いワンピースを着た黒髪の女、ヴィオレーヌの姿が立っていた。

あまり睡眠を取っていないのか目には色濃い隈が残っていたが、眠気よりは使命感が勝っているかのようだった。時折誰かの到着を待っているかのように凛と背筋と爪先を伸ばし、寺院の方を窺っていた。

ふいに近くにあった灌木の茂みが大きくざわめいた。意表を突かれたヴィオレーヌが肩を震わせて音の方を見遣る。
「……ピエールさん、シュイさんも！　……もう、驚かさないでください」
突然現れた二人に、ヴィオレーヌが腰に手を当てて窘めた。
「わ、わりぃ、急いでた、もんで」
「右に、同じ」
僅かな時間を惜しみ、道なき道を駆けてきたのだろう。息を切らす二人の身につけている衣服には千切れた枯れ草や小枝が絡んでいた。ピエールは両膝に手を突きながらも顔を上げる。
「……ともかく、間に合って良かったです。魔石が使えないからもしかしたら間に合わないかと」
「リーズナーさんが直ぐに駆けつけてくれたからな。意識が戻ったって聞いたけど……アルマンドさんは」
未だ呼気整わぬピエールの問いかけに、ヴィオレーヌは何も答えずに俯いた。否、答えられなかったのだ。荒かった吐息の音が一瞬で途絶えた。
「……申し訳ありません、……私には、……もう、どうすることも」
聴き取るのがやっとの声に、果たしてどれだけの無念が込められていたのか。微かな希望を打ち砕かれ、ピエールは一言も発することなく目を伏せた。そんな二人を横目にし、シュイは気休めすらも口にできない自分を不甲斐なく思った。
建物の中に視線を移すと、朝日の明るさと対比的に、地の底のような闇がそこにあった。かつて垣間見た恐怖が胃の底から込み上げ、それを必死に押し戻そうと唾を呑む。命の尽きる瞬間に立ち会うことは、絶望的な戦いにも似た恐怖をもたらした。
「……お二人に是非ともお願いしたいことがあるそうです。……時間がありません。さぁどうぞ、中へ」

石造りの診療所には部屋が五つあった。一番手前が待合室で長椅子が二つ置かれ、診察室と手術室は大部屋での兼用だった。残りは全て病床の置かれている部屋だ。ヴィオレーヌは入口から向かって左側の、最奥の一室に案内した。

足を踏み入れた途端、消毒液の匂いが鼻についた。窓が開いているのか、布製の白い仕切りが陽光を吸いながらゆらゆらと波打っている。曇りガラスのドアが音なく閉じられ、肩越しに後ろを見る。細部が曖昧になったヴィオレーヌの姿が、躊躇いがちな足音と一緒にその場を去った。

仕切りをそっと左右に開くと、アルマンドが白いベッドの上で胡坐をかいていた。シュイとピエールは束の間きょとんとし、お互いの顔を見合わせた。てっきり寝ているものだとばかり思っていた。

「……やっと来たか、年長者をこんなに待たせやがって。待ちくたびれて死んじまうかと思ったじゃねえか」

笑みを象るその唇は貧血で紫がかっていたが、それでも半死半生の怪我人とは思えぬものだった。髭はきっちり剃られていたし、髪の毛も寝癖ひとつなく整えられていた。小さな窓から生温い風が吹き込む度に、オーデコロンの香りが漂ってくる。

「な、なんだよ、思ったより元気そうじゃねえか」

ほっとした様子のピエールに向けられていたアルマンドの瞳は、物悲しさに満ちていた。膝の上に置かれていた両手は小刻みに震えていた。上半身の重みを支えるので精一杯なのだとわかった。格下の、というよりは後輩にといった方が正しいだろう。弱いところを見せたくないという思いが伝わってきた。

「……本当に、助からないのか」

悲観的な言い回しに葛藤を覚えたせいか、言葉が途切れ途切れになって出てきた。ピエールの顔にあった微かな笑みが歪んだ。部屋に入る前、ヴィオレーヌから告げられた「最後のお別れを」という囁きが、二人の脳裏で復唱されていた。

彼女の診立てを疑っていたわけではない。一流の治癒術士は症例だけでなく、数多くの生と死を見続けていることを二人は知っていた。なんのことはない。彼がこれから死ぬのだという事実を、ただ否定したかったのだ。

アルマンドはぱしっと膝を軽く叩き、窓の外を真摯な目で眺めた。夜が明けたばかりで、空にある薄雲は霞みがかっていた。

「――まぁ、あれだ、あんまり気にすんな。傭兵なんて物騒な商売やってる以上、俺だっていつかこうなるのは覚悟の上だったんだからよ」

あっけらかんとした物言いに、ピエールが鼻白んだ。

「気にしないわけがねえだろ。なんでだよ、なんであんたほどの男があんなへぼい矢を避けられなかったんだ。なんで治癒術でも薬草でも、その程度の傷が塞がらねえんだよ。どう考えたっておかしいだろ」

ピエールが捲し立てるように問いかけた。アルマンドの体のことを知らされていなかったことに、苛立ちを募らせているようだった。

アルマンドの受けた矢傷はどうやっても塞がることがなかった。まるで、彼の体自体が治すことを拒んでいるかのように、治癒術も高価な薬草も受け付けなかった。

治癒術の効き目は当人の生命力に影響される。だから、老化や長期の病を経たことによって治りが悪くなることはままある。けれども、シュイの目から見てもアルマンドの年齢はまだ四十には届いていないだろう。シュイにはピエールの納得いかぬ心情を手に取る様に理解できた。

セーニアの追撃を振り切ってからオルドレンに辿り着くまでの間。砂船の中ではヴィオレーヌが出血の酷かった血管を縫い合わせ、シュイや氷系統の魔法の心得のあるルクセンの船員が交代で、包帯が吸った血液を凍らせて止血していた。強い痛みを和らげる粉薬を服

用させてもいた。だが、所詮はその場凌ぎの治療に過ぎない。事実として、彼はこの四日もの間、昏睡状態にあった。

「……ヴァニラさんが目覚めた時になんて伝えれば――」

「――っだぁ、いつまでもうじうじとうるせえやつだな！　しょーがねえだろ、急に体が動かなくなっちまったんだからよ！」

怒鳴り声が傷に響いたのか、アルマンドは息を掠れさせた。

「だー、そんな体でいきなり怒鳴るから」

わたわたと慌てるピエールに、アルマンドは苦笑いしながら溜息を吐いた。

「……どのみち限界だったんだよ。あいつも」

心底疲れたようなその声に、ピエールが掠れた息を漏らした。会話が途切れ、沈痛な空気が漂った。黙りこくった二人の代わりにシュイが口を開く。

「ヴァニラさんっていうのは、アルマンドの恋人か」

「……まぁな、寝たきりの状態が何年も続いていたんだがここんところ急に容体が悪化してな。もう、年を越せるかも怪しいって告知された。たとえどんなに優れた治療を施してやったところで、体を動かせない状態が何年も続いたら体のあちこちにガタがこないわけがねぇ。……むしろこんだけもったのが奇跡的なんだ」

ピエールが威嚇するように床を足を強く踏み鳴らした。

「――だったら尚更、傍にいてやらなきゃ駄目だろ！　よりにもよってこんな終わり方……最悪じゃねえか」

口から失望の感情が溢れ出た。アルマンドに対してというよりも、自分への怒りが大きかったようだ。

乱戦ならいざ知らず、あの状況で事情を知っていれば、飛んできた矢から彼を庇うこともできたはずだ。そうやって、彼はアルマンドが意識を取り戻すまでの四日間、シュイの前で、しきりに自分を責める言葉を口にしていた。

「そういうなって。こうなっちまった以上説得力ねえだろうが、俺

だってあいつの死に目にはきちんと立ち会うつもりだったんだ」
「ならどうして……」
「――俺にも時間がほとんど残されてねえ。貴重な時間をただ死を待つだけのものにするなんて、誰だってまっぴらだろ？」
アルマンドが遠い目をしながら呟いた。つまりは彼自身、元々健康に何かしらの欠陥を抱えていたということであり、それをちゃんと自覚してもいたということだ。そして、シュイにはその心当たりがひとつあった。
「あんたの体を蝕んでいるのは、もしかして呪詛じゃないのか。多分、治癒魔法が利かないのも……」
アルマンドの目が大きく見開かれた。
「ルトラバーグで、あんたの影の中に変な物が蠢いているのが見えた。確証はないが、あんたの体に起きている異変と無関係とも思えない」
ピエールは縋りつくような目でアルマンドを見た。
「……そうなのか？」
「……あの薄暗い中気づくたぁ流石に目敏い。が、これは呪いとは少し違う。そもそも、俺が自ら望んで施してもらったもんだしな」
「自ら望んだだって？」
シュイは――隣にいるピエールもだろう――その言葉を理解し損ねた。視線で先を促す二人に、アルマンドは間を置き、長々と息を吐き出してから目を瞑った。ただ呼吸するだけでも億劫そうだった。
「そう……だな、こうなっちまった以上色々と頼まなきゃならねえこともあるし、ケジメとしておまえたちには事情を知らせておかなきゃな。ちっと長くなるから、ほれ、そこに座ってくれ。ま、話し終えるまで体がもつかは保証できねえけど」
アルマンドは壁際に置いてある深緑色の、背もたれのない簡素な丸椅子を指差した。シュイはうなずき、ピエールの分と二つ、アルマンドの前に置いた。

二人が腰掛けるのを眺めながら、アルマンドはキャビネットに置いてあった水差しに口をつける。ガラスの容器に小さな泡がぽこぽこと立ち込めた。その弱々しさに、シュイは小さく呻いた。

「さてと――――初めに断っておくが、これは俺が万事承知して受け入れた運命だ。残念ながら、最後まで覆すことはできなかったがな」

俺は、ジウー連合の一国、エリメドの生まれだ。親父のことは記憶が不確かなところもあるが、厳格な軍人だったのは間違いねえ。叱責の代わりにビンタが飛んでくるようなやつだった。お袋はお喋り好きが高じて始めた酒場を切り盛りしていた。とっくに潰れちまったがな。

夫婦仲は可もなく不可もなくってところで、弟と妹が一人ずつの三人兄弟。まぁ、ジヴーのどこにでもありそうな一般家庭ってところか。生活は決して裕福とはいえなかったが、かといって困窮してるってほどでもなかった。普通に学校にも通えていたし、食う物に困っているってわけでもなかったし。

ただまぁ、物心ついた頃からこの砂の大地だけはどうにも好きになれなかった。住んでいる町の周りは見渡す限りの砂漠。普通に呼吸しているだけでも砂が飛び込んでくるし、砂利が目にでも入りゃあ痛いなんてもんじゃねえ。暑過ぎて外で遊べるのは朝方と夕方の僅かな時間だけ。革の靴底を無視して足の裏に伝わる地熱。かと思えば夜は馬鹿みたいに冷えることもある。

他の街に出掛けるのは大人でも一苦労だ。何せ最寄りの街までは歩いて一週間近くかかったからな。ラクダに荷を背負わせ、手綱を引きながら砂漠を横断するのは、気力体力がいる。普通の道を歩くのとはわけが違う。一歩踏み出す度に足が砂に埋もれ、次第にふくらはぎが張ってきやがる。子供の足なら尚更だ。ま、そのせいで足腰は自然と鍛えられていたみたいだけどな。何で皆がこんな暮らし

にくいところで生活をしているのか、幼心にどうにも不条理を感じたさ。

学校の授業で地理や生物なんかを学び始めてからは、その思いも日増しに強まっていった。世の中にはいろんな国がある。花びらや水の結晶が砂のように舞う国。年がら年中雨が降り、たわわな果実が実り、木々に埋め尽くされた国。世界各国から多くの人が集まり、商売に精を出している国。

はたまた、見たこともないような珍獣、幻獣が棲んでいる。＞二ッつ首の竜（イスト・ドラゴン）＜やあらゆる山の頂きより高き空を泳ぐ鯨、＞叡鯨（ワヌトゥラー）＜。そんなことを知ったら子供の好奇心を抑えられるわけがねえ。大きくなったらこのくそったれな町を絶対に出ていってやろう。そう決めていたんだ。

そんで、確か俺が十歳くらいの時だったか。親父が仲間たちと巡回中に魔物に襲われている商隊と遭遇したらしくて、守ろうとして逆に殺られちまったらしい。それを聞かされた時は頭が真っ白になった。

ほら、子供にとっては親父の存在って絶対的なところがあるだろ。ましてや軍人で、顔つきも体つきもダチの親父なんかよりもよっぽど迫力があった。そんな親父が死ぬなんて信じられなかったんだ。お袋にとっては尚のことショックだったはずだ。金銭の工面を含めて後の生活のことまで考えなきゃあいけなかったからな。

親父が亡くなってから数年もすると、働き通しだったお袋も病に倒れちまった。本業の他にもラクダの世話やら井戸の水汲みやらも掛け持っていたからな。気負い過ぎて無理が祟ったんだ。そん時はまだ父親の残した金や慰労金には手をつけずに済んでいたんだが、働き手がいなくなったとあっちゃあそうもいってられねえ。少しずつ貯金を切り崩している間に最年長の俺が、つってもまだ十四だったが、どうにかして金を稼がにゃあならなくなったんだ。ま、その辺りはピエールの境遇とちっと似ているな。

結論から言うと、俺は学校を止めて傭兵になった。そのきっかけを作ってくれたのが俺の悪友、ヴィレン・カシリだ。

あいつとはガキの頃からの付き合いだ。俺と違って頭の回転が速くて、しかも良家のおぼっちゃん。……だったんだが、大人しそうなのは外見だけだったな。腕白で喧嘩っ早い根っからのガキ大将。現在進行形でお山の大将をやってるくらいだ。性根は大人になっても治らなかったんだろうよ。

やつと知り合った頃は親父が亡くなった時期と重なっていて、俺も結構荒れてた。周りの連中がびびって俺に近づかない中、唯一あいつだけは平然と突っかかってきやがったのをよく覚えてる。八つ当たり気味に何度も追い払ったんだが、意外としつこいやつでよ。顔を合わせるたびに喧嘩してた気がするな。それが終わるとなんだかすっきりしている自分がいて、そんな自分にまた無性に腹が立ってよぉ。

いがみ合ってばかりだったし、しょっちゅう青痣を作ってばかりだったし。疎遠にこそなれ仲良くなる要素なんかどこにもなかった気がするんだが、いつの間にかつるんでいたんだよな。おまえら二人と似たようなもんか。

まあそれはともかくとして、割の良さそうな仕事を探していたんだが、まだ中学も出てねえやつを雇ってくれるところなんてそうあるわけじゃねえ。ただでさえ、ジヴーは働く場が少なかったしな。肉体労働でも子供を雇うくらいならもっとガタイのいい大人を雇うのが普通だ。

そんな中、ヴィレンのやつが俺が働き口を探してるってどっかから聞きつけたみたいでな。俺に内緒で自分の父親に掛け合って、伝手のあるセーニアの傭兵ギルドに口添えしてくれたんだ。もちろん、四大ギルドなんて大層なもんじゃなくて――その頃はまだシルフィールも今ほどの力を持ってなかったから三大ギルドって言われてたが――それほど知名度は高くない中堅ギルドだった。腕っ節には自

信があったし、傭兵なら仕送りに十分な金も稼げる。俺は二つ返事でその有難い申し出に乗った。

手を振る家族や友人たちに見送られて砂漠を後にする時、ほんの一瞬だけ、ジヴーって国も実はそんなに悪くないんじゃないかって思ったな。一人生まれ故郷を離れるとなると、余計に感慨深いもんがあった。

だが、そんな思いも少ししたら彼方に吹っ飛んじまった。行商人たちと一緒に砂漠を超えて、初めて海を見た時には本当に感動したな。その大きさもさることながら、あんなにたくさんの生き物が泳いでいるのにはびっくらこいたぜ。

俺たちは色々な町を巡って商品を卸し、仕入れながらセーニアに向かった。道行く人々の珍しい格好や異国情緒溢れる建物を見ているだけで退屈しなかったな。

出発したのは年明けだったが、目的地についたのは春頃だったな。二月近くの旅だったけれどあっという間だった。俺は商隊に礼を述べて別れ、二、三日宿場で旅の疲れを癒したところでヴィレンの親父に紹介してもらったギルド・フォルランの入団試験を受けて、晴れて合格したんだ。

ヴァニラ・ハインドはギルドの準マスターだった。言ってみればマスターの補佐役みたいなもんで、中規模のギルドにはそういった存在も珍しくない。大手と違って支部がいくつもあるわけでじゃないからな。

彼女は魔族ってこともあってひよっ子の俺よりずっと年上でな。確か十二、三歳は離れていたんじゃないか。武器よりは赤い薔薇でも持っている方が余程しっくりきそうで、ウェーブのかかった金髪と紫色のつぶらな目が印象的だった。スレンダーで背丈も当時の俺よりは高かったっけ。赤いリボンの付いたシャコールグレーのブラウスに、両サイドにスリットの入った黒のロングスカートを好んで

穿いていた。
　初対面の時は見下されてる感じがびんびんした。期待を裏切られたというか、お嬢様然としているのは外見だけで、槍の名手にして付与魔法も扱うバッリバリの武道派。そんでもって新米傭兵の指南役でもあった。俺が槍を主要武器にしたのもその辺りが原因だ。魔獣に縄で繋がれて引っ張り回されたり、大小の鎧を二枚着込んで真夏の町中を走らされたり。今思えばかなりのスパルタだったよ。

　話を元に戻すと、仕事の身入りはそこそこだったが楽じゃあなかった。フォルランと比べると、今のシルフィールがどんだけ恵まれてるのかがよくわかる。雲泥の差ってやつだ。
　当時は連絡用魔石なんてものはなかったから他パーティとの連携もままならなかったし、絶体絶命の時に援護も期待できない。加えて、入り込んでくる依頼の難易度も曖昧なものが少なくなかった。一時の油断が死に直結することもあって、仲間が死傷する頻度はシルフィールの比じゃなかった。
　かくいう俺も二度ほど死にかけたことがあった。確か、そのうちの一回は偶々ヴァニラに助けられたんだ。命からがらギルドに戻ってこれたはいいけど、その後に一晩中の説教が待っていた。
「一月以内に同じ任務を受けて、しかも連続して失敗するなんて、アンタの頭って飾りものなの？　あらあら、随分といい音がするわねぇ」
　説教中、彼女は椅子に座ったまま、正座中の俺の頭を槍の柄で何度となく小突いた。
　普通、任務に失敗した時は力不足と判断して、ある程度力をつけてから挑むもんだ。失敗したのは運が悪かっただけだって過信していた俺に言い訳の余地はなかった。が、いくらなんでも叩き過ぎだろとは思っていた。鏡を見たわけじゃあないが、コブの三段重ねくらいは絶対にできてたはずだ。
「そんなに心配してくれたのか」

そう訊いたら、思いっきり鼻で笑われた。
「有り得ないわね、私は人族って連中が大嫌いなの。なんだかやたらと群れたがるし、虫みたいじゃない」
こってこての純血主義魔族がこんなところにも。って、これはまぁ本心だったみたいだ。親しくなった後で、俺に厳しい訓練を課したのは半ば辞めさせるための嫌がらせみたいなものだったって言ってたからな。どんな顔を返せばいいのかわからなかったけどよ。
「そんならどうして助けたんだよっ」
そう訊いたら「口の利き方がなってないわね」って左右の頬をゴンゴンってなもんだ。鼻血まで出てきたもんだから、流石に我慢ならなくなってな。ガン付けた俺にヴァニラは気を悪くしたのか、仏頂面になった。何でわからないのか、って感じだった。
「指南役である私が教えた新人君があっさりと死んだら私の評価がガタ落ちでしょ。アンタが死ぬとこっちにまでとばっちりが回ってくんのよ。そこんところわかってるの？　不慮の事故とかであれば、いくらでも死んでくれて構わないけどさ」

あー、ちくしょう。思い出したらまた腹が立ってきやがった。どうしてそんな性格の歪んだ女を好いちまったのか。……やっぱ外見に騙されたのかなぁ。あんな綺麗な目をした女だから実は心も澄みきっているはずだって、まじで思ってたもんなぁ。口にすんのもこっぱずかしいぜ。若気の至りってやつだな、あれは。

兎にも角にもそんな女だったもんで、告白するまでには並々ならぬ葛藤があった。魔族と人族が付き合うパターンは今に輪をかけてなかったし。実際、俺が告白した時のあいつの呆れ顔といったらなかった。十秒くらいは時間が固まっていた気がするな。
立ち直って一言目には
「顔を洗ってきなさい」
言いつけ通りに顔を洗ってきたら

「……話す価値もないって暗喩のつもりだったんだけど、それくらい悟ってくれないかしら」

それでもどうかと食い下がったら

「自分より弱い男と付き合え、ですって？　……なんていうか、流石は人族ね。恥という言葉を知らないのかしら」と表情筋を目一杯引きつらせながら嫌悪感てんこ盛りで見下された。

そこまで言われてすごすご引き下がっちゃあ男が廃る。なんとか俺の実力をヴァニラに認めさせてやろうと以前にも増して死に物狂いで槍を振るった。手にはいつも血マメが出来ていて、それが破れて固くなって、更にその上に血マメが。……半ば意地になってたな。

それから何年かして、俺は彼女との賭けに勝った。模擬戦でついに一本取ったんだ。その頃は俺も二十歳くらいになっていて背丈も追い越していたから、外見上は釣り合う感じにはなっていた。あいつは三十をとうに超えていたはずけれど、人族の俺からすれば外見はまだ二十半ばにもいってないくらいだったしな。

「約束は約束だし、しょうがないか」って感じで、ヴァニラは自分が取り落とした練習用の棍棒を見て何度となくうなずいていた。嫌そうな顔をされたらどうしようかと思ってたけれど、それがなかったのが救いだな。

付き合い始めてからも気苦労は絶えなかった。恋愛の教本をお手本にするくらい馬鹿丁寧に、と言えばわかるか。一歩一歩段階を踏んで、一緒に買い物や食事に出掛けるところから始めてよ。

武一辺倒で生きてきた女だったから料理の出来も壊滅的だったな。卵料理くらいは人並みに作れるようになったけど。旅行にも何度か誘ったんだが「任務中にいくらでもいけるでしょ？」って取り付く島もねぇ。

それでも、曇り空の下で知らぬ間に溶けていく雪みたいに、ヴァニラは少しずつ、本当に少しずつ、俺に心を開いてくれるようにな

った。その過程が快感だったってことは、やっぱべた惚れしていたんだろうな。だが、破局の足音は直ぐそこまで近づいてきていた。

今から十二年近く前。ヴァニラと付き合いだしてから三年くらいは経っていて、真剣に一緒になることを考え始めた頃だ。当時の裏ギルドの最大手、バイルワールドがギルド潰しと称してセーニア北部一帯の傭兵ギルドを総浚いするように襲ったんだ。当時は国ぐるみで傭兵による犯罪者の取り締まりがかなり活発化していてな。総元締めとしては目障りに思っていたんだろう。

シルフィールはこの戦いで唯一損耗を抑え、かつ敵に大打撃を与えたギルドだ。現マスターの付き人であるランカーＮｏ2、ビリー・スタンレーはその筆頭だな。攻めてきた幹部連中を単独で三人も仕留めたそうだぜ。ギルド潰しを阻止したシルフィールの名は一気に知れ渡り、四大ギルドに数えられるようになるまでになったってわけだ。

だが、そんなのは例外中の例外。他の大多数のギルド同様、フォルランも連中の餌食になった。

敵の人数が予想以上に多かったのも一因。マスターが不在だったのも一因。いや、言い訳だな。俺が強けりゃ何の問題はなかったんだ。少なくとも今くらいの腕がありゃあ、皆を守るのに不足はなかったはずだ。

けれど、現実はどこまでも残酷だった。あの日ギルドにいた二十八名は、俺とヴァニラ以外殺されちまった。必死に戦い、力尽きた彼女の口にやつらは実験と称して妙な草を無理矢理詰め込みやがった。

――あの時のあいつの悲鳴は、俺の名前を呼ぶか細い声は、今でも忘れられねえ。耳を塞いだって聞こえてくる。あの気位の高い女が助けを求めるなんて、どんだけの恐怖に晒されたのか。俺は掴まれていた腕を無理矢理に振り解いて、何とか助けようと立ち向かったんだが、胸元をざっくりと抉られたところで意識が途絶えちまっ

た。俺は――――あまりに弱過ぎた。

目が覚めた時には傷病病院のベッドの上にいた。起きた瞬間に胸が痛んで、顎を引いてみると、傷口を乱暴に縫った跡が見えた。多分、五十針くらいはやったんじゃないか。致命傷と判断されたのか、とどめまでは差されていなかった。……運が良かったんだか、悪かったんだか。

窓際のベッドにはヴァニラが眠っていた。驚いたことにちゃんと息していて、今すぐにでも起き上がってきそうな穏やかな寝顔だったよ。だから、一瞬ぬか喜びしちまったんだよな。

マスターのハルゲンは俺が目覚めたのを見届けて椅子から立ち上がり、呪いの言葉を吐きかけて姿を消した。毒を呑まされて無事でいられるはずもねえのに。ヴァニラは、ただ呼吸をするだけの生きる屍になっちまっていた。

叱責は当然のことだと受け止めている。ヴァニラはハルゲンの実の妹だ。好きな女を守れなかった俺に非があるのは誰より自分がよくわかってる。あれほど自分の不甲斐なさを嘆いたことは、ない。

悪循環はそこでも終わってくれなかった。ギルド潰しの二週間後、ハルゲンは出払っていて無事だったギルドメンバーを結集して、被害にあった他のギルドと共同でバイルワールドの本部にかち込みをかけていたんだ。

その結果は、言わずともわかるよな。幹部の一人に重傷を負わせて、そこまでだった。翌日にはバラバラにされた肉片が袋詰めにされ、広場に放置してあったそうだ。見せしめのつもりだろうが、本当、度を越してるよ。

それと前後するようにして、呆然自失と療養生活を続けていた俺に差出人不明の手紙が届いた。三行しか書かれていない文を読んで、俺は全てを理解した。

『あの日は頭に血が上っていた。なんら落ち度のないおまえをこっ

酷く傷つけ、そのくせこんな形でしか謝れない俺を、許してくれ』

気づいたら持っていた手紙がしわくちゃになってた。人目もはばからずに俺は泣いた。あんときばかりはみんなの後を追おうかと思っちまった。いっそ肉片にされても良いから、俺も連れて行ってくれりゃあなぁ。

時間は雑多な感情を沈殿させる。激情が抜け落ちた俺には、高純度の憎悪と怜悧な思考だけが残っていた。ヴァニラの治療とバイルワールドへの報復。それらをどうやって成し遂げるか、俺は熟考を重ねた。

数日後、退院した俺はとある傭兵ギルドに向かっていた。シルフィールだ。何故かは薄々察しがつくだろう。あの抗争で唯一勝利を収めたということもそうだが、シルフィールはバイルワールドのギルド潰しに際して少なからず傭兵を殺されていた。やつらに対して強い恨みを持っていても不思議じゃない。ギルド潰しの騒動から間もないうちに大々的に傭兵の募集があったから、確信はより深まった。ここにいればいつか必ず、連中に復讐できる機会がやってくるはずだと。

傭兵ギルドに入ったのは、高名な治癒術師を探すのに都合が良かったのもある。もちろんヴァニラを治すためだ。仕事中に怪我する傭兵は決して少なくないからな。成り行きで治癒術士と知り合いになってるやつが多いってわけだ。

シルフィールに加入してからしばらくすると、同期のエヴラール・タレイレンからある治癒術士を紹介された。デニス・レッドフォードだ。そん時あいつはまだシルフィールにいなかったが、治癒術に関しては右に出る者がいないって聞かされていた。俺が事情を話すとあいつは快く引き受けてくれたよ。

けれども、あれほどの術者をもってしてもヴァニラは目覚めなかったんだ。期待していた分落胆も大きかった。そん頃には彼女も衰

弱しきっていて、度々引きつけも起こしていた。俺も一度は諦めかけた。だが、稀代の魔法使い、ニルファナ・ハーベルの加入が、俺に思いがけぬ希望をもたらした。

「ニルファナさんが？」

シュイが思わず話を遮った。

「あぁ、彼女とは結構長い付き合いだ。俺が二十八の時だからもう九年近くになるか。有名な魔法学院を首席で卒業したエリートで、現マスターのラミエルがＶＩＰ待遇でうちに引っ張ってきたんだ。目を惹く容姿も相俟って当時は男共が騒ぎまくっていたが、今とはうって変わって近寄り難かった。お高くとまっているってのとはまた違って、常々拒絶のバリアを張っている感じだ。……そうだな、エヴラールを数倍に冷たくした感じって言えばわかるか」

「彼を数倍って、彼女がか？　……とても想像できないや」

「だろうな、ハーベルの人当たりがあそこまでよくなったのはおまえも一役買ってるはずだ。そんだけ目をかけられているってこった」

アルマンドのその言葉に、シュイはどこかくすぐったさを感じた。

「でも、彼女が希望って？　確かに魔術全般使いこなす人だけど、治癒術のみに言及するならデニスが彼女の腕に劣るとは思えないが」

「まぁ、そうだな。それが、呪詛の話に繋がるわけだ。……彼女の代には魔道の才能に溢れたやつがたくさんいて、そいつらの卒業年度には各国の軍部や有力傭兵ギルドも熱視線を送っていた。取り分け、ハーベルに関しては魔法学院の在学中に新魔法を作っているって噂があってな。その詳細を耳にして、それがヴァニラを救う手段になるんじゃないかって考えたんだ。何にでも縋り付きたかったってのが正直なところだけどよ」

「一体どんな魔法なんだ」

シュイが興味深々といった風に椅子から身を乗り出した。未知の魔法に触れる時にはどうにもわくわくしてしまうのを止められなか

った。

「おまえがエミド・マスキュラスとの戦いで使ったっていう、＞汝（エ）我と共感せよ＜（ンパシィ）。あれと似たようなものらしい。エナジードレインつって、生命力を呪詛によって吸い取る魔法があるそうだが、それを逆手にとった術法。彼女は＞命脈供与（グランティング）＜って名付けていた」

「……ハーベルさんが未完成の魔法を使ったってのか？　……あんたに？」

「おいおい、早合点すんなよ」

顔に怒りを滲ませたピエールを見て、アルマンドが慌てて手を横に振った。

「別にモルモットにされたわけじゃねえ。彼女は最後の最後まで渋っていたんだ。まだ開発途上で人に試すには早過ぎる、どうなっても保証できるものではない、最悪、命すら落としかねないってな」

ならば、無理矢理食い下がったのはアルマンドの方ということだろう。ピエールは沈黙し、腰を深く下ろした。

シュイはエヴラールが以前言っていたことを思い出した。アルマンドが支部長に選ばれずに済んだ理由。呪詛を長期間持続させるにはかなりの困難が伴う。半年もの間任務に拘束されることになれば、その間に彼女に術式を施すのが不可能になる。特例を認められたのもそういった事情を考慮されてのことだろう。

「でも、ヴァニラの容態はもう一刻の猶予も許さなかった。デニスの治癒魔法で騙し騙し体力を回復させてはいたが、何年も寝たきりになっていれば当人の体力の絶対値が下がってきちまう。優れた傭兵という礎がなければとっくに亡くなっていたはずだ。

ハーベルの新魔法は、諦めかけていた俺に未来を提示してくれた。その＞命脈供与（グランティング）＜って魔法だけじゃない。魔法や薬草の研究如何によっては、今は駄目でもヴァニラが助かる方法が編み出されるかも知れない。……俺はあいつの未だ温かな手をどうしても手放したくなかったんだ」

頑なに態度を変えないニルファナに、それでも俺は何度も頼み込んだ。雨の日も風の日も、標的を狙う刺客みたいに付き纏った。感知魔法で避けられていることがわかってからは気配を消した。

道端でいきなり飛び出して土下座したこともあった。形振り構わなかったってのは、まぁ俺の勝手な言い分で。彼女の心底迷惑そうな表情には、流石に申し訳ない思いだった。大の男がいきなり道端で女に土下座するのを見れば、通行人たちだって色々と勘ぐっちまうからな。

すったもんだの末に――半ば渋々って感じだったが――根負けした彼女は条件付きで俺の申し出を受け入れてくれた。一つには、魔法に使用する触媒となる薬草や動物の骨の提供。これはまぁ当然のこったな。呪詛の触媒を集めるのは案外手間がかかるもんだ。そしてもう一つが、二年間のみの限定使用だ。これは最終的には反故にしてもらったんだけどな。

＞命脈供与（グランティング）＜ってのは人から人へ、生命力の源を移し換える術法だ。ただ、十取り出したとして十受け渡せるわけじゃない。彼女のいう未完成ってのは、特にその部分が大きかった。生命力を魔力に見立てて説明すると、提供者の体内で＞同調（チューン）＜を行い、変換する時に繋ぐ魔力でできた命脈って管に＞解放（リリース）＜。命脈を通る過程で余計な部位を＞削除（デリート）＜して、相手の体内にある生命力と＞結合（ユニット）＜。対象者に適合する力だけを分け与えるわけで、いうなれば大幅なロスがある。人種が違うこともかなり影響するらしくて、渡せるのは精々半分だって話だった。

しかも、相手は生死の境を彷徨っている人間だ。それを立ち直せるには健常な状態で生きている人間の何倍もの生命力がいる。引っ張り出す際には苦痛が伴うし、十年分の生命力を与えたとして寿命が二年弱伸びるのがいいところだ。そうやって何度も念を押された。

けどよ、俺はその話を聞いて胸が震えた。だってそうだろ。明日をも知れなかったやつが二年も生き長らえるんだ。それは誰がみた

って大きな前進じゃねえか。十年分の寿命がなんだってんだ。その二年の間に、もしかしたら新種の薬草が見つかるかも知れねえ。ひょっこりと彼女が目覚める可能性だってあるじゃねえか。ごく偶にそういった説明のつかない奇跡が起こるってのは聞いてたからな。

生命力を分け与えるのは相当な負担がくる。初めてそれを施された時は大変だったぜ。肋骨の隙間から手を入れられて心臓を無理矢理引っ張り出されるようだった。女が出産する時もあんな感じなんかな。気が遠くなりそうなほどの痛みと嘔吐感は、食い縛っている歯が欠けちまうくらいのもんだ。

でも、それが終わって顔を上げると、あいつの青白かった肌にほんのりと赤みがさしていたんだ。あん時は嬉しかったなあ。そうやって気ぃ抜いたら一気に安堵感と疲労感に体を埋め尽くされて、そのまま気を失っちまったんだ。目が覚めたらベッドの上にいて、タオルケットがかけられていた。ハーベルがやってくれたんだろうな。

その後も俺は寝る間を惜しんで依頼をこなし、しこたま金を稼いで、ありとあらゆる薬草を買い集めた。時には新種の薬草を探し求めて世界中を回った。デニス以外にも名立たる医術師や薬師を呼んで、書物も読み漁って、思いつく限りの治療法を試してもみた。他の傭兵連中にも一肌脱いでもらった。

最初のうちは、俺が諦めなきゃいつかは必ず目を覚ましてくれる。漠然とそう信じてた。怖かったんだ。二度も死なれるのが。女々しいと思うだろうが、微かな希望に寄りかかっていなければやっていられなかった。一向に進展しねぇ現実を直視するのが我慢ならなくて、ずるずると引き摺っちまって、今日に至るってわけだ。客観的に分析するなら、俺のやったことはただ単に、ヴァニラが苦しむ時間を長くしちまっただけなのかも知れねえけどな。

五年前には、フラムハートとシルフィールが共同で裏ギルド、バ

イルワールドの掃討戦が行われた。かねてからの宿願だ。もちろん俺も参戦を表明した。

フラムハート側は当時のマスターが直々に参戦したし、現マスターのアークス・ゼノワを始めとした名立たる上級傭兵が討伐隊に加わった。シルフィールの方も、おまえらが知っているだけでも錚々たる面子だったぜ。ハーベル、マクレガー、エヴラール、ランベルト、アミナ、その時には入団していたデニスもいたな。それに倍する傭兵たちを投入したんだ。いやでも気が引き締まるってもんだな。

自慢にもならねえが、バイルワールドのマスター・ジリアンにとどめを刺したのは俺だ。屋根の上から路地を逃走中のやつを発見して、これまで抑えていた感情が一気に爆発した。

気がついた時には槍を掲げて相手に向かって走り出していた。迷う暇すらなかったってのが正直なところだ。体がどうなろうと知ったこっちゃねぇ。フォルランの仲間を死に至らしめ、ヴァニラをあんな姿にされた恨みを晴らす絶好の機会だ。むざむざ逃してたまるもんかよ。

俺は一時間近くに亘ってジリアンと切り結んだ。どんな顔だったかはほとんど覚えてねえが、やたらじっとりとした灰色の目が気に障ったのは確かだ。

やつも各国にその名を知られた辰力使いだったが、実力は肉薄していた。幹部にあっさり負けたはずの俺が、マスタークラスと一歩も引かずに闘えていたんだ。依頼を無茶苦茶にこなしている間に、以前とは比較にならない地力がついていたんだな。

俺たちの体から発される辰力が渦を巻き、巨大な竜巻を生んだ。お互いの槍から放たれる衝撃波は路面を叩き割り、家々を何軒もまとめて貫通した。歴史ある時計台が崩落し、備え付けられていた鐘が地に叩きつけられ、不協和音を町中に轟かせた。

間合いを無視した必殺の一撃を至近距離で連続して繰り出し続けたんだ。町の建物の何割かは倒壊して、一般人にもかなりの負傷者が出たよ。アークスやマクレガーが早くに強力な広域結界を張って

いなければもっと悲惨なことになっていただろう。

長々と戦っていた割に、決着はあっという間についた。俺が相手の視線に気を取られて、一瞬の油断だった、槍持つ方の腕を肘の辺りからばっさりと切り離されたんだ。流石にこいつは負けたかと思った。ところが、二撃目の槍が俺の腹を深々と貫いた瞬間。やつの勝ち誇った顔が見えた。

そしたら足が勝手に動いていた。腹の肉が抉れるのも構わずに一瞬で間合いを詰め、顎にありったけの辰力を込めて喉笛に喰らい付いた。生温い血が喉に滴って、遅れて鳥の軟骨を噛み千切るような感触が下顎に伝わってきた。

やつの黒目が空に向かって反り返ったのを見て、俺は復讐を成し遂げたことを確信した。成り行きを見守っていた周りの連中はちょっと、いやかなり、ひいていたけどな。

デニスに腕を繋いでもらった後、俺はその足でフォルランの連中の墓に向かった。墓前で事後報告して、ひとつ区切りはついた。だが、誰かが俺に声をかけてくれたわけじゃねえ。死者は生者の呼び掛けには応えねえ。労いの一言だけでもあれば、少しは報われたんだがな。後に残ったのは虚しさだけ。俺のしてきたことって、結局なんだったんだろう。今もそうやって、自問自答を繰り返す毎日だ。そして先頃――

「――希望は潰えた。彼女の延命のために生命力を提供し続けていた俺も、そう長くはない。気がつけば俺もこんなおっさんになっちまって。……はは、これじゃあ万が一目覚めたとしても、俺が誰だか判らねえかもな」

「そんなこと、あるわけねえだろ！」

ピエールの語気の荒さに、さしものアルマンドも目を丸くした。

次いで、ばつが悪そうに頭を人差し指で掻いた。そのくせどこか嬉しそうでもあった。

「……あー、わりぃ、ちっとばかし自虐的だったな。んー、まー、でもあれだ、おまえがジヴーの出身だって聞いた時にはびっくりしたぜ。なんだか昔の自分と境遇を重ねちまってよ」

「だから面倒見がよかったってわけか？」

「それも理由のひとつではあるが、才能は早くから認めていたぜ。負けん気強いし、練習が苦にならないタイプってのはいそうで中々いないしな。ゆっくり登っていくけど天井知らず。いずれ一角の戦士にはなるだろうと思ってた。ただまぁ、その前に無茶しておっちにそうな感も否めなくってな。ほれ、おまえってばどうも向こう見ずなところがあるだろ。新米のくせに意気揚々とBランクの依頼書を受付に持っていったりよ」

その光景がやたらと鮮明に脳裏に浮かび、シュイは辛うじて噴き出すのを堪えた。

「い、今はそうでもねえよ」

――どの口が言ってるんだか。

「……シュイ、今何か言ったか」

「いや？　幻聴じゃないか」

心外だとばかりにシュイは睨んでくるピエールに眉を上げてみせた。

「……おまえらって、あれだな。……まぁ、俺も人のことは言えないか」

アルマンドは言いかけた言葉を呑みこみ、苦笑いと自嘲を半々に織り交ぜた。

「十二年――――か」

シュイとピエールはほぼ同時にアルマンドを見た。徹夜仕事を終えたばかりのような、疲れ切った顔がそこにあった。

「……治らねえ現実を突き付けられるには、十分に過ぎる時間だ。……情けねえ話だ、必死に治療法を探している裏で、俺はあいつと

一緒に休めるこの時を、心のどこかで待ち望んでいた。一刻も早く、この苦しみから解放されたかった」

それは、彼が初めて零した弱音だったのかも知れなかった。ランカークラスの腕を持ち、若い傭兵たちの羨望を集める男の、ひたすらに隠していた心の内だ。

「だから死ぬこと自体は怖れちゃいない。……でもよ、最後まであいつを助けられなかったんなら、俺のしてきたことは全て無駄だったのか？　俺は何のために、誰のために命を削ったんだ？　そんな考えが浮かんだ途端、居ても立ってもいられなくなっちまった。せめて、最後に誰かの力になって、俺の人生に何かしらの意味があったんだってことを確認したかった。なんのことはねえ、セーニアに攻められた＞故郷（ジヴー）＜を救うって構図は、俺にとって絶好の捌け口だったのさ。ヴィレンのやつに借りを返せなかったのが、悔いと言えば悔いだが」

「俺の言葉なんかじゃあ気休めにもならないかも知れないけれど、あんたのしたことは無駄じゃないと思う。それに……意味ならあったさ、存分に」

「……そうかねぇ？」

シュイはうなずく代わりに隣で座っているピエールの肩に手を伸ばし、ポンポンと叩いた。

「な、なにすんだよ、シュイ」

「こいつ。あんたの背中に憧れ、あんたのようになりたいと願い、ものの見事に準ランカーになってみせた男がいるだろ。――それにさ、あんたは＞地縛巨霊（ルギメギア）＜から女の子を、俺たちの救えなかった命を華麗に救ってみせたじゃないか」

すらすらと出てきたその台詞は、頭で組み立てて出したものではなかった。社会から見れば、一人を救うのと大勢を救うのとでは付加価値が異なるだろう。けれど、本質は一人を救うも大勢を救うも変わらない。それは、目の前にある命を全力で助けようとしたとい

う姿勢であり、その行いはどんな英雄の偉業に勝るとも劣らない。一人を救うも、大勢を救うも、視点を変えれば天秤は等しく傾くはずだ。あの少女は、アルマンドがジヴーに駆けつけたことで、未来という無限の可能性を潰されずに済んだのだ。

アルマンドは目を細め、それからピエールの照れ臭そうな顔を見て、にやりと笑った。

「……そうだな。そんならちったぁ救われるな――――おっと」

一瞬、アルマンドの体がふらついた。慌てて立ち上がりかけたピエールに、アルマンドが「心配ねぇ」と告げた。しかし、傍目にも顔からは先ほどよりも血の気が失せていた。

「……あんま時間がなさそうだな。――その机の、引き出しの一番上に、手紙が二通、入ってる」

アルマンドはベッドの横の可愛らしい木机を指差した。羽ペンとまっさらな便箋のほかに、身だしなみを確認出来るよう鏡が置かれていた。

「一枚目は、ヴィレンに宛てて書いた。万が一、セーニア軍に対抗できそうな策が見つかったら、やつに力を貸してやって欲しい。そうすりゃもう心残りはねぇ。だがもし、見つからなかった場合は、その手紙は火にくべて支部に戻れ」

「それだけは聞けねえな」

ピエールがアルマンドの方に手を掲げ、握り拳を作る。それが本心だとわかっているだけに、そのくせ無念さが痛いほど伝わってくるだけに、反骨心が滾るのを止められぬようだった。

「この戦いはあんただけのものじゃねえ。せめて、ジヴーが降伏するまでは戦い抜いてみせる」

「入れ込むのもほどほどにしとけよ。命あっての物種だぜ」

「この後に及んで人の心配してんじゃねえよ。アルマンド・ゼフレルの愛弟子が敵に背を向けられるかってんだ」

「……ったく、恥ずかしいやつめ。自分で愛弟子とか普通言うかぁ

？　忠告はしたからな。　――――もう一枚は、ハーベル宛てだ。ある意味では俺を殺してくれと迫ったようなもんだし、できれば直接会って謝りたかったんだがな。手紙にも謝罪の文はしたためてあるが、シュイ、おまえからも伝えておいてくれ。長い間済まなかった、……最後まで付き合ってくれて感謝してるって」

「承った。……他に言い残したことはないか」

「んー、じゃあ、迷惑ついでにもうひとつ。俺が死ぬと同時に＞命脈供与（ランティング）＜は解除され、繋がっている命脈もじきに途絶える。ヴァニラも一両日中には息を引き取るだろう。後のことはデニスに任せてあるが、墓にあいつの好きだった花のひとつでも添えてやって欲しい。ピンク色のジプソフィラをな。出来れば――」

「――あんたと一緒の墓に入れてやる。絶対に生きて戻って」

ピエールが即答した。

「……へへ、上出来。物分かりのいい後輩を持って、俺も幸せだぜ」

「ったく、調子いいよな」

「否定はしねぇ。――――ピエール・レオーネ」

向けられた真剣な表情にピエールは顔を引き締め、佇まいを正した。死にゆく師とその遺志を継ぐ弟子、二人の視線が交錯する。

「これから何年か先、おまえがちゃんと生きてさえいれば、必ず俺が到達できなかった高みに立てるはずだ。弟子は師の到達点を超えてなんぼだからな。努々研鑽を怠るな。己の敵は空白の時間と知れ。……と、いけねいけね。言い忘れてたが、ミルカの嬢ちゃんを悲しませるようなことだけは絶対にするんじゃねえぞ。日常の中にこそかけがえのないもんがあることを忘れるな」

「……わかった」

「ならば、よし。あとは――シュイだな」

「……俺？」

訝るシュイにアルマンドは胡坐を崩し、床に足をつけてシュイの顔を見据えた。

「こうして腰を据えて話すのはこれが最初で、最後だな。顔、見せ

てくれるか」
「……わかった」

シュイは肩口で留められている黒いクリップを四つ外し、フードを取った。線の細い顔が露になると、アルマンドはシュイと視線を合わせた。前髪が大分伸びていて目にまで被さりそうだった。シュイの瞳の輝きに微かな陰りを見止め、アルマンドは寂しそうに笑った。

「お節介な先輩からの最後の忠告だ。――おまえは俺が望んでやまず、それでも手に入らなかったものを掴みかけている」
「……何を掴んでるだって？」
「おまえくらい察しのいいやつが周りの連中の感情に気づいてないなんて有り得ないと思うけどなぁ。それとも、気づいてない振りをしてんのか？　なら、ちぃとたちが悪いぜ」

アルマンドの厳しい視線が目を射抜くかのようだった。自然と口から溜息が洩れ、シュイは小さく首を振った。

「俺は、人殺しだ」
「……あん？　そりゃそうだろ、傭兵なんだからよ」

アルマンドが顔をしかめた。今更当たり前のことを告げる意図が読めぬようだった。

「傭兵になる前もだ。多分、あんたが思っている以上に、俺は数多くの人を殺めている」

どれだけの恨みを買ってるかもわからないのに、他人の人生を巻き込むなんてできるはずがない。好きな人なら尚更だった。自分への恨みが周りにまで及ぶのは御免だ。

「つまりは、あれか？　幸せにする自信がねえってのか？　おまえは自分が幸せになりたいと望んだことはねえってのか」
「血に汚れた手で誰かを幸せにできるはずがないだろう。俺は、人並みの幸せを願う資格なんかとっくに失っているんだ」
「……ったく、おまえも馬鹿さ加減は俺に負けず劣らずだな。その

汚れた手でもいいって言ってくれるやつがおまえの傍にいるなら、構わねえだろうがよ」

「……それでも」

「自分を慕ってくれる女を幸せにできる。これほど男冥利に尽きることはねぇ。しかも俺の見立てじゃあ誰かさんと誰かさんは、相思相愛とみているんだがなぁ」

あえてぼかしたのは反応を見ているからか。知り合った時と変わらぬ快活な笑みだった。死に際にしてこんな表情で笑えるアルマンドを、シュイは羨望ともつかぬ眼差しで見ていた。

「……どうしたって戦う力は、必要だ。綺麗事だけで回るほど世の中は甘く作られちゃいない。だからこそ、伝えておく。――――己が戦う理由を死者に求めるんじゃねえ、……虚しいだけだ」

「……っ」

絶句したシュイに構わず、アルマンドは穏やかに言葉を続けた。

「おまえが身を切って培ってきたのは、今を生きるやつらのために振われるべき力だ。忘れろとは言わねえが、割り切れ。俺の二の轍を踏むのは、俺に対する冒涜だぜ」

頭の中までも見通すかのようなアルマンドの言に、シュイが肩を震わせた。

「あんた、どこまで知って――」

「舐めんな、この俺が覆面如きで第一級の賞金首を、イヴァン・カストラを見破れないとでも思ったのかよ。……あんなやつとつるめるガキがそうそういるはずもねぇ。おまえが傭兵になった時期を思い返せば、ちょっと勘のいいやつなら境遇に気づくはずさ」

詰めの甘さを指摘され、シュイはぐっと口を噤んだ。

「なんてな、そんなことを言いたかったわけじゃねえ。あの場にイヴァンがいなけりゃ俺も気づかなかったしな。――――シュイ、ありがとな」

「……え」

「最後の最後で、おまえは俺の心を救ってくれた。おかげでこうや

って心穏やかに笑って逝ける。――胸を張って生きろ、今のおまえはちゃんと正道を歩いてるさ。……アミナの嬢ちゃんも、ハーベルも……それを望んでる……はず」

「……アルマンド？」

ふと、アルマンドの視線が自分からずれていたことに気づいた。

「――――明けたと思ってたら……もう夜、かぁ。……ちっとばかし……喋り過ぎた、かな」

ピエールは窓の方を振り向きかけ、全てを察したのだろう、今一度アルマンドに向き直った。その目には涙が溜まっていた。室内には一条の日差しが差し込み、それでもアルマンドの目は虚空を映していた。彼は今、どこまでも深い、光届かぬ闇の中にいた。

「……までだ。……ちっと、休むわ」

「……くっ」

アルマンドの囁きと共に、ピエールの目から堰切ったように涙が溢れ出した。板の間に雫がぽつぽつと垂れ落ちた。腹に力を込めて、声を殺して泣いていた。死にゆく師に対して泣き言を聞かせられぬという配慮であり、意地だった。

二人の姿に感極まったシュイは宙を向き、きつく目元を抑えた。涙が零れぬようにしながら、最後まで自分の身を案じてくれた彼にしてやれることがないのかと、混濁する頭で考えていた。

ややあって、シュイはゆっくりと息を吐き出すように、言霊を紡ぎ始めた。

――永久（とわ）なる記憶の狭間に埋もれし聖霊よ　彼の者らに慈母の恩寵を伝え

「……デボ……ト？」

ピエールがぽつりと呟いた。記憶を呼び覚ます干渉魔法、＞身（デ）も

ボート

心も委ねよ〳〵の詠唱が室内で反響した後に、耳の奥で慈愛を尊ぶ聖女たちの祈歌（チャント）が響き始めた。その選択が、ともすれば余計なことをしているのかも知れないと迷いながらも、シュイは言霊を終へと導いていく。

――過ぎ去りし日々を今一度　其の心に蘇らせよ

どれくらいの時間が経ったのだろう。数秒か、数十秒か、それとも瞬きほどの時間だったのか。ふいにアルマンドが、光届かぬはずの瞳をシュイとピエールの狭間に向け、子を慈しむような優しい笑みを浮かべた。ピエールが息を呑んだ。

「アル――」

「――ニラ。……待……た」

まるで寝言のように、茫漠（ぼうばく）とした声だった。何かを掴もうとしているかのように、アルマンドの手がゆっくりと掲げられていく。それを握り返してやりたい衝動を、ピエールは唇を噛むことで堪えていた。仮初めの夢を覚まさぬように。

ややあって上昇を止め――支えていた糸が切れたように――彼の大きな手が組まれていた足を叩いた。空気の抜けるような音がして、それっきり彼の口元は動くことを止めた。その体は、ありとあらゆる音を遠ざけていた。

「……ピエール」

「……あぁ、……お疲……様、……だよな」

ピエールは肺に溜め込まれた息をゆっくりと吐き出し、立ち上がった。零れ落ちる涙を拭うことなしに、ベッドに腰かけたままのア

ルマンドに歩み寄り、向かい側のシュイと一緒に両脇、両の膝裏に手を入れた。

脳裏に過ぎっただろう懐かしき記憶の断片が少しでも慰めになったことを祈りながら、二人は悲しみの内に、アルマンドの体を慎重にベッドに横たえた。

ピエールの手が両の目蓋をそっと閉じる。窓から吹き込んだ砂漠の風が、人の手には決して成し得ぬ優しさで、安らぎに満ちた顔をそっと撫でていった。

～紲雷　ｔｈｕｎｄｅｒ　ｏｆ　ｂｏｎｄｓ～

「――君への処罰は以上とする。ほぼ勝利が約束されているとはいえ、何隻もの砂船を失った責任は決して軽い物ではないぞ」
「全くですなぁ」
「まさしく、まさしく」

左右からの不要な追い打ちに眉を潜めつつ、ふくよかな審問官ディビは長机の上に置かれたグラスの水を一気に飲み干した。外とは比べようもないが部屋の中もまた、砂漠の熱を完全に遮断できるわけではない。分厚い脂肪という服を端から纏っているディビにとっては尚更だ。じっとりとした湿気を含んだこの気候に辟易していることは、ヒトデのように指太い手で首を仰いで冷やしていることからも読み取れた。けれども、彼の落ち着きのなさは全てが熱気に起因するというわけでもなかった。

ディビ・ミョールは軍律違反者を処罰する審問官の一人だ。審問官とは国に属し、法に乗っ取って裁きを下す裁判官とは異なる立ち位置だ。主に戦時中外国で軍律に違反した者たちをその場で取り締まり、違反者を詰問して罰を下すセーニア特有の役職である。

戦場においては人死にが当たり前の世界になる。その血生臭い雰囲気は兵士たちを多分に高揚させ、代わりに法や道徳といった存在を脳裏から追いやってしまう。その際には理性を置き去りにし、常軌を逸した行動を取る者も少なからず出てくる。

実際、一昔前までは占領下の街に置いても暴行や略奪が日常茶飯事に行われていた。ただ、人としての最低限の一線を超えた者を放置しておけば国の名に傷がつくし恨みの根も深くなる。法治国家と謳うセーニアが兵士たちの手綱も握れないのか、と嘲笑されることにもなる。

面子を重んじるセーニア教国としては出来るだけ外面は良くしておきたいし、そうでなくとも対外交渉等のことを鑑みるに警戒されている状態はあまり喜ばしいことではない。そういった思惑から、いつしかセーニア軍にも厳しい軍律が設けられるようになった。

例えば、無抵抗の一般民衆に対する殺生や暴行などが発覚すれば、茨のような鉄棘のついた鞭で百回打たせたりする（出血や痛みで死することも往々にしてある）し、戦いに置ける作戦立案や陣頭指揮があまりに無謀なものだったりすれば、何名かの将軍の承諾を得て査問にかけた上で指揮官たちの役職を解任する権限も持っている。

もちろん、このシステムが完全に機能しているわけではない。大軍を運用するに当たってはどうしても目の行き届かない部分が出てくるし、網を掻い潜って何度となく犯罪行為を繰り返している狡猾な者もいる。

だがそれでも、犯罪の絶対数を減らすのには確実に一役買っている。これまでに鞭打ちや牢獄送りにした違反者は数知れず、兵士たちの間にも例外なく審問官の存在は畏怖を以って知られている。呼び出された者たちは戸惑いと恐怖をない交ぜにして審問を受けるのが常であるし、抑止力としては十分な機能を果たしている。往々にして審問官たちにはその自負があり、自分たちの存在がこの大軍を律しているのだと誇りにも似た感情を抱いていた。

だが、この日はいつもと勝手が違った。光量の抑えられた照明石の真下、長机を挟んで居並ぶ三人の向かい側に座っている見目麗しい金髪の女は、処分が言い渡される間というものただの一言も発さずに目を瞑っていた。別に船を漕いでいたというわけではなく、欠伸を交えていたわけでもない。落ち着きなく長い金髪をいじるわけでもない。

紅のタイトな軍服を誰よりも見事に着こなしたアデライード・ディアーダは慎ましやかに足を閉じ、その上に手袋をつけた手を揃え、詰問の間、身じろぎひとつしなかった。喉が渇くだろうと用意され

た水は手つかずのまま。ディビとは打って変わって涼しげな表情で佇んでいる。

断罪される者としては誰より正しい態度とも取れるだろうが、その潔さが審問の始まりから終わりまでディビの癇に障っていた。今まで自分に相対した者たちの大半が、己の罪が言い渡されるまでの間、落ち着きなく貧乏ゆすりをし、質疑の才には声を裏返した。意味ありげに睨みを利かせようものなら椅子毎後ろにひっくり返った者もいたほどだ。

今回彼女を呼び出したのは、巡回するセーニア軍の砂船の監督不行き届きという名目だった。彼女の下についていた者たちが監視下区域を離れてまで船籍不明の砂船を追い、逆に手痛い損害を被ったのだ。

彼女の指揮下にあった十二からなる船団のうち、実に半数の六隻が任務を逸脱。追及を諦めて帰還したのは一隻のみ。残りの五隻のうち二隻は砂に埋もれていた岩礁で座礁、一隻は辛うじて航行可能ではあったが損傷。後の二隻は深追いした挙句に魔物に破壊され、乗組員のほとんどが帰らぬ者になった。しかも、肝心要の砂船にはまんまと逃げられたという。

ことに破壊された二つの船に乗っていた乗組員は合わせて二百九十二名。ジヴーとの戦における死者が未だ三千に届いていないことを考えると、被害は決して軽微ではない。これが任務外での出来事となれば監督すべき立場の者が責任を取らされるのは至極当然である。

なのに、アデライードは審問の最初から最後まで、怯えを全く見せなかった。質疑に対してのみ流暢に応答し、後は沈黙を貫いていた。ディビは毅然とした彼女の態度に得体の知れない威圧感を感じ取っていた。自分の娘ほどの齢の女にそのように思わされていることが不快でもあった。じっくりと構えて横柄に裁きを言い渡す普段

の態度はなりをひそめ、自然と早口になっていた。一刻も早く、この場を立ち去りたいという風に。

ふとディビはアデライードの横、備え付けられている鉢植えの時計花に目を移し、内心で舌打ちした。入室した時の桃色と全く変わっていない。とどのつまり、いつもならたっぷり二時間を超えるだろう審問で一時間を切っていたということに他ならない。普段、自分の身分は決して高いものではないが、この一時に限って言えばどれほどの立場の人間であろうと自分が最高位であり、場の支配者となる。反論のできない相手をネチネチと責め句でいたぶるのが好きな彼にとっては不本意な出来事と言って差し支えなかった。

そんな上司の苛立ちを過敏に感じ取ったのだろう。両隣りに座っていたやせぎすとのっぽの審問官補佐が顔を見合わせた。二人ともに齢三十を超えたくらいの顔立ちで、どこか狡猾そうな顔をしていた。いかにも人に取り入るのが上手そうなタイプだ。

「は、反論の一言もなしかね！」

「そうだそうだ、黙ってばかりではわからんぞ！」

慌ててそうやって凄んでみせる男たちだったが、やはりアデライードはこれといった反応を見せなかった。これには流石のディビも腹立たしさを覚えたようで

「おい、ちゃんと人の話を聞いているのかね！　寝ているんじゃないだろうね、ディアーダ君！」と怒鳴った。

机の上にあったグラスが小刻みに震え、水面に幾重にも波紋が生じた。部屋の壁を突き抜けるほどの声で名を呼ばれたアデライードは薄らと目を開き、左右の審問官に申し訳程度に視線を走らせた後、ディビを見据えて微笑んだ。向かい合う三人の眉間に当惑のしわがよった。

「もちろんですわ、ミュール大佐。先の件の罰は軍律に従い、甘んじて受けさせていただく所存です。戦時中にこのようなことでお手数を煩わせてしまい、私お詫びの言葉もありません」

折り目正しい言葉を返され、三者三様の溜息が漏れた。年若い女に小首を傾げながら微笑を浮かべられると、しかもそれが絵として飾られそうな麗人ともなれば、男たちとしても責める気が萎えてしまう。そして、おそらく彼女はそれを計算ずくで行っている。ディビは忌々しそうにシャツの上から二つ目のボタンを外し、大きく息を吸い込んだ。ふと、アデライードが身に振りかけていたであろう微かな香水が鼻を通り、脳で知覚された。薔薇の香りの中にもどこか甘味が感じられた。年頃の女特有の、色香というやつだ。

皇族としての風格と目上の人物を立てる恭しさを併せ持つ女傑。近衛たちに勝るとも劣らぬ剣技と宮廷魔術師仕込みの魔法の使い手。しかも詩人が一目見れば歌にしたくなると言わしめる美貌。愛妻家のディビとしても、彼女に夢中になる将校たちが多いのは無理からぬことのように思われた。

その完全無欠さが、反ってディビを冷静にさせていた。フォルストロームの王女アミナ・フォルストロームが獣姫と呼ばれ愛されているように、アデライード・ディアーダもセーニアの民たちに強く慕われている。そんな彼女に必要以上に不快感をもたれるのは得策ではない。打算と防衛本能が頭の中で自分の歪んだ趣向を押し退けた。その結果が短い審問という形となって表れていたのだ。

「――もういい、色々と準備もあるだろうからこの辺にしておこう。退室を許可する」

「――はい。それでは、失礼いたします」

突として話を切られ、アデライードは躊躇いがちに目を伏せながらも椅子を引いて立ち上がった。

――そうだ、格別の譲歩というわけでもあるまい。半ば濡れ衣に近い軍紀違反だからな。

ディビは退室していく彼女の後ろ姿を見送りながら、そうやって自分を慰めていた。

～紲雷　ｔｈｕｎｄｅｒ　ｏｆ　ｂｏｎｄｓ２～

群青の空には眩いほどの白い月がぽっかりと浮かんでいた。坂の上からはルトラバーグの街並みが一望できる。空き家となったはずの家々の窓からは仄かな明かりが漏れ出していた。セーニアの兵士たちが仮住まいとして利用しているのだ。

主のいなくなった家には食糧などもそのまま残されていたが、それらの多くは廃棄処分にさせられた。予め必要量の兵糧を用意していたという以上に、以前小国に攻め入った際、毒を混ぜられていた事例があったからだ。

奇策によってルトラバーグを陥落させたセーニア軍は次なる目標オルドレンに向かおうとはせず、支援物資の到着を待つと共に兵士たちに休息を取らせていた。慣れぬ気候による疲労が祟ったのか、病に倒れる者が続出したことも起因していた。

疲労による風邪などであればさして気にする必要もないが、風土病に冒される者もちらほらと見受けられた。砂漠熱と呼ばれるその病に冒されると全身が虚脱し、高熱と嘔吐を伴う腹痛を発症する。原因は半乾燥地帯に生息する肉食昆虫、ツァレフライの保有する病原菌によるものだ。

蟻くらいに小さなこのハエは飛翔する時にほとんど音を立てず、腐肉に集るに留まらず生き物にも喰らい付く獰猛さを持つ。そして、獲物を食い千切る際に唾液から感染するのが砂漠熱の原因となる病原菌である。

そういった風土病があることは兵たちも注意を促されて知っていたし、寝所では蚊帳を巡らすなどの防備措置も怠っていなかった。とはいえ、蝿は暑い気候であればどこにでも湧くものだ。四六時中どこから飛んでくるとも知れない虫に気を配っているわけにもいかない。この気候で過度の厚着をするわけにもいかず、知らぬ間に服

の中に潜り込まれて噛まれているといったことは後を絶たなかった。

アデライードは外で待っていた近衛のグレンを伴って大通りを歩いていた。＞黒禍渦（バリー・クラウド）＜が去った今も、石畳の道を歩けば砂のざらつく感触が気になった。朝方と夕方、風魔法の心得があるセーニア兵士たちが砂を除去する作業に追われていたが、まだまだ取り切れてはいないようだ。

大通りに面している広場には、セーニア兵たちの焚火がちらほらと見受けられた。昼間の熱は遠くに離れていた。砂漠の夜は火を入れねば凍えるほどに寒いこともあり、実際にアデライードの口からは白い息が吐き出されている。

焚火をぐるりと囲むように暖を取っている十人ほどの兵士たちは、戦わずに逃げたジヴー軍の腰抜け具合に花を咲かせていた。ある者は自分が如何に勇敢に戦ったかを大袈裟なジェスチャーを交えながら語り、階級章をつけた者はこの戦いで何人の敵兵士を倒したかを部下たちに聞かせていた。次の戦いでジヴーも最後だ、などと息巻いている者もいた。

しばしの間、アデライードは足を止めてその様子を眺めていたが、小さく溜息を吐き出して再び足を踏み出した。

道路側を向いている何人かの兵たちがアデライードの姿に気づき、急ぎ敬礼しようと立ち上がりかけた。アデライードは不要とばかりに手を出して制した。兵士たちは一瞬逡巡したが、アデライードが小さくうなずくのを見、納得したように腰を下ろした。

肉の脂弾ける匂いが、アデライードのところまで漂ってきた。日干しした牛肉に塩とたっぷりの香辛料を塗し、保存食としたものだ。熟成された肉の味は悪くないがそのままで食べるには固いので、火にかけて沸かした湯を使って一旦ふやかしているようだ。

後方からの支援物資が届くまでの間、一般兵は干し肉や干し鮭と干し飯を水に戻して湯漬けにして食している。本来であれば野菜や果物も摂った方がいいのだが、ナマモノは日持ちしないし、あった

として身分の高い者たちの口にしか運ばれない。これまでに占領した国々では町が空っぽになるような状態にはなかったため生の食糧を手に入れることも出来たのだが、今回は町が空っぽになってしまっていたのでそうもいかなかった。

食事が豊かか粗末かはそのまま戦意に直結する。美味しい食事で英気を養えれば頑張ろうという気にもなれるだろうが、一週間もの間非常食ともなれば不満も出てくる。最低限戦うための体力と肉体。なにより戦意を維持せねばならない。戦の勝利はほぼ確定している。今気を回すべきは内乱や反乱だ。体調を崩す者も出てきている中で、このまま攻め入るよりは少しでも体を休めた方が得策と上層部が判断した。

広場の灯が遠ざかったところで、アデライードに宛がわれた屋敷が見えてきた。そこはこの町の商業組合として使われていた場所のようで、両開きのドアを開けると大きなカウンターがあった。部下の多いビシャやディビほどの大邸宅ではなかったものの、二階の小部屋も合わせれば八部屋もある。十人くらいなら問題なく暮らすことが出来るスペースだ。

道を外れ、屋敷のドアまであと十歩ほどとなったところで、俯き気味に追従していたホリックが意を決したように顔を上げた。

「……あの、アデライード様」

「何かしら」

アデライードがホリックに背を向けたまま足を止めた。ぶつかりそうになったホリックは爪先でその場に踏み止まった。

「ええ、その、処罰はどのような……」

屋敷を出てから全く喋らぬ主に、ホリックは恐る恐るといった体で話しかけた。

「……話は屋敷に入ってからでもできるのではなくて？　もう目の前なのだし」

「あ、いえ、それは、その通りなのですが……」

口ごもるホリックに、アデライードはくすりと笑い、再びピンと背筋を伸ばした。ホリックはアデライードの次の言葉を待った。

「――王都に戻って蟄居するよう命じられたわ。差し当たり、巡回任務に従事していた部隊の方々の言質を取った後で処罰を確定するそうよ。幸い小型の砂船を一隻貸してくれるそうだから、明後日には出立するわ。部屋に戻ったらグレンにも伝えて、早めに帰国の準備をなさい」

ホリックは信じられないといった風に口を半開きにした。

「ご冗談でしょう！　命令違反した彼らは元々あなたの直接の部下ではありません。越権行為を抑えられなくとも仕方ないではありませんか」

持ち場を勝手に離れた砂船が現れたのは事実だ。しかし、不審船を追走すべく越権行為に及んだ船とアデライードの乗る船はかなり離れた位置にいた。アデライードも任務に従事していた以上、彼らの行動を逐一把握することは叶わない状況にあったのだ。しかも、付近にいた六隻に関してはちゃんとアデライードの指揮下で巡回をしていたという事実もある。

声を荒げたホリックに、アデライードは表情を変えなかった。

「そんなことは上だってわかっているの。ただ、邪魔な私を追いやるチャンスを逃したくないだけよ」

「……邪魔、ですか？」

淡々としたアデライードの物言いに、ホリックは首を傾げた。受けた処分に対してあらゆる感情を抱いていないかのようだった。

「魔物を利用する策に反対したことで、作戦参謀殿の不興を買ってしまったみたいね」

「ロッグ准将の、ですか」

ホリックの脳裏にひょろりと背の高いキツネ目の男が思い浮かんだ。

ロッグ・ケトゥレフは四十も半ば。黒髪のぼさぼさ頭にぶかぶか

の白衣といった出で立ち。色白で肌が弱いということでココナッツオイルで作った日焼け止めをふんだんに塗りたくっている。この戦における作戦参謀、ビシャのブレーンと目されている男だ。

彼は心理学者の一面も持ち、こと対外交渉においては数々の助言で多大な功績を収めてきた。その智謀は誰もが認めるところであるが、先のルクスプテロンとの大戦、ヌレイフ湿原の戦いでは深読みが裏目に出、彼の指揮した軍は敵の正攻法によって大きな被害を出した。

戦争では駆け引きが重視されることも往々にしてある。最終的には痛み分けに終わった戦いであるし、ただ一度の失敗で揺らぐほどの経歴の持ち主でもない。だが、不本意な結果のままに終わったヌレイフ湿原での戦いは彼のプライドを著しく傷つけたようで、此度の戦では名誉挽回に燃えているらしいと聞いていた。ジヴーにとってはとばっちり以外のなにものでもない。

王城での淑女たちのネットワークによる情報にはかなりの信憑性がある。内情に詳しいアデライードとしてはロッグに誰も注意喚起しないのを不思議に、もっというと不安に思った。差し出がましいながらも、と前置いて慎重論を述べたのである。

あるいは、不安に思うその心情を必要以上に敏感に感じ取ったのか。アデライードの態度はロッグの気に障ってしまったらしい。反対意見を『不要』と一蹴した後も、会議中ロッグは度々不機嫌そうに鼻を鳴らしていた。

仮にも皇族であるアデライードにこうした態度を取れるのはセーニアでも一握りだ。実際、ケトゥレフ家はセーニアでも屈指の名家であり、家柄でいえば将軍であるリーヴルモアよりも格式が上。そうした家系の面子が彼のプライドを高く、もっというと増長させていたのかも知れない。

結果として、今回の戦いではロッグの策は見事に嵌った。彼は戦が終わるとこれ見よがしにアデライードの前で胸を張って見せた。

初参戦ではあったものの、アデライードにも綺麗事だけで戦争が捗らないことくらいわかっていた。実際、敵兵に砦に籠もられたまま攻め入ればこちら側にも多くの犠牲者が出ただろう。

だが、奇を衒った戦い方は良くも悪くも目立つものだ。何万という兵士たちの口からそういった話が外に漏れないとも思えない。言ってみれば外法を躊躇わずに使ったことで、例えば他国で魔物が蔓延った時にあらぬ疑いをかけられることにもなりかねない。確かに彼は今の心理を読むには長けているかも知れないが、十年、二十年先を見据えることが出来る人物とも思えなかった。

「もしかしたら、後方支援に回されたのもその辺が理由なのかもね」

「ですが、そもそも意味不明な配置転換で発生したトラブルです。上が任命責任を問われるならいざ知らず、あなたが取る責任はないのでは？」

アデライードは肩越しにホリックを見た。その目に微かな非難の色を見止め、ホリックが立ちすくんだ。

「やぶ蛇、ね。これはあなたの勉強不足」

「え……」

「軍律の軍令違反に関する条項の第４条にきちんと記されているわ。『軍令に背いた者がいた場合、その兵が所属する部隊、及び兵士たちを引率する者が連帯して責を追うこと』、有体に言えば監督不行き届きね。例外規定としては『おのれの指揮官の安否が確認できぬ場合に限り、誤った裁量による損害は個々が責任を追うものとする』」

「えぇと……そ、そうでしたっけ」

「その物言いは、私の言を疑っているってことかしら」

「と、とんでもありません」

ブンブンと音が聞こえてきそうなくらいにホリックが首を横に振った。アデライードの記憶力が優れているのは周知の事実だ。以前、屋敷にいるシェフのメニューが偏っていたことを彼女が指摘してい

たことがあった。その際には一週間の晩御飯のメニューをそらで言っていた。

黙りこくったホリックにこれ以上会話が進まないと判断したのか、アデライードは目線を前に戻し、扉に近づこうとした。我に返ったホリックが慌てて前に進み出、先んじてドアノブを回した。アデライードはありがとう、と礼を述べ、屋内に静々と入っていく。

「全てとは言わないけれど、後で読み直しておいた方がいいわよ」

「……面目ございません。ですが、それとこれとは」

「心配しなくても、本当に我慢できなかったら私だって抗弁のひとつくらいしているわ」

「……しかし、あなたの軍歴に傷がついたことになるのでは」

廊下を歩いていたアデライードが足を止め、突き当たりのドアノブに手をかけた。寝台の整えられただけの、飾り気のない部屋がドアの隙間から覗いていた。ホリックが部屋の様子をちらりと窺うのを横目にし、目を瞑った。

「平気よ。自慢にもならないけれど、傷つけられることには誰より慣れているもの」

「――――アデラ……」

拒絶の意を示すように、パタンと強めにドアが閉められた。ホリックは無意識に差し出されていた自分の右手を呆然と見つめた。次いで、自分自身に対して怒りが込み上げてきた。束の間、寂しそうに見えた彼女を慰める言葉が、どこにも見当たらなかったことに。

その半面、彼女が受けた処分をやぶさかではないと感じてもいた。主君の手前、声高らかに言えることではないが、本心を言えば危険な戦場など一刻も早く立ち去って欲しかったのだ。

年頃の貴族の娘であれば嫁入り、早ければ子を産み育てている者もいる。事実、アデライードの同年代にもそういった婦女子が多くいた。彼女たちが嗜むことといえば読書や裁縫、またはお菓子作り。

活動的であればハンティングや男装、菜園の管理。夜であれば夜会で優雅にダンスを踊る。

だが、アデライードは剣の道に生きることを選んだ。尊敬する父の背を追っているというのもあるだろう。そして、叶わぬ願いを抱いてもいるのだろう。いつの日か家族を奪った憎き男をその手で殺めるべく、彼女は剣の腕を磨いているのだ。ホリックはそう信じて疑わなかった。

ホリックとしては、アデライードには、己が仕える美しい主人には人を殺めて欲しくないと思っていた。彼女が思っている以上に罪なき人を殺めた時のショックは、大きい。弱きを助け、強きを挫く。戦争に出れば誰もが、騎士になった時の青臭い誓いを破らねばならない。セーニア以上に強いといえる国など、今は存在しないからだ。

仮にも五、六年前まで王城の庭園で花を愛で、犬と戯れ、吟遊詩人の語らいに感動して泣いていた少女が。自分が陰で仄かな想いを寄せていた少女が、人を殺してその血を身に浴びる。考えたくもないことだ。

おそらく人を殺した瞬間から彼女は変わってしまうだろう。万が一変わらなければ、自分は変わらなかった彼女に絶望してしまうだろう。どちらにしても堪えられることではない。ホリックは彼女のそんな姿を目の当たりにする日が来ることを心の底から恐れていた。

――それも、これも、全部。

自然と拳が握り込まれていた。全ては、あいつが悪い。彼女の兄を。父であるナイト・マスターを殺めた罪深い少年が、彼女の負う不幸の、おのれの憂鬱の元凶なのだ。

――――

さざ波すら立たぬ水鏡は世界を正しく反転させていた。風の音すら聞こえぬ静寂にひとつ、またひとつと波紋が生じていく。水面に

浮かび広がる金髪が月の光を浴び、サファイアの如き青い煌めきを放った。しなやかな体躯の女が夜の水鏡に寝そべるその光景は、神話にも出てきそうなほどに幻想的なものだった。

少し遅い夕食を終えたアデライードは屋敷を抜け出し、近場のオアシスで一人ひっそりと水浴びをしていた。水面を手で書きわける度に、数多の雫が肩から体のラインを撫でながら落ちていく。

まだ深夜というには早い時間帯で、これ以上夜が更けると水が冷え過ぎる。湿度が低い場所では空に向かって昼間溜めこまれた熱の放射が迅速に行われる。これが水蒸気や雲などがあれば熱が留まるのだが、砂漠のように雲が無く、湿度も少ない場所では一気に冷え込む。砂漠の温度差が激しい所以である。

一頻り水浴びを堪能したのか、アデライードは砂浜に上がり、水に濡れたスレンダーな肢体をタオルで覆い隠して身震いした。

――流石に、かなり冷え込むわね。

小さな湖の水温は肌に心地良いくらいであるが、外気温は5度前後といったところだろう。朝昼だと一部の兵士たちが交代で水浴びをしているため、この場所は使いたくとも使えない。もちろん自分がどくように言えば彼らは従うだろうが、兵士たちのささやかな楽しみを奪うのは気が引ける。加えて、どこに衆目の目があるとも知れないのに真昼間から裸体で泳げるほど婢（はしため）ではないつもりだ。

念入りに体を拭いたところで、濡れた髪の毛を軽く手で絞る。続いてはもう一枚の細長いタオルで髪を叩くように、優しく丁寧に水気を取っていく。そうして最後に携帯瓶からツバキ油を手に取り、母譲りの美しい金髪に丹念に塗り込んでいった。

そうしながらも、アデライードの目線は直ぐ脇にある大きなヤシの木に向けられていた。

「いるんでしょう、出ていらっしゃいな」

束の間の沈黙を経て、ヤシの木が言葉を返した。
「……気配を読むのが大分上手くなられましたね。折角の申し出ですが、ここから失礼させていただきます」
正確に言えば、その裏にいる男からのものだ。太くてちくちくとした棘のある幹にもたれかかったまま、灰青髪の男は微動だにしなかった。

「そうよねぇ、私の貧相な体じゃ目の保養にもならないわね」
アデライードはがっかりしたように自分の小振りな胸を下手でもてあそびながら、芝生の上に畳まれている着替えの隣に座った。
「いえいえ、逆ですよ。高貴な女性の瑞々しい肢体を私のような下賤の者が見れば、目が潰れかねませんので」
「ふぅん、そうやって褒めながら逃げるのね。――――首尾の方は？」
するりと、衣擦れの音がレイヴの耳に届いた。
「言いつけ通りに彼らに同行し、隙を見て始末致しました。打ち合わせ通りに別働隊の数人は見逃がしましたが」
「上出来。それで、妨害者はいたのかしら」
「御意、他ギルドの傭兵たちが魔遺物（ヴァイーラ）の守護に手を貸していましたよ。仲間が彼らだけとも思えませんし、別働隊も泡を食って逃げ出した様子から少なくともセーニア兵の手には渡らなかったと見て良いかと」
「そう、ご苦労様。報酬の支払いは戦争が終わった後の予定だったけれど、もう少し早く出来そう。部下の尻拭いで王都へ帰還することになったから」
闇の中で純白の下着を穿き、同じく純白のレースつきブラに胸を収める。次いで背中のホックを填め、折りたたまれていた長袖のシャツを手に取った。
「それはそれは、なんというか――幸運（ラッキー）でしたね」
「……どういう意味？」

少しばかり刺々しい声に変化したのに気づき、レイヴが苦笑いした。

「あぁ――もちろん、貴女の受けるであろう罰則のことを申し上げたわけではありません。ただ――」

レイヴは小さく息を継いだ。熱病人のような苦しげな吐息に、アデライードが小さく首を傾げた。

「私が相対した方々も、決して侮れぬ力を持っていましたので。仮に彼らが形振り構わずセーニア軍に敵対するとなれば、一度や二度くらい危うい事態に陥ることも否定できませんから」

「あら……辛口のあなたが随分と持ち上げるのね」

黒いレギンスを穿くべく右足を持ち上げ、脹脛（ふくらはぎ）まで通したところで左足を持ち上げる。腰の所で留め具を引っ掛けると、アデライードはゆっくりと立ち上がった。

「まぁ、口で言うよりはこれを見て頂いた方が納得していただけるでしょう」

レイヴが木の幹から体を起こし、着替え終わったアデライードの前に進み出た。腰布を緩め、上着の襟元をすっと横に引く。

――ちょっ。

いきなり上半身を露にしたレイヴに、アデライードが闇の中で赤らめた顔をそむけた。続いては照れたのを悟られなかっただろうかと危惧する間もなく、目を丸くする羽目になった。

「何、それ。……痣、のようにも見えるけれど」

鍛えられた胸筋の中央に映ったのは黒い満月だった。少なくとも直径二十センチはあるだろうと思われた。

「まさしく痣ですよ。今回の戦いでつけられたものでして。治癒魔法は施していただきましたが、痕が残ってしまったというわけです。ついでに言うと骨折から熱も併発していますが、まあこれは慣れっこですので」

「……まさか、レイヴ・グラガンともあろうものが手傷を負わされ

たと？」

「買い被られては困ります、私とて怪我は日常茶飯事ですよ。とはいえ、傭兵生活苦節十年、命の危険を感じたのはこれで二度目ですけれどね。もう少し左にずれていたら、心臓が潰されていたかも知れませんね」

「……負けたの？」

「ええ、負けてしまいました」

にこやかに笑うレイヴに、アデライードは怪訝そうな顔をした。

「随分と簡単に敗北を認めるのね」

落胆した風でもなく、アデライードはそう呟いた。その辺りは騎士との在り方の違いだろうと理解してもいた。

傭兵は面子以上に実益を求めるものだ。負けたにも拘わらず命があったのは幸いというレイヴの考え方は決して珍しいものではない。これはアデライードの預かり知らぬことだったが、レイヴとシュイとの闘いが後腐れのないものであったことにも起因していた。

「それで命があったってことは、敵に見逃されたということでしょ？　悔しくないの？　私の目が曇っていなければ嬉しそうに見えるのだけど」

「悔しいのは山々ですが、仰る通り、嬉しくもあるのでしょうね」

レイヴはばつが悪そうに、それでもどこか楽しそうに露になった上半身に服を纏った。アデライードは芝生に置いてあった剣を拾い、腰に差した。

「変なの。男の人ってよくわからないわ」

「そのうち嫌でも知ることになりますから、ご心配なく」

セクハラ。余裕を取り戻したアデライードが薄く笑い、芝生に腰を下ろす。レイヴはそういったつもりではないのですが、と咳払いし、腰紐を結び直した。

「しかしまぁ、敵の仕業に見せかけて同胞を始末せよ、でしたか。このような依頼を申し込まれたのが貴女のような可愛らしいご婦人

とはいやはや、夢にも思いませんでしたよ」

「支配するのに過ぎた力を求めるのは愚行。その力と技術を奪い合う争いが始まるだけ」

わかり合えない者たちとは交わらなければいいだけなのに、無闇に圭角を立てて傷つけ合のは何故か。全ては権益と自己満足のためだ。

「権力のある赤子のお守りほど始末に負えないものはないわね。首輪に括りつけて戦場の最前線に放り出してやりたいくらいだわ」

一向に悪びれた様子のないアデライードにレイヴは肩をすくめた。

「ご先祖様が偉大だと、背負う物も生半可な重さではないのでしょうねぇ」

その言葉に軽い揶揄の響きを認め、アデライードは目を細めた。

セーニアは過去におけるジュアナ戦役時、ザーケイン帝国から独立した国であるが、それから５０年ほどは今のルクスプテロンの南側、四分の一ほどがセーニア領であった。それを取り返されたのが穏健な三代目のセーニア教皇の時代だ。元々管理するには広過ぎる領土だったということで、ルクスプテロンに領土を明け渡したのだ。一方で、単に戦いを嫌って逃げただけ、という説もある。

以来、好戦的な教皇や大臣が初代の領土回復を謳って度々出兵することはあったが、一向に決着がつくことはなく、現代にまで至っている。もっともそのエピソードも３００年前の話であるからして、どこまでが本当のことだか疑わしい。

そもそも凝り固まった選民思想は百年以上に亘って植えつけられてきたものだ。そう簡単に取り除けはしないだろう。今のセーニアにはかつてのような崇高な目的がない。兵士たちは人参を目の前にぶら下げられた馬に等しい。上層部に巣食う狸たちがとろけるように柔らかい肉を食らい、若い女を抱くために、未来永劫達成されることのない張りぼての目的に向かって邁進させられ、命を落として

いく。
　四大国と言わしめる力を得て、暮らしは平均的に豊かになったかも知れないが、その一方で精神は堕落していくばかりだ。これ以上の力を得れば、国の腐敗の進行に歯止めがかからなくなるだろう。
「叔父……教皇様も昔は聡明な方だと思っていたけれど、病が目を曇らせているのかしらね。側近たちの言いなりになって挙兵してしまうなんて。こんなことなら早く御隠れになってしまわれた方がよほど幸せなのに」
　アデライードの予見では、遠からぬ内にセーニアは内から瓦解する。そうなればルクスプテロンも奪われた領土を奪還すべしと兵を挙げるだろうし、最悪こちらの領土まで侵されかねない。目下のところ、最大の敵は自国にいる。
「辛辣なお言葉ですね。ですが、万が一のことがあれば――貴女が第一皇位継承者ということになります。ゼノン様も亡くなられていることですし」
「兄の話は、しないで」
　今までになく強い口調でそう言われ、レイヴは一瞬面喰らったようだった。
「これは失言を」
　いち早く立ち直ったレイヴは胸に手を添え、優雅に頭を下げた。確かにゼノン・ディアーダの存命時、その素行についてはあまり良い噂を聞いていない。一目見て気に入った貴族の女に手を出し、お家ぐるみで揉めたことも何度かあったと聞いている。逆らった家がお取り潰しにされたという噂もある。話題を持ち出された時のアデライードのしかめっ面を見るだけで、どう思っているのかくらいは容易に読み取れた。
「大体、私は皇位を継ぐつもりなんてないのよ」
「……と、仰いますと？」

「セーニア教国は私も含めて家族に不幸しかもたらさなかった。あんな国の存続のために人生を捧げるなんて、一言でいって馬鹿げてる」

この発言は意外だったのか、レイヴが微かに眉を上げた。

「ですが、皇位不在となれば先ほども言われていたように他国の介入は避けられないかと」

「それは、あの国が今後も存在すれば、の話でしょ」

「……どういう意味です」

訝るレイヴに言葉を返すことなく、アデライードはキュッと唇を噛み締めたまま空を見上げた。幼い頃に見た丘の上からの夜景がはっきりと思い出された。そう、あの時は隣に――

ブチン、と何かを引き千切るような音が響いた。一瞬何事か、とレイヴが戸惑った。そうかと思うと、立て続けに音が聞こえてきた。

――ブチン――ブチン――ブチン。

アデライードが手元の芝生を素手で毟っていた。両手で鷲掴み、引っ張り上げ、手放す。その繰り返し。その動きは留まる様子を見せない。

「あら、変ね。千切っても千切ってもなくならないわ」

段々と力が込められてきたのか。その内に、雑草の細い根が引き千切られる音まで混ざり合った。土に覆われた白い根が露になり、細かく千切られた草の破片がぱらぱらとアデライードの腰に、太腿に纏わりついていく。

――おかしい、おかしいわよ。こんなに頑張っているのに、こんなに我慢してるのに、何で私の傍には誰もいないの。

その様は、拾ってきた捨て猫を親に戻してくるよう命じられた子供だった。物言わぬ草花に向かって暴虐の限りを尽くすアデライードの姿に、レイヴは微かな薄気味悪さと深い憐みとを抱いた。

～紲雷　thunder　of　bonds3～

背の低い鉄製キャスターの上に、白木で作られた大きな棺が置かれていた。最後のお別れが出来るように、と顔の部分が開閉できる様に作られた棺には、アルマンドの冷たくなった体が納められていた。

ピエールの話では彼は特定の宗教を信仰しているということはなかったようだ。納骨は頼まれたものの埋葬方法についてまでは言及されていなかったため、ルクセン式で弔うことにした。ヴィオレーヌに牧師の知り合いがいたためだ。

死化粧が施された顔の周りには五枚のクリーム色の花弁を持つジヴーの国花、エルメアが敷き詰められている。頭側にはヴィオレーヌが口利きしてくれた小柄な牧師と供の男二人が。そこから右周りにシュイ、ピエール、イヴァン、ヴィオレーヌ、リーズナー。それにラードック、ヴィレンと棺を囲うように並んでいた。

「――――大いなる存在エスペランよ。今ここにひとつの霊魂が回帰し、その流れに加わります。名はアルマンド・ゼフレル。彼の在りし日を偲び、その思いに寄り添うべく、浮世の兄弟たちと共に祈りを捧げます」

牧師と供の者が手の平と拳を胸の前で合わせると共に、周りにいる者たちが揃って黙祷を捧げる。同じようにルクセン式で手を合わせているのはヴィオレーヌとラードック。後は各々が自然体で目を瞑っている。

沈黙は何よりも雄弁に悲しみと過去を語る。シュイが初めてアルマンドと会った時、彼から受けた強い印象は、活力そのものだった。豪放で、頼り甲斐がありそうで、身に不幸を秘めているといった印象はこれっぽっちもなかった。ピエールと異なり、自分にはそこま

で直接的な親交があったわけではなかったが、彼が語った不幸な境遇には自分と似通ったものを感じていた。ただ一点、真逆の選択をしたという違いはあるけれど。

アルマンドは最期に、自分がアルマンドの心を救ったと言ったが、それはお互い様だった。苦難の道を歩んできた彼の言葉は、どんな慰めよりも強い説得力があった。背負う荷が軽くなったわけではない。それでも、背負う力は湧いてきたし、その意志もより固いものとなった。今この瞬間、シュイはアルマンドに感謝の念を抱いていた。

牧師の祈祷の言葉が終わると、参列者の視線は自然と傍にあるクリーム色の火葬炉に向けられた。日干し煉瓦を使って作り上げた簡素なものだ。炉の入り口からは人二人くらい寝れそうな大きさの鉄板。腰くらいの高さにある穴には油をかけた草と泥炭がふんだんに詰め込まれているのが見えた。

そういった即席の火葬炉はここだけでなく、四方に三十メード置きに並んでいる。戦争が始まってからというもの、聞くところによれば、人死にが多過ぎて火葬場が回らなくなったため、鉱山にほど近いこの高台のスペースに火急的に用意されたのだという。

耳を澄ませば遠くから地響きのような、他の炉の燃えている音が微かに聞こえてきた。周りを見渡せば、青空に立ち昇る灰色の煙が何本もあった。今にも消えそうな儚い帯の数だけ、命を失った者がいる。そしてそれ以上に、辛い別れを強いられる遺族たちが多くいる。戦争の罪深さは、今も昔も変わらなかった。

「それでは皆さま、そろそろ火葬に移らせていただいてもよろしいでしょうか」

ややあって、牧師が申し訳なさそうな声で言った。自然と、周囲の視線がシュイとピエールの方に集中した。シュイはちらりと隣に立っているピエールを見た。

「大丈夫だ」
小さいが、はっきりとした声だった。アルマンドの火葬の後にも、まだ大勢の遺体が焼かれるのを待っている。世知辛い話ではあるが、遅れればそれだけ遺体の傷みが進んでしまうのだ。
承諾の言葉を得た牧師はピエールに小さく頭を下げ、それから神妙な様子で小さな扉をゆっくりと閉じた。音もなく、アルマンドの顔が、体が闇に閉ざされた。
神父に指示された供の者たちが、棺の乗せられたキャスターを慎重に炉の近くまで引いていった。とはいうものの、キャスターの車輪は石床の轍に嵌めこまれているため転倒の心配はほとんどない。
炉に棺を半分まで突っ込んだところで、片方の男がキャスターを引きつつ、足側に回ったもう片方の男が棺を円板のついた鉄の棒で押し込み始めた。
アルマンドの遺体が火葬炉に入れられるのを黙然と見送り、ピエールはすらりと剣を抜き放った。
「シュイ、頼んでいいか」
「……ああ」
シュイは黒衣の袖を引き、左手を少し余分に露出させた。そしてピエールが掲げる白い剣に手をかざした。ピエールの手が微かに震えていたが、気づかぬ振りをする。親しい者の死を、二日や三日で割り切れるはずがない。
＞この身に炎を宿せ（ファイア・リロード）＜。囁くような詠唱と共に、ピエールが携える神木剣、ダンメルシアが夕焼けのような鮮やかな茜色に煌めいた。
ピエールは炉に向き直り、三歩ほど前に進み出た。ひとつ大きく息を吸い、炎に包まれた剣を振りかざし、煉瓦作りの火葬炉に紅蓮の炎を投じた。アルマンドを黄泉路へと誘（いざな）う送り火だ。
炉に詰め込まれていた油塗れの枯れ草がパチパチと音を立てて勢い良く燃え上がり、ほどなく上の通気口部分から細い煙が噴き出してきた。それを確認すると、牧師の供の者たちが炉の脇に積まれて

いる煉瓦をいくつか手にし、入口を塞ぐように積み重ねていった。火力を強めるために穴を狭くしているようだ。棺は、蓋の部分に火が取りついたところで完全に見えなくなった。

じゃあな、アルマンドのおっさん。そんな呟きが、燃焼音に混じってシュイの耳に届いた。

しばしの時が過ぎ、ピエールが俯き気味だった顔をすっと上げ、パンパンと、自分の両の頬を挟むように叩いた。

「――さて、と。切り変えなきゃな」

決別の言と共に一行に向き直ったピエールに、シュイは目を細めた。

「もう、いいのか？」

「死者は何も語らないってアルマンドさんも言っていたろ。別れは二日前に済ませたつもりだ。今の俺にできるのは、忌憚なくアルマンドさんの志を継ぐことだけさ」

ピエールは笑ってそう言った。どこか空元気のようにも感じられたが、ないよりはずっといい。少なくとも眼差しには力が戻っていた。

「骨になるまでには二時間ほどかかりますが、それまで休憩所でお待ちになりますか？　それとも――」

「――さっき骨壺を買ったから、焼き出されたらそれに保管しておいてくれないか。戦争が終わったら取りに来るからよ」

「そうですか、了解いたしました。では、取り急ぎで申し訳ないのですが――」

「ええ、十分融通していただきました。お忙しい中、ご無理を言って申し訳ありません」

深々と、地に付かんばかりに黒髪を垂れ下げたヴィオレーヌに、牧師が慌てて首を振った。

「頭を上げてくださいませ。ヴィオレーヌ様たっての願いにお力添え出来ただけでも、私は光栄にございますので」

「ありがとうございます。――全てはエスペランの意志のままに」
「はい、エスペランの意志のままに」

足早に去りたいのを堪えるように、一歩一歩去っていく牧師たちを見送り、ピエールが「あっ」と思い出したように声を上げた。
「……いっけね、すっかり忘れてたぜ、ギルドへ死亡届を出さなきゃいけないんだっけ」
「それは気にしなくていい、俺が昨日送っておいた。魔石は使えないから伝書鳩で、だけど」
アルマンドの亡くなった次の日、つまり昨日には、シュイはオルドレンの伝書鳩を借りてギルド本部へ訃報を送っていた。本来ならば魔石で通達するところだが、生憎とセーニアによって封鎖されている状態だ。アルマンドの話では彼の死と共にヴァニラも遠からず亡くなるということだったので、デニスがヴァニラの死を看取った時点で魔石での連絡を代わりにやってくれている可能性も高い。とはいえ、連絡をしないわけにもいかないのでやむなく鳩を使ったというわけだ。
「そっか、すまねえな。そこまで気が回らなかった」
「水臭いことを言うな、どうせ正式な書き方はおまえじゃわからないだろ」
ピエールの笑顔がぴきっと引きつった。
「……おまえってやつは、どうしていつもそうやって」
「昔話をする間もなく逝ってしまうとは、……最後までせっかちな男だ」
低い呟きがピエールの文句を遮った。後ろを振り返ると、寂しそうに肩を落とすヴィレンの姿があった。魔族である彼は普通より若く見えるはずだが、落ち込んでいるのと髭を生やしているので今だけは年相応にも見える。
シュイたちがアルマンドを担いで砂船を降りた直後、意識を失った彼を見て一番驚いていたのがヴィレンだった。亡くなった当日は

敗戦処理にごたついて仕事場から抜け出せなかったようで、今日、彼は顔を合わせるなり死に目に立ち会えなかったことを二人に詫びた。

「落ち込んでばかりもいられないぜ、ヴィレン将軍。まだセーニアとの決戦の準備だって整っているわけじゃないだろ？　もし良かったら俺も――」

「――このタイミングでこんなことを言うのは非常に申し訳ない気持ちなのだが、私は近々更迭されることになったんだ」

予想外の言動にピエールが目を丸くした。

「……え？　それ、ホントか？」

「更迭とはな、何かヘマでもしたのか」

イヴァンが興味深げに訊ねた。ヴィレンは疲労感たっぷりに溜息を吐いた。

「ヘマといわれれば、ヘマだな。――ルトラバーグの敗戦の責を負わねばならない。敵の戦術を早くに見破れなかったのは事実だから、異論を挟むつもりはない」

覇気のないその声に、リーズナーが眉をしかめた。

「撤退は兵士や住民たちの被害を極力減らすためであろう。あの場においては最善策だったと思うが」

「私としてもそうあって欲しいと願っている。――それでも、魔物の奇襲で数百もの兵を失っているのは事実だ。死んだ者たちの中にはオルドレン出身の者も多い。この町の世論も誰かが責任を取ることを望んでいるはずだ」

「――なるほど、逃げるための口実ができたというわけか」

「……なんだと？　……それは、聞き捨てならないぞ」

その台詞には流石にカチンときたのか。ヴィレンがリーズナーに怒りを含む視線を送った。リーズナーは笑みを消し、その視線を真っ向から受け止めた。

「ちょ、リーズナーさん、それは言い過ぎ……」

「そなたは、黙っていろ」
「……はい」
目の前に爪の伸びた指を突き付けられ、取りなそうとしたシュイの動きが一瞬で制された。リーズナーはばっとヴィレンに向き直り、紅い目を煌かせながら口を開いた。
「仮に――そなたが戦線離脱したとして、果たして他の者たちでセーニアに勝ち目があるのか？　ルトラバーグという守りの要地を任されていたそなたよりジヴー軍には有能な将がいると？」
「い……いや、……そこまでは」
「よもや、自分より経験の浅い将に全ての責任を押し付けられるのを黙って見過ごすつもりではあるまいな」
「そんなっ、……そんなつもりは、ない」
強い口調のリーズナーに、ヴィレンが苦しそうに抗弁した。察するに、彼の頭にもセーニアに対抗できる人物は思い浮かばないのだ。
シュイもヴィレンとは少ししか話していなかったが、それでも常識人だろうことは随所から窺えた。断る口実くらいいくらでも思い付いただろうに、しかも自分がどうこうされるという時に、律義に火葬に参列したくらいだ。周りの者たちの実力を自分より低く見積もるようなタイプではないだろう。もし有能な将の名に思い当たればひとつやふたつ、名前が出ているはずだ。
そこから導き出される解としては、ジヴー軍を率いるべき将は彼をおいて他にいない。兵たちに信頼されているのは、ルトラバーグからの脱出劇の最中からでも感じ取れた。即席の将に従うよりは、顔が知れている彼の方がいいはずだ。
リーズナーは口を噤んだヴィレンに対し、わずかに相好を崩した。
「別に責めるつもりはない。しかし、戦う前からそのようなことではセーニアの思うつぼだ。敵の策におめおめと嵌るのは賢くない」
「……敵の、策？　――――まさか」
「どういうことです？」

首を傾げたヴィオレーヌに、リーズナーは指先を真上に立てて説明する。

「先ほども言ったが、部外者の私の目から見てもルトラバーグでの撤退はまともな判断に思えた。決戦に向けて兵をひとつに纏め上げねばならぬ時に、士気を落としそうな話が仲間内から出てくることの方がおかしかろう。――責任論の出所を探った方がよいのではないか。内通者か工作員が紛れ込んでいる可能性も否定できないからな」

「それは――いくらなんでも考え過ぎではないでしょうか。セーニアの力ならそのようなことをせずとも……」

「戦は駒取りとは違う、向こうとて自国民の顔は窺っているはずだ。前回にしても、人的被害を抑えたいがために魔物を利用する策を取ったのだろうし。まぁもっとも、あれに関してはかなり危うい策にも思えたが。更には、連中はそう遠くないうちにルクスプテロンとの戦を視野に入れているはず」

シュイとピエールは顔を見合わせた。

――どう思う、シュイ。

――筋は、通っているな。

戦力の要となりそうな＞魔遺物（ヴァイーラ）＜の獲得に失敗した以上、セーニアとしては速やかに戦いを終わらせたいはずだ。それに、今回限りでルクセンの地下遺跡の探索を諦めたとも考え難い。兵士たちの損耗を極力避けたいという思いが調略に結びついても不自然ではない。

「……しかし、それが真実とするならば軍内部の者に探りを入れなければならないわけか。信頼出来る者を秘密裏に集めねばならないが」

「――俺も協力する。あんたと直接的な繋がりのない俺なら、兵士たちの動向を探るのに勘ぐられることもないはずだ」

ピエールが自分を親指で指し示した。

「……君は、アルマンドの関係者か？」
「おっさんの弟子みたいなもんだ。そんでもってジヴー出身でもある。シルフィールの準ランカー、名はピエール・レオーネ」
「君も準ランカーなのか！　それは非常に頼もしいが――」
「おい、『たち』が抜けてるだろ」
シュイが不服そうに腕を組んだ。ピエールがシュイに振り返った。
「――まだ付き合ってもらっていいのか？」
「毒を食らわば皿まで、だ。それに、もうジヴーだけの問題でもなくなった」
へ、とピエールが間抜けな声を出した。
「目の前でシルフィールの準ランカーが殺されたんだ、一支部長としても黙って見過ごすわけにはいかないだろ。ギルドとしてもこれ以上有力な傭兵を失うのは大きな痛手だからな」
ヴィレンが狐に抓まれたような表情でシュイを見た。
「……支部長？　君は一体……」
「あっ、馬鹿、おまえ――」
いいんだ、とシュイが頭を振る。
「黙っていて悪かった、ヴィレン将軍。俺もピエールやアルマンドと同じく、シルフィールの準ランカーだ。エレグスの一支部を任されているシュイ・エルクンドという」
ヴィレンの細い目が驚きで見開かれた。
「エルクンド！　……あのエミド・マスキュラスを葬ったという」
「それについては少し尾ひれもついているけどね。俺たちの正体を明るみにしないという約束を守ってくれるなら、協力させてもらう」
「シュイ、それでいいのかよ」
「今更つべこべいうな。傭兵仲間からの死に際の依頼だ、果たせなければ支部長の沽券にかかわるだろ」
「……こいつ、沽券なんて気にする柄じゃないくせによ」
ピエールは憎まれ口を叩きつつも笑みを噛み殺した。
「……アルマンドの依頼とは？」

ヴィレンに問われたピエールは、そのやり取りを掻い摘んで説明した。今際の際に交わした言葉。ヴィレン将軍に助力を願ったこと。そうでなければ大人しく帰るようにと言われたこと。アルマンドが、以前ヴィレンに仕事の紹介してもらったことについていたく感謝していたこと。

一通り説明を聞き終えたヴィレンは、それでも深刻そうな表情を崩さなかった。

「――確かにそんなこともあったが、君らには関係のない話だ。重々承知のこととは思うが、今度こそ負ければ命に関わる。私とてアルマンドとは気の置けない仲だったつもりだが、君らにまで昔のことを気にしてもらう必要はない。大体彼は、勝ち目があれば、と言ったのだろう。無謀な戦いに君らを巻き込んでもしものことがあったら、それこそ彼に申し訳が立たない」

「んー、まぁ、そこなんだけどな。こんだけ負けが込んでるとやってみなきゃわからねえ、と言える状況でもねえし」

腕を組んで考え込むピエールを横目に、シュイはぼんやりと、突き刺すような日差しが照りつける白亜の町を眺めた。

セーニア軍にも付け入る隙は、ある。長期の遠征に加え、この気候は兵士たちの心身にかなり堪えているはずだ。それに、これだけの楽勝ムードであれば指揮官はともかくとして下っ端の兵士たちの気が緩んでいてもおかしくはない。

構成されている軍が必ずしも一枚岩ではないということも、イヴァンの説明とレイヴから聞き出した話とで照合できている。そして、敵戦力の中心たる指揮官たちが高確率で砂船に乗っているだろうことも。まさか身分の高い指揮官が砂船も使わずにうだるような暑さの砂漠を行軍するとは考えにくい。そこで裏をかかれたら、もう手の打ちようがないのだが。

状況を整理すると、ジヴーは兵力を掻き集めても一万強。しかも

セーニアのように軍兵ではなく民兵だ。精鋭混じる三万五千余という大軍と真っ向からぶつかったら勝ち目などない。

けれども、敵の中枢を潰すことができれば退却まで追い込める可能性は大いにある。注意点としては、町の傍で戦うわけにはいかないということ。退却場所のルトラバーグか、陥落すべき目標オルドレン。それが間近あれば、指揮官が斃れたとて兵士たちの意志は容易にはぶれないだろう。戦力差のある状況で退却に持ち込ませるには、砂漠のど真ん中で戦うことが不可欠だ。土地勘がなく、方向感覚を失いやすく、スタミナを一気に失う熱砂の上であればこそ、敵兵の弱気を喚起できるはずだ。命の危機を連想させることができるはずだ。この地の利を利用せずに勝つ手段を編み出すのは困難だ。

もちろん、それくらいのことはヴィレンらジヴーの将も理解しているはずだ。問題は、頭を潰すその方法。考えに考えた末に、シュイの頭に浮かんだ策はひとつだけあった。だが、それを軽々しく言葉にするのも躊躇われた。第一に期限と人手の問題。第二に、仮にその作戦を通したとして、失敗したらその被害は全滅に近いものになること。

改良、検討の余地はまだまだあるが、煮詰めたとして成功する確率が決して高いものではないこともわかっている。全ての条件が整ったとして五分五分か四分六分がいいところだろう。ましてや、自分はジヴーの軍師でも参謀でもない。単なる一傭兵で、ジヴーの者らにとっては赤の他人。戦略を提案するという一点で、デニスたちとバータンに手を貸した時とは明らかに事情が異なる。

と、視界に誰かの顔が飛び込んできた。

――なっ、うわっ！

ベージュ色の柔らかな髪に頬を撫でられ、シュイは背中を反らすようにしながら後ずさった。

「リ、リーズナーさん、いきなりなんなんですか。びっくりしたじ

ゃないですか」
　三歩ほど後ろに下がったシュイにリーズナーは疑わしげな視線を送った。
「――ふむ、私の見立て違いかも知れぬが……そなた、何か言いたいことがあるのではないか」
　考えていたことをそのままに指摘され、ぞぐん、と背筋が震えた。
「い、いや、まだとても形には……、実現可能かどうかもわからないし……」
「――何か対応策があるのか？」
「おい、本当かよ、シュイ！」
「ちょっと、待てっ！　待ってくれっ」
　詰め寄りかけたピエールに、シュイは落ち着けとばかりに両手を前後に往復させた。
「……その、戦略とかに関しては門外漢なんだ。……あんまり下手なことは言えないだろ」
「――しかし、戦場を渡り歩いている傭兵ならそれがやれそうなものなのかどうか、見当くらいはつくはずだろう？」
「い、いや、でもさ……」
　シュイの煮え切らぬ態度にピエールは眉をハの字にした。
「おいおいシュイ、いつになく弱気じゃないか。何ていうか、らしくないぜ？」
　そう言いながらも心配そうにシュイの肩に触れた。たったそれだけのことだったが、ことのほかシュイは大きく身を震わせた。誰の目から見ても、明らかに過剰な反応だった。
「あ、……す、すまん」
「お、おまえ、本当にどうしたんだ？　どこか具合が悪いんじゃないか？」
「少しお疲れなのかも知れませんね。無理もありません、ここのところ気を張っていましたし」
　ピエールとラードックの病人に接するような気遣いに、シュイは

力なく首を振った。
「違う、違うんだ。……そういうんじゃない」
突如として弱々しくなったシュイの態度に、周りの者たちは戸惑いを隠せぬ様子だった。たった一人、イヴァンを除いては。

イヴァンはシュイに探るような目付きを送っていたが、態度が一向に変わらないのを見届け、珈琲色の前髪を掻き上げた。
「いつまでこうしていても仕方あるまい」
一同の視線がシュイからイヴァンへと移った。助け舟を出されたシュイは長々と息をついた。視線だけで呼気を止められていたようだ。イヴァンはそんなシュイを一瞥してからヴィレンに向き直る。
「何をするにしても、まずは内通者の炙り出しが先決だ。それまでに彼も考えを改めるかも知れない。その策が本当に検討可能なものかどうか、自分でも確かめたいはずだからな」
「――そう、だな。確かに、少し性急過ぎたか。煮詰まっていない考えを他人に披露したくないのは当然のことだし」
そう言いながらも、語気から落胆の色は隠し切れていなかった。
「……すまない、決して出し惜しみしてるわけじゃあないんだ。ただ――」
「いや、気にしないでくれ。明日明後日は予定があって無理だが、三日後にまた君らの船にお邪魔する。何か話せることがあれば、その時に頼む」
「だ、そうだ。――シュイ」
「な、なんだよ」
「三日以内に、おまえの思い付いた策が試す価値のあるものかどうか結論を出せ。自信がなければ取り下げてもらって構わん、はっきり『出来ない』と答えろ。実体のない希望を持たせることがいかに残酷なことかくらい、おまえもわかっているはずだ」
鋭い視線を投げかけるイヴァンに、シュイはおずおずと頷いた。

「では、また三日後にお会いしよう」
火葬場を出たところで、ヴィレンは鞍つきのふたこぶラクダに跨り、手綱を握っていない方の手を振りながら商業地区の方へと消えていった。ほどなく蹄の音が往来の雑踏に呑まれると、ヴィオレーヌとラードックがどちらからということもなく視線を交わし合った。
「では、私たちも戻りましょうか」
「そうですね、のんびりしていたらミイラになってしまいそうです」

強い陽光から目を庇うようにしながら、ヴィオレーヌとラードックが並んで歩き出した。四人が一斉に彼女らに追従した。が、そう間もない内に一人分の足音が欠けた。
リーズナーがいち早くそれに気づき、爪先立たせながら後ろを振り向いた。通りの真ん中でシュイが一人立ち止まり、足元に目をやっていた。
「どうかしたのか」
単刀直入なリーズナーに遅れて、他の者たちも次々に後ろを振り返った。シュイが顔を起こし、五人全員と視線を合わせるように首をゆっくりと動かした。
「悪いけど、みんなは先に帰っていてくれるかな」
「……それは構わぬが、何か用事でもあるのか？」
「考えようによってはヴィレン将軍に失礼なことをしてしまったわけだし、少し一人になって頭を冷やしたいんだ。夜までには宿に戻るから」
言い終えた時には、シュイの視点は覆面をつけたイヴァンに定まっていた。
「……わかった、敵の勢力下でないとはいえ戦時中だ。無用な心配だろうが、警戒だけは怠るなよ」

「ああ、じゃあまた後で」

一人通りを外れ、狭い路地裏に消えていくシュイを目にして、ピエールが眉をひそめた。

「なんだかあいつ、元気ないな。さっきのことにしてもさ、ただ思い付いたことを訊ねられただけであんなに及び腰になるなんて」

「……うむ、明らかに普段とは様子が違ったな」

同意するリーズナーに、ピエールがはて、と首を捻った。普段と言えるほどには、リーズナーと知り合ってからそんなに日が経っていないからだ。そんな些細な違和感に気づいた様子もなく、ラードックが口を開いた。

「自分で一旦見直してみたかったのではないですか。斬新なアイディアのように思えても一晩考え直したら赤面モノだった、なんてことは人生でいくらでもありますから」

「……確かに、それはありますよねー」

ヴィオレーヌが苦笑しながら頷いた。年を重ねた男の言葉だけに、妙な含蓄があった。

「いやー――」

違いますか、とヴィオレーヌがイヴァンに問い返した。

「あれでいて、昔から頭の回転は悪くない方だ。少なからず、思い付いたことに実現の可能性があるのをわかっていたからこそ、おいそれと口に出せなかったのだろう」

イヴァンは懐かしき故郷に思いを馳せた。シュイが、まだイェルドだった頃のことを。イェルドはエスニールの子供たちと一緒になって様々な遊びを作り出していた。暗号じみた文章の作成。ちょっとした道具、Y字の木の枝と弾力性のある蔦などを加工し、パチンコを作って的当て遊びをしていたこともあった。腕が上達すると今度は遊びの延長で高木の果実を狙い、籠一杯に果物を詰め込んで近所の家々に配って回っていたこともあった。

「でも、それって逆じゃないか？　あんたの言い分だとある程度頭の中ではまとまっているように聞こえるぜ」
「そうだな、確信までは持てていないが、セーニアに打撃を与えるような策は考え付いていると見ている」
「だったら、ヴィレン将軍がいたその場で伝えても良いじゃないか。大軍を蹴散らす作戦なら大がかりな準備だって必要だろうし、時間もあまり残っちゃいないんだ。セーニアだっていつ動き出すかわからないんだぜ？」
「――あいつは軍師じゃない。俺たちも、だが」
「……あん？」

ピエールが言葉の意味を咀嚼する間、イヴァンは白亜の街並みに目を移し、道行く人々を眺めた。敗戦続きで気落ちしているのか、全体的に活気がかけているような気がした。熱気渦巻く砂漠の町にいるのに、どんよりとした梅雨の季節を彷彿とさせる。
「ただでさえ勝算がろくに見込めぬこの状況、いかな奇策を用いたところで乾いた雑巾を無理矢理絞ったようなものだ。本人に確認せずとも博打になるだろうことはわかる。そんな提案を根掘り葉掘り聞かれる状況を、己の身に置き換えて想像してみたらどうだ」
「……案が採用された時に避けられぬ犠牲を、怖れているわけか」
「だろうな、失敗すれば自兵が大勢死ぬ、成功すれば敵兵が大勢死ぬ、至極明解な論理だが、俺たちには縁遠い話じゃないか」
リーズナーが納得したように腰に手を当てた。万が一、といえるほどセーニアに負ける確率は低くない。否、かなり高い。作戦が破綻し、ジヴーがこのまま殲滅戦に追い込まれたとして、力のある自分たちなら一丸となれば戦線離脱できる芽も残されている。しかしながら、他の一般兵たちや非戦闘員たちはどうなるのか。失敗してしまった時の責任は誰が取るのか。
一同は複雑な面持ちを見合わせた。死を免れぬ博打にジヴーの者たちを引きずり込む。コインを投げて表裏を外せば全てが終わる。

当てたとして勝てるかどうかはわからない。そうとなれば案を提示するのに躊躇いがあるのは致し方ないと感じられた。たとえ、勝てる可能性があったとしてもだ。

「……でもよ、あいつだって今まで数々の戦場を渡り歩いてきたんだぜ？」

「傭兵仲間が亡くなった直後だろう。人の生き死にをより意識していてもおかしくはあるまい」

はっとピエールが半開きの口に手を当てた。心的外傷（トラウマ）。イヴァンは暗にそれが豹変した理由だと仄めかしていた。ごく最近、シュイが子供の時分に大勢の同郷の者を殺されたことを打ち明けられていただけに、その推測は真実味を帯びていた。

「ふふん、それで期限を設けたわけか。いやはや朴念仁かと思えば、意外と気がつく男だったというわけか」

肩をすくめたリーズナーに、イヴァンはそうでもない、と首を振った。

「あいつに負担をかけたくないと感じているなら、誰もけちのつけられない良案を編み出すか、戦わずに済む方法を模索すべきだ。俺とて、それが出来ていないのに偉そうなことを言いたくはなかったさ。――これでは昔と何も変わらないからな」

最後の方は、ごく小さな声だった。自嘲の込められたイヴァンの呟きは一同の耳を撫で、砂漠の熱風に溶かされていった。

――――

――やっぱり、鉄は駄目って文献が多いな。真鍮……、無理。錫なら……いまいちか。

オルドレンの地下図書館に足を運んだシュイは、鉱物学の本を立

ち読みしていた。

黒衣に隠れた手が何度となく本棚と胸元とを往復していた。お世辞にも本を保管するのに適している環境ではなさそうで、棚に並んでいる本も所々虫に食われていたりカビが生えていたりした。酷い物になると誰かが飲み物をぶちまけたままになっているものもあった。ここの閲覧室は飲み物の持ち込みが許可されている。暑いから命に関わるということだろう。

とはいうものの、地下の建物では外の熱も幾分緩和されていて――温度計を見れば３０度前後はあっただろうが――そこそこ過ごしやすかった。加えて、施設内は半ば貸し切りの状態だった。直ぐ近くまで敵軍が攻めてきている時に本を読み耽るような者などほとんどいないということだ。学校の教室五つを繋げたくらいの広さだが、施設内にいるのは外の暑さから逃れてきただろう老夫婦と数人の学生だけだ。少し離れた受付のカウンターでは、女性の図書館員が筆を走らせる音までも聞き取れた。

シュイは本を開いたままどっと棚に寄りかかった。とはいえ、反動で本が飛び出ない程度には勢いを殺していた。ここ二ヶ月半ほどで、ジヴー側の死者行方不明は万にも届きそうなのだという。町も最終決戦を控えて、といった様相ではない。連日、棺桶と遺族を伴った葬儀の列が通りを行き来している有様だ。文字通りのお通夜モードに充てられ過ぎているのか、自分の気までも滅入ってくる。

ページを捲る度にシュイの口から小さな溜息が洩れた。セーニア軍への巻き返しを図るべく一月近くに亘って頭を悩ませてきたものの、一戦限りならば、という限定的な策を思い付くのがやっとだったのだ。しかも、実行するには相当量の金属が必要だった。

今現在わかっているところでは、一番適していると思われるものは銀だ。銀はそれほどの強度はないものの古くから退魔の力が宿るとされており、魔力との親和性も非常に高い。加えて、魔法の触媒としても融通が効く。唯一にして絶対的な欠点は希少な鉱物故に値

段が高いこと。これを使えればベストであるが、必要量にはどうやっても満たないだろう。

ジヴーが鉱石類の産出量が多いのは広く知られていることだが、その用途や金属の性質に関してはあまり気にしたことがなかった。そういったことを気にするのは武器の手入れをする時くらいのものだ。もし鍛冶師のシャンが今ここにいれば、自分の求めている答えを即答してくれるだろうが、生憎と彼は遠くエレグスにいる。魔石での連絡が出来ない以上、迅速な連絡は取り様がない。

策にしても即座に扱えるようなものとはとても言えず、素人考えに毛が生えたようなものだ。問題点は山積しているし穴もまだまだ残っている。それは、今の今まで盤石の言葉そのままに戦を進めてきた大国にそのような手が通用するかという根本的な問題から、この作戦を成り立たせるための大がかりな準備を整えられるかという疑念。それをやるに当たってのリスクと、敗戦続きで地に落ちたジヴー兵たちの士気。そんな彼らが、自分の編み出した作戦が反撃の手段に足るものだったとして、果たして素直に受け入れてくれるだろうかという不安。

万一セーニア軍に一度限りの奇跡的勝利を収められたとして、圧倒的物量を背景に第二次の遠征がなされたらアウトだ。奇策というものはトランプのジョーカーに等しい。出すタイミングを誤れば敗北は必至、上手くその場を凌いだとして手札に戻ることはない。ルクスプテロンがいる以上動けないだろうと読んではいるものの、今にして思うと絶対にそうとも言い切れなかった。地中を移動する街を作ってしまうほどに発達した文明が生み出した利器。そんなものがあると聞けば、セーニアだけではなく、どの国も喉から手が出るほどに欲するだろうことが容易に推察できるからだ。

考えが脱線しているのに気づいたシュイは、一度腰を落ち着けて取りかかろうと一冊の本を小脇に抱えて閲覧室に戻った。部屋の最奥で椅子に座っていた学生たちが一瞬だけ顔を起こし、怪訝そうな

顔で黒ずくめの男を見、直ぐに視線を両手の間に落とした。こういっては失礼かも知れないが、覇気のない、そのくせやたら見覚えのある表情だった。エスニールで、多くの犠牲の上に生き残った仲間たちも似たような表情をしていた。眉はハの字に下がり、口を半開きにし、前を見ているようで瞳には何も映っていない。それでもここにいて、曲がりなりにも読書しているのは、何かをしていなければ落ち着かないからだろう。そんな様はいじらしくもあったし哀れでもあった。

シュイは音が出ないよう留意して椅子を引き、ゆっくりと腰を下ろした。頁の上から下へと目を走らせながらも、思考の奥では倫理的葛藤に苛まれていた。

理不尽に奪われた命や財産が戻ってくることはない。勝とうと負けようと、この戦争が決着して終わりというような単純な話には落ち着かない。両者に、特にこの場合はジヴーにであるが、相当な遺恨が残るだろう。いいがかりで攻撃された（と思っているだろう）側としては、勝ちに転じたとして素直に喜べる状況ではない。大切な家族の命を奪われたならば、当人の命を以って償わせねば気が収まるまい。降伏してきた者たちを滅多切りにするようなことが起きぬとも限らないのだ。自分とてセーニアに良い感情は持っていない。だからセーニアの兵士がどのような暴挙を受けようと止める義理はない。

連中は今の今まで力に物を言わせてジヴー人の命をことごとく奪ってきた。魔物をけしかけるような真似もした。虐げられてきた者たちに報復する権利がないと誰が言えようか。目には目を歯には歯を、という言葉が戦場以上に当て嵌まる場はないだろう。

ジヴー側についている以上負けは論外。故郷のためにと奮起するピエールを何とか援助してやりたいと考えているし、志半ばで斃れたアルマンドの人生に触れ、勝利への決意はより強いものとなっている。レイヴやエグセイユを見逃した以上、既に身元は割れていて

もおかしくないし、そうなれば必然、シルフィールの名を背負うことにもなる。

慎重に、臆病にならざるを得なかった。傭兵という立場にあったシュイは、これまで目の前の相手を制圧するための戦いは経験してきたものの、戦争の戦術というものに関して深く考察したことはそれほどなかった。たとえば軍師と呼ばれる者に対する印象などをとってみても、賢い、狡い、腹黒い、その程度のものだ。

けれども、それはとんでもない勘違いだった。大勢の人間を動かすことになればそれだけ、犠牲者が出る可能性が大きくなる。世の名軍師と言われる者たちは、その神策鬼謀によって敵も味方も大勢殺してきた。戦場で一番敵味方の恨みを買ってきた立場なのだ。彼らは一体どうやって自分の感情と折り合いをつけてきたのか、シュイはそれを知りたいと思っていた。

仮にジヴーが危機的状況を脱せたとして、力関係の天秤がぐらつくようなことがあれば、ルクスプテロンも三年前の戦いで奪われた領土を奪還すべく、軍を派遣してくるだろう。それはジヴーにとっては喜ばしいことだが、今度は自分がしたことが引き金となり、ルクスプテロンとセーニアの者たちが大勢死ぬ。

――はぁ、本当に今日はどうかしてるな、俺。

シュイは頭痛を紛らわすようにフードの中の額を手で鷲掴んだ。戦争は自分たちの損害を少なくし、相手により多くの損害を与えた方が勝ちだ。倒すべき敵のことを心配している節のある自分に苛立ちを覚えた。

昔と同じように、エスニールで滅祈歌を用いた時と同じように、何も考えずに目の前にいる敵を排除すればいいのだ。ジヴーを守るためにはそれ以外に選択肢などない。自分が大変な時に周りを気にかける馬鹿など――

と、そこまで考えたところで、シュイはフードに覆われた自分の

頭を平手でぴしゃりと叩いた。尊敬している人を馬鹿呼ばわりしてしまったことに罪悪感が湧いた。

――――でも、俺はアミナ様じゃない。彼女のように真っ直ぐには、なれない。

思考の中でのこととはいえ、言葉にするとふつふつと劣等感が湧いた。彼女ならどういう風に割り切るのだろうか。どうやって周りの人たちを納得させてしまうのだろうか。

――って、納得させることを前提にしてどうするんだ。まぁでも、そう思わせちゃうのがもうきっと、カリスマってやつなんだろうな。

シュイは頭を左右に振り、雑念を振り捨てて読書を再開した。

――これも使えない、いい加減無理な気がしてきた。うーん、一旦戻ろうかなぁ……次、銅の性質は、――――っ！

本の後半部までぱらぱらと頁を捲ったところで、無意識に紙面すれすれにまで顔を近づけていた。これこそ求めていた記述だった。紙に穴があきそうなほどに目を凝らし、口元が緩んだのも一瞬のこと。直ぐに、シュイの顔から笑みが隠れた。強度的には不安が残るが、理論上は可能だ。しかし、これを成し得るまでに、成し得たとして、果たしてどれほどの人命が失われるのか。この場で深く掘り下げる気にはならなかった。

ほどなく、銅に関連する項目を隈なく読み終えると、シュイは本を手に重い腰を上げた。だが、そうして抱いていた気鬱な感情も、図書館の外に出た途端に手放すこととなった。

階段を上り、黄昏に染まる地上へと出た黒衣の男を見止め、通りを猛然と走っていた女が踵で急停止をかけた。
「え、……もしかして、リーズナーさん？」
「……その声は、当たりか。……ようやく、見つけた」

かなりの勢いで走っていたのか、靴底が摩擦で焼け焦げ、白煙が流れた。垂れ下がった髪に隠れていて顔はお互い確認できなかったが、髪の色は間違いなくリーズナーのそれだ。彼女は膝に手を当て、絶え絶えの息を整えようとしていた。ぽつぽつと、地面に汗が雨のように滴った。
「当たり……って、まさか、今の今までずーっと、俺を探していたんですか？　こんなに大きな町の中で？」
オルドレンは数十万の人口を抱える大都市。加えて砂漠の地方では黒衣を身につける者もそれなりにいる。葬儀が頻発している今ではなおさら、喪服として身につけている者が多い。そんな中から連絡もつけずにたった一人の人間を見つけ出すなどどれだけ困難なことか。
正気の沙汰じゃないと言いたげなシュイに、リーズナーは屈んだ姿勢のままで顔だけを起こした。鼻の頭が真っ赤に日焼けしてかなり痛そうだった。
「別に、大したことでもあるまい。言えば、マラソンがてら、人探しをしていただけだ」
全く呑めぬ言い分だった。この炎天下の中でのマラソンが自殺行為だろうことくらい子供でもわかる。
「……夕方になってもこんなに暑いのに、いくらなんでも体に毒ですよ、夜には戻るってちゃんと言いましたよね……。体調の方は大丈夫なんですか」

「うむ、問題ない。少しばかり頭が、くらくら、するが――」
全然問題なくない。滑舌の良いリーズナーのたどたどしい言葉遣いに、シュイの顔色が変わった。呂律が回っていないのは典型的な日射病の症状のひとつだ。
「ちょっと、どこかの喫茶店、いや、病院にいきましょう。水分を補給して頭を冷やさないと」
「……それなら、喫茶店を所望する。喉がひりひりしてしょうがないのでな」
辛いのか笑っているのか判別し難いぎりぎりの表情で、リーズナーはそう言った。

「……うーむ、極楽極楽」
リーズナーに肩を貸し、最寄りの喫茶店に連れ込んだシュイは連れの様子に慌てふためく店主にタオルケットを借りてボックス席のソファーに敷いた。生地の薄い部分が汗で肌に密着し、透けて妙に艶めかしかった。特に、女性らしい部分がくっきりと主張されているのは目の毒だ。シュイは努めて気にせぬよう、なるべく体に視線を合わさぬように彼女の頭を膝枕に置いた。腿に熱が一気に伝わり、足の裏が汗ばんできたが、気取られぬように手当てに集中した。
小さな額には氷結付与を利用して作った氷を革袋にいれた即席の氷嚢を乗せた。顔も火照っていたので目の部分も濡れタオルで覆っている。タオルを置いた直後にはじゅうじゅうと、薄白い水蒸気が立ち上ったのであるからして、どれほど体温が高くなっていたかは想像に難くなかった。明日には熱傷で苦しむこと請け合いだ。辰力で体を保護していなければ、冗談ではなく命にかかわっただろう。
「それだけ異常なことをしていたってことですよ、反省してください」
強い口調で応じるシュイに、リーズナーの口元が笑みを作った。
「まぁ、そういうな。こうして会えたのだし」

「そんなこと言って、もう日も暮れかけてますよ。こんな酷い無茶をしなくても、宿で普通に会えたのに……」
「無粋なことを申すな。人の心情は足し算引き算で推し量れるものではない。たとえ辿り着く結果が同じであろうと、探し求めて会えた、その事実こそが大切なのだ。少なくとも、私にとってはな」
「……とりあえず、水飲みますか」
「んむ、有難い。しかしこの格好では少し……」
「店員さんが気を利かせて水差しを用意してくれましたんで、大丈夫です」
そう言いつつも、シュイはテーブルに置いてある水差しに手を伸ばした。
「……いや、そういうことではなくて、だな」
「はい、どうぞ」
「……そなたは、人の話を聞けと、むぅ、……全く」
諦めたように、リーズナーはシュイに膝枕されたまま、差し出された硝子の水差しの口を唇で挟んだ。シュイは慎重に手を傾け、彼女の口によく冷やした水を流し込む。
「……ん、……ん、んく」
「美味しいですか」
リーズナーの口は塞がっていたが、それを肯定するように飲むペースが段々と速くなっていった。水差しの中身が空になるその都度、シュイは自分のコップから水を継ぎ足した。

「……ぷぅ、人心地ついた」
四回ほども継ぎ足しただろうか。リーズナーがタオルを片手で払い、ゆっくりと横たえていた体を起こした。
「ちょっと、まだ無理しない方がいいですよ」
「心配いらぬ、先ほどよりは随分と楽になったし、その……」
「何ですか」
「……そ、そなたには羞恥心がないのか。……流石に恥ずかしいの

だ、周りの目もあるし」
　シュイは店内をゆらりと見回し、納得した。顔を合わせる度にあちらこちらの視線が遠のいた。黒ずくめの男が日射病の美女を連れ込むという光景は、客や店員にとって中々に物見高いものだったようだ。
　幾分しゃんとしたリーズナーの様子を確認し、シュイは隣の席に移動した。
「……偶々会えたからまだ良かったものの、もう少し遅れてたら」
「終わったことを何度も蒸し返すものではない、しかめ面ばかりしていたら難しい顔になってしまうぞ」
「別に、してませんよ。フードつけてるのにわかるわけないでしょう」
　少しどきりとしたが、シュイは平静を装って言葉を返す。少なくとも、しかめ面をさせる側が口にして良い台詞ではないはずだ。
「それで、何か緊急の用事だったんですか」
「いや、先ほど少し元気がないように感じていたのでな」
「……そ、そうですか？」
「うむ、ピ……レオーネ殿も心配していた。私としても、その、セーニアへの善後策について無理矢理聞き出してしまった感があるから、少し後ろめたさも手伝ってな」

　図星を指され、シュイの呼気が止まった。長い付き合いがあると、フードも全てを隠し切れるわけではないようだ。
「あの話ですか。……あれは、贔屓目に見ても成功率の低い策ですし、仮に全てが上手くいったとして、不利な状況下ですから犠牲者も相当出るのは避けられないはずです。そんな博打に皆を付き合わせるのは、正直……」
　支部長であることを曝露（ばくろ）したくらいだ。シルフィールを辞めさせられる覚悟はできている。もし今後も傭兵を続けたければ他のギル

ドに移ったって、リーズナーのようにフリーで傭兵を続けたっていい。昔ならいざ知らず、今はどこでだってやっていける自信もあるし、相応の実力もつけたつもりだ。蓄えの方も、黒衣や鎌のメンテナンス費用と旅費や宿代以外にはほとんど使っていないからかなり貯まっている。腹は括れている。そう、自分の腹は。

とはいえ、その覚悟を他の者たちにも負わせるのは卑劣な行為なのではないか。自分だけが犠牲になるなら踏ん切りもつきやすいが、己の迂闊な考えが発端となって大勢の人を死に追いやったとしたらどうするのか。自分が経験した地獄を、またも見せつけられたとしたら。

シュイはそういった事態になることを怖れていた。エスニールで大勢の仲間が殺された光景は、未だ脳裏に焼き付いている。その再現のきっかけが自分になるなんて、どうにも堪えられることではなかった。

そうしたシュイの心情を汲み取ったのだろう。リーズナーはしばしの黙考を経て、口を開いた。

「なけなしの策であろうと無策で戦いに臨むよりはましであろう。戦う兵たちとてその作戦を成功させるという明確な目標ができる。だだっ広い場所を闇雲に掘り返すのか、一箇所に目星を付けて集中して掘り進むのか、という単純な問題だな。闇雲に圧倒的質量にぶつかるよりはずっと気が楽だ」

「ですが、俺は一介の傭兵に過ぎませんし」

「正規兵でないからこそ浮かぶアイディアもあるはずだ。否定されることを怖れているわけでもなさそうだし、ちゃんと思案した上での企みであろう？　アルマンドはそなたたちに後を託したのだ。あの男は託せぬ者に全てを押し付けるような者ではないように見受けられたが？　少しは自分を信じたらどうなのだ」

「ですが……しかし……」

「煮え切らぬな、ではなにか。他の者に適当な策を思い付かせて戦

った方がいいと言うのか。失敗した時の責任はそいつに全て押し付けてしまえと？」

「なんっ、そこまで言っていないでしょう！」

「ふふん、ヴィレン将軍と同じ反応か。しかしな、腹に一物あるにも拘わらず無言を貫く者はそう示唆すると同じことだ。……違うか？」

爛々と輝く赤い瞳がシュイを見据えた。シュイから返答はなかった。沈黙が是を示していた。

「そうであろう？　文句だけ言う卑怯な輩よりは、自分を傷つけてでも茨の道を進む者の方が格好良いぞ。私はそなたの歩む道を疑わぬ、と以前そのようなことを伝えたつもりだが」

「……以前？　いつの話ですか」

首を傾げたシュイの前で、リーズナーがふっと表情を崩した。

「ここまで言ってもわからぬか、まぁよい」

おもむろにリーズナーが立ち上がり、ぐっと自分の髪を引っ張った。ベージュ色の髪がピンと這った。

「……ん、……あれ」

「ど、どうしたんですいきなり、虫でもついてたんですか？」

「い、いや、しばし待て」

「あ、はい」

今一度、訝るリーズナーがぐっと自分の髪を掴み、引っ張り上げた。シュイは何をしているのだろうという不思議そうな面持ちでそれを見守った。

「む、ぐぐぐ……いっ！」

「な、何やってるんですか、髪が抜けてしまいますよ」

歯を食い縛り、目尻に涙を浮かべるリーズナーの手に、立ち上がって制止しようとしたシュイの手が重なった。触れた手が一瞬びくりと戦慄いたが、思い直したようにシュイの顔に視線を動かした。

「す、すまぬが髪が絡んでしまっているようだ。……解いてもらっ

てもいいか」
「髪が、絡んでいる？　何にですか？」
疑問に疑問が返された。きまり悪そうに頭を下げたリーズナーのつむじを見てみると、なるほど、確かにベージュと銀色の髪が渾然一体と混ざり合っていた。
――って、銀髪？　白髪……じゃないよな。リーズナーさん若いし。
「よいか、そーっと引っ張ってくれ。慎重に、慎重にだぞ」
「……えっと、ええ、わかりました」
重ねていうところから察するに、先ほど引っ張った時は相当に痛かったのだろう。シュイは言いつけ通り、慎重にリーズナーの髪の毛に指を差し入れた。
端からやっていけば大丈夫か、などと思いつつ髪を解く作業を開始したシュイは、数分間の悪戦苦闘の末に、今度は自分が両手で頭を抱えることになった。

シャリシャリと、匙で山盛りのかき氷を掘り進む音が響く中、シュイはウィッグを外したリーズナー・フェロンを前に一人打ちひしがれていた。

――一体この状況は、なんの冗談だ。

「おかわりを頼む、今度はマルダのフルーツソースで」

「か、かしこまりました」

注文を受けるなり背の低い褐色肌の女性店員がトレイを脇に抱え、小走りでカウンターの横に消えてゆく。既にボックス席のテーブルには空の硝子の器が四つ並んでいた。店員も三分ほどで戻ってくるのだが、氷山の頂が低くなっていく速度からすると、追加される頃には確実にひとつ器が空になっているだろう。

「先ほどから頭が重そうだな、風邪でもひいたか」

「……どういう、つもりですか」

頭を抱えたシュイの絞り出すようなその声にリーズナー・フェロン、改めアミナ・フォルストロームはあさっての方向を見遣り、指先でくるくると、取り外したベージュ色のウィッグをもてあそび始めた。

「……何でこんなところにいるんですか、何しにきたんですか」

押し殺したようなシュイの声に耳を貸した様子もなく、アミナは脇にウィッグを置いた。次いで乱れていたセミロングの銀髪をささっと両手で撫でつけ、すっきりとした表情で胸を張った。心なしか三角耳もピンと空に向かって伸びている。どうやら先ほどのダメージからは立ち直ったらしい。

「耳がむず痒うて大変だった、本当はバッという感じに、そう、颯爽の言葉そのままに取り去りたかったのだが、いやはや、現実は中

々寸劇のようにはいかぬ。この暑さで樹脂が溶け出してくっついてしまったのだな。ぴったりと貼り付きます、直ぐ外せます、と店員が何度も太鼓判を押したから購入したのに、後で文句の手紙のひとつでも送ってやらねば」

聞いてもいないことをぺらぺらと喋るアミナに、シュイはただただ顔をしかめるばかりだった。

「……矛盾の由来って知ってます？　そんな詐欺商法に引っかからないでくださいよ、大体、自信のある商品はそんなに押す必要ありませんし――じゃない、今すぐ支部へ戻って……いや、ここからならフォルストロームの方が近いか――」

「――お断りだ、存外自分本位なやつだな」

呆れたようにそう言うアミナに、シュイはむっとした表情で、膝の上で合わせていた手をぎゅっと握り締めた。

「自分……って、あのですね、俺はあなたの身を心から案じて――」

「何より、今の今まで気づけぬとは情けない。イヴァン・カストラは初日で私の正体を見破ったというのに。支部に戻ったら気配を察知する闘法を身につけさせねば」

――無視ですか、そうですか。

シュイは不貞腐れたようにそっぽを向いた。アミナの言い分にしても、決して正解というわけではなかった。

実際、もしやと思うことは何度かあった。独特の喋り方だけでもかなり怪しかったし、獣族で銀髪緋眼というのも珍しい。達人クラスの獣族の女がわんさかいるわけでもない。

それでも他人の空似と結論付けたのは彼女が国を思い、普段、軽はずみなことを慎む性格であることを知っているからだ。それだけ彼女を信用していたのだ。付け加えるなら、変装なら髪と化粧だけでなく他の場所にも気を使うだろうという偏見。もっというと、あまりに堂々とし過ぎていて返って疑えなかったという心情によるもの。こうしてウィッグを取り去ったアミナを目の前にしてみると、

やっぱりそうだったのか、という思いが否めない。

それらのことを口にしないのは、後出しでどうにも言い訳臭くなるからに過ぎなかった。シュイは弁明を諦め、最優先事項を歎願した。

「……ご存じでしょうが、もう決戦まで間もないんですよ？　一刻も早く帰国してください。あなたはフォルストローム中の王族であると同時に、彼の国の人たちの希望です。これまでにも軽はずみな行動は慎んでいらしたじゃないですか。俺だって――」

「――だって、なんだ？」

口を挟まれ、一瞬躊躇を見せたシュイだったが、アルマンドに言われた『両想い』という言葉に背中を押された。

「――その、……大切な人だと……思ってますし」

ぼそぼそとそう言うや否や、アミナの三角耳が慌しく動き出した。シュイは不思議そうに、風にはためく旗のように揺れ動く耳を眺めた。

「ふっ、……ふんっ！　よくもこんな緊急時に、歯の浮くような台詞が出てくるものだな」

「心残りは、なくしておきたいですから」

その力ない声に、アミナは匙を唇に咥え、天を仰いだ。

――全く、とことん自分勝手なやつ。

アミナのその囁きは、シュイの耳には届かなかった。

ややあってアミナは咥えていた匙を手で持ち直し、器に置いて襟を正した。

「アルマンド・ゼフレルのことは、残念だった」

「……はい、彼の体の不調に気づけなかった自分を恥じるばかりです」

「それは私とて同じだ。とはいえ、当人にも責任がないではない。いかに人に弱みを見せたくないからといって、度を越せば問題が生

じる。不運が重なる時は、得てして慢心が引き金となるものだ」
シュイの手がテーブルの上で強く握られた。辛辣な言に対するささやかな反発と、自分の心が読まれているのではないかという怖れがそうさせた。
「話を戻すが、そなたの考えた策略とやらの成功率は、割合にしてどれくらいのものだ」
「……四割、弱です」
「……何」
アミナの目付きが鋭さを増し、反してシュイは雨に濡れた小犬のように縮こまった。
「いや、そう恐縮せずとも良い。その……正直、もっとずっと低いものかと思っていたのだ」
「……え」
「それが真ならば、十分勝負が出来る数字だと思うがな」
「……そうで、しょうか」
肩を落とすシュイを視界に収めながら、アミナは仕方ないやつだとでも言いたげに大きく息をついた。

気まずい沈黙が漂う中で、アミナは気を取り直したのか、腿で水滴のついた右手を拭い、掲げた。シュイは訝りながらもアミナの小さな手を見つめた。別段何かが握られていたわけではなかった。
「例え話をしよう――おまえは魔法が使えず、剣術の心得もない村人だ。妻と娘と日々平凡な暮らしをしている。そんなおまえの家に盗賊が押し掛けてきた。相手は殺意を撒き散らし、血糊のこびりついた長剣を握って土足で近寄ってくる、ここまではよいな」
「……はい」
シュイはアミナが紡ぐ言葉を追い、その状況を頭に思い浮かべた。
「部屋はさほど広くなく窓は嵌め格子、玄関も手狭で脇を通り抜けるほどのスペースもない。すなわち逃げ場はどこにもない、金品を渡して済ませられそうな状況にもない。十中八九、このままでは殺

される。部屋の隅で震えている妻と娘に戦う力などあろうはずもない。自分が殺された後どうなるかは、明白だな。――そんな事態に直面したら、そなたはどうやって活路を見出す」

シュイは十秒ほど視線を落とし、ゆっくりと顔を上げた。

「……近くに人の気配があれば助けを呼ぶか、一般の家屋であれば包丁とか金槌とか、武器になりそうなものもあるはずですから、周りからそういうのを見つけて何とかしようとします。そんな切羽詰まった状況で冷静に頭が働けば、の話ですけど」

流石に自衛で殺すという言葉を使うのは躊躇われたが、状況が状況なだけにそれで相手を始末するしかないだろう。それが適わなくとも取っ組み合いにでも持ち込めたらしめたものだ。家族が逃げる時間くらいは稼げるかも知れない。

「まぁまぁ、模範的な解答だな」

「ど、どうも」

「――結論から言うと、おまえの策とやらはこの場合における包丁とか金槌とか、そういった物に過ぎん」

「……え」

アミナは宙に浮かべていた手を、強く握り締めた。

「それをこの手に取るか否か、抵抗するか否かを決めるのはヴィレンら将校たちであり、＞賢律院（ルーツ）＜の面々であり、彼らを代表に選別したジヴーの民たちだ。そなたは自分本位の考えに囚われ過ぎている。裏を返せば、それは自分の策が受け入れられる可能性への怖れ、すなわち一定の評価の表れでもあるのだが」

「――でっ、ですが……外部の人間が内部の人間に深く干渉することに躊躇うのは、自然なことではないですか」

「そなたにしては随分と苦しい言い訳だな、第三者であればこそ冷静な目で双方の争いを俯瞰できることもある。同郷の者とはいえ、かつて殺し合ったイヴァン・カストラと行動を共にしているということは、そなたも今まではジヴーに勝利をもたらすことだけを考え

て動いていたのだろう。なのに、自分に責任が及ぶかも知れぬというだけで二の足を踏むのか。そういう者を世間で何と呼ぶか、知っていような」

ぐっ、とシュイが呻いた。正当化できていると思っていた抗弁を、正論のみで跳ね退けられてしまった。結露したグラスの曲面に映る自分の歪な顔を見つめながら、アミナは尚も言葉を続けた。

「自ら選び取って進んだ道と、流されるままに辿り着いたその場所が実は同じだった、ということはままあることだ。けれども、自らの意志を周りに示したという明確な差はあろう。それを徒労と馬鹿にする者もいようが、私はそうは思わぬ。葛藤や苦しみに耐える時間は、抗おうとする心は人を大きく成長させる、次なる未来への分岐を増やす力となる。――私は父様にそう教えられた」

「アミナ様の……、それって、前フォルストローム王ってことですか」

自然とシュイの声がひそめられた。ここにアミナがいることを知られるのはあまり喜ばしいことではなかったからだ。

アミナもそれは理解していたのか、声を控えめにしながらも、どこか懐かしげに父親のことを語り始めた。

アミナの父、前フォルストローム王は武の才こそアミナに一歩譲っていたが、政には非常に長けていた。今のフォルストロームが比較的平穏であるのも、彼が取り決めた法や国の仕組みなどが上手く機能しているからだという。ジュアナ戦役以降、フォルストロームでは小競り合いを除いて表立って起きた戦争はない。エレグス、ルクスプテロン、セーニアの三つ巴となった二十年数年前の戦争に関しても、フォルストロームだけは上手く立ち回り、武力衝突を回避した。

「彼の戦争の際は賄賂なども駆使した故に、節操のなさを責める者もいたようだが、父様はどこ吹く風だったと聞いている。自己の存在の小ささを明確に認識し、なればこそ周囲の力を借り、利用し、

同時に周囲の意見に振り回されぬ強さがあった。――それ故に、勘違いされやすい人物でもあったのだがな」

先代フォルストローム王は病没とされているが、詳しい事情は知られていない。巷でもこれといった有力説が出ていないのが現状だ。アミナにも今そういったを語るつもりはないようだ。ただ、個人が負える責任にはどうしたところで限界があると言っているのだ。

「……ですが、本当に無茶な作戦なんです。敵の懐深くに突っ込む必要がありますし、些細なことで破綻するかも知れない」

シュイには塾や学校などのちゃんとした場所で軍略を学んだ経験がなかった。今回の策も、あくまで聞き齧った雑学を継ぎ合わせたようなものだ。ちゃんと文献や軍学校を出て戦術を学んだ者の方が良い作戦を立てられるだろうという思いは否めない。もし降伏したとして、これ以上の人死には避けられるかも知れない。だが――

「それについては詳細を聞いていない故に何とも言えぬ。が、これだけはわかる。絶対に破綻しない策など、存在しない」

シュイの希望的観測を、アミナはひたすらに打ち崩していった。

「力量が不足していようと、ジヴーの兵士はこれまでも彼らの居場所を守るために、家族を守るために戦ってきたのだ。その思いは決して侮れるものではない。助かるかも知れないなどという曖昧な願望に身を委ねて苦杯を舐めるよりは自分で道を決めた方がよほどいい。万に近い犠牲が出ているならば尚のこと、第三者の介入による戦争終結などより、自らの手で?ぎ取った勝利の方がよっぽど生きる活力となるはずだ」

アミナは一呼吸おき、窓の外を眺めた。

「長きに亘る戦争の歴史において、奇策神策と謳われるものは数多くある。しかし、それが一番の良策だと誰が決めたか。もしかしたらその裏には握り潰された、その上を行く策があったのかも知れぬ。それはきっと、本人の葛藤や逡巡で口に出せなかったのだろうな。

されども、それで後悔した者はごまんといるはずだ。地位の低さなどで受け入れて貰えなかったならばともかく、献策できる立場にあった者なら尚更な。必要なのはほんの少しの勇気と、居直る強かさだ」

「それは、わかりますけど……」

「まだ踏ん切りがつかぬか、ならば聞こう。今の私は人殺しを命じているか？　それとも人を助けよと命じているのか？　セーニアは極貧から戦いを起こしたわけではない。いわれなき戦争を仕掛けた側と仕掛けられた側、大義はどちらにある」

「……それはもちろん、仕掛けられた側です」

「そう、今現在はな。けれども、大義というものは最終的には勝者にしか靡かぬ。ならば、まずは勝つことだけを考えよ。そして、出来得るならば心に留めておけ。世の流れは個人の挙動のみでどうこう出来るものではないし、この決戦の後に何が起きようと、そのほとんどは戦争を始めたセーニアが負うべき責なのだ。他者を傷つけることに対して心を痛めることを忘れてはならぬが、必要以上に自分を虐める必要はない。無抵抗で殺されることもまた、殺人なのだからな」

アミナの毅然とした言葉と態度が、シュイの胸を強く揺さ振った。抵抗せずに殺されることも、殺人。確かに、それは自殺にも等しい行為だ。そんな単純なことを、何故今まで頭に入れていなかったのか。

――まいった、降参だ。

「……ん、なんだ？　まだ反論があるのか？」

舌鋒鋭く切り込んでくるアミナを、シュイは疲れたような、どこか可笑しそうな表情で見遣った。

「いえ、これほどに完膚なきまで叩きのめされることは、戦場でもきっとないだろうな、と」

シュイは苦笑いを浮かべてそう口にした。あっさりと納得させら

れた自分を詰りたいような、褒めたいような、複雑な心地だった。

「ふむ、活力を奪うつもりは毛頭なかったのだがな。――――仕方あるまい、リズに教わったとっておきの景気付けをしてやろう、耳を貸せ」

「へ、リズさんに……景気付けですか？」

シュイは数度面識のある大人びたメイドの姿を思い浮かべた。

「別の言葉に聞こえたか？」

「い、いえ、そんなことは」

「ならばとっとと貸せ、気が変わらぬ内に！」

「は、はい……じゃあ――どうぞ」

気が変わらぬ、とはこのような状況で使うのに適切な言葉なのか。首を捻るようにしながらも、シュイが前かがみになる様に、アミナに耳を差し出した。

「ふむ、ならばそのままの体勢で前を見てみよ」

「……このままの体勢で？」

耳打ちじゃないのか、とシュイが眉をしかめつつ再び前を向いたその時――

ふいに、柔らかいものが口に押し当てられた。見開かれたシュイの目には微かに揺れる銀髪と、ぎゅっと目を瞑ったアミナの顔があった。

両の頬に、炎が燃え盛っているかのようなアミナの熱が伝わってきた。日に焼けていたせいかも知れないし、別の要因かも知れない。実際、アミナの顔は褐色肌でもはっきりとわかるほどに真っ赤だった。けれども、何より口から伝わる感触の方が気になった。強く押し当てられたアミナの、桃色の唇が。先ほどかき氷を頬張っていたからか、微かに甘い香りがした。

紅い目が薄らと開き、一瞬だけお互いの舌が触れ合ってドキリとした。アミナが薄く眼を開き、両肩を押すようにしてシュイから離れた。混ざり合った二人の唾液が宙に細い糸を引いて、解けた。そのどこか煽情な光景に、キスをしたのだという実感が一気に得られた。

肩腕を抱くようにもじもじとしている、年相応の少女の顔を見せるアミナを、シュイはほとんど思考が停止しかけた状態で視界に収めていた。

「……」

「……」

お互いの視線が、少しずつ横にずれていた。

シュイの視界の中では、銀髪に埋もれかけた二つの三角耳が、それこそ強風に煽られた風車のように高速でぴろぴろと動いていた。それを目の当たりにするだけでも照れ臭過ぎた。かといって、アミナの顔から目が離せるわけでもなく、どう反応すればいいのか判断がつかなかった。この硬直状況を解くための気の利いた台詞を考えようとしたが、ついぞ頭に浮かぶことはなかった。

何故キスをしたのか。これのどこが景気付けなのか。他の人にもこういうことをしたことがあるのか。そんな上辺だけの疑問が次々に脳裏を過ぎったが、そのどれもが適切だとは思えなかった。

ただ一点、アミナは、ただ悲しみを慰めるために、紛らわせるためにそういうことをするような性質ではない。そのことだけは理解していた。少なくとも、今目の前にいる彼女は、自分からしたはずの今の行為に相当動揺しているようだ。

「……えと」

意味のない、時間の空白を埋めるだけの言葉が口に出た。

「……か」

「……か？　蚊でもいましたか？」

「ちっ、違うわ阿呆っ！」
いきなり怒声を浴びせかけられ、シュイがびくりと身を竦ませた。
アミナははぁはぁと息を切らしながら、たどたどしく言葉を続けた。
「……か、軽い女だと、思うでないぞ。……わ、私とて、これが……その」
次に続く言葉をぐっと飲み込み、顔を上気させながら上目遣いでシュイを睨んだ。その今にも泣き出しそうな視線を受けるだけで、もう一杯いっぱいだった。ただ目の前の少女がひたすらに愛おしくなり、抱き締めたいという感情だけが全身を埋め尽くしていった。

「……あ、あのぉ」
ままよと覚悟を決めたシュイがアミナに向かって半歩を踏み出したその時、入室の許可を窺うような躊躇いがちな声が割り込んできた。二人共に揃って横を見、ぼっと顔から火が迸った。
先ほどから注文を運んできていた女性店員が二人に負けぬくらい頬を染めつつ、溶けかけたかき氷の載った硝子の器を、おずおずと差し出していた。

――なぁなぁリーズナーさん、どうやってあいつを説得したんだ？
――べ、べべべ、別に。特別なことは何もしていないぞ。
――何でそんなに動揺してるんだ？　うーん、それにしても短時間でこうも心変わりするなんてなぁ、一体何があったんだろ。
――知らぬと言っておるだろう、少ししつこいぞ。シュイには吹っ切るだけの時間が必要だった、ただそれだけのことだと思うが。
――そっかー、まぁいいけど。そうそう、念のため忠告しておくけどさ、あいつには惚れない方が賢明だぜ。何てったって既に惚れてる女がいるから。しかもだ、ある消息筋ではその方はさる国の――

何が『消息筋』か。傍らでひそひそ話を展開するピエールと変装済みのアミナに、シュイはフードの奥で頬をひくつかせていた。

ヴィレン将軍との再会の日。シュイは昼頃から段々とそわそわしてきた。座っている今でもどうにも落ち着かず、右膝が小刻みにリズムを刻んでいる。腹案の詳細を知らせる決心はついていたが、開き直ったという境地にまでは至っていない。論破されたからといって完全に吹っ切れる類の悩みではないからだ。

それでも、差し迫っているのが不可避の選択ならば、アミナが諭したように思いが傾く道を進んだ方が後悔せずに済むだろう。今自分たちにできる最善は、少しでも戦争による犠牲が減ると信じる方へ舵取りし、天命を待つ他にない。

あるいは、それも建前なのかも知れなかった。誰だって心寄せている異性にみっともない姿を晒したくはないものだ。見栄と断じられればそれまでだが、想いを寄せている相手の前で張り切らずしていつ張り切る、とも思う。

混濁した感情を何とかひとつに取り纏め、明確な方向を打ち出したシュイは、決意が鈍らぬ内にとヴィレンの到着を今か今かと待っていた。

「そろそろ、日付が変わるな」

覆面を外しているイヴァンが植木鉢の時計花に目を遣った。花弁の色は群青から漆黒へと変わりつつある。窓の外はシンと静まり返っており、外気が冷えてきたのか硝子には霜が貼りついている。本来ならば宿の玄関もとうに閉まっている頃合いであるが、来客があることは宿の主人に知らせてあった。

今この場にいるのは五名。ラードックは割れてしまった酒瓶を補充すべく夜の街に出掛けている。ついでに仕事仲間と飲み明かすとのことなので戻ってくるのは明け方になるだろう。

カランカランと、呼び鈴の乾いた音が二度鳴った。部屋の入口に近かったヴィオレーヌがやや緊張した面持ちで立ち上がり、ドアに向かった。

半開いたドアの隙間、青い絨毯の敷かれた廊下に立っていたのはヴィレン将軍。そして、足元には木製の小さな杖とローブの端が見えた。その持ち主は、眩いばかりの頭皮に三本の白髪、＞賢律院（ルーツ）＜に属するスザク・シハラだった。

「遅くなって済まなかった、尾行がないかを確認しながら来たものでね」

「それはいいが……ここに来る時は一人という約定のはずだったな？」

招かざる客を連れてきたヴィレンに、イヴァンは冷やかな表情で応じた。

「スザク殿は信用に値する方だ、私が保証する」

「ならば、話し合う前に彼が内通者でないという証拠を示してもら

おうか。それが無理なら翁殿（おきな）にはご退席願いたい」
「そうだな、そういうオチだけは勘弁だ」
イヴァンの要求にピエールまでもが同意すると、ヴィレンの眉間にしわが寄った。
「つまり、私の言だけでは不服ということか？　＞賢律院（ルーツ）＜で戦場に出ているのは彼だけなのだぞ」
殺される危険もあるのを承知で戦場に出てきているならば、内通者の可能性は低いということを言いたいのだろう。ところが、イヴァンは僅かに眉を動かしただけだった。そして、その真向かいからも否定的な意見が述べられた。
「それだけでは少し弱いな、むしろ怪しむ者がいても不思議ではない。戦場の現状を逐一報告できる立場ということだからな」
「そこまで疑うのか、少し礼を失するのではないか」
ヴィレンが尚も疑いを捨てぬアミナに噛みついた。高圧的に、というよりは親しい人間を貶された者が見せる義憤という風合い。ヴィオレーヌがドアノブを握ったまま、不安げな瞳を揺らした。
「イヴァン、皆さんまで、いくらなんでも……」
「一人で来るという約を違えたのはヴィレン将軍だ。こちら側とて命を賭ける立場、慎重を期することについて一線を譲る筋合いはない」
「警戒するのはわかるが……いや待て、今イヴァンと言ったか。その顔、まさかあの賞金首の――だからあの日も覆面を」
はっとヴィオレーヌが両手で口を押さえた。イヴァンは別段咎めるでもなく、ヴィレンに流し目を送った。
「言われてみれば、名乗る機会がなかったかも知れないな。どちらにせよ、犯罪者だから協調できぬなどと綺麗事を口にできる立場ではないだろう？　セーニアにとってはジヴーの民もルクスプテロンを支援する犯罪者扱いだ。どうにも気に食わぬというならば、協調関係を白紙に戻しても構わんが」

涼しげなイヴァンとむっとしたヴィレンの視線が激しく衝突する。スザクは火花を散らす二人を見比べながら、禿げ上がった頭を労わるように撫でた。

「いや、いやいや、各々方、ヴィレン殿に無理に同席を願い出たのは儂の方でな。その、あまり責めないでやってくれるかの、儂としても、その、ちと肩身が狭いわい」

「言いだしっぺがどうだろうと関係ない、面識のない者をいきなり引き合わされ、あまつさえ信用しろと言われ、おまえたちは言いなりになるのか。アルマンド・ゼフレルの仲間でなかったら、果たしてヴィレン将軍閣下は我々を信用したのかな。もしそうならば、逆にそんな間抜けと組むのはこちらから願い下げだが」

「なんと、先ほどから下手に出ていれば！　いくらなんでも無礼に過ぎる――」

「――ヴィレン殿、構わぬ」

語気を強めたヴィレンを、スザクがはっきりした口調で制した。

「いや、ですがしかし――」

ヴィレンの抗弁を無視し、スザクがイヴァンに目を細めた。

「――お若いの、言い分はごもっともじゃ。そうさな……証とは少し違うやも知れぬが、儂の娘婿が先の戦いで戦死しておる」

淡々としたスザクの物言いに、イヴァンとアミナが束の間顔を見合わせた。

スザクが己可愛さに国を売った内通者だとするならば、何を置いてもまずはその身や家族の保全を図るはずだ。事実上最高機関である＞賢律院（ルーツ）＜に所属しているのであれば、ジヴーにおいては相当な影響力を持っている。敵と通じていれば作戦もある程度知らされているはずだから、身内を危険から遠ざけるくらいのことは出来ただろう。

折りが合わずに見殺しにした可能性も残されているが、そこまでひねた見方をしていては協力関係が組めるはずもない。イヴァンはようやく入室を許可し、腕を組んで深めに椅子に腰掛けた。

カーテンの締め切られた部屋の中、照明の明るさが窄んでいった。室内は蒸すように暑かったため、
「イヴァン、結界を張り終えました。これを解かぬ限り、この部屋で発される音が外に漏れ出る心配はありません」
「よし、異変を感じたら直ぐに伝えてくれ」
「はい、わかっております」
ヴィオレーヌは結界を維持するべく手を組みながらイヴァンに応じた。

「話し合いの前に、まずはゼフレル殿のお悔やみを申し上げる、レオーネ、殿」
レオーネの部分を殊更強調し、頭を下げたスザクにピエールが頭を掻いた。モーレという偽名を使っていたことに思い至ったようだ。
「あーっと、あん時は、そのさ」
しどろもどろのピエールに、スザクがにたりと笑った。
「責める気はない、組織人たる立場を考えれば当然のことと受け止めておるでな」

そんな二人のやり取りを視界の端に捉えながら、シュイが斜め前方に座ったヴィレンに話しかけた。
「ヴィレン将軍、本題に入る前に内通者の調査についてどうなっているかを確認してもいいか」
ヴィレンは厳しい表情を崩さずにシュイの正面の椅子に座った。未だイヴァンの不遜な態度への憤りを払拭し切れていないようだった。
「そちらについては、スザク殿の力も借りて軍や＞賢律院（ルーツ）＜で目ぼしい者をピックアップしつつある。ただ、候補を絞りきるまでには今少し時間がかかるだろう。更迭までに間に合うかは、微妙なとこ

ろだ」

その隣の空き椅子を引きながらスザクが言葉を続けた。

「儂らもセーニアへの対抗策は昼夜を問わず議論したのだが、如何せん今の兵数で実行するには無理があってのう。情けない話ではあるが、どうも我が軍には儂も含めて戦術の才に欠けた者が多かったようじゃ。良い考えをお持ちであれば是非お聞かせ願いたく、こうして参った次第。そなたらの目にはただの爺に映ろうが、これでもこの国ではそこそこ顔が利くでな、少しは手伝えることもあるだろうて」

シュイはちらりとアミナと視線を交わし、彼女がうなずくのを見て、佇まいを正した。自然と、他の者たちの表情も引き締まった。

「――予め断っておくが、俺の案とて綱渡りになるのは確実だ。無策で挑むよりは幾許か可能性が上がる、その程度に考えて欲しい」

無論、とヴィレンが短く答えた。彼らとて藁にも縋る思いで、言えばシュイの策など藁程度にしか考えていない可能性もあるのだ。

今現在セーニア軍の兵数は四万弱。対するジヴー軍は補充兵を合わせて一万三千弱。開戦当初は二万以上いたはずのジヴー軍も、敗戦と制圧とでここまで勢力を縮小してしまっている。

これだけ兵力差が圧倒的だと二千や三千の数の違いなど大した問題ではない。既に正攻法では太刀打ちできぬと結論が出ているのだ。しかも敵の総司令は武名高きビシャ・リーヴルモア。彼を消せれば――否、彼一人くらいでは足りない。彼の側近にも将軍クラスの者たちがいるはずだ。指揮を執り得る人物の乗る砂船を、一網打尽にするような方策を取らねば容易には崩れない。そして、肝心なことであるが、指揮系統を潰したとて、周りの兵たちが戦意を失わなければ敗北は必至。大規模な衝突を避けるためには何かしらはったりを利かせて心理戦に持ち込む必要がある。

考えた末にシュイは、少なくとも大勢の兵士たちに敗北を予感さ

せるようなデモンストレーションを行う必要があると確信した。それには、視覚的に訴える超長距離からの派手な攻撃魔法か召喚魔法。あるいはそれに比肩し得る何かしらの攻撃方法が望ましい。

ただ、セーニア軍は大所帯にして精鋭揃い。敵側にもヴィオレーヌのような対魔法防御の使い手が複数名いると考えて動くべきだ。レイヴの言葉を信じるならば宮廷魔術師たちは国に残っているということだが、たとえ彼らに並ぶ使い手がいなくともある程度の実力を持った数十人の魔法使いがいれば、強固な合成結界を張ることは可能。ニルファナやエミドとて、単発でそれを撃ち破るのは困難窮まるだろう。もっとも、それほどの攻撃魔法の使い手はジヴー軍にも、仲間の中にもいないのだが。

どちらにしても、中途半端な距離で膨大な魔力を駆使すれば感知魔法で気取られる恐れがある。初撃を防がれるなり、警戒されるなりすれば、今度は危険を察知した指揮官たちに船を降りられてしまう可能性が出てくる。つまり、仕掛けられる機会は初撃のみ。八方塞がりのようにも思われる。

だがもしも、結界を張る間もなく、迅速に指揮官たちが乗っているだろう砂船の群れを全滅に追い込む方法があれば――

――そうだ、誰かしら負わねばならない責ならば。

自分にとっては、名も知らぬ万人の侮蔑よりもアミナ一人の侮蔑の方が堪える。シュイは意を決したように俯き気味の顔を上げた。

「では、ヴィレン将軍。今現在ジヴー軍に所属している魔法使いの総数を大体でいい、教えて頂きたい」

戦術を駆使するに当たっては、まず敵味方の戦力を把握することが肝要。ヴィレンは腕を組み、天井を仰いだ。

「――魔法使い、か。およその数はわかるが……スザク殿は魔法師団を率いておいでしたね。詳しい人数をご存じでしょうか」

「ふむ、新兵も合わせてよいかの？」

「構わない」
「――それなら、一週間前に撤退を完了した時の点呼で三百前後だったと認識しておる。誤差五人以内なのは保証するぞい」
「三百か、……そこから更に、攻撃、付与魔法の使い手に絞ると？」
「んーむぅ、正確な数字までは戻らないと何とも言えぬが、２００強といったところじゃないかの。内訳に触れると、付与に関しては二桁にも届かぬはずじゃ。一般的な傾向としても＞結合（ユニット）＜は不得手としている者が多いからの」
シュイは口元を押さえたまま視線を落とした。予想よりも少ない数だったが、そういった状況も有り得るだろうと心の準備はしていた。
――やはり、非戦闘員の協力は不可欠か。ならば――いや、ここは鉱山の町、必ずあるはず。
シュイはぶつぶつと呟きつつも、懸案を微修正していく。
「じゃあもうひとつ、この町に銅鉱石の蓄えはあるか。直ぐに加工出来るような銅塊や銅板が大量にあるならそれに越したことはないんだけど」
「……銅鉱石？」
魔法使いの人数確認の後に鉱石の有無。果たして、ヴィレンとスザクは戸惑いを隠せぬ様子でお互いの顔を見合わせた。シュイの意図したいことが読めぬようだった。
「それはまぁ、腐るほどあるはずだ、ここのところ北との交易が頓挫してしまっているし」
ここでいう北とはルクスプテロンのことだろう。シュイも戦時中に輸出する余裕はないだろうと当たりをつけていた。一段階目はクリアといったところだ。ここまではおおよそ予定通り。
もしかすれば、次の言葉を口にすることで千を超える兵士たちを殺めることになるかも知れない。だが、このまま敗戦ということに

なればそれに倍する者たちが犠牲になるだろう。
シュイはゆっくりと間を置き、続いては勢いよく口火を切った。
「なら、保管されているそれを全て使わせて欲しいんだが。もちろん、諸々の費用負担はそちら持ちで」
ヴィレンとスザク、二人の呼吸が止まった。周りからもちらほらと息を呑む音が聞こえた。
「……ぜ、全部だって？」
声を裏返すヴィレンに、シュイは申し訳なさそうにしながらもしっかりと二度うなずいてみせた。ここで弱気を見せれば突っ撥ねられる可能性が高くなることを知っていた。
「実は、それでも足りるかどうか怪しいくらいなんだけど、国の存亡すら危ぶまれている時にそれくらいの出費はどうってことないよな。最悪、民家にある家財や軍で武器に使われているものも溶かしてしまえば何とか必要量には届くんじゃないかと――」
「――い、いや、ちょっと！　ちょっと、待ってくれ」
会話をずいずいと進めようとするシュイに、ヴィレンが慌てて手で差し止めた。シュイがようやく息を継いだのを見て、ヴィレンは安堵したように息を吐き出した。
「それは私の一存だけではなんとも――民の資産を勝手に持ち出すわけにはいかないし、法で対応しきれるかどうかも。……そもそも、そんなにたくさん何に使うというんだ、武器でも作るつもりかい」
訊ねる言を口にしながらも、ヴィレンはそんなはずがないことを薄々ではあるがわかっていた。銅が鉄に比べて強度に劣り、しかも質量があることは、武技に覚えのある者ならば周知の事実だ。名のある傭兵がそれくらいのことを知らないとは思えない。
銅が鉄に比べて優れている点としては低温で加工できることと劣化しにくく錆びにくいことだが、短期決戦でそんなことを気にする必要はない。強力な武器を作るのならば、初めから鉄鉱石や玉鋼、もしくは希少鉱石を所望するのが普通だ。

だが、驚くべきことにシュイはヴィレンの言葉を肯定した。
「武器か、そうだな。用途で評すならその表現も正しいかも」
「……大量に必要ということは、もしや新しく砂船でも作るのか？　銅は重量があるから乗り物の材料には適さぬと思うが」
「少し惜しい、銅で砂船を作るわけじゃなくて作った物を砂船に載せたいんだ」
「搭載するということかい？　いや、しかしだね、そんな大がかりな物を載せれば船足が遅くなるはずだし……」
突拍子もない申し出にすっかり恐縮してしまったヴィレンを尻目に、スザクがシュイに問いかけた。
「それがまこと勝利に結びつく助けとなるならば検討もやぶさかではないがのう、……一体、何を作る気なんじゃ？」

胡散臭さを感じ始めたのか、ヴィレンとスザクの視線は疑わしげなものに変わりつつあった。戦にそれほど縁のない国からすれば、傭兵に良いイメージを持っているとは考えにくい。そして、シュイもそれくらいの反応は覚悟していたのだろう。別段気にした様子は見受けられなかった。
シュイは黙って立ち上がり、部屋の隅に立てかけられていた大きなロール紙を手に戻ってきた。
「それは？　……っと」
「ちょっと失礼」
シュイはヴィレンとスザクの目の前、長机を繋ぎ合せた大テーブルに紙を一気に押し広げた。巻かれていた紙の先端がイヴァンの手にぶつかる寸前で止まり、少し戻りかけたところでイヴァンが手早く端を押さえた。
「……この近辺の地図のようだが」
十秒ほどして、ヴィレンがそう呟いた。オルドレンとルトラバーグの名が記されているのに気づいたのだ。
「むむぅ、随分と精巧な作りだのう。我が軍でも採用したいくらい

じゃ」
「ルクセンの測量士が作成した地図だ」
イヴァンがぽつりと呟いた。
「ほぅ、それは凄い、大した技術を持っているのだな」
素直に賞賛したヴィレンに一瞬イヴァンの目が見開かれたが、直ぐに動揺を吹き消した。とはいえ、心なしか表情が柔らかくなっていることから、ヴィレンの器が決して小さくはないことを認めたようだ。
一方で、シュイは広げた地図に長めの定規を乗せ、ルトラバーグとオルドレンの間を線で結び、その中間点にバツ印を二つつけた。
「――これから銅鉱石の用途と、セーニア軍の動向予測、この策の肝となるジヴー軍の連携を説明する。あくまで素人考えの域を出ないから、修正すべき点があったら是非とも指摘して欲しい。盲点は自分では存外気づき難いものだからね」

説明が始まってから二時間。未だ空は闇に覆われ、光の片鱗も見られなかった。外で鳥の囀りが少しずつ聞こえ始める一方で、消音結界を施された大部屋内では沈黙が鎮座していた。
周りからの質問を交えながらシュイの説明が一通り終わると、一同は貶すでもなく、褒め称えるでもなく、真一文字に口を結んでいた。既に朝と言って良い時間帯だが、眠そうな顔をしている者は見受けられなかった。果たしてそのような無茶を本当にやり通すことが出来るのか、頭の中で真剣にシュミレートしているようだ。
ややあって、イヴァンがテーブルに向いていた眼差しをシュイに移した。
「――ジヴーが鉱物資源の豊富な国だということを念頭に置けば、そういった突飛な発想もまかり通るか。内的葛藤だけでなく、気の進まぬ理由がわかった。切羽詰まった状況でなければ、到底受け入れられるものではないな」

イヴァンの言は実に的を射ていた。かかる費用からしてとても個人レベルの蓄財で負担できるものではなく、財政に干渉できるくらいの有力者の協力を取り付けねば妄想で終わる、そんな思い付き。優勢な側でこんなことをやろうと言い出したら確実に戦犯扱いされるだろう。

「戦続きで出費もかさんでいるはずだし今更これくらいの拠出はどうってことないだろうって読んだんだけれど、それでも将軍と面識がなければ諦めざるを得なかったね」

初めにイヴァンが指摘したように、アルマンドとの接点がなければヴィレンらが協力者とは成り得なかっただろう。ヴィレンの鋭い視線が地図に加えられた線を今一度ひと舐めし、それからゆっくりシュイへと向いた。

「私の目から判断しても理論上であれば、策略として成立しているように思われる。いかにして敵の懐に潜り込むのかが一番の難問だが。それから、一般的にもそれは銅で作るものではないはずだ。その点は解決できそうなのか？」

「ご指摘通り、鉄より脆いから強度面では不安がある。文献にもそう記載されていたしね。ただ、形を整えること自体に問題はない。鉄火場にも一昨日足を運んで何人かの職人に確認してある。砂漠でやる分には問題ないだろうってさ。もちろん、敵船に接触されようものなら一巻の終わり、そうはいっても船ほどの質量にぶつけられたら鉄でももたないだろうけど。とにかく、この作戦では実行部隊はもとより、支援部隊の方にも一糸乱れぬ動きが要求される。さっき説明した銅の特性がこの作戦の要だから、ここは譲れない。同量の金か銀を用意できるっていうなら、話は別だけど」

「無理無理」

「無理だな」

「無理だろ」

「無理じゃ」

一同の心の声が重なった。シュイは微かに肩を落とした。

「と、なれば……他の船を犠牲にしてでもその一隻ないし数隻を辿りつかせるしかないわけか。場合によっては全部が全部スクラップになるかもな」

「やめてくれ、縁起でもない」

アミナの軽い物言いにヴィレンが唇を尖らせた。砂船が高価なのは容易に想像がつくことだし、交易に使う船をも失ったら上手くセーニアを退けたとして国が直ぐに立ち行かなくなるだろう。こと金銭感覚に関しては、大国とそうでない国とでは少なくとも一桁は違うはずだ。

とはいえ、先のない未来を案じている余裕はジヴーには残されていない。場合によってはアミナの言うように、スクラップ覚悟の体当たりでも道を抉じ開けねばならないのだ。

「流石に、全船が潰れるとまずいんだ。次があるぞ、と思わせなくちゃ相手を脅せないからさ」

「ラードックに足の速い船を提供できればあるいは、といったところか」

「あれ、ルクセンの船は使えないのか？」

シュイの落とした疑問に、イヴァンは頭を掻きながら応じた。

「馬鹿を言うな、先の撤退戦ですら針鼠にされたんだぞ、あの船でそのまま立ち向かうのは誰が考えたって自殺行為だ。大体、上手くいったとして船が使い物にならなくなるのは確定事項、船員たちやラードックが首を縦に振るわけがないだろう」

「あー、それもそうだな」

「ま、船は捨てる方向だよな、補修とか激しく無理だろ。タイミングもかなりシビアになりそうだから下手すると自分たちも巻き添えになっちまう、撤退の合図もちゃんと決めておく必要があるぜ」

存外乗り気なイヴァンとピエールに、シュイは逆に不安を覚えた。

「あ、あのさ、立案者がこんな弱気なことを口にするのもなんだけれど、本当にこんなことをやれるのかは半信半疑なんだ。無理だと思うのなら、遠慮なくそう言って欲しいんだけど」

シュイは期待とも不安とも付かぬ視線をヴィレンたちに投げかけた。ヴィレンがスザク老を見下ろすと、スザクは小さくうなずいてみせた。

「――反論はなし、だな。一見すると馬鹿にしか考えつかぬ作戦だ。それだけに、敵も狙いには気づきにくかろう。私がセーニア軍側についていたとして、愚かな玉砕としか捉えぬやも知れぬ」

「……それは、褒め言葉と受け取っていいのかな」

シュイは複雑そうな表情を、両手で頬杖をついたアミナに向けた。

「間違っても良策とは呼びたくないが、劣悪な戦力で戦況を引っくり返すにはこれくらいぶっ飛んだ策を採用するしかなかろう」

「劣悪とは、中々に手厳しいお言葉だな」

歯に衣着せぬアミナに、ヴィレンが苦笑いした。

「でもよ、敵が先に膨れ上がった魔力を察知したらどうすんだ？　あ、違うか。だからそれだけの量が必要になるってことだな」

勝手に自己解決したピエールに、シュイが地図に引かれた線を囲む、複数の丸印を示した。

「どれほどの実力者でも、感知魔法の索敵範囲が１ｋｍを超えることはまずない。敵がどういう陣形を組むかで多少の変動はするけれど、超長距離での魔力の揺らぎとなれば看破される恐れはほとんどないはずだ」

「方向性はこれでいいとして、念には念を入れて一度試験的に短い距離で試した方がよさそうだ。熱で溶け落ちないかを確認するのと、地面に拡散してしまわないかが気になる」

「そこは、メッキを施すなりして減衰せぬよう工夫するしかあるまいの」

「安全面を考慮しないなら純銅を使うのが一番なんだけど、そこは柔軟に対応する必要がありそうだ」

各々が持ち寄った意見を、アミナが白紙に手早く羅列していく。

そのくせ、字は非常に流麗だ。感心したように眺めるシュイにアミナは顔を起こし、今度は肘で覆い隠すようにしながら書き始めた。
「な、なんで隠すんですか」
「やかましい、そうやってまじまじと見られれば誰だって恥ずかしくもなろう」
「いいじゃないですか、減るもんじゃないし。綺麗な字なんですから見惚れたって」
肘で小突き合う二人を視界に収め、ピエールが『んん』と咳払いをした。
「おいおい二人共、じゃれ合うのはいつだって出来るだろ？　折角の緊張感が台無しだぜ」
「ああ、すまない」
――おまえだけには、言われたくない。
シュイのそんな心の声が聞こえるはずもなく、ピエールはシュイの素早い謝罪に満足そうだった。
「この敗色濃厚な状況もカモフラージュとしては十分だな。内部工作を仕掛けてきたということは、セーニアも直ぐ攻めてくることはしないだろう。支援物資を待っているのか援軍を待っているのかはわからないが、ぎりぎり準備する時間は残されている」
「どうやら、話は纏まったようだな。……まだまだ詰めは必要になるだろうが、成功時の絶大な効果を考えるとその提案に乗らせてもらう他なさそうだ。後に残る問題は、内通者か工作員か、こちら側の動きが筒抜けのままではどうしようもない」
「その両方の可能性もあるぜ」
ヴィレンの言にピエールが口を挟む。
「うむ、この話がセーニア側に漏れたら妨害する方法など腐るほどあるからな。いかにして鼠を見つけ出すか、最悪の場合どうやって隠し通すか。複数名潜伏している可能性も視野に入れ、ここからはより慎重に行動せねばなるまい。それから、我が軍の戦意の問題もある。敗戦続きで地に落ちている状態だし――」

ヴィレンがそこまで言ったところで、ふとシュイはイヴァンに流し目を送った。イヴァンは一瞬きょとんとしたが、少しするとそういうことかと肩をすくめてみせた。

「――最終決戦ならば、士気高揚のための演説くらいはするだろうな」

「ん？　あぁ、もちろんそういった場は用意するつもりだ。もし私の更迭を回避できたらの話、だが」

「――だ、そうだ。シュイ、わかっているとは思うが、彼が軍を指揮出来ねばこの作戦も成り立たないぞ」

「わかってるさ、まずは鼠探しだな。最低限、責任論を広めたやつだけでも捕らえられればヴィレン将軍の問題は解決できる」

「ふむ、早速で済まぬが一点、修正案を提示する」

立ち上がり、手を挙げたアミナに一同が注視する。彼女は視線を意識した様子もなく形の良い胸を張った。その揺れ具合に、スザクとピエールの鼻の下が心なしか伸びた気がした。自分の鼻の方は、鏡がないので確認しようがなかった。

「大規模な物を作っていることが知れたら流石に見破られないとも限らぬ。物が物であるし、大きな工場でやるよりは町の各所にある鉄工所で分担してやった方が良いと思うのだが」

シュイたちがお互いの顔を見比べた。確認するまでもない、異論なしの表情だ。

「決戦までに組み立てられれば問題ないし周りの者たちに勘繰られる可能性も減りそうだ。それでいこう」

「ほっほっほっ、何やら開戦以来初めて、胸が躍っている気がするのう」

「くれぐれも、ご老体で無理はなさらぬように頼みますよ。戦後の復興にはスザク殿の助力が不可欠です」

なけなしの力こぶを作って見せるスザクにヴィレンが溜息交じり

に応じた。
「ふむ、これまた開戦以来初めて、そなたの口から戦後という言葉を耳にした気がするの」
「そ、そうでしたか？」
ヴィレンが少し照れ臭そうに耳を掻いた。弱さを見せずとも敗北の意識は彼らの心の深層にも巣くっていたのだろう。それだけに、シュイは皆が自分の施策を前向きに捉えてくれたことを嬉しく思っていたし心強くも感じた。
「かつてない国難、若人が命を懸けるならば儂らとて安穏としてはおれぬな。全身全霊を以って事に当たろうぞ。……おぉ、そうじゃそうじゃ、魔法の心得のある者らを集めるタイミングは如何する？」
「ヴィレン将軍の更迭が見送られた時点からで宜しいかと存じます。それでしたら軍の方針が変わったとしてもさほど不自然には感じないでしょうし」
結界の維持に終始していたヴィオレーヌが、控えめな声で答えた。
「三人寄らば文殊の知恵、か」
無駄が削ぎ落とされ、新たな発想が付加されていく己の策に、シュイが感慨深げに息を継いだ。
「それをいうならば、案ずるより産むが易し、であろう？」
そうと言葉を返したアミナの微笑を見止め、シュイは微笑を返した。

新年を間近に控えた１５７０年１２月２８日。この日、反攻への道筋は示された。斜面を転がり始めたそれは雪玉のごとく大きさを増し、少しずつ加速していった。向かう先にいるのがセーニア軍か、はたまたジヴー軍なのか、わからぬままに。

～紲雷　ｔｈｕｎｄｅｒ　ｏｆ　ｂｏｎｄｓ８～

――そろそろ、この景色も見納めだな。

上座に座っていたビシャ・リーヴルモアはグラスに浮かぶ氷を揺らしながら窓の外に広がる夜景を目にし、感慨深げに呟いた。

セーニアの将校たちは豪華客船のように改装した砂船で晩餐に興じていた。夜の静寂に溶けていくのは戦勝祈願の竪琴の音だ。待ちに待った援助物資が届いたことで、オルドレンに侵攻する日が三日後と正式に決められたのがつい四、五時間前のことだった。最後の決戦とあって敵の激しい抵抗が見込まれるが、それを頭に置いても負ける要素は見当たらない。

およそ三週間ぶりに届けられた支援物資の中には、貴族が好む嗜好品も含まれていた。深海に住まう亀、ギャラスの卵を瓶詰めにしたものやセーニア名産の林檎酒など。久方振りに食卓に並んだ高級食材に将校たちは満足そうな表情を浮かべていた。酒に関しては大量に届いているので、余すことなく今夜中に消化するそうだ。今頃は末端の兵士たちまで振舞われているだろう。

「……くぅぅー、この味が堪らん。やはり故郷の味とは掛け替えのないものよ、早く戦を片付けて家に帰りたいものだわい」

齢五十に届かぬくらいの男がグラスの中の氷を揺らしながら何度となくうなずいていた。名をネルガー・シラブスといい、ビシャとは同門、つまりは同じ師を仰いだ間柄だ。軍人としては平均的な身長で１８０前後というところだが、木の幹を思わせるがっしりとした体付き。体重は１００ｋｇを悠に超えている。

ネルガーは剣よりも盾の扱いに長けるという異色の人材だ。そのせいもあって出世街道ではビシャに一歩譲っていたが、将ともなると上には騎士総隊長くらいしかない。その地位とナイトマスター称号を与えられることを心待ちにしている内に、気がつけばネルガー

が隣の席にいた、というわけである。

先ほどから彼が口にしているリンゴ酒はセーニア北方の一般家庭でも作られている習慣がある。何か飲みやすい酒をということで要請はしたものの、林檎酒を、と指名したわけではなかった。にも拘わらずこれが中に入っていたところをみると、送り主も戦地にいる兵たちをそれなりに気づかったのだろう。

「かぁー！　五臓六腑に滲み渡るとはまさにこのこと。今宵の酒は本当に美味いわい」

「東西南北どこも砂、砂、砂、ですから、喉も乾きますよねぇ。わたくしなどは、ここに到着して三日も経たぬうちに国に帰りたくなりましたよ。土人（どじん）たちも、よくもまぁ畑もろくろく耕せぬような土地で生活できるものです」

三十後半くらいの七三分けの男が、そこにいる者たちの顔色を窺いながらそう言った。土人（どじん）とは主に辺境に住む者を卑下した言葉であるが、それが頻繁に使われていたのは領土を広げる侵略戦争を繰り返していた百年ほど前までで、今ではあまり使われていない。

さり気なく敵を貶めつつ自分の持つ雑学を垣間見せるという高度な言葉遊びを、ビシャはその巨躯の通りに物言わぬ壁となって聞き流した。彼にはひとつ、些細ながらも気になる事柄があった。

「勝利後の土地の割譲は、少しでも北の方を選ばねばならぬな」

「各国の世論がうるさいからな、全てを植民地化するわけにもいかぬし。戦後処理というのも面倒なものだ」

「ジヴーで目ぼしいものとしては鉱山資源、特に宝石類ですか。それを管理するのも一苦労ですね」

「ここには内地から派遣されるであろう、治安維持部隊を除いては軍の管轄ではない。――ん、リーヴルモア卿、いかがいた？」

先ほどから一切文言を口にしないビシャに、老将校がさり気なく訊ねた。

「――いや、あの小生意気な小娘の有無が我が軍の士気に影響を及ぼすとは思わなくてな」

将校たちはお互いの顔を見合わせた。少ししして、ビシャが誰を言い表しているかがわかったのだろう。ある者は肩を竦めてみせ、またある者は卑屈な笑みを浮かべた。

「あぁ、あのお嬢様。一週間ほど前に本国に発ったと聞いていますが」

「そうだ、今朝も散歩の折に愚痴っている者を何人か見かけてな。どこの部隊の者かまではわからぬがいくらなんでも緊張感が足りな過ぎる、後で徹底的にしごいてやらねばならん」

兵士たちもまさか通りがかりに将軍と居合わせるとは思わなかったのだろう。戦いの女神に見放されたなどと嘆いていた兵士たちはビシャから鉄拳制裁を見舞われる羽目になった。

「やるにしてもほどほどにな、リーヴルモア卿。大事な一戦の前に貴重な兵士たちが使い物にならなくなっては困る……っと、これは問題発言か」

いささか迂闊とも取れる発言に、ネルガーは詫びの言葉を発しながらも悪びれた様子を見せなかった。そのことを必要以上に窘めようとする者もいなかった。ネルガーが叩き上げの将校であると同時に、兵の損害を最小限に留められるよう心砕く運用をしていることから、これは単に言葉選びを間違ったと考えるべきだ。誠意を以って接している者は多少の失言くらいは見逃されるという好例だろう。

それを窘める将校が現れなかったのも、必ずしも将校らの生来的な気性が問題だというわけではなく、幾度も戦を重ねた結果として、兵士たちの生死に少しばかり鈍感になってきていることが起因していた。

「アデライード・ディアーダ、か。才気は認めるが、やつも皇族には違いない。教皇派の監視を受けていると思うと色々とやり辛いことも出てくるからな」

ふとっちょ異端審問官のディビ・ミョールが難しい顔で呟いた。
「いや、しかしですな、配下の者にも彼女のファンはかなり多いですぞ。精鋭か否かに関係なく、所詮男は男。花に群がる蜂のように、常闇のかがり火に集う魚のように、美しい女子には抗いようがなく引き寄せられるもの」
「ですな」
本能には勝てぬというネルガーの意見に何人かがしたり顔で同調する。この持ち上げ方からすると、将校たちの中にもファンは少なからずいるのかも知れない。
「ファンなどと、上役からしてそのような物言いをすることが、回り回って下々の者たちの気の緩みに直結するのではないか。軍隊にファンだのアイドルだのは必要ない、そういう戯れは王宮内のみに留めていればいいのだ」
ディビの言に、ビシャはどうかな、と首を捻った。士気高揚の効果が見込めるならば、利用することもやぶさかではない。もちろん、軍律至上主義者とも揶揄される彼の頭が固いのは今に始まったことでもないし、愛妻家という顔を持つ彼からすれば別段彼女を特別視する理由もないのだろう。
けれども、今後の定まらぬ政局を考えると、彼女の求心力は支持率への起爆剤としてなかなか侮れぬものがある。国の中央に座する大臣たちの現場への理解が足りぬように、軍人たる自分たちもある程度政(まつりごと)に理解を示さねば、美味しいところだけを政治家たちに持っていかれる現状は一行に改善されないのだ。
「そうは言ってもミョール殿。王宮でも巷でも、ディアーダ家のご令嬢のことは教皇様より余程話題に上っている。我々が権力を握った暁には、彼女を懐に抱きこんだ方が民たちに対しての心象が良いと思うぞ」
狐目が印象深いのっぽの軍師、ロッグ・ケトゥレフが控えめに異論を唱えた。
セーニア教皇アダマンティスは側近たちに有能な者が多かった故

に低く見られがちであったが、決して凡夫ではなかった。若かりし頃に彼の綴った政治評論などは各国で高い評価を得ているし、容姿も十人並みよりは余程よく、威厳ある文学者といった落ち着きある佇まいだ。人格的にも欠点らしい欠点はないので、ビシャから見ても上の下くらいの人物ではある。

とはいえ、コンラッドの名声や人望と比べるとどうしても見劣りしてしまう、というのが彼存命時の共通認識だ。落ち目になりつつあった教皇の権限を再び回復するための懐刀として見出された男が、よもや教皇以上の求心力を集めるという皮肉な結果に終わるなどとは誰が予想しただろうか。

妹を妻に与えるなどの表向きの体裁がどうあれ、密かに教皇がナイト・マスターを疎んじているという噂はあった。それを聞き齧っている者は軍内部にも少なからずいる。

アデライードと教皇は姪と叔父の間柄であるが、アデライードが軍属になったこともあってあまり接近する機会はない。お互いの領域には干渉しないという姿勢を崩さぬところからすると、不仲ではないようだが、肉親の情がそれほど濃いというわけでもなさそうだ。

ディビは太い首を一周させてから鳥の腿にかぶりついた。

「そう簡単に仰られましても、……モグモグ……あれは乗りこなせるようなじゃじゃ馬ではありませんよ。今ここにいる者たちでも、……ゴクン……彼女に確実に勝てそうなのはリーヴルモア殿とリブライ殿くらいのものでは？」

「剣では上手であっても、床上手とは限らんぞ。こう、腰を振ってだな」

「またまた、ご老公はそのようなことを……」

しゃかしゃかと、傍らで横方向へのスクワットを始めた老将軍に、また始まったか、と将校たちが苦笑を交わし合った。

だが、何人かの将校がビシャの目が笑っていないことに気づくと、談笑の雰囲気は波に攫われていった。ざわめきが落ち着いたのを見

計らい、ビシャが再び口火を切った。
「＞魔遺物（ヴァイーラ）＜探索の方は、はかどっておらぬと聞いているが」
その言に、末席に座っていた若い将校が立ち上がった。
「……それぱかりは仕方ない部分もあるかと。諸勢力に動きを悟られぬよう先遣は小規模なものに留めましたし、敵も予想以上の戦力を抱えていたようですから」
「そうか、貴公が今回の探索の責任者だったな」
「……ええ、はいそうです」
ビシャはグラスをテーブルに置き、目を閉じる。
「言い訳が達者なだけの兵ならば我が軍にはいらぬ。家族共々路頭に迷う様なことになりたくなければ、とにかく結果を出せと探索兵たちに伝えろ。手段は一切問わぬ」
「……御意」
恐れ入ったというように、若い将校は手を胸に当て、深々と頭を下げてから着座した。
「忌まわしきは異教徒共よ、セーニアに断りもなく古き世の技術を占有するなどとは神をも恐れぬ行為だ。そういった危険極まりない物は理念と正義を有する国が管理するべきだ」
「つまりは、我々のような、というわけですか」
「なんだ、随分と棘のある言い方だな」
テーブルの向かいから投げ込まれた言葉の毒の香に、自然とディビの鼻息が荒くなった。気障（キザ）という言葉を体現したような金髪の若年将校が、ナプキンで口元を拭っていた。
双方共に軍人然とした角刈りだが、ふとましいディビと比べて若い男の方は貴族特有の上品さが損なわれていない。ガレット・リブライといえば王宮の婦女子の間でも何かと噂に上っている美男子だ。これで青臭い理想主義者でなければ、次世代のセーニア軍を背負う人物足り得るとの評価を戴いている。
「リブライ卿、少し口を慎め」
「そうですね、リーヴルモア卿がそう仰るのであれば」

「それは、儂には敬意を払えんと言っているのと同じではないか！」
「年長者を立てるのは王城で嫌というほどやっていますから、せめて軍にいる時くらいは素の自分でいさせてくださると助かります。私は自分以上の強者にしか敬意を払いたくありません。階級も同じ大佐ですしね。もちろん、あなたが私以上の強者であればそれ相応の対応を取らせていただきますが」
「……ぐ、ぬぬ」

これでは暗に『おまえは俺より格下だ』と言われたも同然だ。ディビも審問官としての立場があるだけに上から目線で接されることには慣れていないだろう。口惜しそうに歯軋りするのを横目に、ビシャは大きく溜息をついた。ガレットがもう少し慎重な性格になってくれれば一軍を任せられるし、自分ももう少し楽ができるのに、と。発した言動に対して相手の心の動きを洞察することが出来ねば、まだまだ将の器ではない。

強国の軍を任される将校たちは敵軍以上に部下の造反、心変わりを怖れる。軍を統括する立場にある者にはそれなりの信望が必要になるが、敵国と相対する場合には高慢だと思われるくらいの威圧的な態度を取らねばならぬ時もある。その使い分けが上手く出来ぬ者は、遅かれ早かれ内部淘汰される。

かといって、そういった心根は口で説明してもそうそう上手くは伝わらぬものだ。現場で目を皿のようにして観察し続け、ことによっては痛い目を見ねばわからぬ場合ある。不用意に鍋に触れて火傷を負った子供が自然と同じ過ちを繰り返さなくなるように、人は痛みに対する教訓を忘れないものだ。如何に堪えられるぎりぎりの痛みを負わせて人を育てるか。ビシャは、人材育成とはそれに尽きるとも思うのだった。

「先ほどの話ですけれど、そもそも＞魔遺物（ヴァイーラ）＜とはなんなのですか？」

そう考えていた矢先のガレットのこの発言に、ビシャの顔が苦虫を噛み潰したようになった。以前の会議で説明したはずだったからだ。空席も居眠りしている者もいなかったように見受けられたが、背筋は伸ばしていても心は上の空であったらしい。

ガレットだけでなく、ちらちらと自分と視線を合わせぬ者が出ているところを見ると、会議をまともに聞いていなかったのは一人だけ、というわけでもないようだ。

「今一度しか、言わぬぞ」

「そ、そうだぞ、リブライ殿」

次なる台詞を言った者の、しかし自信なさげな表情にビシャは眉をひそめた。十中八九、知ったかぶりだろう。とはいえ、酒も程よく回っている頃合い。あまりのんびりと議事を進行していては皆がテーブルに突っ伏し始めるかも知れない。ビシャは先ほどよりも早口で説明した。

「これといった特定のものがあるわけではない、あの男の話では古代人の使っていた不可思議な道具をひっくるめてそう呼んでいるそうだ。万病を治す霊薬、はたまた如何なる攻撃魔法をも上回る破壊力を持つ魔石とかな」

「ほぅ！　それは素晴らしいですね、魔石には一定量を超える魔力供給は困難だと聞いておりましたが」

全て前回に説明した内容だがな、とビシャは心の中で言い返した。

「興味はそそられないでもないですが、それ以前に情報提供者を信用してよいのですかな。元々あの男もルクセン教徒のようですし、何のために我々にそのようなことを伝えてきたのかも謎のままですぞ」

将校の一人が不安げに眉根を寄せた。

「完全に信用できるはずもないが、一応それらしい物は持ち出してきたじゃないか」

ビシャは男が持ち出してきたという彼方を映し出す千里眼を思い浮かべながらそう言った。筒型のそれは、これまでとは比較になら

ぬ倍率で遠くを望むことが出来た。遠くに望む山の木々が枝葉の輪郭まではっきりと窺えたのだ。あれほどの道具を今の時代の技術で作るのはどだい無理だろう。此度の戦に持ってきたかったのはやまやまだが、壊されたら困るということで申し出はにべもなく却下された。

「先方は我々を利用しているつもりだろうが、それはこちらとて同じことだ。その道具とやらを使う一定の目途がついたところで始末してしまえば良い。異教徒を殺めることについては神も咎めはすまいよ」

「待たれよ、彼はその、セーニア教に帰順したと聞いていたのだが」

若い将校の戸惑いの声に歯抜けの中年将校が眉を上げた。その目には無知を笑う類の嘲りが多分に含まれていた。

「帰順？　くくっ、久し振りに聞いた言葉だな。異教徒は死ぬまで異教徒と決まっておる。思惑に改善の兆しがあれ、邪悪な教えにどっぷりと浸かった魂の穢れはどうあろうと拭えぬのだよ」

「な、なんと申されるか」

「そういった連中にとっては選ばれた者に対する一生の奉仕と死こそが唯一の救いであり、安寧だ。異教徒の人権なんぞを忖度して――」

「――その辺にしておけ、初心（うぶ）な者には刺激が強過ぎる話だ」

ビシャが口を挟むと、中年将校は途中で止められたことが腹立たしかったのか、ぶっきらぼうに椅子に踏ん反り返った。

「その物言いからすると、リーヴルモア殿は彼と同意見なのですか」

落胆が多分に含まれる若い騎士の呟きに、ビシャは少しも態度を崩さなかった。

「何を以って同意見と言っているのかわからんな。貴公が俺を含めた他人をどう評価するかは勝手だが、人という個が群、すなわち軍になって動くには価値感の共有が必要だ、そうは思わないか」

「それはそうですが……しかし……」

少なくとも、そう思い込んでいた方が敵を御しやすいのは事実だ。仲間が躊躇いを振り棄てて人殺しをしている姿を自分だけ善人面で見ているのが果たして正しいことなのか。

ビシャは自分の良心に苛まれて身を滅ぼしてきた同輩たちを数多くみてきた。彼らの中には無茶な作戦を敢行して帰らぬ者になったり、気が触れて戦場から遠ざけられた者たちがいた。いささか皮肉なことであるが、彼らは誰より正常であったからこそ、余計にその心を痛めていた。もっとも、軍を離れたくて気が触れたフリをしていただけの者も中には混じっていただろうが。

「平気な顔をしているように見えても、我々とて心を擦り減らして国のために、民のために戦っている。国は以前に比べて豊かになったかも知れないが、まだ飢えが完全に根絶されたわけでもない」

そうならぬために、ビシャは己の言葉に酔う術を身につけた。それが、たとえ上辺のものであったとしても。酒を呑み過ぎて前後不覚になる様に、己が言葉を認識させて善悪不覚になる、一種の自己暗示である。

自分が悪いことをしているなどと葛藤しながら敵を倒すのは自分自身を追い詰め、ストレスを溜める行為に他ならない。自らが手を血に染めているのは事実だが、それを公然と非難できる者は、少なくともセーニアにはいないという確信がビシャにはあった。

「時には道を外れることもあろうが、騎士を志した時の思いはしかとここに在る。信念と信仰こそが我らが騎士たる証であると同時に、セーニアの民に繁栄をもたらす力なのだ」

親指で胸を指し示したビシャに、力の籠もった拍手が散乱した。

「まさに、リーヴルモア殿は論客家としてもやっていけそうですな」

「うむ、我らが国が更に広がれば、それだけ恩恵を受けられる者も多くなる。侵略されるとて悪いことばかりでもあるまいよ」

ナイトマスターが斃れて以来、セーニアの多くの軍人たちは新た

な将を求めていた。自分が指針を定めるよりは、ひとつの指針に迎合する方が疲れないし傷も浅くて済むからだ。それは、いつか流れが逆巻くその瞬間を心の奥底で怖れていることの照明でもあった。潮の変わり目が来ても己の身の保全を図れるよう、彼らはおこぼれを預かる狡猾な獣となることを選んだのだ。消耗の少なさを考えれば一歩引いた形も決して悪いものではない、そうやって自分を納得させていた。そして――

「……そう、ですね」

拍手に促されるようにして、若い将校が諦めたように呟いた。大多数が少数を呑み込む瞬間。ビシャは目の前にいる将校の姿に、若かりし自分の項垂れた姿を重ね合わせていた。昔の自分と同じように、今の彼はとても納得している表情とは言い難い。が、認める発言をしたことが始まりだ。遠からぬ内に、自覚も持てないまま歯車として動き出すことになる。それでいいと思ってしまう自分が現れるのだ。これを不憫と思ってしまっては自分を憐れむことになる。ビシャは生じた負の感情を彼方へと追いやった。

「魔石の話に戻るが――恐らく概念からして違う武器なのだろう。両手で持てるくらいのそれを発動させるだけで町が消し飛んだとかいう与太話もあるそうだ」

「それは凄い、話半分にしても高威力なのは想像が付きますね。それが我が軍にも常備されるとなれば、ルクスプテロンなどおそるるに足りないのですが」

――さて、そこが一番の問題だな。

我が軍が、と一口に言ってもそこは大国の軍。部署や部隊は無数にある。ざっと挙げ連ねるだけでも本部、審問部、諜報部、輸送隊など。手に入れた道具の危機管理が難しいものであれば押し付け合いになるだろうし、安易に一所にそれを纏めるとすると、その管理者が心変わりをした時が恐ろしい。一般的な傾向として、軍人の気

が触れる割合は一般人よりも大きい。血生臭い空気に充てられればストレスが常人よりも余計にかかるからだ。

扱えぬ代物を懐に収めれば、結果として疑心暗鬼を招くだけに終わる可能性もある。そういう観点からすると、＞魔遺物（ヴァイーラ）＜は敵には渡したくないが、自分が持っていたとしてあまり有り難くないものでもあった。少なくとも、野心を秘めぬ者にとっては。

「私としては、どちらかというと万病を治す霊薬とやらに心惹かれますな」

ネルガーが赤ら顔でそう言った。大分酔いが回っているらしかった。右へ左へと危なっかしく、四角い顔を揺らしている。

「おやおや、教皇殿にでも使って差し上げる気か？」

「冗談にしては笑えぬぞぅ、自分の首を絞める趣味はない。この齢ともなると一番恐ろしいのは何か、病だ。大病を患った時のために、自分や家族用にひとつかふたつ、ストックしておきたい。……悪いかぁ！」

「はは、相当出来あがっているようですな。いや、悪くはありませんが、教皇派にはとても聞かせられぬ談義ですなあ」

心底可笑しそうな笑い声が、室内を満たしていく。ややあってそれが収まると、ビシャは指を擦り合わせながら隣に座っている議長に目礼を送り、話を進めさせた。

そうして数件の瑣末な案件を迅速に片付けたところで、召使いが果実酒を運んできた。あくまで喉を潤し、弁舌を滑らかにするためのものなので酒度は薄いが、それでも議場には束の間、弛緩した空気が漂った。

ビシャはそれを一気に煽ってから、空になったグラスを召使いが差し出したトレイに乗せる。

「――では、残りの議題に取りかかるとしよう。次が今日の本題と言っても良いのだが……リブライ卿、オルドレンを内偵している者

からの連絡が途絶えたことについて、詳しく説明してくれ」
「ああ、やっぱりその懸案、今日やるんですね」
「出兵が三日後に決まった以上、やるタイミングがもうないのだ。重要事項だけでも把握しておかねばな」
「では、先んじて＞賢律院（ルーツ）を切り崩すために放った密偵についてですが……。三日置きに連絡を入れるよう命じていたのですが、一週間ほど前から音沙汰がない状態です」
この戦争始まって以来初ともいえる悪い知らせに、束の間一同が沈黙する。
「……さては連中、勘付いたか？」
「どうでしょうな、監視がきつくて魔石を使えぬ状況に追い込まれているのやも」
「最悪の場合、敵に拘束、もしくは殺害された可能性も否定できません。拷問にも屈せぬよう一通りの訓練は受けさせておりますが、向こうも向こうで必死でしょうからね。戻ってくることは期待しない方がよいと考えます」
「まぁ、今更どうこうするには手遅れな感も否めぬな。ルトラバーグを除けば我々も正攻法で攻め入っているし、だからこそ対策も限られよう」
「油断は禁物だぞ諸君、窮鼠猫を噛むという言葉もあるし、最後くらいは他勢力の介入があってもおかしくないからな」
「それは、噛まれるくらいのことはあるかも知れぬが。痛みに堪えたその後で食べてしまえばいいだけの話では」
「現実的な話をするならば、ネズミの保持する病気は怖いですよ？」
「なんにせよ、この戦力差で負けるようなことがあれば国には戻れぬわ」

ビシャの苦言にも、多くの将校は余裕を崩さなかった。噛まれるとしてせいぜい前線の兵士たちだろう。そんな風に考えているように思われた。ただ、その余裕はネルガーら叩き上げの将校たちには

ない。一兵卒でしかなかった自分たちがそういう風に見られている時期があったかと思うと不快さも増大するというものだ。

きな臭い雰囲気に気づいたのか、何人かの貴族将校が咳払いをした。一瞬の間隙を突いて、軍師たるロッグが苦言を滑り込ませた。

「戦術を預かる者は戦場にいる誰より臆病でなければいかん。ポーカーと同じだ、相手が役なしの顔をしていようと最高の手札の可能性を考えねばならん。一度負けるとその流れは容易には止まらぬのだから、ですな、リーヴルモア卿」

「……うむ」

ビシャは相槌を打ちながらも、戦をテーブルゲームに例えた軍師に釈然としないもの、もっというと温度差を感じた。だが、その違和感が何ゆえに感じられたのかまではわからなかった。

「そういえば、兵糧と共に送られてくるはずだった後詰めは見送られたのですか？」

「そのようだな、不要と判断されても無理なき状況だ。実は、文ではヌレイフの地でフラムハートの傭兵共が不穏な動きを見せている、ともあったのでな。これ以上の兵力を国元から離すのは危険だと判断したのだろう」

「……ヌレイフ、湿原に」

軍師たるロッグの顔から血色が失われる。彼の輝かしい経歴において唯一の汚点ともいえる憎々しい地名。真っ白であるが故についた滲みはより目立つ。

ルクスプテロンの手痛い反撃に遭ったヌレイフ湿原で敵寄りの傭兵たちが動いているとなれば、セーニアとしては警戒せざるを得ない。三年前につけられた傷は未だ癒えたわけではない。国に残っている者たちも同じ心境だろう。

「ふむ、援軍が見送られた理由はわかったが、わからんのはフラムハートだな。何の目的で、どうして今頃になって動き始めたのか」

「確かに、国境付近で動かれれば嫌でも警戒せざるを得ませんけれど」
「こちらに援軍を出されたくなかったという理由ならば、一応の筋は通らないか」
「いや、部外者が今の現状を分析した場合、ジヴーの陥落は規定事項のようなものだ。今更そのような浅い考えで動くとは思えん」
ビシャが否定的な見解を示すと、何人かの将校が確かに、と追従するように頷いた。
「……背後にルクスプテロンがいるかどうかだけでも、裏は取れなかったのか？」
「今現在はな、少なくとも軍の方は動いていないようだ。残念ながら、俺にも文に書いてある以上のことはわからんのだよ、ネルガー」
ビシャが真顔のネルガーに肩をすくめつつ言葉を返した。今にも寝そうだった男がヌレイフという単語だけで完全な素面（しらふ）になるとは思えない。酔いには演技も多分に入っていたのだろう。食えぬ男だ、と下顎を撫でる。
「ふむ……いかな四大ギルドとはいえ、単独で仕掛けてくるとは考えにくいと思うが。他のギルドとの駆け引きもあるからな」
「ですが逆に、バイルワールド潰しの時と同じように他ギルドと連携を図られると……決して軽視できませんね」

――シルフィール、か。いつぞやのように日和見していてくれるならば、こちらも楽に事を運べるのだが。
ヌレイフの戦いでは、セーニア軍は楽観論に寄った途端に大損害を出した。それだけにショックは大きく、抗戦論が反戦論に裏返るのを止めることができなかった。今回の戦いも大詰めだ。同じ過ちを繰り返すことは決して許されない。将校たちもヌレイフというキーワードを聞いて酒気が薄れたようだ。良くも悪くも、あの戦いでの教訓は活きている。

「まぁよい、今は目前にある懸案を片付けねばならぬ。三日後のオルドレンへの出陣に備え、各々準備に取り掛かるがよろしかろう。本日はこれにて閉会とする、――解散！」

足並みの揃った起立。どうやら少しは気を引き締めてくれたようだ。ビシャは退室していく将校たちの表情を満足げに見送っていた。

～紲雷　ｔｈｕｎｄｅｒ　ｏｆ　ｂｏｎｄｓ９～

小雪がしんしんと降りしきるルクスプテロン南方の地。雪解け水が小川を成す山の裾野は静寂に包まれている。ふと、積雪から顔を覗かせた小さな若葉を食(は)もうとしていた親子鹿が、遥か遠方から発せられた気勢にぴくりと耳を立てた。

セーニアとルクスプテロンとの空前絶後の魔法戦により、ヌレイフの大地は湿地帯の大部分が蒸発し、一時は七割ほどが砂漠と化してしまっていた。今現在は、その場所に大きな湖が出来上がっている。当初は辛うじて残った自然豊かな湿地帯も完全に水没してしまうのではと危ぶまれていたが、不幸中の幸い、それ以上侵食されることは回避されていた。

黄金色の蛙が低空を飛ぶ羽虫を追って大きな蓮の葉をじぐざぐに飛び越えていく。その上空では、薄灰色の空で乳白色の鳥獣の番(グリフォンつがい)が、餌になりそうな動物がいないかと地表に目を凝らしている。

ややあって、前方で羽ばたいていた鳥獣が奇声を数回上げ、広げた両翼を左に傾けて方向転換した。まるで、何かから逃れるように。

鳥獣のいた位置から数キロほど離れた湖の畔(ほとり)では、列をなして拳を交互に突き出す者たちがいた。そして、やはり数名の者が列の合間を闊歩している。フラムハートの新米傭兵たちの合同演習である。

今期末フラムハートに入団した傭兵たちはおよそ三百人。そこからして他のギルドとは規模(スケール)が違う。中小ギルドのように一人一人に訓練を施すわけにもいかないので、新規の傭兵が入団した後には必ずと言って良いほど行われる恒例の行事である。

四大ギルドと言われるようになってからはそれなりの年数が経つが、最古参にして最大規模の傭兵ギルドということで入団希望者は今も引っ切り無し。今回の試験も倍率は三十倍と狭き門になった。入団希望者が多ければそれだけ競争も激化するのだが、そこから一

歩抜け出せた者は晴れてフラムハートの傭兵を名乗れる。名声を求める者にとってはその名前だけでも価値あるステータスと言える。

上級傭兵ともなるとルクスプテロン連邦から割譲されている私有地をギルドから分け与えられる。そういった事情もあって彼の国との関係は概ね良好。その一方で決して悪くなかったセーニアとの関係はここ数年で悪化の一途を辿っている。ことにヌレイフの戦い以後は、セーニア領の支部は軒並閉鎖、もしくは数名の支部員を残して休業を余儀なくされている状態だ。

ちらりちらりと左右の傭兵たちの動きをチェックしていた黒髪の少女が立ち止まった。それから、少しして拳を突き出した姿勢を維持している若者に近づき、両手で腕をぐっと押し上げた。男が上背であることもあって、やや背伸びをした格好。

「……これくらいの高さの方が、いいと思う」

「あ、ありがとう、ございます」

フォームを修正させられた男が、自分の胸ほどの背丈しかない少女にはにかみつつ礼を述べた。にわかに信じ難いことであるが現在地は人里から大分離れている。まさか地元の人間が修練に紛れ込んでいるとも思えない。とどのつまり、自分より明らかに年下に見えるこの少女も、この場で新米傭兵たちを指導している上級傭兵の一人なのだ。

腕の位置を直された男は遠ざかっていく少女を名残惜しそうに見つめた。漆器を彷彿とさせる見事な黒髪は前がアーチ状に切り揃えられ、横と後ろは耳の下程に切り揃えられている。ややボリュームが少なめだが、左側頭部には鳥を模した黒い髪留めが差し込まれていた。片翼が?ぎ取られていて不格好ではあったものの、今もなおそれを使っているところから愛着がある物なのだろうと察することが出来た。

蟲惑的な紫の瞳は釣り目でも、さりとて垂れ目というほどでもない。鼻はやや低めで小さな唇はミニトマトが入るかどうかも怪しい。

フリルのついた黒いブラウスに厚手のグレーのスパッツ。寒風吹き荒んでいることもあって首元には青いマフラーを巻いている。腰には茶色い網革のベルト。左右の腰のホルダーには、柄に焔を象った紅の紋章が彫られた短剣を二本差している。

ふと、ゆったりと歩いていた少女が顔を上げ、空の一点を睨んだ。それに気づいた男が、続いては何人かの新兵たちが彼らに釣られて空を見上げた。

突として、灰色の雲の中に巨影が映った。ややあって雲を突き破ったのは純白の鳥獣（グリフォン）。その大きさたるや、標準的な大きさの二倍はあるかのように見えた。明らかに自分たちの方目掛けて降下しているのを視界の中心に捉え、慌てて臨戦態勢を整えようとする新兵たちに、しかしその場にいる指導員たちから待ったがかかる。

段々と近づいてくる鳥獣（グリフォン）を見て、ようやく新兵たちも納得し、体の硬直を解いた。長い毛足の真っ白な鳥獣（グリフォン）は背に人らしき者を乗せていた。

建物にして三階ほどの高さにまで降りてきたところで、齢三十半ばほどの女騎手が手綱を手放して黄緑色のゴーグルを持ち上げ、軽快な身のこなしで地面に飛び降りた。しかし、そこは新雪の降り積もった柔らかい地面。騎手は雪面に足を付けた途端、一瞬にして姿を消した。

居並ぶ傭兵たちが目をぱちくりさせる中、足元から聞こえるくぐもった呻き声に黒髪の少女が溜息を吐き出した。できたてほやほやの穴に近づき、ゆっくりと手を差し伸べる。

「あー……皆の衆、鍛錬ご苦労」

「……キマらないですね、ミャン隊長」

穴から引き上げられた女はむらのある雪化粧の施された顔に照れ笑いを浮かべながら、少女の頭をくしゃっとひと撫でした。

ミャン・ハルマー。フラムハートの女傭兵にしてマスターの直属部隊、＞焔守人（フラム・ガーディアン）＜に三人いる隊長格の一角。齢八十とも最古参とも囁かれている彼女であるが、森族特有の長寿故にその肌は未だ若々しさを保ち、人族や獣族で言えば三十前半と言っても通じる容姿だ。女性にしては上背があり、やや黄みがかった肌の色をしている。ウェーブ状の髪はざっくばらんに後ろで一纏めに結ばれ、美人というよりはひょうきんな姐御といった印象。ギルド内での人望は厚く、縦にも横にも繋がりが広い。よくマスターの方針に口を出すことから、マスターの補佐をする立場であると同時にお目付け役ともみなされている。

ミャンは大きく身震いして雪を振るい落とすと、琥珀色の菱形の目を細めた。自分の肩に飛び散った雪を、少女は一瞥だにせず払い落とす。

「……お久しぶりです。訓練の視察などと、一体どういう風の吹き回しでしょうか」

「その言い草はないだろう？　不測の事態に陥っていないか気になったから様子を見にきたんだよ。それと、話は聞いてる、＞焔守人（ガーディアン）＜配属早々に訓練の統括をやらされるなんて大抜擢じゃないか」

「……いえ、こちらでは新米のようなものですから、頑張ります」

豪雪地帯で一週間ぶっ続けでの軍事演習。寒さと修練による疲労から欠伸を噛み殺す回数は目下急上昇中。抜擢どころか災難といってやりたいくらいだが、ピオラ・ディ・スターニアルにも上司の前で仕事上の不満を口にしないくらいの分別はあった。ただ、ミャンの『やらされる』という言葉に貧乏くじのニュアンスが含まれているのは疑う余地もない。

「期待しているよ。それにしてもあんた、大分まともに喋れるようになったじゃないか、感心感心」

「……誰かさんに散々発声練習、させられましたからね」

ピオラは雛（ひよこ）のように唇を尖らせながらそう言った。支部での連絡事項がある度、全て自分に丸投げしてきた上司に。

「そこんとこは逆に感謝して欲しいくらいなんだけどね、こっちはあんたの舌足らずを心配して――」
「……別に、頼んでませんから」
ぷいと横を向いたピオラを見て、ミャンは鼻の下を擦る。
「んー、素っ気ないところは相変わらずか。後は、こっちの方も相変わらずAと――」
「――胸の大きさは任務に影響しません。むしろ軽快な動きには邪魔です。……断っておきますけど、あと5mmでBですからAの上、ちゃんと日々成長してるんです」
ミャンの視線の向く先にピオラが眉をひそめつつも反論する。完全に邪魔と突っ撥ねられない辺り、胸の有無はそれなりに彼女のコンプレックスであるようだ。定格サイズに上とか下とかつけるのもいじらしさというよりは、たとえようのない悲哀を感じる。
そんな些細な感情はおくびにも出さず、ミャンはにかっと笑ってみせた。笑えば大抵のことを誤魔化せるというのが彼女の信条だということをピオラもよく知っていた。
「言うようになったじゃないか。いやはや、我が子の成長を見せつけられているようで嬉しいよ」
からかい口調のミャンにピオラが口を窄めた。
「……そういうことは結婚してから言ってくだ――つぅっ！」
唐突に響き渡った重低音に、居並ぶ傭兵たちから『……嘘』とか『まじかよ』とかいう類の声がちらほらと漏れた。目の据わったミャンから十歩ほど離れた場所に、額を押さえたピオラがいた。
「だーれーがー、行き遅れだって」
でこぴんから発せられたのは棍棒で殴ったかと錯覚するほどの衝撃音。最寄りの木の梢からは場に響き渡った震動でどさどさと雪が落ちてくる有様だ。
「……そ、そこまで言ってないです、……暴力、反対」
いくら自分が小柄とはいえ、たかだか指で小突いたくらいで大人

一人を吹っ飛ばすとは非常識に過ぎる。涙目のピオラは赤くなったおでこをそっとさすった。痛みが冷たさに馴染んだ頃合い、ゆっくりと膝を伸ばす。

「……あの、隊長に命じられた通りに訓練を続けていますが、セーニアの手の者は斥候くらいしか姿を見せません。……そちらの方は……ちょ」

ミャンがでこぴんを見舞った指先をぺろりと舐めた。ピオラとしてはいくら同性であってもそういうことはして欲しくなかったし、百歩譲ってするにしても人目の届かないところでやって欲しかった。変態。そう心の中で罵倒したことも一度や二度ではない。とはいえ、嫌がるのを面白がっている節もあるのでそれを口にして良いものか迷う所ではある。

「そうそう、そんな風に不安に思う頃だと思って忙しい中わざわざ足を運んでやったのだよ。感謝したまえ」

「……はぁ、そうですか」

「周囲の反応は今のところいい感じだよ。諜報部も近隣で広まっている噂を確認している。流石に王都近辺では動揺も少ないみたいだけど、この界隈では私たちの意味不明理解不能な行動にかなり気を揉んでいるそうだ。近いうちにルクスプテロンが反撃に転じるんじゃないか、ってね」

ヌレイフでの戦いでは前例がないほどの夥しい死傷者が出たため、セーニアの民の心には大きな爪痕が残されている。国民性に自意識過剰なところがある故に、相手方もそうだという考えには今のところ至っていないようだ。

「……ルクスプテロンには今回のことは」

「許可は取っていないけど、そこはほら、単なる演習って言ってあるから。国境付近でやることに関しては、少し実戦的な訓練をやりたいって言い訳をちゃんと用意してるし、マスターも前もって苦情のひとつやふたつは覚悟してるって言っていたから大丈夫」

「……そうですか。セーニアの方は大丈夫でしょうか、こちらの思惑を気づかれでもしたら」

「それはまずないし、気づかれたとしても特に問題はないよ。事情を一切知らん国民に自分らがこそこそ悪事を働いていました、って説明するわけにもいかないだろ？　あんな胡散臭い理由を持ち出すんだから後ろ暗いことをやってるのは確実だよ。仮にこちらの企みを全てわかっていたとして、有効な防止策がないんだ。勝手に深読みして尻尾を出してくれればしめたものさ」

ここ最近、セーニアのジヴー遠征について、フラムハート内でもセーニアがジヴーにこれほどまでに執着しているのは不可解だという意見が相次いでいた。おそらくは周辺諸国でも似たり寄ったりだろう。宣戦の理由とされたルクスプテロンへの鉱石輸出に関しても、戦争を起こさずともそれを妨害する手立てはいくらでもあったはずなのだ。

現段階での判断材料から推察するに当たり、セーニアにはジヴーを制圧しなければならない理由があるのでは、という意見が大半を占めている。その大きな手掛かりがつい先日、予期せぬ所から持ち込まれていた。

ジヴーとセーニアとの戦争は既に最終段階を迎えているが、ここにきてルクスプテロンへの支援を止めさせるためというお題目は足枷になってきている節がある。高騰を続けていたはずの鉱石類が、各地方都市の市場で大量に入荷され、一気に下落したためだ。おそらくはどこかの企業ないし国が有事に備えて溜めこんでいた物が放出された、と推察されている。その出所を探ろうとしたのだが、いくつもの代理店を経由して巧妙に隠されていた。

この出来事によって鉱石類の価格上昇に歯止めがかかり、ルクスプテロンにもジヴー以外に仕入れ先を考えるゆとりが出来た、というわけだ。今ここで兵を引き上げないとすると、セーニアが戦争を始めた理由に矛盾が生じてしまう。

そうかといって、今更戦争理由を挿げ替えれば周辺諸国の反発は免れないだろう。ジヴーの難民受け入れに尽力したフォルストローム の武神キーア。あるいは、フラムハートのマスター・アークスの親友でもあるケセルティガーノの賢王オネスト。彼らは世界的にも著名な武道派であり、義侠心に厚いことでも知られている。どちらか一方でも動けば、様子見に徹していた周辺諸国もその流れに加わる可能性が高い。それは、セーニア側が最も避けたい事態に相違ない。けれども――

「……こんな遠い場所での演習に一体どれほどの効果があるのか、正直言って半信半疑なのですが」

「はは、私もだよ」

意外な言葉にピオラが眉を上げた。

「……演習は、ミャン隊長が企画されたわけではなかったんですか」

「うんにゃ、マスター・アークスの一存……ってわけでもないか。名前は明かせないけれど、アークスと親交のある人物から持ちかけられたんだ。依頼を受けるに当たっては仲間内でそれなりに揉めたんだけど、セーニアの反応が見られるだけでもメリットはあるだろうって鶴の一声で決まった。彼としては、今後のセーニアとシルフィールの出方を占う意味でやっているんだろうね」

「……シルフィール？」

「――――っ」

訝しげに下唇に指を置いたピオラに、ミャンが慌て気味に自分の口を片手で押さえた。束の間の沈黙の後に、ピオラが口を動かす。

「……依頼者は、シルフィールの傭兵、もしくは関係者、ですか」

「あー、いやー、まー、そのー」

おたおたとしていたミャンは、表情の変わらぬピオラに諦めたように肩を落とし――

「お願い、聞かなかったことにして」

お参りでもするかのように頭を下げて手を合わせた。

「……いいですけど、私よりもここにいる皆さんにお願いした方が」
顔を上げたミャンが渇いた笑いを洩らす。他の場所でもこの調子で話を漏らされていないだろうか。ピオラは不安げに長い睫毛を揺らした。

――それにしても、一体誰が。
ピオラが頬に手を当てて思考に耽る。マスターであるアークス・ゼノワと親交のあるシルフィールの傭兵となると、それだけで大分候補が絞られてくる。兄弟子であるビリー・スタンレーか。もしくは学友であるニルファナ・ハーベルか。シルフィールのマスター、ラミエル・エスチュード。はたまた、バイルワールドの掃討で活躍したアルマンド・ゼフレルという可能性も捨て切れない。
――そういえば、ハーベルさんってあの人の――

「――ひゃんっ！」
突として腰の辺りから冷え切った手を滑りこまされ、ピオラが素っ頓狂な声を挙げた。頭の中の候補者リストが一瞬にして吹き飛んだ。目を見開いたまま首を後ろに捻ると、先ほどまで前方にいたはずのミャンが悪戯っぽく瞳を光らせていた。
「……な、なにしてるんですか」
「いや、隙だらけだったからちょいとお肌チェックをと。――あらあら、まぁまぁ、憎たらしいくらいにすべすべなお肌じゃない」
「……やっ、変なとこ触らないでくだ……んぅっ！」
脇の下辺りを指で小突かれた途端、背筋に抗いようのない電気が走り、ピオラの足が勝手に爪先立った。
「感度も良好――とっ、おやおやぁ、こんなところに瑞々しい果実がひとぉつ、ふたぁつ」
「……お、オヤジですか！　……くっ、……むっ」
ミャンが片手でピオラの細い腰を抱き締めつつ、もう片方の手を服の中で暴れさせる。独立した生き物のように蠢く手の感触に、ピ

オラが声を漏らさぬよう必死に唇を結ぶ。最初の内こそ我慢できていたようだが、指先が皮膚を往復する度に走る痛みともこそばゆさともつかぬ感覚に、段々と声を押さえられなくなってくる。

「……い、いい加減に、んっ、……はぁっ！」

「おっ、ここかなー？　ピオラちゃんのじゃ・く・て・ん」

耳元で囁かれた楽しげな声に、反してピオラが悔しげな声を漏らす。腕の中で悶えるばかりの少女に、ミャンは存分に嗜虐心を擽られているようだった。服の中で蛸足のように五指をくねらせ、ピオラの口から悲鳴とも嬌声ともつかぬ声を引き出していく。

「ひあぁっ！？」

舌先でうなじにかいた汗の雫を舐め取られた途端、口から飛び出した声の大きさに、霜焼けで赤らんでいたピオラの顔が更に上気した。けれども火照った体に動揺する間もなく、今度は胸へと与えられる刺激に意識が飛んでしまう。周囲から突き刺さる戸惑いと好奇の視線に堪え切れず、ついに歎願の様相を呈してくる。

「……やぁ！　お、お願いです、これ以上は――んっ！」

「ふむむ……これは、７５のＡといったところかな。どうやらサバは読んでいないようだね、確かにＢまでもう一息だ。でもねピオラ？　私見ではあるけれど、それはそれで勿体ないとも思うのだよ？　世の中にはちゃあんと貧乳愛好家という存在も――とっ」

与えられる刺激に仰け反るばかりだったピオラがばたつかせていた足を地につけた瞬間、不安定な体勢ながらも雪面を強く蹴り上げた。体を捻る様にしてミャンの腕を振り解き、彼女の頭を飛び超えて背後に着地。

何とか魔手から逃れることに成功したピオラは片手でヘソの上まで捲り上がった服をばっと下ろしつつ、もう片方の手を短剣のホルダーに当てた。

「……はっ……はぁ。……悪ふざけが過ぎます！　……こんな酷いセクハラ、信じられない！」

「女同士の単なるスキンシップだろうに、そんなに声を震わせちゃって可愛いなぁ。……もっとしたくなっちゃうかも」

ぼそっと語尾をつけ足した瞬間、ピオラの小柄な体から似つかわしくない獰猛な殺気が放たれた。瞬時にミャンが反応し、跳躍と同時に半回転して距離を取る。それ以上飛びかかってこようとしないピオラを目前にしながらも、ぐっと腰を持ち上げる。それからゆっくりと周りを見回し、髪を掻き分けながら一人納得した。男女を問わず、列をなしている傭兵たちの顔が赤らんでいるのは寒さのせいだけではなさそうだ。

「……うん、ちょっと悪乗りし過ぎちゃったみたいね、反省してる」

「……この、ド変態。今度やったら、絶対にただじゃおかないんだから」

潤んだ目つきの鋭さと剥き出された歯には流石に罪悪感を喚起させられたのか、ミャンはばつが悪そうに舌を出した。

「めんごめんご。じゃあ、気を取り直して今後の方針を伝えるから、少し顔を貸してくれるかな」

――こっからはあまり公にできない話なんでね。

間断なく送られてきた念話に、ピオラの瞳が微かに揺らいだ。シルフィールとの関係を仄めかすことよりも公にできない話とはなんなのか。沸々と湧いてきた興味が怒りを追い越す勢いで迫ってきた。

「……もう変なこと、しないですか」

しないしない、と首を振ってみせるミャンに、ピオラは不承不承うなずき、手をホルダーから遠ざけた。

「ほら、あんたもとっとと脱ぎな」
「……用意、いいんですね」
ピオラはミャンの命じるがままに雪の上で黒革のロングブーツを脱ぎ始めた。それが終わるとベルトを緩め、上着を脱いで水色のキャミソール姿になった。
ミャンに手渡された大きめのタオルを腿から胸にかけてするりと羽織る。細い足の曲線をなぞりながらスパッツが、続いて白いショーツがぽとりと足元に落ちた。

入浴の準備を整えた後で苔生す岩に立ち、大量の湯気立つ泉を足先でちょんちょんと触れてみた。見た目ほどには熱くないようだが、それでも冷え切った体には十分に滲みそうな温度。足首から慎重に、腰までゆっくりと、時間をかけて沈ませていった。硫黄の臭いが鼻についたが、しばらくすると気にならなくなった。
ほぅと一息ついたピオラを尻目に、一足先に入っていたミャンがしなやかな肢体に濃厚な靄を纏わせながら髪紐を解く。ほどなくして、ウェーブがかった髪が背中までふわりと広がった。
――胸、大きいなあ。
無意識に、自分の控えめな胸を寄せて持ち上げていることに気づき、直ぐさまその手を湯の中に潜らせる。
ミャンは一瞬きょとんとしたが、ピオラの視線の行き先に気づくとにんまりと笑った。
「なんなら一丁揉んでやろうか？　私に任せりゃＢまで一足飛びだよ、お客さん」
「……上手いことを……、じゃない、お断りします」
仏頂面のピオラに、ミャンはくすくすと笑いながら髪紐を手首に

巻き付ける。ややあって、向かい合ったピオラとほぼ同時に、その場に腰を下ろした。ちゃぷんと、水面で大小の波紋がぶつかり合った。

「……ふは……ぁ」

熱さと心地良さの境界線。熱が肌という肌にじんわりと浸透していき、足の血管が脈動し始めるのを感じた。

「あはっ、こりゃ堪らんねぇ。後は熱燗でもあれば最高ってなもんだ」

くいっと杯を傾けるようなミャンの手つきに、ピオラの眉がハの字になる。

「……湯に浸かりながらのアルコール摂取は、体に毒ですよ？」

固いことを言うもんじゃないよ、とミャンが岩肌にぺたりと背を付けた。よほどひんやりとしたのか、ぞくぞくと身を小刻みに震わせている。それでもやめないところを見ると、やっぱりこの人は変態なのかも知れない。

「――ふぅ。体には悪くとも、心の健康に欠かせないことはたくさんある。あんたの菓子屋巡りみたいにね」

「……うぐ」

痛いところを突かれ、ピオラが呻いた。ミャン以外の傭兵にもケーキの食べ過ぎ、もとい糖分の取り過ぎを指摘されたことがあったからだ。

と、ミャンが自分の後方を見上げていることに気づく。

「……あの、どうかしましたか？」

「流石に酒はなかったけど、いいもんめっけた」

言うや否や、ミャンが湯に沈んでいた指先を空へと躍らせた。発された小さな風の刃が、ピオラの後方にあった高木の木枝を切り落とした。ボスンッと音を立てて雪面に落ちたのは――

「……蜜柑、ですか」

花弁を象るように、丁寧に皮が剥かれた色鮮やかな蜜柑を、ミャンが手の平に乗せてピオラの方に差し出した。ピオラは目礼をしてひと房手に取り、口に含んだ。粒つぶの果肉を噛み締めるとじんわりと、酸味と甘みと冷たさの三重奏が奏でられ、口の中に広がっていく。絶妙なバランス。

「……ん～～～」

「そんなに美味いかい？　どれ、私も一口――うん、こりゃあいける」

口を窄めるピオラに笑みを零しながらも、ミャンは湯を囲む岩のひとつにそれを置いた。

「じゃあ本題、セーニアの目的がやっと掴めたよ」

ミャンの言葉にピオラの目が見開かれた。

「……朗報、ですね」

「あぁ、演習の依頼主も知っていたみたいだけどね。ほんと、調査対象の国が遠いと調べるのもひと手間だ。エリクのやつが調査報告に取りかかるのが遅かったのも原因だけど――どうやらやつらは、＞魔遺物（ヴァイーラ）＜を探しているらしい」

ミャンが重々しく呟いた。ピオラが息を呑み、その後ではてと首を傾げた。

「……あの、何ですか？　……それ」

「はは、やっぱりわからないか。実は私も良く知らないんだ」

がくり、とピオラが体を崩した。

「正直、うちらの世情はルクスプテロンとエレグス近辺に偏っているからねぇ。マスター・アークスですらあんまり要領を得てなかったみたいだし。なんでも、古の技術によって作られた道具を総称してそう呼ぶそうだ」

「……盲点でしたね、そんなものがあの不毛地帯にあるのですか。……ですがまさか、それだけのために戦争を起こすでしょうか？」

「それだけの価値がある物なんだろうね、ルクスプテロンの攻略よりも優先したくらいだし。埋もれた財宝っていうと、色々なパター

ンが考えられそうだ。神話級の強力な魔法武器が埋もれているとか、とんでもない召喚獣が封印されているとかさ」

そう言いながらも、ミャンは枝毛を湯につけ、指で揉みほぐしている。

「……だとしたら一大事です。ましてやセーニアの手に渡ったら」

「んだんだ。でも、そんなものが埋まっていることを公にするのもちとまずい。だから、しばらくは秘密にしといてね」

「……奪い合い、争いの火種になりかねないってことですか。でも、明るみにできないって点は、向こうもこちらも一致している」

「んー、たださ、戦争まで仕掛けておいて隠し通せるかは微妙じゃない。実際問題、私たちはこうやって気づいてるわけだしさ。――これは穿った見方かも知れないけど、連中バレるのはある程度覚悟の上で、兵士たちの鬱憤を晴らす意味もあったんじゃないかな。前回の戦いは途中まで優勢だったのにこの地（ヌレイフ）でケチがついたろ？　向こうもあんな終わり方じゃ不完全燃焼だったはずだ。戦っていない軍人なんて単なる金食い虫だし」

軍事費は生産性がほとんどないため、国費に対して大きな負担をかけるばかりだ。同じ四大国で比べてみると、エレグスは二代に亘って軍備縮小。代わりに傭兵に雑務を振ってやりくりしている。フォルストロームは国会議員が少ない割に他国に比べて税が重く、軍人の給与も少ない。だが、その代わりに育児や医療費手当などの還付金が多いため、兼業軍人でも問題なくやっていけるらしい。これは税制をきちんと整えた先代の功労でもあるだろう。

しかし、ルクスプテロン連邦とセーニア教国は少し事情が違う。ミャンが言ったように専業軍人は有事以外ではただのお荷物。それでも両国共に敵が多いから相当数の軍人を抱えざるを得ない。莫大な赤字の元を抱えている分、他の産業を頑張って回さなければならないのだ。

戦争が起これば武具、食料、燃料などが大量に必要になるため需

要が増大する。供給と消費がぶん回しになり、一時的に経済が活発化する。物やサービスがたくさん売れれば人の往来も増える。その分税収も多く見込めるようになるから軍人たちにも不足のない給与を支払えるようになる。

「もちろん、戦争による利益の方程式は攻め手にしか当て嵌まらない。防衛側は都市まで攻め入られたら生産拠点も潰されるから絶対的に損失が大きくなる。相手が馬鹿でない限り、攻めてくるからには勝算を見込んでくるし、防衛側が被害を抑えるのは非常に難しい。だから、戦争するなら他の国でやるってわけだ。泥沼化しない限りは」

「……なんか不条理です、ミャン隊長の仮定って要は、戦に弾みをつけるためにジヴーが踏み台にされたんじゃないか、ってことでしょう？　こういってはなんですけど、ジヴーなんてもっとも攻められそうにない国なのに」

しょんぼりと肩を落とすピオラを尻目に、ミャンは遠方の山々の冠雪に目を向ける。

「それが世の常だ。大小の差はあれ、それくらいどこでだって起こっているさ。かくいうルクスプテロンもエレグスも、数十年前は今とは逆にセーニアへ攻め入っていた。今では世代の差がひと回りないしふた回り離れているから罪悪感も大分薄れているだろうけど、酷いもんだったよ。

そうね、例えばだけど――爺さん婆さんのやったことに責任を取れって言われたらどうだい。あんたの爺さんに家を焼かれたから孫の俺に一生食っていけるだけの保証をしろ、なーんて」

「……お門違いです。仰る通りスターニアル家は昔から悪いこと一杯してきましたけど、私はあの家の人たちとは関係ありません。恨むならお墓の中にいる人を恨んで欲しい」

今のルクスプテロンの世論には、まさしくそんな心理が働いてい

る。わざわざ昔のことを掘り返してまで口実を作り、攻撃してくるとは非常識だ、と。

当時のセーニアがそれによって損害を被り、幾許かの領土を失ったのは事実。取り返したいと思う者がいても不思議ではない。けれども、正当性を訴えるわりに、自分たちに都合の悪い資料を処理している辺りが姑息に映るのだ。

ピオラが口を尖らせながらそう言うと、ミャンは苦笑いを噛み殺した。

「人様の前で自分の家族をそんなに悪く言うもんじゃないよ。フラムハートとミスティミストの因縁にしたってどちらが発端か、最終的にどちらに正当性があるかなんてほとんどわかっちゃいない。仕掛ける側は基本的にわからなくても気にしないもんだ。

私が主張しているのは、どちらが悪い悪くないって話じゃない。ひとたび戦争を起こせば確実に、その先何代にも亘って汚れたケツを、自分の子孫が悪臭に顔をしかめながら拭き取る羽目になる。その不文律をちゃんと考えなきゃ駄目だってこと。どんな大義名分があろうと、安易に武力に訴える今のセーニアが不幸の種子を撒き散らしているのは疑いない。対外的にだけじゃなく、自分たちの子孫にも負の遺産をせっせと拵えているんだから」

「……そう、ですね」

「長々と語っちゃったけど、今回シルフィールの申し出を了承したのは打算ばかりじゃなく、そういった心理が働いたからだってことを覚えていて欲しい。向こうの思い通りに動くのは少し癪だけどね」

ピオラがはっとした表情をミャンに向けた。

「……もしかして、さっきの言い間違えは」

「そっ、わざと。新人は古参に比べると口が軽いし、あれだけの人数がいればセーニア寄りの者も確実にいるだろう。セーニアの狸共の耳に、私の漏らした言葉が届かないってことはないはずだ。シルフィールもヌレイフの時は様子見に徹していたけど、今回は先方からの申し出。いざという場合には表舞台に出てきてもらわなきゃこ

っちが困る。ギルドを守るための、当然の配慮さ」
「……保険、ですか。……はぁ、考えなしに見えて色々考えてるんですね」
「こらこら、年上掴まえて失礼だろ」
「……なんだか、人間不信になりそうです」
「何をいまさら、あんたの無口さはそれこそ、周りに対する不信感の表れだろうに」
ピオラは顎の先まで湯に浸かりながら目を瞑った。今からフラムハートとシルフィールの関係を仄めかしとけば、今後都合の悪いことが起きた時に責任を折半できる。ミャンの対応は、フラムハートの傭兵としては決して間違っていない。利用させてばかりいれば、いいように扱われるだけだ。
「……あの、根本的な問題が残っていると思うのです。ジヴーは、セーニアに勝てるんでしょうか？」
ミャンの顔が一瞬険しさを増した。
「ぶっちゃけると、厳しい。単純に戦力比だけで考えるなら、甘めに見積もってセーニア８のジヴー１ってとこか。しかも、これは後詰めを、つまり、二次的な遠征を含まない、現時点で投入されている戦力比の話だ。人数比だって３ないし４対１、指揮官クラスもビシャ・リーヴルモアを始めそつのない騎士が複数名遠征に加わっている。シルフィールも積極的な支援をしているわけじゃなし。参戦も個々のスタンスに任せているみたいだから小規模なものに留まっているはずだし、それに――」
「――聞いているだけで絶望的な気分になってきました。だとすると、８どころじゃないような」
「普通に考えればそうだ。でも、ひとつ引っかかることがあるだろ」
「……引っかかること？　……なんでしょう？」
「勝ち目がそこまで薄いのに、さほど助けになるとも思えないこの演習をやって欲しいと私たちに依頼してきたのは、なんでだ？」

「……あ、言われてみれば、そうですね」

確かに、負け試合なら黙って見ていた方がシルフィールにとっては都合がいいはずだ。事実、ヌレイフの戦いでは静観を保っていた。今回そうしなかったのは何故か。

「……私たちを、今後の戦いに巻き込むため、とか」

ピオラは自信なさげに答えた。

「私もそれは真っ先に考えた。けれど、ジヴーが片付けば次に攻められるのはどうせルクスプテロン。順番が違うだけで元から私たちにとっては他人ごとじゃないさ。今回は、どちらかといえば向こうから首を突っ込んできた形だ。多分、依頼の話が漏れることもある程度は覚悟しているはずさ」

ピオラはうなずきつつも、話を漏らした当人がそう言うのも何だかな、と思わないではなかった。

「……それなら、うーん……、なんかしらの損害を被ったから、とか」

ミャンが口端を微かに持ち上げた。

「まぁそんなとこだろうね。もしくは、これから被りそうかのどちらか。後者だとすれば結構な大物、対外的にも影響力のある傭兵がジヴー側に加わっている可能性が高い。まずランカークラスと考えていいだろう。彼らの武量は推して知るべし、その働き如何によっては――ってところだ」

「……納得です」

ミャンの筋の通った推論に、ピオラが敬意を込めてうなずいた。ギルドとお目付け役というのも伊達ではないようだ。

「言っとくけど、これだけが根拠ってわけじゃないよ」

「……と、申しますと」

「あんたがフラムハートに入団する前のことだけど、バイルワールドの名前くらいは知っているね？」

ピオラは首を縦に振った。当時の裏ギルドの筆頭で、傭兵ギルド

はもとより巷でも怖れられていた犯罪者集団だ。
「連中との戦いに当たってはシルフィール側もこちらが驚くほど積極的に動いていた。それより以前にあったバイルワールドのギルド潰しで、ギルドの傭兵を何人も失っていたからだ。シルフィールを事無かれ主義って批判する傭兵仲間もいるけど、あっちはあっちなりのやり方で結束を、傭兵同士の絆を重んじているんじゃないかな」
「……絆、ですか」
「傭兵なんて好き勝手に生きてる奴らがほとんどだ。私だってフラムハートが常に正しいとは思っちゃいないし、不信感を抱いたことだってある。もちろん、ルクスプテロンに対しても。これでも長い人生歩んでいるから、色々思うところはある。――でもね、最低限自分を導くための指針は必要だ。何もかも自分の意に沿う組織なんてものはどこにもない。だから私は、気の合う連中が多いって理由でフラムハートに身を置いている。可能な限り彼らとの絆を守りたいとも思っている。もちろん、あんたとも」
「……はぁ、光栄です」
「シルフィールの本部だって板挟み。万が一にも大勢の傭兵たちを失うわけにはいかない。でも、黙って見過ごすこともしたくない。この演習を依頼してきたのは、そんな心境からじゃないのかな。って、私がそう信じたいだけなのかも知れないけどね」
照れ笑いを浮かべるミャンに、ピオラが目を細めた。
「……その気持ち、良く分かります。私も、シルフィールに旧知の傭兵がいますから。――ジヴー、勝てるといいですね」
「是非是非、そうあって欲しいもんだ。どこまで水面下で動けるかが鍵だねぇ」
ミャンは口を結び、再びどっぷりと湯に浸かった。跳ねた湯から片目を庇いつつ、ピオラは降ってくる雪が湯に触れて溶けていく様をぼんやりと見ていた。
シルフィールの依頼はこの演習で一応達成されたが、ジヴーは既に領土の三割以上を失っていると聞く。もうそんなには余力がある

とも思えない。あるいは、次の衝突が最終局面だろうか。

難しい顔つきになってしまったピオラに、ミャンが手に取った食べかけの蜜柑を、ひと房放り投げた。ピオラは視線をちらりと動かし、口を一杯に開いた。はむっと、唇の端で蜜柑を咥えたピオラに、ナイスキャッチとばかりにミャンが手を叩く。

「案外この戦争の決着が歴史の転換点だったり、するのかも。――はむっ」

「……んぐんぐ、ごくん。……そんなうきうきした表情で言われても困ります。きな臭いのは嫌い。私は、おコタに入ってこうして蜜柑でも啄んでいた方が性に合ってます」

「ふふっ、確かに世界中の皆があんたくらい呑気者だったら、戦争なんてどうやったって起こらないだろーね。せいぜいが、炬燵内で足を伸ばすための陣取り合戦ってとこか」

ピオラが湯で赤らんだ頬を膨らませた。人に指摘されるほど呑気者ではないつもりだし、それなりにギルドの将来のことを考えているという自負はあった。

「――逆に世の中が戦争好きばかりだったら、自分や仲間たちが傷付いても笑っていられるのかな。多様性もいいことばかりじゃあないのかもね」

どこか儚げなミャンの呟きに、ピオラが心中で同調する。もちろん、自分より長きを生きている彼女には、自分が見えない物も映っているのだろう。年を重ねて逆に見えなくなった物もあるのかも知れないが。

乱世において平和を願う人々の心が曇りなきことは疑う余地がない。けれども、平和になったらなったで人々の心に淀みが、腐敗が必ずといっていいほど生じる。人はいつだって、ない物を誰かにねだっている。手に入った途端に、いらなくなるはずの物を。

『――歴史が証明していることよ、ピオラ。平和という玩具を与えられたらそれに飽き、直ぐに放り出したくなる困った生き物。それが、人。

平和を望む心は荒れた土壌がないと育たない。痛みが絶え間なく降り注ぐからこそ、過ちを省みる心が芽生えるの。そりゃあ、痛みを与え続けてきた一族を否定するのは簡単よ。でも、世界がどうやっても変わらないのなら、窮屈よりは解放を、束縛よりは飛翔を尊ぶ方がましだと思わなくて？』

――姉様の仰っていたことが、正しい？　違う、私はそんなの認めない。認めたくない。

ややあってピオラは雪ちらつく灰色の空を見上げ、遠い熱砂の国に思いを馳せた。砂の大地に滲み込んだ、あるいはこれから滲み込むだろう罪無き血を、憂いていた。

～紺雷　ｔｈｕｎｄｅｒ　ｏｆ　ｂｏｎｄｓ１１～

まだ夜の明けきらぬ紺碧の空。ルトラバーグの港は、積荷を搭載し終えて出港準備が整えられた砂船で隙間なく埋め尽くされていた。

壮観なる船団を一望できる埠頭（ふとう）を前にして、黒い革鎧を、あるいは紺色のローブを身につけた大勢の男たちが列を成している。戦士、神官、弓騎士、魔法使い。その兵種は多種多様であるが、観察力に優れた者ならば船着き場に近い者たちほど身なりが整っていることに気づいただろう。砂船に乗れる者はそのほとんどが群を抜く実力者か、そこそこ腕の立つ貴族階級かのどちらかであった。

「――注意事項は以上である！　では最後に、リーヴルモア将軍より激励のお言葉がある！　心して聞くように！」

魔石によって拡張された副官の声が広場に行き渡ると、兵士たちの微かなざわめきがぴたりと止んだ。

深紅の軍服を身に纏ったビシャ・リーヴルモアが軍師ロッグ・ケトゥレフを従え、兵士たちが槍剣で織り成すアーチ門を通り過ぎていく。幅広の無骨な剣を肩に担ぎ、巨体をそびやかせ、眼光鋭く前方を見据えるその様はまさに威風堂々。

武者震いを喚起された兵士たちがぐっと拳を握り締める。その自信に満ちた姿を見るだけで勇気付けられる。ビシャは着々と、隊長クラスから末端の兵に至るまで信望を集めつつあった。

壇上の階段を上っていく姿は重厚さに満ちている。高さの違う踏み台が歩を進める毎に軋んだ。

最上段にてビシャがゆっくりと面を上げ、振り返った。すっと敬礼した眼下の将校たちにやや遅れて、居並ぶ兵士たちがざっと、手と足とを鳴らす。

「――諸君、時は来た」

たっぷりと間を取って、ビシャの視線が兵士たちをひと舐めにする。それだけで、兵士たちは背中に棒を入れられたようになった。

「開戦日より我々は、ジヴー連合の実効的支配者であり、立法府でもある＞賢律院（ルーツ）＜に向けて、再三に亘り降伏を勧告してきた。そちらの兵力で精強なる我が軍に相対することは不可能、潔く軍門に下れば不要な血が流れることはない、と。

にも拘わらず、彼らは我々の申し出をないがしろにし、今日（こんにち）を迎えるまで頑なな態度を改めようとする気配を見せなかった。まことに遺憾ながら、ジヴーの者たちは我々とは違い、兵や民の命をさほど重い物とは考えておらぬようだ。国が違わば考え方も違うものだが、命に対する価値観の相違ばかりは、痛恨の極みという他ないだろう」

一息入れて、ビシャは苦しそうに溜息を吐き出した。兵士たちは真っ直ぐにビシャを見据え、辛そうな表情で演説するビシャの憂鬱がいかばかりかを推し量ろうとした。自分たちを指揮する将軍の悲痛に寄り添うべく。

「率直に言って、侵攻を宣言するのは悩ましいものだ。今ここに明かすが、このことについては連戦連勝を重ね、この局面を迎えるに至るまで、私が何度も思い悩んできたことである。眠れぬ夜も幾度あったか覚えておらぬ。いかに敵方の者たちとはいえ、人命を奪うのは戦うことを定められた誇り高き騎士として以前に、良識ある人として忍びなきもの。天に座するセーニアの祖も、此度の戦における惨状を目の当たりにして心を痛めておいでであろう」

ビシャが紺碧の空を見上げ、人ごみの中から誰かを探すように目を細めた。兵士たちは頻りにうなずきながら、彼の言葉をもっとよく聞こうとばかりに身を乗り出している。

「私は彼らが心変わりしてくれるその時を待ち続けた。しかしなが

ら――三カ月が経過した今も尚、相手方からの歩み寄りはない、そう判断せざるを得ない状況にある。＞賢律院（ルーツ）＜は我々の誠意ある説得に耳を傾けようとせず、セーニアの仇敵であるルクスプテロンに協力する姿勢を崩してはおらぬのだ。ジヴー連合のしていることが直接的に我々を苦しめているとまでは言わぬ。しかれども、彼らがせっせと送り届けている鉱物で作られた武器が、我らが竹馬の同輩を大勢殺めていることもまた事実である。……同胞の犠牲を、誰が見過ごすことができようか。共に戦ってきた仲間たちが傷付いて倒れていく光景を平然と素通りできる者など、結束強き我が軍にはいない――いるはずがないのだ！」

拳が振りかざされる度に、重く低い声が山を成し谷を象る。感情を存分に込められた、起伏妙なる演説に、兵士たちは高揚感を？き立てられていた。ビシャの発する一言一句に、陶酔していた。

ビシャ・リーヴルモアこそが、彼だけが自分たちを率いるに足る将であり、また自分たちが上に立つことを望む将であると。

ビシャが一息つき、そそくさと近づいてきた小間使いに水を受け取る傍ら、今度は控えていたロッグ・ケトゥレフがビシャの真横に歩を進めた。

「――ごほん！　我々は遠い過去よりザーケイン帝国によって、その流れを汲むルクスプテロンによって、何度となく苦渋を舐めさられてきた。愛すべき祖国にとって忌むべき敵国を、光に影を差そうと企む者たちを応援し、あまつさえ権益を貪ろうとする者たちがジヴーにいる。……恥知らずとは、まさにこのことである！　古来より弱者を利用し、貶め、己の利益のみを追求してきた者は、正義の力によって追い落とされるのが常である。――自覚せよ諸君、この戦はただの戦にあらず、我らが正義を示し、許されざる悪を滅ぼす戦いなのだ！」

『おおっ！』

正義という免罪符を戴き、兵士たちの目に危うい光が宿る。

「慣れぬ気候でここまでの働きを示してみせる兵など、他のどの国にもおるまい！　敗戦に次ぐ敗戦で、最早敵に抗う力は残されてはおらぬだろう！　だがそれでもっ！　万が一にも諸君らの命が奪われては意味がない！　私にとっても、もちろんリーヴルモア将軍閣下にとっても！　諸君ら一人一人の命は家族のそれにも等しい価値がある！　だからこそ、我々は心を鬼にして命じよう！　敵が剣を捨て、許しを請おうとも手を緩めるな！　戦いに赴いた以上は相手を殺める覚悟を持っているのと同様、自らが打ち取られる覚悟を以ってしかるべき！　将軍も仰っていたように、我々は今日までジヴー連合側から前向きな返事がもらえるように寝食の時間をも惜しんで折衝を続けてきた。争いを回避する道を模索し、最善を尽くしてきた！　それでも我らの差し伸べた手は、無碍なく突っ撥ねられた。我らの慈悲が、無頼共の心に響くことはついぞなかった！　……ジヴー連合の者たちは積年の悪行に味を占め、人の心をも失ってしまったのであろう。――ならば、最早遠慮はいらぬ！　セーニアの、否、世界の平和を守るために！　諸君らが弛まぬ修練によって培ってきたその力を存分に振るうがよい！　敵をより多く打ち取った者には、対価を以って寓そうぞ！」

兵士たちからどよめきと歓声とが同時に湧き上がる。ロッグがその様子を見てしたり顔でうなずいた。一礼して下がる軍師に、束の間ビシャが鋭い視線を送る。

――煽り過ぎだ、敵を悪者にし過ぎるな。

――も、……申し訳ありません。

擦れ違いざまに交わされた囁きは、兵士たちに届く前にざわめきに呑み込まれていく。舞台の最前に立ったビシャは巨大な剣を手首のみの力でくるりと回転させ、石の壇上を貫いた。ドスン、と落石のような響きがあった。兵士たちが一瞬にして沈黙し、固唾を飲んだ。興奮を一挙動で冷ましたビシャは、再び兵士たちを見据えた。

「――諸君らもよくよく承知のことだと思うが、我々にはどうしても負けられぬ理由がある。なぜなら、世界で最も平穏で豊かな国、セーニア教国の尊い教えを広めるという使命を課せられているからだ。

ジュアナ戦役の末日、すなわち我々が束縛から解放され、安住の地を得た日から数えて既に三百年余りが経過している。残念なことだが、世界には未だ数多くの不幸が溢れている。親愛なる教皇アダマンティス様は、セーニアがこの世界により多くの幸福をもたらすことが出来る日を心待ちにしていらっしゃる。所詮、私などは戦う以外に能のない男であるし、己の手が払える不幸などたかが知れているという自覚もある。だが――周りを見渡してみよ！」

ビシャが地面に刺さった剣を手放し、空をも抱くように両腕を広げた。

「セーニアには勇猛果敢な兵たちが、素晴らしき仲間たちがこんなにもたくさんいる！　将から一兵卒に至るまで、諸君ら一人一人の力が結集すれば、私はいかな困難も打ち砕けると確信している！」

「……将軍っ！」

「勿体なきお言葉にございます！」

感極まり、仁王立ちするビシャに向かって叫ぶ者が次々に現れる。その一方で壇上の直ぐ下、兵士たちと向かい合っている将校の表情には冷やかなものが混じっていた。

――はん、いつもながら大した弁舌だな、一体どの口が言っているのだか。

――しっ、聞こえてしまいますよ。しかし、油断すると事情を知っているはずの私たちまで、その気になってしまいそうですな。

セーニアがジヴーを攻めた真の理由。それを知らされている者たちは、ビシャの演説が詭弁に過ぎぬことを重々承知している。だからこそ、後ろめたさの一切読み取れぬ演説に感心し、呆れもする。

「今ここに集う勇者の中には、三年前のヌレイフの戦いに参じた者もいよう。大勢の仲間たちが命を落としたあの戦いを、尊い犠牲を無駄にしないためにもっ！　我々はこれからも勝ち続けなければならぬっ！」

煽動すれすれの鼓舞に兵士たちが力強く応じ、轟々たる歓声が港の広場を埋め尽くしていく。ビシャが再び剣柄を握り締め、血管が浮き出るほどに力を込める。

「――我らがセーニアに、栄光あれ！」

巨大な剣が石を剥がし、朝日に向かって牙を剥く。柱のような刀身が陽光を反射したその瞬間、兵士たちの声がビシャの木霊となった。

『セーニアに、栄光あれ！』

その力強き言霊に、ビシャがにぃと凄みのある笑みを浮かべた。

「者共っ！　――――出陣ぞぉっ！」

『おおおオオオオォォォォォ――――――――！』

腹の底から響く声が連なっていき、重なっていき、一陣の風となって港を駆け抜ける。兵たちが腕を突き上げたその先には、地平から姿を現した太陽が、燦然と輝いていた。

――――

「――おぉぉォォっ……ぬぐっ――――――がぁッ！？」

二人の兵に腕をがっちり固定されたまま、褐色肌の男が顔を机に強かに叩きつけられた。

突っ伏した男の頭から手が放されると、黒衣の男の指から数本の髪がはらはらと滑り落ちた。

外の光が一切届かぬ地下の一室では、取り調べとは名ばかりの苛烈な尋問が行われていた。ヴィレンらが張った網、最新鋭の砂船を建造中との偽情報をオルドレン内に流すことにより敵軍本部への連絡を誘発。予め絞り込んでいた密偵候補の者たちを数人体制で監視

し、不審な行動に出た者を軒並取り押さえていた。
今この部屋にいる男もその中の一人。人々が寝静まった夜に魔石らしきものを取り出し、夜空に掲げようとしていたという。
連絡用の魔石に関してはセーニアによって封じられているのが現状。しかし、イヴァンから伝え聞いた話によると、セーニアは予め自分たちだけは連絡できるよう強化魔石なる物を用意しており、実際にルクセンの地下遺跡でセーニア兵たちが使おうとしていたようだ。
男はその場で取り押さえられ、男が使おうとしていた魔石はシハラの手に寄って解析された。その結果、彼の正体がオルドレンの警備兵に扮していた密偵であることがほぼ確実視されていた。

「今一度訊く、現在おまえが把握している情報、セーニア軍本隊の人数、兵種の構成比率、指揮官の名を十秒以内に答え――」
「――――ぶっ。――なっ」
突然唾を吐きかけた男の方が愕然とした。血が入り混じった唾液は黒ずくめの男を通り抜け、後ろにある壁に粘着質な音を立ててへばりついた。
黒衣を身に纏った男は手を差し伸べ、男の頬を撫でながら笑った。手の冷やかな感触がはっきりと伝わり、男が身を震わせた。
「どうやら躾が行き届いていないようだな。子供の頃に大人たちからやってはいけないことをちゃんと教わらなかったのか？　んん？」
「……な、なんなんだ、てめえ――ギッ」
シュイは、男の頬を撫でざまに爪を立て、思いきり横に引いた。男の顔が横を向いた時には、頬に四本の赤い線が出来上がっていた。上の二本の裂傷は傷が深かったのか、直ぐに二筋の血が垂れ落ちてきた。顎から赤い雫が滴り、床に斑模様を施す。シュイは、皮と肉片がこびりついた爪を、白いハンカチで丁寧に拭い取った。わずか数秒で、ハンカチが裏まで赤く染まる。

「ぐっ……き、貴様、わかっているのか。俺にこんな真似をして、セーニア軍が黙っているとでも――」
「――連中が下っ端の生死なんかでいちいち心を揺らすものかよ。ましてや、敵に捕まる間抜けな間諜さんなんて、助けたところで二度と使い道がないだろう」
「い、言わせておけばっ！」
「――あんたの方こそ、その程度で済んでいるうちに現状をよく把握した方が、いいんじゃないか」
ドスを効かせた脅しが、男の文句を遮った。そんなやり取りをしている間にも一秒刻みに、シュイの手の平の指が折り曲げられていく。
「そうやって意地を張ったところで、果たしてどれほどの意味があるのかな。少々の情報を漏らしたところでこの戦況が覆ると、セーニアが負けると本気で思っているわけでもあるまい？　……とっとと話しちまえよ、楽になるぜ？」
「ぬ……ぐぅ」
「3……2……侵略者に優しくしてやる理由は、どこにもないんだよ？」
言い放つと同時に、シュイは机の上に抑え付けられた間諜の手の甲目掛け、肘を振り下ろした。

――ぁぁぁぁぁぁアアアア！
分厚い壁を貫き、廊下の奥まで響き渡った苦悶の声に、ヴィオレーヌがぶるりと体を震わせた。皮膚から浸透してくるかのような悲鳴だった。壁に寄りかかっていたピエールはポケットに両の手を突っ込んだまま下を向く。
「ヴィオレーヌさん、ここは俺たちだけでいいから部屋に戻ってなよ。終わったら呼びに行くからさ。あんま気分のいいもんじゃないだろ、拷問なんて」

「……い、いえ、大丈夫です。与えた傷を直ぐに癒せれば、みなさんも存分に――っ」

再び、今度は引きつけ時の呼気をぶつ切りにするような声が鼓膜を震わせた。耳を塞いだまま、体を駆け巡る悪寒に身を縮め、それでもヴィオレーヌはこの場から立ち去ろうとしなかった。イヴァンは溜息交じりに頭を掻きむしった。

「まったく強情なやつだ、シュイも負けず劣らずだがな――む」

「……あいつ、ちっと無茶してねえかって、おい……おいおーい」

――ギッ……ぎゃあアアぁぁァァ……やっ、やめろぉォォ！　頼む、やめてく――がっ……あがあァっ！

度重なる悲鳴に鈍い音が重なり、一瞬にして途切れた。しんとしたかと思うと、今度は啜り泣く声が聞こえてきた。

「ふっ、今の鈍い音からすると確実にどこかの骨を折られたな」

「ふっ、じゃねえよ……、どうしてこんな状況で笑えるんだか」

イカれてる、とばかりにピエールはさめざめと首を振った。

「ったく、あいつもあいつだ。汚れ仕事なんざ俺かイヴァンに任せとけっつうのに聞きやしねえ。拷問なんて柄じゃねえだろ」

故郷を滅茶苦茶に蹂躙され、師であるアルマンドを殺された自分ならば、敵に対する罪悪感よりも恨みが勝る。イヴァン・カストラにしても人生の裏街道のど真ん中を通ってきたような男だ。暴力や脅しはお手のものだろう。適材適所という観点からすると、シュイが率先してやるべきことは他にいくらでもあるように思えた。

「そういった行為を嫌っているからこそ、仲間の手だけが汚れていくのを見過ごせない。……あやつはそういう男だ」

例によってベージュ色のヴィッグをつけたアミナが、椅子に座ったまま表情を変えずに言葉を返した。その落ち着きぶりに、ピエールが思わずほくそ笑む。

「ん、何だ、面白いことを言ったつもりはないが？」

「あぁいや、すんません。口にしていいものか迷うもんで」
「……思わせ振りなやつは女に嫌われるぞ」
顔をしかめてみせたアミナにピエールが苦笑する。
「こりゃ手厳しいな。んじゃ遠慮なく言いますけど、あいつがああいった行為に及ぶ責任の一端は、ア……リーズナーさんにもあるんじゃないですか？」
言い直したピエールを気に留めた様子もなく、アミナはただその内容に小首を傾げた。一昨日の昼食時、リーズナーという別人に扮していたことを告白していた。とはいえ、流石にジヴーの者たちに正体をバラすわけにはいかず、呼称はリーズナーで、ということで話が落ち着いていた。
「……私に、責任？　一体なんのことだ？」
ピエールは鎧を吊り下げている肩ベルトを少しだけ持ち上げた。
「……まいったなぁ、本当にご自覚ないんですか？　貴女がここからてこでも動かないってことは、あいつに絶対に負けられない理由ができちまったのと同意ですよ。自分が好いている女にもしものことがあったら――って。そりゃあ少しでも勝率上げるために必死にもなるでしょ」
「わ、私はっ！　そのようなつもりでここに来たわけではないし、守ってもらわねばならぬほど弱くもない。……べ、別に守ってもらうのが、嫌だというわけでは、ないが」
途切れ途切れのアミナの言葉に、強張っていたヴィオレーヌの顔がようやく緩んだ。
「……私のしていることが、あやつを追い詰めているだけだと、つまりはそういうことか？」
不安げにズボンを握り締めるアミナに、ピエールが慌てて首を振った。
「いやいやいや、そこまでは言ってないですけど。むしろ吹っ切れるきっかけになったかも知れないし」
「……ほ、本当か？　本当にあやつの迷惑になっていないか？」

予想外の過剰反応。縋りつくようなアミナの上目遣いに、ピエールは安易に不安を煽るような台詞を口にしたことを後悔した。
「も、もちろんですよ、なっ、イヴァン」
「……意味がわからん、何故俺に振る」
イヴァンが毛虫でも見るような目付きで、会話に巻き込んだピエールを睨む。
「そりゃあだって、シュイとあんたは昔からの馴染みなんだろ？あいつの性格とか、考え方の傾向なんかはある程度把握してるんじゃないか？」
「やつと再会したのはつい先日だ。イェルドのことならまだしも、シュイについてはおまえたちの方が詳しいだろう」
「あー、まぁ言われてみれば。んじゃあ、似たような経験っつうか、シチュエーションに心当たりとかは」
イヴァンは訝しげにピエールを見た。
「いやさ、あんた見てくれは悪くないから、女をとっかえひっかえしてもおかしくなさそうな――」
「――人聞きの悪いことを言うな。それほど節操のない生活を送ってきた覚えはない」
二人のやり取りにヴィオレーヌの尖った耳がぴくりと動く。
「今はそうなんだろうけど、ぶっちゃけ数人くらいなら経験あんだろ？　行き付けの港にベッド仲間がいるとか――」
一瞬、イヴァンの目が泳いだのをピエールは見逃さなかった。が、その後ろで聖母の微笑みを浮かべるヴィオレーヌのプレッシャーに気づき、出しかけた言葉を呑み込んだ。
一体どこから取り出したのか、後ろ手を組んでいるにこにこ顔のヴィオレーヌの背中から、神々しくも刺々しい純白の鉄球が顔を覗かせていた。確かモーニングスターとかいう、金属鎧を破壊するための鈍器だ。後ろを一切見ぬイヴァンにしても凛々しい眉がぴくぴくと震えている。我が身に及びかねぬ危険を存分に感じているようだ。

――あんなんでまともに殴られちゃあ、いくらイヴァンでもたまんねえな。ヴィオレーヌさん、意外と肉弾戦もいけるのか？　そう、意外っちゃあ、アミナ様の方だよな。

ピエールは内心で、ここ最近のアミナの変貌振りに驚いていた。以前は決して威厳を持ち崩す事のなかった少女が、普通に女の子をしていることに。そのくせ、シュイの前で背伸びするのは相変わらずなのだが。

二人に起こった変化は、二人の距離がより縮まったことを意味するのだろうか。どんなことがあったかを想像するにつれ、不思議と頭に浮かぶのは茶髪の獣族。自分の妻であるミルカの顔だった。かと思えば、急に彼女のお産の事が、子供のことが心配になってくるのだった。

――あぁ、いかんいかん、前向きに考えなきゃな。よぅし、俺だって無事に帰れたらミルカにあんなことやこんなことを――

「妄想は、ほどほどにしておけ」

アミナの何気ない呟きに、ピエールの全身が戦慄いた。

「あ、あれ、……えっと、顔に出ていたとか？　それとも――」

「――顔は見ておらぬし、口にも出しておらぬ。強い好色の気が感じられただけだ」

さらりとそう言ってのけるアミナに、ピエールのこめかみがぴくぴくと痙攣した。

――な、なんだぁ？　コウショクノケって。よくわかんねえけど、心が読めるってことか？　……可哀想に、シュイのやつ、くっついたらくっついたで一生頭が上がらねえかもな。……あれ、でもそれって今と何ら変わらねえし、特に問題ないのか。

不意を突くように、尋問の行われている部屋の鉄扉がガタンと鳴

った。ピエールは驚きに両肩を跳ね上げたまま、恐る恐る後ろを振り返った。と、顔と黒衣に返り血を浴びたシュイがきまり悪そうに立っていた。その姿はホラー的な意味で迫力十分。幼い子供が一目見れば、夢にまで出しゃばってくること請け合いだ。

「終わった、どうやら観念して喋っている――」
「お、やるじゃねえか」
「よし、早速ヴィレン将軍に報告を――」
朗らかに応じるピエールとアミナに、シュイが困ったように両手を掲げた。
「その、悪い、最後まで聞いてくれ。――喋っているよう、なんだが……しゃくり上げているせいで全然聴き取れないんだ。……先に傷を治してくれないかな」
「……えーっと、はい、では早速」
ヴィオレーヌがいそいそと部屋の中に侵入し、続いて『ひっ！』と息を呑む音が聞こえた。並の惨状ではないようだった。

「……変なところで不器用な奴だ」
「これは……庇う言葉が見当たらぬな」
「……あー、そう、あれだ、きっと時間がなくて焦っちまったんだよ。……だよな、シュイ？」
部屋に入ったイヴァンとアミナの率直な感想に。ピエールからの空々しい慰めの言葉に。シュイはしょんぼりと項垂れるばかりだった。

～紲雷　ｔｈｕｎｄｅｒ　ｏｆ　ｂｏｎｄｓ１２～

町の至る所で打ち鳴らされている鋼の調べ。その音は、オルドレンが町として産声を上げたその日から二百年もの間、心の拍動のように休まず鳴り響いている。

広大な砂漠の奥深くに位置しているだけあり、長い歴史の中でもオルドレンが外敵の侵攻に遭ったことはない。それが今や、町はおろかアクラムの存続までもが危ぶまれる逼迫（ひっぱく）した状況。通りを往来する者たちの表情は揃って浮かなかった。

最後の戦いを間近に控え、工房では仕事の大量発注を受けた職人たちが昼夜を問わず働いていた。高台から町の上空を見れば、何本もの排煙が夜空を灰色に曇らせている。体の変調を訴えているかのように、いつにも増して鳴り響いている荒々しい吃音には、追い詰められながらも抗おうとする職人たちの意地が込められているようでもあった。

額に鉢巻を巻きつけた男たちは汗を拭いながら熱気に身を晒し、言葉少なに金属の加工に打ち込んでいる。工房に外接された熔鉱炉には国から支給された大量の銅鉱石が投げ込まれ、高温で熔かされた不定形の金属が半筒状の台を滑っていく。そして、手作業で入れ替えられている鋳型へと流し込まれていく。そんな中、蒸気沸き立つ工房の入口の暖簾を潜る男の姿があった。

前方からのどっしりとした足音に、金属板を叩いている鍛冶師が顔をそちらに向けることなく口を開く。

「悪いが後三日くらいは仕事で詰まってる、依頼なら来週以降にしてくんな。もっとも、それまでこの町が無事であればの――」

「――すまない親方、私だ」

へ、と険のある年輩の男が、叩いていた金属板から目を放した。

作業員が右往左往する中を邪魔にならぬよう、革鎧を身につけたヴィレンが壁に張り付くようにしながら笑いかけた。
「こりゃ将軍！　わざわざこんな汗臭い仕事場にまでお越しくださるとは」
　恐れいりやす、と頭を下げた筋肉質な男に、ヴィレンは微笑を浮かべながら首を振った。
「ジヴーの民にとって汗をかくことは誇りそのもの。太陽の恩恵を身に受け、懸命に働いた証だ」
「当たり前のことを褒めそやされても反応に困りますぜ」
「そうか？　特別なことをせねば褒めぬというのも、何か違う気がするのだが」
　真剣に悩んでいるように見えるヴィレンに、工房の鍛冶師たちが手を休めることなく視線だけを交わし合い、含み笑いを漏らす。
　――親方、この人将軍なんですか？　なんだかお偉いさんっぽくないですけど。
　――それはまあ、否定しねえが。
「ん、なんだ？　何か言ったか？」
　金槌の音で聴き取れなかったのか、ヴィレンが耳に手を当てて訊き返した。
「――あぁいえ、気にしないでくだせえ！　今座るスペースと飲み物を用意しますんで」
「ありがたい申し出だが、気持ちだけ受け取っておく。これから他の工房も回って作業の進行具合を確認しなければならない」
「左様ですか、そりゃ疲れ様ですな。――あぁそうそう、この間修理依頼をいただいた武器ですが、何とか仕上がりやした」
　ヴィレンの眉が大きく上がった。
「うむ、流石に仕事が速いな」
「へっへー、うちの強みは速さだけじゃないですぜ？　――おいっ」
「へいっ」

弟子と思しき若い男が人足たちの作業の妨げにならぬよう、大回りで勝手口に向かう。ほどなくして、弟子がいそいそと大きな布包みを抱えて戻ってくる。

「これが、例の？」

「今開けますんでちょいとお待ちを。――うっし、そのまま引っ張ってくれ」

鍛冶師が作業台に置かれた布包みに両手を差し込み、中の物を抑えつける。それと同時に、弟子が作業台の上に置かれた布の端の方をすっと後ろに引いた。

ヴィレンが目を見開いた。はたして布包みから出てきたのは、シュイの得物によく似た大鎌だった。鎌の先っぽではシュイの物と瓜二つの黒い三日月がぼんやりと光を放っている。

けれども、明らかに異なる点も見受けられた。シュイの鎌の柄は黒色だったが、こちらの大鎌は青みがかった銀色だ。先端部には槍の穂先のようなものまでついており、どちらかといえば槍矛（ハルバート）に似た形状と言える。それもそのはず。鍛冶師が今差し出している修復済みの鎌は、レイヴとの戦いで破壊されたシュイの鎌を修理に出していたものだ。

ルクセンの地下遺跡でのレイヴ・グラガンとの死闘により、シュイの大鎌＞砂時計（アワー・グラス）＜は再利用が出来ぬほどに損傷していた。特に柄の部分の破損が深刻で、修繕するにも長さと太さの両立が困難なほどに削られ、折れ曲がっていた。それだけに、生まれ変わった鎌を見せつけられた驚きも大きい。

「これは、見違えたな。あのみすぼらしい鉄くずがよくぞここまで」

「前にも軽く説明させてもらいやしたが、鎌の柄の部分をそのまま使うってのはどうしても無理があったもんで。変に寸法をいじくって使い勝手が悪くなるのもまずいですし、遠慮なく提出していただ

いた槍を使わせてもらいやした。使われている金属の比率が違うので重量はちっとばかし増えてますが、重心が狂うよりはいいでしょう」

柄の応急処置が不可能と知り、一時はシュイも諦めかけていた鎌の修理だったが、ピエールがアルマンドの槍を使って欲しいと願い出たことで解決された。彼の愛用していた槍もまた並の工匠の作品ではなく、転用が十分可能だったからだ。当初シュイは形身同然の槍を修復材料にしてしまうことに反対していたのだが、アルマンドならどちらを選ぶか、と他ならぬピエールに問われ、観念したようだ。

「ふむ、よもや戦闘中に刃と柄がズレてしまうといったことはないな？」

鍛冶師はだみ声で笑いながら太鼓判を押した。

「穴を数か所開けてボルトを通して固定し、その上から溶接を施してあるんで、耐久性は保証しますぜ。つっても、あの丈夫な金属柄がズタズタになるような無茶をされたらどんな武器だってもちませんけどね」

「武具としての性能が損なわれていないなら充分だ、これで彼も憂いなく戦線に立つことができるだろう」

「そりゃ良かった。――えっとですね」

「うん？」

「つかぬことをお伺いしやすが、これの持ち主さんって傭兵ですかい？」

ヴィレンは顔色を変えずに応じた。

「もちろんだ、大鎌を標準装備に据えた騎士団の噂など聞いたことがあるか？」

「――あー、はは、そらそうですな。それはそれで興味を惹かれますがね。するってえことは、もしかしてあれですか。エミドなんとかをぶちのめしたっていう――」

さっと口に指を立てたヴィレンを見て、鍛冶師が慌てて口を閉じ

た。
「悪い、まだ漏らされては困るんだ。最後に少しでも勢いをつけたいからな」
「な、なるほど、サプライズってやつですか」
「……そんなところかな。小細工と馬鹿にする者もいようが、此度の決戦ばかりはどんな手段を用いてでも勝たねばならないからな。――――ところで、もう一方の作業はどうだ。順調に進んでいるのか？」
「そりゃもう、急ピッチってなもんですよ。明日の朝には余裕で仕上がるんじゃないですかね。町の皆はおろか、避難民の皆さん方にも、これが戦う皆さんの助けになるのならってんで率先して協力してもらっています。こういうのを一体化って言うんでしょうな。連合国に住んでいる連中とはいえ、見も知らぬ人たちと自然に協力できるってのは、なんだか不思議な感じがしますな」
「不安に苛まれているよりは、体を動かしていた方が落ち着くからな。気を紛らわすにはいいのかも知れん」
「同感ですな、例の物にしても半端じゃない発注量でしたが鋳型でやれる分作業は楽でした。あぁ、接続部だけは手を加えさせてもらってますがね。それにしても、あんなものを戦でねぇ……、一体どうやって使うんですかい？」
ヴィレンは布に包み直した鎌を弟子から受け取った。
「……そうだな、我らの縁（えにし）を結ぶのに、といったところか」
「縁……ねぇ」

意味深な言葉にすっかり考え込んでしまった鍛冶師に、ヴィレンは少々申し訳ない気持ちに囚われた。本当ならいの一番に教えてやりたかった。基礎的な知識さえ補完されていれば、決戦で使われる戦術が希望を見出すに足るものだとわかっただろう。
それでも、セーニアの工作員が一人と確定しているわけではない。まだ町の者にまで具体的な戦術を明かせる状態ではない。

――敵を欺くには仕方あるまいな。ヒントなしに予想がつくとも思えないが。

誰しも考えが及ばぬだろう。町の者らが手掛けている何の変哲もない金属具こそが、ジヴーを救うための切り札であることを。

――――

直ぐ近くで感知魔法が展開されるのを感じ、三角屋根の上に座っていたシュイが視線を落とす。ほどなくして、ガラガラと引き戸が開く音が聞こえ、艶のある玉がひょっこりと現れた。

その玉が見知った老人の頭であるということに気づくまでに、シュイは数秒を要した。

「ほっ、部屋におらぬと思うたらそんなところにおったか」

シュイの位置を把握したスザクが手すりに手を突き、部屋から身を乗り出した。

「もう来ていたんだ、早かったな。今そちらに降りるから――」

「――よいよい、涼むにはそっちの方がよさそうじゃし――とっとと」

手すりの部分に危なっかしく立ち上がると、スザクは足場になりそうな取っ掛かりに慎重に足を伸ばした。

「おいおい、上がってくるのはいいけど落ちないでくれよ？」

「なんのなんの」

スザクは手を伸ばし、風を受けて回転している風見鶏の支柱に掴まると、一息に屋根の上へと駆け上がる。難なく隣に腰を下ろした老人にシュイは舌を巻いた。

「……意外と身軽なんだな、杖なんて必要ないんじゃ……」

「ほっほっほ、昔取った杵柄じゃ。それに、足の悪さを装っておると皆が率先して席を譲ってくれるでの」

悪びれた様子のないスザクに、シュイは食えない爺さんだ、と肩をすくめた。
「自覚しておるから安心せぃ。――どうやら鍛冶場はどこもかしこも徹夜のようじゃな、ほれ、あそこを見ぃ」

高炉の煙突からは未だたくさんの火の粉が散っていた。一番間近な工房からはギシギシと、鞴（ふいご）を踏みしめる音が聞こえてくる。鞴は空気を適度に送って火の勢いを調整するための道具。火が落ちていないということは、まだ当分の間は作業が続くということだ。
「……町の人たちも、頑張ってくれているみたいだな」
「うむ、詳細を明かせぬ我らの指示に、それでも気丈に従ってくれておるよ。ヴィレン将軍が嵌められていたことが明るみになったおかげで、逆にあやつがいれば勝てるかも、と少しはそんな気持ちになってくれたのやも知れん」

シュイは、まるで吐息のように定期的に火花吹き出す煙突に目を細める。次の戦いで、全てが決着する。兵士たちを家族の元に返してやれるかどうか。この無数の光が、この先もこの町を照らし続けるのるかどうか。
「……エルクンド殿、後悔しておいでか？」
シュイは顔を動かさずに視線だけをスザクに向ける。
「後悔？」
「い、いや、勘違いならそれにこしたことはないのだが、嫌われ役を進んで引き受けたと聞いて、もしやと思うてな」
シュイは嫌われ役、と呟き、ややあって敵間諜の拷問を引き受けた件だと理解した。思い当たった様子のシュイに、スザクが言葉を続ける。
「そなた、つい数日前までこの作戦の立案を渋っていたであろう？　あれは、町の者たちを共犯者にしてしまうことを恐れていたのではないかと、そのような考えが過ぎっての」

シュイはゆっくりと空を見上げた。煌々と輝く火花が夜空に吸い込まれていくのをその目で追っていた。

「確かに、最初はそれに近しい考えも持っていた。皆を殺人者にする手伝いをしてしまっているんじゃないかって」

「……それについては、儂らもすまないと思うておる。開戦から今日までを省みて、どこか見込みが甘かったのではないか、もう少し上手いこと立ち回れたのではないか。ここまでジヴーが追い詰められてしまったのは、全て儂らの責任ではないか。そう、自問自答を繰り返す毎日じゃ」

「そう、なんだよな」

「……ん？」

スザクが不思議そうな顔で訊き返した。

「誰もが無理して、そのくせ平気そうに振舞ってる。シハラさんも、ヴィレン将軍も、俺の仲間たちも、内心は不安で一杯なはずなのにな」

いつも、苦しんでいるのは自分だけのような気がしていた。自分だけが窮地に追い込まれているような気がして、寝ても覚めても不安でしょうがなかった。ふと気がつけば一人で戦っているような気になっていた。変わり映えしない表情の裏に、何があるかを知ろうともしないで。

「でも、そんなのは単なる思い上がりだってリーズナーさんにはっぱかけられて。……幸せなことだよな、過ちを正してくれる人が傍にいるってことは」

「リーズナーとは、あの気が強そうな娘っ子じゃな」

スザクが夜空を仰ぎながら呟いた。続いては小指を立て――

「おぬしの、コレか？」そう訊ねた。

「いや、まだだ」

シュイの即答に、スザクは笑顔を崩さずにゆっくりとうなずいた。

「そうか、『まだ』か」

言葉に含むものを一瞬で察したスザクに、シュイは照れ臭そうに横を向いた。
「今は戦を終わらせることだけに集中しなきゃな。恋い慕う言葉を囁いておいて、幻に終わらせるなんてことはしたくないし、色恋にうつつを抜かして負けてしまったら、他ならぬ彼女に折檻されそうだ」
「ほほ、確かにそれは、男として面目が立たぬな」
スザクが顔を綻ばせながら顎髭を撫でた。

『おまえが身を切って培ってきたのは、今を生きるやつらのために振われるべき力だ』
ふと、アルマンドの言葉が脳裏に過ぎる。
『無抵抗で殺されることもまた、殺人なのだからな』
続いてはアミナの言葉が。別のことを主張しているようにも思える彼らの言質は、表裏一体のもの。か弱き存在を守るためならば、戦うこともまた已む無し。それこそが、彼らが傭兵としての道を歩んできた末に辿り着いた境地。力を行使するために己に課した制約なのだろう。
大人しい草食獣とて肉食獣に喰らいつかれたら必死に抵抗する。群れの子供たちが狙われたら一生懸命庇おうとする。勢い余って返り討ちにしたとて責める者はいない。
シュイは子供の時分に学んだはずのことをどこかに置き忘れていたことに思い至った。人もまた、自然の一部であるということを。仲間の死を悼む動物たちはいても、復讐に走る動物たちはほとんどいない。いるとしたら人か、それ以上の知能を持つ高次生物くらいのものだろう。
今だからこそ思う。恨みと憎しみに囚われて復讐に走り、徒に屍を積み上げたあの時の自分は、きっと間違っていたのだと。

自省しながら、シュイはゆっくりと目を開いた。暗闇を照らす無数の灯があった。この灯を囲う人々の姿を思い浮かべ、拳に力を込めた。

――そうだ、不意打ちで滅ぼされたあの時の状況とは、似ているようで何もかも違う。

ジヴーは未だ滅んでいない。今度こそはどうしても守り切りたい。その思いは日増しに強くなっていった。エスニールの悲劇を経て力を付けてきたのは、今まさに繰り返されようとしている悲劇を食い止めるためだったのだと、そう信じたかった。シュイはセーニアを相手にそれを成し遂げることで初めて、亡くなったエスニールの者たちに顔向けが出来るような気がしていた。

「皆がそれぞれに与えられた役割を果たそうとしているのを目の当たりにして、俺も俺にしか出来ないことをしようという気にさせられた。――賭けてみたくなったんだ。この地に住まう人々の紲（きずな）は、セーニア軍如きに屈したりしないと」

「紲、世を紡ぐ糸、か。確かに、あれには万感の思いが込められているような。暴力に縁なき者たちが一丸となって強大な敵に抵抗する。まさしく、住民たちの心を推し量ってくれたからこそ生まれた戦術じゃ」

「本当にそうだったら胸を張れたけれど、正直そこまで深くは考えていなかった。なけなしの知恵を絞って、戦力差を覆すための方法を必死に脳裏に思い描いただけ、色々重なったのは単なる偶然さ」

「その意見には賛同しかねるのう」

シュイが音なくスザクの方を向いた。

「必死に足掻いた末に起こった偶然は、必然とも呼ぶのじゃよ。汚泥の中で身を縮めるばかりでは何も起きぬが、呼吸を止めねば泡（あぶく）が生じる、もがいてみせれば波も立つ。勝利の女神とてそれをむざと見逃すことはあるまいよ。そうそう、これは女子（おなご）に対しても当て嵌まるからの、そなたも努々気を付けることじゃ」

「……ふぅん、妙に説得力があるな」

意味深に笑うスザクに、シュイも含み笑いを漏らす。
「この戦いが終わったら終わったで、やること山積みだな。今度はセーニアがこちらに兵を向ける余裕をなくす方法を早急に考えなきゃいけないし、むしろそっちの方が大変かも」
溜息交じりのシュイの発言に、スザクの糸のような目が大きく見開かれた。身の安全すら定かではない今、勝利の後のことを考える余裕が出来ていることに。
まじまじと見つめてくるスザクに、シュイはわざとらしく肩肘を張ってみせた。
「もう勝つ以外に道がないんだったら、勝利を信じることから始めるさ。突貫作業にも拘わらず、これだけ準備が整ったんだ。大丈夫、きっと上手くいく」
「……うむ。策が早くに実れば、双方の被害は想定よりも少なくなるやも知れん。敵軍の動揺を誘発し、我が軍の被害を極力抑えるためにもまずは先手を取らねば――」
「――シハラ様！　こんなところにおいででしたか！」
屋根裏部屋から褐色肌の兵士が顔を出し、二人が揃って下を向いた。
「……野暮じゃのう、こんな遅くにいたいけな老人を呼び出すとは。――ん、その顔は、もしや動いたか」
小柄な男が慌しくメモを取り出す。
「はっ、狼煙によって今しがた連絡が入りました。――いたいけなシハラ様に申し上げます」
スザクがむっとするのを見て、シュイが苦笑を噛み殺す。
「ルトラバーグを張っていた草より通達。セーニア軍が今朝方、西進を始めたとのことです。戦列艦、砂船の数は五十一隻、歩兵と足並みを揃えてゆっくりと進軍している模様。感知魔法にかからぬよう距離を取っていたので陣形までは不明ですが、士気もかなり高いようです。港から発せられた鼓舞によって川辺に集まっていた水鳥

が一斉に飛び立ったとか」

報告を聞き終えると、スザクは腰をトントンと叩きながらよっこらと膝を伸ばす。

「思ったよりも早かったのぅ。エルクンド殿、今後の展開に差し障りはあるか？」

「問題ない、緊張感を維持し続けるのも楽じゃないからな。歩兵に足並みを合わせているとなると陣形もより堅実なものを選んでいるだろう。そうとなれば、C地点での接触が望ましい」

フードから覗く口元に笑みが浮かんでいるのを見届け、スザクの目尻がわずかに下がる。

「そうか、ならば明後日の朝までには動かねばの。なにやら武者震いがしてきたわい。――よし、出陣式の準備を急がせい。前倒しして明日の夕刻に取り行う」

「夕刻……、ですか？　朝方でも何とか間に合うかと存じますが」

スザクは伝令兵に頭（かぶり）を振った。清々しい夜明けの陽光は出陣に映える背景であるが、今は何を置いても兵たち一人ひとりに危機感と自信を持たせることを優先するべき。おそらくはそのように考えているのだろう。寝起きの直後は力のある声が出にくいものだし、聴き取る者たちの頭が目覚めていなければどんなにありがたい説法も右から左。いかにもスザクらしい老獪な発想だ。

――強引に戦いを進めてきた以上、セーニアに対する世論は決して芳しくなかろう。この一戦をなんとか凌ぐことができれば、あるいはジヴー軍一万二千に対し、セーニアの間諜から（無理矢理）聞き出した情報によると敵軍は三万六千余り。その数およそ三倍。個々の力量においてもセーニアは圧倒的な力を彼我に示してきた。負けることなど考えてもいないだろう。

セーニア軍には己の悪行を善行と信じ込める厚顔さがある。故に

手強く、しかし脆さも併せ持つ。目を覚まさせるには虚をつき、敵兵を正気に戻すことが肝要。

――敵軍に大混乱を誘発し、彼奴らの仮初めの結束を打ち崩す！

仕上げは――

スザクがちらりとシュイに視線を移した。多数に順応することを日々求められているセーニア兵たちの心を逆手に取る。その策略の成否は、シュイやイヴァンらを中心に据えた遊撃隊の手腕にかかっている。

「革鎧の複製は進んでいるのか？」

シュイの平坦な言葉が思考の海に割り込んでくる。スザクは思い出すように無数の星が瞬く夜空を見上げた。

「昼頃に軍営に見積もり書が届いておった。現時点で百二十弱できているそうじゃ。職人も総出で頑張っておるし資材もまだ十分にある。明日までにはもう少し増えるじゃろ」

「元が十ちょい、合わせて百五十といったところか」

「うむ、しっかしよくあんな物が手に入ったのぅ」

「その件に関しては、俺が一番驚いてるよ」

「なに？　シルフィール絡みの伝手ではなかったのか」

――あれを持ってきたのは、イヴァンだ。

即座に念話に切り替えたシュイに、スザクがほぅと感嘆した。

「一体どこから手に入れたんだかな、敵軍から盗み出す暇なんかなかっただろうし。物が物だけにどーせろくでもない使い道を考えていたんだろうけど」

「ふむ……彼の御仁にも隠し事は多いようじゃの」

「まぁ、やつの秘密主義は今に始まったことじゃないけどな。後は――――あぁ、肝心なことを聞くのを忘れてた。魔法使いの方はなんとかなりそうか？」

「選別は滞りなく終えておる。人事部に調査資料があったのが幸いしたな。正規兵と合わせて八百三名、才能というものは結構埋もれ

ているもんじゃの。実力にはバラつきがあるし制御が心許ない者も少なくないが、おぬしの要求した通りに魔法の体をなしている者を見出しておる」

スザクが大きく息を吐き出した。やるだけのことはやったというように。

「達成感に浸るのはまだちょっと早い、明日の出陣式を乗り切らないとな」

「わかっておる、あの二人の演説にこうご期待だの。さてと、老骨に鞭打ってくるとするか。エルクンド殿は――」

「気が高ぶってまだ眠れそうにない、もう少ししてから寝る」

「そうか、夜更かしは程々にな」

シュイが立ち去るスザクにひらひらと手を振った。

スザクが部屋に戻ったのを見届けると、シュイは両の手を組み、立て膝の上に置いた。ゆらりと、青い煙のような魔力が体全体から漏れ出してくる。

抜き身の剣を鼻梁に突き付けられたかのような闘気に、部屋の中にいた伝令兵とスザクが揃って身じろいだ。

「……上から、ですね」

「……そのようじゃ」

天井を見上げた伝令兵を尻目に、スザクがベッドの横に置いておいた杖を手に取った。

――いやはや、これは心臓によくないのう。肌がやたらとささくれたっておる。こんなのが敵として目の前に現れたら、並の兵では逃げるしかあるまいな。

頼りなさを覚えていたかと思えば、呼気をも遮る圧迫感を与えてくる。これもまた、シュイ・エルクンドのもうひとつの顔ということか。スザクは独りごち、高鳴る左胸を落ち着けとばかりに撫で回しながら部屋を後にするのだった。

～細雷　ｔｈｕｎｄｅｒ　ｏｆ　ｂｏｎｄｓ１３～

＞賢律院（ルーツ）＜の本部があるダミア・ブイ。町の外から眺めると角のように見えることから竜角（ドラゴンズ・ホーン）の異名で知られている。今現在の塔の傾きは５度程度。二階から三階建ての家屋が大半を占めるこの町に地上７階建て、地下２階建ての斜塔は嫌でも目立つ。傾斜と地下階層部分は元々あったものではなく、大昔に起きた川の氾濫によって粘土層に当たる部分が水を吸って軟化し、地盤沈下を起こしたためだといわれている。

日がそろそろ傾くかという頃合い。町の各所にある隊舎から兵士たちが参列し、ダミア・ブイの方角を目指して歩き始めた。数十分後には、行政地区に通じる四つの大通りを六列に整列した兵士たちが行進していた。隊長章を襟に光らせたラクダ騎兵二人が先導し、その後ろに足並みを揃えた歩兵たちが続いている。

沿道には戦地に向かう彼らを見送ろうと、大勢の町民や避難民が押し寄せていた。集まっている多さに反して、場を占めているのは静寂（せいじゃく）と哀愁（あいしゅう）。叱咤激励に類する言葉が発せられることはなく、紙吹雪やリボンテープが宙に舞うこともなかった。

いよいよ出陣という段になって不安が顔を出しているのか。兵士たちに向けられている顔は揃って強張り、否が応にも悲愴感が漂う。手を組み、ぶつぶつと神に祈りを捧げる老人がいれば、これが今生の別れだとばかりに顔を覆って泣き崩れる女もいる。幼い男の子が自分の父の姿を見つけて駆け寄ろうとするのを、姉と思しき少女が体を投げ出すようにして抱き止めている。そんな光景が随所で見受けられた。

彼らの視線を振り切ろうとするかのように、男たちは口を真一文字に結び、仲間たちの背中だけを見据え、足を踏み出していた。体の内から来る震えを誰にも悟られぬよう、いつにも増して手を大き

く前後に振っていた。
セーニア軍に一矢報いようとするも敗走を繰り返して来たジヴー軍。二万を超える兵士たちも今では半数近くになり、一度も勝ち目を見出せぬままに今日という日を迎えていた。仲間の屍を踏み越えて辛うじて生を繋いできた者たちも、今度ばかりは不帰（かえらず）の覚悟を決めているようだ。せめて、愛する家族だけでも生き延びて欲しい。沈黙の内に秘められた彼らの願いが、赤く充血した目から見え隠れしている。

――重い、な。
シュイは兵士たちの様子を沿道の奥から眺めていた。ややあって列が途切れると、以前より少しだけ重くなった布包みを背負い直し、ダミア・ブイに向かって歩き出した。
数で勝る優位性、大多数を一度に相手にすることの恐ろしさは自分も身に滲みて知っている。エスニールのみに限らず、キャノエでの大毒蜂との戦い。はたまた、エミド・マスキュラスとの死闘にしても例外ではない。シュイは人の限界を超えていただろうエミドを、それでも撃ち破る事が出来た要因は、自分の機転や力に寄るものではないと考えていた。決め手となったのは相手を一体多数という状況に持ち込めたこと。すなわち、多くの仲間たちの協力を得て、対応策を巡らすまで持ち堪えられたことに尽きるのだ。
逆境を跳ね退けた戦は歴史にも幾つか記されているものの、数に泣かされた戦はその何百、何千倍とあるだろう。人類の歴史は戦いの歴史。それでも、後の世にまで語り継がれるような戦は千年を見渡しても両手で数えるほどしかないのが現状だ。数千の兵で二万を破ったなどと謳われている戦いにしても、犠牲者の数については触れられていないことが多い。記録が残されていないという事実は、そのまま兵士たちの不安に直結する。首尾よく撃退できたとしても大軍を相手に全員が五体満足でいられるはずはない。そして、自分が亡くなった上での勝利など誰も望んではいないのだ。

夕刻。兵士が招集されたダミア・ブイ前の広場で開戦前演説が始められた。けれども始まってから数分もすると、早くも雲行きが怪しくなってきた。

壇上の後方、中央に控えているのは未だ侵攻に晒されていない国の代表者たち。制圧された国から亡命してきた元代表者。長老衆と呼ばれている＞賢律院（ルーツ）＜の代表者たち。隅の方にはヴィレンら軍の将校数名とイヴァン、シュイが並んでいる。

『輸出も輸入もままならぬこの状況、このままでは国の形を維持することすら困難だ』

『最早頼れるのは諸君だけだ、我々も出来る限り協力は惜しまない、全身全霊を懸けて頑張って欲しい！』

＞賢律院（ルーツ）＜の長老衆と言われる三人の老人がそれぞれに細腕を振り上げ、兵士たちを鼓舞する姿は、どこかちぐはぐな感じが否めなかった。場が白けている感じがした。整列している兵士たちから受ける印象は聞き入っているというより聞き流していると表した方が正しいものだ。

喝を入れようと空回りを続ける老人たちの後ろにはスザクの姿も確認できた。必要ないはずの杖に、疲れた表情でもたれかかっているように見えた。

『諸君、セーニア兵たちとて同じ人間だ！　慣れぬ気候と砂漠の熱気で疲労は隠せないはずだ！』

彼らの言っていることは正しい。かくいうシュイも優位な点を複数組み合わせた戦術を構築している。けれども、それらは前線で戦っていた兵士たちがとうに悟っていることだ。彼我（ひが）の戦力差を埋められるほど大したものではないことは、オルドレンまでの侵攻を許している時点で証明されている。

熱弁を振るっている長老衆は、兵士たちに嫌われていたわけではないようだ。本心はどうあれ、今のところ兵士たちに敗北の責任を押し付けるような発言は一度も飛び出していない。意気消沈した兵士たちを勇気づけようとする気構えも、喉を枯らしても尚声を張り上げていることからそれなりに感じられる。ただ、この場では門外漢というだけで。

並んでいる兵士たちの表情は優れなかった。現場を知らぬものが現場を語るな。頼むから早く終わらせてくれ。そういった拒絶の意志が、冷ややかな視線に乗せられて演説者に送られているようだった。

静聴している兵士たちの無言の重圧に、＞賢律院（ルーツ）＜の者たちの滑舌は次第に悪くなっていく。ついには、あの、その、えー、といった間接詞の方が多くなり、どうにも収拾がつかなくなった。

――やはり、一筋縄ではいかないか。いくらなんでも、この雰囲気下での演説は勘弁願いたいが。

一人行儀悪く柱にもたれかかったイヴァンは、難しい表情でジヴーの兵士たちに視線を走らせていた。ある程度予想されていたことはいえ、実際に自分の目で士気の低迷具合を見てみると、演説するこちらの気力まで削ぎ落とされそうだった。

自分はおろか、相手が望まぬとわかっていて、それでも演説をやらねばならないのか。そもそも、犯罪者（じぶん）の言葉が彼らの心に響くのか。イヴァンは半信半疑といった面持ちで出番が来るのを待っていた。

更に数分が経過し、ようやく長老衆の三人が言葉を切り、頭を下げる。三十分にも渡る大演説に送られたのは、支援者と思しき者たちからの疎らな拍手。ない方がまだ救われるという類の。または、拍手した方が恥ずかしくなってしまう類の。＞賢律院（ルーツ）＜の老人たちは恥入ったように唇を噛み、足早に退場した。

「続いてはヴィレン将軍の演説を行う。皆の者、静粛に」
中弛みした雰囲気を吹き飛ばすべく、最終決戦の総大将に任じられた魔族の男が壇上に続く七段の階段を三歩で駆け上がる。力強い足音に釣られて、兵士たちの伏せられていた面が揃って上を向いた。
最上段にてヴィレンは一度大きく深呼吸した。ゆっくりと左右の兵士たちを見渡してから顎を引き、今度は一歩一歩を踏みしめるように前に進み出た。巧妙な間合いの取り方だけで、囁き声を交わしていた聴衆たちが沈黙に誘われた。

ヴィレンは魔石を埋め込んだ棒状の拡声器をすっと口元に近づけた。
『此度の決戦に際し、総大将に任命されたヴィレン・カシリだ。もっとも、私が諸君に語るべき言葉はそれほどない。我々は去年の十月から今日までの苦難を共に乗り越えてきた間柄であり、その思いも遠からぬものだという確信があるからだ』
拡声魔法で増幅された己の声が周りに届いているかを確かめるように、兵士たちの列の最奥の方まで視線を走らせた。遠くにいる兵士が背筋を伸ばしたのに満足したのか、正面に向き直った。
『目下のところ、周辺各国を見渡してみてもセーニアの完勝を疑っている者はほとんどいまい。ひょっとすれば、現在ここにいる者たちの中にも勝利を諦めてしまった者がいるかも知れない。私も最前線にて敵軍の強さを幾度となく目にしているだけに、悲観的な考えに囚われる者がいたとして無理からぬことと考えている。
敗戦に次ぐ敗戦。毎朝の朝礼で点呼に応じる声が日を追うごとに減っていく。下のことにも言及するならば、厠(かわや)で用を足す順番を待つことも少なくなり、逆に見張りなどの雑務が割り当てられる時間は長くなっていく。しょっちゅう冗談を言い合う仲だった部下の食卓に、次の日には料理の代わりにひと房の髪と花束だけが置かれている。……慙愧(ざんき)に堪えぬ。力尽きていった彼ら一人ひとりに、守り

たい信念があり、愛すべき家族がいた。私は仲間を殺めた敵と同様、彼らを家族の元へと返してやれなかった己の不甲斐なさを、許すことができぬ』

感情の込められた一字一句に、何人かの兵士たちは痛みを堪えるようにきつく目を瞑った。彼らの胸中を占めたのは悲哀に寄り添う心。一度も戦場に顔を出さなかったジヴーの長老衆たちには抱けなかった共感だった。

『かくいう私自身も、セーニアとの戦いで部下や友人を大勢失った。その中には幼少期からの付き合いだった者も含まれている。二人共に根っからのガキ大将でな、お互いに反目し合ってばかりで、言葉よりは拳で語り合った回数の方が多かったかも知れない。彼とはつい先日にルトラバーグで十年来の再会を果たしたが、二、三言葉を交わしたその日の内に、無念にもセーニア兵の矢に射抜かれた。昔話に花を咲かそうと思っていた矢先の出来事だった。

セーニアは我々からたくさんの物を奪っていった。そして、今以って手を緩める気配はない。このままでは、やつらの軍は一週間を待たずしてオルドレンに至るだろう。現状を冷静に把握する限りでも、我々は崖っぷちに立たされている。しかし――』

ヴィレンは言葉を置き、後ろに控えているイヴァンとシュイを肩越しに一瞥した。

『今、私の視界には見通せぬ暗闇の中に、一条の光が差し込んでいるのが見える。運命の女神が我々を完全には見放していなかった、そう思わせてくれる出会いがあったからだ。諸君らの方から見て、私の右手にいる男はイヴァン・カストラ。我々を苦しめてきた敵将ビシャ・リーヴルモアと互角に切り結んだこともある名高き戦士だ』

群衆から驚きの声が上がるのをよそに、イヴァンが腕を組んだままぞんざいに目礼をした。

『そして、左手にいる黒衣の男はシルフィールの準ランカー、シュイ・エルクンド。かの四大ギルドの名声は今更語るまでもないだろ

う。今回、先陣を切る部隊の指揮を取ってもらうことになっている』

拡声魔石によって増幅された声が響くと、イヴァンの紹介の時にも負けぬほどに会場がどよめいた。シュイは手を脇に添え、ゆっくりと頭を傾いだ。

『時間が限られている故に今回は二人のみの紹介にさせてもらったが、他にも確かな実力を持つ傭兵が数名加わっている。彼らは敗色濃厚なジヴーの窮地を知っても尚、此度の戦に馳せ参じてくれた有志の者。上級傭兵の中でも生え抜きの者にしか太刀打ち出来ぬと言われる、成竜（ドラゴン）にも比肩せし実力者である。我々とは立場が違う故に思惑も様々だろうが、彼らの協力を仰げたことは勝利に向けての大きな進捗と言えるだろう。

もし仮に、ジヴーがこのままセーニア軍によって滅びる運命であったのならば、果たしてかような幸運がもたらされるだろうか。否（いな）、おそらくこの戦始まって以来、初めて我々に追い風が吹き始めている。決戦に向けて準備に余念のなかった諸君らと、世に名を馳せた彼らの力を以ってすれば、きっとセーニア軍とも互角以上の戦いが出来る。私は、そう信じている』

兵士たちの反応を窺い見るようにして、ヴィレンは溜息の音が拡声魔石に入らぬよう口元から遠ざけ、一つ大きく息を継いだ。些細なことながら配慮に事欠かぬヴィレンに、シュイは感心しきりだった。

『此度の決戦においては彼らの助言も得、著名な戦術指南書にも記されていない革新的な戦術を採用することになった。全てが初めての試みだが何事にも最初の一歩はあるもの。不安に思う者たちのために補足しておくと、規模を縮小した実験は成功しており、この戦術が実質的に可能なものであることは確認済みである。

来たる最終決戦に向けて諸君らに要求する働き、役割の比重は非常に大きく、まさしく勝敗を左右する。一糸乱れぬ連携と冷静な判

断力が求められるし、不測の事態が起きぬとも限らない。しかれども、此度の作戦を徹頭徹尾、成し遂げられた暁には、今ここに断言しよう。――我が軍は必ずやセーニア軍に勝てる！』

勝利宣言。敗北に対して死という罰を課したヴィレンにとっては文字通り命懸けの発言だっただろう。その峻烈な決意にあてられたのか、兵士たちの側からは歓声に混じってどよめきが後を絶たなかった。

『私の演説はこれにて終了となるが有志の戦士たちを代表し、イヴァン・カストラから一言諸君らに挨拶がある。実戦経験においては彼に勝るものはこの場にいまい。足も疲れてくる頃合いだろうが、もう少しだけお付き合い願いたい』

ヴィレンが兵士たちに一礼すると、兵士たちから一斉に軍隊式の敬礼が返された。士気が確実に向上しているのを兵士たちの挙動から感じ取ったのだろう。ヴィレンは兵士たちに背を向けてから微かな笑みを浮かべた。

一方で、先に演説した＞賢律院（ルーツ）＜の長老衆たちは揃って頬をひくつかせていた。ヴィレンが今回演説した内容の、そのほとんどが彼らにも伏せられていたからだ。このことがきちんと知らされていれば、失笑を買う様な姿を晒すことはなかったかも知れない。

彼らの本心を曝け出せばこの場で声を大にして罵ってやりたいところだろうが、先だってオルドレンに間諜が入り込んでいたことを考慮すると、身内に対しても情報を洩らさなかったヴィレンの判断は間違っていなかったことになる。階段を下りたヴィレンは当て馬にされた彼らに申し訳なさそうに目礼をし、それからイヴァンに魔石の粒が埋め込まれた棒状の拡声器を差し出した。イヴァンは黙ってそれを受け取り、壇上に上がっていった。

砂漠の中央部という立地からして、異国の者が壇上に立つ例はあまりないのだろう。珈琲色の髪の美男子に向けられる数多の視線は、

ヴィレンに向けられた類の物とはまた少し違うようだ。好奇、畏怖、期待の感情が複雑に配合（ブレンド）されていた。

当のイヴァンは落ち着いたものだ。二歩ほどの余裕を保って足を止め、細めた目だけを動かすと、普段よりも気持ちかったるそうに口を開いた。

『さて――将軍殿は俺を気遣って戦士などと紹介したが、これだけの人数がいれば俺がどういった生業の者か知っている者もいるだろう。俺はセーニアに莫大な賞金をかけられている第一級の犯罪者だ。成りゆきでこんなところに立つ羽目になったがな』

――カ……カストラ殿！

開口一言目の爆弾発言にヴィレンが絶句する。声を掠れさせて注意を促すも、イヴァンは背後からの窘めを意に介した様子もなく、淡々と言葉を紡いでいく。

『まあそれはどうでもいい。国が傾いていれば体面を気にしている余裕などないだろうからな。こちらとしてもセーニアに必要以上に出しゃばられるのは面白くない。ここらでひとつ、灸（きゅう）を据えねばならんと思っていたところだ。共闘するのはお互いに共通の敵を持ったため、ただそれだけに過ぎん』

ヴィレンが目を皿のようにした。今のイヴァンの発言は、ヴィレンを庇っていると取れなくもなかった。素直じゃないやつ、とばかりにシュイは唇を曲げた。

『先ほど将軍も少し触れられていたが、俺は以前にセーニア軍の将、当時はやつも部隊長に過ぎなかったが、ビシャ・リーヴルモアと一戦交えている。巨躯に見合わぬ俊敏さと見切り。攻守両面に隙のない手強い男だった。その時は双方共に決め手を欠いて物別れに終わったが、今まで俺が戦った相手の中でも間違いなく五指に入る実力者だ。とはいえ、絶対に勝てぬというほどではない。俺でなくとも隣でぼけっと突っ立っているエルクンドであれば互角に戦えるだろう。想定外のことが起きねば俺が抑える段取りになっているがな』

言葉から感じられる自信を酌み取ったのだろう。兵士たちの表情の強張りが少しずつ解けてくる。一方で、シュイはぼけっとなんかしてないぞという反発を押し殺しつつ、乱れていた足の向きを均一にした。

『断るまでもないことだが、互角というからには相手も同程度の実力を持っているということ。やつを相手にしている時に他の敵まで相手にする余裕はないし邪魔が入れば不覚を取らんとも限らん。先ほどから再三将軍殿が言っているように、この戦いの勝敗はおまえたちの働きに全てがかかっている』

期待と不安のどよめきが、茫々と言葉の輪郭を打ち消し合っていく。

『ジヴーに大規模な戦が起きたのは今回が初めてのようだが、砂漠に蔓延る魔物共の討伐任務はおまえたちも散々こなしてきたはずだ。これまで勝ちを拾えなかったのは敵の実力もさることながら、おまえたちの優位性が活かされていなかったことも一因。今回採用された戦術に関しては、おまえたちが砂漠で培ってきた経験が物を言う。卑屈にならず、過信もせず、持てる力を存分に発揮して役目を果たして欲しい。――以上だ』

場は緊張感に満たされ、先ほどよりもひりついていた。しかし、決して悪い空気ではなかった。ヴィレンが兵士たちに冷静に現状を把握させ、イヴァンで難敵ビシャ・リーヴルモアに対する恐怖を和らげ、気を引き締めさせる。二枚看板での士気向上は成功に終わった。

――おぉー、何だかんだできっちりとまとめてきたか。よしよし、偉いぞイヴァン、やれば出来る子だったんだな。

イヴァンの体がぴくりと動き、後ろを振り返った。円らな瞳で音無き拍手を送っているシュイをじと目で睨み、それから意地の悪そうな笑みを漏らした。

「あぁ、どうやら最後に、シュイ・エルクンドから締めの言葉があるそうだ」

――ぶっ！

と、思い切り吹き出すシュイに構わず、イヴァンが拡声器を無造作に放り投げた。立て続けの条件反射を余儀なくされ、目が勝手に魔石を追い、手が勝手に落下点へ移動。無事に受け取り、落とさなかったことに安堵し、そして激しく後悔した。

――な、何やってくれてんだよ！　台本と違うだろ！

――助力を頼んだおまえが暢気に傍観しているのを見ていたら、少しばかり不愉快になった。

――だからって気まぐれでアドリブ入れるなよ！　原稿だって用意してないんだぞ！

――知らん、いつも通りに適当に喋ればいいじゃないか。屁理屈を捏ねて口車に乗せるのはおまえの十八番だろう。

読唇を交わす二人に、ヴィレンはどうしたことかと視線を左に右に揺り動かした。止まってしまった出陣式に、兵士たちがにわかにざわつき始める。後ろから発される戸惑いの声に、ヴィレンは焦った様子で声なき口論を繰り広げているシュイに近づき、耳打ちする。

――エ、エルクンド殿、悪いがここはひとつ頼まれてくれんか。カストラ殿が口にしてしまった以上、やらないと上の統一見解がないのではと勘繰られかねない。ようやく高まってきた一体感をここで損なったら取り返しがつかん。

――ヴィ、ヴィレンさんまで。そんなのは何かの間違いってことで片付ければ――

――つべこべ言ってないでさっさと行って、こい。

「どわ！」

言いざまに、一瞬にしてシュイの背後に回り込んだイヴァンがシ

ュイの脇腹を突き飛ばした。ヴィレンとのやり取りに気を取られていたシュイは、つんのめりながらも壇上の手前でぎりぎり踏み止まる。

「ってて！　この野郎よくも――って……あ……」

「さっきから何ごちゃごちゃやってんだ？　って、あれ、シュイが前に出てきたぞ？」

アミナたちと一緒に広場の隅っこの方で演説を聞いていたピエールが、壇上の人影を指差した。アミナがピエールの示した方に赤い目を細めた。

「……ふぅむ？　当初の予定と違うようだが。――まぁよいか、折角あの場にいるのだし。言いたい事があると申すならば聞いてやろう」

アミナが腰を支えるようにして壇上のシュイに視線を合わせた。どことなく誇らしげなその様子に、ヴィオレーヌがくすくすと笑う。

――ど、どうするんだよ、これ。

夥しい数の視線が、一斉にシュイの姿を捉えていた。何とか口を動かそうと試みるが、いつもは遠慮を知らない言葉がここぞとばかりに奥ゆかしさを発揮し、喉の奥に引っ込んでしまっている。喉がやたら渇いているのも熱気のせいではなさそうだ。フードがあるからこそ辛うじて立っていられるが、顔まで凝視されていたら逃げ出しているかも知れなかった。

「うわぁ……完全にびびってるっつうか、遠目から見てもガチガチだな」

「……なんと惰弱な、出てきたからにはもっとこう、ビシッとした

姿を見せぬか」
　隣から吐き出された厳しいお言葉に、ピエールがうへっと息を漏らした。
「なんだその反応は？　私などは１４の成人式に王城のバルコニーで１０万もの群衆に向かって富国論を説いたのだぞ。大の大人がこの程度の人数にびびってどうするのだ」
「……いや、そりゃアミナ様の度胸が異次元なだけでしょ。いい加減自分の凄さを自覚してやらないとシュイが可哀想っすよ」
「私見ばかりを述べているわけではない、甘やかしてばかりでは男は大成しないと巷で人気の小説にも書いてあったのだぞ」
「へえ、小説なんかも読んでおられるんですね」
　ヴィオレーヌが会話の合間に口を挟んだ。アミナは少し得意気に胸を張る。
「うむ、文芸のみならず、ファッションも追っている。今のリーズナーの格好は去年の旅ファッション誌に出ていた人気スタイルだ。民がどのような考えに共感し、どのような物を欲しているのかは、上に立つ者が常に気にしてやらねばならぬことだからな」
「……それはそれとして、たまには飴をあげないと」
「馬とて餌で釣らぬとも鞭打てば走るであろう。こんなことでは国民へ向けての演説も覚束ないではないか」
「いやいや国民て……、あいつがんなことをする機会が後にも先にも――」
　と、そこまで言いかけたピエールはアミナが（おそらくは無意識に）言い含めているものに気づき、ふふーんと鼻で笑う。
「な、なにがそんなに可笑しい」
「いえいえ？　別に」
　頬を紅潮させるアミナに、ピエールは手の平を空に向けながら首を振った。その直後だった。
『あーっと……その……本日はお日柄もよく』

音声がピエールの脳に辿り着き再生された。口を両手で押さえるのと噴き出すのが同時だった。指と口との隙間から放屁にも似た音が鳴った。

「……な……な」

――なにをやっておるか！　結婚式典の挨拶ではないのだぞ！

口を抑えてぴくぴくと肩を上下させているピエールをよそに、アミナは真っ赤になった顔を両手で覆ったまま俯いた。すっかり縮こまった姿は、演劇の最中に致命的な失敗をやらかした我が子を目撃してしまった親のようだ。

「あ、あはは、ちょっとあがってしまっているようですね」

ヴィオレーヌのフォローの言葉も、今のアミナの耳には届かぬようだった。

『……じゃなくて、……ええと、そう、右手を上げてくれるか』

意図が不明な指示に、兵士たちは戸惑いの表情を浮かべつつおずおずと手を上げる。一斉に兵士たちの手が上げられたのを見て、ピエールはもはや呼吸もままならぬようだった。

「ぷひゅっ……く、くく……な、なんだそりゃ、新しい体操か？……ちなみに、俺の予想だと今度は左手――げほっ」

「ええい！　そなたも少しおちょくり過ぎだ！」

ついに我慢し切れず、アミナがピエールの脇腹を肘で小突いた。床に突っ伏したピエールは打たれた腹を両手で抑え、ぴくぴくと痙攣を繰り返している。

しばしの間、アミナは腕を組んでそっぽを向いていたが、一向に起き上がらぬピエールの様子をちらりと見下ろし、流石に心配になったのだろう。ばつの悪そうな表情で手を貸そうと屈み込んだ。けれども、良過ぎる三角耳に届いたのは痛みによる苦鳴ではなく、必死に押し殺した笑いとたどたどしい息使いだった。

――ば、馬鹿にしおって！

まるで自分が直接扱き下ろされたかのような腹立たしさがあった。

怒りに身を震わせながら、アミナがゆっくりと片足を持ち上げた。
このままピエールを踏み抜きかねないと思ったのか、ヴィオレーヌが手慣れた様子で二人の間に入り、興奮したアミナを取り成し始めた。

『……ありがとう、下ろしてくれ』
そのようなことが外野で起きているなどとは露知らず、シュイは拙い時間稼ぎをしつつ一生懸命に頭を回転させていた。ヴィレンが兵士たちに現状を把握させ、イヴァンで難敵ビシャに対する恐怖を和らげる。そこまではいい。そこで完成されている気もする。その二点について、彼ら以上に上手く説明できるとは思えないし、二番煎じは高まりつつあったテンションを盛り下げてしまうだろう。
彼らになくて自分にあるもの。彼らよりも上手く話せるもの。考え抜いた末に、答えは出た。ひとつだけ。けれども、それは士気を上げるには逆効果になるかも知れないものだった。
そして、頭のどこかではそう考えつつも、口が勝手に動いていた。

『俺は――全てを失ったことがある。他ならぬ、戦争で』
ピエールの震えがピタリと収まり、下に向けられていたアミナの赤い目が素早くシュイの姿を追っていた。

～紲雷　ｔｈｕｎｄｅｒ　ｏｆ　ｂｏｎｄｓ１４～

星くずで象られた銀河と散りばめられた大小の星が夜空を織り成していた。誰もが見惚れるだろう美しい空とは対称的に、くすんだ灰色の大地には楕円型の巨影が蠢いている。

大勢の歩兵によって組み上げられた大きな円陣の中央には、十隻の大型船と二十隻の中型船で構成された船団が、やや距離を置いて両翼にも中型船が十隻ずつ確認できた。歩兵たちと接触するのを避けるためか、一定の距離を保ちながら低速並走している。

個性の薄い船が居並ぶ中で、中央部のやや後方に取り分け目立つ船が見受けられた。先端には水瓶を肩に抱えた裸夫人の船首像。三本の立派な帆柱が甲板から天に向かって伸び、それぞれに横帆が掲げられている。搭乗数四百名を悠に超える旗艦『ナルヴィニ』の威容である。

世界最大級のその砂船には、セーニア軍総司令ビシャ・リーヴルモア他、数名の将校たちと三百を超える精鋭たちが搭乗していた。

ルトラバーグからオルドレンまでは、砂船を日夜走らせれば四日足らずで到達する。とはいっても、歩兵たちと足並みを揃えればその何倍もの時間がかかるし、行軍が遅くなる分＞砂鮫人（シャーラギ）＜などの魔物に遭遇する回数も増えてしまう。

進軍速度を重視していたこれまでとは違い、どっしりと構えての行軍。短期間の内に目的地に辿り着けぬのをもどかしく思っていた将校もいたが、そういった些細な不満は日を追うごとに消えていった。ルトラバーグを出てから九日目には、オルドレンの町まで約１２０ｋｍの地点に到達。士気も高い水準で保たれていた。

革鎧を着込んだ兵士たちが一歩一歩足を踏み出す度に、彼らの履いている靴が砂地を抉り、くるぶしの辺りまでが砂礫に埋まる。今

宵、円陣の先頭を進む兵士たちは松明を手にしていない。空気が澄み切って星がいつも以上に明るいためか、伸び縮む影が斜面に薄く映し出されるくらいの照明は確保されている。

夜襲を仕掛ける際には敵の状況把握を遅らせるために、照明を手にしている者を真っ先に狙うことが多い。腕に覚えがある者でも、闇に乗じた不意打ちを防ぎ切るのは困難だ。セーニア軍には感知魔法の使い手もいるが、距離が離れていると少人数の探知は心もとない。はたまた、気配を殺せる手練に対して効果が薄いことなどから、完全に信頼できるものでもない。

外側の兵士たちが潜伏できそうな起伏に目を走らせる傍ら、中後列に陣取る部隊には比較的穏やかな空気が流れていた。部隊の配置がどこになるかで生存率は相当違ってくる。騎士の価値観において先駆けが誉れとされているのもそういった理由によるものだ。

勝ちを意識し始めた兵士たちは、戦のこと以外にも考えを巡らせていた。戦の褒章を頭に思い浮かべてにやける者がいれば、故郷で待っている家族との再会に思いを馳せる者もいた。はたまた、行き付けの食堂の看板娘とのあらぬ逢瀬を妄想し、鼻の下を伸ばす者も。

油断はもっての外であるが、日がな一日戦仕事のことばかり考えるのも気が滅入る。加えて、彼らには緊急事態にも対応できるだけの訓練を積んでいるという自負があった。場馴れした兵士であれば、寝ている時でも物音が生じた瞬間に覚醒し、反射的に枕元の剣を手繰り寄せている。弛まぬ訓練により培われた実力と自信。何よりこれまでジヴーに全勝しているという事実が、彼らに落ち着きを与えていた。

日没から二時間ほどが経過し、兵士たちが一時休憩の準備を始めようとしていた頃。ふと青白い蛍火のような魔石の光が西から飛来してきた。その光は歩兵たちの頭上を掠めるように通り過ぎ、砂船

の船団へと吸い込まれていった。
そして、霊体に込められていた情報は、のんびりと構えていた将校らを戦慄させるに足るものだった。

「……よもや、ジヴー側にイヴァン・カストラがな」
ビシャの重々しい呟きに、将校たちの顔が自然と引き締まった。
セーニアの名だたる重臣たちを葬り去ってきた悪名高き戦士。暗殺が立て続けに行われていた当時、外遊の外回りや要人護衛任務に就いた経験のある者たちは、彼の実力を嫌というほど味わっていた。
婦女子に人気のありそうな甘いマスクとは裏腹に、一騎当千の実力を持つ暗殺者。手刀で剣戟を寸断し、回し蹴りで辻風をも生み出し、水上をも駆ける怪物。辰力のみならず付与魔法も使いこなし、人の壊し方にも精通していることから並々ならぬ医療知識があるのではと疑われている。
およそ無手とは思えぬ攻撃力もさることながら、真に恐るべきはその俊敏さにある。遠方に佇んでいるかと思えば、瞬く間に視界から忽然と消えている。障害物のない場所であればまだしも、森や街中などの煩雑な場所で遭遇したら対処のしようがない。余所見をした途端にあらぬ方向から、当たれば致命傷の一撃が獲物を狙い澄ました燕のように飛んでくる。そして、実際にそうやって仕留められた仲間は数知れない。
静謐にして精密。目にも止まらぬ速さという言葉を誰より体現する男。飛び道具や攻撃魔法を当てようにも野性の獣のような俊敏さと老獪な読みは一切的を絞らせず、一流道場の師範クラスですらその動きを見切るのが困難だと言われている。
また、ビシャがイヴァンを撃退したという逸話にしても、逆に彼の名を高めている節がある。騎士団に所属して二十数年。今は亡きコンラッド・ディアーダに次ぐ出世頭の一人ビシャ・リーヴルモア。セーニア軍に所属している誰もが知っている基礎知識である。数々の実績の中で彼がこれまで仕留め損なった者は片手で数えるほどし

かいない。小勢で数々の暗殺を成功させ、ビシャを相手にした今も生き残っていることが、彼が非凡な人物だという何よりの証というわけだ。

そんなわけで並々ならぬ評価を頂いているイヴァンであったが、彼がジヴーに味方しているという問題の報告については、懐疑的な見方を示す者も少なくなかった。

「数年前に立て続けに起きた暗殺のようにやつらの一味だけが加わっているというのならまだ得心が行きます。ですが、そこにシュイ・エルクンドまで加わっているとなると流石に出来すぎと言いますか、信憑性に欠ける気がしますな。賞金首と傭兵は天敵同士、そう簡単に手を組むとは……」

「儂も同意見だ。定期報告が途絶えてから先ほどの報告まで、いくらなんでも時間が経ち過ぎているのではないか？　潜伏していた間者が敵方に絡め取られている可能性も否定できぬ。第一、いくらやつが我らに恨みを抱いていたとしても、由縁なしに敗北寸前まで追いつめられた国を救おうなどと考えるかどうか」

偽物の可能性を示唆する副官とネルガーの提言を聞き流しつつ、ビシャはグラスの中にあった氷を奥歯で噛み砕いた。

「しかし、どうせならもっとましな嘘を流すような気もするな。他四大国が援軍を寄越したとかの方が我々を焦らすには適している」

太ましい審問官ディビ・ミョールの言に、何人かの将校が相槌を打った。確かに、いきなりイヴァン・カストラとかシルフィールなどと言われてもピンと来ないのは事実だ。それが回りまわって情報に真実味を与える。偽情報を信じ込ませようと思うならもう少しましな情報を流すだろう、と言いたいらしい。

けれども、もし仮に全てが本当だと頭の痛い問題が出てくる。勝ちが揺るがないにしても四大ギルドの一角が本格的な支援をしているとなれば相当な被害が出ることが予想される。犠牲者が多くなればルクスプテロンとの戦を前にして、一旦収束した反戦論が三度息

を吹き返してしまうかも知れない。

「けれども、ヌレイフでも静観に徹していた連中が敗色濃厚なこのタイミングで動きますかね？」

若年将校が真向かいで頬杖をついている軍師、ロッグ・ケトゥレフにお伺いを立てる。

「そうさな、私もどちらかといえば独断行動の線が濃いのではと睨んでいる。所詮は傭兵など無頼者に過ぎん、金と名誉の匂いがすればどこにでも現れるものだ」

「でしたら、エルクンドがカストラを狙っているというのはどうでしょう。エミド・マスキュラスの次に狙いそうな犯罪者といったら彼奴くらいしかないのでは」

「油断させて寝首を掻く、か？　そこまでいくと飛躍しすぎではないかな」

「待たれよ、二人に思わぬ接点があったとしたら今までの仮説は全部破綻するぞ。兄弟とか友人とか」

「そこまで疑い出したらキリがないわ。ただ我々を混乱させるためのはったりという方がスマートな発想だと思わんかね」

およそ推論ばかりが羅列され、会議は一向に収束する様子を見せない。しかれども、現状こちら側からオルドレンに探りを入れる術がないのも事実。潜伏している間者に返答を促そうと思っても、夜に使う連絡用魔石は目立ち過ぎる。敵の手に落ちてないと仮定して、潜伏先が敵側に露呈したら目も当てられない。

会話が途切れた合間を見計らって、ビシャが持っていたグラスを円卓に戻し、ドアの前に立っていた伝令兵に横目を送る。

「敵の本軍は、もうオルドレンを出ているのだったな」

「ふぁはっ！　……し、失礼致しました！　町人に扮しております間者によれば三日前に町を発ったとのことです」

突然の声かけに出かけていた欠伸を飲み込み、伝令兵がきまり悪そうに報告書に目を走らせた。ビシャは溜息交じりに椅子にふんぞり返る。

現状から判断するに敵軍が打って出てくることはほぼ確実。オルドレンの町はその大きさ故に全体を覆い尽くすほどの塁壁（るいへき）が存在しないため、町を焦土にする覚悟がない以上防戦に徹するのは不可能。ジヴー連合の鉱業の生命線をそう簡単に諦められるわけがない。

オルドレンを出たのが三日前だとすると、そろそろ自軍と接触していてもおかしくない。ただ、もし本当に一流どころの戦士が加わっているとなれば、ひとつどうしても納得のいかぬことがある。そもそも相手にとってはこの情報を伏せていた方が何かと都合が良かったはずなのだ。兵の質が総合的に劣っている以上、間隙を縫って強力な手駒を指揮系統にぶつけるというのは有効な策だと思われる。ここに集う将校たちの多くはそれに気付いている。ただ、ネルガーが指摘したようにこのタイミングで送ってくるのも不可解。だから余計に混乱する。

これ以上時間をかけても最終的に出る案にさほど変わりはないだろう。そう考えたビシャは皆の出していた提案を総括して善後策を思案。即断即決する。

「念には念を入れ、やつがいると考えて行動した方がよかろう。両翼の砂船を歩兵の外側に出し、広めに展開して多方面からの敵の出現に備えよと伝えろ」

「はっ」

「それからもう一点。万が一手に負えそうもない敵が現れたら、すぐに旗艦に知らせるようにと付け加えておけ。こちらでも精鋭の二個小隊を派遣できるよう手筈（てはず）を整えておく」

ビシャが語尾を結ぶと、伝令兵は「かしこまりました」と一礼し、足早に部屋を出て行った。

それからほどなくして、小高い丘陵に建てられたオベリスクが見えてきた辺りで、早くも左翼側の砂船から魔石による報告が入った。砂船の通った痕跡が複数、丘陵地一帯に残っているとのことだった。『航跡は一直線に西の方に続いている。おそらく敵軍を偵察に来ていた砂船が近づいてくるこちらの大軍に気付いて慌てて引き返したのでは』

左翼の船団を率いるガレット・リブライからの魔石の文面を確認し、しかし将校たちは釈然としないものを感じていた。付近一帯は比較的開けた場所にある。奇襲を仕掛けてくるとしたらもう少し先ではないかと読んでいたのだ。「この先で待ち構えています」と言わんばかりに、わざわざ砂船の痕跡を残すような真似をするだろうか。

あれこれと考えを巡らせる将校たちを嘲笑うかのように、船外ではまたしても大きな異変が起こっていた。

帆柱に備え付けられた見張り台でまどろんでいたセーニア兵が勢いよく起き上がった。籠から身を乗り出すようにして、彼方にある地平線に目を細める。

――なんだ、今の。……夢、じゃないよな。

見張りの男は自分の頬をつねり、痛みがあることを確かめてから左右の砂船に目を走らせた。見れば、並走している船の見張りたちも遠眼鏡を手にしたり、甲板にいる船員と連絡を取り合ったりしている。

これだけの人数が一斉に見間違えるはずもない。確信を得た男は、腫れぼったい目蓋を腕で拭い、懐に忍ばせていた遠眼鏡を取り出した。

先ほど男の視界に映ったのは光の軌跡だった。地平線の少し上辺りを、小さな光が南の方から北に向かって移動していった。

オルドレンの町の明かりか。真っ先に浮かんだその考えを、男は即座に投げ捨てた。地形図を見る限りではまだ三、四日の距離があるはずだ。照明を確認出来る距離ではない。

ならば箒星（ほうきぼし）か、とも疑ってみるが、それにしては尾が異様に長く、光の動きからも何やら人工的な匂いがした。ニュアンスとしては流れていたという感じではなく、連なっているように見えた。遠眼鏡の狭い視界に映るのは闇ばかり。周辺に異常がないかと見回すも特別変化はないようだ。耳を澄ましてみても、砂船の駆動音以外には何も聞こえない。

消去法で導き出された結果は、敵軍の照明魔石による合図。連鎖したように見えたのは人が魔石の光を目視しながら連続使用したことで起きたタイムラグによるもの。そうだとすれば一応の説明がつく。

けれども、敵の合図が何を意味するものかまではわからない。加えて、地平に大きく展開するほどの軍勢を備えているのかという疑問、もっというと不安が残る。

そこまで考えたところで、男はふと、中央付近の砂船の窓から漏れている明かりを眺めた。周りの船の様子から察するに、今の光は相当に目を引いたようだ。司令部の方も気づいているか、そうでなくとも報告がいってるだろう。ほどなく次の支持が届くはずだ。

男は毛布を肩に羽織ると、眠気を覚ますべく己の頬を挟んで揉み解した。

「地平線に光、か。確かに、敵軍の可能性が一番高いだろうな」

甲板にいた兵士たちからの状況報告を聞き終え、ビシャは周りの意見を聞くべく将校らの顔に視線を走らせた。

「こちらも敵兵力を完全に把握しているわけではありませぬ。一先ずは歩兵を部隊単位で先行させて確認してみてはいかがでしょうか。

何かの罠であったとしても、それが露見したところで包囲戦に持ち込めば……」

ロッグがそう言うと、ビシャは顎を手で支えながら検討に入る。ジヴーの兵たちだけならともかく、上級傭兵に類する者が敵兵たちに混じっていれば短時間で各個撃破されぬとも限らない。この場で兵力を下手に分ければ被害が拡大するだけに終わる可能性もある。かといって、何もしないで進むのも少し気持ちが悪い。

結局、ビシャはロッグの提案を受け入れ、伝令兵に歩兵の陣形を広げるよう指示させようとした。だが――

「……あれ、……おかしいな」

伝令兵の焦りを含んだ呟きに、円卓に座っていた将校たちがそちらを向いて首をかしげた。

「……すみません、その、連絡用魔石が発動しないのですが」

戸惑う伝令兵の表情に、将校たちの目が見開かれた。

「――ちょっと貸してみろ」

「あ、はい」

石を差し出した伝令兵の手に日焼けした太い手が伸びた。魔印の掘られた石を受け取り、中年将校が念を込めようとする。だが、一向に石から光が放たれる様子はない。

「な、なぜだ？」

「まてまて、ちゃんと確かめてみたのか？　普通の魔石と間違えているわけではあるまいな」

手に乗せた黒い石をまじまじと見つめる将校に、ディビら数名の将校が不安げに駆け寄った。

「い、いえ、そんなことは。ちゃんと選り分けてあった物ですし。今朝までは確かに使えていたはずなのですが」

伝令兵が俯き気味に頭を掻いた。

「……もしや、敵も結界を？」

「それはありえぬ、こちらとて結界を構築するにはかなりの準備期

間と人手を要したのだぞ。考えついたところでそうそう実行できるものではない」

ネルガーとロッグが難しい顔で視線を交わす。

「――可能性としては」

ビシャが話を切り出した瞬間、将校たちの注目が一斉に彼に集中する。

「我々が＞妨魔の柱（アンチ・マジック・ピラー）＜で形成した結界を逆に利用したのかも知れぬ。こちらが張った結界は連絡用魔石が使えるぎりぎりの出力に抑えていたからな。柱を何本か継ぎ足せば出来ないこともないはずだ」

「なるほど、それならどうということもないですな」

ビシャのわかりやすい説明に周りの将校から安堵の息が吐き出された。だが、その台詞を吐いた本人の顔から険しさは抜け切っていない。

結界の構成は支点を足しただけで効果が増大するような単純なものではない。式の組み方を知り、魔力を増幅する流れを正確に把握する必要がある。少なくとも数日そこそこで出来ることではない。水面下では早くからこちらの裏を掻こうとしていたのだろう。

――敵もただ敗北を重ねていたわけではない、か。少し侮っていたな。多少のリスクは追わねばなるまい。

ビシャは素早く頭を切り替え、伝令兵の方へと向き直る。

「――拡声魔石にて周囲の船舶に通達。急ぎ連絡手段を切り替えるよう支持を出せ。こちらから発信する手筈を整えるのも――」

ドン、と船室のドアが蹴破られたかのような勢いで開いた。間断なく、鞘走りの音が室内に乱れ飛び、侵入者が近衛兵の象る刃の格子で迎えられた。

「あ……」

「――ばっ、馬鹿者がぁ！　ノックくらいせんか！」

「も、申し訳ありません」

見知った伝令兵ということに気付き、危うく斬りかけた近衛兵が、

唾を散らす勢いで怒鳴りつけた。将校たちの視線から緊張が抜け落ちていく。ビシャとネルガーを除いて。

「……それで、何事だ？」

「――感知魔法領域内に侵入者だ！　方位……南南東！」

西瓜ほどもある水晶を触媒に用いて感知魔法を展開していた老人が興奮気味に声を高めた。机の上に置かれ、軸で固定された地球儀のような水晶球に星屑のような細かい光が端から少しずつ混在していく。旗艦『ナルヴィニ』のやや後方。船団の最後尾の砂船では魔力が次々に感知されていた。

「――かなり多いぞ！　密度からして数千以上！　急ぎ各船舶に連絡せい！」

老魔法使いが喉を潰さんばかりの勢いで伝令兵に叫んだ。伝令兵が棚に置いてあった連絡弓を鷲掴むと、慌ただしく階段を上っていく。

時を同じくして、セーニア軍の斜め後ろにて入道雲のような砂煙が巻き起こった。中央から左右に広がるようにして、丘陵に灰色の壁が築かれていく。

高々と舞い上がった灰色の砂煙を穿つようにして、漆黒の大河と化した軍勢が姿を現し、怒涛の勢いでセーニア軍に接近してきた。一番近い歩兵部隊との距離は既に1？足らず。異変を知らせる照明魔石が船の上空で二度、三度と明滅し、間断なく響く拡声音が広範囲に響き渡る。

『総員、第一級臨戦態勢に入れ！　繰り返す、第一級臨戦態勢に入れ！』

『ナルヴィニ』内部にて将校たちが敵襲の報告を聞いている最中、

開いたドアから警戒音声が漏れ聞こえた。
「――具足を持て！」
「儂のもだ！　急げ！」
舌打ちを交えつつ、ビシャたち将校らが慌ただしく席を立ち上がった。壁際に佇んで空気と化していた小間使いたちが、急ぎ足で出ていく将校たちに混じって部屋を後にする。
「ようやく仕掛けて来ましたな、どうやら敵も覚悟を決めたようで」
部屋に残っていたロッグ・ケトゥレフが肩間接をこきこきと鳴らす。
「今までと同じようにはいくまい。――策はおまえに任せるが捕虜は不要だ、全員始末するよう伝えろ」
「御意」
劣勢にもめげずに牙剥く者を放置しておけば、後々セーニアの禍の芽になりかねない。ビシャの言葉の裏にあるものを正確に読み取ったロッグは、上階の兵たちにその旨を伝えに行く。

――我が軍を相手に兵力を分散するほどの余裕はやつらにはないはず。となると、先ほどの光はフェイクか？　イヴァン・カストラがいるというのも……いや。
肌を痺れさせるような緊張感に汗がひいていく。今まで培ってきた戦闘勘が、自分に匹敵する存在が傍にいると告げていた。そうと意識しただけで口の端が持ち上がっていく。全力で剣を振るえる相手がいることはささやかな幸福だ。

小間使いの二十歳前後の女たちが四人がかりで鎧を抱えて戻ってきた。ビシャは振り向きざま笑みを消し、その場で足を軽く開くと両手を横に伸ばした。失礼しますと一言断りを入れると、女たちは手慣れた様子で分厚い肩にサスペンダーを通し、きつくなりすぎないように腰紐の締まりを調整していく。
部屋の外からはどたどたと、足音がひっきりなしに聞こえる。ま

るで祭りのような慌ただしさに、ビシャは内心ほくそ笑んでいた。皆口にはしなかったものの、歯応えのない戦いにいい加減飽いていたのだろう。対ルクスプテロン戦への景気づけにはちょうど良いかも知れない。

ジヴーの者たちにしても、カストラやエルクンドに寄せる希望が大きければ大きいほどに、二人を踏み潰された時のショックも大きいだろう。完膚無きまでに叩き潰しておけば領土制圧を一気に進められる。考えようによっては二度と断ち切れぬ鎖をつける絶好の機会だ。

必要以上に気負う必要はない。平常心と自然体こそが力を効率よく発揮する最たる要素。どれほどの達人であろうと心を乱せば不覚が生じる。多少の犠牲は出るだろうが、こちらとて最大規模の兵力で戦いに臨むのだ。持久戦に持ち込めれば負けの目はない。

――＞魔遺物（ヴァイーラ）＜が我が手中に収まるのも間近か。さすれば、ナイトマスターなどとケチ臭いことを言う必要も、ないのかもしれんな。

鎧を纏い終えたビシャは鋭い犬歯を野獣のようにギラつかせ、供の者らが心臓の動きを止めかねぬほどの殺気を纏って船室を後にした。

楕円に保たれていたセーニア軍の陣形が、南東から一直線に迫ってくるジヴー軍を迎え撃つべく、左周りに円を描くように崩れ始めた。

ピエールは砂丘の砂地に片膝をつくようにして、彼方にあるセーニア軍の船の動きを隈なく観察している。狭い円形の視界を紙芝居のように素早く入れ替え、次々に敵船の挙動を捉え、全体像を捉える。

ほどなくして、ピエールが筒型の遠眼鏡を目から遠ざけ、後ろを振り向いた

「戦列交代の速度が明らかに鈍ってるな、相互連絡が上手くいってねえのは間違いなさそうだぜ」

朗報を耳にしたはずのシュイがちっと舌を鳴らし、不満げな表情で両手をポケットに突っ込んだ。

「……裏でこんなこと企んでたんなら、せめて俺たちには教えておいてくれたってよかったのにさ」

『ジヴー軍が粘ってくれている間、ルクセンにも少しばかり小細工する猶予が出来たのでな。セーニア側が使っていた＞妨魔（アンチ・マジック・ピラー）の柱＜に柱を継ぎ足して、より強力な結界を組むよう頼んでおいた』

三日前、オルドレンの港で船に乗り込む直前、イヴァンが突として切り出した台詞が脳裏に再生された。上手くいけば敵軍の強化魔石の使用を妨害することが出来、大きなアドバンテージを奪えるとのことで、シュイたちと会う前から予め内輪で計画していたらしい。

だからといって、連絡が遅れたことには納得がいくはずもない。秘密裏に進めていた計画をぎりぎりまで明かさなかったということは、自分たちを信用していなかったのと同義だ。

「これって、ルクセンの遺跡にいた二人組の仕業か？」
ピエールは野性味ある大男と口の減らない少年の姿を頭に思い浮かべた。
「二人……、ああ、イルナヤとリックか。まぁ、外れではない。あいつらに頼んだのは各町に散っている同志との繋ぎ役兼護衛役だ。魔石が使えなかったせいでセーニアの使った結界の形状把握が間に合うかどうか微妙だったんでな。上手くいくかもわからぬものを作戦に組み込むわけにもいかないから黙っていた。だからまぁ、そう拗ねるな」
「別に拗ねてねー」
確かに、その目論みが失敗に終わったところでジヴー軍に直接的な影響はない。あくまでセーニア側に悪影響を及ぼせるかどうかという問題だ。イヴァンの言う理屈くらいわかっている。ただ、気に食わないというだけで。
不満げに鼻を鳴らすシュイの後ろでは、ヴィレンが隊長たちと長々と打ち合わせをしていた。が、ようやく話し合いが終わったのだろう。隊長たちがメモ書きを片手に、西側の船団の方へと移動を始める。
「イヴァン殿、そろそろ我々も動こう。シハラ殿の本軍も敵に気取られた頃だ」
「ああ、わかった」
素っ気ないイヴァンの態度にも慣れたのか、ヴィレンは特に気にした様子も見せず、後ろにいる兵士たちに向き直った。兵士たちの目に先日までの曇りや諦めといった感情は見えない。意識的にも戦闘態勢に入っているようで、時折視線だけが物陰の方へと向いている。演説の日に立ち込めていた淀みも、今はもう感じられなかった。
ヴィレンはひとつ大きく手を鳴らし、兵士たちの注目を集めた。

「――これより作戦名（コード）『＞紲（サンダー・オブ・ボンズ）の雷＜』を開始する！　近衛を除いた者たちは私の指揮下から離脱、各部隊長の指揮下に入れ。流れは再三確認してきたので省略させてもらう。件の合図は照明魔石を複数個使用して知らせる手筈になっている。接合点となる砂船の乗組員は合図が確認され次第、部隊長、副隊長、及び兵長の指示に従い、速やかに退艦せよ！」

『はっ！』

一致した敬礼に、ヴィレンは満足そうにうなずいた。次いで、その表情が厳しさを増す。

「……厳しい戦になる。ジヴー連合始まって以来の最大の試練、私も含めてここにいる何人かは生きて戻ることも叶わぬかも知れない。――だがそれでも！　私は諸君らに言いたい。あえて言わせて欲しい！　必ずや家族の元に生きて帰り、今度は朝日を肴に、勝利の美酒を酌み交わそうではないか！」

『おぉーーー！』

兵士たちが拳を高々と掲げ、雄叫びを上げた。鼓膜を揺さぶる峻烈な声は戦意を向上させるのに申し分ないものだった。

「――諸君らの一気呵成（いっきかせい）の働きに期待するっ！　行け！」

ヴィレンの命に応じ、兵士たちが慌ただしく散っていく。ヴィレンはひとつ深呼吸を挟むと、傍らに立っているアミナに視線を向けた。

ランカーの実力が秘められているとは思えぬ可憐な容姿。その後ろには軍属の魔法使いたちと町人の混成軍がずらりと控えている。そして、彼らから少し離れたくぼ地には、巨大な蜘蛛の巣にも似た紋様が描かれていた。

「そなたらしくもない、力の籠った演説だったな」

先日の演説と比べてのことだろう。ヴィレンの視線に気づいたアミナがにやりと笑ってみせる。

「らしくない、か。今宵はそれも褒め言葉に聞こえるな。――私も

鎧の積み込みが終わり次第出発する。リーズナー殿、申し訳ないがここはよろしく頼む」
「引き受けた、ここにいる者たちは必ずや守り通してみせる。そなたらも無事に戻られよ」
ヴィレンはアミナと不安げな町人たちを見遣ってから、近衛たちを引き連れて船団の最前列へ走り去った。

「じゃ、俺たちも行くか」
「そうだな」
ヴィレンを見送ったシュイとピエールは船団と逆の方向、ぽつんと停泊している黒塗りの砂船へと足を向ける。
物思いに耽っていたアミナが遠ざかっていく足音に気付き、慌てて二人の方へ向き直った。
「……シ、……シュイ！」
後ろからの躊躇いがちな声に、シュイはアミナの方を振り向いた。予想外の光景に、胸がずぐんと痛んだ。アミナは祈るように両手を組み、どちらかといえば引き止めるかのような表情でシュイを見つめていた。
「必ず、……必ず生きて戻ってくるのだぞ！　ぜった……ぃ、絶対なのだぞっ！」
アミナが喉をつっかえながら叫んだ。普段の滑舌は見る影もなく、声も少し震えている。緋色の目に大粒の涙を堪え、紅の塗られた唇を結び。それでも懸命に感情を押し殺して、笑顔を作っていた。後ろに控えている者たちを不安にさせぬよう背筋を伸ばし、胸を張って。
シュイは瞳に熱を覚えながらも、なんとか笑い返した。微かに滲む視界には、ふわふわの小動物のように保護欲をそそらせるアミナの姿があった。
「約束します。ア……リーズナーさんたちも気をつけてください。

ここが絶対に安全だと言うわけでもありませんから」
「……約束、……だぞ」
一瞬にして二人だけの世界を作り上げたシュイとアミナに、枠外にはみ出していたピエールがつまらなそうに、どこか面白そうに唇を尖らした。
「……俺に、激励の言葉はなかった」
ピエールの呟きに、アミナの三角耳がピンと空を向いた。
「あっ、え、……ごほん、いや。……も、もちろんピエールも無事に――」
「――なんという、とってつけた感のお手本のようだ」
「い、いちいちうるさいなっ！　そなたには誰より心配してくれている者が既にいるだろうが！」
「うぐっ」
「……はは、正論だ」
どうにかいつもの調子を取り戻したアミナにシュイは安堵し、同時にピエールにも感謝の念を覚えた。
じゃあまた。手を上げながらのシュイの挨拶にアミナは小さくうなずいた。そして、同じように手を上げた。その姿を名残惜しそうに目に焼き付けてから、シュイは今度こそとばかりに、一度も振り返ることなく黒船の方へ歩き出した。

「ちょいちょい、あんなんで良かったのか？　もっと抱きしめるとか、キスするとか、色々あんだろうがよ」
小走りで後を追ってきたピエールが横に並び、大袈裟なジェスチャーを交えながらシュイの顔を覗き込む。
「馬鹿言え、他の兵士たちだって家族や恋人に会いたいのを我慢してるんだ。曲がりなりにも兵を任された俺がそんなんじゃ示しがつかないだろ」
「つまり、人前じゃなかったらやったと」

「……否定はしないが肯定もしない」
「つまりやったと」
「人の話聞いてるのかよ！」
「声でけえよ。つかよ、最近彼女、えらい可愛くなったよな」
シュイは足を止めぬまま首を捻り、今のリーズナーの格好を連想する。
「……そうか、ピエールはポニーテール属性だったか。だからミルカもいつもあの髪型――」
「――違わい！　ああいや……まったく違わなくも、ないけど」
言葉を濁すピエールに、シュイがどっちだよ、と肩をすくめる。
「今更だな、アミナ様は元からえらい可愛いし」
恥ずかしげもなくそう言ってのけたシュイに、ピエールは表情を動かさぬまま、小さく息を吐いた。
「あー、なんだかその一言で妙に納得できたわ。――ところでさ、おまえ、どこまで行く気だ」
へ、とシュイが隣を見ると、ピエールの姿はなかった。いつの間にか船上から垂れ下った縄梯子を通り過ぎていた。背後ではピエールがもう四分の一くらいの高さまで登っている。シュイはひとつ大きく溜息をつき、後ろにある縄梯子の方へ歩き出した。

「よっ……と」
ピエールが船べりに手をかけ、飛び越すようにして着地する。足音に気づき、甲板で指令書を片手に段取りの確認をしていた船員と戦闘員が視線を投げる。膝を伸ばしたピエールと、船べりの下からひょこっと顔を出したシュイの姿を見止め、一斉に敬礼。ラードックが咥えていた葉巻を携帯灰皿に押し付け、口にためていた煙を名残惜しそうに吐き出した。
「お帰りなさい。さて、これで全員揃いましたね」
「ああ、例の物は……？」

二人がラードックの手前まで進み出る。
「船尾につつがなく設置してあります。まぁ、最初はあれのせいで速度が出にくいと思いますが」
ラードックが胸ポケットに灰皿を押し込みながら言った。
「軽くなっていく分には問題ないかな」
「皆さんそうやって簡単に仰いますけど……、重量が流動的に変化すると操縦もかなり難しくなるんですが……」
「それでも、あんたの腕ならやってやれないことはない、だろ？」
したり顔で人差し指を立てるピエールに、ラードックが不敵な笑みを浮かべながら一礼した。
「過大な評価を賜り、恐悦至極に存じます。衝角（ラム）も抜かりなく。軸は鋼鉄ですが周りにはちゃんと銅が使われているそうです」
「ああ、ヴィレン将軍からも聞いてる。残りのチェック項目は？」
「先刻、全て埋まりました、後はお二人の指示待ちです」
淀みない受け答えに、シュイがよし、と目で応じる。
「――じゃあ、そろそろ出発するぞ。全員、定位置についてくれ」
『はっ！』
返事と共に、ラードックと船員たちは操縦室やマストの方へ走っていき、残りの者たちはシュイを取り巻くようにして甲板に並ぶ。

――安全運転で頼む。
――安全運転で頼む。
シュイとピエールがパンパンと手を合わせて黙礼。小さくなっていくラードックの背中に強く、強く願掛けする。

この日のためだけに黒く塗り替えられた高速船。搭乗しているのはシュイ、ピエール、ラードック。同じ型の船の操作に一定期間携わったことのあるベテラン船員１０数名。そしてジヴー軍でも選りすぐりの者が８０名。体格、気の張り方、出航準備に携わっている姿からも垣間見える運動神経の良さ。砂の上だけでなく、船の上で

もセーニアの精鋭と渡り合えるだろう猛者たちだ。
　シュイが兵たちの潜在能力に感心している一方で、甲板にて作業している兵士たちも、出航を控えてなお余裕を感じさせるシュイを頼もしげに見つめていた。周辺諸国に名を馳せている戦士と肩を並べて戦う。ただそれだけでも胸が高鳴りそうなものだが、他にも信望を集めるに足る大きな理由があった。

　数日前の開戦前演説において、名高き傭兵が語ったのは武勇伝ではなかった。完全敗北の絶望と不条理さだった。シュイの悲惨な体験談は、ジヴーの兵士たちに大きな衝撃を与えた。出自こそ伏せられていたが、生々しさと痛ましさは十分に伝わってきた。
　たっぷりと油を滲み込ませた松明が、建ち並んでいる家々の窓硝子目掛けて投じられたこと。そうして熱と煙で燻り出された村の者たちに、兵士たちが猛然と襲いかかったこと。家族を逃がそうと立ち向かった男たちが、押し寄せる兵士たちになます切りにされたこと。逃げ惑う女たちが投げ縄をかけられて引き倒され、捕まった者から暴力に晒されたこと。必死に腕を振り、走って逃げようとする幼い子供たちに、馬上の兵士たちがにやにやと笑みを浮かべながら矢を雨のように降らせたこと。まるで、誰が一番早く子供たちを踏むか競うように、地面に倒れ込んだ血塗れの子供たち目掛けて、馬を一斉に突進させたこと。
　それを己の身に当て嵌めるだけで。家族の身に当て嵌めるだけで。聴衆たちは抑えの利かぬ恐れと怒りが湧くのを感じた。体だけではなく、魂までもが震えているのがわかった。頭の中には家族の泣き声が、兵士たちの嘲笑う声が鮮明に再現されていた。

『小さな頭が巨馬の蹄に踏み抜かれ、脳漿（のうしょう）が耳と鼻の穴から勢いよくはみ出した。青黒いU字型の痣が、背中の至る箇所に残されていたのを今でも覚えている。変わり果てた我が子を、剣で背中まで刺し貫かれた母親が、息も絶え絶えに胸に抱いて、そのまま力尽きた。

親の目の前で子が殺され、子の目の前で親が殺され。暴虐非道を一昼夜に亘って繰り広げたそいつらの仲間は、数週間後には誌面で民に正義を説き、許されざる悪を滅ぼしたと嘯いていた。口も喉も乾くばかりで、声にもならなかったな。ただ悔しくて、自分の無力さが恨めしくて、体中の血が一斉に沸騰しているかのようだった。耳を塞いでも声が脳髄にまで入り込んでくるんだ。大好きだった人たちのか細い声が。憎き敵兵たちのねばついた声が。

そんな状態でじっとしていることなんてできるはずもない。手の皮が破れて骨が剥き出しになるまで、山奥深くで木の幹を延々と殴り続けた。世への恨みつらみを叫びながら、手の間隔が無くなっても腕を振り回すようにして叩き付けた。もしその様子を見ている人がいたら、確実に物狂いだと思われただろうな。

見知った人との繋がりをことごとく断たれ、居場所を奪われ。最後に残ったのは容器（いれもの）だけ、誰も自分のことを知らない世界だけ』

そこで語られた内容は、兵士たちの想定していた最悪を遥かに上回るものだった。目の前にいる黒ずくめの男の姿は、ジヴー連合が敗北した未来の先にある、掛け替えのない家族の写し身に等しかった。

演説の聴衆たちは、淡々と語ったシュイに深い憐みを覚えたのと同時に、強く問いかけられているような気がした。家族を無残な目に遭わせるのか。今を諦め、未来にありもしない幸運を期待するのか。帰る家。家族との団欒。己を育んだ故郷。何かに出会い、感動する心。そんなささやかな日常を奪われてもいいのか、と。

生への、勝利への渇望。シュイにしてみればアミナが教えてくれたことを自分の言葉にして伝えたに過ぎなかったが、その言葉はジヴー兵たちの心根深くに刻まれた。演説の日、彼らは生還の誓いを、シュイの終の言葉と共に打ち立てていた。

ほどなくして、ヴィレンを始めとする将校たちの指揮する１２隻の砂船が雁（かり）の陣形を組んで発進。スザク・シハラ率いるらくだ騎兵と歩兵の混成部隊を追い始めた。

彼らの向かう先ではセーニアの船団が後方からの襲撃に対応すべく、兵士たちに囲まれた比較的狭いスペースの中で船首の向きを変え始めている。ピエールが敵の動きと地形図と、視線を何度も往復させ、位置関係を正確に把握する。

「当面の侵入座標は……Ｌの１６から１８ってところかな。さっきも見てたけど南側の敵船は若干反応が遅い。性能差もあるんだろうけど、操船の腕にもかなりバラつきがあるみたいだ」

「いい船乗りにはよりいい船を、ってわけか。そこは正直助かったな。後はイヴァンたちがどこまで引っ張れるか……、焦って道を開けてくれればしめたものなんだけど」

「敵もそんなタマじゃねえだろうけど、抉じ開けてでも突き進むさ、勝つために」

「だな。ところで、この戦いが終わったらどうする？」

何気ない言葉に、ピエールは腕を組んで夜空を仰ぎ、真剣に考え始めた。

「そう、だなぁ……。真面目に答えると、まずは子供の名前をつけてやんなきゃな。もう産まれてるはずだし、ミルカとも名付け親になるって約束しちまってるからな」

「もう決めてあるのか？」

「戦いが終わったら教えてやるよ」

「ケチ。――それにしても、ピエールがパパかぁ……、なんだか俺まで老けこんだ気がするなぁ……」

「うっせーうっせー」

「あぁ、乱れた言葉使いは少し直したほうがいいぞ。子供が真似したら一大事だ」

「その台詞、おまえにだけは絶対言われたくねえ。妙な言葉を吹き込むんじゃねえぞ」

軽口の応酬に聞き耳を立てていた兵士たちが束の間笑いを噛み殺す。だがそれも、船が起動するまでのことだった。

足元が一瞬大きく振れ動いた途端、二人の雰囲気が反転した。凄まじい圧力が船上に二重、三重の波紋を呼び起こし、船上の手すりがビリビリと震え出す。二人に目を奪われていた兵士たちが、知らずと手に汗握っていることに気づき、ぐっと口元を引き締める。

「さて、やるか」

「ああ」

シュイが背負っていた＞大鎌（アワーグラス）＜を下ろし、ピエールが＞神木剣（ダンメルシア）＜の鞘を持ち上げる。

頬を撫でるのは悠久の彼方より巡り続ける風。戦場となる夜の広大な砂漠を臨み、視界を過るのは必死に運命と抗い、この世を去っていった者たちの後ろ姿。

――アルマンド。――ミレイ。

茫々（ぼうぼう）とした輪郭が視界に過ぎり、ただ一度の瞬きと共に消え去った。シュイは束の間見開いた目を切なげに細め、そして微笑を浮かべた。目に見えずとも構わなかった。今まで自分が歩いてきた道こそが、彼らの存在を肯定しているような気がしていた。だからこそ――

――こんなところで、途絶えさせてたまるものか。

シュイは己の左胸に右手を押し当て、ゆっくりと口を開く。

「今ここにある俺たちの命は、先達（せんだつ）の辛苦と犠牲の積み重ねの上に成り立っている。容易く手放していいものじゃない。生還への誓いを――忘れるな」

背中越しの低い声に兵士たちが眼で応じる。ひりつくような、それでいてどこか心地よい圧力を感じながら、シュイはゆっくりと目を閉じた。目蓋に映し出される闇に意識を集中すると、自分の鼓動の音がよりはっきりと聞こえた。

大鎌を握る手に確かな重みを感じながら、一息で前方へと振りかざす。巻かれていた白い布が横殴りの突風に浚われ、宙で何度となく翻った。宵闇よりもなお黒き刃が戦友たちの力強き眼差しを刹那的に写し出す。

決意に満ちた眼光に推され、シュイが腹にぐっと力を込め、猛る。

「――エルクンド隊、出撃する！　部隊員一同、驕慢（きょうまん）なる侵略者共に仇なす刃となり、勝利の二文字を歴史に刻めっ！」

『応（おう）っ！』

その号令を待ち詫びていたかのように、ピエールが、兵士たちが一糸乱れぬ気勢を響かせ、剣を一斉に抜き放つ。抜剣の韻（いん）が重なるや否や、闇夜に溶けた黒船が呼応するように砂礫（されき）を撥（は）ね上げ、甲高い駆動音を鳴り響かせた。

シュイたちの乗る船が出撃するよりも少し前のこと。セーニア軍の後尾では、スザク・シハラ率いる本軍が交戦を開始していた。

殿（しんがり）にいたセーニアの数個部隊約三千に対し、雪崩打ってきたジヴー軍が倍以上の数を揃えて突撃を敢行。後方部隊の指揮官が一目で数的不利を把握し、素早く戦列交代。歩兵と入れ替わりに最前列に出た魔法使いたちが突撃してくるジヴー軍に杖を掲げた。

同時に、ジヴー軍のらくだ隊の裏でも歩兵たちが急停止。素早い動作で背負っていた弓を外し、矢を番え、星空へと向けて引き絞る。

「――よしっ、右前方からだ、――撃てぃっ！」

指揮官の指令が飛び、隊列を組んでいた魔法使いたちの杖が煌々と光を放った。炎の球体が、雷の束が闇夜に咲き誇り、宙に舞う砂粒を焦がしながらジヴー軍に迫る。乱れ飛ぶ攻撃魔法の何発かがらくだや騎手に命中し、悲鳴と嘶（いなな）きと砂地への鈍い落下音が入り乱れた。その直後――

「ぐぁぁっ！」

「ぎゃッ！」

今度はジヴーの弓兵たちが上空に放っていた矢が、時間差で雨あられと降り注ぐ。防具を持っていない魔法使いたちはおろか、盾を持っていたはずの兵士たちも防ぐこと叶わず、ばたばたと前のめりに崩れ落ちていく。

「魔法……いや、射撃かっ？　くそっ、一体どこから……」

「――＞燃焼壁（ファイアウォール）＜！」

指揮官の問いを意識したのか、傍らにいた老魔法使いが炎の障壁を迅速に展開。湧き出る重油に火がついたかのように、砂地から炎

が高々と吹き上げる。暗闇に光の領域が大きく広がり、倒れているセーニア兵たちの体に刺さっているものを煌々と照らし出した。

「……矢のようですが、黒く着色されているようですな」

地面に散乱していた矢を一本拾い、指揮官が指の腹を見た。長時間書き物をした後のように真っ黒になっていた。

「……念入りに尾羽まで。……味な真似を、最初から夜襲を想定していたか」

歯ぎしりする指揮官に兵士たちが身を竦ませる。夜の闇で飛んでくる物を見切ることがどれほど困難であるかは子供でもわかるだろう。ましてや、その色が真っ黒であれば。そうしている間にも黒い雨が間断なく降り注いでいる。

「た、隊長……」

「臆する必要はない！　盾を手にしている者は前に出て連帯し、空からの矢嵐に備えよ！　手の空いている者はその隙に負傷した兵を後列に下げるのだ！　もう間もなく周りから援軍が到着する！」

剣で矢を断ち切りながら指揮官が叫ぶ。淀みない指示が出されたことによって隊員たちの動揺が収まった。タワーシールドを掲げた兵士たちが前に出、怪我人を庇うように上空に盾をかざす。身の半分を覆い隠してしまいそうな鋼の盾は矢のほとんどを無効化する。

だが、あくまでも空からの攻撃は後尾に取りつくための援護射撃にすぎないものだ。攻撃の止んだ間を見計らい、ジヴーのらくだ騎兵が一丸となり、槍を掲げて歩兵たちに猛突進した。腕に固定していた盾を強かに打ちつけられ、数名の兵士の腕や手首があらぬ方向へと折れ曲がった。骨折した兵たちが突っ伏して激痛に喚く。

セーニア出身の者に比べてジヴー出身の兵が格段に優れている能力。それは驚異的な視力であり、夜目が利くことにある。セーニア統治下の町は照明が至る所にあるせいで夜でもかなり明るい。反してジヴーでは、特に夏の間は太陽が出ている時にあまり長く外には

いられない。よって、必然的に夜に活動している者が多いのだ。補足すると、町の通りなどにも照明はあまり備え付けられていないので、多少暗くとも物体を判別できる能力が身に付く。

武器を黒く塗り替えるだけならばセーニア方にも出来なくはない。が、味方が近くにいる状況でろくに見えぬ武器を振るうとなればあらぬ場所で同志討ちになる。その点、ジヴー方はその心配がほとんどない。

敵の体勢が崩れたのを見逃さず、前列のらくだ騎兵の隙間から後列のらくだ騎兵が連携突撃。今度ばかりは抵抗も散発的なものに留まり、らくだ騎兵の勢いは止まらなかった。興奮して首を上下左右に振り回したらくだの群れがセーニア兵たちを片っ端から轢き倒し、しゃくりあげ、弾き飛ばす。

もちろん、セーニアの軍もやられっぱなしではない。突出し過ぎたらくだ騎兵を魔法で偏差打ちして仕留めたかと思えば、地面と平行に固定された槍の柄にらくだを躓かせ、地面に落下した兵を起き上がる間も与えずに刺し貫く。

大混戦となったところで斜め後方から追いついてきたジヴーの歩兵たちが近接武器を手に突進。数的優位に立ったところで前線を一気に押し上げていく。連なる剣撃の音。あるいは盾で剣を弾き返す音が夜の砂漠で幾度も奏でられている。

闇に乗じての奇襲にも動じなかったセーニア軍は、流石に戦い慣れているといって良かった。が、ジヴー兵たちが多くの工夫を施したことによって余裕を持っては臨めなかった。

まず、黒く塗られていたのは矢だけではなかった。歩兵たちが携えている剣の刀身、槍の穂先までも真っ黒に塗られていたのだ。相手の手が振り切られた時には防御していないと確実に深い傷を負わされる。セーニア兵たちは必然的に、ジヴー兵たちの腕の動きを見てからの防御に追われていた。相手が自分たちよりも劣っていたと

いう認識が狂わされたことにより、守勢に回らざるを得なくなったのだ。勝ちが決まっていると言われている戦で殺されては誰だってたまったものではない。

もうひとつ、先陣や本陣からの援軍が遅れているのにも理由があった。後方部隊が戦闘に突入する前に西の地平の先を横断した光が、今度は明らかに距離が縮まった場所で、つまりはセーニア軍のより近くで光っていたのだ。

考え得る最悪の状況は西側からの敵兵の接近。もしくは伏兵の可能性を捨て切れず、本陣より西側に位置する兵士たちは挟み撃ちを警戒してその場を動けなくなった。兵士たちの数が多すぎる故に細かい指揮を浸透させることができず、先陣の指揮官たちも指示なしで持ち場を離れることを躊躇ったのだ。いくら個々の腕に優れていようとも、連絡手段なしでは力を存分に発揮することが出来ない。それはセーニア軍唯一の弱点といって良かった。

だがそれも、自分たちの数が多いことをちゃんと頭に入れているのであれば適切な判断と取れなくもない。守備に集中して被害を減らし、反撃の機、相手の疲弊を狙う。大昔から使い古されている＞単純な手（カウンター）＜だが、それがいつまでも戦術書の教本から絶えないのは効果的な手段だからだ。

セーニア軍も不利な状況での戦い方を良くわかっているのだろう。随所で時間稼ぎの照明魔石が投じられ、両軍が入り乱れた戦場で光が間断なく煌めいている。視界を確保することで敵の武器を一時的に可視化し、防御しやすくすることでなんとか陣形の崩壊を食い止めていた。

ここで、この決戦における一つ目の節目が訪れた。敵の援軍に先んじてヴィレンの船団がスザク隊に追いついたのだ。援軍で駆けつけた歩兵たちの更に斜め後方から横に並ぶように接近。北東から南側へと移動していたセーニア兵たち数千がそれに気づき、進路を変えて防御陣形を張る。迎撃態勢を整えたセーニア軍に対し、ジヴー

の船が足並みを揃えて減速した。ただ一隻を除いては。

――単独で突っ込んでくるだと？　……舐めるな、一瞬で沈めてやる。

自分たちの方に真っ先に突っ込んできた砂船を見据え、セーニア側の魔道隊長が攻撃準備を指示。若手の魔法使いたちがずらりと立ち並び、合成魔法を展開する。ほどなくして＞吸収（アブソープ）＜された魔力の＞同調（チューン）＜が完了し、上空への＞解放（リリース）＜と共に広範囲上級魔法＞高貴（スカーレット・ノヴァ）なる緋の爆砕＜が発動。地上から１０メードほどの高さに直径５メードほどの大火球が出現する。

敵の船からもその様子は確実に見えているはずだが、それでも船は構わず突っ込んでくる。一旦減速して先頭の船とやや距離を置いていた他船も、再び先頭の船を追うように加速を始めていた。

「後続にも対応せねばならん、あの船を仕留めたら即座に次の詠唱に入れ！　狙いは船首の中ほどだ、絶対に外すなよ！」

敵の姿が目視でおよそ２００メードの距離になったのを見計らい、魔道隊長が迅速に指揮棒を振り下ろした。夜空に色めく紅蓮の大火球が急加速し、一直線に先頭の船へと向かっていく。この距離では方向転換は間に合わない。万が一回避しても後列にいる船が確実に巻き添えを食うだろう。セーニア兵たちが直撃を確信してほくそ笑んだ刹那――

「――はぁあああぁっ！」

砂船の先頭に立っていた珈琲髪の男が火球の軌道を見切り、裂帛（れっぱく）の気合と共に腕を薙ぐ。分厚い甲板が浅く踏み抜かれた直後、不可視の巨腕が迫り来る大火球を打ち据えた。

歪にたわんだ火球が数秒の衝突を経て、ついに左方向へといなされる。猛烈な突風が吹き荒れる中、弾かれた火球が砂丘に接触。三角形の輪郭が幾重もの射光と共に霞み、大爆発を引き起こした。

結界を使わずにたった一人の手によって大魔法が防がれたのを目の当たりにし、魔道部隊に激震が走る。

「……な、なんてでたらめなやつだ！　１０人からなる合成魔法を……」

「――あ……、た、隊長！　駄目ですっ、早く逃げてくだ――」

兵たちの切迫した声に、しかし反応は遅れていた。咄嗟に顔を上げた魔道隊長の全身が、色濃い影に覆われる。一瞬の思考の空白が、敵船の更なる接近を許していた。

咄嗟に身を翻そうとした瞬間、網を引き千切るような音が鼓膜を震わせた。高さ１０メードほどの壁が砂を巻き上げながら一気に迫り、左前腕部を千切り飛ばしていた。日に焼けて真っ赤な腕が、緩慢に回転しながら地面に落下していき、砂に突き刺さる。

足元から聞こえてくる絶叫を意に介した様子もなく、イヴァンは正面から近づいてくる砂船の群れに目を光らせた。胸中を占めるのは敵の迅速な支援に対する称賛の声。本陣に寄せられた支援要請に即断即決したネルガー・シラプス指揮下の船団が、まるで翼を広げるように展開を始めていた。

敵船を遠眼鏡のレンズに映したネルガーの副官が息をのんだ。
「……手配書の似顔絵とほぼ一致しました。間違いありません、イヴァン・カストラです」
その声には激情と微かな怯えの色があった。それもそのはず、セーニアの軍人にとってあの男は邪竜にも匹敵するほどに忌まわしき存在だ。何しろ重臣たちを暗殺する過程で護衛や警備の者たちを何百人と殺めている。
多くの同輩たちには愛すべき家族が、守らなければならぬ家があった。主人が亡くなったことでお取り潰しになった家もいくつかある。彼らの家族は今頃どうしているだろうか、と考えると憐れにも思う。
ネルガーは、副官の見ている遠眼鏡が小刻みに揺れているのを見て見ぬ振りをした。
「ふむ、圧巻だな。これほど離れているのに気迫を感じさせる」
そう言いながらも視線は戦線の方に向いている。いくら数で上回っているとはいえ、この短時間で陣形を崩されていることには驚きを禁じ得ない。今までとは違う敵の手強さに、認識を一新する。
「いかが致しますか、北からの歩兵と連携して討ち果たしましょうか」
「妙に思わぬか」
「……と、言いますと」
腕を組んで考えに耽るネルガーに副官が首を捻った。
「魔石でカストラが加わっているとの連絡が届いたのはつい先ほどのこと。そして、相手の切り札と言えるだろうやつが早々と場に出された。いくらなんでもタイミングが良過ぎる。一見すると裏をかかれたように見せかける敵の意図するところは何か」
「囮、ですか」

副官の即答にネルガーがにやりと笑う。あくまで勘ではあったが、あながち外れてはいないはずだ。そうとなれば、開戦前に魔石で送られてきた文面の内容は、やはり敵方が間者を捕らえた上で無理やり送らせたと見るべきだった。

イヴァンが後方から襲ってくるという伝達が遅れれば、後尾にこうまで戦力を集中させることはない。だからこそ敵は早めに強敵の存在をこちらに仄めかした。問題は、こんなわかりやすい手を相手が使うかどうか。

「シナリオとしてはある程度の戦力を後方へ誘き寄せ、中央が手薄になったところで満を持して伏兵が登場。さらには残存兵力を一点に集中させ、薄くなった外側の防衛線を突破する、といったところか。その指揮者は」

「――シュイ・エルクンド」

「と、見るべきなのだろうが。相手がここまで策を捻ってくるとなると、幾つかの推測が外れる可能性も大いにあるな。もしかすると、我々が警戒するべき相手は他にもいるのかも知れん」

言葉を区切り、ネルガーがゆっくりと周りの戦況を眺める。右翼、北側に陣取る船団に動きはない。が、その周囲にいる歩兵たちは徐々に南下しつつある。十数分持ちこたえれば数千は増えそうな状況。

左翼、南側に陣取る船団は期待の新鋭、ガレット・リブライが指揮している。こちらは当初、劣勢の後方部隊の方へ向かおうとしていたが、ネルガーたちが先んじて向かっているのを確認したのか引き返す動きを見せている。どうせなら一緒に戦えれば確実に優勢に持ち込めるのだが、船団が消えれば南側はかなり手薄になる。

ネルガーもシルフィールの傭兵は何人か知っている。準ランカー以上となればいずれも百戦錬磨。ましてや相手は、寄ってたかってとはいえ常勝不敗のエミド・マスキュラスに引導を渡した男だ。ビシャの実力を以ってしても、易々と勝たせてもらえる相手ではない。

「では……しばらくはここで敵を食い止め、応援の兵が揃ったしたところで反転しますか」
「状況にも寄るから何とも言えぬが……、当面ここを動くことはしない」
「な、なぜです？」
「知れたことだ、ここで連中を野放しにしたまま本陣に戻れば戦に勝てたとして万に近い犠牲が出よう」

ネルガーが警戒しているのは何もイヴァンだけではなかった。如何に入念に準備していたとはいえ、ここまで押し込んでいるのは今まで敗戦を重ねていたはずのジヴー連合の者たちだ。
今必死にジヴー軍の進出を食い止めているのは一般階級の若い兵が多い。貴族階級の将校たちと違い、叩き上げのネルガーにとっては彼らに対する共感は並々ならぬものがある。若かりし頃、矢の雨を潜り抜け、刃に幾度も肌を撫でられた己の姿が、敵の猛威に晒されている兵士たちに重なる。
勝利を重ねている裏で出る犠牲は、ほとんどが一般階級の者たちだ。戦えども戦えども、前線に駆り出されてばかりで中後列に回されることはほとんどない。そんな中で生き残っていくのは生半なことではない。軍隊にも格差はある、というより軍隊ほど格差を実感させられる場所はない。何しろ身分の上下で生存確率が数倍変わる。この状況にしても、砂船に乗っている者たちは万が一負けても逃走手段を持っている。しかし、歩兵たちはどうか。食糧や水を大量に乗せた輸送船が逃げてしまったら、三日と持たずに日干しになるだろう。砂船を全て使ったとして運べる兵数は一万五千に届くかどうか。

「いや、そこまで悲観することもないのか。こういった回りくどい策を用いるということは、敵も徒に被害を拡大させたくないという

思いが読み取れる。もちろん、まともにやっては勝ち目がないという理由が先立っているだろうがな。ここは無駄な犠牲を抑えるためにも、敢えて敵の策に乗ってやろうと思う」

ネルガー個人としては、こちらの数がある程度揃ったところで敵軍が撤退を指示することは有り得ないと読んでいた。先にオルドレンを制圧してしまえば敵の退路はどこにもない。国が滅びる瀬戸際では敵も死に物狂いで向かってくるだろう。まともに食いあって消耗しては、ルクスプテロンとの戦いが頓挫するかも知れない。

ジヴー側が遊撃隊での奇襲を目論んでいるとして、両翼にも兵士たちはいるから早々突破はされない。万が一中枢まで至ったとしても、完調から程遠い状態であの男に、ビシャに勝つことなど絶対に不可能だ。それを認めるのは少し悔しくもあったのだが。

最後の心情を端折って説明するものの、副官はどこか複雑な顔だった。

「し、しかし、敵とて無策で中枢に乗り込むとは思えません」

「当然だ。されど、中枢の機能不全を目論むには多くの強兵の動員、もしくは強力な対艦攻撃が必須。ここにいる敵兵がざっと見て一万足らず。温存兵力は多く見積もったとして数千。それでは中枢はとても落とせんよ。本陣は厳しい訓練と実戦に耐え抜いた者たちがごまんといる」

「船を一撃で沈めるくらいの大魔法や召喚獣を用いられたら？」

ネルガーはやんわりと首を振った。本陣には感知魔法や防御魔法の使い手も多い。単発なら心構えさえしていれば防ぐのはそう難しくないのだ。仮に外周を打ち破ったところで敵方が魔法を使おうとした時には必ず魔力を増幅させる必要がある。それを感知魔法に気取られればそこまで。結界を展開することで被害は最小限に抑えられるだろう。

「確かにやつらが旗艦を沈めることが出来れば勝負はわからなくなるかも知れん。が、はっきりいってそれが成功する確率は著しく低い。そんなことのために動いて一万の兵の命を失うような真似はできんし、それに――」

「それに？」

「仮に中枢まで攻め込まれたとして、そこは儂らの領分ではない。本陣の連中が今こうやって高みの見物をしているように、儂らも我らが司令の戦いを見届けるまでだ。慢心でリーヴルモア卿が敗れるようなことがあれば、それはやつの器量が不足していたというだけのこと」

副官はネルガーの厳格さに喉を震わせた。元々、彼は貴族階級の者たちをあまり快く思っていない節がある。出世競争に遅れたのはビシャが台頭したということ以上にお偉方に取り入ることを嫌ったからだというもっぱらの噂。彼としては、せめて自分だけでも不遇に扱われている一般兵の味方をしたい思いがあるのだろう。

「……超遠距離からの広範囲魔法ということであれば」

「それほどの使い手がいるとなれば、１００％奇襲と一緒に仕掛けているはずだ。不意打ちが一番被害を見込めるチャンスだからな」

「あぁ、それもそうですね」

もちろん、遠方からの魔法であれば間違いなく結界術師たちに遮られる。仮に大魔法使い手がいたとして、なるべく接近して仕掛けようとするはずだ。好戦的なビシャがのうのうと中枢に陣取っているかはまた別だが。

「合点が行きました、……ネルガー様には軍略の才能もおありだったのでは？」

「命令するよりは好き勝手に動く方が性にあっておる。我儘を通すためには偉い方が都合がいい」

――いや、それも一概には言えぬか。

ネルガーは頭に浮かんだ考えをすぐに修正した。魔石という連絡

網を封じられた状態で指揮所があちらこちらに動くのは無理がある。闇の中で密集していれば狼煙も非常に伝わりにくい。昔は矢文などという手段も用いていたが、年々編成に弓兵が加わっている部隊は少なくなってきている。連絡手段をひとつだけに限定する弊害が、今のこの状況ということなのだろう。

――この戦、ルクスプテロンとの前哨戦に過ぎぬと思っていたが、案外良い薬になったかもしれんな。

「……ネ、ネルガー様」

横からの声にネルガーが応じる。

「うん、なんだ？」

「その、イヴァン・カストラの姿を見失いました。先ほどまでは船上にいたはずなのですが、今はどこにも」

「――なんだと？　後方に下がったのか？」

そう訊ねつつも、ネルガーは先ほどの威圧感が忽然と消えたことに気づいていた。

――殺気が完全に消えておる。最後まで本命の策を絞らせぬ気か。

ネルガーが素早く周囲を見回す。が、闇の中で、しかも人ごみの中からたった一人を探すことなど出来るとも思えない。

「船を下りた、のでしょうか？」

「あの男ならやりかねんな。夜で外気温もかなり下がってきておる。多少走ったところで疲弊すまい。……本陣に一隻下がらせて警戒するよう伝えよ、それくらいの義理は果たしてやらねばな」

～紲雷　ｔｈｕｎｄｅｒ　ｏｆ　ｂｏｎｄｓ１８～

イヴァンがネルガーたちの前から姿を消してからしばらくして、ネルガーからの警告を受けたビシャや将校たちが近衛たちを伴って船上に姿を現した。

その間の戦況の流れとしては、イヴァンが離脱したヴィレンの船団は、しかしネルガーたちに対して苛烈な抵抗を続けていた。用兵についてヴィレンの才はネルガーのそれと肉薄しており、集団戦はほぼ互角の展開に持ち込めていた。

ヴィレンの指揮は敗北の経験と地の利を最大限に活かしていた。自分たちから敵船に乗り込むような真似はせず、耐久戦に持ち込もうとばかりに一定の距離を取って弓矢で攻撃を加えていた。セーニアの騎士たちも船に接舷して何度となく切り込んできたものの、その度に足場となる船を大きく揺れ動かすよう操舵士に命じ、陣形をまともに組ませなかった。

左に右にと揺れ動く乗り物の上では一定の姿勢を保つのが難しい。砂船での移動に慣れているジヴー兵は重心移動をそれほど苦にしていなかったが、セーニア兵たちは敵操舵士が乱暴に操る敵船の上で、その真価を発揮することができていなかった。平地での斬り合いであれば確実に分があっただろうが、踏み込みもままならない状況では力を込めて斬ることもままならず、狙いもろくに定まらない。

敵の動きを観察し、予測し、その都度適切な指示により陣形を整えていく。闇と同化した弓矢の優位を活かし、船の揺れを巧みに利用する。数で劣勢になったところには後方の船に迅速な指示を出して穴が広がる前に埋めていく。ヴィレンの頭の回転の速さと統率力は、戦っているネルガーがセーニアの将に欲しいほどだ、と感嘆するほどであった。

ほどなくして、両軍の船団ではつかず離れずの間合いから遠距離攻撃の撃ち合いに移行した。双方の船には外周に沿って予め折り畳み式の鉄の盾が多く備え付けられており、軽く取っ手を引き上げるだけで弓を防ぐことができた。いかにセーニア側が技量で上回っていようとも、目標に頻繁に隠れられては中々矢は当たらない。とはいえ、相手も盾の裏から狙いをろくろく定めず山なりに撃ってくるのでやはり当たらない。両軍ともに負傷者はねずみ算式に増えていったが、戦死する者は割合少なかった。

ひとつ決定的な違いとして、セーニア軍には攻撃魔法の使い手が２０人中１人割くらいの割合で戦線に出ていたが、ジヴー側には存在しなかった。矢よりも範囲が広く、船を燃やすことも可能な炎の魔法。威力こそ減衰するものの鉄の盾を貫く雷魔法によって、戦局は時間の経過と共にセーニア側にじわじわと傾いていた。

ここで、ネルガーは敵の魔法使いたちが姿を見せぬことをさほど疑問には思わなかった。今までの戦いでもそれほど数が多かったわけではなかったので、どこか他の部隊にまとめて配置されているのだろうと考えていた。

それは理に叶った思考と経験則が導き出した解であり――意に沿う結果だったか否かはともかくとして――後に彼の推察が正しかったことが証明された。

続いて、中ほどに陣取る兵士たちに目を移すと、両翼の歩兵たちは後陣への支援に回っていた。砂船が幾つも待機していたため、ロッグ・ケトゥレフが全兵を遊ばせるのは勿体ないと正式に殿への応援を要請した。加えて、砂船も二隻ずつ、周りに変化がないか当たらせていた。この二つの指示についてはビシャも強く同意した。

開戦当初は優勢に戦えていたスザクの本軍もこの頃になると数量差は完全に逆転し、疲労も重なって少しずつ死傷者が増えていった。必然的に後退しながらの戦いを余儀なくされていたが、セーニア兵

たちを勢いづかせるような崩され方はしていなかった。

最後に先陣の方では、西側から光が近づいてくることはなくなり、しばらくの間は真珠のネックレスのような連鎖光が同じ場所で上がっていた。こちらについてはロッグも待機命令を外さなかった。

これによって先陣には７０００人が待機。両翼に１６隻の砂船と本陣の８０００、４隻が戦闘地域の南北を巡回。後方に一万弱、援軍に５００００余りが向かっているという形になっていた。

伝令兵から定期的に入る自軍優勢の報を聞き、しかしビシャは眉ひとつ動かさなかった。無論、今までが勝ち続きだったのも理由のひとつだろうが、それだけが理由ではない。

セーニア軍とジヴー軍では大人と子供ほども戦力差が違う。そうと知りながらも正面から潔く戦わない敵兵たちを不満に感じていたのだ。やや大人げないと思われるこの考え方は、セーニアの国民全般に見られる驕りにも似た感情に戦士特有の強者を求める本能がないまぜになったが故のことだった。

兎ばかりを狙う獅子が弱くなるのと同じように、ぬるま湯に浸かり続けていれば己の歩幅が著しく狭まることを、ややもすれば後退すらしかねぬことを知っていた。たまに自らが戦線に加わるのも、少なからず命を失う可能性に身を置くことによってこれまでの経験で培われた戦闘勘を鈍らせたくないがためだった。

船上に出てきたビシャは、楽観的な雰囲気が漂う兵たちを尻目に内周に敵が侵入していないかしきりに辺りを見回していた。警戒するその様子を一歩引いたところから、ロッグが呆れ気味に見つめていた。

「司令、流石に敵がここまで至ることは考えにくいかと。いかに強くとも一人ではどうにもなりませぬ、相手とて身のほどは弁えていましょう」

ビシャの頭の動きがぴたりと止まった。
「ケトゥレフ、おまえはイヴァン・カストラを知らぬ」
「……確かに面識はありませんが、実力のほどは耳にタコができるほど知って――」
「百聞は一見に、という格言もある、やつの力を人間の枠内で捉えない方がいい。俺は以前に若いドラゴンを相手にした経験もあるが、やつから感じた威圧感はその上を行っていたと記憶している。この巨船ならいざ知らず、中型程度の砂船なら一人で沈めかねん」
「……そこまで、ですか」

ロッグが声の調子を落とす中、ビシャが己の腕に辰力を巡らせ、巨剣をゆっくりと星の光にかざした。人の腕ほどはあるだろう太さの剣を軽々と扱うビシャに、兵士たちが感嘆の息を吐いた。
ロッグは兵士たちが見惚れるのを見回し、溜息交じりに口を開いた。

「万が一乗り込んできたとして、以前のように手出し無用とは仰らないでいただきたいのですが」
「ふん、つまらぬことを言う。おまえにとってヌレイフのことはよほど重かったようだな」
束の間、ロッグの奥歯が噛み合わされた。だが、数瞬もすると普段と変わらぬ表情に戻っていた。
「そうではない、とは申しません。しかし、我々が負ける可能性としてはセーニア軍の柱であるあなたが討ち取られる以外にはありえない。これは断言できますぞ」

ロッグのこの忠言は決して大げさなものではない。かつてセーニアの至宝と謳われたコンラッド・ディアーダが失われた時、軍部ではひと悶着の一言では片づけられぬ軋轢（あつれき）が生じた。絶対的強者が存在したことで辛うじて成り立っていた秩序が瞬く間に崩壊、熾烈な

派閥争いが勃発したのだ。

コンラッドの後釜に据えられんとする将校たちは、おのれに至誠を誓えぬ者に対して容赦のない制裁を加えた。各部署に放たれたスパイがもたらす情報によって不穏分子と見なされた兵士たちは謂われのない罪を着せられた。降格させられたり地方の支局に飛ばされるなどして出世争いから落伍する者が後を絶たなかった。その程度で済めばまだいいほうで、闇討ちに遭って再起不能の怪我を負った者もいた。

密告に次ぐ密告で軍人たちは疑心暗鬼になり、身の置き場がなくなり、疲れていた。ナイトマスターがなくなってからの一年間というもの、セーニアの強みだった統率力は完全に失われていたと言っても他言ではなかった。その隙を見計らうように、立て続けにイヴァン・カストラに要人を暗殺され、警備を司る軍の面目は丸潰れになっていた。詮ずる所、内部淘汰に費やすエネルギーばかりが先行し、遠征どころの話ではなくなっていたのだ。

ビシャはその中にあって、将校たちの誰一人として干渉出来ぬ男だった。純粋に強さのみを追求してきた剣術と戦術観は、陰謀や権益獲得に全力を注いでいる軍人たちの中において一際異彩を放っていた。懐疑渦巻く状況に嫌気が差した兵士たちは――ビシャの思惑がどうであれ――次第に彼の元に集うようになった。そんな折に彼が天敵イヴァン・カストラの襲来を食い止めたことが呼び水となり、反抗勢力が一気に膨れ上がったのだ。

身の危険を感じた将校たちは軍を退役し、あるいはビシャの暗殺を企てた挙句に返り打ちに遭い、指揮官の席が大量に空いた。結果として、いわゆる中間管理職の位置にあり、なおかつ有能だった者はビシャと共に出世の階段を駆け上がっていった。

そういった経緯もあって、ビシャに寄せられる感情は信頼と言うよりは畏敬や恩が先に立つ。けれども彼が名将であるという事実に

変わりはなく、類稀なる戦闘能力を有していることも敵味方を問わず誰もが認めていた。

「あなたが敵に対する切り札であることを疑う者はおりません。が、同時にアキレス腱であることも忘れないでいただきたい」

「心配せずとも変に無理する気はない。おまえが思っている以上に、俺は負けずぎらいなのでな」

心配性の軍師にビシャが軽く応じたところで、西の地平が何度目かの強い光を放った。

待機していた先陣の兵士がおのれの目を細めた。次いでわずかな疑念が確信に変わるのを感じた。一際大きな砂丘の裏から8隻の砂船の群れが連なるように姿を現し、遠くで舳先を自分たちのいる方角へと向け始めた。

それがジヴー側の船であることは確かだった。果たしてどれだけの兵士が乗っているのかはわからなかったが、海を航行する船と変わらぬ大きさの猛威に違いはない。生身で轢かれれば確実に命にかかわるだろう。

自分たちのいる方角を目がけて突撃してくるのを見て、幅広の防衛線を築いていたセーニア兵たちが瞬時に散開。針路から逃れて小高い砂丘に移動し、素早く複数の陣形に組みかえた。

二重、三重の防壁を展開した上で魔法の詠唱を開始。船の横腹が見えた部隊から一斉に、これ以上の侵攻を止めるべく船体を直接狙い、風の魔法を解き放った。

砂の輪が幾つも生まれ、台風のような突風が渦を巻きながら船の横腹に直撃した。鉄板が耳障りな音を立てて軋んだ。単発では少し傾く程度だったが、続けざまに魔法弾がかなりの精度で飛来し、体勢を立て直す暇も与えない。兵士たちの真横を少し過ぎたところで、ついに船が横倒しにされた。超重量による衝撃で大きな砂の棺が現れ、巻き上げられた砂が船に被さっていく。

後方の部隊が倒れた砂船を素早く取り囲む傍ら、敵船団は友軍の船がやられたことに臆することなく、次々と突進してきた。

先陣のセーニア兵たちは冷静に、しかし完璧な仕事ぶりを見せた。連日の行軍で魔法を連続使用するのは体力的に厳しいものがあったが、それでも結果的に7隻を無傷で沈め、残った一隻を引き返させることに成功したのだ。後ろには船首の株をでこぼこにされた敵船が7隻、横倒しになっていた。その手際は大いに誇ってしかるべきことだったし、逃げ帰っていく砂船を見届けた部隊は歓声で湧いていた。

撃退に当たっていた部隊も一隻が遠ざかっていくのを確認し、今度は7隻を囲む兵を援護するべくそちらへと走り始めた。船に乗っている兵士たちが生きていたとすれば始末せねばならなかったからだ。

けれども、倒れた砂船に向かった兵士たちは、またも思わぬ事態に直面することになった。

「……敵がどこにもいないだと？　操舵士すらもか？」

呆れて棒立ちになってしまった女顔の部隊長に、探索に回っていた厳めしい顔つきの部隊長が肩をすくめる。

「今のところは、な。今は五隻目を確認させているが、多分こいつも外れだろう。そりゃあまっすぐ向かってくるはずだ、連中、臆病風に吹かれたのか砂船を置いて一人残らず逃げちまったらしい。船尾の死角側に縄梯子が吊るされていた」

「梯子……、それはいくつぶら下がっていた」

「……ひとつだが？」

「なるほど、それで逃げたとなれば、予め船に乗っていたのはごくごく少数だったってわけだ」

「……なんでそうなる？」

「バカ、少し考えればわかることだろう。逃げる時いっぺんに何人

もぶら下がれば梯子の縄が切れちまうだろう。少なくとも縄が切れない程度にはゆとりをもっていたはず」

おお、と何人かの兵士たちが相槌を打った。

「連中も鬼だな、そんなに少ない兵士を敵陣に突っ込ませるなんて」

「おいおい、砂船って水に浮かぶ普通の船よりも値が張るんだぞ？　なんかの作戦じゃなきゃ使わないだろう」

「作戦って、薄々察しつくけど例えば？」

「油が撒いてあって火計を仕掛けるつもりだったとか」

「油どころか、荷物もまともに入ってなかったよ。水の入っている樽が一つあるだけだった」

「……水だけ？　毒とかじゃ」

ない、と長身の男が断言する。

「カナリアにも飲ませてみたが何の反応もなかった、ありゃあただの水だ」

動物虐待反対という言葉を飲み干し、女顔の男は額に手を当てて考え込む。敵戦力の大半は後陣へと投入されているようだが、先陣への対応には手抜かりが多過ぎる。敢えて砂船を用いる理由があったとすれば。

――時間稼ぎ、か？　でも、連中は未だに手も足も。

無謀な突撃に先陣のセーニア兵が疑念を抱き、嘲笑っているまさにそのとき、本陣の真南では一隻の黒船が、友軍の船と共に左翼を突破していた。

遠目にも押され始めたジヴー軍を見据え、アミナが悔しげに歯を噛み合わせた。戦線が後退を余儀なくされているということは、決して少なくない死傷者が出ていることを意味している。もし自分があの場にいれば、被害を極力抑えられるよう援護することもできたはずだった。

それでも自分に与えられた役割がある以上、この場を放り出して離れるような真似はできない。周りにいる兵士たちとて同じ気持ちなのだろう。時折生じる照明魔石の光と魔法による炎がちらつく度に、心臓の鼓動がやたらと大きく聞こえてきた。

普段は認識し得ぬこの音が聞こえてくる時、音を発する者たちの顔は激情に満ちていることが多い。たとえ顔には現れずとも、様々な激情を飲み干しているのが、重く早い鼓動から伝わってくる。勝利が結ばれた細い糸を、切れぬよう慎重に繰り寄せるために、私情を殺して任務に従事しているのだ。

「どうしても前線に出るなと？　私が力不足だと、そう言いたいのか」

先立って、アミナはシュイに船室で諭されたことを思い出していた。

「あの、誤解しないでいただきたいんですが、あなたの力がどれほど助けになるかは誰より俺がわかっています。一番近くで見てきたんですから」

シュイの言葉に、ベージュの髪からひょこっと出た三角耳が嬉しそうに揺れる。

「……そ、そうか。そんなに見てくれていたのだな」

若干の齟齬（そご）が生じていることに気づいた様子もなく、シュイはも

じもじと体を揺するアミナに二の句を継ぐ。
「ただ、この役目に関してはあなた以上の適任者がいないのも確かです。魔法の威力を一時的に底上げするには強制力のある言葉が効果的なんですよ」
強制力というと、なんとなく自分が高慢なように思えてしまうのだが考え過ぎだろうか。アミナは不満げにすんと鼻を鳴らした。

魔法を使う際には並々ならぬ集中力を要する。身に内在する力を方向づけるのは大きな目的であったり言葉だったりする。高い意識で目標に臨めば生半可なことでは挫けぬ心が培われるし、言葉の一つひとつを省みても、人に貶されて落ち込むように、人に褒められて元気が出るように、何かしらの力が込められている。
言葉を意に沿うよう扱い切れる者はそういるわけではない。語り手と受け手の感情や体調、背景や環境次第では、必ずしも巧妙な語り口が信頼を生むとは限らない。たどたどしくも相手に好意を伝えようとする言葉が、流暢な告白にも勝る力があるように。
シュイの目から見ても――そこには多少の身贔屓（みびいき）も含まれていたかも知れないが――アミナほど言葉で人を勇気づけることに長けている人物はいなかった。先日の演説にしても、もし正体を明かしても構わない状況であればアミナにもご登場願っただろう。深い思慮とブレぬ心が紡ぎ出す言葉は、半端な弁舌家や批評家など歯牙にもかけぬほど、心に強く響く。
それは何も自分に対してだけでの話ではない。実際、ポリー支部では第一にアミナ、第二にシュイという序列によって支部員たちが行動しているという有様だ。アドバイザーなどという肩書はとうに消え失せている。
そんな経験則もあり、アミナには魔道部隊を率いてもらうようヴィレンに手筈を整えさせていた。もちろん、彼女を危険からなるだけ遠ざけたいという思惑もないではなかったのだが。

「何も私でなくとも、シハラ殿がいるだろう。彼なら魔法も扱えるし私より適任ではないのか」

食い下がるアミナに、シュイは頭を掻きながら応じる。

「そう仰ると思って一応お伺いを立てましたが、あっさりと拒否されました。より危険な任務を若い女子にやらせるわけにはいかないからと」

「それはっ、……私の本当の力を知らないから」

拗ねたように頬を膨らませるアミナに、シュイは苦笑を返した。

「その可能性については否定できませんが、仮に知っていたとしてもシハラさんは絶対に突っ撥ねたと思いますよ。先のアルマンドの例もありますし、敵の数が多ければ不覚を取らないとも限らないでしょう。シハラさんは低姿勢に見えますが、行動の端々からは激情が感じられます。娘婿を殺されたことで戦場に赴くような人物ですしね。一度決めたことを覆すような自尊心はもっていないはずです」

よく分析している、とアミナは――表向きは不満を露わにしながらも――内心でシュイを褒めた。次いで、素直になれぬ自分に苛立ち、床を踏みつける。シュイも心得たもので、顔色を一切変えずに話を進めていく。

「運よく深手を負わなかったとしても、混戦に身を投じてしまえば何かの拍子で正体がバレないとも限りません。ジヴーのためだけではなく、フォルストロームのためにも、前線にいくのだけは差し控えていただきます」

アミナはシュイに因縁をつけるような目を向けた。フォルストロームという言葉を使えば絶対に自分が応じるとわかっていて、その上で口にしたのだ。

「しかし、わざわざここまできたのに……」

シュイは一息継ぎ、項垂れているアミナの耳元にそっと口を近づけた。吐息がかかってくすぐったそうだったが、次の言葉がアミナの感覚を聴覚のみに集約した。

「その気持ちだけで十分です。俺にとってはジヴーの命運と同じくらい、あなたのことが大切なんです」

――大切なんです。大切なんです。大切なんです。

「……はっ！」

顔全体を紅潮させていたアミナはぷんぶんと、髪が踊るほどに首を揺り動かしてエンドレスエコーを断ち切った。

――は、は、恥を知らぬか！　このような不埒（ふらち）な空想に耽るなどっ！

たるみ過ぎだ。自分に侮蔑の言葉を叩きつけ、次いで頬に手を当てながら熱い吐息を吐き出す。気を引き締め直さねば、と自らを戒めつつ。

戦闘中だというのに浮ついた想像をしているとあっては命のやり取りをしている兵たちに申し訳が立たない。この戦いに参加している者たちの誰もが重責を背負っている。直接的に敵を屠ることは叶わずとも、ある意味では中核を担っていると言っても過言ではなかった。

ようやく気を取り直し、リーズナーは再び戦場を見遣った。櫛の歯のような火線が飛び交う中、ヴィレンの船団が勢いを盛り返し、再びネルガーの船団と激しくぶつかりあっていた。遠くこちらまで、遠雷のような衝突音が聞こえてきた。船と船が接触したのだろう。果敢な行動と取れぬこともないが、慎重なヴィレンのやることとは乖離しているように感じる。もはや、多少の無茶をせねば堪えられぬ状態なのだろう。

そのやや南西側、シハラの軍はなんとか戦線を維持していたが、左翼の敵歩兵が少しずつ南東に流れ始めている。もしヴィレンの砂船と分断されてしまったら一巻の終わりだ。包囲戦を仕掛けられて

そう遠くない時期に全滅する。

重々しい沈黙が満ちる中、ラクダの四足が砂蹴る音が、段々と近づいてきた。アミナが急ぎ西の方角を睨む。果たして姿を現したのは、伝令兵の一人だった。

「……リーズナー殿！　エルクンド殿の船が高速船団と共に左翼の攻略に取り掛かった模様です！」

高揚を抑えきれぬ伝令兵の報告に、リーズナーが急ぎ左翼の南側を睨む。

「よし、急ぎ連結を開始せよ！　焦らずにやれと言いたいところだが本軍も余り持ちそうにない！　見落としはもっての他だが、チェックは可能な限り迅速に行え！　魔道兵たちは全員既定の位置について魔力を練り始めよ、有りっ丈の力を降り注ぐのだぞ」

「はいっ！」

リーズナーのよく通る声に、身を屈めていた軍と町の魔法使いたちが深くうなずき、一斉に立ち上がった。そして、先ほどセーニアの斥候たちが発見した巨大な蜘蛛の巣の紋章を囲むように移動し始めた。

それに続こうと歩みかけた途端、アミナの三角耳がぴくりと動いた。自分たちの方に近づきつつある駆動音を聞きつけていた。

――何かが、近づいて来る。……これは駆動音……敵の巡回船か！　まずいな、流石に遠距離攻撃はないと判断するものと思っていたが。

九分九厘勝利が決まったような戦況で、それでも一つの綻びも許さんと言わんばかりの戦運びには舌打ちを誘われる。敵は決して数と力だけを頼りにする愚か者の集まりではない。

現在ではこちらの策が先行しているが、万が一これからやることを邪魔されれば、その瞬間に敗北が、ひいてはジヴーの滅亡が決まる。

――ここでの判断ミスは、許されぬな。

アミナの細い首筋を汗が伝った。その冷たさを感じつつも血糊のついた小さな手を見つめた。短時間、それも単独で一隻を沈められるだろうか。そう自らに問いかけながら。

――――

「くそっ、何たる失態か！」

ガレット・リブライが手すりに身を乗り出し、もう今にも見失いそうな距離にいる黒船を睨んだ。自船と先を行く船との速度差はせいぜい時速に換算して２０キロといったところ。その差がこうも影響するとは考えてもみなかった。普段の流麗な印象とは裏腹にその目は血走り、美しい金髪が怒りに呼応するかのように逆立っていた。

先刻、先陣からの敵船発見の報とタイミングを合わせたように、突如として南から四隻の砂船が突撃してきた。ガレットは素早く戦列を組むよう命じ、迎撃体勢を整えた。

互いの船につけられた照明魔石が、闇から敵の姿を浮かび上がらせた。数的不利を悟ったのか、ジヴー側の船が二手に分かれようとしたが、ガレットの船団も遅れずに二手に分かれた。可能な限りの進路妨害がなされたはずだった。

ガレットたちの砂船が空けたそのスペースを狙うように巨大な影が向かってきた。そして、そのことに直ぐに気づいた者はいなかった。聞こえていた船の駆動音に別の音が混じったところで、ガレットは初めて後ろを振り返り、取り返しのつかぬ状況を悟った。

空けられたスペースを抉るかのようにして、黒船が恐るべき速度で直進してきていた。慌てて軌道修正を命じるも船の舳先は左右に向かっており、舵が戻るまで元には戻しようがない。

戦いでは脆い部分を攻めるのが定石だ。個々の船の速度差、旋回能力の差が大きいガレットの船団は、突破口として目を付けられていた。

夜の闇が目を曇らせたという理由以上に、船すらも闇に溶け込ませるという戦術は完全に意識の外だった。武器が黒く塗られているとの報を聞きながら、なぜ黒く塗られた船の存在を思いつかなかったのか。ガレットは己の不明を強く恥じた。

内的葛藤を抱きながらも、なんとか転進させた砂船を敵船にぶつけて進路を遮ろうとした。出足が遅れた船と船の隙間を狙うように、必死に止めようとしたガレットらを嘲笑うかのように。黒船は二隻の船によるブロックを巧みに擦り抜け、左翼の防衛線を難なく突破した。その後ろで、両側から黒船を挟もうとしていた二隻の船が方向転換をする間もなくぶつかり合い、航行が不可能な状況に陥った。

そんな混沌とした状況で、目の前を通過していく船の舳先に人影を確認した部下が遠眼鏡を向けた。

「……イヴァン・カストラ！？」

「な、なんだと！？」

船の上に立つ騎士たちの間を戦慄が走った。東の方で姿を消していたはずのセーニアの天敵は、今まさに本陣へと向かう敵船の上にいた。

「こ、攻撃しろ！　なんとしても船足を止めるのだっ！」

唾飛ばすガレットの指示に従い、魔法使いたちが船尾へと走り、息を荒げつつ魔力を練り上げて雷魔法を発射する。宵闇に青白い光が明滅し、ツタのように絡み合って黒船に襲いかかった。

けれども、黒船には防御魔法の使い手が乗っていたのだろう。船

尾に展開された複数の魔法障壁によって、数多の電撃はことごとく弾かれた。

船を一隻通したところでそれほど憂慮すべき事態になるとは思えなかったが、自分たちに手落ちがあった事実は曲げられない。加えて、全てが計算ずくであるかのような相手の行動が、一抹の不安を消し飛ばすことを妨げた。あれを放置していてはまずいと、心のどこかが叫んでいた。

一方で、残った四隻の高速船は南へと引き返していく。黒船の道を開けただけで役割を果たしたということだろう。念のため敵兵がいないかどうかを確認するべく、照明魔石で周囲を照らし出した。

「……敵は、いないな。逃げた船団は捨て置け！　黒船を追い、本陣の船と挟み討ちにする！」

ガレットは面目を躍如すべく、黒船への追撃命令を下した。

この時、ガレットたちがよくよく注意していれば、景観の微細な違和感にも気づくことが出来たかも知れない。けれどもイヴァンの出現によって芽生えた焦燥感は、彼らの観察力を根こそぎ奪い去っていた。

だから、闇を照らしていたはずの光が完全には周囲を照らしていないことに気付かなかった。魔法障壁によって光が屈折させられていたなどとは知る由もなかった。

黒船は二隻存在していた。シュイとピエールが乗る黒船は、航跡とは別の歪な線を地面に描きながら、ガレットの船団に先導されるようにして敵本陣へと加速していった。

～紲雷　ｔｈｕｎｄｅｒ　ｏｆ　ｂｏｎｄｓ２０～

『敵砂船が防衛線を突破した、大至急迎撃の陣を展開されたし』
黒船を追うガレット・リブライの船団から、警戒を促す複数の照明弾が打ち上げられた。

セーニア本陣は緊張感に満ちていた。本陣には旗艦を含めて２１隻の船が残っていたが、２万５０００以上の歩兵と両翼に陣取る２０隻の砂船。援護に出したネルガー・シラプスの船団も含めてさらに１０隻。その分厚い警戒網を掻い潜ってくるのは不可能に近い。ましてや、主力部隊を後方に一点集中させているとなれば尚更だ。
南方から湧き立つ砂煙を見据え、各船にいる隊長たちが檄を飛ばす。
「防衛線を突破してきたくらいだ、敵船の機動力は侮れぬものがあるだろう。いいか、射程内に入っても直ぐには攻撃するなよ！　中距離での一斉砲火で沈める！」
『はっ！』
今回の連絡には魔石が使われていない。あくまで簡略化した情報をやり取りする照明信号によるものであり、敵の詳細な情報はわからなかった。防衛陣を突破したからには敵船からの魔法攻撃も考えなくてはいけないため、船べりに陣取る魔法使いの後方には何人かの結界術師が対物理及び魔法障壁の展開を準備していた。

数分後、横並びになった船団に次々に照明魔石が灯った。猛然と突っ込んでくる一隻の敵船を視界に収め、魔法使いたちが詠唱を開始。１００メードの距離に入ったところで杖や手から一斉に炎と雷と風が迸り、黒船へと吸い込まれていった。
黒船の側からすれば数多の魔法弾が視界を万華鏡の結晶のように埋め尽くしたことだろう。全てを避けきることなど叶うはずもない。

着弾する度に船体が嵐に沖に出たかのように激しく左右に揺れ動く。船は一気に速度を緩め、そして停止した。

兵たちが歓声を上げる最中、ただひとつの人影がなだらかな砂丘の上に降り立った。間を置かずして絶大な辰力が放出された。砂が波打ち、一瞬にして風の向きが変わり、様子を窺っていた者たちの頬が風圧で歪む。

炎上する船を背負うようにして、イヴァン・カストラがゆっくりと歩を進めた。その度に砂地に風紋が走り、大気に軋んだ音が満ち満ちていく。

圧力に抗うかのように、船柵に捕まって踏みとどまっていた魔法使いがおもむろに手をかざした。球状の圧力を展開する男に向けて、雷を迸らせた。それが合図となった。

イヴァンが砂の上を高速で滑るかのようにして２０歩分ほど横へ移動する。その時には既に他の船からの火線が迫っている。魔法弾に追い回されるようにして、イヴァンは夜の砂漠を駆ける。できたばかりの足跡に魔法弾が即着弾し、次々と砂塵を巻き上げる。

まるで鹿追いのような攻撃っぷりだが、緩急を巧みに切り替えるイヴァンに攻撃は全く当たらない。じぐざくに走行しながらも確実に接近してくる敵に対して、兵士たちは焦りながらもなんとか心を冷静に保つよう言い聞かせていた。彼をこの場で消すことができれば、セーニアにとっての最大の懸案の一つが消えるのだ。それに加えて、運よく相手に留めを刺せれば一生遊べるほどの莫大な賞金と褒章が確約される。

数的優位をこれほど保っている状態であれば、時間をかければ倒すのはそれほど難しくない。どれほどの達人とてスタミナは無尽蔵ではない。そして、攻撃を回避し続ける姿勢が、その攻撃が有効であると認めているのだ。

そうこうしているうちに、いつの間にか両側面に回り込んでいた船から、続けざまに広範囲魔法、＞高貴なる緋の爆砕（スカーレット・ノヴァ）＜が放たれた。魔法攻撃となれば着弾点から少々離れていようとダメージは免れない。

だが、それを待っていたかのようにイヴァンは足を止め、微かに乱れていた呼気を一瞬にして整えると一瞬にして後退。目の前に飛来してきた火球を掴むかのように、両手を前にかざした。

それを目の当たりにした隊長の顔から一気に血の気が引いた。

「――総員退避ぃ！」

悲鳴のような声が船上に響き渡ったのに続いて衝撃音が鳴り響いた。真横から飛来してきた大火球を自分の真正面に捉えたイヴァンが、両手に凄まじい圧力を生じさせる。

火球が押し出されるようにして直線軌道を外れ、放物線を描くようにしてセーニアの船の方に向かった。

着弾を確認する間もなく、イヴァンは反対方向からの第二波に対して次の行動に移っていた。火球を飛ばして尚余っていた力を今度は砂地に叩きつけ、自身の足元から半径１０メードほどを一気に窪ませた。

砂地に出来た深さ3メードほどの壕に身を伏せた瞬間、頭上を通過したもうひとつの火球が付近で着弾。猛烈な熱風が頭上で猛威を振るい、珈琲色の髪を乱す。やがて炎が収まったところで壕から飛び出し、砂埃を吸わぬよう呼気を止め、一気に煙の中を走り出した。

「――くそ、横腹に取りつかれたぞ！」

重力の上下と左右が入れ替わったように、イヴァンが足場を砂地から間近にあった船体へと変える。垂直よりも急な壁を走っている人影を捉え、対面にいる兵士たちから弓や魔法が継続的に放たれた。

「ば、バカ、撃ち方やめぃ！」

隊長がそう指示した時には少し遅かった。味方の船に兵士たちの

魔法弾が着弾し、船体に無数の穴が穿たれる。
イヴァンは船縁に両手をかけ、甲板の上にひらりと躍り出た。待ち構えていた歩兵たちが剣を手に次々と斬りかかる。
左右を塞がれていたことに気づくと、イヴァンは咄嗟に身を縮め、目の前にあった船橋の板張りの壁を体当たりで破壊。そのまま操舵室内に突進した。突然の闖入者に慌てふためいている船員たちを無視して、イヴァンは操舵輪を蹴り壊すと、次にはその逆の壁を破壊して新しい出口を作った。待ち伏せをあっさりと無効化する非常識気回りない機動力と破壊力だった。
動揺する兵士たちを差し置いてイヴァンが辰力を込めた蹴り足で甲板をしたたかに蹴り放った。援護するべく接近してきた敵船の方に飛び移ったのだ。踏み抜かれた船が大きく縦に揺れた。船と船を放物線で結ぶようにして、より旗艦に近いほうの船上に着地。突っ込んでくる歩兵たちを一瞬にしてなぎ倒し、先ほどの船と同じように操舵室の舵を破壊した後で離脱する。

中央へ近づくにつれて兵士たちの質も上がっていった。四つ目の船の船首側に着地したイヴァンを兵たちは素早く包囲した。剣が薄らと燐光を帯びてるのは辰力の使い手である証。本陣の中枢ともなると並の使い手がいるはずもなかった。

「かかれっ！」
誰かの声に応じて、兵士たちが一呼吸のうちに１０歩分の間合いを潰す。遅れることなく三つの長剣が孤を描いた。
避けられぬと思われた一撃を前に、イヴァンの体が残像を残して消えた。甲板が軋む音がした時には、彼の姿は既に船尾の側にあり、代わりに一人の兵士の首があらぬ方向にねじ曲がっていた。人形のように膝をおり、前に突っ伏した仲間を見て、兵士たちが体を大きく震わせる。それをよそに、イヴァンは旗艦の位置を確認し、船縁にいる兵士たちの配置を確認した。

その戦闘の様子を旗艦のやや高い位置から見下ろしていたロッグ・ケトゥレフは、ただただ唖然としていた。

「ば、馬鹿な。……本当にたった一人でここに至るとは」

ロッグの呟きを耳にし、ビシャが肩をすくめた。何分ここは敵地のど真ん中であるし、病や食糧不足も相まって思わぬ足止めを食っている。その間、敵には戦備を整える時間が十分あっただろう。与えられた時間を全て有効活用できたとするならば、これくらいの真似はできてもおかしくはなかった。

ただ、それを成すためには十全に近い士気と統率力が必須であったことに疑いない。そのことについてはむしろイヴァンより、敗戦を重ねてきた中でこれだけの抵抗を見せているジヴー軍を褒めるべきだった。

「もう待つわけにもいかんな」

屹然とした声に、ロッグがはっとしてビシャの横顔を振り返った。

「お、お待ちください！　司令官になにかあれば……」

止めようとするロッグを無視し、ビシャが六角形の盾、＞誓約の盾（プレッジシールド）＜を腕に嵌め込む。美しい亀甲模様の装飾が施された黄金色の盾に、ロッグが息をのんだ。

イヴァンを食い止めようと狭いスペースに殺到した砂船は行き場を失い、団子状態になっていた。そんな中、船を数隻航行不能にされては当然のように渋滞が起こる。壊れた舵は一朝一夕には直せない。陣形を組んだうえでの多面攻撃ができなければ数的優位など意味がない。今の状況からすれば、自分から動いてイヴァンを止めるのが最善だった。

「問題ない、ここに至るまでにやつもそれなりに疲弊はしているはず。それに、もう間もなくリブライの船団が到着する。共闘できれば打ち果たすこともさほど難しくあるまい」

「それは、わかりますが……」
犠牲を出したくないこの状況で、セーニアでも屈指の実力を持つといわれるガレットの存在は心強い。一人が一対一で戦い、もう一方が隙を突くような形をとれば相手が手練れであろうと問題なく勝てるだろう。
ビシャの本音を言えば、一対一で戦いたいのは山々だ。しかし、今は私情で動いているわけではない。素で相対して勝てるようであればそれがベストだが、実力が拮抗しているようであれば手を借りざるを得なかった。

「シラプス卿が残っていれば俺の代わりに戦ってもらうつもりだったのだが、帰還を待つ余裕はない。――来たな」
ビシャがそう呟いた時には、隣接する船のマストを上っていたイヴァンが、セーニア旗艦『ナルヴィニ』の方へと向けて跳躍していた。

船の左舷に着地したイヴァンに、ビシャが猛然と襲いかかった。体勢が崩れ、膝が曲がったタイミングで竜の牙を思わせる巨大な剣が振り下ろされた。ほとんど同時に二つの短剣が宙で交差する。ガチン、と岩に剣を叩きつけたような音が鳴り、金属の焦げる匂いが生じた。
「よくぞここまで辿り着いた。称賛に値するぞ、イヴァン・カストラよ」
攻撃を受け止められたことに驚くことなく、ビシャは淡々とそう言った。
「……ビシャ、リーヴルモア」
巨大な片手剣の一撃を、イヴァンが両手に持つ三枚刃のナイフで挟みこむように受け止めていた。膂力は体格のいいビシャに分があるのか、少しずつイヴァンの方へと鍔迫り合いが押し込まれていく。

凄みのある笑みを浮かべるビシャに、イヴァンがぎりと歯を鳴らした。

「まさかこのような砂だらけの地で慈善活動に従事していようとは思わなかったぞ。神の教えにでも目覚めたか？」

「神だと？　くだらん、そんな物が本当に存在しているならば貴様らなどとっくにくたばっているだろう、さっ！」

「ちっ！」

鍔迫り合いを耐えきれないと判断したのか、イヴァンが体を入れ替えた。巨剣を挟んだ格好のままから側面に滑り込み、高い位置から捻じ込むような飛び回し蹴りを放つ。ビシャの、盾を付けたもう片方の手が反応した。顔に向かって放たれた蹴りを易々と受け止めると同時に往なされた巨剣が甲板に刀身分の太い切れ込みを入る。

イヴァンの蹴撃もそれは攻撃するためのものではなく、間合いを取るためのものだったのだろう。警戒にビシャの腕を弾いて後方に飛ぶ。その直後だった。

「――何！？」

イヴァンが跳躍した先、船べりの下から飛び出すようにして姿を現したのは隙を窺っていたガレット・リブライ。近づいてきたイヴァンの背中目がけて剣が振るわれる。イヴァンが着地と同時に横に飛ぶも、ガレットの剣刃が来ている衣と血線を宙に跳ね上げた。

「ぐぅっ！」

右肩部分を縦に切り裂かれながらも、イヴァンは速度を殺すことなく船のマストに駆け上がる。

「くっ、浅かったか。……逃がさんぞ！」

再びガレットが剣を振るうと、今度は剣の切っ先に空気が纏わりついた。長剣が横に薙ぎ払われると同時に、三日月状の大きな衝撃波がマストの綱を掴むイヴァンに迫る。イヴァンが縄を手放し、帆を掴んだところで、帆を固定していた綱が一気に切り裂かれ、白い布が一気に垂れ落ちてくる。イヴァンは前後に揺れる帆の勢いを利

用して船尾楼へと跳躍、包囲網から一時的に離脱した。

「追うぞ」

「承知――むっ！」

ビシャとガレットが足を踏み出しかけた途端、甲高い衝撃音と共に、旗艦が左右に揺れ動いた。

「――ぬ！　何事だ」

「敵船です！　先ほど沈めた船とは別の一隻に、取りつかれました！」

右舷側にいた兵士から声が上がる。

「……新手だと、一体どこから。いや、それよりあの程度の船にぶつけられたくらいでこれほど揺れるとは」　ガレットが眼下の船を睨む。

「海戦に使う＞船首角（ラム）＜が取り付けられていました。おそらくはそのせいかと。今接舷されぬよう応対させております！」

右舷側に駆けつけた弓兵たちが自分たちに向けて弓を引き絞ったのを目にし、シュイが拳を突き出した。矢が放たれる寸前、黒船から空へと向けて五つの光弾が放たれる。

狙いを絞る動作に気を取られていた兵士たちに、高速で飛来する魔法を避ける術はない。攻撃をまともに食らった兵士たちが、ろくろく悲鳴を上げる間もなく宙へと弾き飛ばされた。被害を免れた弓兵たちから矢が間断なく放たれるが、ジヴーの兵士たちは盾をかざし、あるいは後方に退いてそれを防ぎ切った。

「せぃや！」

ピエールが自分たちの乗っていた黒船のマストに斬りかかった。斜めに切り込みを入れられ、ぎしっ、と傾いた黒い支柱がゆっくりと横倒しになり、敵旗艦『ナルヴィニ』の船縁に食い込んで上り坂の架け橋となる。

「よし、乗り込め！」

「そう簡単には――むっ！」

「どこを見ている！」

声が轟いたのに続いて、船尾に後退していたはずのイヴァンが、今度は一瞬で間合いを縮めてきた。リーヴルモアが振りかざしかけた大剣を咄嗟に引っ込めて盾代わりにする。火花散る幾つもの連続攻撃を受け止めながらビシャが舌を鳴らす。

「リーヴルモア卿、私が！」

代わりにガレットが、即席の橋を寸断すべく剣を振りかざした。剣から生じた閃光が衝撃波を生み、柱とそれを渡っている兵士たちに襲いかかる。

「＞（穿たれし閃（ラピディティ・スカージュ）＜！」

唐突に、先駆けて渡り切っていた黒衣の男の手指から白い光弾が放たれた。放たれた光弾のうち三つが衝撃波に命中し、軌道を大きく逸らす。

その一方で、ビシャと切り結んでいたイヴァンが後方からの槍に気づき、宙に高々と跳躍してシュイの側へと着地。

兵士たちが追撃を放とうと構えた瞬間、シュイが再び闇に光の五線譜を描き出したのを見て、動きを止めた。慌ただしかった足音が止み、沈黙の内に一同が会す。

――迅いな。この者たちも精鋭か。

素早い一斉行動。決して渡りやすいとは思えぬ即席の丸太橋をあっさりと渡り切った色黒のジヴー兵たちを見据え、ビシャとガレットの顔つきが険しくなった。ヴィレンが鍛え上げた兵士たちの実力を見抜いているようだった。

ガレットは兵たちの先頭に立っている二人の男を見据え、口火を切った。

「――その格好、きさまがシュイ・エルクンドか」
「お前たちに名乗る名はないし、意味もない。悪いがここにいる者たちには皆、死んでもらう」
シュイの不遜な言動を聞くとロッグがおかしそうに顎をしゃくった。
「ほぅ、大した自信だな。まぁ、確かに？　見事な手際と言っていいだろう。これだけの戦力を旗艦にまで引っ張り込まれるとは予想外だった。――それで、たったこれだけの人数で我らを倒せると思ってはいないだろうな。断っておくが、我が船だけでも精鋭が３００人以上乗り込んでいるのだぞ？」
見下している感がありありのロッグに構わず、シュイは周囲の状況を確認する。周りからは遠巻いていた他の敵船が位置を調整して近づきつつあった。時間が経てば経つほどに敵の数は増え、こちらの消耗も激しくなる。加えて、動くのが遅れればそれだけヴィレンやスザク、アミナたちの部隊の負担が大きくなるのだ。
救いと言えば、旗艦というだけあって船の甲板が高く他の船から乗り込むには時間がかかることだろう。ひとつの縄梯子で上れるのは無理して一度に三人までといったところ。もちろん、腕に自信がある敵が乗り込んでくるのは否定できないが、敵が急激に増えることはないのは好材料だった。

「準ランカーでも冗談は言うのだな。いや、シルフィールがとち狂ったのか。まさか四大国たる我々に歯向かうとは」
「そう思ってくれれば、こちらの思う壺だがな」
「……何だと？」
「――と、喋り過ぎたか。別におまえたちが知る必要はない」
対して意味のない言葉に、しかしロッグは意味深な何かを感じ取ったのだろう。黙考したまま動かなくなった。

「本当に勝つ気でいるようだな。せいぜい百人の兵で、いつまで頑張り切れるかな。憐れなことだ、万が一我々を倒したところでジヴーの命運は尽きているのに」
「……はっ」
ガレットの言に、ピエールが嘲笑に近い溜息を吐き出した。両軍の兵士たちの殺気が一気に増す。
「舐めたこと言ってんなよ。万が一にも？　生き残らせるわけねえだろうが。てめえらは一人残らず＞砂鮫人（シャーラギ）＜の餌にしてやる。ジヴーは滅ばねえ、絶対に滅ぼさせねえ」
凄惨な怒りを両眼に迸らせ、ピエールが唸り声を上げた。普段お調子者の彼がこうまで負の感情を炸裂させることは珍しい。精鋭すらも出しかけた腕を引く迫力が果たしてどこから来ているものか、シュイだけはよく理解していた。
「やはり、土人の野蛮な思考は度し難いな」
「そりゃ、温室育ちのお坊ちゃんにはどんなことも理解しがたいだろうさ」
視線だけで殺し合ってそうな二人を尻目に、シュイが敵から目を放さず訊ねる。
「イヴァン、傷の方は」
「血は辰力で止めた、問題ない」
明快な返事に、シュイが舌なめずりをする。
「わかった、予定通りビシャは任せる。ピエールも相手は決まったみたいだし、俺は――他だな」
「はっはっは、まさか一人でこの兵たちを相手に――」
＞――蒼き雷を納むるは涅色（くりいろ）の胸奥（きょうおう）＜
ロッグが高笑いする中、シュイが大鎌を掲げて唐突な詠唱に入った。時間を稼がせるわけにはいかないという一念がそうさせていた。その場にいた者たちの目の色が瞬時に緊張で塗り替えられる。

「上級付与の詠唱だ！　やらせるな！」
「シュイを援護しろ！　てめえら絶対に死ぬなよ！」

ガレットとピエールの指示が交錯し、遅れて轟々たる鬨（とき）の声が放たれた。瞬時にビシャとイヴァンの姿が霞み、宙で幾度となく交錯。連なる剣撃の音が兵士たちの足踏む音と混じり合った。

～紲雷　ｔｈｕｎｄｅｒ　ｏｆ　ｂｏｎｄｓ２０～（後書き）

２５日、７：００修正しました。

北の方で白い雷が天と地を結んだのを横目に、アミナは気を失ってしまったセーニア兵の胸倉を突き放した。巌のような男が階段を勢いよく転がり落ちていき、下段にいた数人の兵士たちをさながら落石のように巻き込んでいく。次々と壁に体を打ちつけて折り重なり、痛みにうめき声を上げる兵士たちに指揮官と思しき男がわなわなと拳を震わせた。

「このバカ者共が、もう少し気張らんかぁ！　相手が女だからといって気を緩めるな！　騎士長クラスと思ってかかれぃ！」

そう叱咤した白髪混じりの指揮官が、アミナの次なる獲物となった。真横から飛来してきた二本の矢を受け止めざまにへし折ると、八段もの階段を一足飛びで降り立った。紐で結わえられた髪が風圧でふわりと浮き上がる。着地の瞬間を狙って剣が薙ぎ払われたが空振りに終わる。すんでのところで両足を振り上げて避けていたためだ。

脇から違う兵士たちが斬りかかろうとした途端、二つの紅い眼（まなこ）が宵闇に鋭角の軌跡を引いた。兵士たちが一つ目の線を目で追った時には、彼女の姿は既に敵の背後にあった。両手からそれぞれ違う方角へ、衝撃波を時間差で打ち出す独特の高速移動術だ。

気配に気づき、後ろを振り返りかけた兵たちの顎を目がけ、アミナが固めていた掌底を真上に打ち抜いた。

「ぐふっ！」

「このっ……おごっ！」

冗談だろう。立て続けに響いたくぐもった悲鳴に、誰かが唖然と

呟いた。実際、彼らにとっては悪夢のような光景に違いなかった。何年もの間厳しい鍛錬を続けてきた男たちが、町で編み物でもしている方が似合いそうな少女に子供扱いされている。それこそパーティのシャンパンコルクのようにポンポンと宙へ打ち上げられ、甲板に打ちつけられていくのだ。

力なく転がっている兵士たちの顔も無残なものだった。打撃や墜落によって顎や鼻を砕かれ、開いた口を見れば前歯が所々欠けている。意識が辛うじて残っていた兵士たちの目には強い毒性を持つ生き物に噛まれたかのような怯えが浮かんでいた。

防ぐ暇すら与えぬ速度と大の大人を屋根よりも高く浮かせる怪力。撃退しようにも剣を構えた時には視界から姿を消している。夜の闇の中では野犬さえ手強い敵となるが、この少女を相手にするのは百の狼を相手にするより厄介かも知れなかった。ほんの数分前、兵士たちの心に芽生えた劣情は、とっくに失われていた。

アミナは誰の意識に悟られることもなく、いつの間にか砂船の甲板に立っていた。今にして思えば、名も知らぬこの少女が走行中の船、地上から１０メード近くもある船の上にいたという事実に、もっと疑いを持ってかかるべきだった。

思考が警戒に舵を切れなかった最たる原因は、彼女の容姿が類稀なる美を備えていたことに尽きるだろう。厚めの布地をぐっと押し出す張りのある乳房が歩く度に揺れる。引き締まった腰と臀部の滑らかな線。気高さと魔性を併せ持った紅の瞳が兵士たちを睨みつけていた。

そんな少女に彼らが取った行動は、騎士というよりも山賊のそれに近かった。万が一にも逃げられぬよう隙間なく周りを取り囲み――とは言ってもアミナにとっては紙でできた囲いに過ぎなかったが――薄ら笑いを浮かべながら輪を少しずつ狭めていった。勝ち戦は揺るがない。そんな心の緩みがあったせいで低迷していた警戒心を、

欲情が上回っていたのだ。

軍法に則れば、戦闘の最中にそのような行為に耽ったことが知れれば重い処罰が下される。長きに亘る禁欲生活で欲望を抑えきれなかったと言えばそれまでだが、正常な判断力をなくしていたことを鑑みるに、あるいは最初からアミナの持つ雰囲気に呑まれていたのかも知れなかった。

当然ながら、単身乗り込んできた少女兵を慰み物にせんとする彼らの邪な願望は、短時間にして木端微塵に打ち砕かれた。

真っ先にアミナの両肩に手を置き、服を引き裂こうとした中年の兵士は、手首を掴まれた一秒後には両腕を二回転分ほど捻られていた。まるでツイストドーナツのように捩られ、内出血でじわりと黒ずんでいく腕を見せられれば、誰だって固まってしまうだろう。

思考停止に陥った兵士たちを尻目に、アミナは嫌悪感を隠さぬまま、迅速且つ効率的に動いた。一瞬にして人垣の外側に跳躍し、身を低くして的を小さくすると、辰力で鋭利な刃物と化した両腕を振るい、兵士たちの足の腱を続けざまに切り裂いた。脹脛を切り裂かれた兵士たちの膝が揺れ、尻がどすんと地面に付いた。

時間にして数十秒で兵士たちの約三割が戦闘不能というのっぴきならぬ事態に、船の中は恐慌状態に陥っていた。床に転がった味方が邪魔になり、陣形を組むこともままならない兵士たちは、倒れた兵士たちを足蹴にするのを躊躇わぬアミナにことごとく薙ぎ倒されていった。体格と重力を無視した武力の凄まじさは、本陣に加われなかった兵士たちに到底太刀打ちできるものではなかった。

「だ、駄目だ、我々だけでは手に負えんぞ！　早く救援を要請しろ！」

「馬鹿を言うな！　女一人にやられましたなどと言えば後でどのようなお咎めを受けるか！」

――ふむ、割に脆いものだな。しがらみや体面に囚われて最善の行動に移れぬとは。

命より体裁を気にしている若い騎士たちの罵り合いに、アミナは付け髪を掻き上げながら顎をしゃくった。あれほどの大暴れをしたにも拘わらず、済ました顔からは疲労など窺い知れない。焦れて汗だくになっているセーニア兵たちとは対照的だ。

「き、貴様、ジヴーの手の者か！　一体何者だ！」

「私か、私は……そうだな、何者なのだろう」

「なに……？」

怪訝そうに眉をひそめる兵士を意に介した様子もなく、アミナは頬を照らした遠くの魔法光に目を細めた。

単純なようで存外深い質問だった。その問いに対する答え方は幾通りも考えられるし、明確な解答がないようにも思える。今ここにいる自分は一国の王女でも、ランカーでもない。普段背負っている肩書きを除いた少女に、一体何が残るのか。自分は果たしてどのような人間なのか。それは生きとし生ける者が背負っていき、探求し続けるテーマだ。

ほどなくして、アミナの頬がふっと緩んだ。

「そなたらの敵、うむ、それで十分だな。どうしたところで私はセーニアの側にはつけぬのだし。この国の者やあやつを苛む元凶たるそなたたちを、快く思えるはずもないからな」

「……あやつ、だと？　一体何を……誰のことを言っている！」

アミナが視線を兵士たちに戻し、自分の胸の中央に両手を重ねる。

「いつも悩んでばかりで、一人では持ち得ぬ責をそうとわかって背負おうとするしょうのない大バカ者だ。そのくせ人一倍傷つきやすいし、少し目を放せば無茶ばかりしているしで、まったく手を焼かされる」

アミナは呆れたように手の平を裏返して見せた。だが、その表情には不快さは微塵も感じられなかった。それだけ深くシュイのことを知っていることに、彼の素顔を知る数少ない人物であることに、独占欲にも似た想いを抱いている節さえあった。

ただ傍にいることだけでも、陽だまりのような温かさを感じる。触れ合うだけで、ともすれば持て余してしまいそうなほどの高揚感が引き出されていく。お互いに命の恩人という妙な関係は、恋情を芽生えさせるのにさほどの時間を必要としなかった。ことに絶望的な状況から救い出してくれたシュイへの思慕は、アミナの中で日増しに大きくなっていった。不覚らしい不覚を取った試しがなかったがために、狩りの獲物のようにいたぶられた経験はアミナの心に耐え難い恐怖を招き入れ、自身が女性であることを強く意識させた。更にはシュイに守られたことで思いが反転し、抱いた情に拍車がかかったのだ。

「ま、女と見ただけで襲ってくるそなたらのようなけだものでないのは確かだな。何せあやつはこの私が身に触れることを許すと決めた唯一人の男だ。もしこの戦いに敗れてしまったら、あやつは今度こそ取り返しのつかぬ傷を心に負うだろう。そのようなことになっては困るのだ」

「た、単なる男女間の劣情で我々の仲間を殺めたというのか！」

劣情という生々しい言葉に、アミナの頬と耳がほんのりと赤くなった。次には生じた雑念を捨て去り、ゆっくりと腰を落として拳を構えた。

「家族や友人や、お……想い人を救いたいという思いは、戦において唯一正統な大義名分だと思うがな。それともなんだ？　そなたらは自分の家族が傷つけられるか殺されでもしない限り過誤に気づくことも出来ぬ低能だ、とそう申すのか？」

「無用な心配だ、神の加護を賜るセーニアが他国に攻め入られるこ

となど、絶対にない！」

そう言い捨てて剣を突き出した男に、アミナが無造作に手の平をかざした。空間に波紋が生じ、兵士の剣が領域に侵入した途端、刀身が粉々に砕け散った。金属片が床に散る音を聞きながら尻餅をついた兵士は、柄だけになった剣を手放すことも忘れ、驚愕に喉を震わせて後ずさった。

「……そなたらは知るまい、あやつが敵たるそなたらを殺めることにも躊躇いを生じさせていたことを。わかるまい、心の底から戦いを拒んでいたジヴーの者たちが、どれほどの覚悟をもってこの戦いに加わったのか。自らの行いになんら疑いを持たず、操り人形になることを享受するそなたらとは雲泥の差だ」

「……貴様！　祖国のため、ひいては民の幸せのために日夜戦う我々を、操り人形だと！」

アミナが前に踏み出しかけた男をキッと睨みつける。男の足がその場で止まった。

「今の言動だけでも程度が知れるというものだ。とことん、自分たちの都合や権益のことしか考えていない。剣の切先を向けた人間の視界に、己の顔がどれほど醜く映っているかを知ろうともしない。

そなたらが、そなたらの家族が日々を過ごしているように、ジヴーの者たちも変わらぬ日々を過ごしていたのだ。家族のために汗水流して働き、学び舎に通って勉学に励み、恋人と愛を育み、子を慈しむ。たまには奮発して身を着飾り、いつもより美味い物を食い、他愛もない話をして幸せそうに笑う

……そんな平凡にして何物にも代えがたい日常を、そなたらはことごとく踏み躙ったのだぞ。その非道を民の幸せのためだと申すか」

「く……、国を豊かにし、よりよき世界に作り替えるためには犠牲はつきものだ！　教国の教えが世界に広まればより幸福な社会を――」

「――ふっ、滑稽だな。現れた女を即刻手籠めにしようとした者た

ちが、あろうことかそのような大言壮語をほざくとは。人としての倫理すら順守できぬ者が何を説くと？　教えてくれ」

「ぬ……ぐっ……」

「よしんばそのような理想があったとして、統一国家が腐敗することは何百年も前に証明されている。その教訓に目を瞑り、権力に胡坐をかいた者らが肥え太る社会を幸福と嘯くか」

舌鋒鋭く切り込むアミナに、セーニア兵たちが揃って怯む。

「ザ、ザーケイン帝国のことを言っているのか。あれは魔族の連中が――」

「ほれみろ、種族が違うというだけで色眼鏡をかけ、一緒くたに軽蔑する。そなたのような者がいる限り、どれほどに御大層な教示も妄言の域を出ることはない。何故それがわからぬ」

「な、なん……だと！」

兵士たちの声が次第に怒りを帯び始める。アミナは突き刺さるような敵意を意に介した様子もなく肩をすくめる。

「果ては、耳に心地よい言葉のみを勝手に選り選ってわかった気になってくれる。上の者たちもさぞ酌み易いと思っていような」

「てめえ、黙っていればいい気になりやがって！」

「いいだろう！　女に生まれてきたことを後悔――」

「――お喋りが過ぎたか。私も思いの外、鬱屈が溜まっていたようだ」

アミナが一方的に会話を打ち切った。大きく翼を広げるように両の腕をしならせ、頭上で交差させてから目を伏せる。

＞――鬼魂を奉ずる神々の器よ　空より高き理想の寄り辺となれ

其の息吹に乗せし物を彼方へと運べ＜

「ぐっ、全員でかかれぃ！」

指揮官の声が響き渡り、それに幾つもの雄叫びが続いた。詠唱を終わらせまいと矢と攻撃魔法がアミナに向けて放たれ、それに引っ張られるように兵士たちが駆け出した。

アミナは踊りを思わせる軽やかなステップで体を左右に揺らし、飛来してくる電撃と矢の雨をやり過ごすと交差させていた腕を腰の下にまで下ろす。

＞我　生と死の狭間にて　絢爛なる舞楽（ぶらく）を体現す＜

＞舞踏祕華（バロニカ）＜。韻が結ばれると同時に、アミナのほっそりとした足首に変化が生じた。青い炎にも似た魔力が迸り、吹く風にゆらゆらとたゆたい始める。弱々しかった炎は次第に大きさを増していき、白く輝く小さな翼を形作っていった。

目にしたことのない異様に、突撃を敢行していた兵士たちが踏み止まった。胸の鼓動が一段と大きくなり、間近に突きつけられた威容にざわめいていた。美しい少女が背負っているのは、淡青（パステルブルー）の燐光で象られた巨大な化け猫。絶対的な力量の差を察して心の底から湧き出る死の予感に、兵士たちの口から茫然とした声が漏れる。

「……あ……あぁ」

「斃れゆくそなたらへのせめてもの慰めだ、全身全霊を込めた舞いを目に焼き付けて、逝くがいい」

その儚げな言葉は、兵士たちの耳道にはいささか皮肉めいたものに聞こえたかも知れない。アミナの姿が残像を残して消失し、以降彼らは意識を断ち切られるまで、一瞬たりとも彼女の姿を見止めることができなかった。

忽然と姿を消した敵に立ちつくした兵士たちが、ほとんど同時に、しかしそれぞれ違う方向に弾き飛ばされていく。血飛沫が闇を汚し、彼らの背が地面につく前に、後方では数人の兵士たちの体が毬のよ

うに弾む。箱庭にいる人形たちが、無邪気な子供の手で払い除けられていくかのように蹴散らされる。

何が起きていたかを真に理解できていた兵士たちは、ことのほか少なかっただろう。地を蹴る音と風を切る音を頼りに後ろを振り返った瞬間、あらゆる角度から鈍器で殴られたような衝撃が襲ってきた。

辰術の中でも最も扱いが難しいとされ、多種多様な魔法や辰術を差し置いて最速の名を冠した奥義は、感知魔法にすら反応を示さず、魔法の詠唱を結ぶ暇すら与えない。見えぬ敵に剣をがむしゃらに振り回す者も、恐れをなし、背を向けて駆け出そうとした者も、戦意を失い、武器を取り落とした者も、分け隔てなくその場に崩れ落ちていく。船の上は連なる足音と兵士たちの悲鳴で満たされていった。

「……はっ……はっ……はぁっ！」

ほどなくして、熱を帯びた吐息の音が聞こえ始めた。戦いの場は船室内に移行していた。闇の中から姿を現したアミナの体には、無数の浅い裂傷が刻まれ、服がぼろぼろに裂けていた。敵から受けた攻撃によるものではない。神がかり的な速度で戦ったことにより風圧で裂かれたのだ。

穿いていた白いタイツは無残に伝線し、露になった太ももには薄らと紅い線が引かれている。髪の先からは汗がぽつぽつと滴り落ち、小さな水たまりをつくっていた。

「……はぁ……これは、思った以上に……はぁ、きつい、な。……はぁ……知らずと焦り過ぎて、いたようだ」

アミナは体全体を蝕む痛みに顔をしかめながら両膝に手をついた。その体勢のまま、倒れ伏した兵士たちを見回した。船室内はしんと静まり返っており、吐息の音すら聞き取れなかった。嵌め殺しの窓ガラスは全て割られ、もぎ取られた操舵輪と一緒に散らばっている。

「……ふぅ。……早く皆の下に、戻らねば」

ようやく息が整ってくると、アミナは筋肉痛にもつれる足を何とか前に踏み出し、操舵室を後にした。己に課せられた最後の仕事を、終わらせるために。

～紲雷　ｔｈｕｎｄｅｒ　ｏｆ　ｂｏｎｄｓ２２～

闇に白々とした辰力の刃が、格子を組むように重なっていく。巨剣と短剣がぶつかり合い、夜空に火花の噴水が撒き散らされる。

飛び交う刃の隙間に体を滑り込ませ、イヴァンがビシャの顔目がけて短剣を突き出した。槍のように細い衝撃波がビシャの髪を数本巻き込んで消える。顔を反らしながらもビシャはイヴァンの挙動から目を放さない。脇に回り込もうとする動きを遮ろうと、回転しながら尻尾を振るうように後ろ手で剣を薙ぐ。腰の高さに振るわれた巨剣をイヴァンが飛び越え、そのまま踵蹴りを繰り出せば、今度はビシャが振り切った巨剣を手放し、腕を交差させて防御姿勢を取る。

強く踏み込まれたビシャの軸足を見て、イヴァンが反射的に膝目がけて前蹴りを放つ。支点を打ち抜かれて威力を殺された蹴りが、それでも力任せにイヴァンの体を高々と蹴り飛ばした。イヴァンはそのまま宙で体を抱え込むように二回転し、背後にあったマストの出っ張りに手をかけると、獲物を狙う猛禽のごとく地上へと舞い戻る。

ビシャは防御には転じずに持ち直した巨剣を肩に構え、振り下ろすようにして三段斬りを放った。三つの巨大な風の刃が空気を切り開く様は竜の爪撃と錯覚するほどだった。

直撃する。セーニア兵士たちが勝利の予感に拳を握り締めた時、宙にあったはずのイヴァンの体が消え失せる。遅れてビシャの放った衝撃波がイヴァンのいた辺りを通過し、巨大なマストを難なく輪切りにしてみせた。剣風で帆が大きくたわみ、負荷に耐え切れなかった縄がブチンと音を立てて旗のようになびいた。次いで、斬り放されたマストが甲板に次々と落下し、地響きを起こす。

ビシャは衝撃波の行き先を目で追わずに、左側で陣を成す兵士たちの後方を睨む。いつの間にかイヴァンはビシャからそう遠くない

位置に着地していた。ナイフから伸ばした辰力の刃を側面に向け、壁に差し込んだ瞬間に解除することによって飛ぶ軌道をわずかにずらしていたのだ。

そのまま間合いを詰めようとしたイヴァンだったが、二人の間を遮るかのように炎が走った。敵陣のど真ん中ともなれば好き勝手に動けるはずがない。

兵士たちがイヴァンを隙間なく取り囲むのを見計らい、ビシャはすぐさま標的を変える。ガレット・リブライと交戦しているピエールへ、自軍の兵と押し合っているジヴー兵たちへ。そして最後に、遠方から兵士たちの支援に徹しているシュイの横顔へ。

隙ありと見たか、ビシャが剣を錐揉むように振り上げた。足元から旋風が巻き起こり、前方へと押し出される。死角から放たれた旋風に、シュイは目をくれることなく、接触する寸前で三歩分後ろへと退いた。衝撃波が船べりを真っ二つに斬り裂き、闇夜へと吸い込まれていく。

ビシャがちっと舌打ちすると同時に、脇から兵士たちの悲鳴と怒号が折り重なった。強烈な蹴撃でイヴァンに蹴り飛ばされた兵士たちが宙をきりきり舞い、地面に叩きつけられていた。

「ふん、退屈しないで済みそうだな」

「退屈、か。随分と偉くなったものだな、ビシャ」

言葉に皮肉が込められてると感じたのか、ビシャが巨剣を突き付けた。水平に維持するだけでも大変そうな大きさだが、刀身は全く震えていない。その相貌には並々ならぬ怒りが満ちていた。

「いつまでセーニアに仇成す気だ、復讐に固執していていて誰が幸せになれる」

「……お前がそれを言うか。戦を道楽でやっている愚者共が」

「道楽か、まぁ否定はしない。いくらご大層なお題目を並べようと、

騎士とは所詮国家の振りかざす剣に過ぎんのだからな。だが、戦場というまともじゃない環境に深入りしては心を病むばかりだ。何かしら楽しみを見出さねばやっていられんのだよ。たとえそれが、後ろ向きな楽しみ方であったとしてもな」

「……」

「俺が将軍位に上り詰めるまでの間、実に様々なことがあった。慕っていた上官に殺されかけ、ヌレイフでは志を共にした輩も多く失った。俺は元からそやつらの屍の上を歩いているのだ。高配が少しばかりきつくなったところで躊躇う理由はない。ましてや、それが敵であれば尚更な」

会話と一緒に巨剣が切り上げられた。イヴァンが一瞬早くバックステップを踏み、紙一重でそれを躱す。イヴァンがビシャから離れたのを見計らい、魔道兵たちの撃った魔法が次々と脇から飛来。イヴァンは足を止める間もなく甲板を走り抜ける。そこにビシャが追いつく形で並走する。

「どうした、少しずつ初動が遅くなっているぞ？　いつもの貴様であれば殺気だけで反応したはずだがな。そのような状態でこの俺を倒せるのか？」

軽口を叩くビシャの耳朶は、イヴァンの呼気に集中していた。息が少し早くなっているのがわかる。やはり、ここに乗り込んでくるまでにはそれなりの無茶が必要だったのだろう。

「ジヴーに滅ぼされた故郷を重ねたのか知らんが、勝ち目のない戦いについたのが貴様の運の尽きだ。とっとと仲間たちの下に送ってやろう。そして、セーニアが繁栄していく様を、指を咥えて見ているがいい」

イヴァンは走りながらも喉の渇きを押し殺すようにして言葉を紡ぐ。

「まだ勝った気になるのは、早いな。お前たちの命運は、必ずここで断ち切ってやる」

再び戦いに移行した二人から少し離れた場所では、ガレットがピエールと何合目かの打ち合いに入っていた。体ごとぶつかり合うような乱撃を繰り広げた末に、ガレットが一瞬手首を引き、強く踏み込んでピエールを突き放す。視線の先で相手がよろめいたのを見計らい、ガレットが更に踏み込んで二の太刀を連ねる。ピエールが腰から上を逃がすように仰け反り、遅れてガレットの剣が赤い前髪を寸断。すぐに体勢を改めたピエールが、三の太刀を繰り出したガレットに対して、負けじと対角線を結ぶような斬り上げで応えた。

白刃が交差した途端に辻風が生じ、互いの頬や肩を浅く傷つけた。隙を見て二人を仕留めようと構えていた兵士たちが、瞬きすらしない二人の気迫に押し退けられる。獅子の取っ組み合いに猫が手を出しても返り打ちに遭うだけだ。

「くっ、傭兵風情が……しぶといっ！」

自身と同じく一向に攻め手を緩めぬピエールにガレットが毒づきながらも、再度剣を振り被る。まるで金槌を打ち合わしているような衝撃が両腕を貫き、手指を痺れさせた。豆だらけでカチカチになっていたはずの手は皮がずる剥け、指の隙間から血がぽたぽたと滴っている。攻防の密度の濃さでいえばビシャとイヴァンとの戦いを上回るほどだ。息を継ぐ間もほとんどない戦いを続けていれば、酸欠で意識が朦朧とし、視野も少しずつ狭まってくる。相対するピエールの表情も少しずつ険しさを増し、耳を澄ませば自分の呼気に荒

い吐息の音が重なってくる。
それでいて、瞳に宿るギラつきは収まる気配がない。どこかにつけ入る隙がないかと、自分の体を逐一観察している。これほどまでに抵抗され、敵意を向けられた経験はない。

と、視界の端から何かが飛来してきたのを察知し、ガレットが剣を振り上げた。キィンと甲高い音を立てて跳ね上がったのは黒塗りの鉄矢だ。見ると、ピエールの斜め後方で射手が弓を構えていた。

「――また邪魔を、鬱陶しいやつらめっ！」

ガレットがお返しとばかりに射手に向かって剣風を飛ばした。が、あさっての方向から光弾が飛来し、瞬時に攻撃が相殺される。軌道を見返すと、そこにはシュイの姿があった。

「はっ、余所見してると怪我するぜッ！」
「――ちぃ！」

柱と錯覚するほどの巨大な剣閃がピエールから放たれ、密集している兵たちを蹴散らしながらガレットに向かう。目を見開いたガレットが素早く剣の切っ先で十字を切り、剣の峰を天に向けて両手で圧し込む。十字架の障壁が形成されるや否や、ピエールの剣閃が硝石が割れるような音を立てて霧散した。
だが、剣閃を壁代わりにして走ってきたことまでは予測が追いつかなかった。間合いを詰められた状態で軽快に繰り出された＞四連突（フォア・スラスト）＜に対応しきれず、終の一撃が腕の肉を削いだ。
痛みに顔をしかめたガレットが、正面にいるピエールを蹴り放そうと足を畳む。ピエールは避けようとせずに敢えて踏み込み、腹に力を込めた。
ガレットの蹴りがピエールの腹筋に当たった直後、ガレットとピ

エール双方の額に衝撃が走る。眉間に激しい鈍痛を感じ、視界が明滅した。倒れかけたガレットはブリッジするように手を甲板につき、後方に宙返りするようにして倒れるのを堪える。着地したガレットと頭突きを見舞ったピエールが、憎き親の仇を見るような眼差しで互いを睨み合う。

互いの額が切れ、傷口から鮮血が鼻を撫でて顎から垂れ落ちていく。ガレット・リブライと互角。あるいはやや押している印象のあるピエールに、ジヴー兵から歓声が、セーニア兵から動揺の声が漏れた。

隙あらばジヴー兵を潰そうと試みているビシャとガレットだったが、それは後方に控えているシュイに再三に亘って妨害されていた。

シュイの意識の大半は、甲板で戦っている両軍の兵士たちに向けられていた。視野の中にあるのは、ジヴー兵たちが握っている数多の武器だ。一目見れば、彼らの使う武器に紫電が走っているのがわかる。

開幕で行使された＞怒れる霆の渦流（ボルテックス・オブ・ヒューベル）＜の雷は、シュイの頭上で放射状に広がり、ジヴー兵の掲げる武器に隈なく降り注いだ。以前に戦ったレイヴ・グラガンが見せた雷の形状変化を利用し、複数の武器に対する同時付与をやってのけたのだ。それは、セーニア兵たちを怯ませるのに十分なパフォーマンスだった。

一つの武器に付与を集約させている時に比べれば、分散させているだけ威力も落ちる。しかしながら、元来＞怒れる霆の渦流（ボルテックス・オブ・ヒューベル）＜は威力の凄まじさ故に制御にも魔力を要する諸刃の剣であり、維持できる時間もかなり短い。言えば、複数の敵を相手にする場合は割に合わない魔法だ。レイヴもその特性をよく理解していたからこそ、広範囲を自在に攻撃できるように雷を竜へと形状変化させていた。

兵士たちの戦闘力を底上げすることによって一時的にでも戦いを

優位に進めようとするシュイの目論みは、これまでのところ上手くいっていた。効果のほどは初級の魔法、＞絡みつく（ライトニング・リロード）は雷の蛇＜と同程度のものだったが、個人能力が拮抗している状態であればその差は大きくなる。雷を帯びた剣を金属武器でまともに受けようものなら、程度の差はあれ感電するのは間違いない。結果として敵魔法使いは攻撃ではなく＞魔法解除（ディスペル）＜に回り、戦う歩兵たちは回避行動を余儀なくされる。敵の攻撃の比重が減れば、それはそのまま生存率の上昇に直結するのだ。

シュイの後方支援もさることながら、ジヴー兵たちはセーニアの精鋭を相手に一対一でも引けを取らぬ動きを見せていた。攻撃、防御の判断が今まで戦ってきた兵たちとは比べ物にならぬほど迅速であり、不利になった仲間をすぐにサポートする広い視野も合わせ持っていた。優秀な治癒術師も何人か混じっているのだろう。戦いで手傷を負った者も後方に下がってから時が経たぬうちに戦線復帰を果たしている。数に勝っているはずのセーニア軍は、侵入してきたジヴー兵たちをいまひとつ押し込めないでいた。

イヴァンと切り結びながらも戦況を逐一確認していたビシャは、心中で嘆息せざるを得なかった。ここにいるジヴー兵が軒並み精鋭なのは確かだが、自軍の兵士たちの力量が彼らに劣っているわけではない。やや押され気味のガレットにしてもそうだ。剣術のみに着眼するならむしろ分があるとさえ思われた。

双方を分かったのは意識の差だった。十中八九、ジヴー側はこちらの強さの今までの敗北から完全に想定していたのだろう。予め格上の敵を相手にすると覚悟した上で、ここに乗り込んできたのだ。背水の陣と乗り込んできた敵を相手に、後に戦いを控える者の戦い方で応じては遅れを取るのも無理からぬことだ。

セーニア軍がこれほどにハイレベルな敵と戦うのは傭兵たちが大勢入り混じっていた初戦以来になる。相手の戦力が未知数だった初

戦では兵士たちの気も引き締められていたが、連戦連勝を重ねていれば自然と手綱も緩んでしまう。もちろん、この中には慎重な兵もいただろうが、えてして人は易きに流れるものだ。楽観的な雰囲気に一月以上も揉まれれば周りに迎合してしまう兵も増えてくるだろう。心のうちに生じた綻びは、他人が叱咤したところで完全に治るものではない。

けれども、そういったマイナス要員を差し引いても、自分たちの勝利は揺るがないだろう。強力な付与魔法はそう何度も使えるものではないし、敵陣地の奥深くで戦う緊張感は生半可なものではないはずだ。緊張感を維持し続ければスタミナの消耗を誘うことになる。無理せずともこの拮抗状態を維持し続ければ敵の数は減っていき、自然とこの戦いは終わる。ジヴーの完全敗北という結果を以って。

その思いを後押しするように、他船との連携のタイミングを図っていたロッグが、指揮棒を振り下ろした。旗艦の左右の船には味方を巻き込まぬよう、攻撃で後尾に対角線を結ぶような陣構えで望んでいた。左右を敵船に挟まれてはどこにも逃げ場があるはずもない。立ち往生した兵士たちを見て、シュイとロッグ、二人の声が重なる。

「障壁を展開しろッ！」

「今だ、放てぃッ！」

拡声魔石によるロッグの合図と同時に、ジヴー兵たちが陣取っていた船の後尾を雷と矢が飛び交った。両側からの攻撃に晒されては驚異的な粘りを見せていたジヴー兵たちもひとたまりもなかった。回避することは不可能に近く、魔法と矢の入り混じった攻撃ともなれば障壁で完全にブロックするには至らない。ほどなくして、攻撃が特に密集した部位が突き崩される。前衛に回ったジヴー兵たちが炎で顔を焼かれ、あるいは矢で胸を穿たれ、断末魔を上げて倒れていく。

自分の目の前で折り重なっていく仲間たちに、しかしシュイは見向こうともしなかった。崩れかけた前線を見て勝機と見たか、セーニアの歩兵たちが前方から切り込んできていたからだ。

表情を殺したシュイの五指が顔の前で流れる。描き出された魔力の五線譜に、鈴の音のような余韻と共に魔力の音符が連なっていく。その数は２０を悠に超えていた。

シュイの手が振り下ろされるや否や、＞刻穿ちし閃＜（ラピディティ・スカージュ）の光弾が光芒を残して接近してきた敵の群れに飛び立った。兵士たちの体が勢いよく弾き返され、遅れて衝撃音が轟く。腕を、足を、腹を潰されて痙攣する仲間たちを見て、セーニア兵の勢いが止まった。

「立てる者は足に力を込めろ、息のある者に対しては直ぐに治療に当たれ」

仲間の死を目の当たりにして、シュイの声は厳かだった。始めからこうなることは覚悟の上だった、という風に。

間を置かずして、攻撃を受けて倒れていた者たちが、シュイの声に反応して幽鬼のように起き上がり、狼のように犬歯をむき出しにして剣を構えた。この光景に対しては、セーニア兵たちも流石にゾッとしないものを感じた。

――敵ながら大した気迫だが、流石に限界が見えてきたな。もはや相手に成す術は――

自らが発そうとした否定の言葉に、ビシャは微かな疑問を抱いた。何を言い淀む必要があるのかと思いながらも、喉の奥に何かがこびりついているような不快感があった。そういった感覚は杞憂に終わることの方が多いのだが、かつて感覚に従って行動して命を拾ったこともある。結託した上官たちに宴席へ誘われ、危うく騙し討ちにされかけた時だ。

――そうだ、あの時もやつらは平然と振る舞っていた。今のジヴー兵たちと同じように。

ビシャはここにきて違和感の正体に気づき始めた。危険を冒して旗艦まで侵入してきた敵方が、それほど積極的に攻撃を仕掛けてこないのはなぜなのか、と。

今回のジヴー軍を相手にするに当たっては、今までとは比べ物にならない手応えを感じている。たかが砂船一隻とはいえ、三万もの防衛線を掻い潜って中枢まで攻め込んでくるという離れ業をやってのけた。間違いなく、様々な策を上積みしたからこそ成し遂げられたのだろう。これほど戦力を一極化させたことについては、相手方にも相当な危険があったはずだ。

だからこそ、違和感がある。指揮系統たる将校を潰すつもりで乗り込んできたならば、イヴァンだけでなくシュイやピエールもまずは自分一人に狙いを絞ってしかるべきなのだ。旗艦に陣取っていた兵士たちの数と実力が予想以上だったため、諦めざるを得なかったのか。否だ。こちらの戦力が大きければ大きいほど、短時間でケリをつけねばならないと思うのが普通だ。

時間稼ぎ。その言葉がビシャの脳裏で閃き、様々な可能性が去来しては消えていく。敵に絡め取られたであろう諜報兵からの、イヴァンたちが加わっているという連絡。戦う直前に見つかった、一見すると間抜けな砂船の痕跡。前方から徐々に近づいてくる、連なる照明石の光。後方から夜襲を仕掛けてきた敵船団。しかして、夜襲にはそれほど適さない砂漠のど真ん中が戦地に選ばれた理由。

――まさか、……いや、もうそれくらいしか考えられぬ。こいつらも囮なのだとすれば。

「――ケトゥレフ！　魔道兵たちと共に感知魔法で敵の魔法攻撃を警戒しろ！　魔力の高まりを感知したら直ぐに知らせるのだ！」

「魔法……――――っ」

後方でビシャの代わりに指揮に当たっていたロッグも、敵にこれといった動きがないことに不安を抱いていたのだろう。特に意図を問い返すこともなく、ビシャに深くうなずいてみせる。

イヴァンでもシュイでもない、強力な第三者による不意打ち。限りなく正解に近い解を弾き出したビシャが、旗艦の外側にある船へと注意を払う。魔石でイヴァンたちがいることを知らせてきたのは、第三の刺客の存在を隠すためだと考えれば合点がいった。

そして、ロッグが魔道兵たちに指示している最中のことだった。唐突に、旗艦に小さな揺れが生じた。シュイたちの乗ってきた黒船に、セーニアの旗を掲げる砂船が接触したのだ。暗闇で所属まではわからなかったが、大方ネルガー・シラプスの船団か右翼に配備されていた船団の砂船だろう。

――いや待て、敵軍の偽装の可能性も捨ててはならぬな。

ビシャはすぐさま考え直した。何しろ相手には船を真っ黒に塗り潰したという前科がある。ならば、敵船に偽装することくらい思いつかないわけがない。ここで策が終わってしまえばいかにも中途半端だ。何かしらの策を嵩じていないなどということが考えられるだろうか。

伝令兵を介して周りにいる船に指示を送り、いつでも旗艦に乗り移れるよう準備を整えさせる。こうすれば、仮に接舷した船が敵の手によるものであったとしても人数差で圧倒できる。広範囲魔法による攻撃を模索していたとして、感知魔法で魔力の向上を察知すればそれまでだ。引導を渡すのはもう間もなくだった。

だからこそ、ビシャは呆気に取られた。後ろから突っ込んできた船に目を走らせたシュイが、開口一番言い放った言葉に。

～紲雷　ｔｈｕｎｄｅｒ　ｏｆ　ｂｏｎｄｓ２２～（後書き）

１０／７　２１：００　文章、誤字修正しました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0210r/

マーシナリー・カプリッチオ　～第二部～

2011年10月10日11時30分発行